

国立国語研究所  
共同研究報告 11-01

ISSN 2185-0127

消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究  
喜界島方言調査報告書

---

木部暢子・窪菌晴夫・下地賀代子  
ローレンス ウェイン・松森晶子・竹田晃子

2011年8月

# 「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」 喜界島方言調査報告書

## 目次

1. プロジェクトの概要	1
2. 調査の概要	3
3. 喜界島方言の概要	
喜界島方言の音韻 (木部暢子)	12
喜界島南部・中部地域のアクセント (窪菌晴夫)	51
喜界島方言の格の体系 (下地賀代子)	71
4. 喜界島方言の特徴	
喜界島方言の系統的位罫について (ローレンス・ウエイン)	115
数詞のアクセントを通して見た喜界島語彙の音韻特徴 (松森晶子)	123
鹿児島県喜界町方言におけるオノマトペの語彙的特徴 (竹田晃子)	139
5. 喜界島方言調査データ集	
基礎語彙データ	163
アクセントデータ	225
文法データ	269
6. 喜界島方言関係文献目録	309
附録	
「喜界町教育文化講演会」報告	313
関連新聞記事	337
リレーエッセー「喜界島の方言を残そう」	341



# 1. プロジェクトの概要

## 1 プロジェクトの目的

「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」は、国立国語研究所の基幹型共同研究プロジェクトとして2009年にスタートした。プロジェクトの目的は以下のとおりである。

グローバル化が進む中、世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009年2月のユネスコの発表によると、日本語方言の中では、沖縄県のほぼ全域の方言、鹿児島県の奄美方言、東京都の八丈方言が危険な状態にあるとされている。これらの危機方言は、他の方言ではすでに失われてしまった古代日本語の特徴や、他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く、一地域の方言研究だけでなく、歴史言語学、一般言語学の面でも高い価値を持っている。また、これらの方言では、小さな集落ごとに方言が違っている場合が多く、バリエーションがどのように形成されたか、という点でも注目される。

本プロジェクトでは、フィールドワークに実績を持つ全国の研究者を組織して、これら危機方言の調査を行い、その特徴を明らかにすると同時に、言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性の解明にあたる。また、方言を映像や音声で記録・保存し、それらを一般公開することにより、危機方言の記録・保存・普及を行う。

## 2 研究方法

消滅危機方言の調査は緊急を要する。そのため、フィールド調査に実績を持つ国内外の研究者を組織化し、調査研究を効率的に進める必要がある。また、質の高いデータを残すために、これまで、必ずしも統一的でなかった方言（言語）の調査方法や記述方法に統一性を持たせる必要がある。さらに、将来の方言（言語）研究を担う若手研究者の育成も必要である。以上を踏まえて、本プロジェクトでは次の2種類の調査をベースとして研究を進めている。

- (1) 共同研究者が各自のフィールドで行う各地点調査研究
- (2) 共同研究者が一同に会して行う合同調査研究

(1) はそれぞれの共同研究者がそれぞれのフィールドで行う調査研究で、共同研究者はその成果をプロジェクトの共同研究発表会で発表し、自分の調査研究を発展させるきっかけとしている（共同研究発表会では、若手研究者の研究を支援するために、共同研究者以

外の若手研究者が発表を行うこともある)。

(2) は調査地点を定め、その地点の音声・アクセント・文法・基礎語彙・談話等を総合的に記述する調査である。この調査には、共同研究者だけでなくポスドク、学振特別研究員、大学院生といった若手研究者も参加し、参加者が共同で調査・データ整理・報告書の作成を行っている。第1回目の合同調査は、2010年9月に鹿児島県喜界島で実施した。本書はその報告書である。

### 3 共同研究者

本プロジェクトの共同研究者は、以下のとおりである(2011年7月30日現在)。

ウエイン・ローレンス(オークランド大学)、上野善道(国立国語研究所客員)、大西拓一郎(国立国語研究所)、金田章宏(千葉大学)、狩俣繁久(琉球大学/国立国語研究所客員)、久保智之(九州大学)、窪菌晴夫(国立国語研究所)、下地賀代子(沖縄国際大学)、下地理則(群馬県立女子大学/国立国語研究所客員)、田窪行則(京都大学/国立国語研究所客員)、竹田晃子(国立国語研究所・プロジェクト非常勤研究員)、ダニエル・ロング(首都大学東京)、中島由美(一橋大学)、仲原穰(琉球大学)、西岡敏(沖縄国際大学)、新田哲夫(金沢大学)、又吉里美(志学館大学)、松本泰丈、松森晶子(日本女子大学/国立国語研究所客員)、三井はるみ(国立国語研究所)(五十音順)

## 2. 調査の概要

### 1 喜界島の概要

奄美は鹿児島県の南に位置し、喜界島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島の5つの島からなる。喜界島はその北東部に位置する（図1）。周囲は48.6 km、集落の数は33、人口は8,090人（2010年国勢調査による）である。島への交通手段は、飛行機で鹿児島空港または奄美大島空港から喜界空港へ入る方法と、船で鹿児島港または奄美大島名瀬港から喜界島湾港または早町港へ渡る方法がある。

主な産業はサトウキビの栽培と製糖で、製糖工場は奄美群島で最も数が多い。サトウキビを原料にした黒糖焼酎作りも行われている。近年は白ゴマの生産が盛んで、国産白ゴマの産地としては日本最大の生産量を誇っている。

2010年の調査では、小野津、志戸桶、塩道、阿伝、城久、上嘉鉄、坂嶺、湾、中里、荒木の10地点（図2の下線の地域）の調査を行った。

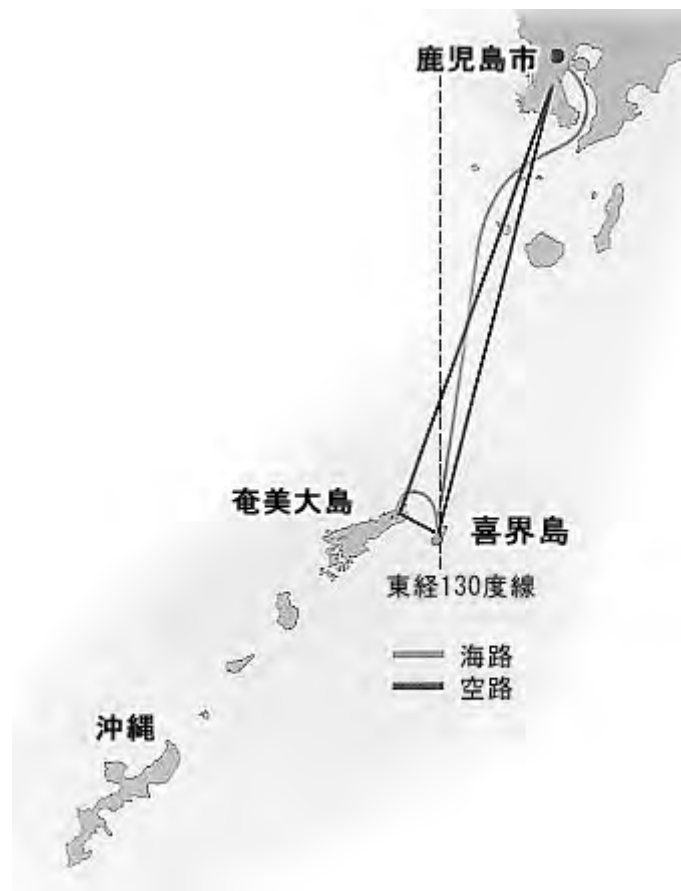


図1 喜界島の位置（喜界町公式ホームページより転載）



図2 喜界町集落一覽（喜界町公式ホームページより転載，下線は調査地点）

## 2 調査の概要

### 2.1 調査日程，調査地点，調査内容，調査担当者

調査は2010年9月10日～9月14日に行った。調査地点と調査内容，調査担当者は以下の通りである。

日時	地区名	調査内容	調査担当者
9月10日(金) 午前	小野津	基礎語彙1	小川・青井・木部
		基礎語彙2	ローレンス・仲原・平山・竹田
		アクセントA	窪菌・儀利古・ペラール・平子・竹村
		アクセントB	松森・新田・姜・高山
		文法M	松本・下地
		文法K	金田・井上・新永
		文法O	大西・荻野・當山・重野
		文法T	田窪・白田・山田
午後	阿伝	基礎語彙1	青井・小川・木部・平子
		基礎語彙2	ローレンス・仲原・平山・竹田
		アクセントA	窪菌・松森・儀利古・ペラール・竹村
		アクセントB	上野・新田・姜・高山
夜	城久	基礎語彙2	ローレンス・仲原
		アクセント	新田・重野
		授受表現	荻野
		オノマトペ	竹田

9月11日(土) 午前	志戸桶	基礎語彙1	小川・青井・木部
		基礎語彙2	ローレンス・平山・ペラール・仲原
		アクセントA	窪菌・松森・儀利古・竹村・姜
		アクセントB	新田・上野・平子・高山
		文法M・T	松本・下地・田窪・白田・山田
		文法K	金田・井上・新永・佐藤
		文法O	大西・荻野・當山・重野
午後	塩道	基礎語彙1a	小川・川瀬
		基礎語彙1b	松森・青井
		基礎語彙2a	ローレンス・平山・久保菌
		基礎語彙2b	仲原・ペラール
		アクセントA	窪菌・儀利古・竹村・姜
		アクセントB	新田・上野・平子・高山
9月12日(日) 午前	上嘉鉄	基礎語彙1	ペラール・川瀬・小川・青井
		基礎語彙2	ローレンス・平山・松森・仲原
		アクセントA	窪菌・儀利古・竹村・姜
		アクセントB	新田・木部・高山・平子
		文法M	松本・下地・竹田
		文法K	金田・井上・新永・佐藤
		文法O	狩俣・久保菌・當山・重野
		談話	田窪・白田・山田・荻野
午後	湾	基礎語彙1	川瀬・ペラール・小川・青井
		基礎語彙2	ローレンス・仲原・松森・三井・平山
		アクセントA	窪菌・儀利古・竹村・姜
		アクセントB	木部・新田・平子・高山
9月13日(月) 午前	中里	基礎語彙1	青井・小川・川瀬・ペラール
		基礎語彙2	ローレンス・松森・平山
		アクセントA	窪菌・儀利古・竹村・姜
		アクセントB	木部・高山・平子・新田
		文法M	松本・三井・下地
		文法K	金田・井上・新永・佐藤
		文法O	狩俣・久保菌・當山・重野
	小野津	談話	田窪・白田・山田・荻野
午後	坂嶺	基礎語彙1	小川・田窪・ペラール・青井
		基礎語彙2	ローレンス・松森・川瀬
		アクセントA	窪菌・三井・竹村・白田
		アクセントB	木部・高山・平子・佐藤
		授受表現	荻野
9月14日(火) 午前	荒木	基礎語彙1	青井・小川・白田
		基礎語彙2	ペラール・田窪・平山・荻野



	アクセント A	松森・儀利古・竹村
	アクセント B	木部・高山・當山・佐藤
	文法 M	松本・三井・下地
	文法 K	金田・井上・新永
	文法 O	狩俣・久保蘭・川瀬・重野

## 2. 2 調査者

調査者は以下の通りである。

木部暢子（国立国語研究所 時空間変異研究系 プロジェクトリーダー），大西拓一郎（国立国語研究所 時空間変異研究系），井上文子（国立国語研究所 時空間変異研究系），窪菌晴夫（国立国語研究所 理論・構造研究系），三井はるみ（国立国語研究所 理論・構造研究系），上野善道（国立国語研究所 客員教授），下地賀代子（国立国語研究所プロジェクト研究員），平山真奈美（国立国語研究所プロジェクト研究員），儀利古幹雄（国立国語研究所プロジェクト研究員），盛思超（国立国語研究所プロジェクト奨励研究員），竹田晃子（国立国語研究所非常勤研究員），金田章宏（千葉大学国際教育センター），狩俣繁久（琉球大学法文学部），下地理則（群馬県立女子大学），田窪行則（京都大学大学院文学研究科），仲原穰（琉球大学非常勤講師），新田哲夫（金沢大学歴史言語文化学系），松本泰丈（元千葉大学），松森晶子（日本女子大学文学部），ウェイン・ローレンス（ニュージーランド オークランド大学），荻野千砂子（大分大学教育福祉学部），姜英淑（東京大学 PD），小川晋史（日本学術振興会特別研究員 琉球大学），新永悠人（日本学術振興会特別研究員 東京大学），トマ・ペラル（日本学術振興会外国人特別研究員 京都大学），山田真寛（日本学術振興会特別研究員 京都大学），青井隼人（東京外国語大学大学院博士前期課程），川瀬卓（九州大学大学院博士後期課程），久保蘭愛（九州大学大学院博士後期課程），佐藤久美子（九州大学大学院博士後期課程），重野裕美（広島大学大学院博士後期課程），白田理人（京都大学大学院文学研究科修士課程），高山林太郎（東京大学大学院生博士後期課程），竹村亜紀子（神戸大学大学院博士後期課程），當山奈那（琉球大学大学院修士課程），平子達也（京都大学大学院修士課程）

## 2. 3 話者

話者は以下の方々である（敬称略）。

小野津 樹本トスエ（1924年生，86歳），藤元セツエ（1926年生，83歳），守内ミツノ（1926年生，83歳），巻芳江（1931年生，79歳），野村リツ子（1934年生，76歳），有岡美恵子（1935年生，75歳），田畑繁子（1945年生，65歳），吉塚廣次（1922

- 年生，88歳），上山満則（1934年生，76歳），小野優（1936年生，74歳）
- 志戸桶 菅沼トヨ（1918年生，92歳），西山モト（1925年生，85歳），向井てる子（1927年生，83歳），南フデ（1927年生，83歳），高木ミサエ（1928年生，81歳），濱川寛子（1931年生，79歳），伊牟田正子（1934年生，76歳），田中克代（1936年生，74歳），菅沼節枝（1939年生，71歳），濱田隆子（1939年生，71歳），福山富勝（1924年生，86歳），松岡博忠（1952年生，59歳）
- 塩道 谷本タダ子（1924年生，86歳），基井テルエ（1930年生，80歳），岩村光子（1930年生，79歳），萩原榮三（1927年生，83歳），柏木貞治（1935年生，75歳），藤原輝夫（1943年生，67歳）
- 阿伝 岡本敏美（1923年生，86歳），政井平進（1932年生，78歳），晶貴輝也（1934年生，75歳），麓富士男（1950年生，59歳）
- 城久 嶺久代（1929年生，81歳），習マス（1931年生，78歳），千坂チヨ子（1932年生，78歳），舞島照代（1939年生，70歳），田中セキ（1927年生，83歳）
- 上嘉鉄 盛スミ（1931年生，78歳），廣育子（1935年生，75歳），西岡恵理（1981年生，29歳），値モト子（1936年生，73歳），村上国信（1925年生，85歳），富豊西（1924年生，85歳），祐名義郷（1930年生，79歳），澄愛島（1933年生，76歳），大友勝一（1936年生，73歳），前島勇一郎（1938年生，72歳），西原光則（1950年生，60歳），生島常範（1960年生，50歳）
- 坂嶺 里安九郎（1924年生，86歳），英啓太郎（1931年生，79歳），喜久秀人（1932年生，78歳），森岡進（1933年生，77歳），松田美枝子（1925年生，84歳），体岡ユキ子（1933年生，76歳），岩松美枝（1936年生，74歳）
- 湾 喜原正子（1932年生，78歳），黒田美奈子（1932年生，78歳），中山続（1930年生，80歳），岩田進（1953年生，57歳）
- 中里 嶺倉チトエ（1932年生，78歳），平明代（1939年生，71歳），福島正子（1949年生，60歳），倉本禎彦（1934年生，75歳），時本清志（1940年生，70歳），野間直忠（1942年生，68歳），松村米蔵（1942年生，68歳），野間昭夫（1946年生，64歳），得田喜代治（1957年生，53歳），久野一馬（1931年生，79歳），恵薫（1939年生，71歳）
- 荒木 基井ヨネ（1927年生，83歳），藤伊都枝（1928年生，82歳），作井才子（1928年生，82歳），益英子（1930年生，79歳），菊豊信（1922年生，88歳），作井久吉（1928年生，82歳），登洋一（1934年生，75歳），今井守夫（1945年生，65歳）

### 3 講演会等

上記の調査のほか、期間中に以下の講演会等を行った。

#### 3. 1 喜界町教育文化講演会

喜界町教育文化講演会

日時：9月14日（火）18：30～19：45

場所：喜界町役場

テーマ：「喜界島方言の特徴」

パネリスト	元千葉大学教授	松本泰丈
	琉球大学教授	狩俣繁久
	日本学術振興会外国人特別研究員	トマ・ペラール
	日本学術振興会特別研究員	新永悠人
司会	国立国語研究所	木部暢子

南 海

【第3種郵便物認可】



**喜界町教育文化講演会**

国立国語研の研究グループ

**喜界で方言調査、成果発表**

消滅の危機にある方言の記録・保存するため、国立国語研究所の木部暢子副所長をリーダーとする共同研究グループが9日から喜界島で調査を実施し、最終日の14日夜に喜界町役場で研究の成果を発表した。研究者らは、古い言葉が残っていて多様性もある喜界島の方言は、日本語の歴史を解明する上で貴重な言語と位置付け、地元でも積極的に保存・継承活動に取り組むよう呼び掛けた。

研究グループは、ユネスコーが消滅の危機にさらされている言語として2009年発表した調査結果で、奄美、沖縄や東京都・八丈地方の方言が危険な状態にあると指摘されたことを受け、09年から6年計画で調査研究している。来年度以降は沖縄や奄美大島でも現地調査を実施する予定。最初の調査地となった喜界島には、同研究所のほか九州大学や琉球大学多くの町民が集まった方言調査の成果発表会14日、喜界町役場

## 消滅の危機から守れ

研究者からは「古い言葉が残っている喜界島の方言は沖縄と似ている部分がある」との意見が出たほか、島内でも集落ごとに発音の違いがあることなどが報告された。狩俣氏は「琉球列島の交流の跡が言葉に残っているのでは」と指摘。木部氏は集落ごとの違いがどのような過程で生まれたかが今後の研究課題とし、保存継承について「使い残すのは地元の人、地元との協力関係が重要」と述べた。

### 児童生徒の暴力が過去最多

いじめは減少、09年度調査

2009年度に全国の国公私立の小中学校が把握した学校内外での児童・生徒による暴力行為の件数は4年連続で増加し、過去最多の計6万913件に上ったことが14日、文部科学省の問題行動調査で分かった。中学の割合が全体の72%を占

喜界町教育文化講演会の記事（南海日日新聞9月15日朝刊）

### 3. 2 湾地区高齢者学級

湾地区高齢者学級

日 時：9月11日（土） 14：00～16：00

場 所：喜界町中央公民館

テーマ：「喜界島方言について」

講演者：国立国語研究所 木部暢子

### 3. 3 喜界高校キャリアアップガイダンス

喜界高校キャリアアップガイダンス

日 時：9月13日（月） 15：20～16：10

場 所：喜界高校

講演者：儀利古幹雄・平山真奈美・重野裕美

奄 美 新

【第3種郵便物認可】

この日は国立国語研究所プロジェクト研究員の儀利古幹雄さん（30）、平山真奈美さん（34）、広島大学大学院生の重野裕美さん（27）が講演。

言語を持つ音、アクセントを専門とする儀利古さんは「喜界島の方言は、ものすごい美しいアクセントで、感動している。保存する価値が高く、大切にしたい」と説明。

平山さんはカナダへの留学体験を紹介し、「人とのつながりから得たものが大きい。日本人とは何か、私とは何かと考えるようになった」と話した。

喜界高校（藤崎健一 校長、228人）で13日、総合的な学習の時間を使ったキャリアアップガイダンスがあった。喜界島方言調査のため来島した研究者・院生3人が講演。生徒たちと歳の近い「先輩」という立場から、言語学に興味を持ったきっかけから、現在進める研究、大学や留先での体験談を通して、生徒たちにエールを送った。

龍郷町出身の重野さんの中しか知らないのに「不安に思ったことを告げ、大学進学前に島へ友達ができるのか」と白。大学では友達が奄びかけた。

美について興味津々に質問してきたが、島にいなから島唄も三味線もできない自分に気がついた。今のうちに島の文化を知って、アピールしてほしいと呼びかけた。

調査で  
来島  
**研究者・院生が講演**

「喜界方言のアクセント美しい」

喜界高校



先輩として生徒たちに呼びかける重野さん

キャリアアップガイダンスの記事（奄美新聞9月14日朝刊）



### 3. 喜界島方言の概要

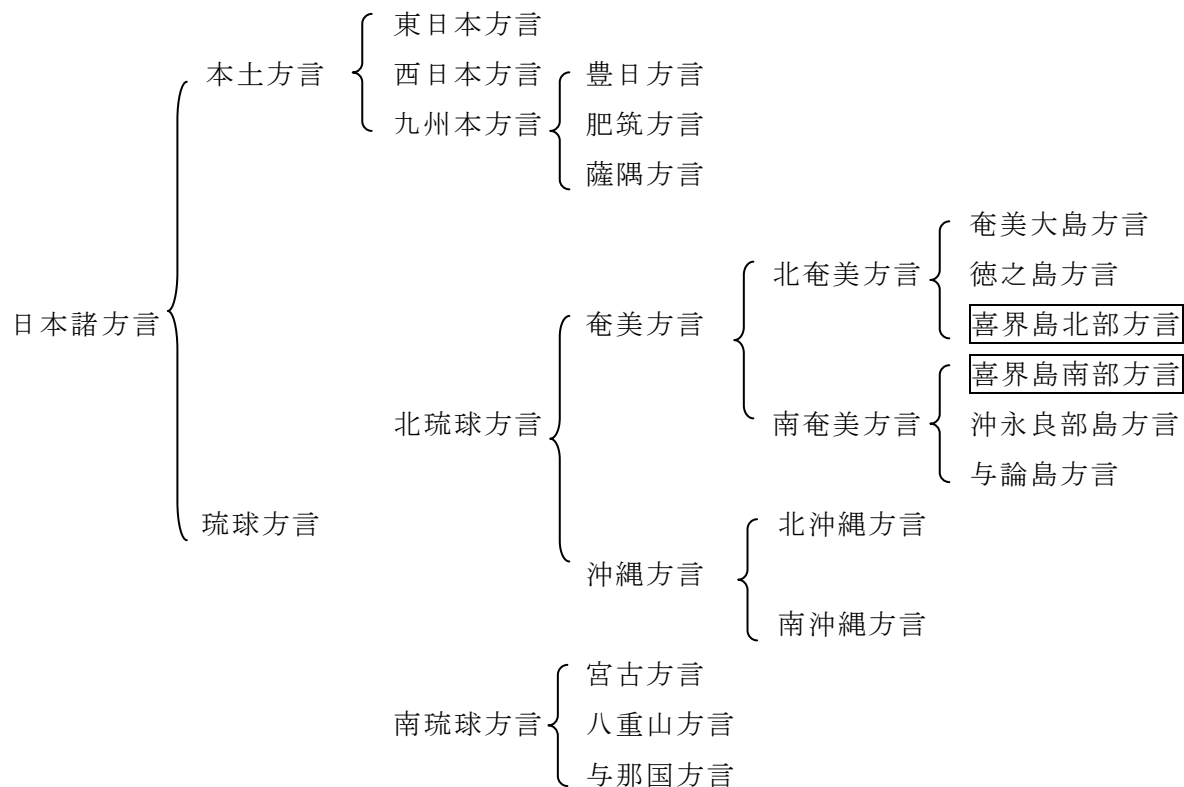
# 喜界島方言の音韻

木部 暢子

## 1 はじめに

喜界島の方言は、北部と南部で特色がかなり異なっている。例えば、北部では母音の種類が *i, i̇, u, e, ë, o, a* の7種類であるのに対し、南部では *i, u, e, o, a* の5種類である。また、「花」が北部では *pana* ないし *ɸana* と発音されるのに対し、南部では *hana* と発音される。北部と南部のこのような違いを考慮して、中本・中松（1984）では、喜界島北部を奄美大島方言、徳之島方言などと一緒にして北奄美方言とし、喜界島南部を沖永良部島方言、与論島方言などと一緒にして南奄美方言としている。

図1 琉球方言の区画（中本正智・中松竹雄 1984 による）



本章では、2010年9月に実施した喜界島方言の調査データをもとに、小野津、志戸桶、塩道、阿伝、上嘉鉄、坂嶺、湾、中里、荒木の9地点の音韻・音声を概観する。

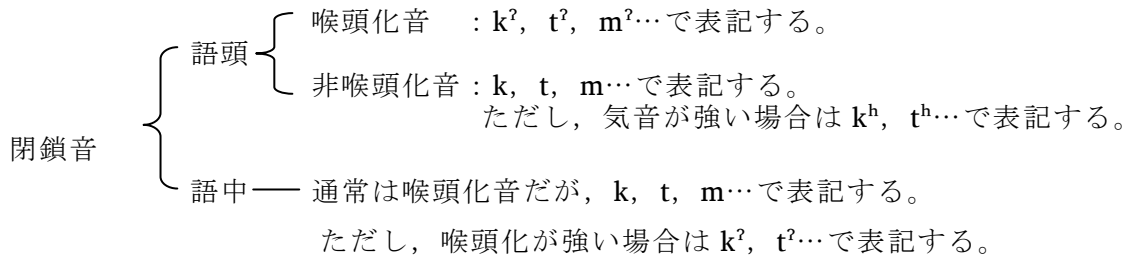
## 2 用例の表記法について

以下では、喜界島方言の具体的な用例を上げながら音韻の特徴を見ていくが、最初に用例の表記の方法について説明しておく。まず、用例はすべて国際音声字母（IPA）で表記する。だれでも読めるようにするためには、カタカナを併記する必要があるが、ここではとりあえず、国際音声字母のみで表記した。

次に、表記上の注意点について述べておく。それぞれの音の詳細やバリエーション、音韻的解釈などについては、各項目のところで説明する。

- ① 母音について。従来、喜界島方言の母音は、*i*, *i̇*, *u*, *e*, *ë*, *o*, *a* の文字で表記されることが多かったが、このうち *i̇* については、本報告書では *i̇* ではなく *ɪ* を用いる。今回の調査の範囲では、「目」「手」「根」などの語にあらわれる母音の中舌性がそれほど強くなく、中舌母音の *i̇* というよりも、緩み母音の *ɪ* と考える方がよいと判断したからである。
  - ② 母音が語頭にくる場合、通常は直前に声門閉鎖音を伴う。これは「ʔ」で表記する（例：*ʔa*, *ʔi*）。ただし、語頭の声門閉鎖が弱まって発音される場合がある。そのような場合には、「ʔ」を付けずに、*a*, *i* のように表記する。
  - ③ 語頭の阻害音（閉鎖音・破擦音）には、喉頭化音（無気音）と非喉頭化音（有気音）の2種類があらわれる。また、*m* のような鼻音にも喉頭化音があらわれる。喉頭化音は、子音の右肩に「ʔ」の補助記号を付けて表記し（例：*kʔ*, *tʔ*, *mʔ*）、非喉頭化音は補助記号を付けずに表記する（例：*k*, *t*, *m*）。非喉頭化音は大なり小なり気音を伴って発音されるので、「h」の補助記号を付けて表記するという立場もあるが、すべての非喉頭化音に「h」を付けるのは煩雑であるし、「ʔ」が付いていないことによって喉頭化音と区別することができるので、原則として非喉頭化音には「h」を付けずに表記する。気音が強く聞こえる場合にのみ、子音の右肩に「h」を付けて表記する（例：*k<sup>h</sup>*, *t<sup>h</sup>*）。
  - ④ 語中では喉頭化音・非喉頭化音が対立せず、普通は喉頭化音があらわれる。従って、本来ならば語中の閉鎖音の子音すべてに「ʔ」の補助記号を付けるべきであるが、表記が煩雑になるのを避けるために、「ʔ」の補助記号は省略した。ただし、喉頭化が強い場合には「ʔ」の補助記号を付ける。その結果、語中の閉鎖音には「ʔ」が付いているものと付いていないものが混在することとなったが、両者は音韻的な違いではない。
- ③と④を図にまとめておく。





⑤ アクセントは次の記号であらわす。 [ : 音調の上がり目。 ] : 音調の下がり目。  
この他、無回答や複数回答等、用例の提示方法については以下の通り。

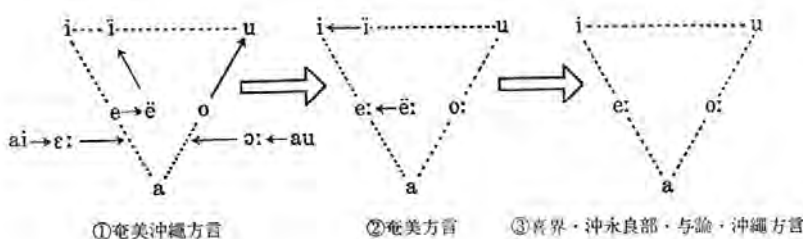
- ⑥ 調査時間の関係等で質問しなかった項目には「--」を、質問したけれども回答が得られなかった項目には「NR」を記入する。
- ⑦ 複数回答や語形に揺れがある場合、同一話者内での併用や揺れについては「/」で区切って語形を併記し、異なる話者間での違いや揺れについては「//」で区切って語形を併記する。地域による差は「・」で区切って2語を併記する。
- ⑧ 用例の項目番号は、資料集の「基礎語彙1」の項目番号である。用例を「基礎語彙2」から採った場合は、番号の最初に「2-」を付けて「2-00」のように表記する。

### 3. 喜界島方言の母音

#### 3. 1 従来の研究

従来の研究では、喜界島北部では母音が6ないし7種類、南部では5種類と言われている。中本(1976)によると、このような母音体系は次のようにして成立したという。まず、中本(1976)では、現在の琉球諸方言の母音の出発点を  $i, u, e, o, a$  の5母音においている。ここへ連母音  $au$  の融合によって  $ɔ:$  が発生し、これにより、 $o \rightarrow u$  の変化が引き起こされる。これと並行して、前舌母音でも連母音  $ai$  の融合によって  $\epsilon:$  が生じ、 $e \rightarrow \ddot{e} \rightarrow \ddot{i}$  の変化が引き起こされる。 $ɔ:$  と  $\epsilon:$  はその後、 $o:$  ,  $e:$  として定着し、 $i, \ddot{i}, u, e, o, a$  の6母音体系ができあがる。これにさらに連母音  $ae \rightarrow \ddot{e}:$  が加わったのが、北奄美方言の7母音体系である。その後、南奄美方言では中舌性が失われ、 $\ddot{i}$  は  $i$  に合流、 $\ddot{e}$  は  $e$  に合流し、 $i, u, e, o, a$  の5母音体系ができあがった(図4参照)。

図2 奄美沖縄方言の母音の推移(中本1976より)



### 3. 2 母音の特徴

母音の種類は、喜界島北部では7種類、喜界島南部では5種類である。ただし、表記法の箇所で述べたように、「目」「手」「根」などの語にあらわれる母音は、それほど中舌性が強くない。従って、以下では *i* で表記する。また、同じ地域でも、直前の子音との関係で母音の発音が異なる場合がある。以下、9地点の母音を比較しながら、(1)狭母音、(2)半広母音、(3)広母音の順で見よう。

#### (1) 狭母音

狭母音は、北部の小野津、志戸桶では *i*, *ɪ*, *u* の3種類、それ以外の地域では *i*, *u* の2種類である。まず、北部でも南部でも *i* であらわれる語を表 1.1~表 1.5 にあげる。

これらの *i* は、東京方言の *i* に対応している。ただし、志戸桶では表 1-1 の「実」、「網」にみられるように、両唇音 *m* のあとでは *ɪ* があらわれることがある。また、表 1-5 の「汗」「風」の *i* は、東京方言の *e* に対応している（網掛け部分）。

表 1-1 母音 *i*

項目番号 地域	7	6	101	118	162	131	177
	日	実	耳	網	味噌	波	海
①小野津	[pi	[mi]:	mi[mi	a[mi	mi[su	na[mi	?u[mi
②志戸桶	ti[da	[mɪ]:	mi[mi	?a[mɪ	mi[su	na[mi	[?u]mi
③塩道	[ti]da(太陽)	mi[:	mi[mi	a[mi	mi[su	na[mi	[?u]mi
④坂嶺	[pi]:	[mi]:	mi[mi	?a[mi	mi[su	na[mi	[?u]mi
⑤阿伝	[ti]da(太陽)	mi[:	mi[mi	a[mi	mi[su	na[mi	[?u]mi
⑥上嘉鉄	çi	na[ri	mi[mi	?a[mi	mi[su	na[mi	[?u]mi
⑦湾	--	mi[:	mi[mi	?a[mi	mi[su	na[mi	[?u]mi
⑧中里	çi[:/[çi]:	mi[:	mi[mi	?a[mi	mi[su	na[mi	[?u]mi
⑨荒木	çi[:	mi[:	mi[mi	a[mi	mi[su	na[mi	[u]mi

表 1-2 母音 *i*

項目番号 地域	83	48	199	2	66	76
	紙	首	足袋	血	道	蜂
①小野津	[ha]bi	[nu]bu[i	ta[bi	[tɕ <sup>2</sup> i]:	[mi]tɕi	[pa]tɕi
②志戸桶	ha[bi	[k <sup>2</sup> u]bi	[ta]bi	[tɕi]:/[tɕi:	[mi]tɕi	[pa]tɕi
③塩道	ha[bi	k <sup>2</sup> u[bi	[ta]bi	tɕ <sup>2</sup> i[:	mi[tɕi	pa[tɕi
④坂嶺	ha[bi	k <sup>2</sup> u[bi	[ta]bi	tɕi[:	--	--
⑤阿伝	ha[bi	nu[bi]:	[ta]bi	tɕi[:	mi[tɕi	p <sup>h</sup> a[tɕi
⑥上嘉鉄	ha[bi	k <sup>2</sup> u[bi	[t <sup>h</sup> a]bi	tɕi[:	mi[tɕi	[ha]tɕi[:
⑦湾	--	k <sup>2</sup> u[bi	[t <sup>h</sup> a]bi	tɕ <sup>2</sup> i[:	mi[tɕi	--
⑧中里	ha[bi	k <sup>2</sup> u[bi	[t <sup>h</sup> a]bi	tɕ <sup>2</sup> i[:	mi[tɕi	[ha]tɕi[:
⑨荒木	ha[bi	k <sup>2</sup> u[bi	ta[bi	tɕi[:	mi[tɕi	[ha]tɕi[:

表 1-3 母音 i

項目番号 地域	単語				
	16	36	153	38	64
	荷	蟹	鬼	蟻	釘
①小野津	[n <sup>ʰ</sup> i]mu[tsu	ga[n <sup>ʰ</sup> i]:	?u[n <sup>ʰ</sup> i	[a]:[n <sup>ʰ</sup> i]:	[k <sup>ʰ</sup> u]n <sup>ʰ</sup> i
②志戸桶	n <sup>ʰ</sup> i[:	ga[n <sup>ʰ</sup> i]:	[?u]n <sup>ʰ</sup> i	[?a]:[n <sup>ʰ</sup> i]:	k <sup>ʰ</sup> u[n <sup>ʰ</sup> i
③塩道	n <sup>ʰ</sup> i[:	ga[n <sup>ʰ</sup> i]:	?u[n <sup>ʰ</sup> i	[a]:[n <sup>ʰ</sup> i]:	k <sup>ʰ</sup> u[n <sup>ʰ</sup> i
④坂嶺	n <sup>ʰ</sup> i[:	ga[n <sup>ʰ</sup> i]:	?u[n <sup>ʰ</sup> i	[?a]:[n <sup>ʰ</sup> i]:	k <sup>ʰ</sup> u[n <sup>ʰ</sup> i
⑤阿伝	--	[gai]n	u[n <sup>ʰ</sup> i	[a]:[ĩ]:	k <sup>ʰ</sup> u[gi
⑥上嘉鉄	n <sup>ʰ</sup> i[:	ga[i]:	?u[n <sup>ʰ</sup> i	?a[i	k <sup>ʰ</sup> u[gi
⑦湾	n <sup>ʰ</sup> i[:/n <sup>ʰ</sup> i[mu]tu	ga[n <sup>ʰ</sup> i]:	o[n <sup>ʰ</sup> i	?a[n <sup>ʰ</sup> i	--
⑧中里	n <sup>ʰ</sup> i[:	ga[n <sup>ʰ</sup> i]:	?u[n <sup>ʰ</sup> i	a[n <sup>ʰ</sup> i	k <sup>ʰ</sup> u[n <sup>ʰ</sup> i
⑨荒木	n <sup>ʰ</sup> i[:	ga[n <sup>ʰ</sup> i]:	o[n <sup>ʰ</sup> i	a[n <sup>ʰ</sup> i	ku[gi]/ku[ŋi

表 1-4 母音 i

項目番号 地域	単語			
	49	125	32	252
	傷	時	右	兎
①小野津	[k <sup>ʰ</sup> i]zu	[tu]ki	n <sup>ʰ</sup> i[n <sup>ʰ</sup> i]:	[u]sa[gi
②志戸桶	[k <sup>ʰ</sup> i]zu	tu[ki	[mi]ŋi	[?u]sa[ŋi
③塩道	k <sup>ʰ</sup> i[zu	NR	[mi]gi	u[sa]gi
④坂嶺	k <sup>ʰ</sup> i[ɬu	t <sup>h</sup> u[ki	[mi]gi	--
⑤阿伝	tɕi[du	tu[ki	[mi]gi	?u[sa]gi
⑥上嘉鉄	tɕi[du	[du]tɕi[:	[mi]gi	?u[sa]gi
⑦湾	tɕi[du	NR	[mi]gi	u[sa]gi
⑧中里	tɕi[zu	--	mi[gi	[?usagi
⑨荒木	ki[zu	tu[ki	mi[gi	u[sa]gi

表 1-5 母音 i

項目番号 地域	単語				
	161	31	197	96	75
	汁	腰, 後ろ	汗	肘	風
①小野津	ɕi[ru	[hu]ɕi	a[ɕi	[pi]zi/[ɸi]zi	[ha]zi
②志戸桶	ɕi[ru	[hu]ɕi	?a[ɕi	pi[zi	[ha]zi
③塩道	ɕi[ru	hu[ɕi	a[ɕi	pi[zi	ha[di
④坂嶺	ɕi[ru	hu[ɕi	?a[ɕi	pi[ɬi	--
⑤阿伝	ɕi[ru	hu[ɕi	?a[ɕi	ɕi[zi	ha[di
⑥上嘉鉄	ɕi[ru	[ɸu]ɕi	?a[ɕi	ɕi[zi	ha[di
⑦湾	ɕi[ru	hu[ɕi	?a[ɕi	ɕi[zi	--
⑧中里	ɕi[ru	ɸu[ɕi/hu[ɕi	?a[se	ɕi[zi	ha[di
⑨荒木	ɕi[ru	ɸu[ɕi	a[ɕi	ɕi[zi	ha[zi

次に、喜界島北部の小野津、志戸桶で i, 他の地域で i があらわれる語をあげる。

表 2-1 母音 i・i

項目番号 単語	14	12	203	114	122
地域	屁	目	雨	豆	瓶
①小野津	pi[:/φi[:	mi[:	a[mi	ma[mi	ha[mi
②志戸桶	pi[:	mi[:	?a[mi	ma[mi	ha[mi
③塩道	pi[:	mi[:	a[mi	ma[mi	[ha]mi
④坂嶺	φi[:	mi[:	?a[mi	ma[mi	[ha]mi
⑤阿伝	pi[:/φi[:	mi[:	a[mi	ma[mi	[ha]mi
⑥上嘉鉄	çi[:	mi[:	?a[mi	ma[mi	ha[mi
⑦湾	çi[:	mi[:	?a[mi	ma[mi	[ha]mi
⑧中里	çi[:	mi[:	?a[mi	ma[mi/ma[mi	[ha]mi
⑨荒木	çi[:	mi[:	a[mi	ma[mi/ma[me	[ha]mi

表 2-2 母音 i・i

項目番号 単語	11	233	73	259	247	148
地域	手	表	筆	百足	情け	怪我
①小野津	ti[:	[u]mu[ti	pu[di	[mu]ka[zi	[na]sa[kɪ	kɪ[ga
②志戸桶	ti[:	[u]mu[ti	[φu]dɪ	[mu]ka[dɪ	[na]sa[kɪ	kɪ[ga
③塩道	ti[:	[u]mu[ti	pu[di/φu[di	mu[ka]di	na[sa]ki	ki[ga
④坂嶺	ti[:	[?u]mu[ti	--	nu[ka]de	--	kɪ[ga
⑤阿伝	ti[:	[?u]mu[ti	φu[di	[a]mi[da]:	NR	--
⑥上嘉鉄	ti[:	[?u]mu[ti	φu[di	mu[ka]de	na[sa]ki	k <sup>h</sup> i[ga
⑦湾	t <sup>h</sup> i[:	[?u]mu[ti	φu[de	mu[ka]di	NR	--
⑧中里	t <sup>h</sup> i[:	[?u]mu[ti	φu[di	[mu]ka[di	--	ki[ga/kɪ[ga
⑨荒木	ti[:	[u]mu[ti	φu[di	mu[ka]de	--	ke[ga

表 2-3 母音 i・i

項目番号 単語	24	89	102	105	165	188
地域	根	胸	骨	脛	船	種
①小野津	ni[:	[mu]ni	pu[ni/φu[ni	su[ni	pu[ni	ta[ni
②志戸桶	ni[:	[mu]ni	pu[ni]:	su[ni	φu[ni	ta[ni
③塩道	[hiN] pi[n <sup>h</sup> i]: (木の根の毛)	mu[ni	φu[ni]:	[muke]zu[ne (向こう脛)	[φu]ni	ta[ni
④坂嶺	ni[:/[mu]tu	mu[ni	[p <sup>h</sup> u]ni	[su]ni	[p <sup>h</sup> u]ni	t <sup>h</sup> a[ni
⑤阿伝	ni[:	mu[ni	φu[ni	su[ni	[φu]ni	ta[ni
⑥上嘉鉄	[ni]mu[tu	mu[ni	[φu]ni	su[ni	φu[ni	t <sup>h</sup> a[ni
⑦湾	ni[:	mu[ni	[φu]ni	su[ne	[φu]ni	t <sup>h</sup> a[ni
⑧中里	nimutu	mu[ni	[φu]ni	su[ni	[φu]ni	ta[ni
⑨荒木	mu[tu(元)	mu[ne	[φu]ni	su[ne	[φu]ni	ta[ne

小野津、志戸桶の **i** は、東京方言の **e** に対応している。前述のとおり、従来の報告書では、この母音は **i** で表記される場合が多かったが、喜界島方言の **i** は中舌性があまり強くない。表 1.1~1.5 の **i** が張り母音であるのに対し、この母音は緩み母音の **i** である。今回の調査の範囲から **i** と **i** のミニマルペアを拾うと、小野津方言では次のようなペアをあげることができる。

**mi:(実) : mi:(目)      ami(網) : ami(雨)      pi(日) : pi:(屁)** (短母音, 長母音の違いあり)

志戸桶では先に述べたように、**m** の後では前舌狭母音が **i** になるので、ミニマルペアを探すのが難しい。ミニマルペアではないが、次のようなペアがある。

**pi:(屁) : piru(昼)      ?umi(海) : ?ami(雨)      nami(波) : mamu(豆)**

喜界島中部の塩道、阿伝、上嘉鉄、坂嶺では、**i** がほとんどあられわれず、小野津や志戸桶の **i** と **i** がどちらも **i** と発音される。従って、「実」と「目」、「網」と「雨」はそれぞれ同音になり、区別されない。

小野津, 志戸桶	<b>i</b>	<b>i</b>	<b>?ami(網)</b>	<b>?ami(雨)</b>
塩道, 阿伝, 上嘉鉄, 坂嶺	<b>i</b>	<b>i</b>	<b>?ami(網)</b>	<b>?ami(雨)</b>

喜界島南部の中里では、小野津や志戸桶の **i** には **i** が対応し、**i** には **i** ないし **i** が対応する。表 2-1「豆」、表 2-2「怪我」のように、同一語の発音が **i** と **i** の両方で発音されることから、「豆」「怪我」にあられる **i** と **i** はバリエーションの関係にあり、音韻的には対立しないと考えられる。一方、「網」などの語にあられる **i** は、中里では非常に安定していて、**i** との間を揺れることはない。従って、中里では安定した **i** と、**i** ないし **i** の間を揺れる **i/i** があることになる。ただし、子音 **n** の後では **i/i** ではなく、**i** で安定している（表 2-3 の「胸」「骨」「脛」「船」「種」）。これについては後に述べる。

小野津	<b>i</b>	<b>i</b>	<b>ami(網)</b>	<b>mamu(豆)</b>	<b>puni(船)</b>
中里	<b>i</b>	<b>i/i</b>	<b>?ami(網)</b>	<b>mami/mamu(豆)</b>	<b>φuni(船)</b>

南部の湾、荒木では、小野津や志戸桶の **i** が、**i** ないし **e** で発音される。**e** は共通語的な発音であられたのかもしれないが、他の集落ではこれらの単語に **e** があられることはないので、湾、荒木の特徴としてあげておく。また、直前の子音が **n** の場合には **i** があられる。**n** の後の **i** については、中里の **i** とあわせて後に述べる。

小野津	<b>i</b>	<b>i</b>	<b>ami(網)</b>	<b>mamu(豆)</b>	<b>puni(船)</b>
荒木	<b>i</b>	<b>i/i/e</b>	<b>ami(網)</b>	<b>mami/mame(豆)</b>	<b>φuni(船)</b>

以上の喜界島諸方言の前舌狭母音の状況をまとめておこう。

東京	i	e	ami(網)	ame(雨)	ϕune(船)
小野津, 志戸桶	i	ɪ	ami(網)	ami(雨)	ϕuni(船)
塩道, 阿伝, 上嘉鉄, 坂嶺	i	i	?ami(網)	?ami(雨)	ϕuni(船)
中里	i	i/ɪ	?ami(網)	mami/mami(豆)	ϕuni(船)
湾, 荒木	i	i/ɪ/e	ami(網)	mami/mame(豆)	ϕuni(船)

次に、先に保留した子音 **n** の後の **i**, **ɪ** について見てみよう。先に述べたように、小野津、志戸桶の **ɪ** は、中里で **i/ɪ**、湾、荒木では **i/e** であらわれるが、**n** の後に限っては、中里、湾、荒木とも **ɪ** で安定している。つまり、中里、湾、荒木でも **n** の後では小野津、志戸桶と同じように、前舌母音に **i** と **ɪ** の2種類の母音があらわれるのである。

	「荷」	「蟹」	「鬼」	:	「根」	「胸」	「船」
小野津	n <sup>j</sup> inutsu	gan <sup>j</sup> i:	?un <sup>j</sup> i	:	ni:	muni	puni
中里	n <sup>j</sup> i:	gan <sup>j</sup> i:	?un <sup>j</sup> i	:	nimutu	muni	ϕuni
湾	n <sup>j</sup> i:	gan <sup>j</sup> i:	on <sup>j</sup> i	:	ni:	muni	ϕuni
荒木	n <sup>j</sup> i:	gan <sup>j</sup> i:	on <sup>j</sup> i	:	(mutu)	mune	ϕuni

それと同時に、各地とも母音 **i** の前では **n** の子音が口蓋化して **n<sup>j</sup>** になっている。つまり、**n<sup>j</sup>i** と **ni** は母音の違いによって区別されていると同時に、子音の口蓋化の有無によっても区別されているのである。

**n** の口蓋化の有無という点でいえば、**i** と **ɪ** の区別を持たない塩道、阿伝、上嘉鉄、坂嶺でも子音が **n** の場合には、子音の口蓋化の有無によって「荷」と「根」が区別されている。

	「荷」	「蟹」	「鬼」	:	「根」	「胸」	「船」
塩道	n <sup>j</sup> i:	gan <sup>j</sup> i:	?un <sup>j</sup> i	:	(hin pin <sup>j</sup> i:)	muni	ϕuni:
阿伝	--	(gain)	u[n <sup>j</sup> i	:	ni[:/nimutu	muni	ϕu[ni
上嘉鉄	n <sup>j</sup> i:	(gai:)	?u[n <sup>j</sup> i	:	nimutu	muni	ϕuni
坂嶺	n <sup>j</sup> i:	gan <sup>j</sup> i:	?u[n <sup>j</sup> i	:	ni:	muni	p <sup>h</sup> uni

ちなみに、話者は「荷」と「根」の発音の違いを明確に意識しており、調査者が「根」の発音をまねるときに、少しでも **n** が口蓋化していると、OKが出ない。また、岩倉(1941) (早町村阿伝集落を中心とする言葉) では、「「ネィ」は [ni] で荷物等の「ニ」と区別がある」(岩倉 1941: 18) と述べられている。

以上を整理すると、以下のようになる。

「荷・蟹・鬼」等 : 「根・胸・骨」等

小野津, 志戸桶	nʲi	:	ni
塩道, 阿伝, 上嘉鉄, 坂嶺	nʲi	:	ni
中里, 湾, 荒木	nʲi	:	ni

小野津, 志戸桶に関しては, 直前がどのような子音であっても *i* と *ɪ* の 2 種類の母音があらわれるので, *nʲi* と *ni* の区別も, 母音の違いによるところが大きいと考えられる。これと対照的なのが塩道, 阿伝, 上嘉鉄, 坂嶺で, これらの地域ではどのような子音の後でも, 前舌狭母音には *i* の 1 種類しかあらわれない。従って, *nʲi* と *ni* の区別は, 子音の口蓋化の有無 (*nʲ* と *n*) によって行われていることになる。

南部の中里, 湾, 荒木に関しては, *nʲi* と *ni* の区別を母音の違いが支えているのか, 子音の口蓋化の有無が支えているのか, 両方の解釈の可能性があるが, 中里では不安定ながら, *n* 以外の子音の後でも *ɪ* があらわれる。従って, *nʲi* と *ni* の違いにも母音の違いが関与しているのよと考えるのがよいと思われる。それに対し, 湾, 荒木では *n* 以外の子音の後では *ɪ* があらわれない。そうすると, *ni* のためだけに母音の種類を 1 つ増やすよりも, *n* の口蓋化の有無が *nʲi* と *ni* の区別を支えていると考える方がよいと思う。

喜界島南部方言の *n* の口蓋化については, すでに大野(2002)に次のような指摘がある。「この音声実態は以下(湾方言の語例)に示すとおり母音の実質による対立というよりは, 子音部分の口蓋化の有無による対立と見なすことができる。

ニ : *ɲi*:(荷) *ɲiku*(肉) *ɲupi*(釘)

ネイ : *ni*:(根) *hani*(金) *muni*(胸) 」(大野 2002 ; 6)

歴史的には,

- ① 小野津, 志戸桶のように, どのような子音の後でも母音 *i* と *ɪ* が対立する体系。
- ② *ɪ* > *i* の変化が進むが, まだ完全には *ɪ* が *i* に合流せず, *ɪ* と *i* を揺れている中里のような状態 (ただし, *n* の後では *ɪ*)。
- ③ *ɪ* > *i* の変化がさらに進み, *n* の後を除いて *ɪ* が *i* へ合流した湾, 荒木のような状態。
- ④ *n* の後でも *ɪ* > *i* の変化が進み, *ɪ* が完全に *i* に合流した塩道, 阿伝, 上嘉鉄, 坂嶺のような状態。 *n* の後では子音の口蓋化の有無の違い (*nʲ* と *n*) に *i* と *ɪ* の違いが反映されている)。

のような経緯をたどったものと思われる。次には以下のような段階が予想される。

- ⑤ *ɪ* が完全に *i* に合流し, *n* の後でも *ɪ* と *i* の違いの痕跡をとどめない状態。

次に、後舌狭母音の u について見てみよう。喜界島方言の u は、東京方言の u と o に対応している。地域によっては o があらわれることがある（表 3-2 の網掛け部分）が、共通語的な発音が回答されたものと思われる。また、ワ行のヲに由来する音が wu または gu であらわれることがある（表 3-3 の網掛け部分）。

表 3-1 母音 u

項目番号 地域	40	86	133	177	59	89
	牛	歌	馬	海	虫	胸
①小野津	[ʔu]çi	[ʔu]ta	u[ma	ʔu[mi	[mu]çi	[mu]nɪ
②志戸桶	[ʔu]çi	[ʔu]ta	ʔu[ma	[ʔu]mi	[mu]çi	[mu]nɪ
③塩道	u[çi	ʔu[ta	ʔu[ma	[ʔu]mi	mu[çi	mu[ni
④坂嶺	ʔu[çi	ʔu[ta	[m <sup>ʔ</sup> a	[ʔu]mi	--	mu[ni
⑤阿伝	u[çi	u[ta	[m <sup>ʔ</sup> a	[ʔu]mi	mu[çi	mu[ni
⑥上嘉鉄	ʔu[çi	ʔu[ta	[m <sup>ʔ</sup> a	[ʔu]mi	mu[çi	mu[ni
⑦湾	ʔu[çi	ʔu[ta	[m <sup>ʔ</sup> a	[ʔu]mi	mu[çi	mu[nɪ
⑧中里	ʔu[çi	ʔu[ta	[maʔ	[ʔu]mi	mu[çi	mu[nɪ
⑨荒木	u[çi	u[ta	[m <sup>ʔ</sup> a	[u]mi	mu[çi	mu[ne

表 3-2 母音 u

項目番号 地域	85	112	8	151	194	100	31	115
	音	親	藻	物	腿	肝	腰, 後ろ	米
①小野津	[ʔu]tu	[tu]zitu(母父)	[mu]:	mu[nu	mu[mu	k <sup>ʔ</sup> i[mu	[hu]çi	hu[mɪ
②志戸桶	[ʔu]tu	ʔu[ja	[mu]:	[mu]N	mu[mu	k <sup>ʔ</sup> i[mu	[hu]çi	hu[mɪ
③塩道	u[tu	ʔu[ja	mu[:	mu[N	mu[mu	tɕ <sup>ʔ</sup> i[mu	hu[çi	hu[mi
④坂嶺	ʔu[tu	u[ja	mu[:	mu[nu	mu[mu	tɕi[mu	ɸu[çi	ɸu[mi
⑤阿伝	u[tu	--	mo[:	NR	--	tɕi[mu	ɸu[çi	ɸu[mi
⑥上嘉鉄	ʔu[tu	ʔu[ja	--	mu[N	mu[mu	tɕi[mu	ɸu[çi	ɸu[mi
⑦湾	ʔu[tu	u[ja	mu[:	--	mu[mu	--	ɸu[çi	hu[mi
⑧中里	ʔu[tu	ʔu[ja	--	mu[N	mu[mu	tɕ <sup>ʔ</sup> i[mu	ɸu[çi/ hu[çi	ɸu[mi/ ɸu[mɪ
⑨荒木	o[to	u[ja	mo[:	mu[N	tɕi[mu	ku[mu	ɸu[çi	ɸu[mi



表 3-3 母音 u

項目番号 地域	34 夫	38 女	36 叔母	33 叔父	175 おととい
①小野津	[u]tu	[u]na[ŋu]	u[ba]:	u[ɕi]:	?ut[t <sup>2</sup> i]:
②志戸桶	[u]tu	[u]na[ŋu]	[?u]ba[kkɪ(:), [?u]ba	[?u]N[muɰi]:	[wu]t[ti]:
③塩道	wu[t <sup>2</sup> u	[wu]na[gu]	[?a]N[ma]: / ?a[ni]:	[k <sup>2</sup> i]N[k <sup>2</sup> a]:	wut[t <sup>2</sup> i]: / [wu]t[ti]:
④坂嶺	gu[tu	[gu]na[ŋu]	?u[ba]:	?u[zi]:	[gu]t[t <sup>h</sup> i]:
⑤阿伝	gu[tu	[gu]na[u	gu[ba	gu[ɕi	--
⑥上嘉鉄	?u[tu	[wu]na[u	wu[ba	?u[ɕi	?ut[ti]:
⑦湾	wu[tu	[wu]na[gu]	wu[ba]:	wu[ɕi]:	wut[t <sup>2</sup> i]:
⑧中里	?u[tu	[?u]na[gu]	?o[ba]: / ?u[ba	?u[ɕi]:	?ut[t <sup>2</sup> i]:
⑨荒木	?u[tu	[?u]na[ɰu	?o[ba]:	?u[ɕi]:	--

## (2) 半広母音

半広母音の種類は、喜界島北部の小野津、志戸桶では e, ë, o の 3 種類、それ以外の地域では e, o の 2 種類である。これらは、長母音としてあらわれるのがほとんどで、歴史的には連母音の融合により生まれたものである。表 4、表 5 に e と ë の例をあげておく。

表 4 母音 e

項目番号 地域	47 酒	58 竹	2-40 兄弟	104 腕	185 苗	91 口蓋
①小野津	[se]:	[de]:	[k <sup>2</sup> o]:[de]:	u[di	ne[:	[?u]tuŋe[:
②志戸桶	[se]:	[de]:	--	[gu]te[:	ne[:	[?a]gu
③塩道	se[: / ɕe[:	de[:	[ɕo]:[de]:	[gu]te[:	ne[:	?a[gu
④坂嶺	se[:	de[:	[so]:[de]:	?u[di	ne[:	?a[gu
⑤阿伝	se[:	de[:	[so]:[de]:	ti[:	ne[:	[u]tu[je]:
⑥上嘉鉄	se[:	de[:	[so]:[de]:	?u[di / [gu]te[:	ne[:	[?a]gu
⑦湾	se[:	de[:	[so]:[de]:	?u[di	na[e	?a[gu
⑧中里	se[: / ɕe[:	de[:	[so]:[de]:	[gu]te[:	--	?a[gu
⑨荒木	ɕe[:	de[:	[so]:[de]:	u[de / [gu]te[:	na[e	a[go

表5 母音 *ë*

項目番号 単語	68	202	210	2-156
地域	蠅	前	額	南風
①小野津	[pë]:	më[:	[më]:[tɕa]:	[ɸe:niçi
②志戸桶	[ɸë]:/[pë]:	më[:	[më]:[tɕi]:	ɸë[:/[ɸë]nka[ɸi
③塩道	he[:	[me]:	[metɕi:]//[me]:[tɕi]:	p <sup>h</sup> e[:
④坂嶺	pe[:	[me]:	[mi]k[ko]:	[pe]:
⑤阿伝	pe[:/ɸe[:	[me]:	--	[ɸe]:
⑥上嘉鉄	he[:	[me]:	mit[tɕe]:	[he]:
⑦湾	he[:	[me]:	[mittɕe]:	[hen]ka[di]:
⑧中里	he[:	[me]:	mit[tɕe]:	[hë]:
⑨荒木	he[:	[me]:	mit[tɕe]:	--

表4の「酒」「竹」は語中の *k* が *x* になり、*x* の摩擦が弱まった結果、母音連続が生じたもの (\*sake > \*saxe > \*sae > \*së: > se:, \*dake > \*daxe > \*dae > \*dë: > de:), 「腕」の gute: は \*gotai (五体) を語源とする語, 「口蓋」の ?utuɕe: は \*otoɕai (おとがい) を語源とする語, 「南風」の ɸe:, ɸë: は \*pae (はえ) を語源とする語で、いずれも ae, ai をもととしている。「額」の語源はよく分からないが、「まえひたい」か。

小野津と志戸桶では、直前の母音が両唇音 *p*, *m*, *ɸ* の場合に *ë*: (表5の網掛け部分) があられやすく、それ以外の子音の後では *e*: があられやすいようである (表4)。

次に、*o* は次のような語にあられる。やはり、ほとんどが長母音で、歴史的には、*au*, *ao* などの連母音の融合により生じたもの (「蛸」は \*tako > \*taxo > \*tao > to:), あるいは漢語由来の語である。

表6-1 母音 *o*

項目番号 単語	213	245	123	137
地域	麴(こうじ)	箒	竿	蛸(たこ)
①小野津	[ho]:[ɕi	[ho]:[ki	[so]:de[:(竿竹)	to[:
②志戸桶	[ho]:[ɕi	[po]:[ki	[de]: (竹)	to[:
③塩道	[ho:]ɕi	[ɸo]:[tɕi	[so]:[de]:/de[:	to[:
④坂嶺	ho[:]ɕi	[po:]tɕi	sa[o	to[:
⑤阿伝	ho[:]ɕi	po[:]tɕi/ho[:]tɕi	de[:	to[:
⑥上嘉鉄	[ho]:[ɕi	ho[:]tɕi	de[:	t <sup>h</sup> o[:
⑦湾	[ho:]ɸi	ho[:]tɕi	[so]:[de]:	--
⑧中里	[ho:]ɕi	ho[:]tɕi	--	to[:]/[to:
⑨荒木	[ho:]ɕi/ho[:]ɕi	ho[:]tɕi	de[:	to[:

表 6-2 母音 o

項目番号 地域	2-40	2-45	2-83
	兄弟	親戚	門
①小野津	[kʲo]:[de]:	[ɸa]ro:[ɕi]:	ɕo[:
②志戸桶	--	[ha]ro:[ɕi]:	ɕo[:
③塩道	[ɕo]:[de]:	p <sup>h</sup> a[ro]:ɕi	[ɕo:
④坂嶺	[so]:[de]:	pa[ro]:[zi]:	[ɕo]:
⑤阿伝	[so]:[de]:	[ɸa]ro:[ɕi	[ɕo]nku[ɕi]:/[ɕo]:
⑥上嘉鉄	[so]:[de]:	[haro]:[ɕi]:/[so:de]N[ɕa]:	[ɕo]:
⑦湾	[so]:[de]:	[haro]:[ɕi]:	[ɕo]:
⑧中里	[so]:[de]:	[haro]:[ɕi]:	[ɕo]:
⑨荒木	[so]:[de]:	ha[ro]:[ɕi]:	[ɕo]:

(3) 広母音

広母音はどの地域でも a の 1 種類である。表 7 に例をあげる。

表 7 母音 a

項目番号 地域	9	10	37	42	70	128
	葉	名	粥	金	鼻	山
①小野津	[pa]:	[na]:	ka[i]:	[ka]ne	[pa]na	ja[ma
②志戸桶	[pa]:	[na]:	ka[i]:	[ha]ni	[pa]na	ja[ma
③塩道	pa[:	na[:	ka[i	NR	pa[na	ja[ma
④坂嶺	pa[:/ ɸa[:	na[:	ka[ju	ha[ni]/xa[ni	--	ja[ma
⑤阿伝	pa[:	na[:	ka[i	ha[ni	p <sup>h</sup> a[na	ja[ma
⑥上嘉鉄	ha[:	na[:	[k <sup>h</sup> a]i]:	ha[ni	ha[na	ja[ma
⑦湾	ha[:	[na]ma[i	k <sup>h</sup> a[i	ha[ni	ha[na	ja[ma
⑧中里	ha[:	na[:	k <sup>h</sup> a[i]/k <sup>h</sup> a[ju	ha[ni	ha[na	ja[ma
⑨荒木	ha[:	[na]ma[i	[ka]i]:	ha[ni]/ha[ni	ha[na	ja[ma

### 3. 3 喜界島諸方言の母音音素目録

喜界島各地の母音の音素目録を以下にあげておく。

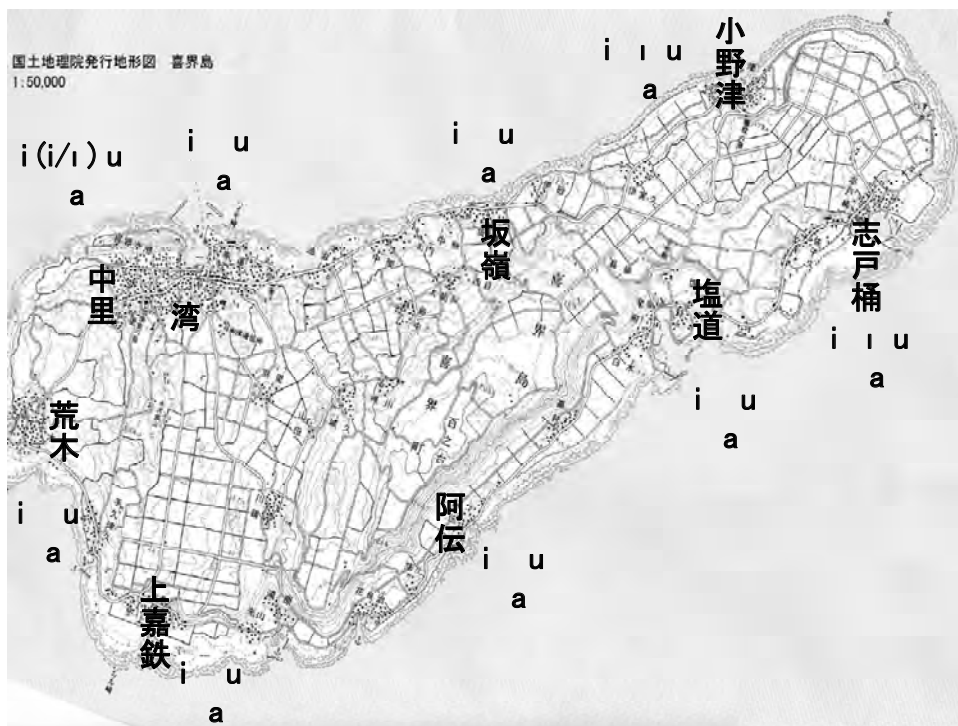
#### 短母音

小野津, 志戸桶	中里	塩道, 阿伝, 上嘉鉄, 坂嶺, 湾, 荒木
i    ɪ    u	i (i/ɪ)    u	i            u
a	a	a

#### 長母音

小野津, 志戸桶	中里	塩道, 阿伝, 上嘉鉄, 坂嶺, 湾, 荒木
i        ɪ:        u:	i: (i:/ɪ:)	u:
e:    ë:    o:	e:    o:	e:    o:
a:	a:	a:

図5 喜界島諸方言の母音体系（短母音）



## 4 喜界島方言の子音

### 4.1 両唇音

(4) 両唇閉鎖音 (両唇摩擦音) p b φ

両唇閉鎖音には p, b の 2 種類, 両唇摩擦音には φ がある。

まず, p と φ は母音 a, i, ɪ, u, e, ë, o の前にあらわれる。用例を表 8-1~8-4 にあげる。

表 8-1 両唇閉鎖音 p / 摩擦音 φ

項目番号 地域	9 葉	13 齒	33 羽	69 箱	7 日	72 髭
①小野津	[pa]:	pa:	[pa]nɪ	[pa]ku	[pi	[pi]nɪ
②志戸桶	[pa]:	pa:	[pa]nʲi	pa[ku	ti[da	[pi]nʲi / [pi]ŋi
③塩道	pa:	pa:	pa[ni / pa]nʲi	pa[ku	[ti]da	pi[nʲi
④坂嶺	pa: / φa:	pa: / φa:	pa[ni	--	[pi]:	pi[ni
⑤阿伝	pa:	pa:	pa[ni	p <sup>h</sup> a[ku	[ti]da	p <sup>h</sup> i[gi]:
⑥上嘉鉄	ha:	ha:	ha[ni	ha[ku	çi	çi[gi
⑦湾	ha:	ha:	ha[nɪ	--	--	--
⑧中里	ha:	ha:	ha[nʲi	ha[ku	çi: / [çi]:	çi[nʲi / φi]ŋɪ
⑨荒木	ha:	[ha:	ha[ni / hanɪ	ha[ku	çi:	çi[nɪ

表 8-2 両唇閉鎖音 p / 摩擦音 φ

項目番号 地域	96 肘	249 左	14 屁	166 篋	68 蠅	245 箒
①小野津	[pi]zi / [φi]zi	[pi]za[i	pi: / φi:	he[ra	[pë]:	[ho]:[ki
②志戸桶	pi[zi	pi[da]i	pi:	pi[ra / φi]ra	[φë]: / [pë]:	[po]:[ki
③塩道	pi[zi	pi[da]i	pi:	NR	he[:	[φo]:[tçi
④坂嶺	pi[dzi	pi[za]i	φi:	[pi]ra	pe[:	[po]:[tçi
⑤阿伝	çi[zi	φi[da]i	pi: / φi:	[pi]ra	pe: / φe:	po[:][tçi / ho[:][tçi
⑥上嘉鉄	çi[zi	çi[da]ri	çi:	NR	he[:	ho[:][tçi
⑦湾	çi[zi	çi[da]ri	çi:	sa[zi(匙)	he[:	ho[:][tçi
⑧中里	çi[zi	çi[da]ri	çi:	çi[ra	he[:	ho[:][tçi
⑨荒木	çi[zi	çi[da]ri	çi:	NR	he[:	ho[:][tçi

表 8-3 両唇閉鎖音 p, 摩擦音 φ

項目番号 単語	73	95	165	227	146
地域	筆	冬	船	袋	節
①小野津	pu[di	[p <sup>ʰ</sup> u]ju	pu[nɪ	puk[ku/φuk[ku	φu[çi
②志戸桶	[φu]dɪ	[φu]ju	φu[nɪ	φuk[ku	[pu]çi
③塩道	pu[di/φu[di	φu[ju	[φu]ni	[φuk]ku	bu[çi//pu[çi
④坂嶺	--	pu[ju	[p <sup>h</sup> u]ni	[puk]ku	pu[çi
⑤阿伝	φu[di	φu[ju	[φu]ni	[φuk]ku	--
⑥上嘉鉄	φu[di	φu[ju	φu[ni	[φuk]ku	[bu]çi
⑦湾	φu[de	φu[ju	[φu]nɪ	[φuk]ku	--
⑧中里	φu[di	φu[ju	[φu]nɪ	[φuk]ku/φuk[ku	φu[çi/ bu[çi (古形?)
⑨荒木	φu[di	φu[ju	[φu]nɪ	[φuk]ku	φu[çi

表 8-4 両唇閉鎖音 p, 摩擦音 φ

項目番号 単語	4	15	54	81	102
地域	帆	穂	星	臍	骨
①小野津	[φu]:	[pu]:/[φu]:	[p <sup>h</sup> u]çi	[pu]su	pu[nɪ/φu[nɪ
②志戸桶	φu:	φu:	[φu]çi/[pu]çi	[pu]su/[φu]su	pu[nɪ]:
③塩道	φu:	[i]ninomi: (稲の実)	hu[çi	pu[su	φu[nɪ]:
④坂嶺	pu[:/φu[:	pu[:/φu[:	--	pu[su	[p <sup>h</sup> u]ni
⑤阿伝	φu:	φu:	φu[çi	φu[su	φu[nɪ
⑥上嘉鉄	φu[:/[φu]:	φu:	φu[çi	φu[su	[φu]ni
⑦湾	φu:	φu:	ho[çi	φu[su	[φu]nɪ
⑧中里	φu:	φu:	φu[çi	φu[su	[φu]nɪ
⑨荒木	ho:	ho:	φu[çi	çi[su	[φu]nɪ

p があらわれる地域は、喜界島北部の小野津、志戸桶、中部の塩道、坂嶺、阿伝で（表の網掛け部分）、南部の上嘉鉄、湾、中里、荒木ではこの位置に h があらわれる。北部の p も閉鎖性はかなり弱く、両唇摩擦音 φ と自由に交替する。また、後接する母音が u の場合、特に東京方言の o に対応する u の場合には、北部でも p より φ が出やすい（表 8-4 の「帆」「穂」「星」「臍」「骨」）。

喜界島南部では h の異音として ç と φ があらわれる。ç は後接する母音が i の場合、φ は後接する母音が u の場合にあらわれる異音である。共通語的な発音かもしれないが、荒木では「帆」「穂」などの語に ho があらわれている。

次に、b は語頭にはほとんどあらわれず、もっぱら語中にあらわれる。語頭の b は小野津、塩道、坂嶺、湾の bibiza: (ミミズ) などに見られるが、これは m の変化したものであ

る。語中の **b** は東京方言の **b** に対応する位置にあらわれる。後接母音は a, i, ɪ, u。以下に用例をあげる。

表 9 両唇閉鎖音 b

項目番号 地域	253 ミミズ	98 舌	106 指	2-43 子供	191 粒
①小野津	[bi]biʒa[ra]:	su[ba	[ju]bi	[wa]ra[bi] / [wa]ra[b <sup>w</sup> i	NR
②志戸桶	[mi]mi[ʒa]:	su[ba	ju[bi	[wa]ra[bi	[tsu]bu
③塩道	[mi]mi[ʒa]: / [bi]bi[da]:	su[ba	ju[bi	wa[ra]bi	t <sup>ʔ</sup> u[bu
④坂嶺	[bi]bi[ʒa]:	su[ba	ju[bi	wa[ra]bi	t <sup>ʂ</sup> u[bu
⑤阿伝	[mi]mi[da]:	su[ba	ju[bi	wa[ra]bi	--
⑥上嘉鉄	[mi]mi[da]:	su[ba	ju[bi	--	t <sup>ʔ</sup> u[da]: / t <sup>h</sup> u[da]:
⑦湾	[bibi]da[ra]:	su[ba	ju[bi	wa[ra]bi	tu[bu] / tu[da]:(小さい粒)
⑧中里	[mimi]nda[ja]:	su[ba	ju[bi	wa[ra]bi	--
⑨荒木	[mi]mi[ʒa]:	su[ba	ju[bi	wa[ra]bi	tsu[bu]: / tsu[bu

(5) 両唇鼻音 m

両唇鼻音の **m** は、東京方言の **m** に対応している。母音 a, i, ɪ, u, e, ë, o の前に立ち、地域差はほとんどない。表 10-1, 10-2 に用例をあげる。「馬」では喉頭化した **m<sup>ʔ</sup>** があらわれている（表の網掛け部分）。中里の **ma<sup>ʔ</sup>** は、語頭の喉頭化音が語末の閉鎖として発音されたものと思われる。

表 10-1 両唇鼻音 m

項目番号 地域	109 股	114 豆	129 島	132 浜	101 耳	118 網
①小野津	ma[ta	ma[mɪ	çi[ma	pa[ma	mi[mi	a[mi
②志戸桶	ma[ta	ma[mɪ	çi[ma	pa[ma	mi[mi	?a[mɪ
③塩道	ma[ta	ma[mi	çi[ma	[pa]ma	mi[mi	a[mi
④坂嶺	ma[ta	ma[mi	çi[ma	[pa]ma	mi[mi	?a[mi
⑤阿伝	ma[ta	ma[mi	çi[ma	[pa]ma	mi[mi	a[mi
⑥上嘉鉄	ma[ta	ma[mi	çi[ma	ha[ma	mi[mi	?a[mi
⑦湾	ma[ta	ma[mi	çi[ma	[ha]ma	mi[mi	?a[mi
⑧中里	ma[ta	ma[mi] / ma[mɪ	çi[ma	ha[ma	mi[mi	?a[mi
⑨荒木	ma[ta	ma[mi] / ma[me	çi[ma	[ha]ma	mi[mi	a[mi

表 10-2 両唇鼻音 m

項目番号 単語	59	194	202	8	133
地域	虫	腿	前	藻	馬
①小野津	[mu]çi	mu[mu	më[:	[mu]:	u[ma
②志戸桶	[mu]çi	mu[mu	më[:	[mu]:	?u[ma
③塩道	mu[çi	mu[mu/at[te]:	[me]:	mu[:	?u[ma
④坂嶺	--	mu[mu	[me]:	mu[:	[m <sup>2</sup> a
⑤阿伝	mu[çi	--	[me]:	mo[:	[m <sup>2</sup> a
⑥上嘉鉄	mu[çi	mu[mu/at[te]:	[me]:	NR	[m <sup>2</sup> a
⑦湾	mu[çi	mu[mu	[me]:	mu[:	[m <sup>2</sup> a
⑧中里	mu[çi	mu[mu	[me]:	--	[ma?
⑨荒木	mu[çi	mɔ[mɔ/mo[mo	[me]:	mo[:	[m <sup>2</sup> a

#### 4. 2 歯茎音

##### (6) 歯茎閉鎖音 t t<sup>2</sup> d

歯茎閉鎖音には, t, t<sup>2</sup>, dがある。

tに後接する母音は a, i, ɪ, u, e, o。用例を表 11-1 にあげる。

表 11-1 歯茎閉鎖音 t

項目番号 単語	21	86	11	233	60	85	257	137
地域	田	歌	手	おもて	鳥	音	畑	蛸
①小野津	ta[:	[?u]ta	ti[:	[u]mu[ti	[tu]i	[?u]tu	[pa]te[:	to[:
②志戸桶	ta[:	[?u]ta	ti[:	[u]mu[ti	[tu]i	[?u]tu	[pa]te[:	to[:
③塩道	t <sup>h</sup> a[:	?u[ta	ti[:	[u]mu[ti	tu[i	u[tu	pa[te]:	to[:
④坂嶺	t <sup>h</sup> a[:	?u[ta	ti[:	[?u]mu[ti	tu[i	?u[tu	pa[te]:	to[:
⑤阿伝	ta[:	u[ta	ti[:	[?u]mu[ti	tu[i	u[tu	pa[te]:	to[:
⑥上嘉鉄	t <sup>h</sup> a[:	?u[ta	ti[:	[?u]mu[ti	t <sup>h</sup> u[ri	?u[tu	ha[te]:	t <sup>h</sup> o[:
⑦湾	t <sup>h</sup> a[:	?u[ta	t <sup>h</sup> i[:	[?u]mu[ti	t <sup>h</sup> u[ri	?u[tu	ha[te]:	NR
⑧中里	t <sup>h</sup> a[:	?u[ta	t <sup>h</sup> i[:	[?u]mu[ti/ [?umuti	t <sup>h</sup> u[i	?u[tu	ha[te]:	to[:/ [to:
⑨荒木	t <sup>h</sup> a[:	u[ta	ti[:	[u]mu[ti	tu[ri/o[ri	o[to	ha[te]:	to[:

喜界島方言の ta は東京方言の ta に, ti (北部)・ti (南部) は東京方言の te に, tu は東京方言の tu と to に対応する。te, to は tae, tao などの連母音に由来する音で, 長音であらわれる。後に述べるように, 東京方言の tçi に対応する音は, 喜界島でも tçi と発音されるので, 「手」と「血」は, 喜界島北部で ti: と tçi: で, 南部で ti: と tçi: で区別されている。同じく, 東京方言の tsu に対応する音は, 喜界島方言では t<sup>2</sup>u または ts<sup>2</sup>u で発音されるので, 「鳥」の第1拍目と「面」の第1拍目は, tu と t<sup>2</sup>u, または tu と ts<sup>2</sup>u で区別されている。ただし,



地域によっては「面」の t<sup>2</sup>u の喉頭化が弱まっている場合がある。その場合は「鳥」の tu と「面」の tu がほとんど同じ音になってしまう（詳しくは破擦音 ts の箇所参照）。

次に、喉頭化した t<sup>2</sup>は母音 a, i, u の前に立つ。「面」「綱」などの t<sup>2</sup>u は、地域によっては ts<sup>2</sup>u と発音されたり、t<sup>2</sup>u の喉頭化が弱まって tu に発音されたりすることもある。「鳥」の tu と「面」の t<sup>2</sup>u との関係は、上に述べたとおり。t<sup>2</sup>a, t<sup>2</sup>i は「一つ」「二つ」「二人」などの語にあらわれる。これらはもと語頭にあった pi(φi), pu(φu)が脱落した際に t に喉頭化音が生じたものである。

表 11-2 歯茎閉鎖音 t<sup>2</sup>

項目番号 地域	99	121	2-15	2-178	2-180	2-189
	面	綱	膝小僧	一つ	二つ	二人
①小野津	ts <sup>2</sup> u[ra	tu[na	tsu[bu]çi	--	--	--
②志戸桶	tçu[ra	ts <sup>2</sup> u[na	[tçu]bu[çi	[t <sup>2</sup> i]tçu	[t <sup>2</sup> a:]tçu	[t <sup>2</sup> a]i
③塩道	tu[ra	t <sup>2</sup> u[na	[t <sup>2</sup> u]bu[çi	[t <sup>2</sup> i]tu	[t <sup>2</sup> a:]tu	[t <sup>2</sup> ai
④坂嶺	tsu[ra	ts <sup>2</sup> u[na/ tu[na	[tsu]bu[çi	[t <sup>2</sup> i]tsu	[t <sup>2</sup> a]:[tsu	t <sup>2</sup> a[i
⑤阿伝	tu[ra	t <sup>2</sup> u[na	[t <sup>2</sup> u]bu[çi	--	--	--
⑥上嘉鉄	t <sup>2</sup> u[ra	t <sup>2</sup> u[na	[t <sup>2</sup> u]bu[çi	[t <sup>2</sup> i]tu	[t <sup>2</sup> a]:[tu	t <sup>2</sup> a[ri
⑦湾	tu[ra	tsu[na/ tu[na	[t <sup>2</sup> u]bu[çi	[t <sup>2</sup> i]tu	[t <sup>2</sup> a]:[tu	t <sup>2</sup> a[ri
⑧中里	t <sup>2</sup> u[ra	na[wa (縄)	[t <sup>2</sup> u]bu[çi	[t <sup>2</sup> i]tu	[t <sup>2</sup> a]:[t <sup>2</sup> u	t <sup>2</sup> a[i
⑨荒木	tsu[ra	tsu[na	[tsu]bu[çi/ [tsubuçi	[t <sup>2</sup> i]tsu	[t <sup>2</sup> a]:[tsu	t <sup>2</sup> a[ri

d は共通語の d に対応している。後接する母音は a, i, ɪ, u, e。用例を表 12 にあげる。

表 12 歯茎閉鎖音 d

項目番号 地域	46	212	55	73	178	217	58
	枝	涎	袖	筆	角(かど)	踊り	竹
①小野津	[ju]da	ju[da]i	[su]di	pu[di	[ka]du	u[du]i	[de]:
②志戸桶	[ji]da/ [ju]da	ju[da]i	[su]di	[φu]dɪ	[ka]du	?u[du]i	[de]:
③塩道	ju[da	[ju]da[i	su[di	pu[di/φu[di	ka[du	[wu]du[i	de[:
④坂嶺	ji[da	[ju]da[i	--	--	ha[du	[gu]du[i	de[:
⑤阿伝	ju[da	[ju]da[i	su[di	φu[di	ka[du	[gu]du[i	de[:
⑥上嘉鉄	ju[da	[ju]da[ri	su[di	φu[di	k <sup>h</sup> a[du	[?u]du[ri	de[:
⑦湾	ju[da	[ju]da[ri	su[di	φu[de	k <sup>h</sup> a[du	[wu]du[ri	de[:
⑧中里	ji[da/ ju[da	[ju]da[ri	su[di	φu[di	k <sup>h</sup> a[du/ su[mi(隅)	[?u]du[i	de[:
⑨荒木	ju[da	[ju]da[ri	su[di	φu[di	ka[du	[u]du[ri	de[:

dは基本的に語頭には立たないが、「竹」という語はどの地域でも de: と発音される。東京方言との対応関係は、喜界島方言の da が東京方言の da に、di (北部)・di (南部) が東京方言の de に、du が東京方言の do に対応するという関係である。喜界島中・南部では、東京方言の z が d であらわれるが、これについては次の z の箇所述べる。

(7) 歯茎摩擦音 s z

歯茎摩擦音には、s, z がある。s は東京方言の s に対応する位置にあらわれる。後接母音は a, u, e, o。後接母音が i の場合には、s は歯茎後部摩擦音の ɕ になる。用例を表 13-1, 13-2 にあげる。

表 13-1 歯茎摩擦音 s

項目番号 単語	45	168	2-60	27	200	55	47
地域	皿	笠 傘	下駄	巢	煤	袖	酒
①小野津	[sa]ra	ha[sa	?as[sa]:	su[:	su[su	[su]di	[se]:
②志戸桶	[sa]ra	ha[sa	[?a]ssa:	su[:	su[su	[su]di	[se]:
③塩道	sa[ra	ha[sa	?aɕ[ɕa]:	su[:	[su]su	su[di	se[:/ɕe]:
④坂嶺	sa[ra	ha[sa	[?a]s[sa]:	su[:	[su]su	--	se[:
⑤阿伝	sa[ra	ha[sa	?as[sa	su[:	--	su[di	se[:
⑥上嘉鉄	sa[ra/su:]da[ra	ha[sa	?as[sa	[su]:	su[su	su[di	se[:
⑦湾	[so]:[da]ra	ha[sa	?as[sa	su[:	[su]su	su[di	se[:
⑧中里	sa[ra/[sara	ha[sa	?a[ssa	su[:	su[su	su[di	se[:/ɕe]:
⑨荒木	sa[ra	ka[sa	?as[sa]	su[:	su[su	su[di	ɕe[:

表 13-2 歯茎摩擦音 s, 歯茎後部摩擦音 ɕ

項目番号 単語	123	2-40	129	161	40	197
地域	竿	兄弟	島	汁	牛	汗
①小野津	[so]:de[:	[k'o]:[de]:	ɕi[ma	ɕi[ru	[?u]ɕi	a[ɕi
②志戸桶	[de]:(竹の意)	ji[:ri(男兄弟)/ [?u]tu[ɕa(女兄弟)	ɕi[ma	ɕi[ru	[?u]ɕi	?a[ɕi
③塩道	[so]:[de]:/ de[:	[ɕo]:[de]:	ɕi[ma	ɕi[ru	u[ɕi	a[ɕi
④坂嶺	sa[o	[so]:[de]:	ɕi[ma	ɕi[ru	?u[ɕi	?a[ɕi
⑤阿伝	de[:	[so]:[de]:	ɕi[ma	ɕi[ru	u[ɕi	?a[ɕi
⑥上嘉鉄	de[:/ [de]:[ma]:(釣り竿)	[so]:[de]:	ɕi[ma	ɕi[ru	?u[ɕi	?a[ɕi
⑦湾	[so]:[de]:	[so]:[de]:	ɕi[ma	ɕi[ru	?u[ɕi	?a[ɕi
⑧中里	--	[so]:[de]:	ɕi[ma	ɕi[ru	?u[ɕi	?a[se
⑨荒木	de[:	[so]:[de]:	ɕi[ma	ɕi[ru	u[ɕi	a[ɕi

s は地域による違いが比較的少ない。ただし、塩道では、他の地域の sa, se, so を  $\text{ɕa}$ ,  $\text{ɕe}$ ,  $\text{ɕo}$  と発音する傾向がある（表の網掛け部分）。表 13-2 の「汗」は、東京方言との対応関係からいうと、北部では  $\text{ʔasi}$ 、南部では  $\text{ʔasi}$  が予想されるところだが、実際には北部でも南部でも  $\text{ʔaɕi}$  になっている。ちなみに、言語地理学定例研究会(1986)では、「汗」に対して長嶺で  $\text{ʔaɕi}$ 、早町・中熊で  $\text{ʔasi}$ 、池治で  $\text{ʔasi}$ ,  $\text{ʔaɕi}$  が報告されている（ただし、「研究者個人ごとの表記方法の若干のくいちがいをふくんでいるばあいがある」(p.7)という）。

次に、z は東京方言の z に対応する位置にあらわれる。後接母音は a, i, u。i の前では歯茎後部の  $\text{zi}/\text{ɕi}$  であらわれる。表 14-1, 14-2 に例をあげる。

表 14-1 歯茎摩擦音 z

項目番号 単語	67	2-29	2-90	52	49	2-168	43
地域	匂い (かざ)	ほくろ (あざ)	いさり	水 (みづ)	傷 (きず)	去年 (こそ)	溝 (みぞ)
①小野津	[ha]za	[ʔa]za	ʔi[za]i	[mi]zu	[kʰi]zu	hu[ɕu	mi[zu]:
②志戸桶	[ha]za	[ʔa]ɕa	i[ɕa]i	mi[ɕu	[kʰi]zu	hu[ɕu	mi[zu]:
③塩道	NR	ʔa[da	[ʔi]da[ri	mi[du	kʰi[zu	hu[du//ɕu[du	mi[zu]:
④坂嶺	--	a[za	[ʔi]za[i	--	kʰi[ɕu	ɕu[zu/[ɕu	mi[zu]:
⑤阿伝	ha[da	ʔa[da	[ʔi]da[i	mi[du	ɕi[du	--	mi[zu]:
⑥上嘉鉄	ha[da	ʔa[za	[ʔi]da[ri	mi[du	ɕi[du	ɕu[du	mi[zu]:
⑦湾	--	ʔa[da	[ʔi]da[ri	mi[du	ɕi[du	hu[du	mi[zu]:
⑧中里	ha[da	a[da	[ʔi]da[i	mi[zu/ mi[du	ɕi[zu	ɕu[du	mi[zu]:
⑨荒木	ha[da	ʔa[za	[ʔi]za[ri	mi[zu	ki[zu	ɕu[zu	mi[zu]:

表 14-2 歯茎摩擦音 z, 歯茎後部摩擦音 ɕ

項目番号 単語	2-134	96	2-50	213	2-140	75
地域	杵	肘 (ひぢ)	妻 (とじ)	麴 (かうぢ)	膳	風
①小野津	[ʔa]zu[mu	[pi]zi/ [ɕi]zi	[tʰu]zi	[ho]:[zi	[ɕi]N	[ha]zi
②志戸桶	[ʔa]ɕu[mu	pi[zi	tʰu[ɕi	[ho]:[zi	ɕi[nu	[ha]zi
③塩道	ʔa[ɕu]mu	pi[zi	tʰu[ɕi	ho[:]zi	ɕi[N	ha[di
④坂嶺	ʔa[zu]mu	pi[ɕi	tu[ɕi	ho[:]zi	ɕi[N/ [ɕi]N	--
⑤阿伝	--	ɕi[zi	tʰu[ɕi	[ho]:[zi	--	ha[di
⑥上嘉鉄	ʔa[di]mu (縦杵) [jamatu]ʔa[di]mu (横杵)	ɕi[zi	tʰu[ɕi	[ho]:[zi	ɕi[N	ha[di
⑦湾	ʔa[du]mu	ɕi[zi	tʰu[ɕi	[ho:]ɕi	ɕi[N	--
⑧中里	ʔa[du]mu (縦)	ɕi[zi	tʰu[ɕi	[ho:]zi	ɕi[N	ha[di
⑨荒木	ʔa[ɕu]mu (縦)/ jama[tu]a[ɕu]mu (横)	ɕi[zi	tu[ɕi	[ho:]zi / ho[:]zi	ɕi[N	ha[zi

z は地域による発音の差が大きい。概して、小野津、坂嶺、荒木では z または dz で発音されることが多く、志戸桶では歯茎後部の z/ɟ で、塩道、阿伝、上嘉鉄、湾、中里では d (表の網掛け部分) で発音されることが多い (ただし、表 14-1 の「溝」のみ、各地 zu ないし zu で発音されている)。その結果、塩道、阿伝、上嘉鉄、湾、中里では、東京方言の da と za, do と zu と zo がそれぞれ合流して da, du になっている。例えば、表 12 の juda (枝), judari (涎) の da と表 14 の kada (匂い), ?ada (あざ=ほくろ), idari (いざり) の da は同じ音、また、表 12 の kadu (角), wuduri・?uduri (踊り) の du と表 14 の midu (水), tɕidu (傷), φudu・hudu (こぞ=去年) の du も同じ音である。

それだけでなく、これらの地域では「風」も hadi となっていて (他の地域では ha□i), 表 12 の sudi (袖), φudi (筆) の di と hadi (風) の di が同じ発音になっている。このことから、塩道、阿伝、上嘉鉄、湾、中里では母音の変化 (e>ɪ>i) が起きる前に z>d の変化が起きていたことが分かる。

筆 (ふで) : \*pude > \*φude > φudi

風 (かぜ) : \*kaze > \*haze > \*hade > hadi

(母音の変化が先行した場合, \*kaze > \*haze > \*haze > hazi となり, hadi は生じない)

表 14-2 の「膳」の語頭音も ze に由来するが、塩道、阿伝、上嘉鉄、湾、中里でも \*din とはならず、ɟin となっている。語頭という環境が関係している可能性もあるが、おそらく、この語が喜界島方言に取り入れられた時期が、z>d の変化が起きた後だったからではないかと考えられる。

#### (8) 歯茎破擦音 ts<sup>2</sup>(ts), tɕ<sup>2</sup>(tɕ)

歯茎破擦音には ts<sup>2</sup>(ts), tɕ<sup>2</sup>(tɕ)がある。ts<sup>2</sup>(ts) は母音 u の前にあらわれ、東京方言の ts に対応している。用例を表 15-1 にあげる。

ts<sup>2</sup> (ts) の発音も地域により差が大きく、北部の小野津、志戸桶や中部の坂嶺、南部の荒木では ts<sup>2</sup>u で発音されることが多いのに対し、中部の塩道、阿伝、上嘉鉄や南部の湾、中里では t<sup>2</sup>u で発音されることが多い。同一地域でも ts<sup>2</sup>u と t<sup>2</sup>u を揺れており、ts<sup>2</sup>u と t<sup>2</sup>u の中間的な発音も多く聞かれる。また、喉頭化が弱まっている場合もある。

表 15-1 歯茎破擦音 ts<sup>2</sup> (ts)

項目番号 地域	99	121	141	183	219
	面	綱	角(つの)	松	鯉
①小野津	ts <sup>2</sup> u[ra	tu[na	tsu[nu	ma[tsu	ka[tsu:]
②志戸桶	tɕu[ra	ts <sup>2</sup> u[na	ts <sup>2</sup> u[nu	ma[ts <sup>2</sup> u	ka[tsu:]
③塩道	tu[ra	t <sup>2</sup> u[na	tu[nu	[ma]tu	[ka]tsu[o
④坂嶺	tsu[ra	ts <sup>2</sup> u[na / tu[na	tsu[nu	[ma]tɕu	[k <sup>h</sup> a]tsu[:
⑤阿伝	tu[ra	t <sup>2</sup> u[na	t <sup>2</sup> u[nu	--	ka[tsu]o
⑥上嘉鉄	t <sup>2</sup> u[ra	t <sup>2</sup> u[na	t <sup>2</sup> u[nu	[ma]tsu	[k <sup>h</sup> a]tu[:
⑦湾	tu[ra	tsu[na / tu[na	--	[ma]tu / ma]tsu	[k <sup>h</sup> a]tu[: / k <sup>h</sup> a]tsu[:
⑧中里	t <sup>2</sup> u[ra	na[wa (縄)	t <sup>2</sup> u[nu	ma[tu	[katso
⑨荒木	tsu[ra	tsu[na	tsunu	[ma]tsu	ka[tsuo

(6) の t の箇所ですべてのように、喜界島方言では「鳥」が turi・tui と発音される。この tu は非喉頭化音の tu であり、また tsu と交替しない。この点で「面 (t<sup>2</sup>ura・ts<sup>2</sup>ura)」の t<sup>2</sup>u, ts<sup>2</sup>u とは区別される。ただし、「面」の t<sup>2</sup>u の喉頭化が弱まっている場合 (表 15-2 の綱掛け部分) には、「面」の tu と「鳥」の tu との区別が難しくなる。

表 15-2 「面」と「鳥」

項目番号 地域	99	121	141	60
	面	綱	角	鳥
①小野津	ts <sup>2</sup> u[ra	tu[na	tsu[nu	[tu]i
②志戸桶	tɕu[ra	ts <sup>2</sup> u[na	ts <sup>2</sup> u[nu	[tu]i
③塩道	tu[ra	t <sup>2</sup> u[na	tu[nu	tu[i
④坂嶺	tsu[ra	ts <sup>2</sup> u[na / tu[na	tsu[nu	tu[i
⑤阿伝	tu[ra	t <sup>2</sup> u[na	t <sup>2</sup> u[nu	tu[i
⑥上嘉鉄	t <sup>2</sup> u[ra	t <sup>2</sup> u[na	t <sup>2</sup> u[nu	t <sup>h</sup> u[ri
⑦湾	tu[ra	tsu[na / tu[na	--	t <sup>h</sup> u[ri
⑧中里	t <sup>2</sup> u[ra	na[wa (縄)	t <sup>2</sup> u[nu	t <sup>h</sup> u[i
⑨荒木	tsu[ra	tsu[na	tsunu	tu[ri / to[ri

tɕ<sup>2</sup>(tɕ) は母音 i の前にあらわれ、東京方言の tɕ に対応している。また、地域によっては東京方言の k(i) にも対応している。表 15-3 の「傷」「肝」「息」「箸」などがその例である (表の綱掛け部分)。東京方言の ki に対応する音が tɕi であらわれるのは、中部、南部の塩道、坂嶺、阿伝、上嘉鉄、湾、中里の特徴で、北部の小野津、志戸桶では東京方言の ki に対応する音は k<sup>2</sup>i である。

表 15-3 歯茎後部破擦音 tɕ

項目番号 地域	2	66	119	49	100	158	245
	血	道	鉢	傷	肝	息	箒
①小野津	[tɕ <sup>2</sup> i:]	[mi]tɕi	pa[tɕi	[k <sup>2</sup> i]zu	k <sup>2</sup> i[mu	ʔi[ki	[ho]:[ki
②志戸桶	[tɕi:] / [tɕi:	[mi]tɕi	[pa]tɕi	[k <sup>2</sup> i]zu	k <sup>2</sup> i[mu	ʔi[ki	[po]:[ki
③塩道	tɕ <sup>2</sup> i:	mi[tɕi	pa[tɕi	k <sup>2</sup> i[zu	tɕ <sup>2</sup> i[mu	[ʔi]tɕi	po[:]tɕi
④坂嶺	tɕi:	--	[pa]tɕi	k <sup>2</sup> i[dzu	tɕi[mu	[ʔi]tɕi	po[:]tɕi
⑤阿伝	tɕi:	mi[tɕi	[ha]tɕi	tɕi[du	tɕi[mu	[ʔi]tɕi	po[:]tɕi
⑥上嘉鉄	tɕi:	mi[tɕi	ha[tɕi	tɕi[du	tɕi[mu	[ʔi]tɕi	ho[:]tɕi
⑦湾	tɕ <sup>2</sup> i:	mi[tɕi	[ha]tɕi	tɕi[du	--	[ʔi]tɕi	ho[:]tɕi
⑧中里	tɕ <sup>2</sup> i:] / [tɕ <sup>2</sup> i:	mi[tɕi	ha[tɕi / [ha]tɕi	tɕi[zu	tɕ <sup>2</sup> i[mu	[ʔi]tɕi	ho[:]tɕi
⑨荒木	[a:]tɕi:] / tɕi:	mi[tɕi	ha[tɕi	ki[zu	tɕi[mu	[ʔi]ki / [ʔi]tɕi	ho[:]tɕi

tɕ の後には、母音 a, u, o が続くこともある。表 15-4 に用例をあげる。「明日」「人」は Xi + tV (X は任意の子音, V は任意の母音) という環境で t が口蓋化を起し、tɕa, tɕu となったもの、「子供たち」「きゅうり」は、k<sup>2</sup>が tɕ になったものである。「包丁」の tɕo は共通語的な発音かと思われる。

表 15-4 歯茎後部破擦音 tɕ

項目番号 地域	235	2-44	92	172	246	148
	明日	子供たち	人	糸	きゅうり	包丁
①小野津	a[tɕa	[k <sup>w2</sup> a]N[k <sup>2</sup> a:] / [wa]rabiN[k <sup>2</sup> a:]	[ts <sup>2</sup> u	i[tu / [i]tsu:]	NR	[ɸo]:[tɕa:]
②志戸桶	ʔa[tɕa	[k <sup>w2</sup> a]N[tɕa:] / [wa]rabiN[tɕa:]	[tɕ <sup>2</sup> u	[ʔi]tu	k <sup>2</sup> i[u]i	[ho]:[tɕu:] / [ho]:[tɕa:]
③塩道	a[tɕa	[k <sup>2</sup> a]N[tɕa:] / [wa]rabiN[tɕa:]	[tɕ <sup>2</sup> u	i[tɕu:] / i[tsu:]	[tɕi]u[i	ha[ta]na
④坂嶺	ʔa[tɕa	[k <sup>2</sup> a]N[tɕ <sup>2</sup> a:] / [warabi]N[tɕ <sup>2</sup> a:]	[tɕ <sup>2</sup> u	ʔi[tu:]	--	[p <sup>h</sup> o]:[tɕo:] / ha[ta]na
⑤阿伝	a[tɕa	[k <sup>2</sup> a]N[tɕa:] / [wa]rabiN[tɕa:]	[tɕ <sup>2</sup> u	i[tɕu:]	[tɕ <sup>2</sup> i]u[i	--
⑥上嘉鉄	ʔa[tɕ <sup>2</sup> a	[k <sup>2</sup> a]N[tɕa:]	tɕ <sup>2</sup> u	ʔi[tɕu:]	k <sup>2</sup> u[:]ri	ha[ta]na
⑦湾	ʔa[tɕa	[k <sup>2</sup> a]N[tɕa:] / [warabi]N[tɕa:]	tɕ <sup>2</sup> u	ʔi[tɕu:]	[tɕ <sup>2</sup> u]:[ri	[ho]:[tɕo:]
⑧中里	ʔa[tɕa	[k <sup>2</sup> a]N[tɕa:] / [warabi]N[tɕa:]	[tɕ <sup>2</sup> u?	ʔi[tɕu:]	[tɕu]:[ri	ha[ta]na
⑨荒木	a[tɕa	[k <sup>w2</sup> a]N[tɕa:] / [warabi]N[tɕa:]	tɕu?	i[tɕu:]	[k <sup>2</sup> u:ri / k <sup>2</sup> u[:]ri	ha[ta]na

以上の歯茎音につき、喜界島諸方言の状態を整理しておこう（表 16-1, 16-2）。まず、喜界島北部の小野津、志戸桶では、「血」と「肝」の第1拍目が  $t\zeta^?i$  と  $k^?i$  で区別されるが、それ以外の地域ではどちらも  $t\zeta i$  と発音され、区別がない。また、「面」の第1拍目が小野津、志戸桶、坂嶺、荒木では  $ts^?u$  と発音されるのに対し、塩道・阿伝・上嘉鉄・湾・中里では  $t^?u$  と発音される。次に、塩道、阿伝、上嘉鉄、湾、中里では、 $d$  と  $z$  が区別されず、 $z$  が  $d$  に合流している。この点で他の方言と大きく異なる。中部の坂嶺は、「血」と「肝」の第1拍目がどちらも  $t\zeta i$  と発音される点では塩道などの方言と共通しているが、「面」の第1拍目を  $ts^?u$  と発音する点や  $d$  と  $z$  の区別がある点では、小野津、志戸桶、荒木と共通している。従って、ここでは坂嶺と荒木をひとまとめにして整理した。

表 16-1

	田	手	血	肝	鳥	面	皿	島	汗	巢	袖
小野津・志戸桶	ta	ti	$t\zeta^?i$	$k^?i$	tu	$ts^?u$	sa	$\zeta i$		su	
塩道・阿伝・上嘉鉄・湾・中里	ta	ti	$t\zeta^?i \cdot t\zeta i$		tu	$t^?u$	sa	$\zeta i$		su	
坂嶺・荒木	ta	ti	$t\zeta^?i \cdot t\zeta i$		tu	$ts^?u$	sa	$\zeta i$		su	

表 16-2

	枝	筆	かど (角)	水	傷	こぞ (昨年)	あざ かざ(匂)	風	肘	とじ (妻)
小野津	da	di	du	zu/ $\zeta u$		za	$\zeta i$			
志戸桶	da	di	du	zu/zu/ $\zeta u$ / $\zeta u$		$\zeta a$ / $\zeta a$	$\zeta i$ / $\zeta i$			
塩道・阿伝・上嘉鉄・湾・中里	da	di	du			da	di	$\zeta i$ / $\zeta i$		
坂嶺・荒木	da	di	du	zu/ $\zeta u$		za	$\zeta i$ / $\zeta i$			

(9) 歯茎鼻音 n

歯茎鼻音には  $n$  があり、東京方言の  $n$  に対応している。後接母音は、 $a$ ,  $i$ ,  $\text{ɪ}$ ,  $u$ ,  $e$ 。表 17-1, 17-2 に用例をあげる。

$n$  は母音  $i$  の前では、口蓋化した  $n^j$  になる。 $n^j i$  と  $ni$  の各地の状況と音韻的解釈については、母音の箇所述べたとおりである。 $n^j$  の後に母音  $a$ ,  $u$  が続くこともある（表 17-3）。「蝮」「昨日」は  $Xi+nV$  という環境で  $n$  が口蓋化を起こしたもの、「麦わら」は  $mu\eta i w a r a > mun^j i w a r a > munn^j a r a$  のような変化を起こしたものと考えられる。

表 17-1 歯茎鼻音 n

項目番号 地域	10	70	116	140	248	185
	名	鼻	糠	蚤	命	苗
①小野津	[na]:	[pa]na	nu[ka	nu[mi	[ʔi]nu[ɕi	ne[:
②志戸桶	[na]:	[pa]na	nu[ka	nu[mi	[ʔi]nu[ɕi	ne[:
③塩道	na[:	pa[na	nu[ka	[nu]mi	i[nu]ɕi	ne[:
④坂嶺	na[:	--	nu[ka	[nu]mi	ʔi[nu]ɕi	ne[:
⑤阿伝	na[:	p <sup>h</sup> a[na	nu[ka	[nu]mi	i[nu]ɕi	ne[:
⑥上嘉鉄	na[:	ha[na	nu[ka	[nu]mi	ʔi[nu]ɕi <sub>y</sub>	ne[:
⑦湾	[na]ma[i	ha[na	nu[ka	[nu]mi	ʔi[nu]ɕi	na[e
⑧中里	na[:	ha[na	--	[nu]mi	ʔi[nu]ɕi	--
⑨荒木	[na]ma[i	ha[na	nu[ka	nu[mi	i[no]ɕi	na[e

表 17-2 歯茎鼻音 n

項目番号 地域	16	36	153	24	89	102
	荷	蟹	鬼	根	胸	骨
①小野津	[n <sup>i</sup> ]mu[tsu	ga[n <sup>i</sup> ]:	ʔu[n <sup>i</sup>	nɪ[:	[mu]nɪ	pu[nɪ/ɸu[nɪ
②志戸桶	n <sup>i</sup> [:	ga[n <sup>i</sup> ]:	[ʔu]n <sup>i</sup>	nɪ[:	[mu]nɪ	pu[nɪ]:
③塩道	n <sup>i</sup> [:	ga[n <sup>i</sup> ]:	ʔu[n <sup>i</sup>	[hiŋ] pi[n <sup>i</sup> ]: (木の髭)	mu[ni	ɸu[ni]:
④坂嶺	n <sup>i</sup> [:	ga[n <sup>i</sup> ]:	ʔu[n <sup>i</sup>	ni[:/[mu]tu(元)	mu[ni	[p <sup>h</sup> u]ni
⑤阿伝	--	[gai]ŋ	u[n <sup>i</sup>	ni[:	mu[ni	ɸu[ni
⑥上嘉鉄	n <sup>i</sup> [:	ga[i]:	ʔu[n <sup>i</sup>	[ni]mu[tu(根元)	mu[ni	[ɸu]ni
⑦湾	n <sup>i</sup> [:	ga[n <sup>i</sup> ]:	o[n <sup>i</sup>	nɪ[:	mu[nɪ	[ɸu]nɪ
⑧中里	n <sup>i</sup> [:	ga[n <sup>i</sup> ]:	ʔu[n <sup>i</sup>	nɪmutu	mu[nɪ	[ɸu]nɪ
⑨荒木	n <sup>i</sup> [:	ga[n <sup>i</sup> ]:	o[n <sup>i</sup>	mu[tu	mu[ne	[ɸu]nɪ

表 17-3 歯茎鼻音 n

項目番号 地域	136	2-162	2-101	234
	蜷	今	麦わら	昨日
①小野津	NR	n <sup>j</sup> a[ma	[mu]nn <sup>j</sup> a[ra]:	ki[n <sup>j</sup> u]:
②志戸桶	[ʔa]ma[n <sup>j</sup> a]:	n <sup>j</sup> a[ma	[mu]nn <sup>j</sup> a[ra]:	k <sup>ʔ</sup> i[n <sup>j</sup> u]:
③塩道	mi[n <sup>j</sup> a	[n <sup>j</sup> a]ma	[mu]nn <sup>j</sup> a[ra]:	ɕi[n <sup>j</sup> u]:
④坂嶺	mi[n <sup>j</sup> a(巻き貝)	[n <sup>j</sup> a]ma	[mun]n <sup>j</sup> a[ra]:	ɕi[n <sup>j</sup> u]:
⑤阿伝	--	--	[mu]nn <sup>j</sup> a[ra]:	ɕi[ju]:
⑥上嘉鉄	mi[ja(貝の総称)	[na]ma	[mun]n <sup>j</sup> a[ra]:	ɕi[ju]:
⑦湾	--	[n <sup>j</sup> a]ma	[mun]n <sup>j</sup> a[ra]:	ɕ <sup>ʔ</sup> i[n <sup>j</sup> u]:
⑧中里	mi[n <sup>j</sup> a	[n <sup>j</sup> a]ma	[mun]n <sup>j</sup> a[ra]:	[ɕi]n <sup>j</sup> u]:
⑨荒木	mi[n <sup>j</sup> a	[n <sup>j</sup> a]ma	mu[gi]wa[ra]	ɕʔi[n <sup>j</sup> u]:



(10) 齒茎弾音 r

齒茎弾音には r がある。後接母音は a, i, u, e, o。語頭には立たない。以下に用例をあげる。

表 18-1 齒茎弾音 r

項目番号 単語	45	99	218	126	152	256
地域	皿	面	鎖	夜	色	たらい
①小野津	[sa]ra	ts <sup>2</sup> u[ra	[k <sup>2</sup> usari/ [k <sup>2</sup> u]sa[ri	ju[ru	ʔi[ru	[ta]re:]
②志戸桶	[sa]ra	tɕu[ra	k <sup>2</sup> u[sari	ju[ru	ʔi[ru	ta[re:]
③塩道	sa[ra	tu[ra	[k <sup>2</sup> u]sa[ri	ju[ru	i[ru	ta[re:]
④坂嶺	sa[ra	tsu[ra	[ku]sa[i	ju[ru	ʔi[ru	ta[re:]
⑤阿伝	sa[ra	tu[ra	k <sup>2</sup> u[sari	ju[ru	i[ru	[bin]da[re:]
⑥上嘉鉄	sa[ra	t <sup>2</sup> u[ra	NR	ju[ru	ʔi[ru	t <sup>h</sup> a[re:]
⑦湾	[so]:[da]ra	tu[ra	NR	ju[ru	--	t <sup>h</sup> a[re:]
⑧中里	sa[ra]/[sara	t <sup>2</sup> u[ra	[kusari	ju[ru	ʔi[ru	ta[re:]
⑨荒木	sa[ra	tsu[ra	(k <sup>2</sup> u[sari)	juru	i[ru	ta[re:]

表 18-2 齒茎弾音 r

項目番号 単語	2-45	2-22
地域	親戚	げんこつ, 握りこぶし
①小野津	[ɸa]ro:[ɸi:]	[tekk <sup>2</sup> o:]
②志戸桶	[ha]ro:[ɸi:]	[t <sup>h</sup> i]kko:]
③塩道	p <sup>h</sup> a[ro]:ɸi/ [p <sup>h</sup> aro:ɸi]N[tɕa:]	[t <sup>h</sup> i]ku[ro:]
④坂嶺	pa[ro]:[zi:] (単数)/ pa[rozi]N[tɕ <sup>2</sup> a:] (複数)	[t <sup>h</sup> ik]ko:]
⑤阿伝	[ɸa]ro:[ɸi	t <sup>h</sup> ik[ko:] / k <sup>2</sup> a[ɸa
⑥上嘉鉄	[haro]:[ɸi:] / [so:de]N[tɕa:]	t <sup>h</sup> ik[ko:]
⑦湾	[haro]:[ɸi:]	t <sup>h</sup> ik[ko:]
⑧中里	[haro]:[ɸi:]	t <sup>h</sup> ik[ko:]
⑨荒木	ha[ro]:[ɸi:]	[t <sup>h</sup> i]kku[ro:]

4. 3 軟口蓋音

(11) 軟口蓋音 k k<sup>2</sup> g ŋ

軟口蓋音には閉鎖音の k, k<sup>2</sup>, g と鼻音の ŋ がある。

k, k<sup>2</sup>は母音 a, i, ɪ, u, e, ɛ, o の前に立つ。表 19-1~19-4 に用例をあげる。(8) 齒茎破擦音の箇所でも述べたように、喜界島北部では「傷」「肝」の第1拍目が喉頭化した k<sup>2</sup>i で発音され、中・南部では tɕi と発音される。その結果、北部では「傷」「肝」の第1拍目

と「怪我」の第1拍目が  $k^2i$  と  $kɪ$  で区別され、中・南部では  $tɕi$  と  $ki$  で区別されることになる。「怪我」の  $kɪ$  が  $ki$  に変化したのに伴って、中・南部では「傷」「肝」の  $k^2i$  の子音が硬口蓋の  $tɕ$  の方向へ逃げた格好になっている。

小野津, 志戸桶  $k^2i$  (傷) :  $kɪ$  (怪我)  
( \*  $k^2i$  (傷) :  $ki$  (怪我))  
中・南部  $tɕi$  (傷) :  $ki$  (怪我)

「釘」「雲」などの第1拍目（東京方言では  $ku$ ）と「暦」「声」などの第1拍目は、どの地域でも喉頭化音の  $k^2u$  と非喉頭化音の  $ku$  で区別されている（表 19-3）。

表 19-1 軟口蓋閉鎖音 k

項目番号 地域	37 粥	90 型	224 瓦	229 鏡	116 糠	117 墓
①小野津	ka[i]:	[ka]ta	ka[wa]ra	[ka]ga[mi]	nu[ka	[pa]ka
②志戸桶	ka[i]:	[ka]ta	[ka]wa[ra	[ka]ga[mi]	nu[ka	[pa]ka
③塩道	ka[i	ka[ta	ka[wa]ra	[ka]ga[mi]	nu[ka	pa[ka/ [pa]kan[me]:
④坂嶺	ka[ju	ka[ta	--	[ka]ga[mi]	nu[ka	pa[ka/φa[ka
⑤阿伝	ka[i	ka[ta	ka[wa]ra	[ka]ga[mi]	nu[ka	φa[ka
⑥上嘉鉄	[k <sup>h</sup> a]i:	ka[ta	ka[wa]ra	[k <sup>h</sup> a]ga[mi]	nu[ka	ha[ka
⑦湾	k <sup>h</sup> a[i	--	k <sup>h</sup> a[wa]ra	[k <sup>h</sup> a]ga[mi]	nu[ka	ha[ka
⑧中里	k <sup>h</sup> a[i/ k <sup>h</sup> a[ju	k <sup>h</sup> a[ta	[kawara	[ha]ga[mi/ [kagami	--	ha[ka
⑨荒木	[ka]i:	ka[ta	ka[wa]ra	ka[ga]mi	nu[ka	ha[ka

表 19-2 軟口蓋閉鎖音 k

項目番号 地域	78 霧	49 傷	125 時	158 息	148 怪我	247 情け
①小野津	[k <sup>2</sup> iri/ ka[su]mi	[k <sup>2</sup> i]zu	[tu]ki	ʔi[ki	kɪ[ga	[na]sa[kɪ
②志戸桶	mu[ja	[k <sup>2</sup> i]zu	tu[ki	ʔi[ki	kɪ[ga	[na]sa[kɪ
③塩道	mu[ja	k <sup>2</sup> i[zu	NR	[ʔi]tɕi	ki[ga	na[sɑ]ki
④坂嶺	--	k <sup>2</sup> i[ɕu	t <sup>h</sup> u[ki	[ʔi]tɕi	kɪ[ga	--
⑤阿伝	--	tɕi[du	tu[ki	[ʔi]tɕi	--	NR
⑥上嘉鉄	k <sup>2</sup> i[ri	tɕi[du	[du]tɕi:	[ʔi]tɕi	k <sup>h</sup> i[ga	na[sɑ]ki
⑦湾	k <sup>2</sup> i[ri	tɕi[du	NR	[ʔi]tɕi	--	NR
⑧中里	[mu]ja	tɕi[zu	--	[ʔi]tɕi	ki[ga/kɪ[ga	--
⑨荒木	k <sup>2</sup> i[ri	ki[zu	tu[ki	[ʔi]ki/[ʔi]tɕi	ke[ga	--

表 19-3 軟口蓋閉鎖音 k

項目番号 単語	64	130	174	225	196	241
地域	釘	雲	奥	曆	声	従兄弟
①小野津	[k <sup>2</sup> u]n <sup>2</sup> i	k <sup>2</sup> u[mu	u[ku	[ku]ju[mi	ku[i	[i]tu[ku
②志戸桶	k <sup>2</sup> u[n <sup>2</sup> i	k <sup>2</sup> u[mu	[ʔu]k <sup>2</sup> u	[ku]ju[mi	ku[i	[ʔi]tu[ku
③塩道	k <sup>2</sup> u[n <sup>2</sup> i	k <sup>2</sup> u[mu	[ʔu]ku	[ku]ju[mi	[ku]i	[i]tu[ku
④坂嶺	k <sup>2</sup> u[n <sup>2</sup> i	k <sup>2</sup> u[mu	NR	[k <sup>h</sup> u]ju[mi	[k <sup>h</sup> u]i	--
⑤阿伝	k <sup>2</sup> u[gi	k <sup>2</sup> u[mu	[ʔu]ku	[ku]ju[mi	[ku]i	--
⑥上嘉鉄	k <sup>2</sup> u[gi	k <sup>h</sup> u[mo	[oku	[k <sup>h</sup> u]ju[mi	[k <sup>h</sup> u]i	[ʔi]tu[ku
⑦湾	--	k <sup>2</sup> u[mu	NR	[k <sup>h</sup> u]ju[mi	[k <sup>h</sup> u]i	[ʔi]tu[ku
⑧中里	k <sup>2</sup> u[n <sup>2</sup> i	k <sup>2</sup> u[mu	[ʔu]ku	[ku]ju[mi/ [ɸu]ju[mi	[k <sup>h</sup> u]i	[ʔi]tu[ku/ ʔi[tu]ku
⑨荒木	ku[gi/ ku[ŋi	k <sup>2</sup> u[mu	--	[ku]ju[mi	ku[i	(i[to]ko)

k, k<sup>2</sup>には、合拗音の k<sup>w</sup>や口蓋化した k<sup>j</sup> もあらわれる（表 19-4 のの網掛け部分）。「烏賊」「今日」「きゅうり」は、Xi+kV という環境で k が口蓋化を起こしたものである。

表 19-4 軟口蓋閉鎖音 k

項目番号 単語	232	30	28	176	246
地域	鼓	鍬	烏賊	今日	きゅうり
①小野津	NR	[k <sup>w</sup> e]:	[ʔi]k <sup>j</sup> a	k <sup>j</sup> u[:	NR
②志戸桶	[te]:[ko]:	[k <sup>w</sup> ë]:	[ʔi]ka	k <sup>j</sup> u[:	k <sup>2</sup> i[u]i
③塩道	[te]:[ko://[ta]i[ko]:	[k <sup>2</sup> e]:	i[ka	[ɕu]:	[tɕi]u[i
④坂嶺	--	[k <sup>2</sup> e]:	ʔi[ka	[su]:	--
⑤阿伝	--	ke[:	[i]ka	[su]:	[tɕ <sup>2</sup> i]u[i
⑥上嘉鉄	[te]:[ko]:	k <sup>2</sup> e[:	ʔi[ka	[su]:	k <sup>2</sup> u[:ri
⑦湾	--	[k <sup>2</sup> e]:/[k <sup>j</sup> e]:	ʔi[ka	[su]:	[tɕ <sup>2</sup> u]:[ri
⑧中里	--	[k <sup>2</sup> e]:	ʔi[ka	[su]:	[tɕu]:[ri
⑨荒木	--	[k <sup>w</sup> e]:	i[ka	[su]:	[k <sup>j</sup> u:ri/k <sup>j</sup> u[:ri

次に、g と ŋ は、基本的には g が語頭にあらわれ、ŋ が語中にあらわれるという関係にある。語頭の g は、表 20-1 の「蟹」「烏」「茅」のように、動物名、植物名に多い。

ŋ に関しては、北部では比較的安定して ŋ があらわれるが、中・南部では表 20-1 の「犬（イヌ+クワ=犬っこ）」を除き、g であらわれている（表では ŋ に網掛けをしている）。中・南部では語中の ŋ が g との間を揺れることも多く、鼻音の衰退が進んでいる。また、後接母音が i の場合、地域によっては ŋi が n<sup>2</sup>i・n<sup>2</sup>i で定着しているような語もある（表 20-2 の pin<sup>2</sup>i・çin<sup>2</sup>i（髭）、n<sup>2</sup>in<sup>2</sup>i（右）、表 19-3 の k<sup>2</sup>un<sup>2</sup>i（釘）、表 17-3 の mun<sup>2</sup>ara:（麦わら）など）。

表 20-1 軟口蓋閉鎖音 g, ŋ

項目番号 地域	36 蟹	184 烏	229 茅	148 鏡	135 怪我	犬
①小野津	ga[nʲi]:	[ga]ra[sa]:	ga[ja]	[ka]ga[mi]	ki[ga]	[i]N[ŋa]:
②志戸桶	ga[nʲi]:	[ga]ra[sa]:	ga[ja]	[ka]ga[mi]	ki[ga]	[ʔi]N[ŋa]:
③塩道	ga[nʲi]:	[ga]ra[sa]:	ga[ja]	[ka]ga[mi]	ki[ga]	[i]N[ŋa]:
④坂嶺	ga[nʲi]:	[ga]ra[sa]:	ga[ja]	[ka]ga[mi]	ki[ga]	[ʔi]N[ŋa]:
⑤阿伝	[gai]N	[ga]ra[sa]:	--	[ka]ga[mi]	--	i[nu]
⑥上嘉鉄	ga[i]:	[ga]ra[sa]:	ga[ja]	[k <sup>h</sup> a]ga[mi]	k <sup>h</sup> i[ga]	[ʔi]N[ŋa]:
⑦湾	ga[nʲi]:	[ga]ra[sa]:	ga[ja]	[k <sup>h</sup> a]ga[mi]	--	[ʔi]N[ŋa]:
⑧中里	ga[nʲi]:	[ga]ra[sa]:	ga[ja]	[ha]ga[mi] / [kagami]	ki[ga] / ki[ga]	[ʔi]N[ŋa]:
⑨荒木	ga[nʲi]:	[ga]ra[sa]:	ga[ja]	ka[ga]mi	ke[ga]	[i]N[ŋ <sup>w</sup> a]:

表 20-2 軟口蓋鼻音 g, ŋ

項目番号 地域	32 右	72 髭	252 兎	251 鰻	111 垢(汚れ)	91 口蓋
①小野津	nʲi[nʲi]:	[pi]nɪ	[u]sa[gi]	[ʔu]na[ŋ <sup>j</sup> a]:	[p <sup>ʔ</sup> i]Ngu	[ʔu]tɕe[:
②志戸桶	[mi]ŋi	[pi]nʲi / [pi]ŋi	[ʔu]sa[ŋi]	[ʔu]na[ŋi]	[pɪ]N[ŋu]:	[ʔa]gu
③塩道	[mi]gi	pi[nʲi]	u[sa]gi	u[na]gi	[pi]N[gu:] / [ϕi]N[gu]	ʔa[gu]
④坂嶺	[mi]gi	pi[ni]	--	--	[pi]N[du]	ʔa[gu]
⑤阿伝	[mi]gi	p <sup>h</sup> i[gi]:	ʔu[sa]gi	[ʔu]na[gi]	[pi]N[gu]	[u]tu[je]:
⑥上嘉鉄	[mi]gi	çi[gi]	ʔu[sa]gi	ʔu[na]gi	[çi]N[gu]:	[ʔa]gu
⑦湾	[mi]gi	--	u[sa]gi	NR	[çi]N[gu]	ʔa[gu]
⑧中里	mi[gi]	çi[nʲi] / ϕi[ŋi]	[ʔu]sagi	[ʔu]nagi	[çi]N[gu]:	ʔa[gu]
⑨荒木	mi[gi]	çi[nɪ]	u[sa]gi	u[na]gi	[çi]N[gu]	a[go]

#### 4. 4 声門音

##### (1 2) 声門閉鎖音 ʔ

母音が語頭にくると、通常は声門閉鎖音 ʔ を伴って発音される。ただし、声門閉鎖が弱まって発音される場合もある。以下に用例をあげる。

表 21 声門閉鎖音 ?

項目番号 地域	260	28	29	40	85
	欠伸	烏賊	海老	牛	音
①小野津	[ʔa]ku[bi	[ʔi]kʲa	[ʔi]bi	[ʔu]çi	[ʔu]tu
②志戸桶	ʔa[ku]bi	[ʔi]ka	[ʔi]bɪ	[ʔu]çi	[ʔu]tu
③塩道	a[ku]bi	i[ka	ʔi[bi	u[çi	u[tu
④坂嶺	ʔa[ku]bi	ʔi[ka	ʔi[bi	ʔu[çi	ʔu[tu
⑤阿伝	ʔa[ku]bi	[i]ka	i[bi	u[çi	u[tu
⑥上嘉鉄	[ʔa]ku[bi	ʔi[ka	ʔi[bi	ʔu[çi	ʔu[tu
④坂嶺	ʔa[ku]bi	ʔi[ka	ʔi[bi	ʔu[çi	ʔu[tu
⑦湾	ʔa[ku]bi	ʔi[ka	ʔi[bi	ʔu[çi	ʔu[tu
⑧中里	[akubi / [a]ku[bi	ʔi[ka	ʔi[bi	ʔu[çi	ʔu[tu
⑨荒木	a[ku]bi	i[ka	e[bi	u[çi	o[to

(13) 声門摩擦音 h

北部の p が南部では声門摩擦音 h であらわれることについては、(1) 両唇閉鎖音 (両唇摩擦音) の箇所述べたので、そのような h についてはここでは扱わない。ここでは、北部で h があらわれる語を取り上げる。

声門摩擦音 h は、語頭にのみあらわれる。変化の過程で語中に h または x が生じたと推定される場合がある (酒: \*sake > \*saxe > \*sae > \*së: > se: など) が、現在は語中に h や x があらわれることは稀である。後接母音は a, i, u, o。後接母音が i の場合、h が ç になることがある。また、後接母音が u の場合、ϕ になることがある。ただし、hi と ç i, hu と ϕ u の違いは大変微妙であり、聞き取りが難しい。今回の調査の範囲では、データが不足していて、この違いについて明らかにすることはできなかった。今後の調査の課題である。

表 22-1 声門摩擦音 h

項目番号 地域	157	169	75	83	122	67
	肩	鎌	風	紙	瓶	匂い
①小野津	ha[ta	ha[ma	[ha]zi	[ha]bi	ha[mɪ	[ha]za
②志戸桶	ha[ta	ha[ma	[ha]zi	ha[bi	ha[mɪ	[ha]za
③塩道	ha[ta	ha[ma	ha[di	ha[bi	[ha]mi	NR
④坂嶺	ha[ta	ha[ma	--	ha[bi	[ha]mi	--
⑤阿伝	ha[ta	ha[ma	ha[di	ha[bi	[ha]mi	ha[da
⑥上嘉鉄	ha[ta	ha[ma	ha[di	ha[bi	ha[mi	ha[da
⑦湾	ha[ta	ha[ma	--	--	[ha]mi	--
⑧中里	ha[ta	ha[ma	ha[di	ha[bi	[ha]mi	[nʲu]:[i / [nʲi]ju[i / ha[da
⑨荒木	ha[ta	ha[ma	ha[zi	ha[bi	[ha]mi	ha[da

表 22-2 声門摩擦音 h

項目番号 地域	168	42	87	138	103	178
地域	笠・傘	金	垣	亀	皮	角(かど)
①小野津	ha[sa	[ka]ne	[ha]ki	ha[mɪ	ha[:	[ka]du
②志戸桶	ha[sa	[ha]nɪ	ha[kʰi	[ka]mɪ	ka[wa	[ka]du
③塩道	ha[sa	NR	NR	ka[me// [ha]mi	ka[wa	ka[du
④坂嶺	ha[sa	ha[ni/ xa[ni	[ʔi]çiga[ɬi (石垣)	[ka]mi[ŋa]:	kʰa[wa	ha[du
⑤阿伝	ha[sa	ha[ni	[so]N[na]ɬi (ヒンブン)	[ha]mi[:	ka[wa	ka[du
⑥上嘉鉄	ha[sa (傘)	ha[ni	NR	[ha]mi	kʰa[wa	kʰa[du
⑦湾	ha[sa	ha[nɪ	NR	[ha]mi[:	kʰa[wa	kʰa[du
⑧中里	ha[sa	ha[nɪ	[ʔi]çi[ga]ɬi (石垣)	[ha]mi[:	ka[wa	kʰa[du/ su[mi(隅)
⑨荒木	ka[sa	ha[ni/ ha[nɪ	ka[ki]ne(垣根)	ka[mi/ ka[me	ka[wa	ka[du

表 22-3 声門摩擦音 h

項目番号 地域	22	1	31	115	213
地域	木	毛	腰, 後ろ	米	麴
①小野津	hɪ[:	[çi]:	[hu]çi	hu[mɪ	[ho]:[zi
②志戸桶	çi[:	[çi]:	[hu]çi	hu[mɪ	[ho]:[zi
③塩道	hi[:	pi[nʰi(ひげ)/ [ha]ççia[ŋi]:	hu[çi	hu[mi	ho[:]zi
④坂嶺	hi[:	ke[:/ [has]sa[gi]:	hu[çi	hu[mi	ho[:]zi
⑤阿伝	çi[:	çi[:	hu[çi	hu[mi	[ho]:[zi
⑥上嘉鉄	çi[:	çi[gi]: (ひげ)	[φu]çi	φu[mi	[ho]:[zi
⑦湾	çi[:	çi[nʰi	hu[çi	hu[mi	[ho:]ççi
⑧中里	çi[:	[has]sa[ŋi]:/ [has]sa[nɪ]:	φu[çi/hu[çi	φu[mi/ φu[mɪ	[ho:]zi
⑨荒木	çi[:	çi[nɪ/ (ひげ)	φu[çi	φu[mi	[ho:]zi/ ho[:]zi

上記の h は東京方言の ka, ke, ko に対応している。東京方言の ki と ku は、先に述べたように、kʰi (北部)・ɬi (南部), および kʰu で発音され、hi や hu にはならない。ところが、表 22-3 の「木」は、kʰi や ɬi ではなく hɪ:, hi:, ç:i になっている。このことからすると、喜界島方言の「木」の祖形は、\*ki ではなく \*ke と考えなければならない。これに関しては、奄美大島の「木」が「毛」と同じ発音になっていることから、古代日本語で「木」のことをケと言っていたのではないかという上村(1955・1998)の指摘がある。

ただし、東京方言の ka, ke, ko に対応する子音がすべて h で発音されるわけではない。例えば、表 22-2 の「皮」「角(かど)」は h よりも k の地域の方が多い(網掛け部分)。ま

た、表 22-4, 22-5 にあげた語は、すべての地域で k になっている。どのような語が h であらわれやすく、どのような語が k であらわれやすいのかについては、他の琉球方言とも比較しながら考える必要がある。

表 22-4 東京方言の ka に対応する k

項目番号 地域	37	90	220	219	224	229
	粥	型	形	鯉	瓦	鏡
①小野津	ka[i]:	[ka]ta	[ka]ta(型)	ka[tsu]:	ka[wa]ra	[ka]ga[mi
②志戸桶	ka[i]:	[ka]ta	ka[ta]t̤ei	ka[tsu]:	[ka]wa[ra	[ka]ga[mi
③塩道	ka[i	ka[ta	[ka]ta[t̤ei	[ka]tsu[o	ka[wa]ra	[ka]ga[mi
④坂嶺	ka[ju	ka[ta	--	[k <sup>h</sup> a]tsu[:	--	[ka]ga[mi
⑤阿伝	ka[i	ka[ta	--	ka[tsu]o	ka[wa]ra	[ka]ga[mi
⑥上嘉鉄	[k <sup>h</sup> a]i[:	ka[ta	[k <sup>h</sup> a]ta[t̤ei	[k <sup>h</sup> a]tu[:	ka[wa]ra	[k <sup>h</sup> a]ga[mi
⑦湾	k <sup>h</sup> a[i	--	[k <sup>h</sup> a]ta[t̤ei	[k <sup>h</sup> a]tu[:/ [k <sup>h</sup> a]tsu[:	k <sup>h</sup> a[wa]ra	[k <sup>h</sup> a]ga[mi
⑧中里	k <sup>h</sup> a[i/ k <sup>h</sup> a[ju	k <sup>h</sup> a[ta	[ka]ta[t̤ei/ [katat̤ei	[katsuo	[kawara	[ha]ŋa[mi / [kagami
⑨荒木	[ka]i[:	ka[ta	[ka]ta[t̤ei	ka[tsuo	ka[wa]ra	ka[ga]mi

表 22-5 東京方言の ke, ko に対応する k

項目番号 地域	148	196	205	225	18
	怪我	声	心	暦	粉
①小野津	kɪ[ga	ku[i	NR	[ku]ju[mi	[me]ri[ken]ko
②志戸桶	kɪ[ga	ku[i	[ku]ku[ru	[ku]ju[mi	ku[:
③塩道	ki[ga	[ku]i	NR	[ku]ju[mi	k <sup>h</sup> u[na
④坂嶺	kɪ[ga	[k <sup>h</sup> u]i	[k <sup>h</sup> u]ku[ru	[k <sup>h</sup> u]ju[mi	[k <sup>h</sup> u]:
⑤阿伝	--	[ku]i	t̤ei[mu	[ku]ju[mi	--
⑥上嘉鉄	k <sup>h</sup> i[ga	[k <sup>h</sup> u]i	[k <sup>h</sup> u]ku[ru	[k <sup>h</sup> u]ju[mi	[k <sup>h</sup> u]:
⑦湾	--	[k <sup>h</sup> u]i	[ku]ku[ru	[k <sup>h</sup> u]ju[mi	k <sup>h</sup> u[na
⑧中里	ki[ga/ kɪ[ga	[k <sup>h</sup> u]i	[ku]ku[ru/ [kukuru	[ku]ju[mi/ [ϕu]ju[mi	k <sup>h</sup> u[:
⑨荒木		ku[i	NR	[ku]ju[mi	ko[na

喜界島諸方言の p, ϕ, h, k の関係をまとめたのが表 22-6 である (h, ϕ に網掛けをする)。北部の小野津, 志戸桶, 中部の塩道, 坂嶺, 阿伝に比べ, 中・南部の上嘉鉄, 湾, 中里, 荒木では h の発音が多くなっている。「傷」の第 1 拍目が k<sup>2</sup> または t̤ei になること, 「雲」の第 1 拍目が k<sup>2</sup> になることについては, (1 1) で述べた。

表 22-6 ハ行とカ行

	歯	肩	肘	屁	木	傷	船	骨	米	雲
小野津	pa	ha	pi	pi/ϕi	hi	k <sup>2</sup> i	pu		hu	k <sup>2</sup> u
志戸桶	pa	ha	pi	pi	çi	k <sup>2</sup> i	ϕu	pu	hu	k <sup>2</sup> u
塩道	pa	ha	pi		hi	k <sup>2</sup> i	ϕu		hu	k <sup>2</sup> u
坂嶺	pa	ha	pi	ϕi	hi	k <sup>2</sup> i	pu		hu	k <sup>2</sup> u
阿伝	pa	ha	çi	pi/ϕi	çi	tçi	ϕu		hu	k <sup>2</sup> u
上嘉鉄	ha		çi			tçi	ϕu			k <sup>2</sup> u
湾	ha		çi			tçi	ϕu	hu	k <sup>2</sup> u	
中里	ha		çi			tçi	ϕu			k <sup>2</sup> u
荒木	ha		çi			ki	ϕu			k <sup>2</sup> u

#### 4. 5 接近音

接近音には w, j がある。

w は軟口蓋接近音の w̥ や硬口蓋接近音の w̥ であらわれることもある。後接母音は a, i, ɪ, u, e。wa は東京方言の wa に対応する位置にあらわれる。wi, wi, we は wai, ui, ui などの連母音が融合した結果、生じた音で、ほとんどが長音であらわれる（桶：\*oke > \*oxe > \*oe > ui > ui > wi:, 上：\*ue > ui > wi: > wi:, 祝い：\*juwai > iwe:）。wu は、(1) 狭母音の箇所ですべてのように、ワ行のワに由来する音にあらわれる（表 23-3 の網掛け部分）。

表 23-1 接近音 w

項目番号 単語	110	186	224	103	182
地域	腹	わら	瓦	皮	粟
①小野津	wa[ta	wa[ra	ka[wa]ra	ha[:	a[wa
②志戸桶	wa[ta	wa[ra	[ka]wa[ra	ka[wa	?a[wa
③塩道	wa[ta	wa[ra	ka[wa]ra	ka[wa	a[wa
④坂嶺	wa[ta	wa[ra	--	k <sup>h</sup> a[wa	?a[wa
⑤阿伝	wa[ta	--	ka[wa]ra	ka[wa	[a]wa
⑥上嘉鉄	wa[ta	wa[ra]/[wa]ra	ka[wa]ra	k <sup>h</sup> a[wa	?a[wa
⑦湾	wa[ta	wa[ra	k <sup>h</sup> a[wa]ra	k <sup>h</sup> a[wa	?a[wa
⑧中里	wa[ta	wa[ra	[kawara	ka[wa	?a[wa
⑨荒木	wa[ta	wa[ra	ka[wa]ra	ka[wa	a[wa



表 23-2 接近音 w

項目番号 地域	201	2-32	207	2-102
	桶	甥・姪	上	お祝い
①小野津	uɪ	(w)u[ik]k <sup>w</sup> a	[u]ɪ	[ju]:[we]:
②志戸桶	uɪ	u[i]k[ka, uik[ka	[wɪ]:	[ju]we[:
③塩道	ta[re:(たらい)]/[wi]:	[ma]ta[be]:	wi[:	[ju:]je[:
④坂嶺	NR	[wik]ka	[ɥi]:	[ju:]je[:
⑤阿伝	[u]i/[wi]:	wi[:k]k <sup>a</sup>	[wi	[ju:]je[:
⑥上嘉鉄	NR	βik[ka	ɥi[:	[ju:]we[:
⑦湾	NR	[mi]:[ik]ka(甥姪)	[ɥi]:	[ju:]je[:
⑧中里	t <sup>h</sup> a[ru	mi[:]kka	ɥi[:	[ju:]je[:
⑨荒木	u[ki	mik[k <sup>w</sup> a	wi[:	[ju:]je[:/ju[:]je[:

表 23-3 (=表 3-3) 接近音 w

項目番号 地域	34	38	36	33	175
	夫	女	叔母	叔父	おととい
①小野津	[u]tu	[u]na[ɲu	u[ba]:	u[ɕi]:	?ut[t <sup>ʰ</sup> i]:
②志戸桶	[u]tu	[u]na[ɲu	[?u]ba[kkɪ](:), [?u]ba	[?u]N[mɥi]:	[wu]t[ti]:
③塩道	wu[t <sup>ʰ</sup> u	[wu]na[gu	[?a]N[ma]:/ ?a[ni]:	[k <sup>ʰ</sup> i]N[k <sup>ʰ</sup> a]:	wut[t <sup>ʰ</sup> i]:/[wu]t[ti]:
④坂嶺	gu[tu	[gu]na[ɲu	?u[ba]:	?u[zi]:	[gu]t[t <sup>h</sup> i]:
⑤阿伝	gu[tu	[gu]na[u	gu[ba	gu[ɕi	--
⑥上嘉鉄	?u[tu	[wu]na[u	wu[ba	?u[ɕi	?ut[ti]:
⑦湾	wu[tu	[wu]na[gu	wu[ba]:	wu[ɕi]:	wut[t <sup>ʰ</sup> i]:
⑧中里	?u[tu	[?u]na[gu	?o[ba]:/ ?u[ba	?u[ɕi]:	?ut[t <sup>ʰ</sup> i]:
⑨荒木	?u[tu	[?u]na[ɥu	?o[ba]:	?u[ɕi]:	--

j は母音 a, i, ɪ, u の前にあらわれる。ja は東京方言の ja に対応し, ju は東京方言の ju と jo に対応している。ji, jɪ は古語のヤ行のエに由来する音にあらわれる (表 24-2 「柄」「枝」)。

表 24-1 接近音 j

項目番号 地域	2-80	128	184	112	78
	家	山	茅	親	霧
①小野津	[ja:	ja[ma	ga[ja	[tu]zitu(母父)	[k <sup>2</sup> i[ri / ka[su]mi
②志戸桶	ja[:	ja[ma	ga[ja	?u[ja	mu[ja
③塩道	ja[:	ja[ma	ga[ja	?u[ja	mu[ja
④坂嶺	ja[:	ja[ma	ga[ja	u[ja	--
⑤阿伝	[ja:	ja[ma	--	--	--
⑥上嘉鉄	ja[:	ja[ma	ga[ja	?u[ja	k <sup>2</sup> i[ri
⑦湾	ja[:	ja[ma	ga[ja	u[ja	k <sup>2</sup> i[ri
⑧中里	ja[:	ja[ma	ga[ja	?u[ja	[mu]ja
⑨荒木	ja[: / [ja:	ja[ma	ga[ja	u[ja	k <sup>2</sup> i[ri / mo[ja / mu[ja

表 24-2 接近音 j

項目番号 地域	5	46	17	126	95	41
	柄	枝	湯	夜	冬	魚
①小野津	[jɪ:	[ju]da	ju[:	ju[ru	[p <sup>2</sup> u]ju	[?i]ju
②志戸桶	[ji]:	[ji]da / [ju]da	ju[:	ju[ru	[φu]ju	[?i]u
③塩道	ji[:	ju[da	ju[:	ju[ru	φu[ju	?i[ju
④坂嶺	je[:	ji[da	ju[:	ju[ru	pu[ju	?i[ju
⑤阿伝	ji[:	ju[da	ju[:	ju[ru	φu[ju	i[ju
⑥上嘉鉄	ji[:	ju[da	ju[:	ju[ru	φu[ju	ju
⑦湾	NR	ju[da	ju[:	ju[ru	φu[ju	?i[ju
⑧中里	--	ji[da / ju[da	ju[:	ju[ru	φu[ju	?i[ju
⑨荒木	ji[:	ju[da	ju[:	juru	φu[ju	i[ju

#### 4. 6 喜界島諸方言の子音音素目録

最後に、9地点の子音音素の目録をあげておく。[ ] は異音をあらわす。また、( )はその音が稀にしかあらわれないことをあらわす。

##### 小野津方言，志戸桶津方言の子音音素

閉鎖音	p[p/ϕ]	b	t	t <sup>2</sup>	d	k	k <sup>2</sup>	g	ʔ
破擦音			ts <sup>2</sup>	tɕ					
摩擦音			s[s/ç]	z[z/ɕ/z/ɕ]					h
鼻音	m		n[n/n <sup>j</sup> ]			ŋ			
弾音			r						
接近音			j			w			

##### 坂嶺方言の子音音素

閉鎖音	p[p/ϕ]	b	t	t <sup>2</sup>	d	k	k <sup>2</sup>	g	ʔ
破擦音			ts <sup>2</sup> [ts <sup>2</sup> /ts]	tɕ					
摩擦音			s[s/ç]	z[z/ɕ/z/ɕ]					h
鼻音	m		n	n <sup>j</sup>		ŋ			
弾音			r						
接近音			j			w			

##### 塩道方言，阿伝方言の子音音素

閉鎖音	p[p/ϕ]	b	t	t <sup>2</sup>	d	k	k <sup>2</sup>	g	ʔ
破擦音				tɕ					
摩擦音			s[s/ç]	z[z/ɕ]					h
鼻音	m		n	n <sup>j</sup>		ŋ			
弾音			r						
接近音			j			w			

##### 上嘉鉄方言の子音音素

閉鎖音	(p)	b	t	t <sup>2</sup>	d	k	k <sup>2</sup>	g	ʔ
破擦音				tɕ					
摩擦音			s[s/ç]	z[z/ɕ]					h[h/ç/ϕ]
鼻音	m		n	n <sup>j</sup>		ŋ			
弾音			r						
接近音			j			w			

湾方言の子音音素

閉鎖音	(p)	b	t	t <sup>2</sup>	d	k	k <sup>2</sup>	g	ʔ
破擦音			(ts)	tɕ					
摩擦音			s[s/ɕ]		ʒ[ʒ/ɕʒ]				h[h/ɕ/ɸ]
鼻音	m		n	n <sup>j</sup>				ŋ	
弾音			r						
接近音			j				w		

中里方言の子音音素

閉鎖音	(p)	b	t	t <sup>2</sup>	d	k	k <sup>2</sup>	g	ʔ
破擦音				tɕ <sup>2</sup> [tɕ <sup>2</sup> /tɕ]					
摩擦音			s[s/ɕ]	(z)	ʒ[ʒ/ɕʒ]				h[h/ɕ/ɸ]
鼻音	m		n[n/n <sup>j</sup> ]					ŋ	
弾音			r						
接近音			j				w		

荒木方言の子音音素

閉鎖音	(p)	b	t	t <sup>2</sup>	d	k	k <sup>2</sup>	g	ʔ
破擦音			ts	tɕ					
摩擦音			s[s/ɕ]		z[z/ɕz/z/ɕʒ]				h[h/ɕ/ɸ]
鼻音	m		n	n <sup>j</sup>				ŋ	
弾音			r						
接近音			j				w		

参考文献

- 言語地理学定例研究会(1983)「琉球列島の言語の研究」全集落調査票用参考資料(喜界島)『沖縄言語研究センター資料』46, 沖縄言語研究センター
- 服部四郎(1976)『沖縄学の黎明』伊波普猷生誕百年記念会編, 東京, 沖縄文化協会
- 服部四郎(1959)『日本語の系統』東京, 岩波書店
- 服部四郎・上村幸雄・徳川宗賢(1959)「奄美島の諸方言」九学会連合奄美大島共同調査委員会編『奄美—自然と文化』,403-464
- 外間守善(1968)「沖縄の言語史」『文学』36-1
- 岩倉市郎(1934)「喜界語音韻概説」『方言』4(10), 春陽堂

- 岩倉市郎著，柳田国男編(1977)『喜界島方言集（復刻版）』国書刊行会（1941年初版）  
上村孝二(1955)「奄美大島方言の発音について」『鹿児島大学紀要文科報告』4（上村 1998，  
299-315 による）  
上村孝二(1998)『九州方言・南島方言の研究』秋山書店  
松本 幹男(2000)「沖永良部島方言と喜界島方言における中舌母音について」『語学研究』  
95，拓殖大学言語文化研究所  
中本正智(1976)『琉球方言音韻の研究』東京，法政大学出版局  
中本正智(1978)「喜界島志戸桶方言の語彙」『琉球の方言』4，法政大学沖縄文化研究所  
中本正智・中松竹雄(1984)「南島方言の概説」『講座方言学 10 沖縄・奄美の方言』東京，  
国書刊行会，1-79  
中本正智(1987)「喜界島方言の言語地理学的研究」『日本語研究』9,54-71  
大野眞男(1999)「日本語音韻史における琉球宮古方言」『日本語学』18-5, 47-54  
大野眞男(2002)「奄美方言における中舌母音の歴史的重層性」『国語学研究』41,1-10  
大野眞男(2003)「北奄美周辺方言の音韻の特徴--喜界島方言・瀬戸内町方言」『岩手大学教  
育学部研究年報』63  
白田理人・山田真寛・荻野千砂子・田窪行則(2011)「琉球語喜界島上嘉鉄方言の談話資料」  
『地球研言語記述論集』3,111-151  
輝 博元(1975)「喜界島・塩道方言における語尾母韻の取り代えによる語構成」『立正大学  
国語国文』11  
輝博元(1981)「喜界島・中里方言の音韻」『島田勇雄先生古希記念 ことばの論集』東京，  
明治書院  
輝 博元(1982)「喜界島の方言」『国文学 解釈と鑑賞』47(9)，至文堂  
輝 博元(1984)「喜界島・坂嶺方言の音韻」講座方言学10—沖縄・奄美地方の方言—』国書  
刊行会  
上野善道(1992)『喜界島方言の体言のアクセント資料』東京外国語大学アジア・アフリカ  
言語文化研究所  
上野善道，西岡 敏(1993)『喜界島方言の用言のアクセント資料』東京外国語大学アジア・  
アフリカ言語文化研究所  
上野善道(2002)「喜界島小野津方言のアクセント調査報告」『琉球の方言』26，法政大学  
沖縄文化研究所  
上野善道(2003)「喜界島方言の活用形のアクセント増補資料」『琉球の方言』27，法政大  
学沖縄文化研究所

## 喜界島南部・中部地域のアクセント

窪菌晴夫

### 1 はじめに

2010年9月に行った喜界島方言合同調査をもとに、島の南部・中部地域（湾、中里、上嘉鉄、阿伝、坂嶺、塩道の6集落）について、そのアクセント体系を概観する。本稿の前半では先行研究（上野 2000, 2002a）を参照しながら湾と中里の2集落のアクセント体系を分析し、後半では、この2集落との異同を中心に他の集落の体系を記述・分析する。北部方言（小野津）については上野（2002a/b）を参照されたい。

### 2 中里方言、湾方言

#### 2.1 先行研究

喜界島・湾集落のアクセントについては上野（2000, 2002a）が分析している。この研究によると、湾方言は鹿児島方言や長崎方言と同じく、語の長さに関わらず2つのアクセント型（以下「A型」）しか持たない2型アクセント体系である。ただし、鹿児島や長崎のA型、B型とは所属語彙が一致しないこともあり、上野は $\alpha$ 系列、 $\beta$ 系列という呼び方をしている。つまり、湾方言は $\alpha$ 系列と $\beta$ 系列の2型アクセント体系を持つ。

上野（2000, 2002a）によると湾方言は音節ではなく拍（＝モーラ）を基本単位として音調（トーン）の付与がなされる。この点において、長崎方言や甕島方言（鹿児島県）と基本的に同じであり、音節を基本単位とする鹿児島方言とは異なる（坂口 2001; 上村 1937, 1941; 平山 1951, 木部 2000, Kubozono 2010, 2011a/b）。

次に、 $\alpha$ 系列と $\beta$ 系列の違いであるが、 $\alpha$ 系列は文節単位で、各文節の次末拍のみ低くなる。鹿児島方言や長崎方言と同じく文節をドメイン（付与範囲）として音調パターンが付与されるから、名詞単独であれば、その名詞の語末から二つ目の拍が低くなり、他の拍は高くなる。名詞に助詞が付くと、助詞の最後から二つ目の拍が低くなる。これに対し、 $\beta$ 系列は文節単位ではなく語をドメインとして音調が付与され、語の次末拍の前でピッチが上がる。つまり東京方言と同じように、語をドメインとして音調パターンが決まる。ただし語の長さに関わらず、後ろから3つ目の拍が低く、その次の拍が高くなる。2つの系列を比較すると次のようになる（○は名詞、△は助詞の1拍を表す）。

(1) a.  $\alpha$ 系列：○○、○○○、○○○○、○○○○△、○○○○△△

（所属語彙：水、鳥、鼻、洞窟、煙、踊り、形、鉄、雷、暁...）

- b.  $\beta$  系列： $\overline{\circ\circ\circ\circ}$ 、 $\overline{\circ\circ\circ\circ}\Delta$ 、 $\overline{\circ\circ\circ\circ}\Delta\Delta$   
 (所属語彙：海、鍋、舟、臼、刀、畑、天井...)

2 系列の全体像を比較すると表 1 のようにまとめることができる。 $\alpha$  系列と  $\beta$  系列のドメインの違いは、前者が早田 (1999) のいう語声調(word tone)的な特徴を、後者が語アクセント的な特徴を持っていることを意味する。つまり同一体系の中に、鹿児島方言のような語声調と東京方言のような語アクセントが混在していることになる。

表 1

	音調の担い手 (tone bearing unit)	ドメイン (domain)	
$\alpha$ 系列	拍	文節	次末拍が低い
$\beta$ 系列		単語	次末拍が高い

また音調の担い手(tone bearing unit)をもとに 2 型アクセントの諸方言と比較すると表 2 のようになる<sup>1</sup>。この違いは上記の語声調 vs. 語アクセントの区別とは直接関係しない。

表 2

音節単位	鹿児島、(甑島)
拍単位	長崎、甑島、喜界島・湾方言

話を湾方言に戻すと、上野 (2000, 2002a) は (1) に示した 2 つの音調パターンに対し、次のような音韻論的解釈を提案している。

- (2) a.  $\alpha$  系列：文節の次末拍だけ低い無核型  
 b.  $\beta$  系列：単語の次末拍に昇り核がある

まず  $\beta$  系列ではピッチの上昇位置が有意であり、単語の次末拍（後ろから 2 つ目の拍）がその核（昇り核）を担う位置として指定される。これに対し  $\alpha$  系列でもピッチの上昇が起こるが、この上昇は音韻的に有意なものではなく、文節の次末拍が低くなることが有意義な特徴と解釈される。

<sup>1</sup> 甑島（手打方言）は語頭部分が音節単位、語末部分が拍単位で音調が付与される（Kubozono 2010, 2011a/b）。

## 2. 2 調査

今回の合同調査では湾集落において2名のインフォーマント、その南隣にある中里集落において2名のインフォーマントからアクセントデータを収集した。本稿で報告するのは筆者自身が調査を行った中年男性話者2名（各集落1名）<sup>2</sup>のデータである。

この2名の話者について、単語と文節の言い切り形と文の読み上げ調査を行った。文節とは、名詞に助詞の「が、から、まで、からも、までも」を付けた形であり、文とは、語や文節の後にさらに文節が続く形（いわゆる「接続形」）である。調査は調査表に記載された調査項目（単語・文節）を2回ずつ読み上げてもらい、それをデジタル録音機に録音しながら同時に書き取るという方法で行った（3節以降で紹介する他の集落についても同様である）。

## 2. 3 α系列

### 2. 3. 1 調査結果

まず以下の2拍名詞について述べる。調査語彙の右肩に<sup>①</sup>、<sup>③</sup>とあるのは類別語彙の第1類、第3類に所属することをそれぞれ意味する。鹿児島、長崎方言でいくと2拍第1類はA型、第3類はB型となる。

(3) 水(midu)<sup>①</sup>、鳥(tui)<sup>①</sup>、鼻(hana)<sup>①</sup>、洞窟(gama)；  
山(jama)<sup>③</sup>、花(pana)<sup>③</sup>、豆(mami)、麦(muni)

これらの語彙は次のような音調パターンを示す。以下、「。」は言い切り形を、「...」は接続形を表す<sup>3</sup>。

(4) 言い切り形：○○。○○が。○○も。○○から。○○まで。  
○○からも。○○までも。

接続形：○○が...。○○から...。○○まで...。○○からも...。○○までも...。

3拍名詞については次の語彙のアクセントを調べた。<sup>④</sup>は類別語彙の第4類を意味する。3拍第1類は鹿児島・長崎ではA型、第4類はB型となる。

(5) 煙(hibuei)<sup>①</sup>、踊り(udui)、形(katatsi)<sup>①</sup>；

<sup>2</sup> 中里集落のインフォーマントは得田喜代治氏（1957年5月生まれで調査時に53歳）、湾集落のインフォーマントは岩田進氏（1953年1月生まれ、調査時57歳）である。

<sup>3</sup> 上野善道氏の以前の調査では、湾方言と中里方言では接続形の音調パターンが若干異なっていたそうである（上野 2000）。今回はデータが足りず、この点を確認できていない。



鋏(hasami)<sup>④</sup>、鏡(hagami)<sup>④</sup>、暦(kujumi)<sup>④</sup>

これらの語彙は次のような音調パターンを示した。

(6) 言い切り形：  $\overline{\text{○○○}}。$   $\overline{\text{○○○が}}$ 。  $\overline{\text{○○○も}}$ 。  $\overline{\text{○○○から}}$ 。  $\overline{\text{○○○まで}}$ 。  
 $\overline{\text{○○○からも}}$ 。  $\overline{\text{○○○までも}}$ 。  
 接続形：  $\overline{\text{○○○が}}$ …。  $\overline{\text{○○○から}}$ …。  $\overline{\text{○○○からも}}$ …。

4拍名詞は雷(kannari)と暁(a:tutei)の2語である。これらの語彙の音調パターンは次の通りである。

(7) 言い切り形：  $\overline{\text{○○○○}}$ 。  $\overline{\text{○○○○が}}$ 。  $\overline{\text{○○○○も}}$ 。  $\overline{\text{○○○○から}}$ 。  
 $\overline{\text{○○○○まで}}$ 。  $\overline{\text{○○○○からも}}$ 。  $\overline{\text{○○○○までも}}$ 。  
 接続形：  $\overline{\text{○○○○が}}$ …。  $\overline{\text{○○○○から}}$ …。  $\overline{\text{○○○○からも}}$ …。

### 2. 3. 2 分析

(4)、(6)、(7)の結果は(1 a)で述べた上野(2000, 2002a)の報告と一致している。すなわち、文節をドメインとして、最後から二つ目の拍だけが低くなり、他の拍は高く発音される。また、言い切り形と接続形の間に違いはない。後述するβ系列とは違い、言い切り形の末尾拍が低くなることはなく、言い切り形も接続形と同じく文節末の拍は高い。

ここでGoldsmith(1976)やHaraguchi(1977)の自律分節音韻論(Autosegmental phonology)の枠組みで分析すると、α系列の基本メロディー(basic melody)はHLHであり、文節をドメインとして末尾から(右から左へ)この基本メロディーを拍単位で付与すると正しい音調が得られる。文節が4拍以上の長さを持つ場合には、左端のH音調が右から左へ拡張(spread)することになる( ] はドメインの右端を表す)。

(8)  $\dots \mu \quad \mu \quad \mu \quad \mu ]_{\text{文節}}$   
 $\quad \quad \backslash \quad | \quad | \quad |$   
 $\quad \quad \text{H L H}$

ここで、 $\overline{\text{○○○}}$ や $\overline{\text{○○○○}}$ という音調が許容されないことを強調しておきたい。上野(2000, 2002a)の分析—上記の(2 a)—にあるように、低いのは当該文節の次末拍だけであり、その前の拍はすべて高くなる。インフォーマントは「はなが」(鼻が)や「かたち」のような音調に対して一様に否定的な反応を示しており、次末拍の前は必ず高くなくてはならない。「鼻が」や「形」には $\overline{\text{○○○}}$ という音調しか許容されないのである。

## 2. 4 β系列

### 2. 4. 1 調査結果

β系列については次の語彙についてアクセントを分析した。これらは鹿児島方言、長崎方言においてB型アクセントをとる語彙である（たとえば「海」は両方言で「うみ」と発音される）。

#### (9) a. 2拍名詞

海(umi)<sup>④</sup>、鍋(nabi)、舟(huni)、臼(usu)<sup>④</sup>、太陽(tida)

#### b. 3拍名詞

刀(hatana)<sup>④</sup>、畑(hate:)<sup>④</sup>

#### c. 4拍名詞

若い娘(me:rabi)、天井(tinzo:)、かまきり、紫

これらの調査語彙に対して得られた音調は次の通りである（「～」は語彙間、発話間あるいは話者間に揺れがあることを表す）。上野（2000, 2002a）の記述と一致する。

#### (10) a. 2拍名詞

言い切り形：○○。○○が。○○も。○○から。○○まで。  
○○からも。○○までも。

接続形：○○が…。○○から…。○○からも…。

#### b. 3拍名詞

言い切り形：○○○。○○○が。○○○も。○○○から。○○○まで。  
○○○からも。○○○までも。

接続形：○○○が…。○○○から…。○○○からも…。

#### c. 4拍名詞

言い切り形：○○○○。○○○○が（～○○○○が）。○○○○も。  
○○○○から。○○○○まで。○○○○からも。○○○○までも。

接続形：○○○○が…。○○○○から…。○○○○からも…。

### 2. 4. 2 分析

α系列とは異なり、β系列では言い切り形と接続形が異なる音調を持つ。言い切り形と接続形に共通するのは、「文節」ではなく「単語」の最後から3つ目の拍（－③）が低くなり、この拍とその後ろの拍（－②）の間でピッチが上昇することである。語が2拍以下の長さしかない場合（つまり－③がない場合）には、語頭（つまり－②）から高く発音されることになる。

接続形の場合には、一③だけが低くなり、助詞も含め他の拍はすべて高くなる。2拍名詞の場合には、文節全体が高くなることになる（たとえば「うみから...」）。これに対し、言い切り形では、一③に加え、文節末の拍も低くなる。2拍名詞が単独で発音される場合には、 $\overline{00}$ （たとえば「うみ。」）となる。このように、文節末の拍が低くなるか否かという点において、言い切り形と接続形が区別される。

言い切り形の音調が文末を表す文レベルの音調(boundary tone)であると解釈すると、上野(2000, 2002a)が主張するように、一③が低く、一②が高くなることがβ系列のアクセント特徴ということになる。言い切り形は、このアクセント特徴の上に、文節末の拍を低くするという文レベルの音調が被さるだけである。たとえば2拍名詞が単独で $\overline{00}$ （たとえば「うみ。」）と発音されるのは、一②が高いという語アクセントの特徴と、文節末拍が低いという文末音調が組み合わさったに過ぎない。

以上の観察を自律分節音韻論に基づいて分析すると、次のようになる。まず基本メロディーはα系列と同じくHLHとみなすことができる。ただし、この音調はα系列のように文節末から付与されるのではなく、語末から付与され、さらに語末拍を音韻的に不可視(invisible)として音調付与のドメインから隠さなくてはならない。つまりHLHを単語単位で、かつ語末拍を除いて、右から左へ付与するのである。図示すると(11)のようになる(<μ>は音韻的に不可視な拍を意味する)。この「音韻的に不可視」という考え方は一見するとアドホックなように見えるが、後述する他の集落(上嘉鉄、阿伝、塩道)の分析にも有用であることから、一般性に欠けるとは言えない。また上で見たように、音調がα系列では文節をドメインとして音調が付与されるのに対し、β系列では語をドメインとして付与される。同体系内でこのような組み合わせがあること自体、非常に興味深い。このことは、喜界島の近隣集落(3節以降)の体系と比較する際に重要なポイントとなる。

$$(11) \quad \dots \mu \quad \mu \quad \mu \quad \mu <\mu> ]_{\text{語}} \mu \quad \mu$$

$$\quad \quad \quad \backslash \quad | \quad | \quad | \quad /$$

$$\quad \quad \quad \text{H L H}$$

(11)の分析についてはもう一つ、基本メロディーがLHではないことを強調しておきたい。語末から数えて3拍目と2拍目の間でピッチが上昇することがβ系列の特徴であると述べたが、語のアクセント特徴はこれだけではない。もしこのピッチ上昇だけが有意な特徴であるならば、4拍名詞のHLHH(接続形)、HLHL(言い切り形)に加えてLLHH(接続形)、LLHL(言い切り形)という音調も許容されるはずであるが、実際には許容されない。たとえば「めえらび。」(若い娘、言い切り形)に対してインフォーマントは「めえらび。」という音調は許容されず、「めえらび。」だけを許容した。語末から4拍目のH音調が何らかの文音調(たとえばboundary tone)でない限り、これは語の特性とし

て説明されるべきものである。このことが(11)においてHLHを基本メロディーと設定する第一の理由である。さらに、この基本メロディーを設定することにより $\alpha$ 系列と $\beta$ 系列の共通性を捉えることも可能となる。

## 2.5 その他の知見

湾と中道の2つの集落については上記のことに加え、次のような事実も観察された。

### 2.5.1 1拍名詞

1拍名詞には $\alpha$ 型の区別がなく、すべて $\alpha$ 系列の音調パターンをとる。

(12) 血(tci:)①、齒(ha:)、酒(se:)、井戸(ha:)；目(mi:)③、木(hi:)③、家(ja:)  
○○。○○が。○○が…。○○から。○○からも。

ここでは $\alpha$ 系列と $\beta$ 系列が中和しているわけであるが、なぜ $\beta$ 系列ではなく $\alpha$ 系列の方に統合されるのか、その理由はわからない。(12)の語彙が(10a)に示した $\beta$ 系列2拍名詞と同じ音調を示したとしても、音声的にも音韻的にも何ら問題は生じないはずである。

(12)に示したように、1拍名詞は助詞が付いても付かなくても、母音が伸びて全体が2拍名詞と同じ長さで発音される。これは1拍から2拍へという音韻的な長母音化であり、後述する疑問文の長母音化とは性格が異なる(2.5.3節)。疑問文に見られる長母音化は、音調パターンが決まった後で音声的に伸びるものであるが、1拍名詞の長母音化は語全体が2拍になり、2拍名詞と同じ音調パターンを持つ。つまり、音調パターンが決まる前に起こる音韻的な長母音化である。あるいは、これらの名詞はレキシコンにおいて最初から2拍名詞として登録されているのかもしれない。

### 2.5.2 アルファベット頭文字語のアクセント

調査語彙表以外で、いくつかの外来語とアルファベット頭文字語のアクセントを調べたところ、これらの外来語語彙はすべて $\beta$ 系列であった。(13)に言い切り形の音調を示す。

(13) タンバリン。チョコレート。テープレコーダー。  
ピーアール(PR)。ジェーアール(JR)。シーティー(CT)。  
エフビーアイ(FBI)。ピーティーエー(PTA)。  
ワイエムシーエー(YMCA)。

(13)からもわかるように、語末から3拍目が低く、2拍目が高く発音される。言い

切り形の場合には、これに加えて、文レベルの音調(boundary tone)によって文節末の拍が低くなる。また、音調付与が音節単位ではなく拍単位であることは、既に見た和語の場合と同じである。この点において、音節と拍の両方に依存する甑島方言とは異なる。参考までに甑島方言の音調を(14)に示す。いずれも甑島方言のA型アクセントの発音である(cf. 注1。詳細については Kubozono 2010, 2011a/b を参照)。

- (14) タンバリン、チョコレート、テープレコーダー、ピーアール、ジェーアール、  
シーティー、エフビーアイ、ピーティーエー、ワイエムシーエー

ここで湾方言・中里方言の外来語がβ系列に属していることに注目したい。2.4節で見たβ系列の語彙が鹿児島方言や長崎方言ではB型アクセントで発音されることを考えると、これは意外な事実である。鹿児島方言や長崎方言、甑島方言では外来語は基本的にA型で発音される。またこれらの方言のA型の和語は喜界島湾方言・中里方言ではα系列となる(2.3節、2.4節)。これらの事実を前提にして方言間に対応があると仮定するならば、湾方言・中里方言の外来語はα系列に属することが予想されるのであるが、実際にはその逆である。これはなぜであろうか。

鹿児島方言などのA型アクセントと湾方言・中里方言のβ系列に共通する特徴は、単語の末尾(湾、中里では言い切り形の末尾)が低く発音されるということである。「チョコレート」という語を例にとると、次のようになる。実際の音調パターンは方言ごとに異なるが、語末が低く発音されるという点では共通している。これは、東京方言や近畿方言の外来語にも共通した特徴である。

- (15) 鹿児島方言： チョコレート  
長崎方言： チョコレート  
甑島方言： チョコレート  
湾・中里方言： チョコレート  
東京方言： チョコレート  
近畿方言： チョコレート

もし外来語にもう一つのA型(鹿児島方言などのB型、湾・中里方言のα系列、東京方言や近畿方言の平板型(無核型))が付与されていたら、次のように語末が高く発音されることになる。

- (16) 鹿児島方言： \*チョコレート  
長崎方言： \*チョコレート

甌島方言：	* <u>チ</u> ョ <u>コ</u> レ <u>ー</u> ト
湾・中里方言：	* <u>チ</u> ョ <u>コ</u> レ <u>ー</u> ト
東京方言：	* <u>チ</u> ョ <u>コ</u> レ <u>ー</u> ト
近畿方言：	* <u>チ</u> ョ <u>コ</u> レ <u>ー</u> ト（高起無核） ～* <u>チ</u> ョ <u>コ</u> レ <u>ー</u> ト（低起無核）

アルファベット頭文字語を含む外来語が（16）ではなく（15）のア型で発音されるということは、英語の単語単独発話の音調パターンと一致する。英語では単語の単独発話すべてがピッチ下降を伴って発音され、語末は常に低く発音される。たとえば *chocolate* という3音節語は語頭音節にアクセント（強勢）を持ち、2音節目以降が低く発音される。（15）に見られる日本語諸方言の外来語発音は、英語のこの音声特徴（聴覚印象）を日本語の中に保持した結果と考えることができる（Kubozono 2006, 2007）。

ここで、喜界島湾・中里方言のβ系列は、言い切り形だけが語末を低く発音され、接続形ではそうならないのではないかという疑問が生じるかもしれない。たとえばチョコレートの接続形は「チョコレート」であり、語末が低くならないという点では（16）のα系列と同じではないかという見方である。たしかに接続形と言い切り形の区別でいうと、同じβ系列でも言い切り形だけが語末が低く発音される。英語の音調パターンを借用（保持）したと考えると、どうして接続形ではなく言い切り形が外来語の借用パターンを決めるのかということが問題になる。

しかし言い切り形は単に非接続形（後ろに何も接続しない形）というだけでなく、単語の単独発話であるということも見落としてはならない。β系列に見られる語末のピッチ下降が仮に語（アクセント）の特性ではないとしても、平叙文としての単独発話において語末の音調が低くなるという事実は変わらない。英語の単語単独発話と日本語の単語単独発話の間で、語末のピッチ下降という特徴が共有されていると考えると、（15）の事実は問題なく説明できる。

ついでながら、英語の単語単独発話に見られるピッチ下降もまた「単語」の特性ではないことを付言しておく必要がある。周知のように、英語はピッチアクセントの言語ではなく強勢アクセントの言語である。原則として強弱のパターンだけが語彙的に指定されており、ピッチの特徴（高低、上昇、下降など）は文の発話（イントネーション）で決まる。それゆえ、*chocolate* などの語において語末が低く発音されるという特徴は英語の語アクセントの特徴ではなく、この言語の平叙文が持つ文の韻律特徴である。語が借用される際には、原語において語の特徴か文の韻律特徴かということは問題にならず、単語単独発話の音調パターンが借用されているようなのである。

### 2. 5. 3 疑問文のイントネーション

次にアクセントとの関連で疑問文の韻律特徴について述べる<sup>4</sup>。鹿児島方言（木部 2010）や甑島方言（窪菌 2011）と同じように、湾・中里方言では疑問文が文末のピッチ下降によって表される。この方言の疑問文には鹿児島方言と同じく「な」という終助詞が付くようであるが、実際の発話ではこの終助詞がしばしば長母音化を起し、「なあ」と2拍分の長さで発音される。実際の音調を表すと次のようになる。各ペアの左側が平叙文の言い切り形、右側が疑問文である。

- (17) a. α系列：が<sup>1</sup>ま<sup>1</sup>（洞窟）。が<sup>1</sup>ま<sup>1</sup>な<sup>1</sup>あ？  
           は<sup>1</sup>な<sup>1</sup>（鼻）。は<sup>1</sup>な<sup>1</sup>な<sup>1</sup>あ？  
           ひ<sup>1</sup>ぶ<sup>1</sup>し<sup>1</sup>（煙）。ひ<sup>1</sup>ぶ<sup>1</sup>し<sup>1</sup>な<sup>1</sup>あ？  
   b. β系列：う<sup>1</sup>み<sup>1</sup>（海）。う<sup>1</sup>み<sup>1</sup>な<sup>1</sup>あ？  
           は<sup>1</sup>た<sup>1</sup>な<sup>1</sup>（刀）。は<sup>1</sup>た<sup>1</sup>な<sup>1</sup>な<sup>1</sup>？（～は<sup>1</sup>た<sup>1</sup>な<sup>1</sup>な<sup>1</sup>あ？）

ここで次の2点に注意する必要がある。まず第一に、この方言では終助詞の「な」が「が」をはじめとする格助詞と同じように、先行要素と同じアクセント単位（音調付与ドメイン）に入る。「はな（鼻）」を例にとると、後ろに「な（あ）」が付くことによって、「はな」の音調も変わってしまう。これに対し、鹿児島方言では格助詞と終助詞はアクセント的に異なる振る舞いを見せ、同じ疑問を表す「な（あ）」は先行要素と同じアクセント単位に入らず、よって、先行要素の音調を変えることもない（(18)に具体例を示す）。別の言い方をすると、鹿児島方言では疑問の終助詞「な（あ）」を先行要素と同じ文節に入れないが、湾・中里方言では先行要素と同じ文節に入れる。

- (18) は<sup>1</sup>な<sup>1</sup>。（鼻） は<sup>1</sup>な<sup>1</sup>な<sup>1</sup>？ は<sup>1</sup>な<sup>1</sup>な<sup>1</sup>あ？ （cf. は<sup>1</sup>な<sup>1</sup>が<sup>1</sup>、は<sup>1</sup>な<sup>1</sup>から<sup>1</sup>）  
       は<sup>1</sup>な<sup>1</sup>。（花） は<sup>1</sup>な<sup>1</sup>な<sup>1</sup>？ は<sup>1</sup>な<sup>1</sup>な<sup>1</sup>あ？ （cf. は<sup>1</sup>な<sup>1</sup>が<sup>1</sup>、は<sup>1</sup>な<sup>1</sup>から<sup>1</sup>）

(17) についても一つ興味深いのは、終助詞「な」の長母音化とアクセントとの関係である。「が<sup>1</sup>ま<sup>1</sup>な<sup>1</sup>あ？」という音調は「が<sup>1</sup>ま<sup>1</sup>」に1拍助詞が付いた音調（が<sup>1</sup>ま<sup>1</sup>が<sup>1</sup>）と一致し、2拍助詞が付いた音調（が<sup>1</sup>ま<sup>1</sup>から<sup>1</sup>）とは一致しない。「ひ<sup>1</sup>ぶ<sup>1</sup>し<sup>1</sup>な<sup>1</sup>あ？」の音調も、「ひ<sup>1</sup>ぶ<sup>1</sup>し<sup>1</sup>」に1拍助詞が付いた音調（ひ<sup>1</sup>ぶ<sup>1</sup>しが<sup>1</sup>）と一致し、2拍助詞が付いた音調（ひ<sup>1</sup>ぶ<sup>1</sup>しから<sup>1</sup>）とは一致しない。もし名詞の末尾母音が長母音化を起した後にアクセント（音調）が付与されるのであれば、「が<sup>1</sup>ま<sup>1</sup>な<sup>1</sup>あ？」や「ひ<sup>1</sup>ぶ<sup>1</sup>し<sup>1</sup>な<sup>1</sup>あ？」の音調は説明できなくなる。つまり、これらの疑問文音調は次のような過程を想定して初めて説明がつく。

<sup>4</sup> ここで述べることは中里方言話者の観察に基づく。

(19) 基底形	がま+な	ひぶし+な
アクセント付与 ( $\alpha$ 系列)	$\overline{\text{がま}}\overline{\text{な}}$	$\overline{\text{ひぶ}}\overline{\text{し}}\overline{\text{な}}$
長母音化	$\overline{\text{がま}}\overline{\text{な}}\overline{\text{あ}}$	$\overline{\text{ひぶ}}\overline{\text{し}}\overline{\text{な}}\overline{\text{あ}}$
言い切り形 (疑問)	$\overline{\text{がま}}\overline{\text{な}}\overline{\text{あ}}$	$\overline{\text{ひぶ}}\overline{\text{し}}\overline{\text{な}}\overline{\text{あ}}$

$\beta$  系列の疑問形 (17b) についても同様の分析ができる。

(20) 基底形	うみ+な
アクセント付与 ( $\beta$ 系列)	$\overline{\text{うみ}}\overline{\text{な}}$
長母音化	$\overline{\text{うみ}}\overline{\text{な}}\overline{\text{あ}}$
言い切り形 (疑問)	$\overline{\text{うみ}}\overline{\text{な}}\overline{\text{あ}}$

この分析は、疑問を表す終助詞「な」の長母音化が音韻的なものではなく単に音声的な現象であることを意味している。この点において、2. 5. 1節で述べた1拍名詞の長母音化とは性格が異なる。

### 3 坂嶺集落のアクセント

ここまで、湾と中里の2集落についてアクセント体系の概要を見てきたが、ここからは喜界島南部・中部の他の集落に範囲を広げて集落間の異同を考察してみたい。まず湾集落、中里集落から北に約5キロのところにある坂嶺集落について述べる。この集落は北部方言の小野津集落と湾・中里集落とのちょうど中間に位置しているが、アクセント的にも湾・中里集落とは若干異なっている。今回報告するのは筆者が調査を行った一人の高年層話者<sup>5</sup>のデータである。なお、時間の関係で調査できなかった項目（特に接続形の音調）も少なくないことを付言しておく。

#### 3. 1 調査結果

拍を基本単位とする2型アクセント体系を持つ点では湾および中里の集落と変わらない（この点は本稿で紹介するすべての集落に共通した特徴である）。

次に $\alpha$ 系列と $\beta$ 系列の実際の音調パターンであるが、 $\alpha$ 系列については湾・中里と何ら変わらない。つまり、文節をドメインとして、最後の3拍がHLH（次末拍だけが低い）という音調パターンを示す。また湾・中里と同じく、 $\alpha$ 系列では言い切り形と接続形が同

<sup>5</sup> 英 啓太郎氏（79歳、1931年2月生まれ）。



じパターンを示す。言い切り形で文節末が下がらない点も湾・中里と同じである。さらに、この集落でも1拍名詞はすべて $\alpha$ 系列であり、母音が伸長化を起こしてアクセント的には2拍名詞と同じふるまいを示す。

これに対し、 $\beta$ 系列の音調は湾・中里集落と顕著に異なる。2拍名詞（海、鍋、舟(punI)、臼、太陽(tida)）の結果は次の通りである。

- (21) 言い切り形： $\bar{\circ}\bar{\circ}$ 。 $\bar{\circ}\bar{\circ}$ が。 $\bar{\circ}\bar{\circ}$ も。 $\bar{\circ}\bar{\circ}$ から $\sim$  $\bar{\circ}\bar{\circ}$ から<sup>6</sup>。 $\bar{\circ}\bar{\circ}$ まで。  
 $\bar{\circ}\bar{\circ}$ からも $\sim$  $\bar{\circ}\bar{\circ}$ からも。 $\bar{\circ}\bar{\circ}$ までも $\sim$  $\bar{\circ}\bar{\circ}$ までも。  
 接続形： $\bar{\circ}\bar{\circ}$ が...

(22)と(23)に3拍名詞と4拍名詞の結果を示す。前者は「刀(hatana)、畑(pateR)、あばら骨(gamaku=がまの奥)」の語、後者は「食料(paNmeR)、若い娘(meRrabi)、天井(tINzjoR)、朝顔(asagoR)」である。

- (22) 言い切り形： $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 。 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ が $\sim$  $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ が。 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ も。  
 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ から $\sim$  $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ から。 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ まで。 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ からも $\sim$  $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ からも。  
 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ までも $\sim$  $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ までも。  
 接続形： $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ が... $\sim$  $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ が...

- (23) 言い切り形： $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 。 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ が $\sim$  $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ が。 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ も。  
 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ から $\sim$  $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ から。  
 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ まで $\sim$  $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ まで。  
 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ からも $\sim$  $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ からも $\sim$  $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ からも。  
 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ までも $\sim$  $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ までも。  
 接続形： $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ が...。 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ まで...。 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ までも...

(21) - (23)を通して、言い切り形と接続形の違いは湾や中里集落のものと同じであり、言い切り形では文節末の拍が低くなるのに対し、接続形は文節末まで高くなる。問題となるのが、ピッチ上昇の位置であるが、この集落は中里・湾ほどには語(名詞)の-②での上昇が顕著ではなく、むしろ文節をドメインとして-②でピッチが上昇する傾向が見られる。つまり、文節全体の後ろから3つ目と2つ目の拍の間でピッチが上昇するパターンがもっとも一般的なように見える。またピッチが上昇する前の低音調の部分も、湾・中里ではほぼ1拍に限られていたのに対し、この坂嶺方言では2拍から3拍に及ぶことが

<sup>6</sup> HLHLの発音は、名詞と助詞を別々の文節に分けた(=助詞を強調した)発音の可能性もある。

珍しくなく<sup>7</sup>、この点において語彙間あるいは発話間でも少なからぬバリエーションが観察された。

### 3. 2. 分析

β系列について湾・中里方言と坂嶺方言の違いをまとめると次表のようになる。

表 3

湾・中里	○○。	○○が。	○○から。	○○からも。
坂嶺	○○。	○○が。	○○から～ ○○から。	○○からも～ ○○からも。
湾・中里	○○○。	○○○が。	○○○から。	○○○からも。
坂嶺	○○○。	○○○が～ ○○○が。	○○○から～ ○○○から。	○○○からも～ ○○○からも。
湾・中里	○○○○。	○○○○が。	○○○○から。	○○○○からも。
坂嶺	○○○○。	○○○○が～ ○○○○が。	○○○○から～ ○○○○から。	○○○○からも～ ○○○○からも。

この比較表からもわかるように、湾・中里方言と坂嶺方言は「-②位置での上昇」という特徴は共有しながらも、音調の付与ドメインを異としている。前者は語（名詞）の中の-②位置でピッチが上昇するのに対し、後者は文節をドメインとして-②位置で上昇が起こっている。上昇位置に注目して比較すると次のようになる（ ] はドメインの右端を表す）。

#### (24) β系列

湾・中里    ○○○]。    ○○○] が。    ○○○] から。    ○○○] からも。  
坂嶺        ○○○]。    ○○○] が]。    ○○○] から]。    ○○○] からも]。

この解釈が正しければ、坂嶺方言はα系列に合わせるかのように、β系列でも「単語」から「文節」へと音調付与のドメインが移行している（しつつある）ことになる。つまり、湾・中里方言では語声調的なα系列と語アクセント的なβ系列が共存していたのに対し、坂嶺方言の体系は一步簡素化され、α系列もβ系列も語音調的な特徴を持っていると言える。

<sup>7</sup> たとえば3拍名詞+1拍助詞の音調パターンは「○○○が。」であり、「○○○が。」は出てこない。4拍名詞+1拍助詞でも、「○○○○が。」というパターンは観察されなかった。

## 4 上嘉鉄・阿伝・中道集落のアクセント

次に、湾集落・中里集落から坂嶺とは逆の方向に進んだところにある東海岸の集落について述べる。今回筆者が調査を行ったのは島の南端にある上嘉鉄集落と、そこから海岸線に沿って北東へ約5キロのところにある阿伝集落、さらにそこから北東約5キロのところに位置する中道集落の3つの集落である。この3集落はほぼ同じ体系と音調パターンを持っているため、この節でまとめて論じることにする。ここで報告するのは各集落1名分のデータとそれに基づく分析である<sup>8</sup>。

これらの3集落は、2型アクセント体系である点、音節ではなく拍を基本単位とする点では、これまで紹介した3集落（湾、中里、坂嶺）と同じである。異なるのは具体的な音調パターンであり、β系列の音調は湾・中里集落の音調と変わらないが、α系列の音調は異なっている。以下、順番に見ていくことにする。

### 4. 1 α系列

まず2拍名詞は次のような音調を示す。具体的には「水(midu)、鳥(turi)、鼻(hana)、洞窟(gama)、山(jama)、豆(mami)、花(pana)、麦(mungi)」の語彙である（助詞の「が」「も」はそれぞれ「ぬ」「む」となるが、ここでは前者で表す）。

(25) 言い切り形：○○。○○が。○○も。○○から。○○まで。○○からも。  
○○までも。  
接続形：○○が…。

3拍～5拍名詞の音調は次のようになる。3拍名詞は「煙(hibuei)、踊り(udui)、形(katatei)； 鋏(hasami)、鏡(hagami)、暦(kujumi)」の5語、4拍名詞は「暁(a:tutei)、5拍名詞は「雷(hanna:ri)」である。

(26) 言い切り形：○○○。○○○が(～○○○が)。○○○も。○○○から。  
○○○まで(～○○○まで)。○○○からも(～○○○からも)。  
○○○までも。  
接続形：○○○が…。[○○○から…。○○○まで…。○○○からも…。]<sup>9</sup>

<sup>8</sup> 上嘉鉄の話者は大友勝一（おおともかついち）氏、73歳（1936年12月生まれ）。阿伝の話者は麓富士男（ふもとふじお）氏、59歳（1950年11月生まれ）。中道の話者は藤原輝夫（ふじわらてるお）氏、67歳（1943年6月生まれ）である。

<sup>9</sup> (26) - (28) の [ ] 内は実際のデータはなく、他の例から推定したものである。

(27) 言い切り形：  $\overline{\text{○○○○}}$ 。 $\overline{\text{○○○○}}$ が。 $\overline{\text{○○○○}}$ 。 $\overline{\text{○○○○}}$ から。

$\overline{\text{○○○○}}$ まで。 $\overline{\text{○○○○}}$ からも。 $\overline{\text{○○○○}}$ までも。

接続形： $\overline{\text{○○○○}}$ が...。 [ $\overline{\text{○○○○}}$ から...。 $\overline{\text{○○○○}}$ まで...。 $\overline{\text{○○○○}}$ からも...。]

(28) 言い切り形：  $\overline{\text{○○○○○}}$ 。 $\overline{\text{○○○○○}}$ が。(～ $\overline{\text{○○○○○}}$ が。)  $\overline{\text{○○○○○}}$ も。

$\overline{\text{○○○○○}}$ から。 $\overline{\text{○○○○○}}$ まで。 $\overline{\text{○○○○○}}$ からも。 $\overline{\text{○○○○○}}$ までも。

接続形： $\overline{\text{○○○○○}}$ が...。

[ $\overline{\text{○○○○○}}$ から...。 $\overline{\text{○○○○○}}$ まで...。 $\overline{\text{○○○○○}}$ からも...。]

一見すると湾・中里2集落の $\alpha$ 系列と同じように、文節をドメインとして $\overline{\text{○○○}}$ 、 $\overline{\text{○○○}}$   $\overline{\text{○}}$ という音調パターンが付与されているように見える。たとえば名詞単独形や名詞+1拍助詞の音調は湾・中道集落のものと同じであり、文節末がHLHという音調を持つ。しかしながらこの一般化は、助詞が2拍かそれ以上の長さを持つ場合には通用しない。この場合には、文節の次末拍ではなく、名詞(=語)の最後の拍が低くなる。つまり上嘉鉄・阿伝・塩道では、名詞の直後が高くなるのが音韻的に重要なようである(上嘉鉄の欄は上嘉鉄・阿伝・塩道の共通形を表す)。

(29) 湾・中里  $\overline{\text{○○○}}$ が。 $\overline{\text{○○○}}$ から。  $\overline{\text{○○○}}$ からも。

上嘉鉄  $\overline{\text{○○○}}$ が。 $\overline{\text{○○○}}$ から～ $\overline{\text{○○○}}$ から。 $\overline{\text{○○○}}$ からむ。

この上嘉鉄のパターンも基本メロディーはHLHと分析できる。湾・中里との違いは音調付与ドメインの違いであり、上嘉鉄グループでは文節全体ではなく[名詞+助詞の1拍目]をドメインにして右から左へHLHを付与している。なおLの部分は1拍とは限らない( ]はドメインの右端を表す)。

(30) 湾・中里  $\overline{\text{○○○}}$  ]。 $\overline{\text{○○○}}$ が ]。 $\overline{\text{○○○}}$ から ]。 $\overline{\text{○○○}}$ からも ]。

上嘉鉄  $\overline{\text{○○○}}$  ]。 $\overline{\text{○○○}}$ が ]。 $\overline{\text{○○○}}$ か ]ら。 $\overline{\text{○○○}}$ か ]らむ。

上嘉鉄グループの音調パターンを(8)と同じように分析すると(31)のようになる<sup>10,11</sup>。

<sup>10</sup> (31)と関連してもう一つ、湾・中里の $\alpha$ 系列と違い、上嘉鉄グループの $\alpha$ 系列は言い切り形と接続形が異なるようである。名詞+2拍助詞、名詞+3拍助詞では、接続形が助詞の最後まで高く発音されるのに対し、言い切り形では助詞の最終拍が低く発音される。湾・中里では言い切り形も低く終わらないが、これとは対照的である。この理由は、湾・中里の $\alpha$ 系列が文節の最後でLHを実現し、Hが常に1拍であるため、言い切り形でもこの拍を低くすることはできないことによる。これに対し、上嘉鉄グループの $\alpha$ 系列はLHのHが文節末の複数拍に

ここでも、長い語句においては左端のH音調は左（＝文節頭）へ、右端のHは右（＝文節末）へ向かって拡張する。また< $\mu \dots \mu$ >は助詞の2拍目以降が音韻的に不可視であることを意味する。助詞の付かない文節では、名詞の最終拍からHLHのメロディーが付与されることになる。

$$(31) \dots \mu \mu \mu \mu ]_{\text{語}} + \mu ] < \mu \dots \mu >$$

$$\quad \backslash \quad | \quad | \quad /$$

$$\quad \quad \quad \text{H L H}$$

最後に、上嘉鉄グループでも1拍名詞に $\alpha$ 系列、 $\beta$ 系列の型の区別はなく、ここでも1拍名詞は $\alpha$ 系列に属し、かつ2拍名詞と同じふるまいを見せる。

#### 4. 2 $\beta$ 系列

$\beta$ 系列のアクセントは中里・湾の $\beta$ 系列と基本的に同じであり、名詞の②で上昇が起こる<sup>12</sup>。ただし、3拍名詞+助詞の形では、中里や湾ほどには②での上昇が明確ではなく、③拍がしばしばHもしくはM(id)と聞こえた。また「うすから」「うすまで」「ティダ（太陽）から」などではHHHLと並んでHMMLという発音も聞こえる。「がまく（腰回り）まで」も...HHHLとならんで...HMMLという音調が聞こえることがあった。(32)―(34)に2拍、3拍、4拍名詞のアクセントを言い切り形と接続形に分けて記す。

$$(32) \text{ 言い切り形: } \overline{\text{○○}}。 \overline{\text{○○}}が。 \overline{\text{○○}}も。 \overline{\text{○○}}から。 \overline{\text{○○}}まで。$$

$$\quad \overline{\text{○○}}からも。 \overline{\text{○○}}までも。$$

$$\text{ 接続形: } \quad \overline{\text{○○}}が\dots。 (\overline{\text{○○}}から\dots。 \overline{\text{○○}}からも\dots。)$$

$$(33) \text{ 言い切り形: } \overline{\text{○○○}}。 \overline{\text{○○○}}が (\sim \overline{\text{○○○}}が \sim \text{MHHL})。 \overline{\text{○○○}}も。$$

$$\quad \overline{\text{○○○}}から。 (\sim \text{がまくから LHML})。 \overline{\text{○○○}}まで。$$

$$\quad \overline{\text{○○○}}からも。 \overline{\text{○○○}}までも。$$

$$\text{ 接続形: } \quad \overline{\text{○○○}}が\dots。 (\sim \overline{\text{○○○}}が\dots。 \sim \text{MHHH}\dots。)$$

$$(34) \text{ 言い切り形: } \overline{\text{○○○○}}。 \overline{\text{○○○○}}が (\sim \overline{\text{○○○○}}が)。 \overline{\text{○○○○}}も。$$

広がるため、HLHの基本メロディーを実現しつつ、文節末拍を言い切り形として（つまり文末標識として）低く実現できる。

<sup>11</sup> この音調パターンをアクセント核の概念を用いて説明すると、名詞の語末拍が上げ核（次の拍を高くする性格）を持つと見ることも可能である。

<sup>12</sup>  $\alpha$ 系列と同列に論じるならば、単語（名詞）の後ろから3つ目の拍が上げ核を持っていると分析することが可能である。

〇〇〇〇から。〇〇〇〇まで。〇〇〇〇からも。〇〇〇〇までも。  
 接続形： 〇〇〇〇が…。〇〇〇〇から…。〇〇〇〇からも…。

## 5 まとめ

### 5.1 集落間比較

以上の議論をもとに、集落ごとの異同を音調タイプ別に表すと次表のようになる。湾・中里の音調パターンをA(α系列)、X(β系列)と表し、それとの異同を示したものである。A, B, X, Yの記号が表す内容については(35)にまとめる。

表4 集落ごとのα系列・β系列のタイプ

	坂嶺	湾	中里	上嘉鉄	阿伝	塩道
α系列	A	A	A	B	B	B
β系列	Y	X	X	X	X	X

(35) A: 文節をドメインに、最後の3拍が…HLH。

B: 文節全体ではなく[単語+助詞の1拍目]をドメインにして最後が…HLH。

X: 単語をドメインに、-②拍目で上昇

(単語の語末拍を隠して、その前で…HLH)。

Y: 文節をドメインに、-②拍目で上昇

(文末の語末拍を隠して、その前で…HLH)。

### 5.2 考察

すべての集落に共通している点として次の4点をあげることができる。

(36) a. 2型アクセント体系を持つ。

b. α系列、β系列とも基本メロディーはHLHである。

c. 基本メロディーの音調は拍単位で付与される。

d. 基本メロディーは語句末から付与される。

これに対し、集落間の差異はHLHという基本メロディーを付与するドメインの違いから生じる。大別すると「単語」をドメインとして付与するか、「文節」をドメインとして付与するかという違いであるが、前者は早田(1999)の分類で語アクセント的、後者は語声調的とされる特徴である。

この付与ドメインの違いがα系列とβ系列の間に観察される集落もある。たとえば湾・

中里は $\alpha$ 系列が文節単位（つまり語声調的）、 $\beta$ 系列が単語単位（つまり語アクセント的）という違いを持つ。この観点から集落間差異を示したのが次表である。各集落に付与した「...時」は、集落の位置関係を示すために、島の地理的中心から見た時のだいたいの方角を時計の時針で表したものである。

表5 HLHメロディーの付与範囲（ドメイン）をもとにした分類

	坂嶺	湾	中里	上嘉鉄	阿伝	塩道
	10時	8時	8時	6時	4時	2時
$\alpha$ 系列	文節			語 + 1 $\mu$		
$\beta$ 系列	文節	語				

表5に見られる集落（方言）差を喜界島全体の歴史的な変化と捉えると、アクセントのドメインについて通時的な変化が起こっていると見ることができる。アクセントの性格が語アクセント的なものと語声調的なものとの間で変化していると言ってもよい。論理的な可能性として次の3つの変遷が考えられる。

- (37) a. 文節単位（語声調）の体系から単語単位（語アクセント）の体系へ変化
- b. 単語単位（語アクセント）の体系から文節単位（語声調）の体系へ変化
- c. 単語単位（語アクセント）と文節単位（語声調）が混在した体系から統一的体系への変化

(37a) は、坂嶺タイプの体系が最初であり、そこから湾・中里タイプの体系を経て、上嘉鉄・阿伝・塩道タイプの体系へ発展してきたという見方である。この解釈では、 $\beta$ 系列が $\alpha$ 系列に先んじて変化したことになる。またもっとも古い体系が坂嶺集落に残っているということを含意する。

これに対し(37b) はこれと逆の方向への変化を含意し、上嘉鉄タイプが元々の体系で、そこから湾・中里タイプの体系を経て坂嶺タイプの体系が出てきたと見る。この説に立つと、現在のの上嘉鉄タイプの体系は $\alpha$ 系列が「単語 + 1拍」をドメインとする分だけ、既に文節単位の体系へ進んでいることを意味する。また、全体として $\alpha$ 系列の変化が $\beta$ 系列よりも先に進んだことになる。

(37c) はこれらの2説の折衷案とも言える仮説であるが、現在の湾・中里タイプの混合体系（ $\alpha$ 系列と $\beta$ 系列でドメインが異なる体系）が最初にあって、その混合性を解消するために2方向に変化が起こったと仮定する。坂嶺集落では文節単位の体系へ統一化が図られ、一方、上嘉鉄・阿伝・塩道では単語単位の体系へ統一化が図られたという考え方である。この説は論理的には可能であろうが、なぜ最初に複雑な混合体系が存在したのか

という根本的な疑問が残る。

今の段階では以上の3つの仮説のいずれが正しいか確定することはむずかしい。次節で述べる今後の課題を検討する過程で有益な論拠が得られる可能性がある。

### 5.3 今後の課題

残された課題も多い。各集落について話者を増やし、また各話者からより多くのデータを得ることは言うまでもない。それに加え、次の4点がとりわけ重要だと思われる。まず第一に、集落ごとに音韻分析を進め、音調パターンの中で何が弁別的特徴なのかという問題を、核の性格（昇り核、上げ核、下げ核など）も視野に入れて分析することである（服部 1973, 上野 1999）<sup>13</sup>。第二に、複合語のアクセント規則を検討する必要がある。各集落がどのような複合語アクセント規則を持っているのか、集落間にどのような異同が観察されるかを探ることにより、前節で述べた歴史的変化の方向についても示唆が得られる可能性がある。

三つ目の課題として、今回報告した南部・中部地域のアクセント体系を北部地域（小野津、志戸桶）のアクセント体系と比較することをあげることができる。これは表4・5で述べた南部・中部地域の方言差を考える上でも必須の作業である。最後に、アクセント以外の音韻特徴、とりわけ分節音（母音や子音）の特徴とアクセント体系を総合して考えることが重要な課題であろう。アクセント体系の分布と分節音特徴の分布が一致する必然性はないが、方言下位区分を考える上でも、あるいは前節で述べたアクセント体系の変化を論じる上でも重要な手掛かりを与えてくれるに違いない。

#### 参照文献

- Goldsmith, John (1976) *Augosegmental Phonology*. Doctoral dissertation, MIT. [Garland Press, 1979].
- Haraguchi, Shosuke (1977) *The Tonal Pattern of Japanese: An Autosegmental Theory of Tonology*. Tokyo: Kaitakusha.
- 早田輝洋 (1999) 『音調のタイポロジー』大修館書店。
- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』学界の指針社。
- 上村孝二 (1937) 「甑島方言の研究」『満鐵教育研究所研究要報』第11号, pp.319-348.
- 上村孝二 (1941) 「甑島方言のアクセント」『音声学協会会報』65-66号, pp.12-15.
- 木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版。

<sup>13</sup> たとえば3拍語にL<sub>1</sub>HL<sub>2</sub>という音調パターンが観察される場合、(i)Hの拍が昇り核を担う、(ii)L<sub>1</sub>の拍が上げ核を担う、(iii)Hが下げ核を担う、(iv)L<sub>2</sub>が降り核を担うという、4つの解釈が可能となる（上野 1999）。



- 木部暢子 (2010) 「イントネーションの地域差—疑問文のイントネーション」小林隆・篠崎晃一 (編) 『方言の発見』 1-20. ひつじ書房。
- Kubozono, Haruo (2006) Where does loanword prosody come from? A case study of Japanese loanword accent. *Lingua* 116, pp.1140-1170.
- Kubozono, Haruo (2007) Tonal change in language contact: Evidence from Kagoshima Japanese. In: Tomas Riad and Carlos Gussenhoven (eds.) *Tones and Tunes. Volume 1: Typological Studies in Word and Sentence Prosody*, pp.323–351. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Kubozono, Haruo (2010) Accentuation of alphabetic acronyms in varieties of Japanese. *Lingua* 120, pp.2323–2335
- Kubozono, Haruo (2011a) Japanese pitch accent. In: Marc van Oostendorp, Colin Ewen, Elizabeth Hume and Keren Rice (eds.) *The Blackwell Companion to Phonology*. Vol. 5, pp.2879-2907. Malden, MA & Oxford: Wiley-Blackwell.
- Kubozono, Haruo (2011b) Word-level vs. sentence-level prosody in Koshikijima Japanese. To appear in *Linguistic Review*.
- 窪菌晴夫 (2011) 「アクセントとイントネーション—日本語の多様性」『人間文化』Vol. 13, pp.11-16. 人間文化研究機構。
- 坂口至 (2001) 「長崎方言のアクセント」『音声研究』 5-3, pp.33-41.
- 上野善道 (1999) 「昇り核について」『音声学会会報』 199号、pp.1-13. 日本音声学会。
- 上野善道 (2000) 「奄美方言アクセントの諸相」『音声研究』 4-1, pp.42-54.
- 上野善道 (2002a) 「喜界島諸方言の付属語のアクセント」第4回「沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会編『世界に拓く沖縄研究』（沖縄大会）, pp.290-298.
- 上野善道 (2002b) 「喜界島小野津方言のアクセント調査報告」『琉球の方言』26号, pp.1-15.

# 喜界島方言の格の体系

下地賀代子

## 1 はじめに

喜界島方言の格形式は、現代日本語共通語と同じく、名詞(語幹)に格助辞が後接する膠着の手続きをとって現れる。本稿では、2010年9月9日から15日の合同調査で得られた「文法」担当の各班の調査結果<sup>1</sup>をもとに、喜界島各地の格体系の概要を示していく。文法班が調査を行った地域は、小野津・志戸桶・上嘉鉄・中里・荒木の5つである。以下、それぞれの地域の格形式とその基本的な用法を示し、全体の比較を試みる。なお、各用例の数字は本報告書「データ集」の「文法データ」に対応している。また方言の表記および標準語訳も、断りのない限り「データ集」に同じである。

## 2 喜界島各地方言の格形式

### 2.1 小野津

小野津方言には以下の11の格形式と2つの周辺的な形式がみとめられる。

#### 2.1.1 $\eta$ a 格<sup>2</sup>

(1)述語のさししめす動作、変化、状態の主体をあらわす。主節だけでなく従属節にも現れることができる(6811、3111)。

1811 maççirusun tu $\eta$ a, {sura/tin}joba tudui. 「真っ白なとりが空を飛んでいる。」

1711 kin<sup>h</sup>u:ja k<sup>h</sup>u:jukka haz $\eta$ a tsusataja:. 「きのうは今日より風が強かった。」

5311  $\phi$ uzu ʔituk $\eta$ a t $\epsilon$ u:gakko:nu çinse:n<sup>h</sup>i natan{t $\epsilon$ i/do:}. 「去年いとこが中学の先生になった。」

1911 ʔan jaman<sup>h</sup>je: ʔinoç $\epsilon$ iç $\eta$ a ʔunti:do:. 「あの山にはいのししがいるそうだ。」

6811 ʔiçasama $\eta$ a k<sup>h</sup>uritanu suijoba numiba no:juddo. 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」

3111 n<sup>h</sup>imotsu $\eta$ a ʔubussatannati, t<sup>h</sup>aizi mutt $\epsilon$ ando:. 「荷物が重かったので、二人でもった。」

また、疑問詞疑問文やそれに答える文における焦点標示の用法—いわゆる〈総記〉—もみとめられる。

- 0611 ɖuriŋa da:(nu) hasajo. 「どれがおまえの筈だ。」  
 0711 ɸunu hasaŋa wa: mundɕa. 「その傘がおれのだ。」  
 0211 daŋa {h/ɸ}ate:kai ?iki. 「おまえが畑へ行け。」  
 0313 ?in, hate:kae: waŋa ?ikʲui. 「うん、畑へはおれが行く。」

(2)感情や能力の対象をあらわす。

- 3413 mago:ja kʷaɕiŋa suki. 「孫はお菓子が好きだ。」  
 4011 wano: to:nu saɕimiŋa kanbusa(ja:). 「おれは蛸のさしみが食べたい。」  
 5411 ?ituko: jeigonu honŋa jumi dikʲundo:. 「いここは英語の本が読める。」<sup>3</sup>

## 2. 1. 2 nu 格

(1)あとに続く名詞句を修飾する連体修飾語となり、その属性や関係するものをあらわす。なお、nu 格をとる名詞(句)は、一部の人称代名詞を除き(2.1.3 参照)、制限されていない。

- 1613 ?itukunu ?uduŋa janpija:nʲi ɸutɕi ?ai. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」  
 4111 daja ɸun ?ijunu na:joba ɕittɕunja. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」  
 7011 mitɕidzi gakkoku:nu ɕinse:nʲi ?o:tando:. 「道で学校の先生に会った。」  
 6514 ju:we:nu {duke:/dukinʲe:} ?anma:gari ?udutan do:. 「お祝いのときにはばあさんま  
 でおどった。」

また nu 格は「NP1-nu NP2」で用いられるのが基本であり、現代日本共通語にみられる形式名詞的な「の」(ex. 「それは私のだ。»)に相当する用法—「NP1-nu~」—は許容されにくいようである<sup>4</sup>。以下の用例では( )に例文の逐語訳を記す。

- 0511 ɸunu kama: taro:nu munna. 「この鎌は太郎のか。」(その鎌は太郎のものか。)  
 0913 hure: ?uttu:nu munkamu ɕirira:. 「それはおとうとのかもしれない。」(それはおとうとのものかもしれない。)  
 6312 hunu ɕinbuno kʲu:nu mun ɕa. kinʲu:nu muno: huri{ɕa/do:} 「その新聞はきょうの  
 だ。昨日のはこれだ。」(その新聞は今日のものだ。昨日のものはそれだ。)

(2)主節主語となる。現在の小野津方言の ŋa 格と nu 格は役割分化(主格と属格)の過程にあるようであり、話者によっては両形式の間にゆれがみとめられる(1411、1511 など)。

- 1411 {mitɕiŋa ɕirusaija:/ mitɕinu ?ubisaja:}. 「道が広いなあ。」  
 1413 mitɕinu ɕu:sa:nu:kka. 「道が広いなあ。」  
 3313 ?okina:nʲe: mittasanu kʷaɕinu ?ai. 「沖縄にはめずらしい菓子がある。」  
 1511 ?a, ?amri{ŋa/nu} ɸutittɕa. 「あ、雨がふってきた。」

従属節主語にも **-nu** は現れているが、ここでも **-ŋa** とのゆれが見られる (cf.6413)。

2211 ?anu mi:nu ?ubisanu ?irunu ?irusanu jinŋa: tarukaja:。「あの目のおおきい、色の白い男はだれだろう。」

6411 ?amɪnu φujunte:, ?anmaja ja:zi terebibakkai mitçundo:。「雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。」

cf. 6413 ?amɪŋa hujun pe: ?anmaja ja:zi terebibe: mitçui:。「雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。」

## 2. 1. 3 Ø 格

(1)述語のさししめす動作の直接的な対象をあらわす。なお同様の用法は 2.1.4 の **jo:ba** 格にもみとめられ、小野津方言ではその形式で現れている場合が多く、ゆれも見られる。

6212 wano: kin'u:ja çinbun jomanti:。「おれはきのうは新聞をよまなかった。」

3713 ?azija ?asakara ?umikai ?iju tunn'a ?izi:。「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

7112 nu: ho:ro:ka:。「なにを買おうか。」

4114 daja {φun/φunu} ?iunu namai çittçun n'a:。「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」

3714 ?aɕija ?asakara ?umik(?)ai {?iu/?iujo:ba} tunn'a {?iɕi/?iɕan do:}。「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす (場所名詞)。この用法も **jo:ba** 格を用いるほうが普通のものであり、Ø 格の用例は少ない。

1211 ku:ko: ?ariba φumanu {mitçi ?ikijo:/mitçioba ?izi tabo:ri}。「空港ならこっちの道を  
行きなさい。」

(3)人称代名詞のうち、1人称代名詞、2人称代名詞 (単数) は連体修飾語となるのに、**nu** 格ではなく Ø 格形式をとる<sup>5</sup>。また、連体修飾語となる **nu** 格の場合と同じく、Ø 格でも形式名詞的な「の」に相当する用法はみとめられていない (0711、0811 \*()) は例文の逐語訳)。

0411 wa: k<sup>2</sup>we:ja ɕa:n'i ?ai:。「おれの鍬はどこにある。」

0711 φunu hasaŋa wa: munɕa:。「その傘がおれのだ。」(その傘がおれのものだ。)

4611 wanna: ja:nu ?azija se:mu tabakumu numan(do:):。「うちのじいさんは酒もたばこものまない。」

0613 zurija da: hasa do:。「どれがおまえの筈だ。」

0811 φunu φuruçike: da: munna:。「そのふろしきはおまえのか。」(そのふろしきはおまえ

のものか。)

話者によっては Ø 格ではなく nu 格が用いられることもあるようである。

cf. 0413 wannu φe:ja za:n'i ?akka. 「おれの鍬はどこにある。」

0611 ɕuriŋa da:(nu) hasajo. 「どれがおまえの筈だ。」

また、時間名詞の Ø 格形式が連体修飾語となっている用例が 1 例現れた。

6311 φun ɕinbuno: k'ju:(nu) munɕa. kin'ju: muno: φuriza. 「その新聞はきょうのだ。昨日のはこれだ。」(その新聞は今日(の)ものだ。昨日のものはそれだ。)

## 2. 1. 4 jo:ba 格<sup>6</sup>

(1)述語のさししめす動作の直接的な対象をあらわす。既に述べたように小野津方言では、Ø 格よりも jo:ba 格のほうが多く用いられる。

3613 mago:ja manzu:jo:ba ha:be: kam'UN. 「孫はまんじゅうを皮だけ食べる。」

7214 kazukonutu t'itsu ?assa:jo:ba hanakon'imu ho:ti {kuriro:/kuriranba ja:}. 「和子のおなじ げたを花子にもかけてやろう。」

3011 ɕiro:, kun nimutsuoba hakkiti ja:gari ?izi kuriri. 「次郎、この荷物を家までかっいで行ってくれ。」

4111 daja φun ?ijunu na:joba ɕittɕunja. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。(1)の直接対象と同じく、この形式を用いるのが普通である

1813 maɕçiru ssun tuiŋa tinto:jo:ba tudui. 「真っ白な鳥が空を飛んでいる。」

1313 mitɕinu manna:jo:ba ?attɕe: ?ikan do:. 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

1213 ɕiko:zo:kara ?ariba human mitɕijo:ba ?iki jo:. 「空港ならこっちの道を行きなさい。」

## 2. 1. 5 n'i 格<sup>7</sup>

(1)動作のあいてや基準など、間接的な対象をあらわす。

7011 mitɕidzi gakkono: ɕinse:n'i ?o:tando:. 「道で学校の先生に会った。」

5614 φunu jumēt'a: tudzin'ibē: {kikatɕi/kikatɕan} do:. 「その話は妻にだけ聞かせた。」

3811 φuma: ?umin'i tɕikasannati ?ijuŋa ?umasando:. 「ここは海にちかいので魚がうまい。」

7411 hanako: tsuraŋa ?okka:n'i ju: n'itɕuija:. 「花子は顔がかあさんによく似ている。」

うけみ文や使役文で、動作の主体も n'i 格であらわされる。

6111 **ɕi:ro:ja ʔazinʲi butirattan(ɕi)**. 「次郎はじいさんにしかられた。」

5713 **tuzinʲi ji:jo:ba tsukuraɕi**. 「妻に夕飯を作らせる。」

(2)動作や状態のかかわるところ、動作や状態がなりたつときをあらわす。

1613 ʔitukunu ʔuduŋa **janpija:nʲi ɕutɕi ʔai**. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」

2311 mago:ŋa ɕuzukara **to:kʲo:nʲi ʔun**. 「孫が去年から東京にいる。」

3511 pakunu **na:nʲi manɕu:ŋa ʔikutsu ʔantɕi {ʔumujui/ʔumui}**. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

1111 ɕiko:ke: **ɕittɕi:nʲi ʔikkaiɕika nendo:**. 「飛行機は一日に一回しかない。」

2511 **hatɕigatsunʲie:<sup>8</sup> mudutte kʲuntɕagisan(ŋa)**. 「八月には帰ってくるようだ。」

(3)変化の結果をあらわす

5314 ɕuzu ʔitukuŋa **ɕu:gakko:nu ɕinse:nʲi {natan do:/nati}**. 「中学校の先生になった。」

また小野津方言では、移動動作の目的をあらわすのにも **-nʲi** が用いられる場合があった。ただし、**-ja** が融合したと思われるおそらくは本来の動詞目的形 (**tunnʲa** 「取りに」) も多く現れ、ゆれのあることから、この **-nʲi** は現代日本語共通語の「-に」からの類推と考える。

3712 ʔazi:ja kʲanmakara ʔumini {ʔiju/ʔijuwo} {**tuini/tunnʲa**} {ʔiɕi/ʔiɕando:}. 「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」

cf. 2611 ʔokka:ja ʔatɕa to:kʲo:kai musukonʲi **ʔo:nnʲa ʔikʲuntɕi**. 「かあさんはあした東京へむすこに会いに行く。」

## 2. 1. 6 ɕi 格<sup>9</sup>

(1)道具、手段をあらわす。

1011 ʔokinawanʲi **ɕunɕi ʔikʲujukka ɕiko:kizi ʔizan ho:ŋa jutasando:**. 「沖縄には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」

3111 nʲimotsuŋa ʔubussatannati, **tʲaizi muttɕando:**. 「荷物が重かったので、二人でもった。」

3211 ɕun ʔuwagie: kono ʔaida ʔokina:ɕi **nʲisenendɕi ho:tando:**. 「この上着はこのまえ沖繩で二千円で買った。」

(2)材料や原料などの構成要素をあらわす。

5813 uto: **de:zi so:ɕijo:ba tsukuti**. 「夫は竹でかごをつくった。」

(3)うごきや状態がなりたつ場所をあらわす (場所名詞)。

2813 jozimadi jekizi mattçuri jo:. 「四時まで駅でまっておれ。」

7011 mitçidzi gakkonu çinse:n'i ?o:tando:. 「道で学校の先生に会った。」

3211 φUN ?uwagje: kono ?aida ?okina:çzi n'isenençzi ho:tando:. 「この上着はこのまえ沖繩で二千円で買った。」

(4)原因をあらわす。この用法では名詞 jamai、jami (病気) の zi 格と動詞 jamjui (病む) の中止形 (jadi) とのあいだでゆれがみとめられるが、後者のほうが用いられやすいようである。このタイプの例文は1種しかないため、今後さらなる調査が必要である。

6613 hanako: kin'u:kara jamaizi n'ittui. 「花子はきのうから病気でねている。」

6614 hanako: kin'u:kara {jadi/jamidzi} nittun do:. 「花子はきのうから病気でねている。」  
(花子はきのうから病んでねている。)

## 2. 1. 7 kai 格

移動の到着点をあらわす。

0211 daŋa {h/φ}ate:kai ?iki. 「おまえが畑へ行け。」

3713 ?azija ?asakara ?umikai ?iju tunn'a ?izi. 「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」

## 2. 1. 8 tu 格

(1)相互的な動作のあいてをあらわす。

5911 çziro:ja ?uttu:nu saburo:tu çikkitan(do:). 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」

(2)相互的な関係がなりたつ、一方の対象をあらわす。

5111 kadi: n'ibb'un{daki/bakkai} ?ariba ?inŋa:nk'a maja:tu {?iççoza/t'ittsuza:}. 「食べてねるだけなら いぬやねことおなじだ。」

7214 kazukonutu t'itsu ?assa:jo:ba hanakon'imu ho:ti {kuriro:/kuriranba ja:}. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」

## 2. 1. 9 kara 格

(1)移動の出発点や動作や状態の開始時点など、コトガラコトガラの起点をあらわす。

2411 mago:ja ?itsu to:k'o:kara mudujukka. 「孫はいつ東京から帰るか。」

2311 mago:ŋa φuzukara to:k'o:n'i ?UN. 「孫が去年から東京にいる。」

3713 ?azija ?asakara ?umikai ?iju tunn'a ?izi 「じいさんは朝から海へ魚をとりに いった。」

(2)原料をあらわす。材料などを表す **zi** 格との使い分けについては確認できていないため、さらなる調査が必要である。

4411 se:ja ɸumɪkara {tsukujui/tsukku su}. 「酒は米からつくる。」

## 2. 1. 10 **gari** 格/**maɸi** 格

動作や状態のおよぶ範囲をあらわす。**-gari** と **-maɸi** の2つの形式が現れているが、後者のほうが新しい形であろう<sup>10</sup>。全く異なる形式ではあるが、ほぼ同じ機能をもつ新旧の形として1つの項目に納めている。なお、用例 2711、2713 は複合連体格の例である。

3011 ɸɪro:, kun nimutsuoba hakkiti ja:gari ?izi kuriri. 「次郎、この荷物を家までかついで行ってくれ。」

2811 jozi{made:/gari} ?ekizi mattɸuri. 「四時までで駅でまっておれ。」(\***made:** < **maɸi** + **-ja** 「四時までは」)

2711 ?o:sakakara to:k'o:gariɸu kiɸatɸino: k'ansakaja:. 「大阪から東京までの汽車賃はいくらだろうか。」

2713 ?o:sakakara to:k'o:maɸinu kiɸatɸino: k'ansakaja:. 「大阪から東京までの汽車賃はいくらだろうか。」

## 2. 1. 11 **gariɸi** 格/**maɸiɸi** 格

動作がそのときよりもまえに成立する、あるいは成立したことをあらわす。ここでも **-gariɸi** と **-maɸiɸi** の2つの形式が現れている。両形式の扱いについては 2.1.10 に準じる。

2911 gozigariɸi muduraɸba naraɸmun. 「5時までに帰らなくてはならない。」

2913 gozimaɸiɸi muduraɸba nara:. 「5時までに帰らなくてはならない。」

## 2. 2. 12 格の周辺 (あるいは周辺の格)

ここでは、現代日本語共通語の「-より」、引用の「-と」に対応する形式を挙げる。

### 2. 1. 12. 1 **-jukka**

比較の基準をあらわす。

1711 kin'ɸ:ja k'ɸ:jukka haɸiɸa tsusataja:. 「きのうは今日より風が強かった。」

3913 ?ijujukka n'ikunu ho:ɸa ta:sa. 「魚より肉のほうが高い」

### 2. 1. 12. 2 **-ɸi**

話や考えの内容をあらわす。

3511 pakunu na:n'ɸi maɸɸu:ɸa ?ikutsu ?antɸi {?umujui/?umui}. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」



## 2. 2 志戸桶

志戸桶方言には以下の 11 の格形式と 2 つの周辺的な形式がみとめられる。

### 2. 2. 1 $\eta$ 格

(1) 述語のさししめす動作、変化、状態の主体をあらわす。このとき、 $\eta$  格名詞は従属節にも現れることができる (6831、3132)。

1831  $\text{çiru tu}\eta\text{a tin tudi uija}$ : 「真っ白なとりが空を飛んでいる。」

1531  $\text{?ari, ?am}\eta\text{a } \{\text{?utitt}\text{çan}/\text{?utitt}\text{çi}\}$ : 「あ、雨が降ってきた。」

5331  $\text{?uzuo: ?itukun}\eta\text{a } \text{çu:gakko:nu } \text{çinse:n}^i \text{ } \{\text{nat}^a/\text{natan}\}$ : 「去年いとこが中学の先生になった。」

1931  $\text{?an jaman}^i\text{: ?inu}\text{çi}\text{çin}\eta\text{a unti:}\{\text{do:}/\eta\text{a}\}$ : 「あの山にはいのししがいるそうだ。」

6831  $\text{?içan}\eta\text{a kurita}\{\text{N}/\text{nu}\} \text{ kusui num}\eta\text{ba no:juro:}$ : 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」

3132  $\text{nimotsun}\eta\text{a } \text{?ubusatatannati t}^2\text{aiçi } \{\text{mutt}\text{çan}/\text{mutt}\text{ça:}\}$ : 「荷物が重かったので、二人でもった。」

また、いわゆる〈総記〉の用法もみとめられる。

0232  $\text{da}(\text{:})\eta\text{a pate:kai } \{\text{?iki}/\text{?iki}\}$ : 「おまえが畑へ行け。」

0331  $\text{n:}, \text{?akkai wa}\eta\text{a } \text{?ik}^i\text{un}\{\text{kara}/\text{na}\}$ : 「うん、畑へはおれが行く。」

0631  $\text{dirun}\eta\text{a da: hasajo:}$ : 「どれがおまえの笠だ。」

0731  $\text{?un hasan}\eta\text{a wa: } \{\text{munu}/\text{mun}\}$ : 「その傘がおれのだ。」

(2) 感情や能力の対象をあらわす。

3432  $\text{mago:ja k}^w\text{açi/ kaçi sukidza}$ : 「孫はお菓子が好きだ。」

4033  $\text{wano: to:nu saçimiga kanbusai}$ : 「おれは蛸のさしみが食べたい。」

5431  $\text{?ituko: je:gonu hon}\eta\text{a j}^2\text{umi ?usui}$ : 「いとこは英語の本が読める。」<sup>11</sup>

### 2. 2. 2 nu 格

(1) あとに続く名詞句を修飾する連体修飾語となり、その属性や関係するものをあらわす。なお nu 格をとる名詞(句)は 1 人称、2 人称代名詞を除き (2.2.3 参照) 制限されていない。

1632  $\text{?itukunu } \text{?udu}\eta\text{a janpira:nu wi:ni hutçi ?ai}$ : 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」

5931  $\text{çiro:ja ?uttu:nu saburo:tu } \{\text{çikkit}^a/\text{çikkiti}\}$ : 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」

- 4133 *daja ?un ?ijunu na:ja ci:ttɕunnʲa*. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」  
3531 *?un φakunu na:nʲi (mandɕu:ŋa) ?ikutsu ?antɕi ?umuju{i/N}* 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」  
7031 *mitɕizi qakko:nu cinse:nʲi {?o:ti/?o:tan}*. 「道で学校の先生に会った。」

また *nu* 格は、他の方言と同じく「NP1-*nu* NP2」で用いられるのが基本であり、現代日本共通語の形式名詞的な「の」に相当する用法はほぼ許容されない<sup>12</sup>。以下の用例では（）に例文の逐語訳を記す。

- 0531 *?un hama: taro:nu hamakaja:*. 「この鎌は太郎のか。」（その鎌は太郎の鎌か。）  
0932 *?ure: ?uttu:nu mun:kamo wakara:(D)* 「それはおとうとのものかもしれない。」（それはおとうとのものかもわからない。）  
6333 *?un cinbunja kʲu:nu mun za. kinʲu:nu mun:o: ?uri za*. 「その新聞はきょうのだ。昨日のはこれだ。」（その新聞は今日のものだ。昨日のものはそれだ。）

(2)主節主語となる。現在の志戸桶方言の *ŋa* 格と *nu* 格は主格と属格としてほぼ完全に役割分化しており、主節主語としての *-nu* の出現は感嘆形(波線部)などとの呼応に限られるようである(1431)。ただし、その用法も衰退しつつあると見られる(cf.1432)。

- 1431 *mitɕinu {φ/p}irusaja:*. 「道が広いなあ。」  
cf. 1432 *mitɕiŋa pirusaja:*. 「道が広いなあ。」

従属節主語では *-nu* は多く現れている。だが 2.2.1 で挙げた用例 6831、3132 と見比べると明らかなように、ここでの *-nu* は訳文の「の」に対応して用いられているにすぎず、やはり *ŋa* との使い分けは失われている。

- 2232 *?anu m:nu ?ubisan ?irunu cirusan jinŋa: tarukai.(D)* 「あの目のおおきい、色の白い男はだれだろう。」  
6433 *?aminu hujun {p/φ}inʲe: ?anmaja ja:zi terebibe: mitɕun*. 「雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。」

## 2. 2. 3 Ø 格

(1)述語のさししめず動作の直接的な対象をあらわす。同様の用法が 2.2.4 の *ba* 格にもみとめられるが、志戸桶方言では Ø 格で現れるのが普通のようなものである<sup>13</sup>。

- 6831 *?iɕaŋa kurita{N/nu} kusui numiba no:juro:*. 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」  
6233 *wano: kinʲu:ja cinbun jumantan*. 「おれはきのうは新聞をよまなかった。」  
3731 *?azi:ja kʲanmakara ?umikai ?iju tunja ?iɕan*. 「じいさんは朝から海へ魚をとり

いった。」

6731 hanako: ?okkann'i mUN kamatçi {mura:tan/mura:ti}. 「花子がかあさんにごはんをたべさせてもらった。」

5733 tuzin'i ju:ban {tɕ/ts}ukkasun. 「妻に夕飯を作らせる。」

7131 nu: ho:jukkaja:. 「なにを買おうか。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。なお(1)の直接対象と同じく、ba格にも同様の用法がみとめられる。

1331 mitçinu manna: ?attçe: ?ikando:. 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

1831 çiru tuija tin tudi uija:. 「真っ白なとりが空を飛んでいる。」

(3)人称代名詞のうち、1人称代名詞、2人称代名詞(単数)は連体修飾語となるのに、nu格ではなく∅格形式をとる<sup>14</sup>。また、連体修飾語となるnu格の場合と同じく、∅格でも形式名詞的な「の」に相当する用法はみとめられていない(0731、0831 \*())は例文の逐語訳)。

0431 wa: kwë:ja {çə:n'i ?akka(B)/çə:kaina(A)}. 「おれの鋏はどこにある。」

0731 ?un hasaŋa wa: {munu/mun}. 「その傘がおれのだ。」(その傘がおれのもの(だ)。)

4631 wanna: ?azija se:mu tabakumu numan(do:). 「うちのじいさんは酒もたばこものまない。」

2431 (wanna:) magu:ja ?itsu to:k'io:kara {mudujukka /mudut'i k'jukka}. 「孫はいつ東京から帰るか。」(うちの孫はいつ東京から{戻るか/戻って来るか}。)

0631 diruŋa da: hasajo:. 「どれがおまえの筥だ。」

0831 ?un φuruçike: da: munna. 「そのふろしきはおまえのか。」(そのふろしきはおまえのものか。)

ヒト固有名詞(すなわち人名)も、その連体修飾語は∅格形式をとるようである。用例が1例のみ、また3人称代名詞の用例はないため、今後さらなる調査が必要である。

7233 kazuko muntu jin munnu ?assa:ba hanakon'imu ho:ti kurijun. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」(和子のものとおなじげたを花子にもかってやろう。)

また、話者によっては∅格ではなくnu格が用いられることもあるようである。なお以下の用例は、小野津方言でみとめられたものと同じ訳文のものである(2.1.3の0413、0611参照)。

cf. 0432 (D) wannu kwe:ja çə:n'i ?ai. 「おれの鋏はどこにある。」

0632 (D) diruŋa da:nu kasaka. 「どれがおまえの筥だ。」

## 2. 2. 4 ba 格

(1)述語のさししめす動作の直接的な対象をあらわす<sup>15</sup>。なおすでに述べたように、この用法では Ø 格を用いるほうが普通である

3631 mago:ja mandzu:ba {hawa/ha:}be: kam<sup>1</sup>UN. 「孫はまんじゅうを皮だけ食べる。」

7233 kazuko muntu jin munnu ?assa:ba hanakon<sup>1</sup>imu ho:ti kurijun. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」

5831 uto: {de:de:/de:zi} magu:(ba) {tsukut<sup>2</sup>a/tsukuti}. 「夫は竹でかごをつくった。」

4131 daja: ?UN ?ijunu na:(ba) çittçUNja. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。直接対象の用法と同じく、この用法でも Ø 格のほうが優勢のようである。

1832 {maççiru:/çiru:} tui(:)ŋa tinto:ba tudui. 「真っ白な鳥が空を飛んでいる。」

1332 mitçinu manna:ba ?attçe: ?ikan.(C) 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

1231 çiko:ðo:kae: {?UN/?uma} mitçi(ba) {?iki/?ikiba jutasan}. 「空港ならこっちの道を行きなさい。」

なお、-ba ではなく -juba が用いられている用例が1例あったが、小野津など周辺方言からの影響による一時的な使用と考える。

cf. 7231 kazukotu jin ?assa:(juba) hanakon<sup>1</sup>imu ho:ti kuriro:. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」

## 2. 2. 5 n<sup>1</sup>i 格

(1)動作のあいてや基準など、間接的な対象をあらわす。

7033 mitçizi gakkon:nu çinse:n<sup>1</sup>i {?o:tan/?o:ti}. 「道で学校の先生に会った。」

5631 ?UN panase: tuzin<sup>1</sup>i:bë: k<sup>2</sup>ikatçAN. 「その話は妻にだけ聞かせた。」

3833 ?uma: ?umin<sup>1</sup>i çikasankara ?ijuga ?umasan. 「ここは海にちかいので魚がうまい。」

7431 hanako: tsuraŋa ?okkann<sup>1</sup>i ju: {n<sup>1</sup>itçui/n<sup>1</sup>itçUN}. 「花子は顔がかあさんによく似ている。」

うけみ文や使役文で、動作の主体も n<sup>1</sup>i 格であらわされる。

5731 tuzin<sup>1</sup>i ju:ban(ba) {tsukuratçAN/tsukurASUN/tsukkasUN}. 「妻に夕飯を作らせる。」

6033 saburo:ja ziro:n<sup>1</sup>i bo:zi ?utattan. 「三郎は次郎に棒でなぐられた。」

(2)動作や状態のかかわるところ、動作や状態がなりたつときをあらわす。

1631 ?itukunu ?uduŋa janpira:n<sup>1</sup>i {çutçEN/çutçei ?AN}. 「いとこの布団がやねの上にほし

である。」

- 2331 magu:ja  $\phi$ uzukara to:k'o:n'i ui. 「孫が去年から東京にいる。」  
3531 ?un  $\phi$ akunu na:n'i (mandu:ŋa) ?ikutsu ?antɕi ?umuju{i/N}. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」  
1131  $\phi$ iko:kɕe:  $\phi$ ittɕi:n'i ?ikkaiɕika nendo:. 「飛行機は一日に一回しかない。」  
2531 hatɕigatsun'ɕe:<sup>16</sup> mudut'i k'UN {nessui/nessUN}. 「八月には帰ってくるようだ。」

(3)変化の結果をあらわす

- 5331  $\phi$ uzu: ?itukuŋa tɕ:gakko:nu ɕinse:n'i {nat'a/natan}. 「中学校の先生になった。」

なお、小野津方言や現代日本語共通語の「-に」とは異なり、志戸桶方言の-n'i は移動動作の目的をあらわすのには用いられない。

- cf. 3731 ?azi:ja k'anmakara ?umikai ?iju tunja ?idɕan. 「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」)

- 6931 ?okkano: ?itɕibakai ho:i mun ɕinn'a {?izan/?izi}. 「かあさんは市場へ買い物に行った。」(かあさんは市場へ買い物しに行った。)

## 2. 2. 6 zi 格<sup>17</sup>

(1)道具、手段をあらわす。

- 1031 {?okinawa/naɕa}n'ɕe ɕunzi ?ik'UN jukkamu ɕiko:kizi ?izan ho:ŋa jutasaija:. 「沖縄には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」  
3131 n'i:ŋa {?ubussati:/?ubussatannati} t'aizi {mutɕan(do:)/mutɕi}. 「荷物が重かったので、二人でもった。」  
3231 ?un ?kino:  $\phi$ unnɕe: ?okinawazi n'isenenɕi {ho:tando:/ho:tittɕan}. 「この上着はこのまえ沖縄で二千元で買った。」

(2)材料や原料などの構成要素をあらわす。

- 5833 uto: de:zi kago: {sutta/sutɕan}. 「夫は竹でかごをつかった。」

(3)うごきや状態がなりたつ場所をあらわす(場所名詞)。

- 2832 joɕimade jekidɕi mattɕuri. 「四時まで駅でまっておれ。」  
7033 mitɕi gakko:nu ɕinse:n'i {?o:tan/?o:ti}. 「道で学校の先生に会った。」  
3231 ?un ?kino:  $\phi$ unnɕe: ?okinawazi n'isenenɕi {ho:tando:/ho:tittɕan}. 「この上着はこのまえ沖縄で二千元で買った。」

(4)また、原因をあらわす用法もみられた。志戸桶方言の場合も、名詞 **bjo:ki** (病気) の **zi** 格よりも動詞 **jamjui** (病む) の中止形を用いる方がよいようである(cf.6631)。

6633 hanako: kin<sup>h</sup>u:kara bjo:kizi nittu{i/N}. 「花子はきのうから病気でねている。」

cf. 6631 hanako: kin<sup>h</sup>u:kara jadi nittui. 「花子はきのうから病気でねている。」(花子はきのうから病んでねている。)

以上の他、**zi** 格とともに **-de**、**-nti** という形式も見られたが、類似の形式は他の方言にも見られず、あくまでも個人的な使用ではないかと考える。

5831 uto: {de:de/de:zi} magu:(ba) {tsukut<sup>a</sup>/tsukuti}. 「夫は竹でかごをつくった。」

6431 {?amɨɸui n<sup>h</sup>i:e/?amnu ɸujun pin<sup>h</sup>i:e} ?anma:ja {ja:ɸi/ja:nti} terebi{bē:/bakkai} mitɕun. 「雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。」

## 2. 2. 7 kai 格

移動の到着点をあらわす。

0232 da(:)ŋa pate:kai {?iki/?iki}. 「おまえが畑へ行け。」

3731 ?azi:ja k<sup>h</sup>anmakara ?umikai ?iju tunja ?iɸan. 「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

## 2. 2. 8 tu 格

(1)相互的な動作のあいてをあらわす。

5933 ziro:ja ?uttu:nu saburo:tu ɸikkitan. 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」

(2)相互的な関係がなりたつ、一方の対象をあらわす。

5131 kadi: n<sup>h</sup>ippunde: ?ariba ?inŋa:ja maja:tu {t<sup>h</sup>itsu/jin} mun. 「食べてねるだけならいぬやねことおなじだ。」

7233 kazuko muntu jin munnu ?assa:ba hanakon<sup>h</sup>imu ho:ti kurijun. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」(和子ものとおなじげたを花子にもかってやろう。)

## 2. 2. 9 kara 格

(1)移動の出発点や動作や状態の開始時点など、コトガラことガラの起点をあらわす。

2431 (wanna:) magu:ja ?itsu to:k<sup>h</sup>o:kara {mudujukka /mudut<sup>h</sup>i k<sup>h</sup>ukka}. 「孫はいつ東京から帰るか。」

2331 magu:ja ɸuzukara to:k<sup>h</sup>o:n<sup>h</sup>i ui. 「孫が去年から東京にいる。」

3731 ?azi:ja k<sup>h</sup>anmakara ?umikai ?iju tunja ?iɸan. 「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

(2)原料をあらわす用法も見られた。ただし、話者によっては **zi** 格が用いられており (cf.4433)、英語の **of** と **from**、現代日本語共通語の **デ格** と **カラ格** に見られるような使い分けはないようである。

4431 se:ja ɸumɪkara tsukk<sup>j</sup>usu(do:). 「酒は米からつくる。」

cf. 4433 se:ja ɸumɪzi tɕukk<sup>j</sup>ui. 「酒は米からつくる。」(酒は米でつくる。)

## 2. 2. 10 **madi** 格

動作や状態のおよぶ範囲をあらわす。なお、用例 2731 は複合連体格の例である。

3031 ɕiro:, ?un n<sup>j</sup>imutsu: ja:madi hatamiti ?i:zi kuri. 「次郎、この荷物を家までかっいで行ってくれ。」

2831 jozimate: jekizi mattɕuri. 「四時まで駅でまっておれ。」(四時までは駅でまっておれ。 \*made:<madi+-ja)

2731 ?o:sakakara to:k<sup>j</sup>o:madinu kiɕatɕino: tɕ<sup>ʔ</sup>ansakaja:. 「大阪から東京までの汽車賃はいくらだろうか。」

## 2. 2. 11 **madin<sup>i</sup>** 格

動作がそのときよりもまえに成立する、あるいは成立したことをあらわす。

2932 godɕimadini muduranba {nara:/naran}. 「5時までに帰らなくてはならない。」

## 2. 2. 12 格の周辺 (あるいは周辺の格)

ここでは、現代日本語共通語の「-より」、引用の「-と」に対応する形式を挙げる。

### 2. 2. 12. 1 **-jukka(mu)**

比較の基準をあらわす。

1731 kin<sup>j</sup>u:ja k<sup>j</sup>u:jukka(mu) ha:zi:ɲa {tsusanatittɕan/tsusanatittɕija:/tsukunati}. 「きのうは今日より風が強かった。」(きのうは今日より(も)風が強かった。)

3933 ?ijujukkamu n<sup>j</sup>ikunu ho:ga ta:sa{N/i}. 「魚より肉のほうが高い」(魚よりも肉のほうが高い。)

### 2. 2. 12. 2 **-tɕi**

話や考えの内容をあらわす。話者によっては **-tɕu** の形も用いられるようである(3532)。

3531 ?un ɸakunu na:n<sup>i</sup> (mandɕu:ɲa) ?ikutsu ?antɕi ?umuju{i/N}. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

3532 hakunu na:ni mandɕu:ɲa tɕansa {?antɕi ?umujui(D)/?antɕu ?umujukka(C)}. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

## 2. 3 上嘉鉄

上嘉鉄方言には以下の13の格形式と2つの周辺的な形式がみとめられる。

### 2. 3. 1 $\eta a$ 格

指示代名詞に後接して述語のさししめす状態の主体をあらわす用法がみられた。他の方言とは異なり、上嘉鉄方言ではいわゆる主格、属格が  $nu$  格に統合されつつあると考えられるのだが、以下の例 2153 から、名詞のタイプによる  $nu$  格と  $\eta a$  格の使いわけもかろうじて保たれていることがわかる。

2153  $?\text{an}\eta a \text{ jakubaza}$ . 「あれが役場だ。」(「データ集」2151も同)

なお、 $-nu$  と  $-\eta a$  のゆれのみとめられる用例もいくつか現れている。ヒト名詞の場合、使い分け意識の名残であることも考えられるが、普通名詞の例も多く、いずれも共通語からの類推であろう。

5353  $kudo: ?ituku\{nu/ga\} \text{ t}\epsilon u: gakkou: nu \text{ \textit{c}inse: n}i \text{ natan}$ . 「去年いとこが中学の先生になった。」

6852  $?i\epsilon a\{\eta a/nu\} \text{ kuritan kusuri numiba: \{no: rin/no: rikkamu\} do:$ 「医者がくれたくすり  
をのめばなおるだろう。」

1853  $\text{c}iru \text{ turi: ga} \text{ tinto: oba tubun}$ . 「真っ白なとりが空を飛んでいる。」(→2.3.2の1851)

また、いわゆる<総記>の用法で、疑問詞、疑問文の答えとなる名詞に  $-\eta a$  が後接している例も見られた。なお 2.3.2 で述べるように、この用法では  $-nu$  よりも助辞  $-ja$  の後接したと思われる形式が多く現れている。

0653  $\text{dun}\eta a \text{ da: hasa jo}$ . 「どれがおまへの筈だ。」

0753  $?un \text{ hasa}\eta a \text{ wa: mun}$ . 「その筈がおれのだ。」

### 2. 3. 2 $nu$ 格

(1)述語のさししめす動作、変化、状態の主体をあらわす。すでに述べたように、上嘉鉄方言では  $\eta a$  格が衰退しつつあり、 $nu$  格がこの用法の中核をになっている。よって一部の指示代名詞を除き、 $nu$  格をとる名詞(句)は制限されていない。またこのとき、 $nu$  格名詞は従属節にも現れることができる(6851、3151)。

1551  $\text{nama, ?aminu} \{\text{\textit{f}urent}\epsilon i: / \text{\textit{f}urent}\epsilon an\}$ . 「あ、雨が降ってきた。」

1851  $\text{c}irudurinu \text{ tinto: (oba) \{tubo: ri/tubo: ndo:\}$ . 「真っ白なとりが空を飛んでいる。」

1453  $\text{mit}\epsilon inu \text{ c}irusarija:$ . 「道が広いなあ。」

1751  $\text{kiju: c}\epsilon u: juri \text{ hadinu} \{\text{\textit{t}\epsilon usari/ ?\text{\textit{t}\epsilon usatando:\}$ . 「きのうは今日より風が強かった。」



- 1953 ?an jamajeno: ?inoçiçinu ?unbe:za. 「あの山にはいのししがいるそうだ。」  
6851 ?içanu kuritan kuçurije: numiba: no:r<sup>1</sup>ukkamu wakarando:. 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」  
3151 n<sup>1</sup>imutunu ?ubussa munnare: t<sup>2</sup>arije: mutçe:dzan(do:). 「荷物が重かったので、二人でもった。」

また、いわゆる<総記>の用法もみられたが、今回の調査では nu 格が用いられるのは 1 人称代名詞のみであり、それ以外は助辞-ja の融合した形式<sup>18</sup>が用いられている(cf.)。

- 0353 ?i:, hate:katçe: w<sup>1</sup>annu ?ika. 「うん、畑へはおれが行く。」  
cf. 0651 diruo: da: {munnu haçana/muno: haça}. 「どれがおまえの笠だ。」  
0751 φUN {haça:/hasa:} wa: mundo:. 「その傘がおれのだ。」

(2)あとに続く名詞句を修飾する連体修飾語となり、その属性や関係するものをあらわす。なお nu 格をとる名詞(句)は 1 人称、2 人称代名詞を除き (2.3.3 参照) 制限されていない。

- 1653 ?itukunu ?udo: janinu {?uwe:/wi:en} φusen an. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」  
5952 d<sup>1</sup>iro:ja ?uttunu saburo:tu çittçitan do:. 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」  
4152 da: ?un junu na: çironn<sup>1</sup>a:. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」  
3551 hakunu nakae: mançu:nu çansa ?akka wakaran{ka:/na:}. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」  
7051 mittçije: g<sup>1</sup>akko:nu çinçe:{tu/e} o:t<sup>2</sup>an(do:). 「道で学校の先生に会った。」

また、nu 格はやはり「NP1-nu NP2」で用いられるのが基本であり、現代日本共通語の形式名詞的な「の」に相当する用法はみとめられない。以下の用例では ( ) に例文の逐語訳を記す。

- 0553 ?un kama: taro:nu munna?. 「この鎌は太郎のか。」(その鎌は太郎のものか。)  
0953 ?ure: ?uttunu mun<sup>1</sup>kamu çirira:. 「それはおとうとのものかもしれない。」(それはおとうとのものかもわからない。)  
6353 ?un çinbuno: su:nu mun za. dzijo:nu muno: ?uriza. 「その新聞はきょうのものだ。昨日のものはこれだ。」(その新聞は今日のものだ。昨日のものはそれだ。)  
7251 kazukonu mun<sup>1</sup>tu t<sup>2</sup>itumun assa:(o:ba) hanakoemu ho:e: kuririjo:. 「和子のものとおなじげたを花子にもかってやろう。」(和子のものと同じげたを花子にもかってやろう。)

(3)感情や能力の対象をあらわす。

- 4052 wano: to:nu sasuminu {kanbusan/kanbusarija:}. 「おれは蛸のさしみが食べたい。」  
3453 mago: k<sup>2</sup>açinu sutçin do:. 「孫はお菓子が好きだ。」

5453 ?ituko: je:gonu honnu juminçin. 「いところは英語の本が読める。」<sup>19</sup>

### 2. 3. 3 Ø格

(1)述語のさししめす動作の直接的な対象をあらわす。同様の用法が2.3.4のo:ba格にもみとめられるが、どちらも同程度に用いられているようである。例えば、以下の7252、3653、5753の同じ訳文からの別の用例では、o:ba格形式も現れている。

6853 ?isanu kuritan kusuri numiba {no:rikkaja:/no:riro:}. 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」

7252 kadzukotu ninmunnu ?assa: hanakojenmu {ho:okaja/ho:o:ja}. 「和子のとおなじげたを花子にもかけてやろう。」

6251 wano: kiju:ja çinbun mirant<sup>2</sup>ando:. 「おれはきのうは新聞をよまなかった。」

3653 mago: manzu: kawadake kamin. 「孫はまんじゅうを皮だけ食べる。」

5753 tuze:n ji: {tukkatça/tukkaçin}. 「妻に夕飯を作らせる。」

7153 nu: ho:ka(ja:). 「なを買おうか。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。なお(1)の直接対象と同じく、o:ba格にも同様の用法がみられる。

1253 çiko:zo:katçe: ?un mitçi tu:re:ki (jo:). 「空港ならこっちの道を行きなさい。」

1353 mitçinu mannaka ?attçiba ?ikan (do:). 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

(3)人称代名詞のうち1人称、2人称代名詞の単数形は連体修飾語となるのにØ格形式をとる。なお、1人称複数では今回の調査では確認できなかった。また、連体修飾語となるnu格の場合と同じく、Ø格でも形式名詞的な「の」に相当する用法はみとめられていない(0751、0853 \*()は例文の逐語訳)。

0453 wa: ke:ja za:n<sup>1</sup>i ?ari jo?. 「おれの鍬はどこにある。」

0751 φun {haça:/hasa:} wa: mundo:. 「その傘がおれのだ。」(その傘がおれのもの(だ)。)

0653 dunña da: hasa jo. 「どれがおまえの笠だ。」

0853 ?un ?usukki(:)ja da: munna. 「そのふろしきはおまえのか。」(そのふろしきはおまえのものか。)

なお、1例のみだがnu格形式が用いられている用例も現れた(cf.0451)。また、状態の主体をあらわすØ格形式の用例もみられた(cf.3952)。

cf. 0451 {wanun/wannu} k<sup>2</sup>e:ja ça:n<sup>1</sup>i {?arijo/?ando:}. 「おれの鍬はどこにある。」

3952 ?ju:jori nikudu takasa(do:). 「魚より肉のほうが高い。」(魚より肉ぞ<sup>20</sup>高<sup>い</sup>(よ))

2. 3. 4 o:ba 格<sup>21</sup>

(1)述語のさししめず動作の直接的な対象をあらわす<sup>22</sup>。すでに述べたように、Ø 格形式と併用されている。

3751 ?azi:ja k<sup>2</sup>anmakara {?umikatçi/?umije:} j<sup>2</sup>u:o:ba tunja ?izando:.「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

5851 utu:o: de:e: kagooba t<sup>2</sup>ukut<sup>2</sup>ando:.「夫は竹でかごをつくった。」

5752 tuçien ji:jo:ba {tsukkatçi/tukka çin}.「妻に夕飯を作らせる。」

7251 kazukonu muntu t<sup>2</sup>itumun assa:(o:ba) hanakoemu ho:e: kuririjo:.「和子のおなじげたを花子にもかってやろう。」

3651 mago: mandçu:(o:ba) w<sup>2</sup>abe:daki kamindo:.「孫はまんじゅうを皮だけ食べる。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。直接対象とは異なり、用例は少ない。

1853 çiru turi:ga tinto:oba tubun.「真っ白な鳥が空を飛んでいる。」

2. 3. 5 en 格<sup>23</sup>

(1)動作のあいてや基準など、間接的な対象をあらわす。

7252 kadzuotu ninmunnu ?assa: hanakojenmu {ho:okaja/ho:o:ja}「和子のおなじげたを花子にもかってやろう。」

5653 ?un hanase: {tuzen/tuzien}daki kikatçan.「その話は妻にだけ聞かせた。」

5651 ?un hanaçie: tuzidakie: çikatçando:.「その話は妻にだけ聞かせた。」(その話は妻だけに聞かせたよ。)

3853 ?uma:ja ?umijen çikasan munen junu masan.「ここは海にちかいので魚がうまい。」

7452 hanako: t<sup>2</sup>uranu ?okkan<sup>1</sup>e: ju: {ni:jo:ri/ni:o:ri} ja:.「花子は顔がかあさんによく似ている。」(?okkan<sup>1</sup>e:<?okkan+e)

うけみ文や使役文で、動作の主体も en 格であらわされる。

6051 çaburo:ja çiro:e: {bo:/guçi:}e: ?ut<sup>2</sup>at<sup>2</sup>an.「三郎は次郎に棒でなぐられた。」

6751 hanako: ?anma:e: munoba kamaçe: murat<sup>2</sup>ando:.「花子はかあさんにごはんをたべさせてもらった。」

5752 tuçien ji:jo:ba {tsukkatçi/tukka çin}.「妻に夕飯を作らせる。」

(2)動作や状態のかかわるところ、動作や状態がなりたつときをあらわす。

1653 ?itukunu ?udo: janinu {?uwe:/wi:en} çusen an.「いとこの布団がやねの上ほしである。」

2353 mago:nu ?udukara to:k<sup>1</sup>o:jen ?un.「孫が去年から東京にいる。」

3551 hakunu nakae: manɕu:nu ɕansa ʔakka wakaran{ka:/na:}. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

1953 ʔan jamajeno: ʔinoɕiɕinu ʔunbe:za. 「あの山にはいのししがいるそうだ。」

1151 ɕiko:kje: ɕittɕi:e: ʔikkaiɕika ne:ran(do:). 「飛行機は一日に一回しかない。」

(3)動作や状態がなりたつ場所をあらわす (場所名詞)。

2851 jozimade: jekie: matɕo:rijo:. 「四時まで駅でまっておれ。」

7052 mitɕe: gakko:nu ɕinse:tu o:tando:. 「道で学校の先生に会った。」

3251 ɕun ʔuwage: nanma ʔokinawae: nʔiɕenjenɕe: ho:tando:. 「この上着はこのまえ沖縄で二千元で買った。」

(4)道具、手段をあらわす。

1051 ʔokinawanʔie ɕunie: ʔikʔunjuri ɕiko:kje: ʔizan ho:ŋa jutasando:. 「沖縄には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」

3151 nʔimutunu ʔubussa munnare: tʔarie: mutɕe:ɕan(do:). 「荷物が重かったので、二人でもった。」

6052 saburo:{wa/ja} ɕi:ro:ni guɕi:{de/hen/jen} ʔutattan do:. 「三郎は次郎に棒でなぐられた。」

(5)材料や原料などの構成要素をあらわす。

5851 utɕo: de:e: kagooba tʔukutʔando:. 「夫は竹でかごをつくった。」

(6)原因をあらわす用法もみられた。上嘉鉄方言でも、名詞 jamai (病気) の en 格のほか、動詞 jamjui (病む) の中止形の用例が現れている(cf.6653)。

6651 hanako: kiju:kara jamaie: nʔinbondo:. 「花子はきのうから病気でねている。」

cf. 6653 hanako: su:kara jamɛn nʔinbun. 「花子はきのうから病気でねている。」(花子はきのうから病んでねている。)

(7)移動の到着点をあらわす。

0351 n:, hate:{je/e} wannu ʔikin. 「うん、畑へはおれがいく。」

3752 ʔaɕi:ja kʔanmakara {umikatɕi/umije:} ʔju: tunnʔa ʔidza(do:). 「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

以上示してきた en 格の各用法について、(1)間接対象、(2)動きにかかわるところ・ときは nʔi 格と(2.3.6)、(3)動きがなりたつ場所は zen 格と(2.3.8)、(4)道具、手段、(5)構成要

素、(6)原因は **sen** 格と(2.3.7)、(7)到着点は **katçi** 格(2.3.9)と、それぞれ重なっている。

### 2. 3. 6 n'i 格

(1)動作のあいてや基準など、間接的な対象をあらわす。**en** 格にも同様の用法がみられる(2.3.5の(1))。<sup>24</sup>

7253 **kazukonu muntu jinmun getao hanakon'imu ho:en turaso:**「和子のとおなじげたを 花子にもかかってやろう。」

3852 **?uma:ja umini tçikasannati ?junu {?masando:/umasando:}**。「ここは海にちかいので魚がうまい。」

7451 **hanako: ?anma:{e:/n'i} tura: t'itumundo:**。「花子は顔がかあさんによく似ている。」

うけみ文や使役文で、動作の主体も **n'i** 格であらわされる。

6053 **saburo:wa ziro:{n'i/en} bo:sen ?utattan.**「三郎は次郎に棒でなぐられた。」

6752 **hanako: {?okka:/?okkan}ni mun{woba/joba} kamasarondo:**。「花子はかあさんにごはんをたべさせてもらった。」

(2)動作や状態のかかわるところ、動作や状態がなりたつときをあらわす。この用法は **en** 格でもあらわされる(2.3.5の(2))。

1651 **?itukunu {?utunnu/?udunu} j<sup>2</sup>ançira:(nu) {ui:n'i/ui:e:} ?uça:ri.**「いとこの布団が やねの上にほしてある。」

2351 **magö: ?udukara to:k'o:{je:/n'i} undo:**。「孫が去年から東京にいる。」

2551 **hatçigatsun'ie: muduren çikkamu wakarando:te:**。「八月には帰ってくるようだ。」

(3)変化の結果をあらわす。これは **en** 格にはみられない用法である。また  $\emptyset$  格形式の用例が現れているが(5332)、用例数自体が少ないためさらなる調査が必要である。

5351 **φudu ?itukunu tçu:gakko:nu çinçe:n'i natando:**。「去年いところが中学校の先生になった。」

cf. 5352 **hudu: ?itokoña tçu:gakko:nu çinse: natan(do:)**。「去年いところが中学校の先生になった。」(去年いところが中学校の先生なった(よ)。)

なお上嘉鉄方言でも、**-n'i**、**-en** とともに移動動作の目的をあらわすのには用いられない<sup>25</sup>。

cf. 3751 **?azi:ja k<sup>2</sup>anmakara {?umikatçi/?umije:} j<sup>2</sup>u:o:ba tunja ?izando:**。「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」)

6952 **?okka:ja wankatçi mun horija ?içan do:**。「かあさんは市場へ買物に行った。」

2651 ?anma:ja ?atça to:k'io:katçi jinŋank<sup>2</sup>annari ?o:i:ja ?i{tç/k}indo:. 「かあさんはあした東京へむすこに会いに行く。」

### 2. 3. 7 sen 格<sup>26</sup>

(1)道具、手段をあらわす<sup>27</sup>。en 格にも同様の用法がみられる(2.3.5の(4))。

3153 n'imotsunu {?ubussaren/?ubusattan munen} ?tarisen muttçan. 「荷物が重かったので、二人でもった。」

6053 saburo:wa ziro:{n'i/en} bo:sen ?utattan. 「三郎は次郎に棒でなぐられた。」

3251 φun ?uwage: nanma ?okinawae: n'içenjençe: ho:tando:. 「この上着はこのまえ沖縄で二千円で買った。」

(2)材料や原料などの構成要素をあらわす。この用法も、en 格に重なる(2.3.5の(5))。

5852 utto: de:he: so:bi tukutando:. 「夫は竹でかごをつくった。」

(3)原因をあらわす用法もみられた。上2つの用法と同じく、やはり en 格にもみられる用法である(2.3.5の(6))。

6652 hanako: tçiju:kara jamai{sen/se:} ninbon do:. 「花子はきのうから病気でねている。」

### 2. 3. 8 zen 格

うごきや状態がなりたつ場所をあらわす(場所名詞)。同様の用法が en 格にもみられる(2.3.5の(3))。

2853 jozimadi jeki{je/zen} matço:ri jo:. 「四時まで駅でまっておれ。」

7053 mitçizen gakkono:nu çinse:tu ?o:ta. 「道で学校の先生に会った。」

3253 ?un ?uwage: nanma:ta ?okinawazen n'isenenzen ko:tan. 「この上着はこのまえ沖縄で二千円で買った。」(注 27 も参照)

また次の用例では、zen 格、n'i 格、en 格の3形式でゆれがみとめられた。場所名詞がこれらの格形式をとる場合、その文法的意味がかなり近づくことが窺える。

3353 ?okinawa{zeno:/n'e/n'o:/jeno:} {middasan/mindasan} k'açinu ?an.

### 2. 3. 9 katçi 格

移動の到着点をあらわす。同様の用法が en 格にもみられる(2.3.5の(7))。

0251 da: {hate:katçi/hate:n'i} {?ikijo:/?ikinja}. 「おまえが畑へ行け。」

0353 ?i:, hate:katçe: wannu ?ika. 「うん、畑へはおれがいく。」

3753 zisano: kanmakara ?umikatçi ju tunn'a ?izan. 「じいさんは朝から海へ魚をとり

いった。」

上の用例 0251 では **n'i** 格も現れている。その他に<到着点>の **n'i** 格の用例はみられないのだが、訳文を「畑に」などのようにすれば、多くの用例が現れるだろう。

### 2. 3. 10 tu 格

(1)相互的な動作のあいてをあらわす。

5951 **ɕi:ro:ja ?uttunu saburo:tu ɕittɕit'an(do:)**. 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」

7051 **mittɕi:e gakk:nu ɕinɕe:{tu/e} o:t'an(do:)**. 「道で学校の先生に会った。」(道で学校の先生と会った。)

(2)相互的な関係がなりたつ、一方の対象をあらわす。

5153 **kame:n n'inbidaki nariba ?inŋa:ja guru:tu {jinmun/?issu} ʒa**. 「食べてねるだけならいぬやねことおなじだ。」

7251 **kazukonu muntu t'itumun assa:(o:ba) hanakoemu ho:e: kuririjo:**. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」(和子のものとおなじげた(を)花子にもかってやろう。)

### 2. 3. 11 kara 格

(1)移動の出発点や動作や状態の開始時点など、コトガラコトガラの起点をあらわす。

2453 **mag: ?itu to:k'o:kara mudurikka**. 「孫はいつ東京から帰るか。」

2353 **mag:nu ?udukara to:k'o:jen ?un**. 「孫が去年から東京にいる。」

3751 **?azi:ja k'anmakara {?umikatɕi/?umje:} j'u:o:ba tunja ?izando:**. 「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

(2)原料をあらわす用法も見られた。材料などを表す **sen** 格、**en** 格との使い分けについてのさらなる調査が必要である。

4451 **ɕe:ja ɕumikara tukurindo:**. 「酒は米からつくる。」

(3)1例だが、動作にかかわる場所(以下の用例では通り過ぎる場所)をあらわす用例もみられた。**kara** 格のこの用法は琉球語全体に見られるものであり、上嘉鉄方言にも保たれていることがわかる。

1351 **mitɕinu mannakakara: ?attɕiba ?ikando:**. 「道のまんなかをあるいてはいけない。」(道のまんなかからあるいてはいけない。)

### 2. 3. 1 2 **madi** 格

動作や状態のおよぶ範囲をあらわす。なお、用例 2753 は複合連体格の例である。

3053 **ziro, ?un n'imoto: ja:madi hann'ijen izenkuri.** 「次郎、この荷物を家までかついで行ってくれ。」

2851 **jozimate: jekje: matço:rijo:.** 「四時までで駅でまっておれ。」(四時までは駅でまっておれ。 \*made:<madi+ -ja)

2753 **?o:sakakara to:k'o:madinu kisačino: sansakaja:.** 「大阪から東京までの汽車賃はいくらだろうか。」

### 2. 3. 1 3 **madin'i:**格

動作がそのときよりもまえに成立する、あるいは成立したことをあらわす。**madi** 格でも現れているが、いずれも用例が少ないため、さらなる調査が必要である。

2951 **gozimadin'i: muduranba narando:.** 「5時までに帰らなくてはならない。」

cf. 2953 **gozimadi muduranba naran.** 「5時までに帰らなくてはならない。」

### 2. 3. 1 4 格の周辺 (あるいは周辺の格)

ここでは、現代日本語共通語の「-より」、引用の「-と」に対応する形式を挙げる。

#### 2. 3. 1 4. 1 -jurimu/-jukkamu

比較の基準をあらわす。

1751 **kiju: cu:juri hadinu {?tçusari/?tçusatando:}.** 「きのうは今日より風が強かった。」

3951 **{j<sup>2</sup>ujukamu/j<sup>2</sup>ujurimu} n'ikunu {ho:nu/ho:ŋa} takačando:.** 「魚より肉のほうが高い」(魚よりも肉のほうが高い。)

#### 2. 3. 1 4. 2 -ten

話や考えの内容をあらわす。

3553 **hakonu nakajeno: manzu:nu {?ik<sup>2</sup>ut<sup>2</sup>u/sansa} ?anten ?umi:rijo.** 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

## 2. 4 中里

中里方言には以下の 11 の格形式と 2 つの周辺の形式がみとめられる。

### 2. 4. 1 **ŋa** 格

(1)述語のさししめす動作、変化、状態の主体をあらわす。このとき、**ŋa** 格名詞は従属節にも現れることができる (6873、3171)。



- 1871 {çiruduri:ŋa/maççiru: tuiŋa} tinto:(oba) {tuduija:/tuduso:ja:}. 「真っ白なとりが空を飛んでいる。」
- 1573 ?a, ?amiŋa φutittçi:. 「あ、雨が降ってきた。」
- 5371 φudu ?itukuŋa tçu:gakko:nu çinse:n'i nat'ando:. 「去年いとこが中学の先生になった。」
- 1971 ?an jaman'je: inuçiçiŋa ?un nessuija:. 「あの山にはいのししがいるそうだ。」
- 6873 ?isaŋa kuritan kusui numiba no:juro:. 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」
- 3171 n'i:ŋa ?ubussatankara t'aizi muttçando:. 「荷物が重かったので、二人でもった。」

また、いわゆる<総記>の用法もみとめられる。

- 0271 daŋa hate:gatçi ?iki. 「おまえが畑へ行け。」
- 0373 ?in, hate:gatçe: waŋa ?itçui. 「うん、畑へはおれが行く。」
- 0671 dinŋa da: hasajo:. 「どれがおまえの笠だ。」
- 0771 ?un hasaŋa wa: mundza. 「その傘がおれのだ。」

(2)感情や能力の対象をあらわす。なお、この方言では **ba** 格の用例はあらわれなかった。

- 3471 maŋa:ja k'açiŋa sutçundo:. 「孫はお菓子が好きだ。」
- 4071 wano: to:nu saçimiŋa {kanbusai(A)/kanbusaja:(B)}. 「おれは蛸のさしみが食べた<sub>い</sub>。」
- 5473 ?ituko: je:gonu honŋa jun'unsui. 「いとこは英語の本が読める。」

## 2. 4. 2 nu 格

(1)あとに続く名詞句を修飾する連体修飾語となり、その属性や関係するものをあらわす。なお上嘉鉄を除く他の方言と同じく、**nu** 格をとる名詞(句)は1人称、2人称代名詞を除き(2.4.3 参照)制限されていない。

- 1672 ?itokonu hutunŋa janinu i:n'i hutçan do:. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」
- 5973 çïro:ja ?uttunu saburo:tu çittçiti. 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」
- 4171 da:(ja) ?un ?iju:nu na: çittçun{ja/n'a}. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」
- 3571 hakun na:n'je: manzu:ŋa sansa ?antçi ?umujuijo. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」
- 7073 mitçizi gakko:nu çinse:n'i ?o:t'i. 「道で学校の先生に会った。」

また中里方言の **nu** 格も「NP1-nu NP2」で用いられるのが基本であるが、現代日本共通

語の形式名詞的な「の」に相当する用法も少なからず現れている (cf.)。以下の用例では ( ) に例文の逐語訳を記す。

0572 ?un hama: taro:nu mun na. 「この鎌は太郎のか。」(その鎌は太郎の鎌か。)

0973 ?ure: ?uttu:nu munkamu wakara:. 「それはおとうとのものかもしれない。」(それはおとうとのものかもしれない。)

6373 ?un çinbuno: su:nu mun do:. çin'u:nu muno:. ?uri do: 「その新聞はきょうのだ。昨日のものはこれだ。」(その新聞は今日のものだ。昨日のものはそれだ。)

cf. 0571 ?un hama: {taro:nu {na/ka}/taro:suna/taro:nu munna}. 「この鎌は太郎のか。」

0973 ?ure: ?uttu:nu kamu wakara: 「それはおとうとのものかもしれない。」

6371 ?un çinbuno: su:nuda, kin'u:nu muno: ?uriça. 「その新聞はきょうのだ。昨日のはこれだ。」

(2)主節主語となる。中里方言の  $\eta a$  格と  $nu$  格も、主格と属格としての役割分化がかなり進んでおり、主節主語としての  $-nu$  の出現は、志戸桶方言に見られたものと同じ、感嘆形(波線部)などとの呼応に限られるようである(1472、cf.1471)。だが同時に  $\eta a$  格と感嘆形とのくみあわせも現れており(cf.1473)、主語となる  $nu$  格の用法はほぼ失われている。

1472 mitçinu çirusa ja:. 「道が広いなあ。」

cf. 1471 mitçina çirusaija:. 「道が広いなあ。」

1473 mitçina çirusa ja:. 「道が広いなあ。」

従属節主語では  $-nu$  も少なからず現れている。だがこれらの  $-nu$  は訳文の「の」に対応して用いられているにすぎず、やはり、主格用法における  $\eta a$  との使い分けは失われている。

2272 ?an mi:nu ?ubisan çirunu çirusan ?inçaja taru{jo/kai}. 「あの目のおおきい、色の白い男はだれだろう。」

6473 ?aminu hujun he: {?anma/?ani:}ja ja:zi terebibe: mitçui. 「雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。」

## 2. 4. 3 Ø 格

(1)述語のさししめす動作の直接的な対象をあらわす。同様の用法が 2.4.4 の  $jo:ba$  格にもみとめられ、Ø 格とともに用いられている。

6873 ?isaça kuritan kusui numiba no:juro:. 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」

6273 wano: çin'u:ja çinbun jumanti. 「おれはきのうは新聞をよまなかった。」

3771 ?azi:ja k'amakara {?um'je:/?umigatçi} çiju tuinja ?izan. 「じいさんは朝から海へ魚をとりに いった。」

3672 mago:ja mandzu: ha:daki kan<sup>j</sup>ui. 「孫はまんじゅうを皮だけ食べる。」

7171 nu: ho:jukka. 「なにを買おうか。」

ŋa 格とゆれてはいるが、感情の対象をあらわす Ø 格形式の用例もみられた。

4073 wano: to:nu {saçimŋa/saçimidu/saçimi} kanbusa(i). 「おれは蛸のさしみが食べた  
い。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。(1)の直接対象と同じく jo:ba 格にも同様の用法がみとめられ、ともに用いられている。

1373 mitçin manna: ?attçe: ?ikan do:. 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

(3)人称代名詞のうち、1人称代名詞、2人称代名詞(単数)は連体修飾語となるのに、nu 格ではなく Ø 格形式をとる。また、連体修飾語となる nu 格の場合と同じく、Ø 格でも形式名詞的な「の」に相当する用法はみとめられていない(0771、0873 \*( )は例文の逐語訳)。

0473 wa: ke:ja za:n<sup>j</sup>idu ?aru. 「おれの鍬はどこにある。」

0771 ?un hasaŋa wa: munça. 「その傘がおれのだ。」(その傘がおれのもの(だ)。)

4673 wanna: ?azi:ja se:mu tabakumu numa: 「うちのじいさんは酒もたばこものまない。」

0671 diŋa da: hasajo:. 「どれがおまえの笠だ。」

0873 ?un huruçike: da: mun na. 「そのふろしきはおまえのか。」(そのふろしきはおまえのものか。)

Ø 格形式をとって連体修飾語になるヒト固有名詞(人名)の用例も見られた。志戸桶方言場合と同じく、用例が1例のみ、また3人称代名詞の用例はないため、今後さらなる調査が必要である。

7271 {kazukonutu/kazuko assa:tu} {jin mun/t<sup>2</sup>itu ?assa:}o:ba hanakon<sup>j</sup>imu ho:ti {tura so:/kuriro:}. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」({和子のと/和子げたと}おなじ{もの/げた}を花子にもかってやろう。)

また、話者によっては Ø 格ではなく nu 格が用いられることもあるようである。

cf. 0472 wannu k<sup>2</sup>e:ja ça:ni {?assu jo:/?akkai}. 「おれの鍬はどこにある。」

#### 2. 4. 4 jo:ba 格<sup>28</sup>

(1)述語のさしめず動作の直接的な対象をあらわす。

3671 maŋa:ja mandzu:o:ba ha:dakidu kan<sup>j</sup>ui. 「孫はまんじゅうを皮だけ食べる。」

- 7273 kazukonu muntu titu geta(jo:ba) hanakon<sup>j</sup>imu ho:ti turaso:. 「和子のおなじげたを花子にもかってやろう。」
- 5873 uto: de:zi kagujo:ba {t<sup>2</sup>ukuti/t<sup>2</sup>ukutan}. 「夫は竹でかごをつかった。」
- 6773 hanako: ?okkann<sup>i</sup> gohanjo:ba kamatçei mura(t)t<sup>i</sup>. 「花子がかあさんにごはんをたべさせてもらった。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。直接対象の用法と同じく、この用法でも Ø 格のほうが優勢のようである。

- 1873 maççiru: tuiņa sorajo:ba tudui. 「真っ白な鳥が空を飛んでいる。」
- 1273 çiko:zo: nariba ?UN mitçijo:ba ?iki jo:. 「空港ならこっちの道を行きなさい。」
- 1371 mitçinu manna:(o:ba) ?attçei: ?ikan(do:). 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

## 2. 4. 5 n<sup>i</sup> 格

(1)動作のあいてや基準など、間接的な対象をあらわす。

- 7073 mitçizi gakkono:nu çinse:n<sup>i</sup> ?o:t<sup>i</sup>. 「道で学校の先生に会った。」
- 5671 ?UN hanasçie: tuzin<sup>i</sup>ibe:i tçikatça(N). 「その話は妻にだけ聞かせた。」
- 3873 ?uma: ?umin<sup>i</sup> tçikasangara ?ijuņa masai. 「ここは海にちかいので魚がうまい。」
- 7471 hanako: t<sup>2</sup>uraņa ?okkann<sup>i</sup> ju: n<sup>i</sup>tçuija:. 「花子は顔がかあさんによく似ている。」

うけみ文や使役文で、動作の主体も n<sup>i</sup> 格であらわされる。

- 5771 tuzin<sup>i</sup> ji:(o:ba) t<sup>2</sup>ukurasui. 「妻に夕飯を作らせる。」
- 6073 saburo:ja çiro:n<sup>i</sup> butto:zi ?utatti. 「三郎は次郎に棒でなぐられた。」

(2)動作や状態のかかわるところ、動作や状態がなりたつときをあらわす。

- 1671 ?itukunu ?uduņa ?jancira:n<sup>i</sup> {çutçei ?ai/çutçai}. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」
- 2373 mago:ņa hudukara to:k<sup>2</sup>o:n<sup>i</sup> ?ui. 「孫が去年から東京にいる。」
- 3572 hakun na:n<sup>i</sup> manççu:ņa ?ikutu ?antçei ?umujukko. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」
- 1173 çiko:ke: çittçei:n<sup>i</sup> ?ikkaiçika ne:. 「飛行機は一日に一回しかない。」
- 2571 hatçigatsun<sup>i</sup>ie: muduti sun nessuija:. 「八月には帰ってくるようだ。」

(3)変化の結果をあらわす

- 5371 çudu ?itukuņa tçu:gakkono:nu çinse:n<sup>i</sup> nat<sup>2</sup>ando:.. 「中学校の先生になった。」

なお、中里方言の-ni も移動動作の目的をあらわすのには用いられない。

cf. 3771 ?azi:ja k<sup>2</sup>amakara {?um<sup>1</sup>je:/?umigatçi} ?iju tuinja ?izan. 「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」

6973 ?okkano: ?itçibagatçi çina ho:inn<sup>1</sup>a ?izi. 「かあさんは市場へ買い物に行った。」(かあさんは市場へ品買いに行った。)

## 2. 4. 6 zi 格<sup>29</sup>

(1)道具、手段をあらわす。

1073 ?okina:{n<sup>1</sup>e:/gatçi} hun<sup>1</sup>izi ?itçukkamu çiko:kizi ?izan ho:ŋa juta(s)sai. 「沖縄には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」

3171 n<sup>1</sup>i:ŋa ?ubussatankara t<sup>2</sup>ai<sup>1</sup>zi mutçando:. 「荷物が重かったので、二人でもった。」

3273 ?UN ?uwage: n<sup>1</sup>anma ?okina:zi n<sup>1</sup>isenenzi ho:ti. 「この上着はこのまえ沖縄で二千円で買った。」

(2)材料や原料などの構成要素をあらわす。

5871 uto: de:zi so:çink<sup>2</sup>a:(o) t<sup>2</sup>ukut<sup>2</sup>an. 「夫は竹でかごをつくった。」

(3)うごきや状態がなりたつ場所をあらわす (場所名詞)。

2871 jozimadi jekizi mattçurijo:. 「四時まで駅でまっておれ。」

7073 mitçi<sup>1</sup>zi gakkono:nu çinse:n<sup>1</sup>i ?o:t<sup>2</sup>i. 「道で学校の先生に会った。」

3273 ?UN ?uwage: n<sup>1</sup>anma ?okina:zi n<sup>1</sup>isenenzi ho:ti. 「この上着はこのまえ沖縄で二千円で買った。」

(4)原因をあらわす。他の方言と同じく、名詞 jamai (病気) の zi 格と、動詞 jamjui (病む) の中止形が現れている(cf.6671)。

6673 hanako: tçin<sup>1</sup>u:kara jamaizi nittui. 「花子はきのうから病気でねている。」

cf. 6671 hanako: tçin<sup>1</sup>u:kara jadi nittui. 「花子はきのうから病気でねている。」(花子はきのうから病んでねている。)

## 2. 4. 7 gatçi 格

移動の到着点をあらわす。

0271 daŋa hate:gatçi ?iki. 「おまえが畑へ行け。」

3773 ?azi:ja k<sup>2</sup>amakkara ?umigatçi ?iju {tuinn<sup>1</sup>a/tunn<sup>1</sup>a} {?izan/?izi}. 「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」

#### 2. 4. 8 tu 格

(1)相互的な動作のあいてをあらわす。

5971 **ɕi:ro: ?uttunu saburo:tu ɕittɕit<sup>2</sup>a(n).**「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」

(2)相互的な関係がなりたつ、一方の対象をあらわす。

5171 **kadi nittun dakinariba: ?inŋa:ja guru:tu {?issu/t<sup>2</sup>itu}za:**「食べてねるだけなら いぬやねことおなじだ。」

7273 **kazukonu mun<sup>2</sup>tu titu geta(jo:ba) hanakon<sup>2</sup>imu ho:ti turaso:**「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」(和子のものとおなじげた(を)花子にもかってやろう。)

#### 2. 4. 9 kara 格

(1)移動の出発点や動作や状態の開始時点など、コトガラコトガラの起点をあらわす。

2471 **maŋa:ja itu to:k<sup>2</sup>o:kara {mudujukka/mudujusujo:}**「孫はいつ東京から帰るか。」

2372 **mago:ŋa hudukara to:kjo:ni ?ui.**「孫が去年から東京にいる。」

3771 **?azi:ja k<sup>2</sup>amakara {?um<sup>2</sup>je:/?umigatɕi} ?iju tɕin<sup>2</sup>ja ?izan.**「じいさんは朝から海へ魚をとり いった。」

(2)原料をあらわす。ただし話者によっては **zi** 格が用いられており(cf.4471)、英語の **of** と **from**、現代日本語共通語の **デ** 格と **カラ** 格に見られるような使い分けはないようである。

4473 **se:ja ɕumikara t<sup>2</sup>ukujusu do:**「酒は米からつくる。」

cf. 4471 **se:ja ɕumizi {t<sup>2</sup>ukujui(A)/t<sup>2</sup>ukujusudo:(B)}**。「酒は米からつくる。」

#### 2. 4. 10 madi 格

動作や状態のおよぶ範囲をあらわす。なお、用例 2772 は複合連体格の例である。

3073 **ɕi:ro:, ?un n<sup>2</sup>imutsu jo:ba ja:madi hatamiti ?izikuri.**「次郎、この荷物を家までかっいで行ってくれ。」

2871 **jozimadi jekizi mattɕurijo:**「四時まで駅でまっておれ。」

2772 **?o:sakakara to:k<sup>2</sup>o:madinu kiɕatɕino: sansakai.**「大阪から東京までの汽車賃はいくらだろうか。」

#### 2. 4. 11 madin<sup>2</sup>i 格

動作がそのときよりもまえに成立する、あるいは成立したことをあらわす。

2971 **gozimadin<sup>2</sup>je: muduranba: narando:**「5時までに帰らなくてはならない。」(5時までは戻らなければならないよ。)

#### 2. 4. 12 格の周辺 (あるいは周辺の格)

ここでは、現代日本語共通語の「-より」、引用の「-と」に対応する形式を挙げる。

## 2. 4. 1 2. 1 -kkamu

比較の基準をあらわす。

1773  $\text{t̤in}^{\text{h}}\text{u:ja } \underline{\text{su:kkamu}} \text{ hadi}^{\text{h}}\text{ŋa } \text{t̤usatti}$ . 「きのうは今日より風が強かった。」(きのうは今日よりも風が強かった。)

3971  $\text{ʔiju:kkamu} \text{ n̄ikunu } \text{ho:ŋa } \text{ta:sai}$ . 「魚より肉のほうが高い」(魚よりも肉のほうが高い。)

1072  $\text{ʔokina:gat̤e: } \{\text{huni/humi}\}^{\text{h}}\text{t̤i } \underline{\text{ʔit̤ukkamu}} \text{ } \text{çiko:kid̤i } \text{ʔid̤an } \text{ho:ŋa } \text{jutasari}$ . 「沖縄には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」

## 2. 4. 1 2. 2 -t̤i

話や考えの内容をあらわす。

3571  $\text{hakun } \text{na:n}^{\text{h}}\text{je: } \text{manzu:ŋa } \text{sansa } \underline{\text{ʔant̤i}} \text{ } \text{ʔumujuijo}$ . 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

## 2. 5 荒木

荒木方言には以下の 11 の格形式と 2 つの周辺的な形式がみとめられる。

### 2. 5. 1 ŋa 格

(1) 述語のさししめす動作、変化、状態の主体をあらわす。このとき、ŋa 格名詞は従属節にも現れることができる (6892、3191)。

1892  $\{\text{çiru/maççirunu}\} \underline{\text{turina}} \text{ tinto: } \{\text{tuduĩ/tudun do:}\}$ . 「真っ白なとりが空を飛んでいる。」

1591  $\text{ʔage: } \underline{\text{ʔamina}} \text{ } \text{ɸutitt̤i:}$ . 「あ、雨が降ってきた。」

5392  $\text{huzu } \underline{\text{ʔitukuŋa}} \text{ } \text{t̤u:ŋakko:nu } \text{çinçe:n}^{\text{h}}\text{i } \text{natan do:}$ . 「去年いとこが中学の先生になった。」

1991  $\text{ʔan } \text{jaman}^{\text{h}}\text{je: } \underline{\text{ʔinuçičiŋa}} \text{ } \text{ʔunti:sa}$ . 「あの山にはいのししがいるそうだ。」

6892  $\underline{\text{ʔičaŋa}} \text{ } \text{kuritan } \text{kusuri } \text{numiba: } \text{no:rundaro:}$ . 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」

3191  $\underline{\text{n}^{\text{h}}\text{i:ŋa}} \text{ } \text{ʔubussatankann}^{\text{h}}\text{i } \text{t}^{\text{h}}\text{arizi } \{\text{mutt̤i/mutt̤ando:}\}$ . 「荷物が重かったので、二人でもった。」

また、いわゆる<総記>の用法もみとめられる。

- 0291 daŋa hate:katçi iki. 「おまえが畑へ行け。」  
0391 ?in, hate:çje: waŋa ?itçui. 「うん、畑へはおれが行く。」  
0692 dinŋa da: hasa jo:. 「どれがおまえの笠だ。」  
0792 ?un hasaŋa wa: mun do:. 「その傘がおれのだ。」

(2)感情や能力の対象をあらわす。

- 3492 maŋa:ja k<sup>2</sup>açina suki do:. 「孫はお菓子が好きだ。」  
4093 wano: to:nu sacimiŋa kanbusai. 「おれは蛸のさしみが食べたい。」  
5493 ?ituko: je:gonu {honŋa jumi:su/hondu {jumi:/jumi: sui}}. 「いここは英語の本が読める。」

## 2. 5. 2 nu 格

(1)あとに続く名詞句を修飾する連体修飾語となり、その属性や関係するものをあらわす。上嘉鉄を除く他の方言と同じく、nu 格をとる名詞(句)は1人称、2人称代名詞を除き(2.5.3参照)制限されていない。

- 1691 ?itukunu ?udu jançira:n<sup>i</sup> çutçi ?ai. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」  
5993 çairo:ja ?uttunu saburo:tu çittçiti. 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」  
4193 da: ?un junu namae çittçunn<sup>a</sup>. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」  
3592 h<sup>w</sup>akun nakan<sup>i</sup> manzu:ŋa ?ikutsu ?antçi ?uma:inn<sup>a</sup>. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」  
7092 mitçizi gakko:nu çinçe:n<sup>i</sup> ?o:tando:. 「道で学校の先生に会った。」

また荒木方言の nu 格も「NP1-nu NP2」で用いられるのが基本であり、現代日本共通語の形式名詞的な「の」に相当する用法は今回の調査ではみとめられなかった。以下の用例では( )に例文の逐語訳を記す。

- 0591 ?un hama: taro:nu munna. 「この鎌は太郎のか。」(その鎌は太郎のもののか。)  
0991 ?ure: ?uttu:nu mun<sup>k</sup>amu {wakaran/çiriran/çirira:}. 「それはおとうとのかもしれない。」(それはおとうとのもののかもわからない。)  
6392 ?un çinbunno: su:nu mun<sup>d</sup>o: çin<sup>i</sup>u:nu mun<sup>o</sup>: ?uri do:. 「その新聞はきょうのだ。昨日のものはこれだ。」(その新聞は今日のものだ。昨日のものはそれだ。)

(2)主節主語となる。荒木方言の ŋa 格と nu 格も主格と属格としての役割分化がかなり進んでいるとみられ、主節主語としての-nu の出現は、感嘆形(波線部)などとの呼応に限られるようである(1491)。

- 1491 mitçin<sup>a</sup> çirusaija:./mitçinu çirusaja:. 「道が広いなあ。」



従属節主語では、主節主語よりも **-nu** が出やすい。だが、訳文が「(雨)の」となっているにもかかわらず **ŋa** 格が用いられている用例も現れており (cf.6492)、**nu** 格の主格としての用法はやはり衰退していると言える。

2291 ʔan mi:nu uɸusan irunu ɕirusan jinŋa: tarukai. 「あの目のおおきい、色の白い男はだれだろう。」

6493 ʔaminu ɸurun he: ʔanmaja ja:zi terebiba:ri mitɕui. 「雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。」

cf. 6492 ʔamiŋa hurun ɕi:ja ʔanmaja ja:zi terebibakkai mitsun do:. 「雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。」

### 2. 5. 3 Ø 格

(1)他の方言と異なり、荒木方言の Ø 格には、述語のさししめず動作、変化、状態の主体をあらわすという主格としての用法が積極的にみとめられる。例えば 1691 と同じ訳文の他の話者による例文でも、「布団が」に相当する部分は Ø 格で現れている(「データ集」の 1692 参照)。なお、0292 はいわゆる<総記>の用法である。

1492 ʔun mitɕi ɕirukamuja:. 「道が広いなあ。」

1691 ʔitukunu ʔudu jaŋɕira:nʔi ɸutɕi ʔai. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」

0292 da: hate:kanʔi ʔiki. 「おまえが畑へ行け。」

(2)述語のさししめず動作の直接的な対象をあらわす。

6892 ʔiɕaŋa kuritan kusuri numiba: no:rundaro:. 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」

3791 ʔazi:ja kʔamakara ʔumikanʔi jʔu turinja {ʔizi/ʔizando:}. 「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

3692 maŋa:ja manzu: kawadaki kamin do:. 「孫はまんじゅうを皮だけ食べる。」

5892 uto: de:zi kaqu tsukutan do:. 「夫は竹でかごをつくった。」

7293 kazukonu muntu titsu munnu ʔassa hanakonʔimu ho:ti kuriro:. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」

7192 nu: ho:o:ka. 「なにを買おうか。」

また、感情の対象をあらわす用法もみられた。

3491 maŋo:ja {kʔwaɕiŋa suki/kʔwaɕi sutɕun}do:. 「孫はお菓子が好きだ。」

5492 ʔituko: jeigonu hon juminsun do:. 「いところは英語の本が読める。」

(3)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。(2)の直接対象の用法とともに、2.5.4の *jo:ba* 格に同様の用法がみとめられるが、いずれの用法においても、それを実現する主な形式は  $\emptyset$  格である。

1291 *ku:ko: nariba* {*?un/φun*} *mitçi* ?*ikijo:*. 「空港ならこっちの道を行きなさい。」

1392 *mitçinu manna:* ?*akkiba* ?*ikan do:*. 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

1891 {*çirusan t<sup>2</sup>uriņa/çiruduriņa*} *tinto:* *tudui*. 「真っ白な鳥が空を飛んでいる。」

(4)人称代名詞のうち1人称、2人称代名詞の単数形は<sup>30</sup>、連体修飾語となるのに  $\emptyset$  格形式をとる。また、連体修飾語となる *nu* 格と同じく、 $\emptyset$  格でも形式名詞的な「の」に相当する用法はみとめられていない(0792、0892 \*()は例文の逐語訳)。

0491 *wa: k<sup>2</sup>we:ja dza:n<sup>2</sup>i* {*an/ai*}. 「おれの鍬はどこにある。」

0792 ?*un kasa: wa: mundo:*. 「その傘がおれのだ。」(その傘がおれのもの(だ)。)

0691 *diruņa da:* {*kasa/hasa*}. 「どれがおまえの筈だ。」

0892 ?*un ?utsukki:ja da: munna:*. 「そのふろしきはおまえのか。」(そのふろしきはおまえのものか。)

$\emptyset$  格形式をとって連体修飾語になるヒト固有名詞(人名)の用例も見られた。やはり3人称代名詞の用例がないため、さらなる調査が求められる。

0592 ?*un hama: taro: munna:*. 「この鎌は太郎のか。」(その鎌は太郎ものか。)

## 2. 5. 4 *jo:ba* 格<sup>31</sup>

(1)述語のさししめず動作の直接的な対象をあらわす。

5893 ?*uto: de:zi kaqujo:ba tsukut<sup>(?)</sup>i*. 「夫は竹でかごをつくった。」

5793 *tuzin<sup>2</sup>i ji: {jo:ba/wo:ba}* {*tsukuraçi/tsukurasui*}. 「妻に夕飯を作らせる。」

2.5.3で述べたように荒木方言の直接対象をあらわす主要な格形式は  $\emptyset$  格であり、上の2つの用例にも、「かごを」「夕飯を」の部分が  $\emptyset$  格形式となっている同じ訳文からの用例が現れている。つまり *jo:ba* 格は、直接対象の用法においていわば2次的な形式だと言える。以下に示すように、*-jo:ba* の形をとらない用例が少なからず現れていることから、それは明らかである。

cf. 4191 *da: ?un j<sup>2</sup>unu namaeba çittçunja*. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」

3091 *çiro:, ?un n<sup>2</sup>imutsuo ja:madi hatamiti* {*?izi kuriri/muçi ?izi kuriri*}. 「次郎、この荷物を家までかついで行ってくれ。」

6893 ?*isaņa kuritan kusurio numiba* {*no:run dçaro:/no:ruso: aranka (ja:)*}. 「医者がかく

れたくすりをのめばなおるだろう。」

6292 wano: tɕin<sup>ɲ</sup>u:ja ɕinbunno: jumantan do:. 「おれはきのうは新聞をよまなかった。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。この用法も主に Ø 格であられる。

1391 mitɕinu manna:(oba) ʔattɕe: ʔikan. 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

## 2. 5. 5 n<sup>ɲ</sup>i 格

(1)動作のあいてや基準など、間接的な対象をあらわす。

7093 mitɕizi gakkono: ɕinse:n<sup>ɲ</sup>i ʔo:ti. 「道で学校の先生に会った。」

5692 ʔun hanaɕe: tuzin<sup>ɲ</sup>i daki {tɕikatɕan/hanatɕan} do:. 「その話は妻にだけ聞かせた。」

3893 ʔuma:ja ʔumin<sup>ɲ</sup>i tɕikasankaran<sup>ɲ</sup>i juŋa {masai/masari}. 「ここは海にちかいので魚がうまい。」

7492 hanako: tsuraŋa ʔanman<sup>ɲ</sup>i ju n<sup>ɲ</sup>itsun do:. 「花子は顔がかあさんによく似ている。」

うけみ文や使役文で、動作の主体も n<sup>ɲ</sup>i 格であられる。

5792 tuzin<sup>ɲ</sup>i ji:ja tsukurusun do:. 「妻に夕飯を作らせる。」

6093 saburo:ja ɕi:ro:n<sup>ɲ</sup>i butto:zi ʔutatti. 「三郎は次郎に棒でなぐられた。」

(2)動作や状態のかかわるところ、動作や状態がなりたつときをあらわす。

1691 ʔitukunu ʔudu janɕira:n<sup>ɲ</sup>i ɕutɕi ʔai. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」

2391 maŋo:ŋa ɕuzukara to:k<sup>ɲ</sup>o:n<sup>ɲ</sup>i ui. 「孫が去年から東京にいる。」

3591 hakunu {naka/na:}n<sup>ɲ</sup>i manɕu:ŋa ʔikutsu ʔantɕi ʔumuinja. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

1192 ɕiko:kija ɕittɕi:n<sup>ɲ</sup>i ʔikkaiɕika {ne:ran/tuban}do:. 「飛行機は一日に一回しかない。」

2591 hatɕiqatsun<sup>ɲ</sup>ie muduti sunti:do:. 「八月には帰ってくるようだ。」

(3)変化の結果をあらわす

5392 huzu ʔitukuŋa tɕu:ŋakko:nu ɕinɕe:n<sup>ɲ</sup>i natan do:. 「中学校の先生になった。」

なお、荒木方言の-n<sup>ɲ</sup>i も移動動作の目的をあらわすのには用いられない。

cf. 3792 ʔazi:ja k(?)anmakara ʔumizi ju {tunn<sup>ɲ</sup>a/turi:n<sup>ɲ</sup>a} ʔizan do:. 「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」

6993 ʔokkanno: {ʔitɕiba/miɕija}n<sup>ɲ</sup>i mun ho:inn<sup>ɲ</sup>a ʔizi. 「かあさんは市場へ買い物に行った。」(かあさんは市場にものの買いに行った。)

## 2. 5. 6 zi 格

(1) 道具、手段をあらわす。

1092 ʔokina: kan<sup>1</sup>e: hunizi ʔizan jurimu çiko:kizi ʔizan ho:ŋa jutasan do: 「沖縄には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」

3191 n<sup>1</sup>i:ŋa ʔubussatankann<sup>1</sup>i t<sup>2</sup>arizi {muttçi/muttçando:}. 「荷物が重かったので、二人もった。」

3292 ʔun ʔuwaŋe: n<sup>1</sup>anma ʔokina:zi n<sup>1</sup>içenenzi {ho:tan/ho:tasu} do: 「この上着はこのまえ沖縄で二千元で買った。」

(2) 材料や原料などの構成要素をあらわす。

5892 uto: de:zi kagu tsukutan do: 「夫は竹でかごをつくった。」

(3) うごきや状態がなりたつ場所をあらわす（場所名詞）。

2891 jozimadi jekizi mattçuri(jo): 「四時まで駅でまっておれ。」

7092 mitçizi gakkono:nu çinçe:n<sup>1</sup>i ʔo:tando: 「道で学校の先生に会った。」

3291 ʔun ʔuwaŋe: ʔune:da ʔokinawazi n<sup>1</sup>içenenzi {ho:tasudo:/ho:tando:}. 「この上着はこのまえ沖縄で二千元で買った。」

また以下の例では、「行った」ではなく「魚をとり」にかかるかたちで、動きをなりたつ場所をあらわす zi 格があらわれている。

3792 ʔazi:ja k<sup>(?)</sup>anmakara ʔumizi ju {tunn<sup>1</sup>a/turi:n<sup>1</sup>a} ʔizan do: 「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」(じいさんは朝から海で魚とりに行ったよ。)

(4) 原因をあらわす。今回の調査では名詞 bjo:ki (病気) の zi 格の用例のみ確認され、動詞 jamjui (病む) の中止形の用例は現れなかった。

6692 hanako: tçin<sup>1</sup>u:kara bjo:kizi nittun do: 「花子はきのうから病気でねている。」

## 2. 5. 7 kan<sup>1</sup>i 格<sup>32</sup>

移動の到着点をあらわす。また、移動の目的あらわされている用例もみられた(6992)。

3791 ʔazi:ja k<sup>2</sup>amakara ʔumikan<sup>1</sup>i j<sup>2</sup>u turinja {ʔizi/ʔizando:}. 「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」

0292 da: hate:kan<sup>1</sup>i ʔiki. 「おまえが畑へ行け。」

0392 ʔun, hate:kan<sup>1</sup>e: waŋa ʔitsundo: 「うん、畑へはおれがいく。」

6992 ʔanmaja ʔitçibakan<sup>1</sup>i {kaimunkan<sup>1</sup>i/ho:imun çin<sup>1</sup>a} ʔizan do: 「かあさんは市場へ買い物に行った。」(かあさんは市場に{買い物へ/買い物しに}行った。)

### 2. 5. 8 tu 格

(1)相互的な動作のあいてをあらわす。

5992 ziro:ja ?uttunu saburo:tu ciŋciŋando:. 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」

(2)相互的な関係がなりたつ、一方の対象をあらわす。

5192 kadi ninbindaki nariba ?inŋ<sup>w</sup>aja guru:tu ?onnaŋi do:. 「食べてねるだけなら いぬ  
やねことおなじだ。」

7292 kazukonu muntu ?onnaŋi ?assa hanakon<sup>j</sup>imu ho:ti kuriro:. 「和子のとおなじげたを  
花子にもかってやろう。」(和子のものとおなじげた花子にもかってやろう。)

### 2. 5. 9 kara 格

(1)移動の出発点や動作や状態の開始時点など、コトガラの起点をあらわす。

2491 maŋo:ja ?itsu to:k'o:kara mudujusujo:. 「孫はいつ東京から帰るか。」

2391 maŋo:ŋa ɸuzukara to:k'o:n<sup>j</sup>i ui. 「孫が去年から東京にいる。」

3793 ?azi:ja k<sup>2</sup>amakara ?umi:katçi ju tunn'a ?izi. 「じいさんは朝から海へ魚をとり  
いった。」

(2)原料をあらわす。材料などをあらわす **zi** 格との使い分けについてはさらなる調査が  
求められる。

4492 ɸe:ja humikara tsukurusudo:. 「酒は米からつくる。」

### 2. 5. 10 madi 格

動作や状態のおよぶ範囲をあらわす。なお、用例 2791 は複合連体格の例である。

3092 ziro:, ?un n<sup>j</sup>imotsuo ja:madi hatamiti ?izi kuri. 「次郎、この荷物を家までかついで  
行ってくれ。」

2891 jozimadi jekizi mattçuri(jo):. 「四時まで駅でまっておれ。」

2791 ?o:sakakara to:k'o:madinu kiçatçinno: sansa bakkai {kai/ka:rukai}. 「大阪から東  
京までの汽車賃はいくらだろうか。」

### 2. 5. 11 madin<sup>j</sup>i 格

動作がそのときよりもまえに成立する、あるいは成立したことをあらわす。

2991 gozimadin<sup>j</sup>i muduranba narando:. 「5時までに帰らなくてはならない。」

### 2. 5. 12 格の周辺 (あるいは周辺の格)

ここでは、現代日本語共通語の「-より」、引用の「-と」に対応する形式を挙げる。

2. 5. 1 2. 1 -kamu/-juri(mu)

比較の基準をあらわす。2種類の形式が併用されているようである。

1792 t̥inu:ja {su:kamu/su:jurimu} haʒiŋa tsu:satan do:. 「きのうは今日より風が強かった。」(きのうは今日よりも風が強かった。)

3991 j̥ukamu n̥ikunu ho:ŋa {ta:sai/ta:sando:}. 「魚より肉のほうが高い」(魚よりも肉のほうが高い。)

1092 ʔokina: kan̥e: hunizi ʔiʒan jurimu ʧiko:kizi ʔiʒan ho:ŋa jutasan do:. 「沖繩には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」

2. 5. 1 2. 2 -t̥i

話や考えの内容をあらわす。

3592 h<sup>w</sup>akun nakan̥i manʒu:ŋa ʔikutsu ʔant̥i ʔuma:inn̥a. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

### 3 喜界島方言の格の体系

以上、喜界島の5つの方言の格形式について記述してきた。その体系を表に示す(次頁)。またそれぞれの格形式について、本報告における考察の結果は以下のようにまとめられる。

1. ŋa 格と nu 格について、上嘉鉄をのぞく4つの方言のいずれでも、主格と属格の役割分化が進んでいる。だが上嘉鉄方言では、主格、属格が nu 格に統合されつつあり、ŋa 格は衰退の傾向にある。
2. Ø 格について、荒木をのぞき、4つの方言におけるその用法の中心は直接対象をあらわすことであるが、同じく直接対象の用法をもつ jo:ba 格(-o:ba、-ba 含む)との関わりにおいて、いずれの形式が用いられやすいかに方言差がみとめられる。また荒木方言の Ø 格には、直接対象のほか動きの主体を表す用法が積極的にみとめられ、文法的意味の範囲が広い。
3. n̥i 格~kai 格(-kat̥i、-gat̥i、-kan̥i 含む)について、まず、小野津・志戸桶・中里・荒木の4つの方言でのそれぞれの格形式の用法はほとんど同じであった。上嘉鉄方言でも、n̥i 格、kat̥i 格の用法は他の4方言と同じである。

だが上嘉鉄方言の格体系には他とは大きく異なる点が2点みとめられる。まず、他の4方言では zi 格にまとめられている道具や手段をあらわす用法と動きのなりたつ場所をあらわす用法をもつ形式が、sen 格と zen 格に分化していること、そして、n̥i 格から

		小野津	志戸桶	上嘉鉄	中里	荒木	
主格		-ŋa	-ŋa	(-ŋa)	-ŋa	-ŋa	
属格(・主格)		-nu	-nu	-nu	-nu	-nu	
対格(・属格・主格)		-∅	-∅	-∅	-∅	-∅	
対格		-jo:ba	-ba	-o:ba	-jo:ba	-jo:ba	
与・処格		-nʲi	-nʲi	-en	-nʲi	-nʲi	
具格		-zi	-zi		-sen	-zi	-zi
処格					-zen		
方向格		-kai	-kai	-katçi	-gatçi	-kanʲi	
共格		-tu	-tu	-tu	-tu	-tu	
奪格		-kara	-kara	-kara	-kara	-kara	
範囲格		-gari/-madi	-madi	-madi	-madi	-madi	
限界格		-garinʲi/ -madinʲi	-madinʲi	-madinʲi:	-madinʲi	-madinʲi	
周辺の格 一格の周辺	比較	-jukka	-jukka(mu)	-jurimu/ -jukkamu	-jukkamu	-kamu/ -juri(mu)	
	引用	-tçi	-tçi	-ten	-tçi	-tçi	

[表：喜界島方言の格の体系]

katçi 格をすっぽりと覆ってしまう意味範囲を持つ、en 格の存在である。上嘉鉄方言は他の地域の人たちから「あそのユミタ（ことば）はほかとちがう」と言われることの多い方言であるが(まつもと 2011)、格体系のこれら2つの特徴も、その見方をうながす要因の1つと言えるだろう。

4. kara 格について、コトガラの起点をあらわす用法のほか、1例だが通り過ぎる場所をあらわす用例が見られた(2.3.11 上嘉鉄、用例 1351)。**-kara** のこの用法は広く琉球語全体にみとめられるものであり、他の方言についても確認する必要がある。
5. 範囲格、限界格について、小野津方言にのみ**-gari**、**-garinʲi** という形式があらわれた。**-madi**、**-madinʲi** との使い分けはみとめられず、これらの形よりも古い形式であると思われる。だが、話者に限らず多く用いられており、衰退の傾向にはない。
6. 周辺の格について(比較、引用)、現れる形式に多少の差が見られるものの、文法的機能においては全く同じであった。なお<引用>は上嘉鉄方言の**-ten** のみ異なっていて、目を引く。

このほか、今回の調査では明らかにしえなかった点も数多くある。その他の地域も含め、

喜界島方言のさらなる調査研究が求められる。

#### 参考文献

- 内間直仁 1978「喜界島志戸桶方言の文法」法政大学沖縄文化研究所『琉球の方言』4:65-126  
国立国語研究所編 1963『沖縄語辞典』大蔵相印刷局  
白田理人・山田真寛・荻野千砂子・田窪行則「琉球語喜界島上嘉鉄方言の談話資料」大西  
正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』3:111-151  
高橋太郎他 2005『日本語の文法』ひつじ書房  
中本正智 1978「喜界島志戸桶方言の語彙」法政大学沖縄文化研究所『琉球の方言』4:1-63  
まつもとひろたけ 2011「奄美喜界島方言のアリ・リ系のかたちをめぐって」(2011.5.22  
国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研  
究」(代表者・木部暢子)研究会(於神戸大学)における発表資料[未公開])

<sup>1</sup> 文法調査は、国立国語研究所 1968「全国方言文法の対比的研究」調査IV調査票」の改訂版「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」琉球方言用調査票（琉球大学 狩俣研究室作成）を用いて行った。同調査票は格形式の調査を主眼とするものである。

<sup>2</sup> 軟口蓋破裂の[ga]でも観察されているが、ここでは[ŋa]に代表させる。以下他の地域においても同じ。

<sup>3</sup> 話者によっては jo:ba 格（対格）を用いるようである。

cf. 5413 ʔituko: jeigonu honjo:ba jumi dikʔui. 「いとは英語の本が読める。」

<sup>4</sup> 形式名詞的な -nu の用法も数例現れていた。以下の用例 6314 では、NP2 の名詞 (mun) が省略できるようである。

cf. 6314 ʔun ʕinbuno kʔu:nu (mun) {do:/ɕa}. {kinʔu:no:/kinʔu:nu munu:} ʔuri do:. 「その新聞はきょうのだ。きのうのはこれだ。」

7213 kazukonutu tʔitsu munnu getajo:ba hanakonʔimu ho:ti huriro:ka. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」

7214 kazukonutu tʔitsu ʔassa:jo:ba hanakonʔimu ho:ti {kuriro:/kuriranba ja:}. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」

<sup>5</sup> 1人称・2人称代名詞の語幹および Ø 格としての扱いについては、同形の語形が用いられている志戸桶方言に準じている。注 14 参照。

<sup>6</sup> [joba]、[juba]などでも観察されているが、ここでは[jo:ba]に代表させる。なお、j の脱落した[oba]、[o:ba]も現れている。

<sup>7</sup> 口蓋化のない[ni]でも観察されているが、ここでは[nʔi]に代表させる。以下 madinʔi 格、他の地域においても同じ。

<sup>8</sup> -nʔi は助辞 -ja にとりたてられると、二重母音あるいは融合して[nʔe:]の形で現れる。

cf. 3313 ʔokina:nʔe: mittasanu kʔaʕinu ʔai. 「沖縄にはめずらしい菓子がある。」

<sup>9</sup> 破擦音[ɕil]でも観察されているが、ここでは[zil]に代表させる。

<sup>10</sup> いわゆるとりたてにも、-gari と -madi の両方の形式が現れている。



- cf. 6511 juwe:n dukin<sup>1</sup>ie: ?anma:gari ?udutando:. 「お祝いのときにはばあさんまでおどった。」
- 6512 ju:wë:nu {tukini/tuke:} ?anmamadı {udutan/?udutan} do:. 「お祝いのときにはばあさんまでおどった。」
- 11 話者によっては ba 格 (対格) が用いられるようである。なお小野津方言でも、同訳文の用例で対格相当形式が現れていた(注 3 参照)
- cf. 5433 ?ituko: jeigonu honba jum<sup>1</sup>u: sun. 「いここは英語の本が読める。」
- 12 形式名詞的な用法の文が 1 例確認されたが、-nu ではなく -no で現れていることから共通語訳に引きずられたものと考えられる。
- cf. 0932 ?ure: ?uttu:no kamu {çirera:/çirira:}.(C) 「それはおとうとのかもしれない。」
- 13 同様の記述が内間 1978 でもなされている(p113)。
- 14 単数の 1 人称代名詞について、(1)で挙げた用例 0331 などから、その語幹は wa と想定される。また複数についても内間 1978 では wanna の形が報告されている。よって連体修飾語となる wa:、wanna:は、∅ 格ではなく、これらの語幹に何らかの助辞が融合して長音化した形式とも捉えられる。だが、da:の形が報告されている単数の 2 人称代名詞語幹に da の形とのゆれがみとめられること(上述の用例 0232、4133 など。内間 1978 でも「あなたは」に相当する形式に da:ja、daja の両方が現れている)、また石垣方言の場合とは異なり、志戸桶方言では-ŋa の[ŋ]の脱落が規則的なものとは言えないことなどから、本報告では便宜的に wa:、wanna:、da:を wa、wanna、da の変わり語幹と捉え、それぞれこの ∅ 格の項で扱う。
- 15 また、ba 格ではなく助辞-ja の後接した形式も多く現れている。
- cf. 4133 daja ?un ?ijunu na:ja çittçunn<sup>1</sup>a. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」
- 5833 uto: de:zi kago: {tsutta/tsuttçan}. 「夫は竹でかごをつくった。」(kagu+ -ja)
- 3031 çïro:, ?un n<sup>1</sup>imutsuo: ja:madi hatamiti ?izi kuri. 「次郎、この荷物を家までかついで行ってくれ。」(n<sup>1</sup>imutsu+ -ja)
- 16 -n<sup>1</sup>i は助辞-ja にとりたてられると、二重母音あるいは融合して[n<sup>1</sup>e:], [ne:]の形で現れる。
- cf. 3332 ?okinawan<sup>1</sup>e: mittasan k<sup>w</sup>açiŋa ?ai. 「沖縄にはめずらしい菓子がある。」
- 6531 ju:we:nu tukine: ?anma:madi {udut<sup>2</sup>ando:/udut<sup>2</sup>i}. 「お祝いのときにはばあさんまでおどった。」
- 17 注 9 に同じ。
- 18 2 人称単数の用例も現れていた。志戸桶方言などと同じく(注 14 参照)、da:を da の変わり語幹と捉えるならば、以下は ∅ 格の用例となる。
- cf. 0253 da: hate:katçi {?iki/?iki}. 「おまえが畑へ行け。」
- 19 ∅ 格で現れている用例もみられた。
- cf. 5452 ?ituko: e:gonu sumutu jumi: {çin/çin}do:. 「いここは英語の本が読める。」(いここは英語の本読めるよ。)
- 20 -du は古典日本語の「ぞ」に対応する助辞。
- 21 [jo:ba]、[oba]でも観察されているが、ここでは[o:ba]に代表させる。
- 22 また志戸桶方言と同じく(注 15 参照)、jo:ba 格ではなく助辞-ja の後接した形式もみられた。
- cf. 3051 çïro: çun n<sup>1</sup>imutu: ja:madi hatamie: {?ize: kuri/mutçe:çen kuri}. 「次郎、この荷物を家までかついで行ってくれ。」(n<sup>1</sup>imutsu+ -ja)
- 5853 ?u(t)to: de:sen kago: {t<sup>2</sup>ukkatçan/t<sup>2</sup>ukutan}. 「夫は竹でかごをつくった。」(kagu

+ -ja)

23 [e:], [jen]などでも観察されているが、ここでは[en]に代表させる。

24 以下の用例では、間接対象の **nʲi** 格などではなく、おそらく現代共通語の「ところ」に相当する形式名詞とのくみあわせが現れている。

cf. 2651 ʔanma:ja ʔatɕa to:kʰo:katɕi jinnankʰannari ʔo:ija ʔi{tɕ/k}indo:. 「かあさんはあした東京へむすこに会いに行く。」(かあさんはあした東京へむすこのところに会いに行く(よ)。\*「データ集」2653も同じ)

25 以下の用例は、一見、移動動作の目的をあらわす **-nʲi** の用例のように思われるが、その語幹名詞が現代日本語共通語からの借用であり、単なる類推によるものと言ってよいだろう。

cf. 6953 ka:tɕano: miɕijakatɕi kaimononʲi ʔiʒan. 「かあさんは市場へ買い物に行った。」

26 [ɕe:], [hen], [he:]などでも観察されているが、ここでは[sen]に代表させる。

27 なお、sen 格以外の形式で道具・手段の意味があらわされている用例がみられたが、以下の用例の前者は訳文、後者は他の方言からの類推による一時的な使用だと考える。

cf. 3253 ʔun ʔuwage: nanma:ta ʔokinawazen nʲisenenzen ko:tan. 「この上着はこのまえ沖縄で二千元で買った。」

1053 ʔokinawakatɕe: hunʲizi ʔitɕukkamu ɕiko:kizi ʔiʒan ho:nu jutasari. 「沖縄には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」

28 [o:ba]も観察されているが、ここでは[jo:ba]に代表させる。

29 注9に同じ。

30 訳文46「うちのじいさんは酒もたばこものまない。」の用例では、1人称単数あるいは「家の」に対応する形式のみが現れ、1人称複数形については確認できなかった(「データ集」4692、4693参照)。

31 注28に同じ。

32 **-kanʲi** の他、以下のような形式も現れた。荒木方言など、周辺方言からの影響か。

cf. 0291 daŋa hate:katɕi iki. 「おまえが畑へ行け。」

0391 ʔin, hate:tɕie: waŋa ʔitɕui. 「うん、畑へはおれがいく。」



#### 4. 喜界島方言の特徴

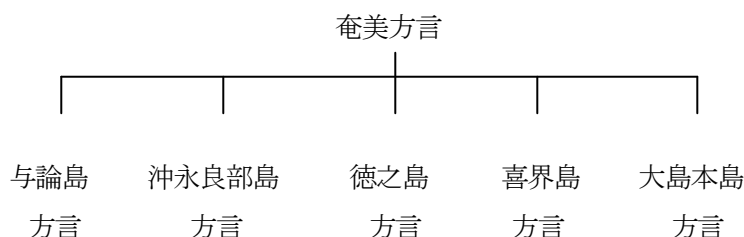


## 喜界島方言の系統的位置について

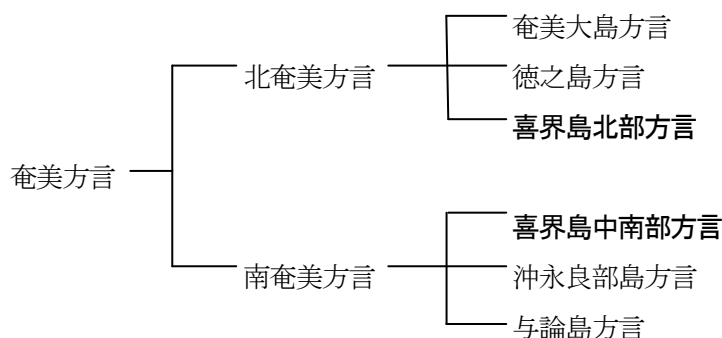
ローレンス・ウエイン

### 1 はじめに

仲宗根(1961:20-1)や外間(1977:295;2000:325)は奄美群島の方言を次のように分類している。



この分類が正しいとすれば、奄美祖語から比較的短期間(数世代か)のうちに下位の五方言群がすべて出来上がったことになる。一方、中本(1981b:26)は奄美方言群はまず北奄美方言と南奄美方言とに分岐し、その後さらにいくつかの下位方言群に分かれたとするが、現在の喜界島諸方言の一部は北奄美方言系で、残りのものは南奄美方言系として分類している。



この分類に拠れば、喜界島の北部方言と同じ喜界島の中南部方言の関係より、喜界島北部方言と徳之島の方言の関係が近いということになる。また、喜界島の北部方言と中南部方言の両方にある語形は、借用形でないとすれば、奄美祖語に再建されうる。すなわち、喜界島北部方言と喜界島中南部方言の最近共通祖語は奄美祖語になる。この区分けは最近では木部(2004:9,10)やかごしま地域文化創造事業奄美地区実行委員会(編)(2010:7,8)も踏襲している。

狩俣(1999:40,45)は中本(1981b:26)等の南奄美方言群に沖縄北部方言を加えて、「沖永良部与論沖縄北部諸方言」という方言区画を設けた上で、喜界島北部方言である「小野津、志戸桶、佐手久のみつつの

集落の方言も他の喜界島の諸方言と同様にこの下位グループにふくめるべきであろう」(45頁)と述べている。

本稿では、中本(1981b: 26)等と対立する立場をとって、喜界島北部方言と喜界島中南部方言はともに一つの方言区画を形成することを論じる。

## 2 喜界島方言にみられる改新形<sup>1</sup>

ローレンス(2006)には次の件がある。

「伝統的な区画でいう奄美方言が一つの方言群を構成するかどうかという問題は本稿の範囲外であるが、一つ示唆的な語は「顎」を意味する語形である。沖繩ではこれは\*kakuzu系になっている。八重山も同系統のようである(石垣 kakuzi, 波照間 hakoci, 与那国 kagudi)から、沖繩からの借用語でないとするれば、琉球祖語に\*kakuzuが再建される。しかし奄美大島・徳之島・沖永良部・与論の諸方言の語形はすべて\*kakazuに遡るようである(名瀬 kaazi, 住用村市 kahazi, 瀬戸内町嘉徳 k<sup>h</sup>ahat, 徳之島亀津 kaazi, 沖永良部和泊 kaazi, 与論 kaazi)。このことは奄美地方の方言は一つの系統的まとまりをなすことを示す根拠となろう。」(115頁注4)

喜界島方言では\*kakazu系の語形は「顎」の意味で使われないが、\*kakazuに対応する語形として次のものがある。

小野津	k <sup>h</sup> aazu	「口」(卑語)
志戸桶	k <sup>h</sup> aazu	「口」(卑語)
塩道	k <sup>h</sup> aaduccju	「口やかましい人」
坂嶺	k <sup>h</sup> aazu	「余計なことをしゃべること」
阿伝	k <sup>h</sup> aadu	「口」(卑語)(岩倉 1977[1941]: 67)
城久	k <sup>h</sup> aazuu	「しゃべりすぎる人」
湾	k <sup>h</sup> aadu	「おしゃべりのしすぎ」(けなして言う)
中里	k <sup>h</sup> aazuu	「悪口を言うこと」
上嘉鉄	k <sup>h</sup> aadu	「おしゃべりが多い」

喜界島のすべての方言は別系統の単語を「顎」の意で使うだけでなく、今回調査したすべての地点では\*kakazu系の単語は卑語的な意味合いをおびて意味推移を起こしている。他語形の「顎」の意味領域への

<sup>1</sup> 本稿では簡易音声表記を使用する (tu=[tu], ti=[ti], si=[ci], sj=[c], ca=[tsa], cja=[tca], aa=[a]).

侵蝕がこの意味推移を引起したか、あるいは \*kakazu 系の単語が意味推移をおこして、穴を埋めるために別の語形が「顎」をさすようになったと推察される。しかし、全島的に同じ卑語的な方向に意味推移しているのは、意味がその方向に変化しだしたのは一回だけであって、変化しはじめてのちに各々の方言に分化していったであろうと推測される。

次の語形が示すように、「みかん」の奄美祖語形は \*kunebo として再建できる — 笠利町佐仁 k'unugu (琉球方言研究クラブ 2003: 233; 狩俣 2003: 43), 旧名瀬市街 k'unigu ~ k'unibu (寺師 1958:11), 大和浜 k'unibu (長田・須山 1977: 808), 瀬戸内町諸鈍 kuniibu (Serafim 1984: 100), 徳之島浅間 k'unin (岡村ほか 2006: 27), 沖永良部知名町瀬利覚 kurubu (日本放送協会 1972: 163), 沖永良部和泊町皆川 kuribu (上野 2005b: 174), 与論麦屋東 kunibu (菊・高橋 2005: 189)。一方、喜界島の方言では語末母音は aa になっている。

小野津 k'uniΦaa  
志戸桶 k'uniΦaa  
塩 道 k'unip<sup>h</sup>aa  
坂 嶺 k'unip<sup>h</sup>aa  
阿 伝 k'uriΦaa (岩倉 1977[1941]: 89)  
城 久 k'urihaa  
赤 連 k'uriΦaa  
湾 k'urihaa  
中 里 k'unibaa  
荒 木 k'uribaa  
上嘉鉄 k'unihaa

琉球方言で「みかん」の語末母音が a(a) としてあらわれるのは喜界島だけのようである。また、喜界島の全地点の語形が -aa で終わっていることから、喜界島祖語形が \*kuniṗaa として再建できる。中本 (1981b) の方言区画に従えば、\*kuneṗaa は \*kunebo とともに奄美祖語形として再建され、aa-終わりの語形がなぜ喜界島にしか存在しないかは謎として残る。

奄美の一部の方言では「貝」のことをいうのに カイ系の語形を使う — 徳之島亀津 kai (平山 1986: 160), 沖永良部知名町 kai 「総称、二枚貝」(平山 1986: 159), 沖永良部和泊町和泊 hai 「夜光貝」(甲 1987: 154), 与論麦屋東 hai 「シャゴウ (シャコガイ科の貝)」(菊・高橋 2005: 412)<sup>2</sup>。喜界島は カイ はなくて、\*kai に -a(a) が付いた k<sup>h</sup>ajaa が小野津, 志戸桶, 伊実久, 坂嶺, 阿伝, 城久, 川嶺, 上嘉鉄などから報告されている (上野

<sup>2</sup> 柴田 (1984: 178-9) は大和浜の -go もこのカイ系の語形であると論じている。\*kawi から語末母音が脱落したものでしょうか。



1992: 81)。全地点ではないが、喜界島の北部方言からも中南部方言からも報告されていることから、*k<sup>h</sup>ajaa* は喜界島祖語に遡るといえよう。阿伝の方言に *k<sup>h</sup>eejusi* 「旧暦三月頃の波荒れ (< 貝寄せ)」(岩倉 1977[1941]: 77) があることから、*-aa* が接尾する以前の *\*kai* が複合語の中に化石化して残っていることがわかる。

奄美群島の各地で「頭」を意味する語形としてツブル系のものが使われている — 龍郷町円 *c<sup>h</sup>iburu* (琉大方言研究クラブ 1977: 40), 龍郷町瀬溜 *ciburu* (狩俣・上村 2003: 13), 旧名瀬市街 *ciburu* (寺師 1958: 19), 宇検村湯湾 *ciburu* (中本 1976: 11), 宇検村屋鈍 *t<sup>h</sup>ibur* (崎村 2006: 130), 徳之島尾母 *ciburu* 「かぼちや、夕顔、頭」(徳富 1975: 80), 沖永良部和泊町皆川 *ciburu* 「頭(人のも)」(上野 2006: 12), 与論麦屋東 *ciburu* 「頭、頭脳」(菊・高橋 2005: 316)。喜界島方言では「頭」は *hamaci* というが、喜界島小野津 *t<sup>h</sup>uburu* 「頭」(崎村 2006: 121), 塩道 *cjuburu* 「頭(古)」, 阿伝 *t<sup>h</sup>uburu* 「頭(卑)」(服部 1959[1932]: 330) は旧形の残存とみなせる<sup>3</sup>。

「頭」を意味する別の語形との意味衝突を回避するために、ツブルはいくつかの地点で意味推移を起こして「頭の骨」をさすようになったと考えられる — 大和浜 *ciburu* 「しゃれこうべ」(長田・須山 1977: 125), 徳之島浅間 *cibuuru* 「かぼちや、しゃれこうべ」(上野 1977: 14)。喜界島では「頭蓋骨」をさす単語にツブル系の単語があるが、語末に *-aa* があるのは喜界島方言独特の特徴のようである。

志戸桶	<i>cuburaa</i>	「頭蓋骨」
坂嶺	<i>cuburaa</i>	「頭蓋骨」
阿伝	<i>t<sup>h</sup>uburaa</i>	「頭蓋骨」
湾	<i>t<sup>h</sup>uburaa</i>	「頭蓋骨」
中里	<i>t<sup>h</sup>uburaa</i>	「頭蓋骨」

このツブル>ツブラーの *-a(a)* の接辞化と「頭」>「頭蓋骨」の意味推移は同時に起こった変化であろう。この二つの変化が同時におこる必然性はない(*-aa* は「骨」の意味はなく、また大和浜などで *-aa* のないツブル系の語形が「頭蓋骨」をさすようになった) ことから、喜界島の北部方言にも中南部方言にもこの二つの変化がおこっているということは、この二つの変化は喜界島祖語の段階でおこったからであると言える。

「畳む」は奄美地方の各地で *takub-*系の動詞になっている — 笠利町佐仁 *takubjun*, 旧名瀬市街 *takumjun* ~ *takubjun* (寺師 1958: 41), 大和浜 *t<sup>h</sup>akuburi* (長田・須山 1977: 259), 宇検村湯湾 *takubjui* (中本 1976: 59), 沖永良部

<sup>3</sup> 中本(1981b: 42)は、奄美大島と喜界島でカマチ系の単語が「頭」を表すようになったころ、ツブル系は沖縄を中心に広まったとみているが、喜界島ではツブルは「頭」をさす古い語形であると思われる。

和泊町皆川 *takubin* (上野 2006: 4), 与論麦屋東 *takubjun* (菊・高橋 2005: 283)<sup>4</sup>。喜界島方言も *takub*-系ではあるが、いくつかの地点で *-kub-* が *-bb-* か *-nb-* に変化している。

小野津 *tabbi*  
志戸桶 *tabbjun* (中本 1978: 53)  
阿 伝 *taccjui* (岩倉 1977[1941]: 142)  
城 久 *tanbin*  
中 里 *takubi*  
上嘉鉄 *tanbjui* (岩倉 1977[1941]: 142)

喜界島の *tabb-* と *tanb-* はともに *\*tabb-* という形に遡ると考えられ、喜界島最北の集落である小野津と最南の集落である上嘉鉄、そして中部の海岸から離れた城久集落にも分布していることから、これは喜界島祖語形であるといえよう<sup>5</sup>。この *\*tabb-* はさらに奄美祖語形の *\*takub-* に由来する<sup>6</sup>。

以上に取り上げた語彙項目は喜界島にしかみられない改新形である。次の例も改新形であるが、喜界島独特のものではない。

「下駄」のことを奄美の方言では次のように表現する — 名瀬市芦花部 *?asizja* (上野 1996b: 58), 大和浜 *?asizja* (長田・須山 1977: 250), 宇検村湯湾 *?asigja* (中本 1976: 32), 瀬戸内町諸鈍 *?asizjaha* (狩俣 1996: 37), 徳之島亀津 *?anzja* (平山 1986: 269), 沖永良部和泊町皆川 *?asizja(a)* (上野 2005a: 11), 与論麦屋東 *asizja* (菊・高橋 2005: 24)。上掲の語形はみな *\*asizja* (< *\*asidja* < *\*asida* 「足駄」) に遡る。一方、喜界島方言の語形には *-zj-* の形跡が見当たらない。

小野津 *?assaa*  
志戸桶 *?assaa*  
塩 道 *?assjaa*  
坂 嶺 *?assaa*  
阿 伝 *?assaa*  
赤 連 *?assa(a)*  
湾 *?assa*

4 徳之島で「畳む」は別系統の *tagur-* である — 亀津 *tagurui* (平山 1986: 436), 浅間 *tagujun* (上野 1977: 22), 井之川 *taguri* (中本 1979: 62)。鳥島の *takuri* (中本 1981a: 47) もこの系統であろう。

5 中里と阿伝の語形は問題として残る。阿伝の *taccjui* は *\*takk-* < *\*takub-* に由来するだろう。喜界島祖語に *\*takub-* と *\*tabb-* の両形式が共存していたのであろうか。

6 この *-bb-* / *-nb-* の分布と類似のものは「油」 *?abba* / *?anba* にもみられる (上野 1992: 137 参照)。

中 里 ʔassa

荒 木 ʔassa

上嘉鉄 ʔassa

喜界島方言の ʔass(j)a(a) は \*asira に由来すると思われる。この \*asira は \*asizja からではなく、むしろ古形である \*asida から、d>r の変化を経てできた語形であろう。

笠利町東部の平方言にも ʔassja が使われ、同じ笠利町の北部(佐仁集落、笠利集落)に ʔasira が報告されている(上野 1996a: 249)。喜界島の ʔass(j)a(a) は笠利町の ʔasira / ʔassja と関係があるとすれば、喜界島祖語は現在の笠利町東部(喜界島の対岸)にそのルーツがあり、笠利祖語と姉妹語関係にあるという可能性も考えられる<sup>7</sup>。しかし、「下駄」が人工物である故、笠利町東部からモノとともに ʔassja、あるいは ʔasira という語形が喜界島に入って広まったという蓋然性はなくはない。

### 3 結語

言語(方言)の分岐分類を論じる際、唯一使える手立ては共有される言語改新であるから、その改新が別系統の言語(方言)に散見するほど珍しくないものとなれば、所属の決め手としての効力は著しく減滅する。このため、琉球方言の各下位方言群に見られる p>Φ>h, k>h, B系列音調とC系列音調の合流などの言語変化は喜界島方言が一つの系統群(単系統群)を形成するか、多系統群になるか、その解決には寄与しない。

一方、本稿でみた喜界島の北部方言と中南部方言が共有する改新は一回性の高いものであると思われる。他の琉球方言では -aa は「みかん」、「貝」、「頭」を意味する語形に接尾しないし、takub- は tabb- / taxb- にならないようである。これらの変化は喜界島北部方言と喜界島中南部方言にそれぞれ独立に生じたとは考えにくい。それは偶然性があまりにも高いからである。このために、中本(1981b)等の分類が正しいとすれば、これらの変化はどちらか一方の方言群で生じて、そこから全島を覆うように広がったとせざるを得ないであろう。しかし、喜界島には30の集落があり、30の方言があるから、変化前の語形は島のどこかに残っていてもいいようなものである。だが、管見の限りでは \*カーズ「顎」、\*クニブ「みかん」、\*アシラ「下駄」、\*ツブル「頭蓋骨」の例は島のどこからも報告されていない。これらの変化が喜界島祖語の段階でおこったとすれば、変化前の形の欠如は説明される。

本稿では、喜界島の諸方言が一つのまとまった方言群をなすことを論じたが、この方言群と奄美方言の他の方言との関係を特定するにはまだ至っていない。下駄が借用物でないとしたら、喜界島祖語は笠利祖語と姉妹語関係にある可能性が示唆されるが、より詳細な比較研究が必要で、そのために喜界島方

---

<sup>7</sup> 笠利祖語では、「太陽」は \*tidan で、語末に改新的な -n が付加されている(上野 1996a: 158 参照)。喜界島祖語では「太陽」は \*tida として再建できるから、改新形を継承しない喜界島方言は笠利方言の娘言語でないことになる。

言、笠利町方言、ならびに奄美地方のその他の各方言のより充実した語彙と文法の資料の蒐集が俟たれる。

## 参考文献

- 岩倉市郎 1977[1941]. 『喜界島方言集』 東京：国書刊行会.
- 上野善道 1977. 「徳之島浅間方言のアクセント (1)」 岩手国語学会論集刊行会 (編) 『小松代融一教授退職・嶋稔教授退官記念国語学論集』 188-220(1-33).
- 上野善道 1992. 「喜界島方言の体言のアクセント資料」 『アジア・アフリカ文法研究』 21: 41-160.
- 上野善道 1996a. 「奄美大島笠利町諸方言の名詞のアクセント資料」 『アジア・アフリカ文法研究』 24: 149-261.
- 上野善道 1996b. 「名瀬市芦花部・有良方言の名詞のアクセント体系」 『東京大学言語学論集』 15: 3-68.
- 上野善道 2005a. 「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(1)」 『琉球の方言』 29: 1-40.
- 上野善道 2005b. 「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(2)」 『アジア・アフリカ文法研究』 33: 155-204.
- 上野善道 2006. 「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(3)」 『琉球の方言』 30: 1-49.
- 岡村隆博・沢木幹栄・中島由美・福嶋秩子・菊池聡 2006. 『徳之島方言二千文辞典』 信州大学人文学部.
- 長田須磨・須山名保子 1977. 『奄美方言分類辞典 上巻』 東京：笠間書院.
- かごしま地域文化創造事業奄美地区実行委員会 (編) 2010. 『島唄から学ぶ奄美のことば』.
- 狩俣繁久 1996. 「鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言のフォネーム(下)」 『日本東洋文化論集』 2: 1-57.
- 狩俣繁久 1999. 「音声の面からみた琉球諸方言」 『ことばの科学』 9: 13-85. 東京：むぎ書房.
- 狩俣繁久 2003. 『奄美大島笠利町佐仁方言の音声と語彙』 「環太平洋の言語」 成果報告書 A4-014.
- 狩俣繁久・上村幸雄 (編) 2003. 『石崎公曹の奄美のことわざ』 「環太平洋の言語」 成果報告書 A4-016.
- 菊 千代・高橋俊三 2005. 『与論方言辞典』 武蔵野書院.
- 甲 東哲 (編) 1987. 『島のことば』 鹿児島：三笠出版.
- 木部暢子 2004. 「奄美の方言」 『奄美ニューズレター』 11: 8-19.
- 崎村弘文 2006. 『琉球方言と九州方言の韻律論的研究』 東京：明治書院.
- 寺師忠夫 1958. 『奄美方言の研究 第Ⅲ編 語い』 私家版.
- 徳富重成 (編) 1975. 『徳之島尾母方言集 民俗・歴史の資料付(一集)』 私家版.
- 仲宗根政善 1961. 「琉球方言概説」 東条操 (監) 『方言学講座 第四卷 九州・琉球方言』 20-43. 東京：東京堂.
- 中本正智 1976. 「語彙」 『琉球の方言 奄美大島宇検村湯湾方言』 11-73. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
- 中本正智 1978. 「喜界島志戸桶方言の語彙」 『琉球の方言 4 奄美喜界島志戸桶』 1-63. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
- 中本正智 1979. 「徳之島井之川方言の語彙」 『琉球の方言 5 奄美徳之島井之川』 7-67. 東京：法政大学沖縄文化研究所.

- 中本正智 1981a. 「鳥島方言の語彙」『琉球の方言6 久米島鳥島』7-50. 東京：法政大学沖繩文化研究所.
- 中本正智 1981b. 『図説琉球語辞典』東京：力富書房金鶏社.
- 日本放送協会(編)1972. 『全国方言資料 第10巻 琉球編I』東京：日本放送出版協会.
- 服部四郎 1959[1932] 「「琉球語」と「国語」との音韻法則」『日本語の系統』東京：岩波書店.
- 平山輝男(編著)1986. 『奄美方言基礎語彙の研究』東京：角川書店.
- 外間守善 1977. 「沖繩の言語とその歴史」大野 晋・柴田 武(編)『岩波講座 日本語11 方言』181-233. 東京：岩波書店.
- 外間守善 2000. 『沖繩の言葉と歴史』東京：中公文庫.
- 琉大方言研究クラブ 1977. 「鹿児島県奄美大島竜郷町円方言の音韻体系」『琉球方言』14: 7-43.
- 琉球方言研究クラブ(編)2003. 『琉大方言第18号 SANI 奄美大島笠利町佐仁方言』
- ローレンス・ウエイン 2006. 「沖繩方言群の下位区分について」『沖繩文化』100: 101-118.
- Serafim, Leon A. 1984. *Shodon: The Prehistory of a Northern Ryukyuan Dialect of Japanese*. Yale University PhD dissertation.

## 数詞のアクセントを通して見た喜界島語彙の音韻特徴<sup>1</sup>

松森 晶子

### 1 琉球祖語の名詞アクセントの3つの系列

琉球諸方言は、今日のように様々な体系に分岐・発達する前（琉球祖語）の段階で、その名詞のアクセントに（少なくとも）3つの型を持った体系であることが、現在までに分かっている。ここではその3種のアクセントの区別を、それぞれ「A系列、B系列、C系列」と呼んで議論を進めることにしよう。

各系列に属す代表的な語を、現在の喜界島の赤連方言と沖縄本島中部の金武方言の例を用いて示すと、次のようになる。（カッコ内の語形は1つ目が赤連方言、二つ目が金武方言の例である。）

#### (1) 3つの系列の代表的な語例（喜界島赤連、沖縄本島金武）

（本土の類別語彙と音の対応がみられると思われる単語は、下線で示した。）

**A系列:** 夫(wutu, utu)、煙(hibusji, kibusji)、子(k'aR, kwaR)、鮫/草履(saba, saba)、

空(tiNtoR, tiNto)、妻(tuzji, tuzji)、棘(njinji, Nzji)、洞窟(gama, gama)、  
友(dusji, duRsji)、匂い(hada, kazja)、にんにく(hiru, hiru)、膝小僧(t'ubusji,  
suNji)、へそ(Fusu, Fusu)、ほくろ(ada, aza)、目上の人(sjida, sjirzja)、  
東(agari, agari)、北(nisji, nisji) / 血(cjiR, sjir)、帆(FuR, FuR)、  
鳥賊(ika, icja)、石(isji, isji)、上(wiR, wiR)、魚(iju, juR)、牛(usji, usji)、  
音(utu, utu)、風(hadi, kazji)、紙(habi, kabi)、傷(cjidu, kizju)、  
牙(kiba, sjirba)、口(k'ucji, kucji)、腰・背中(husji, kusji)、酒(seR, saki)、  
下(s'a, sjicja)、袖(sudi, sudi)、箱(haku, haku)、鼻(hana, hana)、  
羽(hanI, hani)、人(c'juR, cjuR)、水(midu, mizu)

**B系列:** 家(jaR, jaR)、鱗/ふけ(iQki, iricjiR)、男(jiNnga, ikigaR)、女(wunangu,

inaguR)、雷・稲光(haNnari, kaNnamiR)、着物(kiN, sjinuR)、櫛(sabacji,  
sabacjiR)、去年(hudu, kuRzju)、砂糖黍(wuni, wuRzjiR)、潮(usu, uRsuR)、

<sup>1</sup> 草稿を詳細に検討し、多くの有益なコメントを下されたウェイン・ローレンス氏に心より感謝いたします。（しかし本稿の不備は、もちろんすべて著者の責任である。）

炊事場のある家屋(toRgura, tuNgwaR)、脛(suni, suRniR)、蛸(toR, taRkuR)、  
 土(micja, NRcjaR)、南京豆(zjimami, zjiRmaRmiR)、肉(sjisji, sjiRsjiR)、<sup>にら</sup>蕪  
 (bira, biRraR)、暇(madu, maRduR) / 木(hiR, kiR)、目(miR, miR)、手(tiR, tiR)、雨(ami, aRmiR)、網(ami, aRmiR)、板(ita, iRtaR)、色(iru, iRruR)、  
笠・傘(hasa, kaRsaR)、肩(hata, kaRtaR)、雲(k'umu, kuRmuR)、米(humi, kuRmiR)、島(sjima, sjiRmaR)、汁(sjiru, sjiRruR)、<sup>つの</sup>角(cunu, sjuRnuR)、顔(cura, suraR)、花(hana, haRnaR)、腹(wata, waRtaR)、豆(mami, maRmiR)、  
味噌(misu, miRsuR)、耳(mimi, miRmiR)、麦(muni, muRzjiR)、山(jama, jaRmaR)、亀(hamiR, kaRmiR)、涙(nada, naRdaR)、鏡(kangami, kagamiR)、鋏(hasami, hasamiR)、油(aNda, aNdaR)、枕(maQka, maQkwaR)、曆(kujumi, kujumiR)

**C系列:** あご(utungeR, utuge)、蚊(gazjami, gazjamu)、かかと(aduR, aRduR)、  
 かんざし(giRFaR, zjiRha)、<sup>かご</sup>籠の一種(tiru, tiRru)、杵(adumu, azjumu)、  
 今年(kuNdu, kuNdu)、子供(warabi, warabi)、腰周り(gamaku, gamaku)、  
 砂糖(sataR, saRta)、<sup>ざる</sup>筥・籠(soRki, soRki)、太陽(tida, tiRda)、卵(hungaR, kuRga)、  
 たんこぶ(gabuR, guRFu)、杖(gusani, gusanu)、ひしゃく(nIbu, niRbu)、  
 布団(udu, uRdu)、水溜り・池(humuri, kumui)、来年(jani, jaRni) / <sup>かめ</sup>甕(hami, kaRmi)、蚤(numi, nuRmi)、浜(hama, haRma)、骨(Funi, FuRni)、  
糸(iejuR, iReju)、臼(usu, uRsu)、海(umi, miR)、桶(wiR, wuRki)、  
影(kangi, kaRgi)、声(kui, kwiR)、露(cuju, suRju)、鍋(nabi, naRbi)、  
針(hari, haRi)、舟(FunI, FuRni)、松(macu, maRcju)、袋(FuQku, FuQkui)、  
薬(kusuri, kusui)、鹽(tareR, taRre)、柱(haRja, haRja)、  
畑(hateR, hataki)、

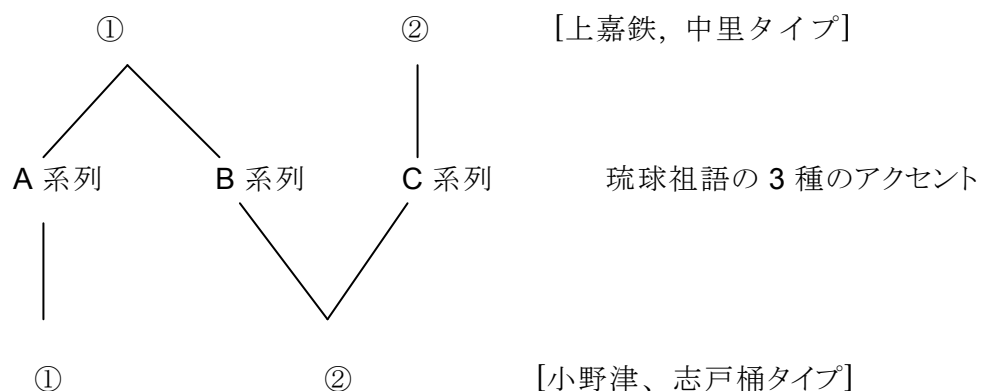
沖縄本島の金武方言では、この3つの系列の語彙はそれぞれ異なるアクセント型で出現する。つまり金武方言では、琉球祖語から引き継いだ3種のアクセントの区別が、現代に至るまで保たれているのである。また、奄美の沖永良部島や徳之島の諸方言でも、祖語に存在していたと思われる3つの系列のアクセントの区別が、現代に至るまで比較的明瞭に保たれている。

現代喜界島には、この3種類の区別のすべてを、現代に至るまで保存している方言は存在しない。これまでの研究から、喜界島ではそのほとんどの集落で2種のアクセント型の

区別があることが分かっているが、これら喜界島の「2型アクセント体系」では、どの地域でも、過去の3つの系列のうちのどれか2つが合流してしまっていることが分かっている。

しかし、喜界島諸方言の重要な点は、その合流の仕方が方言によって異なるという点である。たとえば、今回、調査した地域の中でも小野津と志戸桶では、B系列とC系列が合流してひとつのアクセント型になってしまい、「A 対 BC」のような対立を示すタイプの体系になっている。これに対し、それ以外の地域（中里、荒木、上嘉鉄、坂嶺、阿伝など）では、A系列とB系列が合流してひとつのアクセント型になり、「AB 対 C」のような対立のタイプの体系になっている。以上をまとめて図式化すると次のようになる。

## (2) 喜界島の2型アクセントの形成



このことから、喜界島が今日のように集落ごとに異なる方言に分岐する前の祖先の体系（喜界島祖語）では、琉球祖語から引き継いだ3つの系列のアクセントの区別が、おそらく、まだ保たれていたであろう、という推定ができる。

また、(2)のような語彙の合流の仕方の違いを利用して現代の喜界島方言の比較を行えば、各単語のそれぞれについて、それが喜界島祖語の段階で存在していた3つのアクセント型のどの型に属していたかを、推理することができる。松森(2011)では、小野津と赤連の比較を通じて、そのような試みを行っている。

## 2 数詞のアクセントの系列

### 2.1 固体を数える数詞

さて、「ひとつ、ふたつ、みつつ…」、「ひとり、ふたり…」のような、ものを数える際に使用する数詞のアクセントが、琉球各地できれいな対応を見せることはローレンス



(2008) がすでに指摘している。

沖永良部島や徳之島といった、琉球祖語の3系列の区別を現在も比較的、明瞭に保っている方言を手がかりにして、各数詞が琉球祖語において、上に述べた系列のうちのどれに属しているかを推定してみると、「ひとつ」はC系列、「ふたつ、みっつ、よっつ、むっつ、やっつ、とお」はA系列、「いつつ、ななつ、ここのつ」はB系列、ということになる。<sup>2</sup> このことを確認するために、これまで私の調査した沖永良部島知名方言と正名方言の例を以下に示す。正名方言の例は、単独言い切り形の他に、主格助詞の nu をつけて「～がある、～が見える」のように発話してもらった形式（接続形）のアクセントも調査したので、ここに載せる。（なお、知名方言については久野(1986)も参照した。）

(3) 日本祖語系数詞の琉球祖語における系列と現代3型アクセントの例

	系列別	【沖永良部島知名方言】	【沖永良部島正名方言】
		単独形	単独形 / 主格助詞接続形
1. ひとつ	C系列	tiRc̄ji	t'iRc̄ji / t'iRc̄ji nu...
2. ふたつ	A系列	taRc̄ji	t'aRc̄ji / t'aRc̄jinu...
3. みっつ	A系列	miRc̄ji	miRc̄ji / miRc̄ji nu...
4. よっつ	A系列	juRc̄ji	juRc̄ji / juRc̄ji nu...
5. ひとつ	B系列	ic̄jic̄jiR	ic̄jic̄jiR / ic̄jic̄ji nu...
6. むっつ	A系列	muRc̄ji	muRc̄ji / muRc̄ji nu...
7. ななつ	B系列	nanac̄jiR	nanac̄jiR / nanac̄jinu...
8. やっつ	A系列	jaRc̄ji	jaRc̄ji / jaRc̄ji nu...
9. ここのつ	B系列	kunuc̄jiR	kunuc̄jiR / kunuc̄ji nu...
10. とお	A系列	tuR	tuR / tuR nu...

たとえば知名方言では、「1つ」(C系列)のアクセントは語末拍が高い音調(H)となり、LLHのような型(Lは低い音調を示す)であるのに対し、「2つ、3つ、4つ、6つ、8つ」(A系列)は、高い音調が語末まで続くHHHのような型である。これに対し「5つ、7つ、9つ」(B系列)は、「1つ」と同様に最後が高く終わるのだが、その高い音調は「1つ」と違って、語句末のモーラを引き伸ばすことによって実現する。したがって「5つ、

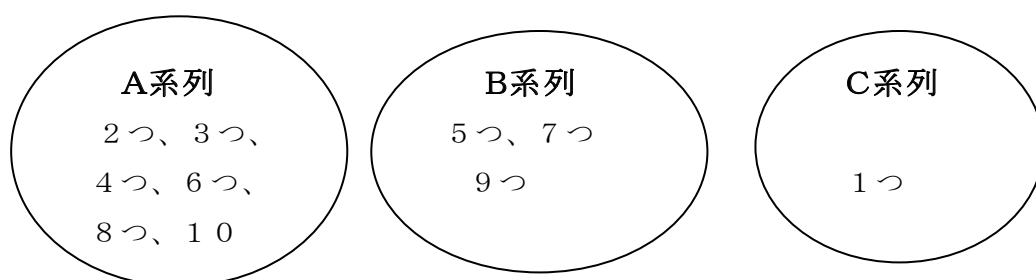
<sup>2</sup> ローレンス(2008)は、祖語の数詞に2つのタイプの型の区別があったとしているが、実際は、日本祖語の数詞には3つの型(「1」対「2、3、4、6、8、10」対「5、7、9」)が存在していたことが琉球の3型アクセント体系を広範に検討すると分かる。(ちなみに本土の類別語彙では、「ひとつ」は(3拍語)第5類、「ふたつ、みっつ、よっつ、やっつ」は第2類、「いつつ、ななつ」は第7類となっている。したがって本土の方言でも、3拍語の第5類と第7類の違いが保たれている現代方言では、「ひとつ」と「いつつ、ななつ」も異なるアクセント型で出現する可能性がある。)

7つ、9つ」は、語末拍が上昇調の  $LLL_H$  のような型である。

一方、正名方言でも、「1つ」と「5つ、7つ、9つ」の型の区別ははっきり保たれている。「1つ」の語頭の下がり目は1拍目にある ( $t'iR[cji]$ ) のに対して、「5つ、7つ、9つ」の下がり目は  $icji[cjiR]$  のように、2拍目にあるからである。

一般的に琉球祖語の3つの系列(A, B, C系列)の区別が保たれている方言では、「1つ、2つ…」という数詞のアクセントにも3つの型が出現する。そして、その数詞は、A、B、C系列に、次のように分布している。

(4) 琉球の三型アクセント体系における数詞の分布

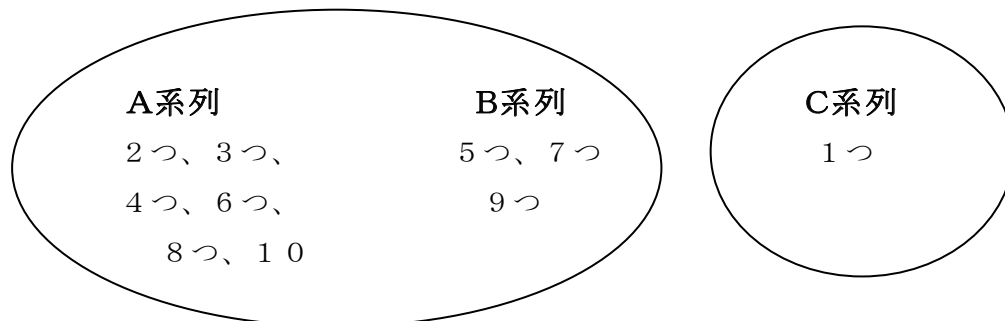


さて、喜界島のような2型アクセント体系では、数詞はどのような実現の仕方をするだろうか。

少なくとも現段階での仮説だが、一般的に、現代の琉球方言の2型アクセント体系では、その名詞のアクセントの合流の仕方と、数詞のアクセントとは、相関性が見られると考えられる。

たとえば、名詞のアクセントが「A B 対 C」のような合流を遂げた方言（たとえば喜界島の上嘉鉄、中里、湾、阿伝、坂嶺や宮古島の与那覇など）では、(5)のように「1つ」以外の数詞が合流してひとつの型となってしまう、「1つ」だけが他の数詞とは別の型に属すということが予想される。

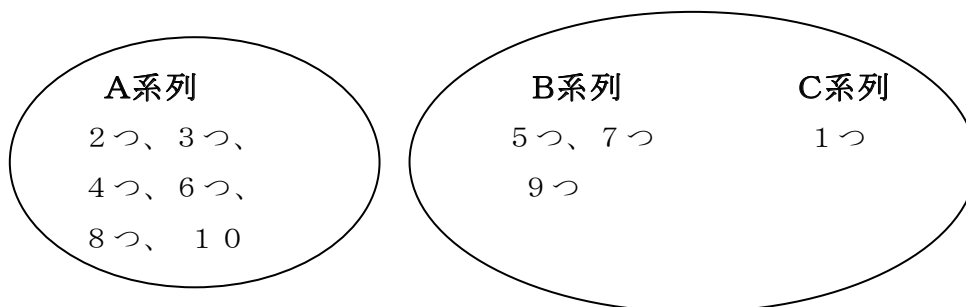
(5)



これに対して、名詞のアクセントが「A 対 BC」のような合流を遂げた方言（たと

えば喜界島の小野津、志戸桶や加計呂麻島諸方言など)では、「5つ、7つ、9つ」と「1つ」が合流してひとつの型となり、その他の数詞「2つ、3つ、4つ、6つ、8つ、10」と対立していることが予想される。したがって、次のようにアクセントの型が合流していることが予測される。

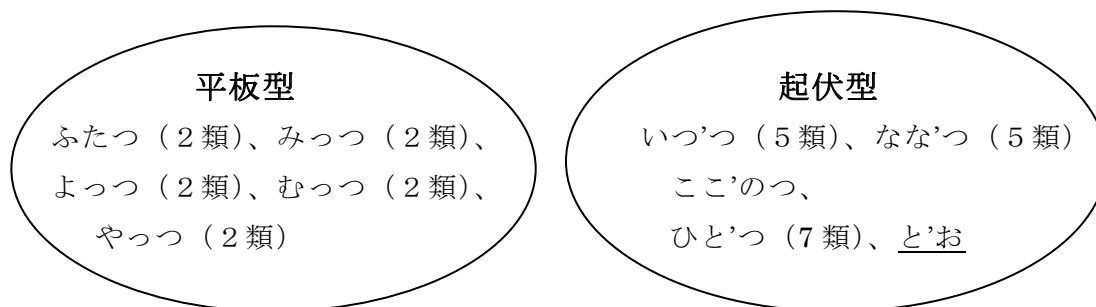
(6)



ところで、琉球各地の数詞のアクセントは、本土諸方言ともきれいな対応を見せていることは、すでにローレンス(2008)の指摘にあるとおりである。

ちなみに東京方言を例にとって説明すると、「1つ、2つ…」のような数詞は、「1つ、5つ、7つ、9つ」対「2つ、3つ、4つ、6つ、8つ」というような合流を遂げており、それぞれ異なる型に分かれて出現する。前者は、起伏型「ひと’つ、いつ’つ、なな’つ、ここ’のつ」で出現し、後者は平板型「ふたつ、みつつ、よつつ、むつつ、やつつ」になる。<sup>3</sup>(なぜか東京では「10」だけが、予測されるような平板型でなく「と’お」のように起伏型で出現して例外となっているが、その理由は不明である。)

(7) 東京方言の数詞の型の違い(カッコ内の数字は類別)



<sup>3</sup> ただしすべての数詞にこのような違いが出現するとは限らない。たとえば接続詞「日(か)」が付くと、「(ついたち)、ふつか、みっか、よっか、いつか、むいか、なのか、ようか、このか、とおか」のように、どの数もすべて平板型になってしまう。これとは反対に、「月」が付くと、「ひと’つき、ふた’つき、み’つき、よ’つき」のように、すべて起伏型になる。これは、接尾辞「日(カ)」「月」の持つ特徴によるものと考えられるが、このような接尾辞によるアクセント型の違いを各地の方言で記述しておくことは、今後の記述研究のテーマのひとつである。

このように、本土の諸方言ともアクセントがきれいに対応するという事実は、このような数詞が（琉球も含めた）日本語の祖先—つまり「日本祖語」—から引き継がれて、現在に至ったものであることを証明している（ローレンス 2008）。

ところで「ひとつ、ふたつ…」のような数詞は、「いち、に一、さん…」と数える漢語系の数詞と対比して、よく「和語系の数詞」と呼ばれることがあるが、先述のように、これが琉球と本土の諸方言が分岐する前の段階から存在していたことをも考えあわせると、これを「和語系」と呼ぶのは相応しくない。そこで、ここではこれらを、「日本祖語系数数詞」というように呼び代えて、議論を進めることにしよう。

## 2. 2 人を数える数詞

一方、人を数える「ひとり、ふたり…」のような数詞はどうであろうか。

本土諸方言では、「ひとり、ふたり…」のように人を数える場合、途中から漢語系の数詞に置き換わってしまうことが多い。たとえば東京方言では、「ひとり」と「ふたり」には日本祖語系数数詞を使用するのだが、3人以上になると、(7)にあるように「さんにん、よにん、ごにん、ろくにん、しちにん、はちにん、くにん、じゅうにん」のように漢語系数数詞が使われるのである。<sup>4</sup>

### (8) 日本祖語系数数詞の東京方言における実現

系列別（類別）	a. 単独形（個体を数える）	b. 単独形（人を数える）
1. C 系列（7 類）	ひと'つ	ひと'り
2. A 系列（2 類）	ふたつ	ふたり
3. A 系列（2 類）	みっつ	——（さんにん）
4. A 系列（2 類）	よっつ	——（よにん）
5. B 系列（5 類）	いつ'つ	——（ごにん）
6. A 系列（2 類）	むっつ	——（ろくにん）

<sup>4</sup> 東京では「4人」の数値部分「4」だけが、予想される漢語系語根の「し」ではなく、日本祖語系の語根「よ」になっている。「死人」との連想を回避するものであろう。

7. B 系列 (5 類)	なな' つ	—— (しちにん)
8. A 系列 (2 類)	やっつ	—— (はちにん)
9. B 系列	ここのつ	—— (くにん、きゅうにん)
10. A 系列	どお	—— (じゅうにん)

さて、今回の喜界島調査では、人を数える数詞に関して面白いことが分かった。本土諸方言と違って喜界島には、漢語系ではなく、日本祖語系数詞が *tçuri* (ひとり)、*t'ari* (ふたり) のみならず、*mitçari* (3人)、*jutari* (4人)、*ʔitutari* (5人) … (上嘉鉄の例) のように、「3人」以上にも使われる集落が相当数あったのである。<sup>5</sup>

### 3 数詞アクセント調査結果と問題提起

さて、名詞が「AB 対 C」のような合流を遂げた地域 (湾、阿伝、上嘉鉄、坂嶺など) では、「1つ」だけが別の型になり、「2つ、3つ、4つ、5つ、6つ、7つ、8つ、9つ、とお」などが、すべて同じ型になってしまうのではないかという予想を、すでに (5) でたてた。その予想はほぼ当たったのだが、ひとつだけ例外があり、それは「9つ」であった。

今回の喜界島調査では、このような「AB 対 C」タイプの方言の中から、特に上嘉鉄、中里、湾、阿伝、荒木、坂嶺において「ひとつ、ふたつ…」の数詞を詳細に調査できたので、その結果を (9) に示そう。ここで特に注目してほしいのは、下線部である。

#### (9) 喜界島における日本祖語系数詞のアクセント 1 (固体を数える数詞の場合)

	上嘉鉄	中里	湾	阿伝・荒木	坂嶺
1. ひとつ	t'i]tu	t'i]tu	t'i]tu	t'i]tsu	t'i]tsu
2. ふたつ	t'a]:[tu	t'a]:[t'u	t'a]:[tu	t'a]:[tsu	t'a]:[tsu
3. みっつ	mi]:[tu	mi]:[t'u	mi]:[tu	mi]:[tsu	mi]:[tsu

<sup>5</sup>一般に、他の多くの琉球方言では、「4人」までは *tçuri* (1人)、*t'ari* (2人)、*mitçari* (3人)、*jutari* (4人) のように日本祖語系数詞を使うものの、「5人」以上になると *guniN*(5人)… のように漢語系を使う地域が多いとされている。しかし喜界島以外の琉球諸地域でも、まだ「5人」以上の数詞に日本祖語系数詞が使われ続けている地域が相当数あると思われ、詳細な調査が期待される。また、久野(1986)の試みたように、他の接尾辞「～日」「～月」「～粒」などの形式も調査し、各集落ごとにそのそれぞれについて、どの数に至るまで日本祖語系数詞が使え

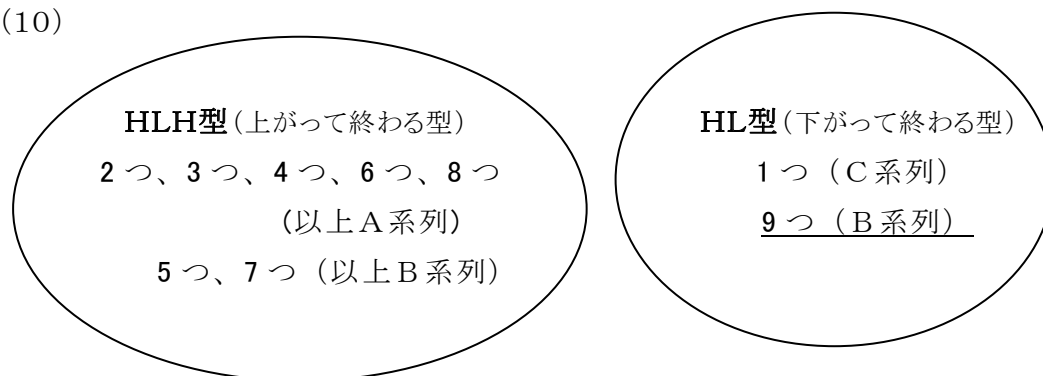
4. よっつ    ju]:[tu      ju]:[t'u      ju]:[tu      ju]:[tsu    ju]:[tsu
5. いつつ    ?i]tu[tu      ?i]tu[t'u      ?i]tu[tu      ?i]tsu[tsu    ?i]tsu[tsu
6. むっつ    mu]:[tu      mu]:[t'u      mu]:[tu      mu]:[tsu    mu]:[tsu
7. ななつ    na]na[tu      na]na[t'u      na]na[tu      na]na[tsu    na]na[tsu
8. やっつ    ja]:[tu      ja]:[t'u      ja]:[tu      ja]:[tsu    ja]:[tsu
9. ここのつ k<sup>h</sup>u]:[nu]tu    k<sup>h</sup>u]:[nu]t'u    k<sup>h</sup>u]:[nu]tu    ku]:[nu]tsu    k<sup>h</sup>u]:[nu]tsu
10. とお    th<sup>u</sup>]:      th<sup>u</sup>]:      th<sup>u</sup>]:      th<sup>u</sup>]:      th<sup>u</sup>]:

この表に載せられたすべての方言で、「1つ」は下がって終わるアクセント型（HL型）なのに対して、「2つ、3つ、4つ、5つ、6つ、7つ、8つ、とお」は上がって終わるアクセント型（HLH型、あるいはLH型）であることが（8）から分かる。つまり予測通り、これらの方言では、「1つ」対「2つ、3つ、4つ、5つ、6つ、7つ、8つ、とお」というようなアクセントの型の違いが見られた。

しかし、問題は「9つ」である。（5）によれば、この「9つ」には、「5つ、7つ」と同じような型が出現しなければならない。したがって、たとえば上嘉鉄を例にとると、「9つ」には、5つ（?i]tu[tu）や7つ（na]na[tu）同様、HLHのように上がって終わるアクセント型が出現し、\*k<sup>h</sup>u]:nu[tu、あるいは\*k<sup>h</sup>u]:nu[tuのような型で出現することが予想される。

しかしこの予測に反して「9つ」は、「1つ」t'i]tuと同様、下がって終わる型で出現し、k<sup>h</sup>u]:[nu]tu（HLHL）のようなアクセントになっていることが判明した。したがって、次のような予期せぬ結果に終わったのである。

(10)



るかを検討しておくことは、琉球記述研究の重要な課題のひとつである。

この「9つ」のアクセントの例外は、一体どのような理由によるものだろうか。この問題についての考察は、次節（第4節）で扱うこととする。

さて、次に人を数える日本祖語系数詞「ひとり、ふたり…」のアクセントを見てみよう。今回の調査でこの形式を詳しく調べることができたのは、上嘉鉄、中里、坂嶺の3集落であるが、その調査結果は次の表の通りである。

(11) 喜界島における日本祖語系数詞のアクセント 2（人を数える数詞の場合）

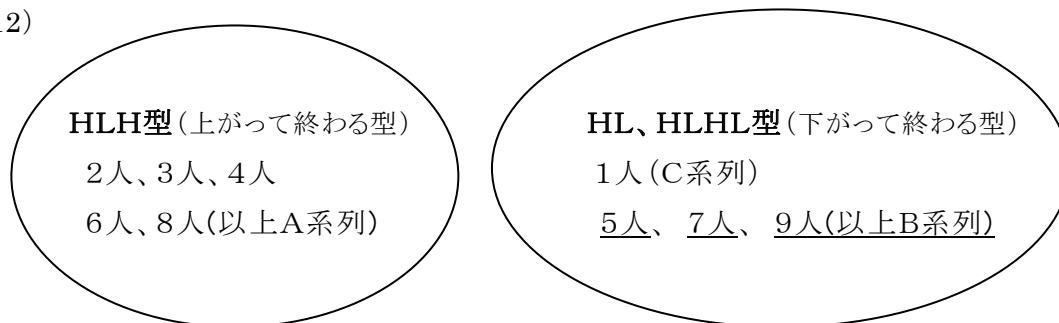
	上嘉鉄	中里	坂嶺
1. ひとり	tɕu ri	tɕu i	ts'u i
2. ふたり	t'a ri	t'a i	t'a i
3. 3人	mi tɕa ri	mi tɕa i	mi tɕa i
4. 4人	ju ta ri	ju t'a i	ju t'a i
5. 5人	<u>ʔi tu ta ri</u>	<u>ʔi tu t'a i</u>	<u>ʔi tsu t'a i</u>
6. 6人	mu ta ri	<u>mu :t'a i</u>	mu t'a i
7. 7人	<u>na na ta ri</u>	<u>na na t'a i</u>	<u>na na t'a i</u>
8. 8人	ja ta ri	ja ta i	ja ta i
9. 9人	<u>kʰu nu ta ri</u>	<u>ku nu ta i</u>	<u>ku nu t'a i</u>
10. 10人	tʰu ta ri	未調査	未調査

特に下線部に注目してほしい。予想(5)では、「1人」だけが独立した型になり、「2人、3人、4人、5人、6人、7人、8人、9人、10人」などは、すべて同じ型になってしまうのではないかということであった。しかし実際は、予想に反して、tɕu|ri（ひとり）の他に、ʔi|tu|ta|ri（5人）、na|na|ta|ri（7人）、kʰu|nu|ta|ri（9人）なども、下がって終わる型（HLHL）となって出現したのである。<sup>6</sup>

つまり、人を数える数詞は、上嘉鉄、中里、坂嶺で、(12)のような合流を遂げていることが分かった。

<sup>6</sup> なぜか中里の「6人」だけが、期待される mu|t'a|i ではなく mu|:t'a|i のようなアクセント型で

(12)



この(12)を見ると、あたかも「琉球祖語」のA系列とB・C系列の違いが、喜界島で、人を数える数詞に限って保たれているように見える。つまり、(11)の3集落では、普通名詞は「AB 対 C」のような合流を遂げたのだが、この人を数える数詞に限って「A 対 BC」のようになっているように見えたのである。

しかし、実態はそうではないことが分かった。では、このように名詞が「AB 対 C」のような合流を遂げた地域(上嘉鉄、中里、坂嶺)で、A系列とB系列の人を数える数詞だけが合流せずに、別の型に属しているという事実の原因は、いったい何であろうか。

次節では、この問題について考えていくこととしよう。

#### 4 数詞アクセントの例外と喜界島の無標のリズム構造

さて、前節で問題提起した謎を解く鍵は、単語全体の長さ(拍数)にある。このことを検証するために、しばらく数詞以外の名詞のアクセント特徴を検討してみよう。

松森(2011)では、「AB 対 C」タイプの合流を遂げた赤連と、「A 対 BC」タイプの合流を遂げた小野津の比較を通じ、どちらのタイプの方言でも、全体の長さが1拍~3拍までの語彙については、その2種のアクセント型に比較的バランスよく語彙が所属しているのに対し、全体が4拍以上の長さの語彙になると、HLHLというようなリズム構造を持ち、語末が下がって終わるアクセント型の単語が、両方言ともに増加していくことを指摘している。

たとえば(13)は、今回の喜界島合同調査によって上嘉鉄で収集された、4拍以上の長さを持つ語を、そのアクセント型によって分類したものである。これを見ると、HHLHのように語末が上がって終わる型よりも、HLHL(HHLHL)のように語末が下がって終わる型のほうが、その所属語彙が多いことが分かる。

---

出現したが、この原因は不明である。



(13) 喜界島上嘉鉄方言の4拍以上の語彙の型とその所属語彙

- **HHLH 型** (語末が上がって終わる型)

hiza]çi[mu (脛)、 ju:]we[: (祝い)、 se:]mu[ri (結婚式)、 k<sup>h</sup>ogota[na (小刀)、  
ma] çim[ma (昼)、 hammja]:[ri (雷)、 t<sup>h</sup>in]to[: (空)

- **HLHL 型** (語末が下がって終わる型)

ʔu]ta[je]: (顎)、 ni]bu[tu]: (おでき)、 t'u]m[be]: (唾)、  
ja]:[nu]tçu (家族)、 so]:[de]: (兄弟)、 k'a]n[tça]: (子供達)、  
haro]:[dzi]: (親戚)、 se:]k'u[sa]: (大工さん)、 ʔa]m[ma]: (母)、  
me]:[ra]bi (若い娘)、 gi]:[ha]: (かんざし)、 t<sup>h</sup>i]nu[guli (手ぬぐい)、  
na]ri[mu]N (果物)、 du]:[çi]: (雑炊)、 t<sup>h</sup>i]n[dzo]: (天井)、  
çi]n[tçi]N (便所)、 sa]n[çi]n (三味線)、 mun]nja[ra]: (麦わら)、  
çi]ma]ju[mi]ta (方言)、 sa]mba[ra]: (箕)、 o]:[da]: (運搬用モッコ)、  
su]:[ka]: (急須)、 mi]su[na]ti (一昨年)

(2011年9月 国立国語研究所喜界島合同調査の結果から)

このように、名詞の長さ(拍数)が4拍以上になると、この方言(上嘉鉄)ではHLHL、HHLHLのような語末が下がって終わる型を持つ単語の数が多くなっていき、これに対してHHLH、HHHLHのような、語末が上がって終わるアクセント型を持つ単語の数が減っていく。

つまり(少なくとも体言について言えば)、その拍数が長くなればなるほどHLHLパターンのほうがHHLHパターンよりも生産的になる、と言えるだろう。

さらに、今回の調査で明らかになったのは、「A 対 B C」タイプの合流を遂げた小野津方言でも同様なことが言えるということである。すなわち、上嘉鉄方言でHLHLというリズム構造で出現する多くの単語(すべてではない)が、小野津でも同じような構造で出現したのである。たとえば、次のような単語がそれにあたる。

(14) 喜界島小野津方言におけるHLHL(HHLHL)のリズム構造を持つ語彙

ni]bu[tu]: (おでき)、 tsu]b[bě]: (唾)、 ja]:[nin[dzu]: (家族)、 kjo]:[de]: (兄弟)、  
k'wa]n[kja]: (子供達)、 ʔa]ro]:[dzi]: (親戚)、 se:]ku[sa]: (大工さん)、  
ʔa]m[ma]: (祖母の意味)、 du]:[çi]: (雑炊)、 sa]n[çi]n (三味線)、  
sa]mba[ra]: (箕)、 ʔo]:[da]: (運搬用モッコ)、 mi]tsuna[ti]: (一昨年)

(2011年9月 国立国語研究所喜界島合同調査の結果から)

したがって、(1~3拍までの名詞についてだけ言えば、小野津と上嘉鉄のアクセント型はかなり異なっているものの)4拍以上の単語になると、そのアクセント型が両者で似

通ってくるのである。つまり、「AB 対 C」「A 対 BC」のどちらの合流タイプの方言においても、単語が長くなるにつれて HLHL (HHLHL) のリズム構造の単語が増加していく、という興味深い現象が明らかになった。

これはまだ仮説の段階に過ぎず、今後の調査によって確認していかなければならない事であるが、このように長い単語において HLHL のような語末が下がって終わるアクセント型が多くなる、という音韻特徴は、この上嘉鉄だけでなく、喜界島のほぼ全域について言えるのではないだろうか。つまり HLHL (HHLHL、HHHLHL) のように語末が下がって終わる型が、喜界島全域を通じて無標なリズム構造だ (松森 2011) とと思われるが、これは、今後、この地域の外来語や新語も数多く収集して検証していく必要がある。

さらに言えば、HLHL 型の生産性は、複合名詞のアクセントを決定する際にも働いている。今回の喜界島調査では複合語の形成規則については調査することができなかったのだが、私の 2000 年の赤連方言のアクセント調査では、次のような複合語を作成して発音してもらったところ、そのすべてが下がって終わるアクセント型 (HLHL、HHLHL 型) で出現した。(ちなみにこの赤連も、上嘉鉄と同じ「AB 対 C」タイプの合流を遂げた方言である。)

(15) 赤連方言の複合語 (2000年3月赤連方言調査結果から)

habi]ba[ku]R (紙箱)、hari]ba[ku]R (針箱)、  
bintoR]buQ[ku]R (弁当袋)、juRbiN]buQ[ku]R (郵便袋)  
sjima]muQ[cji]R (島餅)、 mamI]muQ[cji]R (豆餅)、  
Futu]muQ[cji]R (蓬餅)、guma]muQ[cji]R (胡麻餅)  
hiru]ba[te]R (にんにく畑)、 hana]ba[te]R (花畑)、  
bira]ba[te]R (萰畑)、 cjiuri]ba[te]R (胡瓜畑)、  
guma]ba[te]R (胡麻畑)、 tuQsoR]ba[te]R (南瓜畑)

この (15) に示された複合語の後部要素のうち、「箱」(ha[ku, ha]ku [nga) は語末が高く終わる型 (HLH 型) で、「袋」( [FuQ]ku, [FuQku nga)、「餅」(muQ[tji]R, muQ[tji]R nga)、「畑」(ha[te]R, ha[teR nga) は語末が下がって終わる型 (LHL 型) であるが、この方言の複合語アクセントはその後部要素のアクセント型とは相関性が見られない。

一方、前部要素のアクセント型がこれらの複合語のアクセント型を決定しているわけでもない。ちなみにこれら複合語の前部要素のアクセント型は、「紙、弁当、島、豆、にんにく、花、萰、胡瓜」がその単独形が上がって終わる型、「針、郵便、蓬、胡麻、南瓜」は単



## 5 日本祖語系数詞のアクセント：今後の課題

今回は喜界島の中でも上嘉鉄や坂嶺など、「A B 対 C」タイプの合流を遂げた方言だけに焦点を当てて、喜界島語彙のアクセント特徴を考察した。今後は、「A 対 BC」タイプの合流を遂げた小野津、志戸桶の数詞もさらに調査して、検討してみる必要がある。

これまでの議論から予測されるのは、「A 対 BC」タイプの合流を遂げた小野津、志戸桶方言では、「2つ、3つ、4つ、6つ、8つ、とお」がまとまって同じ型で出現し、「1つ、5つ、7つ、9つ」がもう一つの型に入るのではないかと、ということである。しかし、もしこれらの方言においても、上嘉鉄同様、4拍以上の長さの語彙のアクセント型が生産的な HLHL (HHLHL, HHHHL) 型に収束していく傾向が存在するとすれば、長い数詞がこの型で出現する可能性が高い。

残念ながら今回の調査では、この2つの方言（小野津、志戸桶）の数詞について、このことを検証するために十分なデータが得られなかったため、これは今後の調査の課題としたい。

一方、喜界島の外に目を向ければ、小野津、志戸桶以外にも、「A 対 BC」タイプの合流を遂げた琉球諸方言は数多く存在する。たとえば、奄美大島南部の瀬戸内町の諸方言がその典型だが、そのような方言では、今回指摘したような「1つ、2つ、3つ、4つ、6つ、8つ、とお」対「5つ、7つ、9つ」のような型の対立が保たれているのではないだろうか。この仮説の検証も今後の課題としたい。

さらに上嘉鉄や坂嶺と同様な「A B 対 C」タイプの合流を遂げた方言は、喜界島以外にも存在する（たとえば、宮古島<sup>よなは</sup>与那覇や伊良部島<sup>さらはま</sup>佐良浜など）。もしこれらの諸方言で、喜界島のような長さによる型の制約がなければ、その数詞は、「1つ」対「2つ、3つ、4つ、5つ、6つ、7つ、8つ、9つ、10」のような型の対立を保って出現することが予想されるが、そうなっているだろうか。これについても、今後の調査で確認したい。<sup>8</sup>

### 参考文献

- 久野マリ子(1986)「奄美方言の数を表す接尾辞—沖永良部島知名町の場合—」  
『琉球の方言』10号:76-122、法政大学沖縄文化研究所
- 松森晶子(2011)「喜界島祖語における3型アクセント体系の所属語彙—赤連と小野津の比較から—」『日本女子大学文学部紀要』60号:87-106
- ローレンス、ウェイン(2008)「与那国方言の系統的位罫」『琉球の方言』32号:59-67、  
法政大学沖縄文化研究所

<sup>8</sup> 私見だが、特に「A B 対 C」このようなタイプの系列の統合を遂げた方言に、長い単語（特に複合語）が特定のリズム構造に収束していく傾向が色濃く観察されるのではないかと考えている。この理由については、また稿をあらためて論じることとしたい。



# 鹿児島県喜界町方言におけるオノマトペの語彙的特徴

竹田 晃子

## 1 はじめに

本稿は、鹿児島県大島郡喜界町方言のオノマトペの特徴を把握することを目的とする。具体的には、方言文献資料によるオノマトペ・リストを作成しつつ語彙的な特徴を概観したのち、喜界町城久（ぐすく）における面接調査によって実際の使用状況を把握する。

方言におけるオノマトペ研究は、共通語のオノマトペ研究が大規模なデータベースに基づいて多角的に行われている現状とは異なり、語形のリストすら存在しない。本稿は、方言文献資料に基づいて喜界町方言のオノマトペ・リストを作成し、それらを参照しながら実際の調査を行うことにより、方言におけるオノマトペの研究方法を模索するという側面を持つ。

## 2 方言文献資料からみた喜界町方言のオノマトペ

### 2.1 喜界町方言オノマトペ・リスト

最初に、方言文献資料から喜界町方言のオノマトペを抽出した「喜界町方言オノマトペ・リスト」を作成し、語形と意味、語形数から全体像を概観する。

文献資料として利用したのは次の3種類である<sup>1</sup>。

- [1] 岩倉市郎(1941)『喜界島方言集』中央公論社（国書刊行会，1977年復刻）  
喜界町阿伝出身・1904(明治 37)年生まれの筆者による方言集。阿伝の方言を中心に採集。
- [2] 中本正智(1978)「喜界島志戸桶方言の語彙」『琉球の方言 4—奄美喜界島志戸桶一』，法政大学沖縄文化研究所  
喜界町志戸桶の高年層を対象に行われた方言調査報告のうち、語彙分野の報告。
- [3] 森 豊良(1979)『喜界島の方言集』（自費出版）  
喜界町中間出身・1905(明治 38)年生まれの筆者による方言集。採集地点については特に明記されていない。

上記の資料から抜き出したオノマトペはのべ149語となった。末尾の付表「喜界町方言

<sup>1</sup> この他、次の2点も参照したが、共通語形で記述されていたため利用しなかった。

・岩倉市郎 採取(1943)『喜界島昔話集』三省堂  
・田畑英勝 編(1974)『奄美諸島の昔話（日本の昔話 7）』日本放送出版協会

のオノマトペ・リスト」およびその凡例を参照されたい。当該方言の語彙においてオノマトペが占める割合は、上記資料における全語形のオノマトペ語数が1万語を超えることからみて、とりわけ多いものではない。方言集としては〔1〕に比べて〔3〕が倍以上の数となったが、これは他地域の方言集・方言辞典と同傾向で、近年になるほど方言におけるオノマトペが語形として意識されやすくなったことの反映であると考えられる。

このリストをもとに、以下、語形と意味について述べる。

## 2. 2 語形の種類

喜界町方言オノマトペ・リストにおける語形<sup>2</sup>の種類は、主に次の3種類である。

### ①繰り返し語形（語末の長音が繰り返しに対応しない語形も含む）

アドゥナアドゥナ、ウチャウチャ、ツウニャツウニャ、ガジガジ、ガタガタ、ガヂガヂ、カミヤカミヤ、ガラガラ、キーキー、グーグ、グジュグジュ、クスクス、グヂュグヂュ、グツグツ、グラグラ、クリクリ、ゲーゲ、ケーケー、ゲーゲー、コーコー、ゴンゴン、サーサ、ザーザ、ザーザー、サッサ、サラサラ、ジルジル、ジワジワ、スッサギスッサギ、ズラズラ、セカセカ、ソーソ、ソヨソヨ、ターリターリ、タチョタチョ、ヂヂ、ヂルヂル、チンチン、ツッチャツッチャ、ツルツル、ツンツン、ディーディー、テヤテヤ、ドゥムドゥム、トゥルトウル、ドゥルドウル、ドキドキ、ドンドン、ナドナド、ナンブナンブ、ニューニュー、ネイーネイー、バタバタ、パチパチ、ハッチラハッチラ、ハラハラ、ピーピー、ヒーラヒーラ、ヒーリヒーリ、ビラビラ、ブーブー、ブカブカ、フトゥフトゥ、フトフト、フヤフヤ、ブラブラ、ブルブル、マードゥイマードゥイ、マーマー、マチャマチャ、マヤマヤ、マンチャマンチャ、ムシヤムシヤ、ムジャムジャ、ムチャーリムチャーリ、ムチャムチャ、ムドムド、ムニャムニャ、ユデーユデー、ユフユフ、ユラユラ、ヨイヨイ、ヨーリヨーリ、ヨイヨーイ、ヨーガリヨーガリ、エーエ

### ②イ・リ・ラ等が付く語形

- ・イ：アッサイ、エーイ、ガッツイ、ガットゥイ、グルイ、グンナイ、サッパイ、シツカイ、シッターイ、スツタイ、スツパイ、ズップイ、チツカイメツカイ、ツマイ、ドゥップイ、ゾップイ、トゥムイ、ニューウイ、ニューワイ、ビッターイ、ユラリュイ、ユルイ、ヨーイ、ヨイヨイ、マードゥイマードゥイ、ヨイヨーイ
- ・リ：サリッ、ツゾーリ、ヨーリ、サンジャリ、クリクリ、ターリターリ、ヒーリヒ

<sup>2</sup> 無気音・鼻音・アクセントの表記は省略した。原典を参照されたい。

ーリ，ムチャーリムチャーリ，ヨーリヨーリ，ヨーガリヨーガリ

- ・ラ：バラ，パラ，ビラー，ブラ，ガラガラ，グラグラ，ズラズラ，ハッチラハッチラ，ハラハラ，バンバラー，ヒーラヒーラ，ビラビラ，ブラブラ，ユラッサラ，ユラユラ

### ③ト／トゥ（副詞の接辞）が付く語形

アッサイ ト，グルイ ト，サッパイ ト，シッカイ ト，ユルイ ト，ウガッ ト，クッ ト，ヤッ ト，ブン トゥ，ツン ト，パシ トゥ，スハッ ト，サーザー ト，ディーディー トゥ，ネイーネイー ト，マーマー トゥ

上記から、喜界町における方言オノマトペの語形は本土方言と同様、繰り返し語形が多い点で本土方言と同様であることがわかる。また、名詞「ドゥル（泥）」の繰り返し語形「ドゥルドゥル（泥などの形状。どろどろ）」、動詞「ウチャ（浮き）」の繰り返し語形「ウチャウチャ（落ち着きのないこと。うきうき）」など、名詞や動詞と関係がある語形もある。

本土方言と異なる点として、語末音にリ・ラよりもイが多いことがあげられる。イはラ行子音が脱落したものと考えられる。また、イが付いた語形は繰り返し語形が少ないのに対して、ラが付く語形はほとんどが繰り返し語形である。

また、本土方言と比べると動詞の構成要素としての生産性はあまり高くない。動詞「する」相当の語形が付く「ツルツル シ」「ドキドキ シ」などの語形はあるが、他方言や共通語にみられる「キラメク」「ザワメク」，「ネバツク」「ムカツク」などのような動詞接辞メクやツクが付いた語は確認できない。一方で、オノマトペ＋「人」のような形、たとえば「ブラムン（することがなくぶらつく人＝することがなく遊びくらす人）」「クスチャー（のどがごろごろしている人＝喘息の人）」など、名詞と結びつく形は散見される。

## 2. 3 意味の分類

喜界町方言オノマトペ・リストを意味によって次の7種類に分類した。語数は括弧内に示した（詳細は表1を参照）<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> ただし、今回の分類は、方言オノマトペについて一般に行うべき分類というより、喜界町方言オノマトペ・リストをみわたし、意味で全体を大きく分けようとする7種類になるというようなものである。したがって、日本語方言あるいは日本語方言全体における喜界町方言について、オノマトペの特徴を把握するためには、他地域との比較を視野に入れた分類が必要になる。また、これらの分類のうち、④速度・⑤心理・⑥量・⑦抽象的意味は副詞に分類されることが多いと思われる。ここでは詳細な意味区別のために分けたが、この分類については再考の余地がある。



- ①音……動物の鳴き声や実際の物音を表す語（擬音語・擬声語）（36語）
- ②動き…物や人の動くようすを表す語（39語）
- ③身体感覚…身体の調子や腹具合・睡眠状態，触り心地などを表す語（18語）
- ④速度…動きの速度を表す語（18語）
- ⑤心理…人の気持ちを表す語（10語）
- ⑥量……事物の量を表す語（21語）
- ⑦抽象的意味…上記に当てはまらない抽象的な意味を表す語（例：ちょうど・たくさん・しっかり・あたかも・もう，など）。（25語）

語数は、①音・②動き，次いで⑦抽象的意味・⑥量に分類されたのべ語数が多いが，特にどの意味が多いということはない。また，一つの語が複数の意味を持つということも，一つの意味を複数の語形が表すということもなく，このリストにおいては一つの語が複数の意味を持つということはない。

## 2. 4 語形の種類と意味の分類

語形の種類と意味の分類を組み合わせてのべ語数をまとめると，表1のようになる。

表1 語形の種類ABCと意味の分類①～⑦の関係

		93語	50語	16語
		A 繰り返し語形	B～イ・ラ・リ	C～ト・トゥ
36語	①音	● 24語	△ 7語	— 1語
39語	②動き	● 30語	◎ 12語	— 0語
18語	③身体感覚	● 15語	◎ 8語	— 0語
18語	④速度	● 11語	△ 5語	△ 3語
11語	⑤心理	△ 8語	△ 3語	— 1語
21語	⑥量	— 2語	◎ 8語	△ 3語
25語	⑦抽象的意味	— 3語	△ 7語	◎ 8語

（列の目安として：●多い，◎やや多い，△やや少ない，—ほとんどない・ない）

表1から，喜界町方言のオノマトペは，語形と表される意味との間に関連があることがわかる。A繰り返し語形は，①音・②動き・③身体感覚・④速度を表すものに多く，⑥量・⑦抽象的意味を表すものには少ない。Cト・トゥを後接する語形は⑦抽象的意味を表すものに多く，①音・②動き・③身体感覚・⑤心理を表すものにはほとんどない。逆のみかたをすると，実質的なものには繰り返し語形が多く，抽象的なものにはト・トゥを後接するものが多いという傾向があるといえる。

### 3 喜界町城久方言におけるオノマトペ

#### 3.1 面接調査の観点

面接調査では、喜界町方言オノマトペ・リストでもっとも語数が多かった部分に注目し、語の使い分けを把握できるよう質問文を用意した。語数が多かったのは、実際の音や声を表す場合、動きのようすを表す場合、それらに比べるとやや抽象的な意味に用いられる場合である。したがって調査では、雨音と動物の鳴き声などを表すオノマトペ、人や動物の動きのようすを表すオノマトペ、速度と量を表す副詞的用法のオノマトペを取り上げることとした。

語彙の研究、特に意味記述においては、通常、いわゆる「閉じられた体系」を仮定し、その体系内での語の使い分けを記述していく。無限に広がる語彙を一定の範囲に囲い込み、その中での意味的な関係を明らかにするということである。今回の調査では、オノマトペ・リストから類似・隣接する意味で使い分けられることが見込まれる複数の語形群を選び出し、琉球方言・本土方言との関連や調査のしやすさにも考慮しながら調査を設計した。

面接調査は、2010(平成22)年9月10日に、城久公民館において城久の生え抜きの高年層・女性2名(1929生、1932生)を対象に、筆者が行った。お二人の回答には大きな違いがみられなかったため、本稿ではまとめてあつかう。また、方言の表記について、文献資料は原文に基づく。面接調査の結果はなるべく発音に近いカタカナ表記を基本とし、オノマトペ部分に音声表記を併記する。

以下、順に調査結果を述べる。

#### 3.2 音を表すオノマトペ

喜界町方言オノマトペ・リストで「音」に分類した語を概観すると、個別の音を表す語が多く、何らかの意味体系をなしていると思われるものは見出しにくい。また、音を表すオノマトペにおいて、大きな音は有標だが、小さな音は無標であると考えられる。ここでは雨音を表すオノマトペをたずねたが、大きな雨音にはオノマトペが用いられるものの、小さな雨音にはオノマトペが回答されなかった。

激しい雨の降る音は(1)のようにザーザー[ɕa:ɕa:]と表現される。(2)(3)のようなオノマトペ以外の表現も回答された。

- (1) ザーザー[ɕa:ɕa:] アメ フットウイヤー。(激しい音で雨が降っている。)
- (2) シンコクアメ フットウイヤー。(激しい雨が降っている。)
- (3) オーアメ フットウイヤー。(大雨が降っている。)

弱い雨が降るようすを表す場合には、次のようなオノマトペ以外の語形が回答された。

- (4) ナマアミ フットウイヤー。(弱い雨が降っている。)

### 3. 3 動物の鳴き声や動物がたてる音を表すオノマトペ

鳴き声を表すオノマトペについては、豚、馬、牛、猫、犬、鶏、雲雀、尾長鶏、鶯の鳴き声について、(5)~(13)のような回答を得た。

(5) 豚：ゴイーゴイー [goi:goi:]

(6) 馬：ヒー [çi:]

(7) 牛：モー [mo:]

(8) 猫：ニャーニャー [nja:nja:]

(9) 犬：ワンワン [wanwan]

(10) 鶏：クークー.クークー [ku:ku:.ku:ku:] (鳴き声)

鶏：コケコッコー [kokekokko:] (朝、時を告げる鳴き声。共通語的)

(11) 雲雀：チッチー [tçittçi:]

(12) 尾長鶏：へーへーコイコイコイ [he:he:koikoikoi]

(13) 鶯：ホントニタケタカ [hontonikaketaka] (聞きなしの一種)

蠅については、羽音を表すオノマトペが回答された。

(14) へーガ ブーブー [bu:bu:] スイ。(蠅がブンブンする。=蠅がブンブン飛ぶ。)

次の(15)は猫がのどを鳴らす音のオノマトペであるが、これは(16)のように猫を呼ぶときの呼びかけでもある。

(15) 猫が：グルグル, グルグル [guruguru.guruguru] (猫が喉を鳴らす音)

(16) 猫に：グルグル, グルグル [guruguru.guruguru] (猫を呼び寄せるとき)

「猫」の名称にはグルー [guru:] を用いる<sup>4</sup>。城久の話者お二人に「猫」をグルー [guru:] と表す理由を尋ねたところ、もともとは猫がのどを鳴らす音をまねたオノマトペに由来するとの回答であった。幼児語としても用いるが、大人語でもあるという。このことから、(15)(16)のオノマトペの短縮形が「猫」を表す名詞になったものと考えられる<sup>5</sup>。喜界島南部に位置する上嘉鉄、中里の生え抜き話者（どちらも男性）からも同様の回答を得た。

喜界町の方言分布については中本正智(1987)に詳しい。南西部にグルー [guru:] が分布するようすとグルー [guru:] の由来について、次のように述べている (p.67。下線は竹田による)<sup>6</sup>。

<sup>4</sup> 面接調査ではグルー [guru:] が自発的に回答され、誘導によってマヤー [maja:] も回答された。

<sup>5</sup> 岩倉(1941)には「グルー：猫。マヤーに同じ。」(p.101)とある。

<sup>6</sup> 中本(1981)(1979)が指摘するように、名詞「猫」を表す [maja:] が猫の鳴き声のオノマトペに由来する語であるかどうか、今回の調査では確認できなかった。今後の課題である。

猫を表す喜界島の方言は、マヤーとグルーの両形であり、次のようになっている。

maja: 荒木、手久津久、浦原、川嶺、花良治、蒲生、阿伝、嘉鈍、白水、早町、塩道、佐手久、志戸桶、小野津、伊実久、伊砂、長嶺、中熊、西目、大朝戸、島中、先内、中間、池治

guru: 荒木、上嘉鉄<sup>7</sup>、先山、浦原、佐手久、滝川、城久、山田、羽里、池治、赤連、湾、中里

マヤー系は、北部と中部を中心に分布し、グルー系は湾を中心に南部に分布している。

喜界島で猫をマヤーとかグルーとかいうが、その名付けかたが興味深い。マヤーは猫の鳴き声からきた擬声語である。ではグルーはどのような語であろうか。

これも擬声語で、猫が人なつっこくすり寄って来て喉を鳴らすところからきている。同じ擬声語由来の語であっても鳴き声と喉を鳴らすことの両方から来ているのは興味深いことである。

沖縄方言で猫をマヤーというのだが、猫を呼ぶときは独特のしぐさがある。手を差し出し、手の平を上にして指を立て、屈伸させる。手はちょうど欧米人が手まねきをするような動きをする。手の動きに合わせて、クルクルと呼ぶのである。そして猫の喉をなでてやると猫は喉をクルクルと鳴らして安心する。この呼び声のクルが喜界島で猫の名称に発達したと考えられる。

また、グルー[guru:]は奄美大島にも分布する。琉球全体の方言分布を図示した中本(1981)は、「グルー系は奄美大島と喜界島にあり、幼児語として使われることもある。グルー系は猫の喉を鳴らす音から出た擬音語である。本来、幼児語として発達したもので、大人でも猫を呼ぶときには使われる。」(p.144)と述べている。

<sup>7</sup> 上嘉鉄について、中本(1987)の地図にはマヤーの記号があるが、本文にはグルーとある。

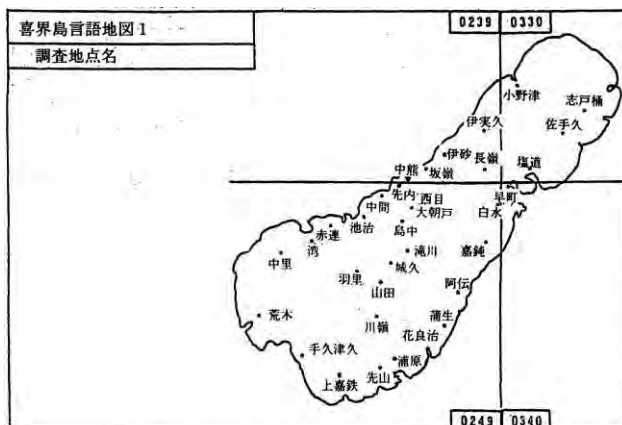


図1 「1. 調査地点名」中本(1987 ; p. 55)

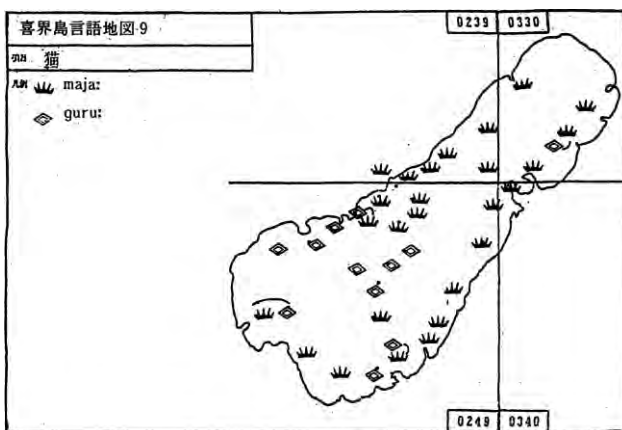


図2 「9. 猫」中本(1987 ; p. 63)

喜界町方言には、オノマトペの繰り返し語形を短縮化した語形の語末を長音にしたものが名詞として用いられる例が他にもみられる。表2に、繰り返し語形と名詞と対応していると思われるものを岩倉(1941)から抜き出してまとめた。これらの名詞は、「繰り返し語形の意味する状態にある人」というような意味を表すことがわかる。

表2 繰り返し語形の短縮化による名詞形

オノマトペ (意味)	名詞 (意味)
アドゥナアドゥナ (のろのろーまごまご。) 岩・p.015	<u>アドゥナー</u> (のろま。罵言して言う語。アドゥスイも言う。) 岩・p.015
グンナイグンナイ (跛者の歩行の様を形容していう。) 岩・p.101	<u>グンナー</u> (跛。) 岩・p.101
ヂルヂル (じろじろ。目を動かし、またはぎよろぎよろ凝視する形容。) 岩・p.187	<u>ミーヂルー</u> (目のぎよろぎよろしている人。) 岩・p.187
ブカブカ (副詞。ふはふはと軽い触感。一ふとんや土など。) 岩・p.272	<u>プカー</u> <sup>8</sup> ((阿伝・児) 相撲の弱い者。) 岩・p.272
ヨーガリヨーガリ (ひよろひよろ よろよろ。人にも物にもいう。) 岩・p.326	<u>ヨーガリー</u> (痩せてひよろひよろしている者。) 岩・p.326

「猫」のグルー[guru:]も同様に、オノマトペの繰り返し語形を最短の語形に短縮化し、語末を長音にすることで、名詞形「グルグル、グルグル[guruguru.guruguru]とのどを鳴らす動物」というような意味から成立したものと考えられる。猫がのどを鳴らす音のオノマトペとして用いるときはグルを2~4回繰り返すのが一般的だが、名詞「猫」として用いるときは繰り返さず、語末を伸ばしてグルー[guru:]と言う。共通語でも動物の鳴き声のオノマトペ「ワンワン」「チュンチュン」などが「犬」「雀」などの動物名として用いられることがあるが、あくまでも幼児語であり、繰り返し語形を短縮化した「ワン」「チュン」などの名詞形もない。

他の動物についてもこのような対応がないか確認したところ、鶏を呼び寄せるときに「トゥートゥー、トゥートゥー[tu:tu:.tu:tu:]」を用い<sup>9</sup>、「鶏(名詞)」の幼児語としてトゥートゥー[tu:tu:]と言う場合があることがわかった<sup>10</sup>。

(17) 鶏に：トゥートゥー、トゥートゥー[tu:tu:.tu:tu:] (鶏を呼ぶとき)

(18) 子どもに幼児語として：トゥートゥー[tu:tu:] (名詞：鶏)

しかし、トゥートゥー[tu:tu:]はオノマトペには由来しないようである。鶏の鳴き声のオ

<sup>8</sup> 「プカー」は阿伝の幼児語とあるが、「ブカー」の誤植かと思われる。

<sup>9</sup> 岩倉(1941)にも「トゥートゥー：鶏を呼ぶ語。」(p.152)とある。

<sup>10</sup> 岩倉(1941)には、「ニューニュー(幼)：鶏。トゥートゥーに同じ。」(p.208)とあるが、今回の調査では確認されなかった。

ノマトペは「クークー、クークー[ku:ku:ku:ku:]」で、これは呼び寄せ語としては使われない。また、名詞「鶏」の大人語としてトゥイ[tui]が回答され、オノマトペに由来する名詞「鶏」相当の語形（たとえばトゥーのようなもの）は確認できなかった。

この他の動物については、犬を呼ぶときは名で呼び、牛・馬・豚を呼び寄せることはまずないとのことで、猫・鶏以外の動物を呼び寄せる際のことばは回答されなかった。なお、牛への号令として(18)(19)(20)のような回答があった<sup>11</sup>。家畜に対して呼びかけること自体が号令であるためと考えられる。馬については手綱で命令するとのことで、特に回答されなかった。

- (19) 牛に：ッウ[?u]（号令：左に行け）  
 (20) 牛に：トゥディ[tudi]（号令：右に行け）  
 (21) 牛に：ファイ[ɸui]（号令：前進しろ）」

以上の動物の鳴き声のオノマトペや動物への呼び寄せ語などについて、表3にまとめた。

表3 城久方言における動物の鳴き声などのオノマトペと  
それに由来する呼びかけ語・名詞

語 動物	鳴き声などのオノマトペ	呼び寄せ語	オノマトペ由来の名詞	
			幼児語	大人語
豚	[goi:goi:]	—	—	—
馬	[çi:]	—	—	—
牛	[mo:]	—	—	—
犬	[wanwan]	—（名前で呼ぶ）	—	—
猫	[nja:nja:]（鳴き声）	—	—	—
	[guruguru.guruguru] （のどを鳴らす音）	[guruguru.guruguru]	[guru:]	[guru:]
鶏	[ku:ku:ku:ku:]	—	—	—
	—	[tu:tu:tu:tu:]	[tu:tu:]	—
雲雀	[tɕittɕi:]	—	—	—
尾長鶏	[he:he:koikoikoi]	—	—	—
鶯	[hontonikaketaka]	—	—	—
蠅	[bu:bu:]（羽音）	—	—	—

（—は該当する語形が回答されなかったことを意味する）

<sup>11</sup> 岩倉(1941)には「チュディ：左一馬及び牛に命ずる語。」(p.147)，「ウ：右、一馬及び牛に方向を命ずる語。」(p.40)，「ファイ：馬に「進め」と命ずる語。」(p.232)とあり、(19)～(21)とほぼ符号する。

これらのことから、喜界町方言においては、動物の鳴き声などのオノマトペは必ずしもそのまま動物を表す名詞になるというわけではなく、特に「猫」において、次のように成立したものと思われる。「猫」がのどを鳴らす音を模したオノマトペがあり、それがペットとして呼び寄せるときの呼び寄せ語となる。同時にそのオノマトペを短縮化し、語末を長音化した語形が幼児語において一般名詞として用いられ、最終的に大人語としても定着したと考えられる。「グルグル、グルグル[guruguru.guruguru]」が実際の音を模したオノマトペに由来すると認識しつつ呼び寄せ語としても用い、オノマトペを短縮化して語末を長音化した語を「猫」の一般名詞として大人が用いる点、さらにこれが地理的な分布域を持ち共有されている点で興味深い。

なお、大人が一般的に用いる語であるものの、城久のグルー[guru:]には一種のユーモアが感じられる。喜界町城久の話者お二人は、名詞「猫」についてたずねたとき、目を輝かせて楽しそうに「グルー[guru:]」と発話し、喜界島では本当は[maja:]<sup>12</sup>と言うが城久では[guru:]と言うのだと説明しながら、[guru:]は[maja:]をオノマトペで言い換えることば遊びのようなユーモアを含む語であることを教えてくれた。大人語として用いられる場合にも語形の由来がオノマトペであると認識されているため、副次的なニュアンスを含むものと考えられる。

### 3. 4 動きのようす

動きの様子を表すオノマトペについては、中本(1978)「喜界島志戸桶方言の語彙」の「人間及び生物の擬態語」に次のようにあり、動作主体によるオノマトペの使い分けが示されている (p.14)。

「うろうろ」など、動作を表現する語。

人間は manja manja

tʃʔuŋa manja manja sui (人がうろうろしている)

牛・馬は matʃa matʃa

猫・犬は maja maja

maja:ŋa maja maja sui (猫がうろうろしている)

ʔiŋŋa: ŋa maja maja sui (犬がうろうろしている)

魚は mantʃa mantʃa

虫は ʔunja ʔunja

蛇は ʔunja ʔunja

---

<sup>12</sup> マヤー[maja:] (猫)はオノマトペのマヤマヤ[maja maja] (うろうろする)とは結びつかないようである。話者に尋ねたところ、特に思い当たらないとのことであった。

蠅は bu: bu:

上記の記述を参考に、人間、牛・馬、犬・猫、魚、虫、蠅が「うろうろするさま」を表すオノマトペに注目して調査を行った。城久では、人間・猫・犬・魚についてはマヤマヤ[majamaja]が用いられると回答された。

(22) アンチョー マヤマヤ[majamaja] スッチャヤ。(あの人、フラフラしている。)

(23) ウヌ インカ°ー マヤマヤ[majamaja] シテ アッチュイヤー。(うちの犬、うろうろして歩いている。)

(24) ウヌ グルー マヤマヤ[majamaja] シテ アッチュイヤー。(うちの猫、うろうろして歩いている。)

(25) アン イオ マヤマヤ[majamaja] スイ。(あの魚、ウロウロしている。)

人については(25)のようにトゥルトウル[turuturu]も回答された。ただし、うろうろしているというより、酔っ払ったときのようにふらふらして体が安定しない、という意味で用いられる。

(26) アンチョー トゥルトウル[turuturu] スッチャヤ。(あの人、フラフラしているよ。)

(26)については、岩倉(1941)に「トゥルトウル：うつらうつら—眠り陥ろうとし、または醒めようとするときの状態。」(p.178)、森豊良(1979)に「ツルツル シ：うつら、うつらした。じゅくすいしないこと。ねいったことがはっきりしない。」(p.196)とあるように、うたた寝をするときのようすを表す。

他方言においても同様の意味を表す場合がある。小野正弘編(2007)には次のようにある(p.276。下線は竹田による)。

つるつる [方言] 浅く短く眠るさま。近畿地方・中国・九州地方。「つるっ」ともいう。

「いつの間にやらつるつると寝てしもうた」〈京都府〉 「つるつるっとしたら一番列車が通った」〈島根県〉 「つるっとした(一眠りした)」〈広島県〉

「九州地方」とあるのは大分県の方言集をさしており<sup>13</sup>、「ちょっとだけ眠る事。仮眠。」(月刊シティ情報おおいた・プラス編(1992);p.103)、「仮眠をとること。=とろっとする。」(蒲江町教育委員会編(2000);p.78)がそれである。これらのことから、(25)のトゥルトウル[turuturu]は、仮眠を取る際に体が安定せず無意識にゆらゆら動くようすを表すオノマトペとして、中国地方・九州地方から連続的に分布しているのではないかと推測される。辞書や方言集の記述だけでははっきりしないため、大分県や島根県など他の地域での用法

<sup>13</sup> 小野正弘 編(2007)における方言項目は竹田晃子・三井はるみが執筆した。「つるっ」の項目



についてさらに詳しい情報が必要であろう。

虫については、「集まってうごめいているさま」を表すオノマトペとして、ツウジョウジヨ [ʔuɕɔuɕo], ワジャワジャ [waɕawaɕa] が回答された。本土方言においても同様の形式がほぼ同じ意味で使用されており、これも連続して分布しているとみられる。

(27) ムシガ ツウジョウジヨ [ʔuɕɔuɕo] スンドー。(虫がウジャウジャするよ。=虫がウジャウジャとうごめくよ。)

(28) ヘーガ ワジャワジャ [waɕawaɕa] スイ。(蠅がウジャウジャする。=ウジャウジャとうごめく。)

### 3. 5 副詞的用法のオノマトペ

オノマトペが最も抽象的な意味を持つのは、副詞として用いられる場合であると考えられる。音や声を表す場合は実体を語形でとらえたオノマトペともいえるが、副詞は速さや量を抽象化してとらえていると考えられる。

そこで、今回は、前述のリストにおいて「急いで」「たくさん」「ちょうど」を意味する語のうち、オノマトペに由来すると考えられるものに注目して調査を行った。

まず、「急いで」を表す語は、岩倉(1941)、森(1978)には次のようにある。

- ・ばたばた：さっさと一急いで。

例「バタバタ歩け」。

岩倉(1941)p.269

- ・ばた、ばた：いそがしそうにしていること。

「ばた、ばた、あつきょー」(急いで歩けよ。)

「ばた、ばた、せりょー」(手早くしなさいよ。)

森(1979)p.253

- ・ばた みちゅい：非常に急ぐ—狼狽てるというに近い。バタクユイともいう。

例「あまりバタミチ(急ぎ狼狽てて)怪我するなよ」。 岩倉(1941)p.269

これらの例文を話者に提示しながら確認し、次のように使用するという回答を得た<sup>14</sup>。

(29) バタバタ [batabata] シリヨー。(急いでやれよ。)

(30) バタバタ [batabata] シランバ。(急いでやりなさい。)

(31) バタバタ [batabata] シンナヨー。(急いでするなよ。)

(32) アンマリ バタミチ [batamitçi] ケガスンナヨ。(あまり急いでやってけがをするなよ。)

このバタバタ [batabata] は、せわしなく音を立てるようすを表すオノマトペでもあるが、

---

における「九州地方」の記述は、大分県のこれらの方言集を参考にしたものである。

<sup>14</sup> 奄美地方ではグルグルも使われるとの報告があるが(『奄美の方言さんぽⅡ』p.143, 『奄美方言分類辞典』p.205), 今回の調査では得られなかった。

そのようすが急いで何かをするようすを表すオノマトペとして用いられている。

次に、「たくさん」という意味ではガバ[gaba]が用いられる。ガバに似た表現に、ツマリ、ダウンバイがある。ツマリは詰め込むように、ダウンバイは「いっぱい」というような意味で用いられる。

(33) ガバ[gaba] カミヨー。(たくさん食べなさいよ。：子どもに)

(34) ツマリ カミヨー。(たくさん食べなさいよ。：子どもに)

(35) ダウンバイ カミヨー。(いっぱい食べなさいよ。：子どもに。茶碗いっぱい・山盛りに食べなさい、というような意味)

速度についていう場合は、ドンドン[dondon]が用いられる。

(36) ドンドン[dondon] カミヨー。(早く食べなさいよ。：子どもに)

最後に、「ちょうど」「ぴったり」に相当する表現について、ガッチリ[gattçiri]がある。

(35) ガッチリ[gattçiri] イチジカン カータ。(ぴったり=ちょうど一時間かかった。)

岩倉(1941)によると、阿伝ではガットゥイが用いられ、「サーシローカ ガットゥイ」(どうしよう、ほんとに)のように後続副詞として文末に用いられるとある。しかし、城久の「ガッチリ」にはそのような用法は確認されなかった。喜界町において、これらの文法的機能には地域差があると考えられる。なお、このガッチリは九州南部のガッツイ・ガッチュイ・ガツツリなどと同系の語と思われる。

#### 4. まとめと今後の課題

以上、喜界町方言におけるオノマトペについて、方言文献によるオノマトペ・リストを語形の種類と意味による分類という観点から分析し、喜界町城久方言における面接調査から、音・鳴き声、動き、副詞的意味を表す用法について報告した。要約するとおよそ次の通りである。

文献によるオノマトペ・リストの分析では、繰り返し語形が多いことや、動詞の構成要素としての生産性はあまり高くないこと、多義語がみられないこと、音・動きを表す語がやや多いことを確認した。また、音・動き・身体感覚など実質的なものには繰り返し語形、副詞的意味のように抽象的なものにはト・トゥを後接するものが多く、語形と意味との間にある程度の関連がみられることを述べた。面接調査においては、音・鳴き声、動きのようすを表すオノマトペ、副詞的に用いられるオノマトペについて調査を行った。音を表すオノマトペにおいては大きな音は有標で小さな音は無標であると考えられること、鳴き声などの音を表すオノマトペでは、繰り返し語形を短縮化し、語末音を長音にした名詞があることについて述べた。その他、動きの様子を表すオノマトペと、オノマトペに由来する副詞類について述べ、以上のオノマトペのいくつかが本土方言と連続的に分布している可能性について指摘した。

今後の課題として、次の2点があげられる。本稿では、オノマトペ・リストを作成したことによって喜界町方言のオノマトペを見わたすことが可能になったため、語彙としての特徴を全体的に概観することができた。また、面接調査の準備と分析の段階において、これらを援用することもできた。今後は、多くの方言におけるこのようなリストや、方言間の比較や分布を確認できるようなデータベースが必要である。また、面接調査においては、部分体系をえがくのに十分な質問を実施できなかった項目が多い。調査法を含め、いずれも今後の課題としたい。

### 参考文献

- 岩倉市郎(1941)『喜界島方言集』中央公論社(国書刊行会 1977年復刻,全国方言資料集成)
- 恵原義盛(1987)『奄美の方言さんぽⅡ』海風社
- 長田須磨・須山名保子 編(1977・1980)『奄美方言分類辞典』上下巻, 笠間書院
- 小野正弘 編(2007)『日本語オノマトペ辞典』小学館
- 蒲江町教育委員会 編(2000)『かまえことのは解体新書—蒲江町の方言集』
- 月刊シティ情報おおいた・プラス 編(1992)『大分弁語録解説—現代大分弁の基礎知識』おおいたインフォメーションハウス
- 中本正智(1978)「喜界島志戸桶方言の語彙」『琉球の方言 4—奄美喜界島志戸桶—』, 法政大学沖縄文化研究所
- 中本正智(1981)『図説 琉球語辞典』金鶏社
- 中本正智(1987)「喜界島方言の言語地理学的研究」『日本語研究』9, 東京都立大学国語学研究室
- 森 豊良(1979)『喜界島の方言集』(自費出版)

## 付表 喜界町方言のオノマトペ・リスト

### 凡例

- (1) 文献列の「岩」は岩倉市郎(1941)『喜界島方言集』, 「中」は中本正智(1978)「喜界島志戸桶方言の語彙」, 「森」は森豊良(1979)『喜界島の方言集』を表す。また, 「岩」「森」「中」に当該語形が掲載されている頁番号を付した。
- (2) 語形列・意味列の表記は, 原典に近いカタカナに改めた。無気音・鼻音・アクセントについては原典にあたってほしい。ただし, 中本正智(1978)の表記のうち, η 行はカ行に° を付して表記し, 例文にはカタカナを添えた。
- (3) 併用される語形は/で区切って示した。
- (4) 意味列の例文には, 別の見出し語に掲載されていたものも加えた。その場合は, 例文の前に掲載頁番号を補った(したがって, 文献列の頁番号に相当しない場合がある)。
- (5) 分類列の略号は次の通り(分類の手順は本稿2節を参照)。

語形: A…繰り返し語形, B…イ・ラ・リが後接する語形, C…ト・トゥが後接する語形。なお, a は準繰り返し語形(例: アンビクンビ, ユラッサラなど), c はチが後接する語形で, それぞれ A・C に準ずる語形であることを意味する(本章の「2.2 語形の種類」の語数には含まない)。オノマトペに由来しない語形はこれらが空欄である。

意味: 音…擬音語・擬声語, 動…動き, 体: 身体感覚, 心…心理, 速…速度, 量…量, 抽…抽象的意味を意味する。

- (6) 意味・用例欄の【 】には本稿筆者による注記を示す。
- (7) なお, このリストは次のような点において注意が必要である。これらは今後の課題でもある。このリストには, オノマトペの周辺的な語形も含まれる。日本語方言におけるオノマトペは, 一般に語基の繰り返しや特徴的な接辞が付くなどの形をとり, 実際の音を表す語や動き・感覚のようすを表す語が多い。このリストでは, それらを手がかりに, 語形・意味・例文を検討したうえで, 文献資料からオノマトペとして抽出した。語源をたどると厳密な意味での擬音語・擬態語ではない語が含まれる可能性がある。また, 語形・意味において関連する語形をも可能なかぎりもらさず抽出しようとしたため, 例えばサ(さあ)やズンバイ(いっぱい)のように感動詞・副詞やそれらとの区別が難しい語も含まれる。リストの総語数は168語, うち感動詞・副詞などのように周辺的な語は19語含まれる(表1の語形数から除外した)。

文献・頁番号	語形	分類			意味	意味・用例
		語形				
森・p.020	アッサイト	A	B	C	抽	あっさりと。
岩・p.015	アドゥナアドゥナ	A			動	のろのろ—まごまご。p.015「アドゥナサイ(のろい、のろまである—じれったい程に。)」 p.015「アドゥナー:のろま。罵言して言う語。アドゥスイも言う。」
岩・p.023	アンビクンビ	a			量	物の溢れるほど一杯になっている形容。あふれこぼれの義。例「幾日も降り続いて、田の水はアンビクンビぢゃ」。
岩・p.037	イライラ	A				刃物等の鋭い形容、一鎌をイライラ研ぐ等。又元気の横溢している人にもイライラしている人等という。
森・p.053	ウガット			C	心	うっかりしていて。迂闊にしている。
森・p.064	ウチャウチャ	A			動	落ち着きのないこと。ウチャ、ウチャ(浮き、浮き)。
中・p.14	ツウニヤツウニヤ	A			動	「うろろう」など、動作を表現する語。虫、蛇。 ?unja ?unja p.037「カンヅムシカ° ツウニヤ ツウニヤ ウウンドー kandzumufi ŋa ?unja?unja wun do : (蛆虫がうようよいるよ)」
岩・p.057	ウミッチ			c	抽	思い切って—「うんと」たくさんの意。「ウミッチ カディ ウミッチ ファタラキ(うんと、食べて、うんと、働け。)」p.057「ウミッチュイ:意を決する。断念する。また精出す。「ウミッチ ヤラチ ミロー(意を決し、やっ、みよう。)」 「カンケーイッカ シリバー ウミッカラン ドー(考え過ぎ、すれば、思い切れない、よ。)」 「ウミッチ ヌ タラン(精出し(はげみ)、が、足らん。)」
森・p.083	エーテ/エーイ		B		量	小雨がぼつぼつ降り始めること。p.026「アミガ、エーイ ダチ(雨がぼつぼつ降り出した。)」
森・p.090	ガジガジ	A			心	心の動揺でわくわくしているさま。
中・p.44	ガタガタ	A			動	「ガタガタカ° トウマティ gatagata ŋa tubatfui(ふるえがとまる)」
岩・p.092	ガヂガヂ シュイ	A			音	感情などが激した時などに歯を噛むさまをいう。また寒さに震えるさまにもいう。p.092「ガヂミチュイ(武者震いする—相手に立向かうさま。また非常に好きな物や事に対して貪りつくさまにもいう。)」
森・p.082	ガッツイ		B		量	ちょうどよい。等しい(重量、形状、色彩など)。
岩・p.093	ガッツイ/ガットウイ		B		抽	きちきち—かっつき。阿伝では全くという後続副詞としても用いる。鹿児島ガッツイ。「ガットウイ イチヂカン カータ(かっつき、一時

					間、かかった。)」
岩・p.094	ガバ			抽	たくさん。「ニヤー ガバ デー(もう、たくさん、です。—もう結構です。すすめられた食物を辞退する語。)」 「クリファー ヌ ガバ ナティ ウイ(蜜柑、が、たくさん、なって、いる。)」
森・p.094	ガバ			量	たくさん(つまみ参照)。「ガバ、カミヨ(沢山たべなさいよ。うんとたべなさいよ。)」 「ガバ、ナ(沢山か。)」 「ガバヌ、チュ(沢山の人。)」 「ガバム、ネムム(沢山もないのに。)」
森・p.095	カミヤカミヤ	A		速	何かやっているように見せかけてぼやぼやしているさま。
中・p.19	ガラガラ	A	B	音	「ハンマーカ° ガラガラ スン hamme : ŋa garagara sun(雷がごろごろする)」
中・p.38	キーキー	A		音	「キーキー グイ ki : ki : gui(つまったような高い声)」
森・p.103	グーグ	A		体	じゅくすいしている。
森・p.104	クシャクシャ	A		心	けちけち。だしおしみ。
森・p.104	グジュグジュ	A		音	ひそひそ。他人に聞こえないように小さな声でささやくこと。
岩・p.099	グヂュグヂュ	A		音	愚図愚図—動作の。ぶつぶつ—不平を言う様。ひそひそ—話をする様。
森・p.105	クスクス	A		音	風邪などで喉がごろごろしているさま。「クスター(ぜんそく(喘息)の人。)」
森・p.107	クツ ト			C 抽	ずっと。用例「クツト、ユカ、アンバー(ずっとよい調子、からだの調子のこと。)」 「クツト、ウビク、ナタンドー(ずっとよくなったよ。)」 「クツト、ユタシャイ(ずっとよくなった。)」
森・p.107	グツグツ	A		動	野菜などをみじん(微塵)切りにすること。
中・p.37	グラグラ	A	B	動	「ヤーカ° グラグラ ッインキユイ ja : ŋa garagara ŋinkjui(家がぐらぐらうごく)」
森・p.111	クリクリ	A	B	動	上機嫌になって殊更に元気で立廻ること。
森・p.111	グルイト		B	C 速	とうとう。「グルイト タッチ」(とうとう、立ちあがった)。
森・p.111	グルサ			速	すばやい。すばしこい。
岩・p.101	グンナイ		B	心	がっかりする—ぐんなりする。p.101「グンナー: 跛。グンナイグンナイ…跛者の歩行の様を形容していう。」
森・p.113	グンナイ		B	心	がっかり。うんざり。らくたん等。
森・p.114	ゲーゲ	A		音	嘔吐をするさま。
森・p.114	ケーケー	A		音	おくび(嘔)(胃にたまったガスが口の外に出ること)。
中・p.04	ゲーゲー	A		音	げっぷ。「ゲーゲー スン gē : gē : sun(げっぷをする)」
岩・p.102	ゴイー			音	豚。擬声語。

岩・p.092	コーコー	A			音	水や汁などをガブガブと呑む形容。標準語のガブガブに似ている。
森・p.118	ゴン ヒナイ				量	量が大分減ること。
森・p.118	ゴンゴツ	a			速	早く。すぐ。いそいで。「ゴンゴツ、イジクー、ヨー(急いで行ってこいよ。道草しないで早く帰れよ。)」 「ゴンゴツ、カミヨー(急いで、たべなさいよ。)」 「ゴンゴツ、タテ(急いでたて。)」
森・p.118	ゴンゴン	A			量	規格の大きすぎること。(ダブダブ参照)。
岩・p.104	サ				抽	接頭語。実に嫌だという感情を表す語。「サヂェー ネーン(さっぱり面白くない—嫌だという感情が強く含まれている。ヂェー参照。)」 「サ ファゴカ(嫌悪の情を表した語で、「サファゴカ ワロー チャ」といえば、実に嫌らしい野郎だという意になる。)」 【ヂェーは立項されていないが、p.062 ウワイの項に例文「ヂェー ヤ ウワイ(面白いこと限りもない—この上もない。)」がある】
森・p.120	サーサ	A			音	水の流れる音の形容。
森・p.120	ザーザ	A			音	土砂降りの雨音の形容。
中・p.44	ザーザー	A			音	「スイドー ミヅカ° ザーザー トゥブチュイ suido : mīdzu ŋa dʒa : dʒa : tubatʃui (水道の水がザーザーふきでている)」
森・p.120	サーザー ト	a		C	量	きれいさっぱり。
森・p.181	サッサ	A			心	気はせかせかして。
森・p.123	サッパイ ト		B	C	抽	さっぱりと。
中・p.18	サブリ				音	夕立、にわか雨。時々、サーッと降る雨。 dʒabui 【オノマトペ「ザ」+「降り」か?】
森・p.125	サラサラ	A			動	ぶるぶるふるえる。
森・p.125	サラミチ			c	動	こうふんしてがたがたふるえているさま。
森・p.125	サリッ チ		B	c	音	天気の良い日に馬耕した畑の土がよく砕けてふわふわしているさま。
森・p.125	サリテ				音	天気のよい日に中耕した畑の土の状態。
森・p.125	サリテ				音	油や汗をきれいに洗いおとした頭髮に指が触れた時の感触。
森・p.126	サンジャリ		B		音	さんざん。こっぱみじん。あとかたもなく。「サンジャリ、フリ(さんざんにわれた。)」
岩・p.112	サンバンチリ	a			音	ちりちりばらばら。
岩・p.117	シッカイト		B	C	抽	しっかりと。
森・p.133	シツタイ		B		量	ぬれ(濡れ)ているもの。「シツタイ、ニヌー(ぬれた着物。にぬーはちぬーで(着物。))」「シツタイ、ハツタイ(ぬれてじくじくしているさま。じくじく。(水分を多量に含んでいるさま。))」
森・p.133	シツタテ				量	ぬれて。
森・p.133	シツタイ				量	ぬれている。

森・p.149	ジルジル	A			動	じろじろ。無遠慮に見つめるさま。
森・p.150	ジワジワ	A			速	ゆっくり、ゆっくり。そろそろ。
森・p.156	スッサギスッサギ	A			音	めそめそ泣くさま。
森・p.156	スツタイ		B		量	すっかり。「スツタイ、ダリツキテ(すっかりつかれきった。)」
森・p.156	スツパイ		B		量	みんな。のこらず。あるだけ。(ヒンニヤ参照)。
森・p.156	ズップイ		B		量	ずぶぬれ。びしょぬれ。「ヌリバ、ズップイヌリ(やりかけた事は途中で、へこたれるなどという戒めの言葉。ヌリバ(ぬれるなら)ズップイヌリ(びしょぬれになる程))」
森・p.158	スハツト			C	量	みんな。すっかり。
中・p.37	ズラズラ	A	B		動	「ズラズラ トゥーユン dzurudzuru tu : jun (ぞろぞろ通る)」
森・p.160	ズンバイ				量	たくさん。一杯。(ガバ参照)。(ツマイ参照)。
森・p.162	セカセカ	A			心	心がいらだって落ち着かない(未知なものに対する興味。好奇心等)。「セカサッテ(せかされて。せきたてられて。)」「セカチ(せかして。)」「セセカワ、サッテ(せきたてられて。)」「セセカワセ(いそがせ。)」「セセカワソー(いそがそう。)」「セセカワチ(いそがして。)」「セセカワチュン(いそがして。いそがしている。せきたてている。)」
岩・p.137	ソー／ショー				抽	恰も一そっくり。ガツツイ参照。「ソー ニチウイ(小野)(全く、似て、いる。)」
森・p.164	ソーソ	A			音	液体などが流れ出るさまの形容詞。
中・p.37	ソヨソヨ	A			音	「ハジカ <sup>o</sup> ソヨソヨ トゥーユン hadgi ŋa sojosojo tu : jun (風がそよぐ)」
森・p.167	ターリターリ	A	B		音	のど(喉)に何かつまっているような病人の息づかい。
森・p.169	タチョタチョ	A			心	そわそわしておちつかない。
森・p.169	タッカー				音	水面にへいこうになるように石を投げると落ちてからはねあがるさま。
岩・p.183	ヂヂ／ヂキ	A			抽	恰度一まるで。「ヂヂ ウヤ ニ ニチュイ(全く、親、に、似てる。)」
森・p.179	チッカイメッカイ		B		動	だんだん相手の方のにじりよってくること。
森・p.187	チョコマカ				動	手品。大正のはじめ頃本土から渡来、湾、赤連などの県道でやっていた。「チョコ、マカ、セー(手品師。箸三本のうちの一本にするしをしてあるのを片手に握って、もう一度皆の前でたしかめ、「コレジャガ、コレジャガ、コレジャガヨ、ハイトチョコマカ、ドッコイショ」と目にもとまらぬ早や技。これぞと思う一本を抜くがなかなか当たらない。)」



岩・p.187	ヂルヂル	A		動	じろじろ。一目を動かし、またはぎよろぎよろ 凝視する形容。「ミーヂルー(目のぎよろぎよ ろしている人。)」
岩・p.170	チンチン	A		抽	追々ーだんだん。「風が西北へ廻ったから、 チンチン海も凪ぎるだろう」
森・p.191	ツゾーリ		B	抽	混乱。ごたごた。「ツゾーリトヌ、ヤウチ(ごた ごたしている家庭。やうち(家庭。))」
森・p.192	ツッチャツッチャ	A		速	まごまご。何か用件がありそうな態度をする こと。
森・p.194	ツマイ		B	量	たくさん。一杯。(ズンバイ参照)。(ガバ参 照)。「ツマイ、カミヨー(たくさんたべなさい よ。腹いっぱいたべなさいよ。)」 「ツマイ、チランバ、ヒーサン、ドー(たくさん、着けないと 寒いよ。)」 「ツマイ、デー(もうたくさんです。 腹いっぱいです。)」 「ツマイ、ヌミ、ヨー(たく さん、のみなさいよ。)」 「ツマイ、ブテ、トキヨ ー(うんと叱っておきなさいよ。)」
森・p.196	ツルツル シ	A		動	うつら、うつらした。じゅくすいしないこと。ね いったことがはっきりしない。
森・p.197	ツン スシー			抽	まっすぐしてまがらないこと。
森・p.197	ツン ト			C 抽	どんなときでも。どんな事があっても。(つきあ いしない。家に入入りしない)。「ツント、シ ャ、イララー(どんなときでも、出入りしない。 シャ(足。))」
森・p.197	ツンツン	A		心	ぶりぶり。ぶりぶり。
岩・p.188	ディーディー トウ	A		C 量	たっぷりと。【p.188「ディー：嵩。「三月植の 唐芋はディー・ネーラン(実入が悪い)」 「外来米は炊くとディーはあるが、食べると不味 い」】
森・p.202	テヤテヤ	A		速	いそ、いそ。喜びいさむさま。
岩・p.192	ドゥップイ/ゾップイ		B	量	づぶづぶまたはびしょびしょに相当する副 詞で、濡れるを形容する。「ドゥップイ ヌリタ (ずぶずぶに濡れた。)」
岩・p.192	ドゥブ			量	ドゥップイ、ゾップイ(小野)の名詞化した語 で、びしょ濡れまたはずぶ濡れに相当する。 例「汗で着物がドゥブ(に)なった」。
岩・p.176	トウム/トウムイ		B	抽	きっちりーかっちり。「トウム イッシュー(かっ きり、一升。)」
岩・p.192	ドウムドウム	A		音	どしんどしんーづしんづしん。足音の強く響 く形容。
岩・p.178	トウルトウル	A		動	うつらうつらー眠り陥ろうとし、または醒めよう とするときの状態。
岩・p.192	ドウルドウル	A		体	どろどろー泥などの形状。p.192「ドウル： 泥。」

岩・p.193	ドゥンバイ／ドンバイ				量	一杯一入れ物に十分に充ちていること。ヌーミに同じ。「ハミ ニ ドンバイ ミドウ イリト ウキ(甕、に、一杯、水(を)、入れとけ。)」
森・p.327	ドキドキ	A			音	胸がどきどきして。
森・p.213	ドブ				量	びしょぬれ。ずぶぬれ。「ドブツキテ(びしょぬれになって。)」
森・p.213	トボー				動	ぼおとした顔つき。
森・p.215	ドン				音	思いものが落下してたてる音の形容。
森・p.215	ドン				音	太鼓の音などの形容。
森・p.216	ドンドン	A			速	どしどし。さっさと。いそいで。
森・p.223	ナドナド	A			体	表面がすべすべしていること。なめらか。「ナド、ナド、フネガ、ハユイ(静かな海面を船がいく。ハユイ(航行。))」
岩・p.207	ナンブナンブ	A			体	すべすべ。p.206「ナンブサイ:迂りっこい」、p.207「ナンブチュイ、ナンブミチュイ:すべる。」「撫でる」に由来するか?】
岩・p.208	ニヤー				抽	もう。もう良い、もういけない等の場合。
岩・p.208	ニヤービ／ニヤーナイ				抽	もう少し—もつと。「ニヤービ、ニヤーナイ(もう少し—もつと。)」 「ニヤービ ユラリティ ウモーリ(もつと、ごゆっくりして、おいでなさい。)」
岩・p.208	ニヤマチバニヤマ	a			抽	ほんの今先。今と言えば今の意。
岩・p.208	ニヤンマ				速	今に—やがて。例「燕が飛び回るが、ニヤンマ雨が降るだろう」。
岩・p.208	ニューウイ／ニューワイ			B	体	呻吟する。ニューニュー・シユイともいう。
岩・p.208	ニューニュー	A			体	呻吟。例「腹が痛いといってニューニューしている。」
岩・p.209	ネイーネイー (ト)	A		C	音	副詞。冴え冴えと—三味線や歌の音の形容。「ネイー イヂユイ(話が「はずむ」。また三味線や歌の音が冴える。イヂユイは出る。)」 【音(ね)に由来するか?】
岩・p.240	パシ トウ			C	抽	副詞。力を強くというような場合に用いる。「パシトウ ウスッキリ (うんと、押し付けよ。)」
岩・p.269	バタバタ	A			速	さっさと—急いで。例「バタバタ歩け」。「バタミチュイ:非常に急ぐ—狼狽てるというに近い。例「あまりバタミチ(急ぎ狼狽てて)怪我するなよ」。 バタクユイともいう。」
森・p.254	パチパチ	A			音	火が燃えることの形容。(火が燃えるときにはパチパチと破裂音がするから)。
森・p.254	パチパチ	A			心	仲が悪い同士の形容。(おだやかさがなくにらみあっているから)又イシトマーイ(石と茶わん)とも言う。
森・p.256	ハッチラハッチラ	A	B		体	はちきれる程充実しているさまの形容。(よく肥っている人、充実している穀物の粒などに形容する)

森・p.263	バラ (マチ)		B		動	ばらまき(散播き)(筋まきの反対)
岩・p.266	パラー		B		音	紙鉄砲。但しウムッシーという木の実を用いる。パラーはその音から来た名称か。
森・p.263	ハラハラ	A	B		心	気づかいあやぶむさま。
岩・p.270	バンバラー	a	B		音	まばらーばらばら。例「空豆は肥料にするのだから、バンバラー蒔してもよい」。
岩・p.267	ピーピー	A			音	ピーピー音を鳴らせる玩具。また木の葉や阿旦の葉で造ってピーピー鳴らせる草笛。
森・p.268	ヒーラヒーラ	A	B		体	「ヒーリ、ヒーリ」に同じことば。
森・p.268	ヒーリヒーリ	A	B		体	ひり、ひり、軽い痛み。
岩・p.271	ビッター		B		体	べったり、物がべたべたに付いている形容。柔らかい形容。「アーニー ヌ ビッター カティ ウイ(蟻、が、べたべたに、付いて、いる。)」 「シミリチ ビッター ナトウイ(湿って、柔らかく、なってる(黒砂糖などの場合。))」
森・p.274	ビラー サ		B		体	やわく。
森・p.274	ビラビラ	A	B		体	やわいこと。やわやわ。
中・p.14	ブーブー	A			動	「うろろろ」など、動作を表現する語。蠅。ブーブーbu : bu :
岩・p.272	ブカブカ	A			体	副詞。ふはふはと軽い触感。一ふとんや土など。p.272「ブカ:脆く軟い。」「プカー(阿伝・児)(相撲の弱い者。))」
中・p.37	プッチャー				動	「ミマニユカ° プッチャー スン mīmanju ŋa puttʃa : sun(眉がびくびくうごく)」, 「ピサティ プッチャー スン pi : sati puttʃa : sun(寒くて体がふるえる) ガタガタ スン gatagata sun(ガタガタする)ともいう。」「ユミタカ° プッチャー スン jumitaga puttʃa : sun(声がふるえる)」
森・p.282	ブツカチ			c	抽	にわかには、急に、とつぜん。
岩・p.261	フトウフトウ	A			動	ふるふる一震える形容。「プトウンニユイ(震える。プンニユイに同じ。))」「プンニユイ(震える。プトウンニユイに同じ。))」
森・p.284	フトフト	A			動	からだがふる(震る)えること。
森・p.287	フヤフヤ	A			体	やわらかで軽やかな感触をいう。
森・p.287	フヤフヤ	A			動	なづいている犬が尾をふりふりすること。
岩・p.274	ブラ		B		動	ずぼら。
森・p.288	ブラブラ	A	B		動	することがなくぶらつくさま。「ブラ、ムン(することがなく遊びくらす人。))」
中・p.41	ブラブラ	A	B		動	「マチバ ブラブラ ッアツチュイ matʃi burabura ʔattʃui(街をぶらぶら歩く)」
森・p.290	ブルブル	A			動	ふるふる、ふる(震る)えること。
岩・p.274	ブン トウ			C	抽	さっぱり。「ブントウ チェー ネーン(さっぱり、面白み(が)、ない。))」
岩・p.275	ベー				音	山羊。擬声語。

岩・p.277	マードウイマードウイ	A	B		動	うろろう。「マードウイ・マードウー ヌー ドウシ アッチェル(うろろう、無い、を、ぞ、して、歩きをる?)」【「惑い(まどい)」の繰り返し語形か?】
岩・p.277	マーマー トウ	A		C	抽	まんまと。「マーマー・トウ ダマサッタ(まんまと、だまされた。)」
中・p.14	マチャマチャ	A			動	「うろろう」など、動作を表現する語。牛, 馬。マチャマチャ matʃamatʃa
森・p.305	マニヤマニヤ	A			動	まごまご。
中・p.14	マニヤマニヤ	A			動	「うろろう」など、動作を表現する語。「トゥンカ° マニヤマニヤ スイ[tʃʔuŋa manjamanja sui](人がうろろうしている)」
森・p.506	マヤマヤ	A			動	うろろう、ぶらぶら。
中・p.14	マヤマヤ	A			動	「うろろう」など、動作を表現する語。猫, 犬。「マヤーカ° マヤマヤ スイ maja : ŋa maja maja sui(猫がうろろうしている)」「ツインカ° マヤマヤ スイ ʔiŋŋa : ŋa maja maja sui(犬がうろろうしている)」, p.041「トゥンヌ ヤー ヌ メー マヤマヤ スイ tunu ja : nu mē : majamaja sui(鳥小屋の前をうろろうする)」
中・p.14	マンチャマンチャ	A			動	「うろろう」など、動作を表現する語。魚。mantʃamantʃa
森・p.322	ムシャムシャ	A			動	物をおいしそうにたべるさま。
森・p.322	ムジャムジャ	A			速	ゆっくり、ゆっくり。のろのろ。(ムニヤ、ムニヤ参照)
森・p.323	ムチャーリムチャーリ	A	B		音	(調和の悪いこと。音調に合わない音痴の唄声等の例え。はなればなれ)
森・p.323	ムチャムチャ	A			体	ねばねば。ねとねと。べとべと。「ムチサ(ねばり(粘り)けがあること。)', 「ムチツカイ(ねばりつく。)', 「ムチツカテ(ねばりついて。)」
中・p.39	ムチャムチャ	A			体	「ムッチーカ° ムチャムチャ ツツキェン muttʃi : ŋa mutʃamutʃa tsʔukjun(餅が手にくつつく)」
森・p.325	ムドムド	A			速	早く。さっさと。「ムド、ムド、セリヨー(手早くしなさいよ。)」
森・p.326	ムニヤムニヤ	A			速	のそのそ。のろのろ。
森・p.328	ムル				抽	語尾に続くことばで色々という意味がちがう。まったく。まるで。ほんとに等と解せらる。「ムル、カマラー(まったく食べられない。)', 「ムル、マリ、マーリ(ほんとに久し振り。)', 「ムルタ、ギーナ(そっくり。その儘。ぜんぶ。)」
岩・p.309	ヤタ				抽	もし。若しかーひよつとすると。例「ヤタ雨が降るかもしれないから、干し物は入れて出よう」。
森・p.340	ヤット			C	速	ようやく(漸く)。ようよう。

森・p.355	ユフユフ	A			体	やわいこと。(囁れると弾力があって軟く感ずること)
岩・p.322	ユデーユデー	A			動	のろのろ。p.322「ユデーサイ:のろい—活動が。ドゥンナサイともいう。」
岩・p.323	ユラッサラ	a	B		動	ゆらりゆらり—踉蹌として歩く様。「病み上がりでユラッサラして歩くこともならん」、「酒を飲んでユラッサラして歩いている」。
森・p.357	ユラユラ	A	B		動	ふらふら。足もとがしっかりしないさま。
岩・p.324	ユラリユイ	a	B		動	ゆっくりする、滞在する。「ユラリティ ウモーリ(御ゆっくりして、お出でなさい。)」
岩・p.324	ユルイト		B	C	速	ゆっくりと、一通常客の応対に用いる語。「ユルイトウ ウモーリ(どうぞお構いなく。)」 「ユルイトウ ナインソーリ(おくつろぎなさい—気楽におなりなさい。)」
岩・p.327・326	ヨイヨイ/ヨーリヨーリ	A	B		速	ゆっくりゆっくり。「ヨイヨイ アッキ(ゆるゆる、歩け。)」 「ヨイヨイ カチャー アミ デーラ(近々、へは、雨、でしょう。あまり急でなく、そのうちに降るでしょうという程の意。)」
森・p.359	ヨイヨーイ	A	B		速	ゆっくり、そっと、そろそろ。
森・p.359	ヨーイ		B		抽	そっと、手やわからかに、ゆっくり。「ヨーイ ネインバチュキ(そっと、寝かせておけ。)」 「ヨーイ ムティ(そっと、持て。)」 「ヨーイ、ヨーリ(上嘉)(静かに、そっと。)」
岩・p.326	ヨーガリヨーガリ	A	B		体	ひよろひよろよろよろ。人にも物にもいう。「ヨーガリー(痩せてひよろひよろしている者。)」
森・p.360	ヨーリ		B		速	ゆっくり。そっと。手やわからか。(よーいと同意語)
岩・p.334	エービ/エーエ	A			音	わいわい喧噪する様。わいわいにはエーエという。

※本研究は文部科学省科学研究費補助金・基盤(C)「日本語方言オノマトペの記述モデル構築に関する研究(課題番号 22520484)」(2010-2011(平成 22-23)年, 研究代表者: 竹田晃子, 研究分担者: 三井はるみ・小林隆)の成果の一部である。

## 5. 喜界島方言調査データ集

### 基礎語彙データ

以下には、喜界島諸方言の基礎語彙データを掲載する。語形は国際音声字母で表記する。音声字母の説明、各地の音韻・音声の特徴については、第3章「喜界島方言の音韻」を参照されたい。その他の表記は以下のような方法で行う。

- ・アクセントは、音調の上がり目を〔で、音調の下がり目を〕で表記する。
- ・語形が複数、回答された場合には、2つ（またはそれ以上）の語形を／で区切って併記する。
- ・話者により回答が異なる場合は、2つ（またはそれ以上）の語形を//で区切り、それぞれの語形の後ろに話者別の記号（アルファベットの大文字）を（ ）に入れて示す。

各地点の調査者と報告者以下のとおりである。ただし、木部が最終的に音声の確認を行った。

地区名	班	調査担当者
小野津	基礎語彙1	小川・青井・木部
	基礎語彙2	ローレンス・仲原・平山・竹田
志戸桶	基礎語彙1	小川・青井・木部
	基礎語彙2	ローレンス・平山・ペラール・仲原
塩道	基礎語彙1 a	小川・川瀬
	基礎語彙1 b	松森・青井
	基礎語彙2 a	ローレンス・平山・久保蘭
	基礎語彙2 b	仲原・ペラール
阿伝	基礎語彙1	青井・小川・木部・平子
	基礎語彙2	ローレンス・仲原・平山・竹田
上嘉鉄	基礎語彙1	ペラール・川瀬・小川・青井
	基礎語彙2	ローレンス・平山・松森・仲原
坂嶺	基礎語彙1	小川・田窪・ペラール・青井
	基礎語彙2	ローレンス・松森・川瀬
湾	基礎語彙1	川瀬・ペラール・小川・青井
	基礎語彙2	ローレンス・仲原・松森・三井・平山
中里	基礎語彙1	青井・小川・川瀬・ペラール
	基礎語彙2	ローレンス・松森・平山
荒木	基礎語彙1	青井・小川・白田
	基礎語彙2	ペラール・田窪・平山・荻野

番号	語	アクセント類	①小野津	②志戸桶	③塩道
1	毛	1	[çi:]	[çi:]	pi[n'i(ひげ)]/[ha]çcia[ŋi]:
2	血	1	[tɕ'i:]	[tɕi:]/[tɕi:]	tɕ'i[:]
3	緒	1	[pi]mu(ひも)	[wu:]	NR
4	帆	1	[φu:]	φu[:]	φu[:]
5	柄	1	[ji:]	[ji:]	ji[:]
6	実	1	[mi:]	[mɪ:]	mi[:]
7	日	2	[pi	ti[da	[ti]da(太陽)
8	藻	2	[mu:]	[mu:]	mu[:]
9	葉	2	[pa:]	[pa:]	pa[:]/hiN[pa]:
10	名	2	[na:]	[na:]	na[:]
11	手	3	tɪ[:]	tɪ[:]	ti[:]
12	目	3	mɪ[:]	mɪ[:]	mi[:]
13	歯	3?	pa[:]	pa[:]	pa[:]
14	屁	3	pɪ[:]/φɪ[:]	pɪ[:]	pi[:]
15	穂	3	[pu:]/[φu:]	φu[:]	[i]ninomi[:](稲の実)
16	荷	3	[n'i]mu[tsu	n'i[:]	n'i[:]
17	湯	3	ju[:]	ju[:]	ju[:]
18	粉	3	[me]ri[keN]ko(メリケン粉)	ku[:]	k <sup>h</sup> u[na
19	野	3	pa[ru(原)	pa[ru	pa[ru(畑)
20	火	3	[u]ma[tsu]/[hɪ	ʔu[ma]tsu	u[ma]tu
21	田	3	ta[:]	ta[:]	t <sup>h</sup> a[:]
22	木	3	hɪ[:]	çi[:]	hi[:]
23	菜	3	[na:]	na[:]	ja[se]:(野菜)/[o]:[pa]:(葉の小さい野菜)
24	根	3	nɪ[:]	nɪ[:]	[mu]tu(元)/[hiN] pi[n'i]:(木の根の毛)
25	乳	4	tɕ'i[:]	tɕ'i[:]	tɕi[tɕi
26	茶		sa[:]	tɕa[:]	ça[:]
27	巢		su[:]	su[:]	su[:]
28	烏賊	1	[ʔi]k'a	[ʔi]ka	i[ka
29	海老	1	[ʔɪ]bi	[ʔɪ]bɪ	ʔi[bi(車海老)]/[ta]na[ga:(手の長い海老)
30	鋏		[k <sup>w</sup> ɛ]:(両唇摩擦もある)	[k <sup>w</sup> ɛ]:	[k <sup>ɛ</sup> ]:
31	腰、後ろ	1	[hu]çi	[hu]çi	hu[çi
32	右		n'i[n'i]:	[mi]ŋi	[mi]gi
33	羽	1	[pa]nɪ	[pa]n'i	pa[ni]/pa[n'i
34	横	1	[ju]ku	[ju]ku	ju[ku
35	灰	1	[ju]nɪ	[ju]nɪ	ju[n'i

番号	語	アクセント類	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
1	毛	1	ke[:/[has]sa[gi]:	çi[:	çi[gi]:
2	血	1	tɕi[:	tɕi[:	tɕi[:
3	緒	1	--	--	[ha]na[u(鼻緒)]
4	帆	1	pu[:/φu[:	φu[:	φu[:/[φu]:
5	柄	1	je[:	ji[:	ji[:
6	実	1	[mi]:	mi[:	na[ri
7	日	2	[pi]:	[ti]da(太陽)	çi
8	藻	2	mu[:	mo[:	[a]:[sa:](アオサ)
9	葉	2	pa[:/φa[:	pa[:	ha[:
10	名	2	na[:	na[:	na[:
11	手	3	ti[:	ti[:	ti[:
12	目	3	mi[:	mi[:	mi[:
13	歯	3?	pa[:/φa[:	pa[:	ha[:
14	屁	3	φi[:	pi[:/φi[:	çi[:
15	穂	3	pu[:/φu[:	φu[:	φu[:
16	荷	3	n <sup>h</sup> i[:	--	n <sup>h</sup> i[:
17	湯	3	ju[:	ju[:	ju[:
18	粉	3	[k <sup>h</sup> u]:	--	[k <sup>h</sup> u]:
19	野	3	--	--	NR
20	火	3	ʔu[ma]tɕu(人間が燃やした火) /çi[:(火事)	u[ma]tu	ʔu[ma]tu
21	田	3	t <sup>h</sup> a[:	ta[:	t <sup>h</sup> a[:/[i]:[za:](古)
22	木	3	hi[:	çi[:	çi[:
23	菜	3	[ʔo]:[φa:](青菜)	NR	NR
24	根	3	ni[:/[mu]tu	ni[:/ni[mu]tu	[ni]mu[tu(根元)]
25	乳	4	tɕ <sup>ʔ</sup> i[:	--	tɕi[:
26	茶		sa[:	sa[:	[sa]:/sa[:
27	巢		su[:	su[:	[su]:
28	烏賊	1	ʔi[ka	[i]ka	ʔi[ka
29	海老	1	ʔi[bi	i[bi	ʔi[bi
30	鋏		[k <sup>ʔ</sup> e]:	ke[:	k <sup>ʔ</sup> e[:
31	腰、後ろ	1	hu[ɕi	hu[ɕi(背中)	[φu]ɕi
32	右		[mi]gi	[mi]gi	[mi]gi
33	羽	1	pa[ni	pa[ni	ha[ni
34	横	1	ju[ku	ju[ku	ju[ku
35	灰	1	pe[:	ju[ni	ju[n <sup>h</sup> i



番号	語	アクセント類	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
1	毛	1	çi[nʰi	[has]sa[ŋi]:/[has]sa[nɪ]:	çi[nɪ]/çi[ŋi
2	血	1	tɕʰi[:]	tɕʰi[:]/[tɕʰi:	[a:]tɕi[:]/tɕi[:]
3	緒	1	--	--	--
4	帆	1	φu[:]	φu[:]	ho[:]
5	柄	1	NR	--	ji[:]
6	実	1	mi[:]	mi[:]	mi[:]
7	日	2	--	çi[:]/[çi]:	çi[:]
8	藻	2	mu[:]	--	mo[:]
9	葉	2	ha[:]	ha[:]	ha[:]
10	名	2	[na]ma[i	na[:]	[na]ma[i
11	手	3	tʰi[:]	tʰi[:]	ti[:]
12	目	3	mi[:]	mi[:]	mi[:]
13	齒	3?	ha[:]	ha[:]	[ha:
14	屁	3	çi[:]	çi[:]	çi[:]
15	穂	3	φu[:]	φu[:]	ho[:]
16	荷	3	nʰi[:]/nʰi[mu]tu	nʰi[:]	nʰi[:]
17	湯	3	ju[:]	ju[:]	ju[:]
18	粉	3	kʰu[na	kʰu[:]	(ko[na)
19	野	3	ha[te]:(畑)	ha[ru (集落外の畑)	--
20	火	3	u[ma]tu	u[ma]tu/[u]ma[tu	u[ma]tɕu/çi[:]/[kʷʰa]zi
21	田	3	tʰa[:]	tʰa[:]	tʰa[:]
22	木	3	çi[:]	çi[:]	çi[:]
23	菜	3	NR	--	na[:]
24	根	3	nɪ[:]	mu[tu/nɪmutu/çi[nɪ	mu[tu
25	乳	4	tɕi[:]	tɕʰi[:]	tɕi[:]
26	茶		sa[:]	sa[:]/[sa]:	sa[:]
27	巢		su[:]	su[:]	su[:]
28	烏賊	1	ʔi[ka	ʔi[ka	i[ka
29	海老	1	ʔi[bi	ʔi[bi	e[bi
30	鋤		[kʰe]:/[kʰe]:	[kʰe]:	[kʷʰe]:
31	腰、後ろ	1	hu[ɕi	φu[ɕi/hu[ɕi	φu[ɕi
32	右		[mi]gi	mi[gi	mi[gi
33	羽	1	ha[nɪ	ha[nʰi	ha[nɪ/hanɪ
34	横	1	ju[ku	ju[ku	ju[ku
35	灰	1	ju[nɪ	ju[nʰi	ju[nɪ

番号	語	アクセント類	①小野津	②志戸桶	③塩道
36	蟹	1	ga[n <sup>h</sup> i]:	ga[n <sup>h</sup> i]:	ga[n <sup>h</sup> i]:
37	粥	1	ka[i]:	ka[i]:	ka[i]
38	蟻	1	[a]:[n <sup>h</sup> i]:	[ʔa]:[n <sup>h</sup> i]:	[a]:[n <sup>h</sup> i]:
39	丘	1	NR	[p <sup>h</sup> i]ra	mu[ri]
40	牛	1	[ʔu]ɕi	[ʔu]ɕi	u[ɕi]
41	魚	1	[ʔi]ju	[ʔi]u	ʔi[ju]
42	金	1	[ka]ne	[ha]nɪ	NR
43	溝	1	mi[zu]:	mi[zu]:	mi[zu]:/[mi]zuN[ka]:(小さ い\\ )
44	砂	1	[su]na	[su]na	su[na]
45	皿	1	[sa]ra	[sa]ra	sa[ra]
46	枝	1	[ju]da	[ji]da/[ju]da	ju[da]
47	酒	1	[se]:	[se]:	se[:/œ[:
48	首	1	[nu]bu[i]	[k <sup>h</sup> u]bi	k <sup>h</sup> u[bi]
49	傷	1	[k <sup>h</sup> i]zu	[k <sup>h</sup> i]zu	k <sup>h</sup> i[zu]
50	床	1	[ju]ka	[ju]k <sup>h</sup> a	ju[ka]
51	尻	1	ma[i]	[ma]i	[ma]i
52	水	1	[mi]zu	mi[dzu]	mi[du]
53	裾	1	su[so]	su[su]	su[so (あまり使用せず)]
54	星	1	[p <sup>h</sup> u]ɕi	[φu]ɕi/[pu]ɕi	hu[ɕi]
55	袖	1	[su]di	[su]di	su[di]
56	鷹	1	[t <sup>h</sup> a]ka	[ta]ka	ta[ka]
57	棚	1	[t <sup>h</sup> a]na	[ta]na	ta[na]
58	竹	1	[de]:	[de]:	de[:
59	虫	1	[mu]ɕi	[mu]ɕi	mu[ɕi]
60	烏	1	[tu]i	[tu]i	tu[i]
61	壺	1	ha[mɪ(かめ)]	ha[mɪ]	[ha]mi(かめ)
62	爪	1	[t <sup>h</sup> u]mɪ	[t <sup>h</sup> u]mɪ	tu[mɪ]
63	底	1	[su]ku	[su]k <sup>h</sup> u	su[ku]
64	釘	1	[k <sup>h</sup> u]n <sup>h</sup> i	k <sup>h</sup> u[n <sup>h</sup> i]	k <sup>h</sup> u[n <sup>h</sup> i]
65	桃	1	mu[mu]:	[mu]mu	mu[mu]
66	道	1	[mi]tɕi	[mi]tɕi	mi[tɕi]
67	匂い		[ha]za	[ha]za	NR
68	蠅	1	[pɛ]:	[φɛ]:/[pɛ]:	he[:
69	箱	1	[pa]ku	pa[ku]	pa[ku]
70	鼻	1	[pa]na	[pa]na	pa[na]
71	稗	1	NR	NR	NR
72	髭	1	[pi]nɪ	[pi]n <sup>h</sup> i/[pi]ŋi	pi[n <sup>h</sup> i]
73	筆	1	pu[di]	[φu]dɪ	pu[di]/φu[di]

番号	語	アクセント類	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
36	蟹	1	ga[n <sup>h</sup> i]:	[gai]N	ga[i]:
37	粥	1	ka[ju	ka[i	[k <sup>h</sup> a]i[:
38	蟻	1	[ʔa]:[n <sup>h</sup> i]:	[a]:[i]:(iは鼻母音)	ʔa[i
39	丘	1	mu[i	--	ʔu[ka
40	牛	1	ʔu[ɕi	u[ɕi	ʔu[ɕi
41	魚	1	ʔi[ju	i[ju	ju
42	金	1	ha[ni/xa[ni	ha[ni	ha[ni
43	溝	1	mi[zu]:	mi[zu]:	mi[zu]:
44	砂	1	su[na	su[na	su[na
45	皿	1	sa[ra	sa[ra	sa[ra/[su:]da[ra
46	枝	1	ji[da	ju[da	ju[da
47	酒	1	se[:	se[:	se[:
48	首	1	k <sup>2</sup> u[bi	nu[bi]:	k <sup>2</sup> u[bi
49	傷	1	k <sup>2</sup> i[dzu	tɕi[du	tɕi[du
50	床	1	--	ju[ka	ʔi[ta]zi[tɕi
51	尻	1	--	[ma]i	[ma]ri
52	水	1	--	mi[du	mi[du
53	裾	1	--	[su]su	su[su
54	星	1	--	ɸu[ɕi	ɸu[ɕi
55	袖	1	--	su[di	su[di
56	鷹	1	ta[ka	ta[ka	t <sup>h</sup> a[ka
57	棚	1	--	ta[na	t <sup>h</sup> a[na
58	竹	1	de[:	de[:	de[:
59	虫	1	--	mu[ɕi	mu[ɕi
60	烏	1	tu[i	tu[i	t <sup>h</sup> u[ri
61	壺	1	--	--	[ha]mi(瓶)
62	爪	1	--	t <sup>2</sup> u[mi	t <sup>2</sup> u[mi
63	底	1	--	su[ku	su[ku
64	釘	1	k <sup>2</sup> u[n <sup>h</sup> i	k <sup>2</sup> u[gi/k <sup>2</sup> u[i(木でできた釘)	k <sup>2</sup> u[gi
65	桃	1	mu[mu	mu[mu	mu[mu
66	道	1	--	mi[tɕi	mi[tɕi
67	匂い	--	--	ha[da	ha[da
68	蠅	1	pe[:	pe[:/ɸe[:	he[:
69	箱	1	--	p <sup>h</sup> a[ku	ha[ku
70	鼻	1	--	p <sup>h</sup> a[na	ha[na
71	稗	1	--	--	NR
72	髭	1	pi[ni	p <sup>h</sup> i[gi]:	ɕi[gi
73	筆	1	--	ɸu[di	ɸu[di

番号	語	アクセント類	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
36	蟹	1	ga[n <sup>h</sup> i]:	ga[n <sup>h</sup> i]:	ga[n <sup>h</sup> i]:
37	粥	1	k <sup>h</sup> a[i]	k <sup>h</sup> a[i]/k <sup>h</sup> a[ju]	[ka]i[:
38	蟻	1	?a[n <sup>h</sup> i	a[n <sup>h</sup> i	a[n <sup>h</sup> i
39	丘	1	mu[ri]	mu[i]/[mui	mo[ri]
40	牛	1	?u[ɕi]	?u[ɕi]	u[ɕi]
41	魚	1	?i[ju]	?i[ju]	i[ju]
42	金	1	ha[nɪ]	ha[nɪ]	ha[ni]/ha[nɪ]
43	溝	1	mi[zu]:	mi[zu]:	mi[zu]:
44	砂	1	su[na]	su[na]/[suna	su[na]/mi[tɕa(土)
45	皿	1	[so]:[da]ra	sa[ra]/[sara	sa[ra]
46	枝	1	ju[da]	ji[da]/ju[da]	ju[da]
47	酒	1	se[:	se[:/ɕe[:/[se[:/[ɕe[:	ɕe[:
48	首	1	k <sup>2</sup> u[bi]	k <sup>2</sup> u[bi]	k <sup>2</sup> u[bi]/nu[di]:(のど)
49	傷	1	tɕi[du]	tɕi[zu]	ki[zu]
50	床	1	ju[ka]	--	ju[ka]
51	尻	1	[ma]ri	[ma]ri	[m <sup>2</sup> a]ri
52	水	1	mi[du]	mi[zu]/mi[du]	mi[zu]
53	裾	1	su[su]	su[su]	su[su]
54	星	1	ho[ɕi]	ɸu[ɕi]	ɸu[ɕi]
55	袖	1	su[di]	su[di]	su[di]
56	鷹	1	NR	t <sup>h</sup> a[ka]/[t <sup>h</sup> aka	ta[ka]
57	棚	1	t <sup>h</sup> a[na]	ta[na]/[tana	ta[na]
58	竹	1	de[:	de[:	de[:
59	虫	1	mu[ɕi]	mu[ɕi]	mu[ɕi]
60	烏	1	t <sup>h</sup> u[ri]	t <sup>h</sup> u[i]	tu[ri]/to[ri]
61	壺	1	NR	--	--
62	爪	1	t <sup>2</sup> u[mi]	t <sup>2</sup> u[mi]	tɕu[mi]
63	底	1	--	su[ku]	su[ku]
64	釘	1	--	k <sup>2</sup> u[n <sup>h</sup> i	ku[gi]/ku[ŋi]
65	桃	1	--	mu[mu]	mu[mu]
66	道	1	mi[tɕi	mi[tɕi	mi[tɕi
67	匂い	--	--	[n <sup>h</sup> u]:[i]/[n <sup>h</sup> i]ju[i]/ha[da]	ha[da]
68	蠅	1	he[:	he[:	he[:
69	箱	1	--	ha[ku]	ha[ku]
70	鼻	1	ha[na]	ha[na]	ha[na]
71	稗	1	--	--	--
72	髭	1	--	ɕi[n <sup>h</sup> i]/ɸi[ŋɪ]	ɕi[nɪ]
73	筆	1	ɸu[de	ɸu[di]	ɸu[di]

番号	語	アクセント類	①小野津	②志戸桶	③塩道
74	布	1	[k <sup>2</sup> iɹi(生地)	[k <sup>2</sup> i]re	k <sup>2</sup> i[re/[ta]N[mu]N/ nu[nu(大島紬のこと)
75	風	1	[ha]ɹi	[ha]ɹi	ha[di
76	蜂	1	[pa]tɕi	[pa]tɕi	pa[tɕi
77	味	1	[ʔa]ɹi	[ʔa]ɹi	ʔa[ɹi
78	霧	1	[k <sup>2</sup> iɹi/ka[su]mi	mu[ja	mu[ja
79	糲	1	[mu]mi/[mu]miga[ra	mu[mɪ	mu[mi
80	篩		[mɪ]ɸa[ja]:	ju[i	NR
81	臍		[pu]su	[pu]su/[ɸu]su	pu[su
82	鱻		[sa]ba(さば)	[sa]ba	sa[ba
83	紙	2	[ha]bi	ha[bi	ha[bi
84	夏	2	[na]tɕu	[na]tɕu	na[tu
85	音	2	[ʔu]tu	[ʔu]tu	u[tu
86	歌	2	[ʔu]ta	[ʔu]ta	ʔu[ta
87	垣	2	[ha]ki	ha[k <sup>2</sup> i	NR
88	橋	2	[pa]ɕi	pa[ɕi	pa[ɕi
89	胸	2	[mu]nɪ	[mu]nɪ	mu[ni
90	型	2	[ka]ta	[ka]ta	ka[ta
91	口蓋(あご)		[ʔu]tuŋe[:	[ʔa]gu	ʔa[gu
92	人	2	[tɕ <sup>2</sup> u	[tɕ <sup>2</sup> u	[tɕ <sup>2</sup> u
93	石	2	[ʔi]ɕi	[ʔi]ɕi	i[ɕi
94	昼	2	[p <sup>2</sup> i]ru	[pi]ru	pi[ru
95	冬	2	[p <sup>2</sup> u]ju	[ɸu]ju	ɸu[ju
96	肘	2	[pi]ɹi/[ɸi]ɹi	pi[ɹi	pi[ɹi
97	旅	2	[ta]bi	ta[bi (共通語的)	ta[bi
98	舌	3	su[ba	su[ba	su[ba
99	面	3	tɕ <sup>2</sup> u[ra	tɕu[ra	tu[ra
100	肝	3	k <sup>2</sup> i[mu	k <sup>2</sup> i[mu	tɕ <sup>2</sup> i[mu
101	耳	3	mi[mi	mi[mi	mi[mi
102	骨	3	pu[nɪ/ɸu[nɪ	pu[nɪ]:	ɸu[nɪ]:
103	皮	3	ha[:	ka[wa	ka[wa
104	腕	3	u[di	[gu]te[:	ti[:/gu[te:]//[gu]te[:
105	脛(すね)	3	su[nɪ	su[nɪ	[muke]zu[ne(向こう脛)/ [tu]bu[ɕi
106	指	3	[ju]bi	ju[bi	ju[bi
107	糞	3	s <sup>2</sup> u	[ssu	[ssu
108	背丈	3	[ɸu]du	[pu]du/[ɸu]du	ɕi[:

番号	語	アクセント類	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
74	布	1	--	nu[nu/k <sup>ʰ</sup> ire	nu[nu
75	風	1	--	ha[di	ha[di
76	蜂	1	--	p <sup>h</sup> a[tɕi	[ha]tɕi[:
77	味	1	--	--	ʔa[zi
78	霧	1	--	--	k <sup>ʰ</sup> i[ri
79	糲	1	--	mu[mi	mu[mi
80	篩		--	--	[ju]su[ri
81	臍		pu[su	φu[su	φu[su
82	鱻		sa[ba	--	sa[ba
83	紙	2	ha[bi	ha[bi	ha[bi
84	夏	2	na[tɕu	na[tɕu	na[tɕu
85	音	2	ʔu[tu	u[tu	ʔu[tu
86	歌	2	ʔu[ta	u[ta	ʔu[ta
87	垣	2	[ʔi]ɕiga[tɕi (石垣)	[so]N[na]tɕi/[so]N[n <sup>ʰ</sup> a]tɕi(ヒ ンブンのこと)	NR
88	橋	2	pa[ɕi	φa[ɕi	ha[ɕi
89	胸	2	mu[ni	mu[ni	mu[ni
90	型	2	ka[ta	ka[ta	ka[ta
91	口蓋(あご)		ʔa[gu	[u]tu[je]:(あご)	[ʔa]gu
92	人	2	[tɕ <sup>ʰ</sup> u	[tɕ <sup>ʰ</sup> u	tɕ <sup>ʰ</sup> u
93	石	2	ʔi[ɕi	i[ɕi	ʔi[ɕi/[ʔi]ɕiN[ka:(小石)
94	昼	2	pi[ru	[ɕi]N[ma]:	ɕi[ru
95	冬	2	pu[ju	φu[ju	φu[ju
96	肘	2	pi[dzi	ɕi[zi	ɕi[zi
97	旅	2	ta[bi	--	t <sup>h</sup> a[bi
98	舌	3	su[ba	su[ba	su[ba
99	面	3	tɕu[ra	tu[ra	t <sup>ʰ</sup> u[ra
100	肝	3	tɕi[mu	tɕi[mu	tɕi[mu
101	耳	3	mi[mi	mi[mi	mi[mi
102	骨	3	[p <sup>h</sup> u]ni	φu[ni	[φu]ni
103	皮	3	k <sup>h</sup> a[wa	ka[wa	k <sup>h</sup> a[wa
104	腕	3	ʔu[di	ti[:	ʔu[di/[gu]te[:
105	脛(すね)	3	[su]ni	su[ni	su[ni
106	指	3	ju[bi	ju[bi	ju[bi
107	糞	3	[ssu	[ssu	k <sup>ʰ</sup> u[su
108	背丈	3	--	NR	NR

番号	語	アクセント類	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
74	布	1	--	nu[nu	k <sup>2</sup> i[ri]/nu[nu
75	風	1	--	ha[di	ha[zi
76	蜂	1	--	[ha]tɕi[:	[ha]tɕi[:
77	味	1	--	a[dzi	a[zi
78	霧	1	k <sup>2</sup> i[ri	[mu]ja	k <sup>2</sup> i[ri]/mo[ja]/mu[ja
79	糲	1	--	--	mo[mi
80	篩		--	ju[i	ju[ri
81	臍		φu[su	φu[su	çi[su
82	鱻		--	sa[ba	sa[ba
83	紙	2	--	ha[bi	ha[bi
84	夏	2	na[tu	na[tu	na[tɕu
85	音	2	ʔu[tu	ʔu[tu	o[to
86	歌	2	ʔu[ta	ʔu[ta	u[ta
87	垣	2	NR	[ʔi]ɕi[ga]tɕi (石垣)	(ka[ki]ne)
88	橋	2	ha[ɕi	ha[ɕi	ha[ɕi
89	胸	2	mu[nɪ	mu[nɪ	mu[ne
90	型	2	--	k <sup>h</sup> a[ta	ka[ta
91	口蓋(あご)		ʔa[gu	ʔa[gu	a[go
92	人	2	tɕ <sup>2</sup> u	[tɕ <sup>2</sup> u?	tɕu?
93	石	2	ʔi[ɕi]/[ʔi]ɕiN[k <sup>2</sup> a]:(礫)	ʔi[ɕi	i[ɕi
94	昼	2	[ma]ɕiN[ma	çi[ru]/maɕiNma:(古)/ ʔa[ɕi:(昼食)	çi[ru
95	冬	2	φu[ju	φu[ju/ha[ru (春)/ʔa[ki (秋)	φu[ju
96	肘	2	çi[zi	çi[zi	çi[zi
97	旅	2	t <sup>h</sup> a[bi	ta[bi	([ja]ma[tu大和)
98	舌	3	su[ba	su[ba	su[ba
99	面	3	tu[ra	t <sup>2</sup> u[ra	tɕu[ra
100	肝	3	--	tɕ <sup>2</sup> i[mu	tɕi[mu
101	耳	3	mi[mi	mi[mi	mi[mi
102	骨	3	[φu]nɪ	[φu]nɪ	[φu]nɪ
103	皮	3	k <sup>h</sup> a[wa	ka[wa	ka[wa
104	腕	3	ʔu[di	[gu]te[:	u[de/[gu]te[:
105	脛(すね)	3	su[ne	su[nɪ	su[ne
106	指	3	ju[bi	ju[bi	ju[bi
107	糞	3	[ssu	[su?	[ssu/[s <sup>2</sup> su
108	背丈	3	se[:	--	--

番号	語	アクセント類	①小野津	②志戸桶	③塩道
109	股	3	ma[ta	ma[ta	ma[ta
110	腹	3	wa[ta	wa[ta	wa[ta
111	垢	3	[pʰi]ngu	[piN]ŋu:	[pi]N[gu://[phi]N[gu(汚れ)
112	親	3	[tu]zitu(母父)	ʔu[ja	ʔu[ja
113	肉		nʰi[ku	ɕi[ɕi/[mi]:	nʰi[ku//[iɕi(古)
114	豆	3	ma[mɪ	ma[mɪ	ma[mi
115	米	3	hu[mɪ	hu[mɪ	hu[mi
116	糠(ぬか)	3	nu[ka	nu[ka	nu[ka
117	墓	3	[pa]ka	[pa]ka	pa[ka//[pa]kan[me]:
118	網	3	a[mi	ʔa[mɪ	a[mi
119	鉢	3	pa[tɕi	[pa]tɕi	pa[tɕi
120	縄(なわ)	3	[pi]mu(ひも)	tɕʰu[na	hi[mu
121	綱(つな)	3	tu[na	tɕʰu[na	tʰu[na
122	瓶(かめ)	3	ha[mɪ	ha[mɪ	u[bi]N//[ha]mi
123	竿		[so]:de[:	[de]: (竹の意)	[so]:[de]:/de[:
124	年	3	tu[ɕi	[tu]ɕi	tu[ɕi
125	時	3	[tu]ki	tu[ki	NR
126	夜		ju[ru	ju[ru	ju[ru
127	月	3	[tɕu]kinu[i	tɕʰu[ki	[tu]tɕi[nu]i
128	山	3	ja[ma	ja[ma	ja[ma
129	島	3	ɕi[ma	ɕi[ma	ɕi[ma
130	雲	3	kʰu[mu	kʰu[mu	kʰu[mu
131	波	3	na[mi	na[mi	na[mi
132	浜	3	pa[ma	pa[ma	[pa]ma
133	馬	3	u[ma	ʔu[ma	ʔu[ma
134	鳩	3	pa[tu]:	pa[tu]:	pa[tu]:
135	犬	3	[i]N[ŋa]:	[ʔi]N[ŋa]:	[i]N[ŋa]:
136	蝻(にな)		NR	[ʔa]ma[nʰa]:	mi[nʰa
137	蛸		to[:	to[:	to[:
138	亀		ha[mɪ	[ka]mɪ	ka[me//[ha]mi
139	蛆	3	ʔu[zɪ	[ʔu]zɪ/[ʔu]zɪ[mu]ɕi	u[zɪ/uzɪmu[ɕi
140	蚤	3	nu[mi	nu[mi	[nu]mi
141	角(つの)	3	tɕu[nu	tɕʰu[nu	tu[nu
142	花	3	pa[na	pa[na	pa[na
143	草	3	sʰa	[ssa	[ssa



番号	語	アクセント類	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
109	股	3	ma[ta	ma[ta	ma[ta
110	腹	3	wa[ta	wa[ta	wa[ta
111	垢	3	[pi]N[du	[pi]N[gu	[çi]N[gu]:
112	親	3	u[ja	--	ʔu[ja
113	肉		ɕi[ɕi/nʰi[ku	ɕi[ɕi	ɕi[ɕi
114	豆	3	ma[mi	ma[mi	ma[mi
115	米	3	hu[mi	hu[mi	φu[mi
116	糠(ぬか)	3	nu[ka	nu[ka	nu[ka
117	墓	3	pa[ka/φa[ka	φa[ka	ha[ka
118	網	3	ʔa[mi	a[mi	ʔa[mi
119	鉢	3	[pa]tɕi	[ha]tɕi	ha[tɕi
120	縄(なわ)	3	na[wa	tʰu[na	tʰu[na
121	綱(つな)	3	tɕʰu[na/tu[na	tʰu[na	tʰu[na
122	瓶(かめ)	3	[ha]mi	[ha]mi	ha[mi
123	竿		sa[o	de[:(釣り竿、洗濯竿など)	de[:(竹のこと)/ [de]:[ma]:(釣り竿)
124	年	3	tʰu[ɕi	tu[ɕi	tʰu[ɕi
125	時	3	tʰu[ki	tu[ki	[du]tɕi[:
126	夜		ju[ru	ju[ru	ju[ru
127	月	3	tɕʰu[ki/[tɕu]tɕi[nu]i/ [tɕu]ki[nu]i	[tu]tɕi[nu]i	[tu]tɕu[nu]i
128	山	3	ja[ma	ja[ma	ja[ma
129	島	3	ɕi[ma	ɕi[ma	ɕi[ma
130	雲	3	kʰu[mu	kʰu[mu	kʰu[mo
131	波	3	na[mi	na[mi	na[mi
132	浜	3	[pa]ma	[pa]ma	ha[ma
133	馬	3	[mʰa	[mʰa	[mʰa
134	鳩	3	pa[tu]:	pa[tu	[ha]tu[:
135	犬	3	[ʔi]N[ŋa]:	i[nu	[ʔi]N[ŋa]:
136	蜷(にな)		kʰa[ja]:(貝の総称)/ mi[nʰa(巻き貝)	--	mi[ja(貝の総称)
137	蛸		to[:	to[:	tʰo[:
138	亀		[ka]mi[ŋa]:	[ha]mi[:	[ha]mi
139	蛆	3	ʔu[dzi]/[ʔu]zimu[ɕi	u[zi]mu[ɕi	[u]zi[mu]ɕi
140	蚤	3	[nu]mi	[nu]mi	[nu]mi
141	角(つの)	3	tɕu[nu	tʰu[nu	tʰu[nu
142	花	3	pa[na	pa[na	ha[na
143	草	3	[ssa	[ssa	[ssa

番号	語	アクセント類	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
109	股	3	ma[ta	ma[ta	ma[ta
110	腹	3	wa[ta	wa[ta	wa[ta
111	垢	3	[çi]N[gu	[çi]N[gu]: (汚れ)	[çi]N[gu
112	親	3	u[ja	ʔu[ja/[a]N[ma]: (母)/ a[zi: (祖父)	u[ja
113	肉		nʲi[ku	nʲi[ku	nʲi[ku
114	豆	3	ma[mi	ma[mi/ma[mɪ	ma[mi/ma[me
115	米	3	hu[mi	φu[mi/φu[mɪ	φu[mi
116	糠(ぬか)	3	nu[ka	--	nu[ka
117	墓	3	ha[ka	ha[ka	ha[ka
118	網	3	ʔa[mi	ʔa[mi	a[mi
119	鉢	3	[ha]tɕi	ha[tɕi/[ha]tɕi	ha[tɕi
120	縄(なわ)	3	na[wa	--	NR
121	綱(つな)	3	tsu[na/tu[na	na[wa (「綱」の回答)	tsu[na
122	瓶(かめ)	3	[ha]mi	[ha]mi	[ha]mi
123	竿		[so]:[de]:	--	de[: (竹)
124	年	3	tʰu[ɕi	tʰu[ɕi (年齢)	tu[ɕi
125	時	3	NR	--	tu[ki
126	夜		ju[ru	ju[ru	juɾu
127	月	3	tsu[ki	tsu[ki/[tu]tɕi[nu]ju	[tu]ki[nu]ju
128	山	3	ja[ma	ja[ma	ja[ma
129	島	3	ɕi[ma	ɕi[ma	ɕi[ma
130	雲	3	kʰu[mu	kʰu[mu	kʰu[mu
131	波	3	na[mi	na[mi	na[mi
132	浜	3	[ha]ma	ha[ma	[ha]ma
133	馬	3	[mʰa	[maʔ	[mʰa
134	鳩	3	[ha]tu[:	[ha]tu[:	[ha]tu[:
135	犬	3	[ʔi]N[ŋa]:	[ʔi]N[ŋa]:	[i]N[ŋʷa]:
136	蝻(にな)		--	mi[nʰa	mi[nʰa
137	蛸		NR	to[:/[to]:	to[:
138	亀		[ha]mi[:	[ha]mi[:	ka[mi/ka[me
139	蛆	3	--	ʔu[dzi	u[zi]mu[ɕi/u[zi
140	蚤	3	[nu]mi	[nu]mi	nu[mi
141	角(つの)	3	--	tʰu[nu	tsunu
142	花	3	ha[na	ha[na	ha[na
143	草	3	[ssa	[saʔ/[ssa	[ssa

番号	語	アクセント類	①小野津	②志戸桶	③塩道
144	葦	3	nʰi[ra	bi[ra	bi[ra
145	甘藷(さつまいも)		[ha]N[su]: / ʊmu(田芋)	[pa]N[su]:(Mさん)//[pa]N[su]:(Sさん)	[pa]N[su]: / u[mu(田芋)
146	節	3	φu[ɕi	[pu]ɕi	bu[ɕi]//pu[ɕi
147	泡	3	a[wa	a[wa	[bu]ku//a[wa
148	怪我	3	ki[ga	ki[ga	ki[ga
149	穴	3	a[na / ga[ma	ga[na]:	a[na
150	裏	3	u[ra / [ja:]nu[ɕi]:(家の裏)	[hu]ɕi (後ろ)	[u]ra
151	物	3	mu[nu	[mu]N	mu[N
152	色	3	ʔi[ru	ʔi[ru	i[ru
153	鬼	3	ʔu[nʰi	[ʔu]nʰi	ʔu[nʰi
154	夢	3	ʔi[mi	ʔi[mi	ʔi[mi
155	綾,模様		ʔa[ja	NR	NR
156	物		= 151	= 151	= 151
157	肩	4	ha[ta	ha[ta	ha[ta
158	息	4	ʔi[ki	ʔi[ki	[ʔi]tɕi
159	帯	4	[kʰi]tsu[bɪ / o[bi	kʰi[tɕu]bi	tɕi[tɕu]bi / u[bi
160	蓑	4	[mi]no	NR	NR
161	汁	4	ɕi[ru	ɕi[ru	ɕi[ru
162	味噌	4	mi[su	mi[su	mi[su
163	茸		NR	na[ba]: / [mi]mu[ja	[miN]mo: [ja]:(キクラゲ)
164	板	4	ʔi[ta	ʔi[ta	ʔi[ta
165	船	4	pu[nɪ	φu[nɪ	[φu]ni
166	籠(へら)	4	he[ra	pi[ra / φi[ra	NR
167	鑿(のみ)	4	nu[mi	nu[mi	nu[mi
168	笠 傘	4	ha[sa	ha[sa	ha[sa
169	鎌	4	ha[ma	ha[ma	ha[ma
170	臼	4	u[su	ʔu[su	[u]su
171	針	4	pa[i	[pa]i	[pa]i
172	糸	4	i[tu / [i]tɕu:	[ʔi]tu	i[tɕu: / i[tɕu:
173	外	4	[su]tu	[su]tu	su[tu
174	奥		u[ku	[ʔu]kʰu	[ʔu]ku
175	中	4	na[:	na[:	[na]:
176	今日	4	kʰu[:	kʰu[:	[ɕu]:
177	海	4	ʔu[mi	[ʔu]mi	[ʔu]mi
178	角(かど)	4	[ka]du	[ka]du	ka[du

番号	語	アクセント類	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
144	葦	3	n <sup>h</sup> i[ra]/[ni]bi[ra]:(野びる)	[n <sup>h</sup> i]ra	[ni]bi[ra]:
145	甘藷(さつまいも)		[pa]N[su]:/[φa]N[su]:/ u[mu]田芋	[pa]N[su]:/[φa]N[su]:	[ha]N[su]:/u[mu](田芋)
146	節	3	pu[ɕi]	--	[bu]ɕi
147	泡	3	[bu]ku	[bu]ku	bu[ku]
148	怪我	3	kI[ga]	--	k <sup>h</sup> i[ga]
149	穴	3	?a[na]	a[na]	?a[na]
150	裏	3	[?u]ra	[u]ra	?u[ra]/φu[ɕi](後ろ)
151	物	3	mu[nu]	NR	mu[N]
152	色	3	?i[ru]	i[ru]	?i[ru]
153	鬼	3	?u[n <sup>h</sup> i]	u[n <sup>h</sup> i]	?u[n <sup>h</sup> i]
154	夢	3	?i[mi]	?i[mi]	?i[mi]
155	綾,模様		?a[ja]	--	--
156	物		= 151	= 151	= 151
157	肩	4	ha[ta]	ha[ta]	ha[ta]
158	息	4	[?i]tɕi	[?i]tɕi	[?i]tɕi
159	帯	4	?u[bi]	--	?u[bi]/tu[tu]bi
160	蓑	4	mi[nu]	--	NR
161	汁	4	ɕi[ru]	ɕi[ru]	ɕi[ru]
162	味噌	4	mi[su]	mi[su]	mi[su]
163	茸		[miN]mu[ja]:(キクラゲ)	--	NR
164	板	4	?i[ta]	?i[ta]	?i[ta]/[?i]taN[ba]:(板片)
165	船	4	[p <sup>h</sup> u]ni	[φu]ni	φu[ni]
166	篋(へら)	4	[pi]ra	[pi]ra	NR
167	鑿(のみ)	4	nu[mi]	nu[mi]	nu[mi]
168	笠 傘	4	ha[sa]	ha[sa]	ha[sa](傘)
169	鎌	4	ha[ma]	ha[ma]	ha[ma]
170	臼	4	[?u]su	[?u]su	?u[su]
171	針	4	[pa]i	[pa]i	ha[ri]
172	糸	4	?i[tu]:	i[tɕu]:	?i[tɕu]:
173	外	4	su[tu]	su[tu]	su[tu]
174	奥		NR	[?u]ku	[oku]
175	中	4	[na]:	[ja]N[na]:(家の中)	[ja]N[na]:(家の中)
176	今日	4	[su]:	[su]:	[su]:
177	海	4	[?u]mi	[?u]mi	[?u]mi
178	角(かど)	4	ha[du]	ka[du]	k <sup>h</sup> a[du]

番号	語	アクセント類	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
144	蕪	3	--	n <sup>h</sup> i[ra/bi[ra(野蒜)	n <sup>h</sup> i[ra/[nnɪ]bi[ra]:
145	甘藷(さつまいも)		--	[ha]N[su]:/u[mu(田芋)	[ha]N[su]:/(u[mu芋)
146	節	3	--	φu[ɕi/bu[ɕi (古形?)	φu[ɕi
147	泡	3	--	[ʔa]wabu[ku/bu[ku (製糖のとき限定)	a[:]bu[ku/a[wa]bu[ku
148	怪我	3	--	ki[ga/kɪ[ga	ke[ga
149	穴	3	--	ʔa[na	a[na
150	裏	3	--	ʔu[ra	[u]ra
151	物	3	--	mu[N	mu[N
152	色	3	--	ʔi[ru	i[ru
153	鬼	3	o[n <sup>h</sup> i	ʔu[n <sup>h</sup> i	o[n <sup>h</sup> i
154	夢	3	ʔi[mi	ʔi[mi	imi
155	綾,模様		--	--	ga[ra
156	物		= 151	= 151	= 151
157	肩	4	ha[ta	ha[ta	ha[ta
158	息	4	[ʔi]tɕi	[ʔi]tɕi	[ʔi]ki/[ʔi]tɕi
159	帯	4	ʔu[bi/ʔo[bi/ [tɕutɕu]bin[ka]:(腰紐)	ʔu[bi	ʔo[bi
160	蓑	4	NR	--	NR
161	汁	4	ɕi[ru	ɕi[ru	ɕi[ru
162	味噌	4	mi[su	mi[su	mi[su
163	茸		NR	[mimi]ngu[ja]:(キクラゲのことか?)	mimiN[ko]:[ra(きくらげ)
164	板	4	ʔi[ta	ʔi[ta	i[ta
165	船	4	[φu]nɪ	[φu]nɪ	[φu]nɪ
166	筥(へら)	4	sa[zi(匙)	ɕi[ra	NR
167	鑿(のみ)	4	[nu]mi	[nu]mi	nu[mi
168	笠 傘	4	ha[sa	ha[sa	ka[sa
169	鎌	4	ha[ma	ha[ma	ha[ma
170	臼	4	so[:]su	[ʔu]su	[u]su
171	針	4	[ha]ri	[ha]i	[ha]ri
172	糸	4	ʔi[tɕu]:	ʔi[tɕu]:	i[tɕu]:
173	外	4	su[tu	su[tu	su[tu
174	奥		NR	[ʔu]ku	--
175	中	4	[na]ka/[ja]N[na]:(家の中)	[na]:	[na]:
176	今日	4	[su]:	[su]:	[su]:
177	海	4	[ʔu]mi	[ʔu]mi	[u]mi
178	角(かど)	4	k <sup>h</sup> a[du	k <sup>h</sup> a[du/su[mi(隅)	ka[du

番号	語	アクセント類	①小野津	②志戸桶	③塩道
179	稲	4	i[nɪ]	ʔi[nɪ]	i[ni]
180	麦	4	mu[nʰi]	mu[nʰi]	mu[nʰi]
181	瓜	4	[kʰ]iu[i(胡瓜)／[ɕi]bu[i(冬瓜) ／[i]nʰagu[i(苦瓜)	[ʔu]ri	NR
182	粟	4	a[wa]	ʔa[wa]	a[wa]
183	松	4	ma[ɕu]	ma[ɕʰu]	[ma]tu
184	茅	4	ga[ja]	ga[ja]	ga[ja]
185	苗	4	ne[:]	ne[:]	ne[:]
186	藁	4	wa[ra]	wa[ra]	wa[ra]
187	梢		[hi]ŋju[da]:(木の枝)	[ɕi]ŋju[da]	su[ra]:(サトウキビの先端)
188	種	4	ta[nɪ]	ta[nɪ]	ta[ni]
189	粕	4	ha[su]	kʰa[su]:	ka[su]
190	傍(そば)	4	su[ba]	su[ba]:	su[ba]
191	粒	4	NR	[ɕu]bu	tʰu[bu]
192	筋	4	NR	[su]zi/su[zi]	[su]zi
193	跡	4	NR	[ʔa]tu	[a]tu
194	腿(もも)	5	mu[mu]	mu[mu]	mu[mu/at[te]:
195	肩	5	[mɪ]ma[o]	ma[ju]	[miN]ma[ju]
196	声	5	ku[i]	ku[i]	[ku]i
197	汗	5	a[ɕi]	ʔa[ɕi]	a[ɕi]
198	婿	5	NR	muk[ka]	wu[tu(夫)
199	足袋	5	ta[bi]	[ta]bi	[ta]bi
200	煤		su[su]	su[su]	[su]su
201	桶	5	u[ɪ]	u[ɪ]	ta[re:(たらい)//[wi]:
202	前	5	mɛ[:]	mɛ[:]	[me]:
203	雨	5	a[mɪ]	ʔa[mɪ]	a[mi]
204	露	5	NR	ɕʰu[ju]	[tu]ju/[ɕu]ju
205	心	5	NR	[ku]ku[ru]	NR
206	技、仕事		[tɪ]wa[za(手技)	[tɪ]zu[ku]	NR
207	上		[u]ɪ	[wɪ]:	wi[:]
208	下		[ssa·	[sa]:	[ɕɕa
209	夜		= 126	= 126	= 126
210	額		[mɛ]:[ɕa]:	[mɛ]:[ɕi]:	[metɕi://[me]:[ɕi]:
221	鼻血	1	pa[na]ɕi	pa[na]ɕi:	[pana]ɕi[:
212	涎	1	ju[da]i	ju[da]i	[ju]da[i]
213	麴	1	[ho]:[zi]	[ho]:[zi]	ho[:]zi

番号	語	アクセント類	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
179	稲	4	ʔi[ni	i[:	NR
180	麦	4	mu[nʰi	[mu]gi	mu[gi
181	瓜	4	ʔu[ri	--	ʔu[ri
182	粟	4	ʔa[wa	[a]wa	ʔa[wa
183	松	4	[ma]ʦu	--	[ma]ʦu
184	茅	4	ga[ja	--	ga[ja
185	苗	4	ne[:	ne[:	ne[:
186	藁	4	wa[ra	--	wa[ra/[wa]ra
187	梢		su[da]:	--	su[ra]:
188	種	4	tʰa[ni	ta[ni	tʰa[ni
189	粕	4	ka[su/[guN]nʰa[ra]: (サトウキビの絞り粕)	--	kʰa[su
190	傍(そば)	4	su[ba	--	su[ba]:
191	粒	4	ʦʰu[bu	--	tʰu[da]:/tʰu[da]:
192	筋	4	[su]zi	--	[su]zi
193	跡	4	[ʔa]tu	--	[ʔa]tu
194	腿(もも)	5	mu[mu	--	mu[mu/at[te]:
195	肩	5	ma[ju	--	ma[ju
196	声	5	[kʰu]i	[ku]i	[kʰu]i
197	汗	5	ʔa[ʦi	ʔa[ʦi	ʔa[ʦi
198	婿	5	NR	--	[møk]ka
199	足袋	5	[ta]bi	[ta]bi	[tʰa]bi
200	煤		[su]su	--	su[su
201	桶	5	NR	[u]i/[wi]:	NR
202	前	5	[me]:	[me]:	[me]:
203	雨	5	ʔa[mi	a[mi	ʔa[mi
204	露	5	[ʦu]ju/[ʦʰu]ju	[ʦu]ju	[ʦu]ju
205	心	5	[kʰu]ku[ru	ʦi[mu	[kʰu]ku[ru
206	技、仕事		--	--	--
207	上		[u]i:	[wi	ʧi[:
208	下		[ssa	[ssa	ʦi[mu
209	夜		= 126	= 126	= 126
210	額		[mi]k[ko]:	--	mit[ʦe]:
221	鼻血	1	[pa]na[ʦi]:	[hana]ʦi[:/[hanatʰi	[ha]na[zi
212	涎	1	[ju]da[i	[ju]da[i	[ju]da[ri
213	麴	1	ho[:]zi	[ho]:[zi	[ho]:[zi

番号	語	アクセント類	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
179	稲	4	ʔi[ne/ʔi[n'i (話者確信なし)	ʔi[n'i (島には無い)	ini
180	麦	4	mu[n'i	mu[n'i	mu[n'i
181	瓜	4	[ʔu]ri	--	NR
182	粟	4	ʔa[wa	ʔa[wa	a[wa
183	松	4	[ma]tu/[ma]tsu	ma[tu	[ma]tsu
184	茅	4	ga[ja	ga[ja	ga[ja
185	苗	4	na[e	--	na[e
186	藁	4	wa[ra	wa[ra	wa[ra
187	梢		[su]ra	su[ra]:	su[ra]: (砂糖黍の先端)
188	種	4	t <sup>h</sup> a[nɪ	ta[nɪ	ta[ne
189	粕	4	k <sup>h</sup> a[su	ha[su	ka[su/ka[su]:
190	傍(そば)	4	su[ba	su[ba	NR
191	粒	4	tu[bu/tu[da]: (小さい粒)	--	tsu[bu]:/tsu[bu
192	筋	4	[su]zi	[su]zi	[su]zi
193	跡	4	[ʔa]tu	[ʔa]tu	[a]tu
194	腿(もも)	5	mu[mu/[t <sup>h</sup> a]ri/ mu[mu]nta[ri	mu[mu(確証なし)	mo[mu/mo[mo
195	肩	5	ma[ju	ma[ju	ma[ju
196	声	5	[k <sup>h</sup> u]i	[k <sup>h</sup> u]i	ku[i
197	汗	5	ʔa[ɕi	ʔa[se	a[ɕi
198	婿	5	NR	[muk]ka(聞いた事はあるが中 里の方言かは不明)	[mok]k <sup>w</sup> a
199	足袋	5	[t <sup>h</sup> a]bi	[t <sup>h</sup> a]bi	ta[bi
200	煤		[su]su	su[su	su[su
201	桶	5	NR	t <sup>h</sup> a[ru	u[ki
202	前	5	[me]:	[me]:	[me]:
203	雨	5	ʔa[mi	ʔa[mi	a[mi
204	露	5	[ts <sup>h</sup> u]ju	tsu[ju	[tsu]ju
205	心	5	[ku]ku[ru	[ku]ku[ru/[kukuru	NR
206	技、仕事		ti[dzu]ku	--	--
207	上		[u]i:	u[i]:	wi[:
208	下		[ssa	[sa?	[ssa
209	夜		= 126	= 126	= 126
210	額		[mittsɛ]:	mit[tsɛ]:	mit[tsɛ]:
221	鼻血	1	[ha]na[dzi	ha[na]tsi[:	ha[na]tsi[:
212	涎	1	[ju]da[ri	[ju]da[ri	[ju]da[ri
213	麴	1	[ho:]dzi	[ho:]zi	[ho:]zi/ho[:]zi



番号	語	アクセント類	①小野津	②志戸桶	③塩道
214	印	1	ei[ru]ei	ei[ru]ei	[ei]ru[ei]
215	隣	1	[k <sup>2</sup> i]N[dzu	(屋号でいう)	[tsiN]zu(近所)
216	埃	1	[p <sup>2</sup> i]ngu	[pu]:[mu	[φu]:[mu
217	踊り	1	u[du]i	ʔu[du]i	[wu]du[i]
218	鎖	1	[k <sup>2</sup> usari]/[k <sup>2</sup> u]sa[ri	k <sup>2</sup> u[sa]ri	[k <sup>2</sup> u]sa[ri]
219	鯉	1	ka[tsu]:	ka[tsu]:	[ka]tsu[o
220	形	1	[ka]ta(型)	ka[ta]tsi	[ka]ta[tsi
221	漆	1	NR	ʔu[ru]ei	[u]ru[ei
222	袴	4	[pa]ka[ma	[pa]ka[ma	pa[ka]ma
223	着物	1	k <sup>2</sup> i[N	[k <sup>2</sup> i]N	tsi[N
224	瓦		ka[wa]ra	[ka]wa[ra	ka[wa]ra
225	暦	4	[ku]ju[mi	[ku]ju[mi	[ku]ju[mi
226	俵(たわら)	4	[ta]:[ra	[ta]:[ra	[ta:]ra/[ka]ma[zi:(米俵)
227	袋	4	puk[ku]/φuk[ku	φuk[ku	[φuk]ku
228	筵(むしろ)	4	mus[su]/([ei]sa[ku]:)	mu[ssu	muε[εu
229	鏡	4	[ka]ga[mi	[ka]ga[mi	[ka]ga[mi
230	鋏	4	[pa]sa[mi	[pa]sa[mi	[pa]sa[mi
231	刀	4	[ha]ta[na]/[po]:[tsa]:(包丁)	[ka]ta[na	ha[ta]na
232	鼓(つづみ)	4	NR	[te]:[ko]:	[te]:[ko://[ta]i[ko]:
233	表	4	[u]mu[ti	[u]mu[ti	[u]mu[ti
234	昨日	4	ki[n <sup>2</sup> u]:	k <sup>2</sup> i[n <sup>2</sup> u]:	tsi[n <sup>2</sup> u]:
235	明日	4	a[tsa	ʔa[tsa	a[tsa
236	鶉(うずら)	4	[φu]mi[ra]:	[ʔu]dda[mi]:	u[zu]ra
237	宝	4	[taka]ramu[nu]/[ta]ka[ra	[ta]ka[ra	[ta]ka[ra
238	言葉	4	[ju]mi[ta	[ju]mi[ta	[ju]mi[ta
239	腕		NR	u[di	[gu]te[:
240	涙	5	na[da	na[da	[na]mi[da/na[da
241	従兄弟	5	[i]tu[ku]/[mëk]kwa(姪)/ [uik]kwa(甥)	[ʔi]tu[ku	[i]tu[ku
242	油	5	ab[ba	ʔab[ba	ab[ba/[a]N[ba
243	柱	5	pa[ja	pa[ja	[pa]ja/[φa]ja
244	枕	5	mak[ka	mak[ka	mak[ka
245	箒	5	[ho]:[ki	[po]:[ki	po[:]tsi
246	きゅうり	5	NR	k <sup>2</sup> i[u]i	[tsi]u[i
247	情け	5	[na]sa[ki	[na]sa[ki	na[sa]ki
248	命	5	[ʔi]nu[tsi	[ʔi]nu[tsi	i[nu]tsi
249	左	6	[pi]za[i	pi[da]i	pi[da]i
250	烏	6	[ga]ra[sa]:	[ga]ra[sa]:	[ga]ra[sa]:

番号	語	アクセント類	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
214	印	1	--	[ɕi]ru[ɕi	ɕi[ru]ɕi
215	隣	1	[tɕiN]zu(近所)	ju[ku(横)	[tɕiN]zu(近所)
216	埃	1	[pu]ku[ri/ [pu]:[mu(砂ぼこりなど)	--	[ɸu]:[mu
217	踊り	1	[gu]du[i	[gu]du[i	[ʔu]du[ri
218	鎖	1	[ku]sa[i	k <sup>ʔ</sup> u[sari	NR
219	鯉	1	[k <sup>h</sup> a]tsu[:	ka[tsu]o	[k <sup>h</sup> a]tu[:
220	形	1	--	--	[k <sup>h</sup> a]ta[tɕi
221	漆	1	--	--	--
222	袴	4	--	ha[ka]ma	ha[ka]ma
223	着物	1	tɕi[N	tɕi[N(衣)	tɕi[N
224	瓦	--	--	ka[wa]ra	ka[wa]ra
225	暦	4	[k <sup>h</sup> u]ju[mi	[ku]ju[mi	[k <sup>h</sup> u]ju[mi
226	俵(たわら)	4	--	[ta]:[ra	[t <sup>h</sup> a]:[ra
227	袋	4	[puk]ku	[ɸuk]ku	[ɸuk]ku
228	筵(むしろ)	4	[mus]su	mus[su	mus[su
229	鏡	4	[ka]ga[mi	[ka]ga[mi	[k <sup>h</sup> a]ga[mi
230	鋏	4	[pa]sa[mi	[ha]sa[mi	[ha]sa[mi
231	刀	4	ha[ta]na	ha[ta]na	ha[ta]na
232	鼓(つづみ)	4	--	--	[te]:[ko]:
233	表	4	[ʔu]mu[ti	[ʔu]mu[ti	[ʔu]mu[ti
234	昨日	4	tɕi[n <sup>h</sup> u]:	tɕi[ju]:	tɕi[ju]:
235	明日	4	ʔa[tɕa	a[tɕa	ʔa[tɕ <sup>ʔ</sup> a
236	鶉(うずら)	4	--	--	[u]Nda[mi]:
237	宝	4	--	--	ta[ka]ramu[N
238	言葉	4	[ju]mi[ta	--	[ju]mi[ta
239	腕	--	--	--	[gu]te[:
240	涙	5	[na]da	na[da	na[da/[na]mi[da
241	従兄弟	5	--	--	[ʔi]tu[ku
242	油	5	[ʔa]N[ba	[a]N[ba	[ʔa]N[ba
243	柱	5	--	pa[ɕi]ra	ja[ba]ra
244	枕	5	[ma]k[ka	mak[ka	mak[ka
245	箒	5	po[:]tɕi	po[:]tɕi	ho[:]tɕi
246	きゅうり	5	--	[tɕ <sup>ʔ</sup> i]u[i	k <sup>ʔ</sup> u[:]ri
247	情け	5	--	NR	na[saki
248	命	5	ʔi[nu]tɕi	i[nu]tɕi	ʔi[nu]tɕiu
249	左	6	pi[za]i	ɸi[da]i	ɕi[da]ri
250	烏	6	[ga]ra[sa]:	[ga]ra[sa]:	[ga]ra[sa]:

番号	語	アクセント類	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
214	印	1	[ɕi]ru[ɕi	[ɕiruɕi/ɕi[bi (標シメ?)	ɕi[ru]ɕi
215	隣	1	[tɕi <sup>2</sup> N]dzu	[tɕiN]dzu	NR
216	埃	1	[ɸu]:[mu	[ɸu]ku[ri]/[ɸu]ku[i/ [ɸukuri	[ɸu]:[mu
217	踊り	1	[wu]du[ri	[ʔu]du[i	[u]du[ri
218	鎖	1	NR	[kusari	(k <sup>2</sup> u[sari)
219	鯉	1	[k <sup>h</sup> a]tu[:/[k <sup>h</sup> a]tsu[:	[katsuo	ka[tɕuo
220	形	1	[k <sup>h</sup> a]ta[tɕi	[ka]ta[tɕi/[katatɕi	[ka]ta[tɕi
221	漆	1	NR	--	--
222	袴	4	ha[ka]ma	[ha]ka[ma]/[hakama	ha[ka]ma
223	着物	1	tɕi <sup>2</sup> i[N	tɕi[N	tɕi[N
224	瓦		k <sup>h</sup> a[wa]ra	[kawara	ka[wa]ra
225	曆	4	[k <sup>h</sup> u]ju[mi	[ku]ju[mi]/[ɸu]ju[mi	[ku]ju[mi
226	俵(たわら)	4	NR	[t <sup>h</sup> a]:[ra	[ta]:[ra
227	袋	4	[ɸuk]ku	[ɸuk]ku/ɸuk[ku	[ɸuk]ku
228	筵(むしろ)	4	mus[su	mus[su	mus[su
229	鏡	4	[k <sup>h</sup> a]ga[mi	[ha]ga[mi]/[kagami	ka[ga]mi
230	鋏	4	[ha]sa[mi	[ha]sa[mi	ha[sa]mi
231	刀	4	ha[ta]na	ha[ta]na/[ho]:[tɕo]:(包丁)	ha[ta]na
232	鼓(つづみ)	4	--	--	--
233	表	4	[ʔu]mu[ti	[ʔu]mu[ti]/[ʔumuti	[u]mu[ti
234	昨日	4	tɕi <sup>2</sup> i[n <sup>1</sup> u]:	[tɕi]n <sup>1</sup> u[:	tɕi <sup>2</sup> i[n <sup>1</sup> u]:
235	明日	4	ʔa[tɕa	ʔa[tɕa	a[tɕa
236	鶉(うずら)	4	[ʔu]nda[mi]:	[ut]ta[mi]:	[u]nda[mi]:
237	宝	4	--	[takara	--
238	言葉	4	[ju]mi[ta	[ju]mi[ta	[ju]mi[ta
239	腕		ʔu[di	--	--
240	涙	5	na[da	na[da	na[da
241	従兄弟	5	[ʔi]tu[ku	[ʔi]tu[ku/ʔi[tu]ku	(i[to]ko)
242	油	5	[ʔa]N[da]/[ʔa]bu[ra (新)	[ʔa]bu[ra	a[bu]ra
243	柱	5	ha[ɕi]ra	[ha]ɕi[ra]/[haɕira/[ha]ja	(ha[ɕi]ra)
244	枕	5	mak[ka	mak[ka	mak[ka
245	箒	5	ho[:]tɕi	ho[:]tɕi	ho[:]tɕi
246	きゅうり	5	[tɕ <sup>2</sup> u]:[ri	[tɕu]:[ri	[k <sup>h</sup> u:ri/k <sup>h</sup> u[:]ri
247	情け	5	NR	--	--
248	命	5	ʔi[nu]tɕi	ʔi[nu]tɕi	i[no]tɕi
249	左	6	ɕi[da]ri	ɕi[da]ri/[ɕidari	ɕi[dari/ɕi[da]ri
250	烏	6	[ga]ra[sa]:	[ga]ra[sa]:	[ga]ra[sa]:

番号	語	アクセント類	①小野津	②志戸桶	③塩道
251	鰻	6	[ʔu]na[ŋ <sup>h</sup> a]:	[ʔu]na[ŋi	u[na]gi
252	兎	6	[u]sa[gi	[ʔu]sa[ŋi	u[sa]gi
253	蚯蚓	6	[bi]bi <del>za</del> [ra]:	[mi]mi[ <del>za</del> ]:	[mi]mi[ <del>za</del> ]:/[bi]bi[da]:
254	虱	6	[ɕi]ja[mi	[ɕi]ra[mɪ	[ɕi]ra[mi
255	葉	7	su[i	k <sup>ʔ</sup> u[su]i	[su]i/ku[su]i
256	鹽	7	[ta]re[:	ta[re]:	ta[re]:
257	畑	7	[pa]te[:	[pa]te[:	pa[te]:
258	鯨	7	k <sup>ʔ</sup> uz[za	[k <sup>ʔ</sup> u]d[ <del>dza</del> ]:	[ku]N[ <del>dza</del> ]:
259	百足		[mu]ka[zi	[mu]ka[dɪ	mu[ka]di//[mu]ka[di
260	欠伸		[ʔa]ku[bi	ʔa[ku]bi	a[ku]bi

基礎語彙 1 データ

番号	語	アクセント類	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
251	鰻	6	--	[ʔu]na[gi	ʔu[na]gi
252	兎	6	--	ʔu[sa]gi	ʔu[sa]gi
253	蚯蚓	6	[bi]bi[za]:	[mi]mi[da]:	[mi]mi[da]:
254	虱	6	ɕi[ra]mi	ɕi[ra]mi	ɕi[ra]mi
255	薬	7	ku[su]i / [ku]su[i	k <sup>2</sup> u[su]i	k <sup>h</sup> u[su]ri
256	鹽	7	ta[re]:	[biŋ]da[re]:	t <sup>h</sup> a[re]:
257	畑	7	pa[te]:	pa[te]:	ha[te]:
258	鯨	7	[k <sup>2</sup> u]ŋ[dʒa	k <sup>2</sup> u[zi]ra	k <sup>h</sup> u[ŋ]dʒa
259	百足		nu[ka]de	[a]mi[da]:	mu[ka]de
260	欠伸		ʔa[ku]bi	ʔa[ku]bi	[ʔa]ku[bi

番号	語	アクセント類	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
251	鰻	6	NR	[ʔunagi	u[na]gi
252	兎	6	u[sa]gi	[ʔusagi	u[sa]gi
253	蚯蚓	6	[bibi]da[ra]:	[mimi]nda[ja]:	[mi]mi[za]:
254	虱	6	ɕi[ra]mi	[ɕiɾami	--
255	薬	7	k <sup>2</sup> u[su]ri	[kusui	ku[su]ri
256	鹽	7	t <sup>h</sup> a[re]:	ta[re]:	ta[re]:
257	畑	7	ha[te]:	ha[te]: / to:ba[ru(平らな所) / [ʔa]ta[i(小さな家庭菜園)	ha[te]:
258	鯨	7	[k <sup>2</sup> uN]ɕza	ku[zi]ra	[kuN]ɕza / [ku]N[ɕza
259	百足		mu[ka]di	[mu]ka[di	mu[ka]de
260	欠伸		ʔa[ku]bi	[akubi / [a]ku[bi	a[ku]bi

番号	単語	①小野津	②志戸桶	③塩道
1	あご(側面、おとがい)	[ʔa]ɰi[ma]:(全体)	[ʔu]tʰu[ŋe]:	[ʔa]di[ma]:(全体)/[ʔu]tu[ŋe]:(先端)
2	足	[pʰa	[pʰa	[pʰa
3	頭	[ha]ma[ɰi	[ha]ma[ɰi/[ho]:[ɰe]:/ [ɰu]bu[ra]:(頭蓋骨)	[ha]ma[ɰi/[ɰu]bu[ru](古)/ [tʰu]bu[ra]:(頭蓋骨)
4	頭(こめかみ、ほっぺた)	[bi]N[ta	[ʔa]ɰima[::(こめかみ)/ ɰu[ra](顔)/[bi]N[ta 頭(が良 い/悪い)	[bi]N[ta頭(の良し悪い)
5	腕 1	gu[te]:	[gu]te[:	[gu]te : (腕が強いこと)
6	腕 2	[ʔudi	--	ʔu[di
7	踵(かかと)	ʔa[du	ʔa[du]ɰi(A, B)//[ʔa]du[ɰi(B)	[ʔa]du
8	髪	[has]sa[ŋ(ʷ)i]:	[ha]ssa[ŋɪ]:	[ha]ɰɰa[ŋi]:
9	腰周り(わき腹)	[ga]ma[ku/[sa]huɰi	[ga]ma[ku	[ʔabara]bu[ni]:/ [ga]ma[ku(胸の中)
10	舌	su[ba	su[ba/[kʰu]ɰi(口)	su[ba
11	尻	ma[i/[ma]i[tab]ba	[ma]i/[mai]tabu[ni(お尻の 膨らんでいる所)	[ma]i
12	脛(すね)	su[nɪ	ɰu[ne(A)//su[nɪ(B)	[pʰa]Npʰu[ni]:/su[ni
13	背中	[na]ŋa[nɪ/[hu]ɰi	[na]ŋa[nɪ/[na]ga[nɪ/ [hu]ɰi	hu[ɰi]
14	つむじ	ma[ɰu]ɰi	[ma]ɰu[gi(A)// [ma]ɰu[ɰi(B)	[ma]tu[ɰi
15	膝小僧 1	ɰu[bu]ɰi	[ɰu]bu[ɰi	[tʰu]bu[ɰi
16	額	[mɛ]:[ta	[mɛ]:[ɰi]:	met[ɰi]:
17	ふくら脛	ɰu[ɰu	[kʰa]kki, kʰak[ki	NR
18	臍(へそ)	[ɰu]su	[ɰu]su	pʰu[su
19	おでき	[nɪ]bu[tu]:	[nɪ]bu[tu]:	[ni]bu[tu]:
20	体の汚れ・垢	[ɰi]ŋgu	[ɰi]ŋgu, [pɰi]ŋgu	[pʰi]N[ŋgu
21	糞	[ssu	[su	[ssu
22	げんこつ、握りこぶ	[tekkʰo]:	[tʰɪ]kko[:	[tʰɪ]ku[ro]:
23	白髪	[ɰi]ja[ŋ(ʷ)ɪ	[ɰi]ra[ŋɪ	ɰi[ra]ŋi
24	咳	[ʔi]kin[ni	[ʔi]kin[di(「息の出」)/ [ʔi]kindijun(「息の出る」)	[ʔi]ɰiN[ɰi]ti(~をしている)
25	たんこぶ	ga[bu	ɰi[ni/ga[bu(生れつきので こぼこ)/ga[bu]:(ごつごつ 頭の人?)	ga[bu
26	唾	[ɰu]b[bɛ]:	[ɰu]b[be]:	[tʰu]b[be]:
27	尿	ɰi[bai	ɰi[bai	ɰi[bai

番号	単語	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
1	あご(側面、おとがい)	ʔa[ŋu(あご全体)／ [ʔu]tu[ŋe]:(あごの先)	ʔa[gu	[ʔu]ta[je]:
2	足	s[sa	s[sa/s[sa]nu (~が)	[ssa
3	頭	[ha]ma[ɬi / [tsu]bu[ra]:(頭 蓋骨)／[bi]N[ta (頭、平手打)	[ha]ma[ɬi / [tʰu]bu[ra]:頭 蓋骨／ho:[bi]頭蓋骨(敬)	[ha]ma[ɬi
4	頭(こめかみ、ほっぺ た)	[a]za[ma]:	bi]N[ta(頭. 余り使わない)	[bi]N[ta (こめかみ)
5	腕1	pi[zi	[gu]te[:	tʰi[:
6	腕2	ʔu[di	ʔu[di	ʔu[di
7	踵(かかと)	[ʔa]du	ʔa[du	ʔa[du]:
8	髪	[has]sa[ŋi]:	[has]sa[i]:	has[sa]i
9	腰周り(わき腹)	a[ba]ra	ʔa[bara/ga[ma]ku	ga[ma]ku/wa[ɬi(脇)
10	舌	su[ba	su[ba	su[ba
11	尻	ma[i	[mai / [ma]i[ta]nba(稀)	[ma]ri/ʔat[te]:(ふくらんで いる所)
12	脛(すね)	su[nɪ / pi[za	su[nɪ	[hiza]ɛ[ɪmu
13	背中	ɸu[ɛi	hu[ɛi	ɸu[ɛi
14	つむじ	[ma]tsu[dzi]:	[mat]tʰu[dzi	[ma]tu[dzi
15	膝小僧1	[tsu]bu[ɛi	[tʰu]bu[ɛi	[tʰu]bu[ɛi
16	額	[mikko]:	mit[ɬe]:	mit[ɬe]:
17	ふくら脛	[kat]ɬi	[kʰat]ɬi	[kʰa]tɬi
18	臍(へそ)	pu[su	ɸu[su	ɸu[su
19	おでき	[ni]bu[tu]:	[nɪ]bu[tʰu]:	[diki]mu[N / [ni]bu[tu]:
20	体の汚れ・垢	[pi]N[gu	[ɸi]N[gu	[hi]N[gu
21	糞	s[su	[su	kʰu[su
22	げんこつ、握りこぶ	[tʰik]ko:	tʰik[ko: / kʰa[ɸa (扣囊)	tʰik[ko]:
23	白髪	[ɛi]ra[ŋe]:	ɛi[ra]gi (普) / ɛi[nai (生年祝いの時)	ɛi[na]i
24	咳	[ʔitɛi]N[ni]:	[se]ki	[ʔitɛi]N[ni]ru (~をしてい る)
25	たんこぶ	ga[bu]:	ga[bu]: / -nu (~が)	ga[bu]:
26	唾	[tsu]N[be]:	[tʰu]N[be]:	[tʰu]N[be]:
27	尿	ɛi[ba]i	ɛi[ba]i	ɛi[ba]ri



番号	単語	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
1	あご(側面、おとがい)	ʔa[gu]:/[ʔa]di[ma]: (先端) /[ʔu]tu[ŋe]: (先端)	ʔa[gu]/[ʔu]tu[ŋe]:	[ʔu]ta[ge]:(先端)
2	足	[ssa	[ssa	[sa
3	頭	[ha]ma[tɕi	[ha]ma[tɕʰi	[ha]ma[tɕi
4	頭(こめかみ、ほっぺた)	[bi]N[ta (頭の良しあし)	[bi]N[ta	φu[mi]ka[mi (こめかみ)/ [bi]N[ta (ほっぺた)
5	腕 1	tʰi[:	tʰi[:/tʰi[:	tʰi[:
6	腕 2	[gu]te: (上腕)	[gu]te[: (肘から上)	[gu]te[:
7	踵(かかと)	ʔa[du]:	[ʔa]du	[ʔa]du
8	髪	[ha]ssa[ŋi]:	[ha]ssa[ŋi]:	has[sa]gi/[ha]ssa[gi]:
9	腰周り(わき腹)	a[ba]ra/ga[ma]ku	ʔa[ba]ra/ga[ma]ku	--
10	舌	su[ba	su[ba	su[ba/ku[tɕi (口)
11	尻	[ma]ri/[ma]ri[taN]ba(ふくらんでいる所)	[ma]i/[ma]ita[bu]ni(ふくらんでいる所の骨)	[ma]ri/[ma]ri[taN]ba(ふくらんでいる所)
12	脛(すね)	[su]ni	su[ni	su[ni
13	背中	hu[ɕi	hu[ɕi	φu[ɕi
14	つむじ	[ma]tu[dzi	[ma]tu[dzi	[ma]tsu[dzi]
15	膝小僧 1	[tʰu]bu[ɕi	[tʰu]bu[ɕi	[tsu]bu[ɕi]/[tsubuɕi
16	額	mit[tɕe]:	mit[tɕe]:	mit[tɕe]i
17	ふくら脛	[kʰa]ttɕi	[kʰa]ttɕi	[ka]ttɕi
18	臍(へそ)	hu[su	φu[su	ɕi[su
19	おでき	[ni]bu[tu]:	[ni]bu[tʰu]:	[ni]bu[tu]:
20	体の汚れ・垢	[ɕi]N[gu]	[ɕi]N[gu]	[ɕi]N[gu]:/[ɕi]N[gu
21	糞	[su	[ssu	--
22	げんこつ、握りこぶ	tʰik[ko]:	tʰik[ko]:	[tʰi]kku[ro]:
23	白髪	ɕi[ra]ŋi	[ɕi]ra[ŋi]:	ɕi[ra]gi
24	咳	[ʔitɕi]N[ni]ti (~すること、の意)	[itɕi]N[ni]ti	[se]ki
25	たんこぶ	ga[bu]:	ga[bu]:	ɕi[:
26	唾	[tʰu]N[be]:	tup[pe]:	tsup[pe]:
27	尿	ɕi[ba]ri	ɕi[ba]i	ɕi[ba]ri

番号	単語	①小野津	②志戸桶	③塩道
28	ふけ	ɸu[ke	[ʔi]k[ki] / [ʔik]ki	[p <sup>h</sup> u]:[mu (ほこりの意も, 話者A) // [ɸu]:[mu (ほこり, 話者B)
29	ほくろ	[ʔa]za	[ʔa]dza	ʔa[da
30	兄	[n <sup>i</sup> ]: / [ja]k[kē]: (古、先輩・尊敬)	[k <sup>ʔ</sup> i]N[ka]:	ɛi[da]:
31	姉	[ne]: / ʔu[bakkē]: (古、未婚のおば)	[ba]N[ka]:	[ne]:
32-1	甥	(w)u[ik]k <sup>w</sup> a	u[i]k[ka] / ik[ka	[ma]ta[be]:
32-2	姪	mëikk <sup>w</sup> a	[mɪ]k[ka] / mɪk[ka(姪)	[ma]ta[be]:
33	叔父	u[dzi]:	[ʔu]N[muɰi]:, < cf > / a[dzi]:(祖父)	[k <sup>ʔ</sup> i]N[k <sup>ʔ</sup> a]: (敬って言う)
34	夫	[u]tu	[u]tu	wu[t <sup>ʔ</sup> u
35	男	[ji]Nŋa	[ji]Nŋa	[ji]Nŋa
36	叔母	u[ba]:	[ʔu]ba[kkɪ](:), [ʔu]ba	[ʔa]N[ma]: / ʔa[ni]:
37	親子	[ʔu]jak[k <sup>w</sup> a	[ʔu]jak[k <sup>w</sup> a	ʔu[ja]kka
38	女	[u]na[ŋu	ma[i]: / [u]na[ŋu(新)	[wu]na[gu
39	家族	[ja:]n <sup>i</sup> iN[dzu]:	[ja:]net[tɕu	[ja]:[ti]:
40	兄弟	[k <sup>o</sup> ]:[de]:	ji[:]ri(男きょうだい) / [ʔu]tu[dza(女きょうだい)	[ɕo]:[de]:
41	恋人	NR	NR	--
42	子供1	[k <sup>w</sup> a	[k <sup>w</sup> a	[k <sup>ʔ</sup> a
43	子供2	[wa]ra[bɪ] / [wa]ra[b <sup>w</sup> i	[wa]ra[bɪ	wa[ra]bi
44	子供たち	[k <sup>w</sup> a]N[k <sup>ʔ</sup> a]: / [wa]rabɪN[k <sup>ʔ</sup> a]:	[k <sup>w</sup> a]N[tɕa]: / [wa]rabɪN[tɕa]:	[k <sup>ʔ</sup> a]N[tɕa]: / [wa]rabɪN[tɕa]:
45	親戚	[ɸa]ro:[dzi]:	[ha]ro:[dzi]:	p <sup>h</sup> a[ro:]dzi / [p <sup>h</sup> aro:]dziN[tɕa]:
46	青年	n <sup>i</sup> [se]: / n <sup>i</sup> [se]:nka (-達)	n <sup>i</sup> [se]:	n <sup>i</sup> [ɕe]:(18-19才) / ʔu[ɸu]ttɕu(大人)
47	大工	[se]:[ku(作業) / [se:]ku[sa]:(人)	[se]:[ku(作業) / [se]:kusa[:(人)	[ɕe:]ku[ɕa]:(人)
48	父	[jin]ŋaʔu[ja	ja[kki]: / o[to:(新)	jak[ki]:
49	父1	ʔa[dza(:)](呼) / ʔa[dzi]:(祖	[a]dza[:](古)	ʔa[dza]:(古)
50	妻	[t <sup>h</sup> u]zi	t <sup>h</sup> u[dzi	t <sup>h</sup> u[dzi
51	友	[du]ɕi / [du]ɕiN[k <sup>ʔ</sup> a]:	[ho]:[bē]: / du[ɕi] / [du]ɕiN[tɕa]:(複数形)	du[ɕi] / [duɕi]N[tɕa]:(1人でも)

番号	単語	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
28	ふけ	[ʔi]t[tsi]/[ʔittsi]/ [pu]:[mu](ほこり、ふけ)	ʔit[tsi]/→282参照	[ɸu]:[mu](ほこり、ふけ)
29	ほくろ	a[za]	ʔa[da]	ʔa[za]
30	兄	[jak]ki:	(古) jak[kʰi: (年輩を呼ぶ時 こも)	jak[ki]:
31	姉	[ba]N[ka]:	(古) [ʔi]naN[ma]:	[ne]: (一番上)/ [ne]N[kʰa]: (二番目の姉)
32-1	甥	[wik]ka (男)	wi[:k]kʰa	βik[ka
32-2	姪	[mi]k[ka]/[mikka (女)	mi[:]kkʰa	[mi]kka (姪)
33	叔父	ʔu[zi]:	gu[dzi	ʔu[dzi
34	夫	gu[tu	gu[tu	ʔu[tu
35	男	[ji]N[ga	[ji]N[ŋa	[ji]N[ŋa
36	叔母	ʔu[ba]:	gu[ba	wu[ba
37	親子	ʔu[jak]ka	ʔu[wak]kʰa <cf> ʔuwak[kʰa:]suN(親し くつき合う)	ʔu[ja]kka
38	女	[gu]na[ŋu	[gu]na[u	[wu]na[u
39	家族	[ja]:[ti]:	ja:[nut]tsu	[ja]:[nu]tsu
40	兄弟	[so]:[de]:	[so]:[de]:	[so]:[de]:
41	恋人	NR	kana[: (死語)お嬢さん(若い 女性に対する敬称)	--
42	子供1	[kʰa	[kʰa	[kʰa
43	子供2	wa[ra]bi	wa[ra]bi	--
44	子供たち	[kʰa]N[tsʰa]:/ [warabi]N[tsʰa]:	[kʰa]N[tsʰa]:/ [wa]rabiN[tsʰa]:	[kʰa]N[tsʰa]:
45	親戚	pa[ro]:[zi]: (単数)/ pa[rozi]N[tsʰa]: (複数)	[ɸa]ro:[dzi	[haro]:[dzi]:/ [so:de]N[tsʰa]:
46	青年	nʰi[se]:	nʰi[se]:/[me]:[ra]bi(女)/ nʰi[se]:[me]:[ra]bi(男+女)	nʰi[se]: (20才位まで)
47	大工	[se]:[ku]/ [se:]ku[sa]:	[se]:[ku (作業)/ [se]:[kusa]: (人)	[se]:[kʰu (作業)/ [se:]kʰu[sa]: (人)
48	父	[su]:(丁寧)	jak[ki]:	--
49	父 1	ʔa[za]:(祖父)	ʔa[dza]: (死語)	ʔa[dza]:
50	妻	tu[dzi	tʰu[dzi	tʰu[dzi
51	友	du[ci	du[ci	du[ci

番号	単語	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
28	ふけ	it[ɬei	it[ɬei	ɸu[ke/ [ɸuke
29	ほくろ	ʔa[da	a[da	ʔa[za
30	兄	[nʰi]:[sa]N/ [nʰi]:[nʰi]: (子供用語)	[kʰi]N[ka]:	o[nʰi]:[sa]N/ja[kki]: (親戚の目上の男の人(古))
31	姉	[ne]:[sa]N/ [ne]:[ne]: (子供用語)	[ne]:	[ne]:[sa]N/[ʔi]N[ka]: (古)
32-1	甥	[mi]:[ik]ka (男女とも)	mi[:]kka	mik[kʷa
32-2	姪	[mi]:[ik]ka (男女とも)	mi[:]kka	mik[kʷa
33	叔父	wu[ɕzi]:	ʔu[ɕzi]:	ʔu[ɕzi]:
34	夫	wu[tu	ʔu[tu	ʔu[tu
35	男	[ji]N[ŋa	[ji]N[ŋa	[ji]N[ŋa
36	叔母	wu[ba]:	ʔo[ba]:/ʔu[ba	ʔo[ba]:
37	親子	ʔu[ja]kkʰa	ʔu[ja]kka	ʔu[ja]kkʷa
38	女	[wu]na[gu	[ʔu]na[gu	[ʔu]na[ɰu
39	家族	[ja]:[nutɬu	[ja]:[ti]:	[ja]:[ti]:
40	兄弟	[so]:[de]:/[u]na[ri (男の女兄弟)/[ji]:[ri (女の兄さん)	[so]:[de]:	[so]:[de]:
41	恋人	wa[ŋa [su]tɕuN[ɬu	NR	--
42	子供1	[kʰa	[kʰa	[kʷʰa
43	子供2	wa[ra]bi	wa[ra]bi	wa[ra]bi
44	子供たち	[kʰa]N[ɬa]:/ [warabi]N[ɬa]:	[kʰa]N[ɬa]:/ [warabi]N[ɬa]:	[kʷʰa]N[ɬa]:/ [warabi]N[ɬa]:
45	親戚	[haro]:[ɕzi]:	[haro]:[ɕzi]:	ha[ro]:[ɕzi]:
46	青年	nʰi[ɕe]: (29-30才、未婚)	[nʰiɕe]:(男女とも, 17・18-20代位, 既婚未婚は無関係)	nʰi[se]:
47	大工	[ɕe]:[ku (作業)/ [ɕe:]ku[sa]: (人)	[se]:[ku(作業)/ [se:]ku[sa]:(人)	[se]:[ku (作業)/ [se:]ku[sa]: (人)
48	父	jak[kʰi]: (古)/[ɬʰa]N	jak[kʰi]:	--
49	父1	--	ʔa[ɕa]: (じいさん)	ʔa[ɕi]: (おじいさん)
50	妻	tʰu[ɕzi	tʰu[ɕzi	tu[ɕzi
51	友	du[ɕi	du[ɕi/[du]ɕiN[ɬa]:(複数)	du[ɕi

番号	単語	①小野津	②志戸桶	③塩道
52	母	ʔok[ka]: / ʔa]N[ma]: (祖母)	[ba]: (新) / ʔa]N[ma]: (古)	ʔok[ka]N / [a]N[ma]:
53	孫	ma[go]: / ʔu]ma[ŋa]: (ひ孫)	ʔu]ma[ŋa]:	ma[ŋa]: (古) / ma[gu]:
54	目上(の男)	[n'i]: / ɕi[dʒa / ɕi[dʒa]:	ʔui]t[tɕu / [ɕi]da[: (上の兄弟)	ɕi[da]: / [ɕi]da:(けなして聞こえる)
55	目下(弟、妹)	[tu]ɕis[sa]: / ʔuttu: / ʔut]tu[bo]: (弟) / ʔut]tu[mai] (妹)	ʔu]t[tu]: (単数) / ʔu]ttuN[tɕa]: (複数)	ʔut[tu]: / ʔut]tu:[bo]: (男兄弟) / ʔuttu:]ma[i]: (女兄弟)
56	若い娘	[më:]ra[bɪ / [më:]rabiN[k'a]:	[me:]ra[bi	[me]:[ra]bi
57	帯	o[bi / o[bi]: / [tɕi]tɕu[bɪ	[tɕu]tɕu[bi / tɕutɕu[bi	ʔu[bi / tɕ'ɪ[tɕu]bi
58	かんざし	[gi]:[ɸ'a]:	[gi]ɸa[:	gi[ba]: / k <sup>h</sup> u[ɕi(髪飾り)
59	着物1	[k'i]N	k'i]nu	tɕ'ɪ]N
60	下駄	ʔas[sa]:	ʔa]ssa[:	ʔaɕ[ɕa]:
61	草履(ぞうり)	[sa]ba	[sa]ba	sa[ba
62	手ぬぐい、タオル	[te]nu[ŋɪ / [t <sup>h</sup> i]sa[dʒi(古)	sa[dʒi	[t <sup>h</sup> ɪ]nu[gu]i
63	紐	[ɸ(°)i]mu	--	mu[su]bi / [hi]muN[ka]:
64	粥	k <sup>h</sup> a[i]:	k <sup>h</sup> a]ji:	k <sup>h</sup> a[i
65	果物	k <sup>h</sup> udamono / [hi]N[na]i (hiはɕiではない)	[na]i[mu]N	[na]imuN / [k <sup>u</sup> ]ni[p <sup>h</sup> a]: (青みかん)
66	ごちそう・料理	[su]:[ki (祭りの時の)	[t <sup>h</sup> u]i[mu]tɕi(おもてなし) / [su]:[ki / [ɕu]:[ki	[ɕu]:k'i(祭りの)
67	ご飯	[ʔo]ba[n'i / ʔu]ba[n'i	ʔu]ba[n'i	[me]:ɕi / ʔu[ba]n'i
68	砂糖	[sa]ta[:	[sa]t[ta]:	sa[ta]:
69	塩	[mas / [ma]su	[ma]su	ʔu[ɕu(古) / ma[ɕu(新)
70	食料・主食・食事	[ha]Nmë[: (飼育動物の)	[p <sup>h</sup> a]N[më]: (牛・馬・家畜の餌)	mu]N
71	雑炊	[du]:[ɕi]:	[du]:[ɕi]:	[du]:[ɕi]:
72	卵	[t <sup>h</sup> a]ma[gu / hu[ŋa]:	hu[ŋa]:	[t <sup>h</sup> a]ma[gu / hu[ŋa]: (ひよこ)
73	茶	tɕa[: / sa[: (古)	tɕa[:	[tɕa:
74	昼食	ʔa]ɕi[:	[mu]N	ʔa]ɕi[:
75	朝食	mu]N	[mi]N]sa[ru]: (A) // [mu]N]sa[ru]: (B)	[k <sup>2</sup> a]N]manu]mu]N / [k <sup>2</sup> a]N]manumu]N
76	天ぷら	[tenpura	[tɕu]tɕia[gi	ʔa]N]da[gi]:

番号	単語	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
52	母	[a]N[ma]:(祖母)	[ʔa]N[ma]:/[ʔi]naN[ma]:	[ʔa]N[ma]:
53	孫	[ʔu]ma[ŋa]:	[ma]gu	ma[go]:
54	目上(の男)	[ɕi]da (年上の人)	~(名前など)jak[ki]:/ ~[kʰi]:/[ɕi]da (先輩なら女 も)	[ɕi]da (男も女も)
55	目下(弟、妹)	[ʔu]t[tʰu]:	ʔut[tʰu]:	ut[tu]/[ʔu]ttu[wa]: (一番 下の子)
56	若い娘	[me]:[ra]bi	--	[me]:[ra]bi
57	帯	tsu[tsu]bi/ʔu[bi]	ʔu[bi]/tʰi[tsu]bi (細い帯)	tsi[tsi]bi
58	かんざし	gi[pa]:	[gi]:[ɸa]:	[gi]:[ha]:
59	着物1	tʰi[N]/tʰi[nu]	tʰi[N]	tʰi[N]
60	下駄	[ʔa]s[sa]:	ʔas[sa]	ʔas[sa]
61	草履(ぞうり)	sa[ba]	sa[ba]	sa[ba]
62	手ぬぐい、タオル	[tʰi]nu[ŋu]i	[tʰi]nu[i]:/sa[dzi (死語)]	[tʰi]nu[gu]i
63	紐	NR	[ɕi]mu	[tʰi]tʰi[bi]N[ka]:/hi[mu]
64	粥	ka[i]	kʰa[i]	kʰa[ji]:
65	果物	na[i]:/[na]i	[hi]nna[i (木の実全般)]	[na]ri[mu]N
66	ごちそう・料理	[su]:[kʰi]	[gu]tʰi[su]:(ごちそう)/ [dzu:i(料理)]	[dzu:]ri/[su]:[ki]
67	ご飯	u[ba]nʰi	ʔu[ba]i	ʔu[ba]i
68	砂糖	sa[ta]:	sa[ta]:	sa[ta]:
69	塩	ma[su]	ma[su]	ma[su]
70	食料・主食・食事	mu[N]	mu[N(食事)]/[ha]Nme[: (食 料)]	mu[N]
71	雑炊	[du]:[ɕi]:	[du]:[ɕi]:	[du]:[ɕi]:
72	卵	ɸu[ŋa]:	[tʰa]ma[gu]/ɸu[ŋa]: (死語) /ɸu[a]: (死語)	tʰa[ma]gu
73	茶	sa[:]	sa[:]	sa[:]
74	昼食	ʔa[ɕi]:	ʔa[ɕi]:	ʔa[ɕi]:
75	朝食	--	[ɕi]Nma[dzi]tʰi	[ɕi]Nma[dzi]:/ [hi]Nma[dzi]:
76	天ぷら	[tsu]ki[a]ŋi	NR	[mutʰi]N[ka]:

番号	単語	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
52	母	[ʔa]N[ma]: (古)／ʔok[kʰa]N	[ʔa]N[ma]:	[ʔa]N[ma]:
53	孫	ma[gu]: (古)／ma[ŋa]:	NR	ma[ŋa]:
54	目上(の男)	[ɕi]da (目上の男女)	[ɕi]da(先輩全般、男女とも)	[ɕi]da (目上の男女)／ ɕi[da (目上の男女)
55	目下(弟、妹)	ut[tu	[ʔuttu]N[tsa]:(複数)／ ʔut[tu(単数)	ʔut[tu (目下の男女)
56	若い娘	[me]:[ra]bi	[me]:[ra]bi(17・18-20代, 未婚)	[me]:[ra]bi／[me]:ra[bi]:
57	帯	tsu[tsu]bi	tsu[tsu]bi	tsu[tsu]bi (着物に使う紐)／ ʔo[bi(厚い方の帯)
58	かんざし	[gi]:[ha]:	[gi]:[ha]:	gi[ha]:
59	着物1	tsʰi[N	tsʰi[N	tsi[nu
60	下駄	ʔas[sa	ʔa[ssa	ʔas[sa]
61	草履(ぞうり)	sa[ba	sa[ba	sa[ba
62	手ぬぐい、タオル	[tʰi]nu[ŋi]:	NR	[tʰe]nu[gi]:
63	紐	ɕi[mu	hi[mu／ʔi[tsu]:(糸にも使う)	ɕi[mu
64	粥	kʰa[i	kʰa[i	[ka]ji[:
65	果物	[nari]mu[N	[na]i[mu]N(木になるもの)	[na]ri[mu]N (木になっているもの(古))／蜜柑[kʰu]r
66	ごちそう・料理	dzu[:]ri／[su]:[kʰi	dzu[:]ri／[su]:[ki	[su]:[ki
67	ご飯	ʔu[ba]nʰi	ʔu[ba]nʰi	ʔu[ba]nʰi
68	砂糖	sa[ta]:	sa[ta]:	sa[ta]:
69	塩	ma[su	ma[su	ma[su
70	食料・主食・食事	mu[N／[ha]N]me[: (古)	[kʰa]N[mu]N／mu[N(食べ物・食事)／[ha]N]me[:(物を送られた時のお返し)	mu[N／[ha]N]me[: (お産の時に持たせる物、古)
71	雑炊	[du]:[ɕi]:	[du]:[ɕi]:	[du]:[ɕi]:
72	卵	tʰa[ma]gu／hu[ŋa]: (古)	ta[ma]gu／hu[ŋa]:(石か何かで作った, 卵を産ませるために使うもの)	tʰa[ma]gu／ [ɸu]ɸa[ɸu]ɸa(卵料理)
73	茶	sa[:	sa[:	sa[:
74	昼食	ʔa[ɕi]:	ʔa[ɕi]:	a[ɕi]:
75	朝食	[hi]N]me[:]tsi	[hi]N]ma[i]tsi	[ɕi]N]ma[dzi
76	天ぷら	[tʰe]N[pu]ra	[tʰu]tsi[a]gi	[te]Npura

番号	単語	①小野津	②志戸桶	③塩道
77	肉	ɕi[ɕi	ɕi[ɕi	mi[: / ɕi[ɕi(良い部位の肉)
78	餅	[mu]t[tɕi]:	[mu]t[tɕi]:	mut[tɕi]:
79	夕食	ji[:	[ju]:[ba]N	[ji]:
80	家	[ja:	ja[:	ja[:
81	いろいろ	[dzu]:ba[ta]:	dzi[ru	NR
82	母屋	ʔo[mo]ja / [ʔu]mu[ti(一番座)	[ʔu]ɸu[ja]: / [ʔu]mu[ti(床の間のある部屋)	[ʔu]mu[ti(客を入れる部屋)
83	門	[mon / dzo]:	dzo[:	[ʔu]muti[gu]tɕi / [dzo]:
84	竈	k <sup>h</sup> a[ma]do	k <sup>h</sup> a[ma	dzi[ru / k <sup>h</sup> a[ma]do
85	台所、3つめの家屋	[to]N[ɾa	[ha]ma[ja]:(古) / [mu]Nɕi:[ja]:(新)	[ne]:[ɕu]:
86	天井	[te]Ndzɔ[:	[t <sup>h</sup> i]Ndzɔ[:(新)	[ti]N[dzɔ]:
87	戸	[t <sup>h</sup> u]:	[t <sup>h</sup> u]:	t <sup>h</sup> u[:
88	ひんぷん(門のところにある目隠し用垣根)	NR	[më]:ga[ki	[ɕo]Nn <sup>a</sup> [tɕi]:
89	豚小屋、便所	[ja]nis[su]:	[k <sup>h</sup> a]Ndzɔ	[bu]tan[ja]:(豚小屋) / [ja]niɕ[ɕo]:(便所) / [ɕi]N[tɕi]N(便所)
90	いさり(夜の漁)	ʔi[za]i	i[dza]i	[ʔi]da[ri
91	刺青(昔、女性が手の甲にしていた)	[ɸ(ʷ)a]gi / ɸa[dzu]ki	[ha]dzu[ki	[ha]du[tɕi
92	灸	ja[tɕu]:	ja[tɕu]:	ja[tɕu]:
93	三味線	[sa]N[ɕi]N	[sa]Nɕi[N	[sa]N[ɕi]N
94	煤・鍋などに付く汚	[na]bɪNp <sup>h</sup> isu[mɪ / su[su(煙)	[na]bɪɸiN[gu]:	[su]su / [nabip <sup>h</sup> i]N[gu]:
95	相撲	[ɕi]ma	ɕi[ma	ɕi[ma
96	松明(いざりに使用)	[t <sup>h</sup> a]imatsu	--	[ʔidarida]N[po]:
97	欠			
98	匂い	[ha]dza	ha[dza	ha[da
99	墓	[ɸa]ka	[t <sup>h</sup> i]ra / [p <sup>h</sup> a]ka(新)	p <sup>h</sup> a[ka
100	畑作業	[ɸa]ruɕi[gu]tu	[p <sup>h</sup> aruɕi]gu[tu / p <sup>h</sup> a[ru(畑)	[p <sup>h</sup> ate:ɕi]gu[tu / p <sup>h</sup> a[te]:(畑)
101	麦わら	[mu]Nn <sup>a</sup> [ra]:	[mu]Nn <sup>a</sup> [ra]:	[mu]Nn <sup>a</sup> [ra]:
102	お祝い	[ju]:[we]:	[ju]we[:	[ju:]je[:
103	休息	ju:i	ʔi[k <sup>ʔ</sup> i]ɕira(「休もう」の意)	[ju]ku[ju]N(休む)
104	結婚	k <sup>ʔ</sup> u[ra]ɕi	[se:]mui	NR



番号	単語	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
77	肉	ɕi[ɕi	ɕi[ɕi (古)	ɕi[ɕi
78	餅	[mu]t[tɕi]:/[muttɕi]:	[mu]t[tɕi]:	mut[tɕi]:
79	夕食	[ji]:	[ji]:	[ji]:
80	家	ja[:	[ja:	ja[:
81	いろり	[dɕi]ru(炊事場)	[dɕiru	--
82	母屋	[ʔu]ɸu[ja]:/ [ʔu]mu[ti (母屋の広い部屋)	[ʔu]mu[ti	[ʔu]mu[tʰi (床の間のある 所、客を通す部屋のある家 屋)
83	門	[dzo]:/[mun	[mo]N/[dzo]Nku[tɕi]: (入 口)/[dzo]:	mu[N/[dzo]: (門のある所)
84	竈	ka[ma	ha[ma	[ha]ma[du
85	台所、3つめの家屋	[ne]:[su]:	[mun]ɕi:[ja]:	炊事場のある家屋 [ʔumatume:]ɕi[ja]:/ [ne]:[su]:
86	天井	[tʰi]N[dzo]:	[tʰi]N[dzo]:	[tʰi]N[dzo]:
87	戸	tʰu[:	tʰu[:	tʰu[:
88	ひんぷん(門のところに ある目隠し用垣根)	NR	[so]N[nʰa]tɕi	NR
89	豚小屋、便所	[buta]N[ja]: (豚小屋)/ [ɕi]t[tɕi]N (便所)	[ɕi]N[tɕʰi]N	便所[ɕi]N[tɕi]N
90	いさり(夜の漁)	[ʔi]za[i	[ʔi]da[i	[ʔi]da[ri
91	刺青(昔、女性が手の 甲にしていた)	NR	[ha]dɕi[tɕi	NR
92	灸	ja[tɕu]:	ja[tɕu]:	ja[tɕu]:
93	三味線	[sa]N[ɕi]N	[sa]N[ɕi]N	[sa]N[ɕi]N
94	煤・鍋などに付く汚	pʰi[su]mi/[su]su(天井の煤)	[na]biɸiN[gu]:	[su]su
95	相撲	ɕi[ma	ɕi[ma (「島」と同じ発音)	ɕi[ma
96	松明(いざりに使用)	NR	tʰe[:	NR
97	欠			
98	匂い	ha[za	ha[da/匂いがするha[da]sui	ha[da
99	墓	pʰa[ka	ɸa[ka	ha[ka
100	畑作業	[pʰate:]ɕi[gu]tu/pʰa[te]: (畑)/pʰa[ru (野原)	ɸa[ru]ɕi[gu]tu	[hate:]ɕi[gu]tu/ha[te]:(畑) /ha[ru
101	麦わら	[mun]nʰa[ra]:	[mu]Nnʰa[ra]:	[mun]nʰa[ra]:
102	お祝い	[ju:]je[:	[ju:]je[:	[ju:]we[:
103	休息	[ju]kʰu[i	[ju]:[nʰu]i (動詞)/ ju[:]mi(休め!)	--
104	結婚	[guzi]N[ke]:	[ja:]tatɕi	結婚式[se:]mu[ri

番号	単語	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
77	肉	n <sup>h</sup> i[ku	ɕi[ɕi/魚の肉(はmi[:	n <sup>h</sup> i[ku (新・今)/ɕi[ɕi (古)
78	餅	mut[tɕi]:	mut[tɕi]:	[mu]t[tɕi]: (tはLow)
79	夕食	[ji]:	[ji]:	[ji]:
80	家	ja[:	ja[:	ja[:/ja:
81	いろり	[dʒi]ru(かまど)	--	[dʒi]ru(かまど)
82	母屋	[ʔu]mu[ti	[ʔu]mu[tʔi	[ʔu]mu[ti
83	門	[dʒo]:	[dʒo]:	[dʒo]:
84	竈	ha[ma	ka[ma]du/dʒi[ru/ha[ma	k <sup>h</sup> a[ma
85	台所、3つめの家屋	[ne]:[su]:	[ne]:[su]:	[ne]:[su]:
86	天井	[tʰi]N[dʒo]:	[tʰi]N[dʒo]:	[teN]dʒo:
87	戸	tʰu[:	tʰu[:	ʔi[ta]do
88	ひんぷん(門のところにある目隠し用垣根)	NR	NR(あまり使わない言葉)	[me:]ga[tɕi]:
89	豚小屋、便所	[bu]ta[gu]ja (豚小屋)/ [k <sup>h</sup> aN]dʒu (便所)	ɸu[ru]:/[kaN]dʒu	[k <sup>h</sup> aN]dʒu (便所)
90	いさり(夜の漁)	[ʔi]da[ri	[ʔi]da[i	[ʔi]za[ri
91	刺青(昔、女性が手の甲にしていた)	--	NR	NR
92	灸	ja[tɕu]:	ja[tɕu]:	ja[tɕu]:
93	三味線	[sa]N[ɕi]N	[sa]N[ɕi]N	[sa]N[ɕi]N
94	煤・鍋などに付く汚	--	[na]bɪ[çin]gu	nabi[çin]gu]:
95	相撲	ɕi[ma	ɕi[ma	ɕi[ma
96	松明(いざりに使用)	--	あまり使わないので敢えて聞かなかった	--
97	欠			
98	匂い	ha[da	ha[da(良い匂いも悪い匂い	ha[da (良い悪い両方)
99	墓	[haka	[haka]N[me]:	tʰi[ra]i[ɕi
100	畑作業	[haru]ɕi[gu]tu/ha[te]:(畑) /ha[ru	[hate:]ɕi[gu]tu/ha[te]:(畑) /ha[ru(原っぱ・野原)	ha[te]:sa[gʰo]:/ha[te]: (畑)
101	麦わら	[muN]n <sup>h</sup> a[ra]:	[muN]n <sup>h</sup> a[ra]:	mu[gi]wa[ra]
102	お祝い	[ju:]je[:	[ju:]je[:	[ju:]je[:/ju:]je[:
103	休息	ju[:]i (休みなさい、の意)	juk[k <sup>2</sup> u]i	[ja]su[mo: (休もう)
104	結婚	--	NR	--

番号	単語	①小野津	②志戸桶	③塩道
105	結婚(結納)	[sa]Nŋo:se:mu[i(三合の酒盛り)	[se:]mui	[ju]i[no:]
106	喧嘩	[ɕi]kki/[du]ɕik[ki	[ɕi]kki	[ɕit]tɕi(:)
107	言葉・方言	[ju]m <sup>w</sup> i[ta	[ju]muɕi[ta	[ju]mi[ta
108	相互扶助(農作業など)	[magumi:]ɕi[ŋu]tu	[ji]:[dɕi]:	[ji]:[dɕi]:
109	魂、靈魂、幽霊	[ma]bu[i	ma[bu]i	[ma]bu[i
110	力(タヤ)	t <sup>h</sup> a[ja	t <sup>h</sup> a[ja	[gu]te:
111	病気	ja[mi	[ja]Nmë[:	ja[ma]i
112	斧 1	dzu[m <sup>a</sup> ]:	[ʔo]no	--
113	斧 3	--	[dzu]m <sup>a</sup> : (小型)	du[m <sup>a</sup> ]: (大小とも)
114	錐(きり)	ki[ri]/i[: (古)	ʔi[ri	ʔi[ri
115	網(魚を獲る三角網)	[ʔi]juʔa[mi]:/sa[dɕi (三角網)/sa[dɕi]ʔa[mi]:	[ʔa]mi/[sa]dɕ i(A)//[sa]di(B)	[sukui]ʔa[mi
116	權(舟のカイ)	jo[:	jo[:	jo[:
117	船(サバニ)	ɸu[ni]/[k <sup>h</sup> ë]ra[ma]:	[ɸu]nɪN[ka:/ɸu[ni(船)	[p <sup>h</sup> u]niN[ka]:(話者A)// [p <sup>h</sup> u]ni(話者B)
118	槍	t <sup>h</sup> u[ŋ <sup>a</sup> ]/t <sup>h</sup> u[ŋ <sup>a</sup> ]:/ [ippunu]:(一本釣り)	[ʔip]pu[nu(一本槍)/ t <sup>h</sup> u[n <sup>a</sup> (三本槍)	t <sup>h</sup> u[n <sup>a</sup>
119	籠	[pɪ]ja[ŋɪ]/[ɸɪ]ja[ŋɪ(大きい 籠)、t <sup>h</sup> eN[ŋa]:(小さい籠)	[so]:[wɪ	k <sup>h</sup> a[gu]/ma[gu(小さいもの)
120	籠(頭上運搬)	[ba]:[k <sup>h</sup> ɪ	--	--
121	籠(背籠)	[pɪ]ja[ŋɪ]/[ɸɪ]ja[ŋɪ(大きい 籠)、[ɪ]ru(小さい籠、稀)	[p <sup>h</sup> i]ra[ŋɪ(大)/[t <sup>h</sup> i]N[ŋa]: (魚釣り用; たすきがけ)	pi[ra]gi
122	鎌(かま)	[ha]ma	ha[ma	ha[ma
123	鋤(くわ)	[k <sup>w</sup> ɛ]:	[k <sup>w</sup> ɛ]:/[k <sup>w</sup> ë]:	[k <sup>ɛ</sup> ]:
124	ザル(脱穀用)	ju[i]/[ju]iso:ɸ <sup>w</sup> i/ [ʔaram <sup>w</sup> ɪ]so:[ɸ <sup>w</sup> ɪ	--	p <sup>h</sup> u[ru]i(目が細かいもの)
125	ザル(脱穀用)	[sa]Nba[ra]:	[hu]Nn <sup>a</sup> [ma]:(目が荒い)/ [sa]Nba[ra]:	ju[i(目が荒いもの)
126	ザル(脱穀用)	NR	--	[sa]Nba[ra]:
127	鋤(すき)	NR	ma[ŋa	--
128	鋤(牛にひかすすき)	su[ki	su[ki	su[tɕi
129	脱穀用ゴザ	mus[su(薄いもの)/ [ɸu]mu(厚いもの)	[mu]s[su/ [ni]dɕi[ki(薄い, 寝具用)	mu[ɕɕu(薄い)/ [ʔura]gu[mu]:(脱穀用)

番号	単語	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
105	結婚(結納)	[se:]mu[i]／[so]:[i]	[k <sup>2</sup> u]t̤simusu[bi (死語)／ [ju]i[no:]	--
106	喧嘩	[ɕit]t̤ɕi[:]	[ɕit]t̤ɕi[:]／[ɕit]t̤ɕu[i (動詞)	[ɕitt̤ɕi
107	言葉・方言	[ju]mi[ta]／[pa]na[ɕi	[ju]mi[ta]／[ɕi]maju[mi]ta (方言)	[ju]mi[ta]／[ɕima]ju[mi]ta
108	相互扶助(農作業など)	[jui	ju[i]／[ji]:[d̤zi]:	[ji:ɕi]da[ma]:
109	魂、靈魂、幽霊	[ju]:[ri]:／[ma:d̤za]mu[N]／ [ma]bu[i	[t̤h <sup>a</sup> ]maɕi[: (魂)／ [ma]bu[i (靈魂)	[ma]bu[ri (魂、幽霊)／ [ma:d̤za]mu[N (幽霊)
110	力(タヤ)	[t̤ɕ <sup>2</sup> i]ka[ra	t̤ɕi[kara	[t̤ɕi]ka[ra]／t̤h <sup>a</sup> [ja
111	病気	ja[ma]i	[ja]nme[:	ja[ma]i
112	斧 1	NR	gu[nu (大きい)	[u]:[nu
113	斧 3	d̤zu[ma]:	du[n <sup>h</sup> a (小さい)	du[ma (大も小も)
114	錐(きり)	ʔi[ri	ʔi[ri	ʔi[ri
115	網(魚を獲る三角網)	sa[di	sa[di]／sa[di]ʔa[mi]:	sa[di]／ʔa[mi
116	權(舟のカイ)	jo[:	jo[:	t̤h <sup>i</sup> [jo]:
117	船(サバニ)	[p <sup>h</sup> uni]N[ka]: (小さい船)／ [p <sup>h</sup> u]ni	[k <sup>2</sup> u]ibu[ni]:／ʔi[ta]su[ki]:	[sagama:]bu[ni]:
118	槍	t̤h <sup>u</sup> [n <sup>h</sup> a	t̤h <sup>u</sup> [ŋ <sup>w</sup> a:	t̤h <sup>u</sup> [ja]／[ʔippon]du[ja]: (一本槍)
119	籠	so[:]bi	k <sup>h</sup> a[gu]／ma[gu: (釣りで携 帯用)	k <sup>h</sup> a[gu
120	籠(頭上運搬)	[p <sup>h</sup> i]ra[ŋi]:	NR	--
121	籠(背籠)	[ti]ru	ɕi[na]i (農業用)／ ʔa[ra:]di[ru (買い物用)	[t̤h <sup>i</sup> ]ru]／[t̤h <sup>i</sup> ŋa]N[ka]:
122	鎌(かま)	ha[ma	ha[ma	ha[ma
123	鋤(くわ)	[k <sup>2</sup> e]:	[k <sup>2</sup> e:	k <sup>2</sup> e[:
124	ザル(脱穀用)	[jui	[so]:[bi]／ju[ri	so[:]bi]／[so:bi]N[k <sup>2</sup> a]: (小) ／ju[ri (目が荒いふるい)
125	ザル(脱穀用)	[saN]ba[ra]:	[sa]Nba[ra]:	[sa]Nba[ra]: (箕、飛ばす為 に使う)
126	ザル(脱穀用)	NR	[it]tu[do]:[bi(:)]	--
127	鋤(すき)	NR	[ji]:[da]i	--
128	鋤(牛にひかすすき)	su[ki	su[t̤ɕi	su[t̤ɕi
129	脱穀用ゴザ	φu[mu]／[mu]s[su(蓆)	--	φu[mu]／mus[su (薄いもの)

番号	単語	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
105	結婚(結納)	--	[ɕe:]mu[i]	[se:]mu[ri] (古)
106	喧嘩	[ɕit]tɕi[ri]	[ɕi]ttɕi[:]	[ɕi]ttɕi[ri]
107	言葉・方言	[ju]mi[ta] / [ɕima]ju[mi]ta	jumita	[ju]mi[ta]
108	相互扶助(農作業など)	[ji]:[dɕi]:	ju[i] / [ji]:[dɕi]:	ji[:]
109	魂、靈魂、幽霊	[ma]bu[ri] (魂・靈魂) / [ma:dɕi]mu[N] (幽霊)	[ma]bu[i] / [ma:ɕi]mu[N]	ma:[dɕi]mu[N] (幽霊) / [ma]bu[ri] (靈魂)
110	力(タヤ)	[tɕi]ka[ra] / [ta]ja	NR(tajaは使わない)	t <sup>h</sup> a[ja] (いきむ時の力)
111	病気	ja[mi]	ja[ma]i	ja[ma]i
112	斧 1	--	--	--
113	斧 3	du[ma]:	du[n <sup>h</sup> a]:	dzu[ma]:
114	錐(きり)	ʔi[ri]	ʔi[ri]	k <sup>h</sup> i[ri]
115	網(魚を獲る三角網)	sa[di]	sa[di]	sa[di] / ʔami (網)
116	櫂(舟のカイ)	jo[:]	jo[:]	jo[:]
117	船(サバニ)	[ɸu]ni	[ɸuni]N[ka]:	ku[ri]bu[ni]
118	槍	[t <sup>h</sup> u]nu[bo]:	t <sup>h</sup> u[n <sup>h</sup> a]	t <sup>h</sup> u[n <sup>h</sup> a] (大) / [k <sup>h</sup> e]:[dɕa]: (小)
119	籠	so[:]ɕi (大) / [so:ɕi]N[ka]: (小)	so[:]ɕi / [t <sup>h</sup> i]N[ŋa]: (魚を入 れるびく) / ʔu[t <sup>h</sup> i]gu(口の狭 くなっているビク)	k <sup>h</sup> a[go]
120	籠(頭上運搬)	ɕi[ra]ŋi (背籠、たすきがけ にして使うもの)	ɕi[ra]gi(頭から下げる畑道具 のかご)	--
121	籠(背籠)	[t <sup>h</sup> i]ru	[t <sup>h</sup> i]ru(頭から下げる畑道具 のかご)	ɕi[ra]gi / [t <sup>h</sup> i]ru
122	鎌(かま)	ha[ma]	ha[ma]	ha[ma]
123	鍬(くわ)	[k <sup>2</sup> e]:	[k <sup>2</sup> e]:	[k <sup>w2</sup> e]:
124	ザル(脱穀用)	--	so[:]ɕi(野菜を洗ったりして あげるもの)	so[:]ɕi (野菜を洗って入れる ザル)
125	ザル(脱穀用)	--	ju[i](ふるいのように使う)	[saN]ba[ra]: (穴の無い、飛ばすため)
126	ザル(脱穀用)	[saN]ba[ra]:	[saN]ba[ra]: (穴がなく、カス を飛ばす用)	ju[ri]:
127	鋤(すき)	--	ju[da]i(鋤全体、牛にひかす)	ju[dɕa]ri (馬・牛にひかす)
128	鋤(牛にひかすすき)	--	su[ki](鋤先端の鉄の部分)	su[ki]
129	脱穀用ゴザ	gu[da] / mus[sa]	hu[mu] / mus[su] (寝る時など に使う)	ɸu[mu] / mu[ssu] (薄いもの)

番号	単語	①小野津	②志戸桶	③塩道
130	籠(へら、大、穴を掘る)	NR	φi[ra/p <sup>hi</sup> ra	[p <sup>hi</sup> ]ra
131	モッコ、網籠(運搬用、馬に乗せる)	[ʔo]:[da]:	[ʔo]:[da]:	[ʔo]:[da]:
132	桶座(頭上運搬用)	(使わない)	--	--
133	釜	pa[ga]ma	[ha]ga[ma	[ʔubaniN]ka[ma]:
134	杵	[ʔa]zu[mu	[ʔa]dzu[mu	ʔa[dzu]mu
135	急須2・鉄瓶	jak[k <sup>w</sup> an(やかん)/ su[ka]:(急須)	[tɕu]ka:(急須)/[jakkan	ɕu[ka]:/ja[kka]N
136	櫛	[sa]ba[ki	[sa]ba[ki	[sa]ba[tɕi/k <sup>u</sup> ɕi
137	小刀	NR	[na]i[φu	k <sup>h</sup> u[ga]ta[na
138	しゃもじ	[ɪ]b <sup>(w)</sup> i[ra/[mɪ]ɕi[ɲe:	[mɪ]ɕige[:/[sa]ku[ɕi(お玉) /[ɕa]ku[ɕi	[mɪ]ɕi[ge]:/sa[ku]ɕi(お玉)
139	銭	[ha]ni(お金)/ [k <sup>h</sup> u]dɕi[nu]:	[ha]ni	ha[ni/[k <sup>h</sup> u]dɕi[N(小銭)/ ha[bi]ha[ni]:(札)
140	膳	[dɕi]N	dɕi[nu	dɕi[N
141	薪(たきぎ)	[t <sup>h</sup> a]N[mu	[t <sup>h</sup> a]N[mu	[t <sup>h</sup> a]Nmu
142	杖	[gu]sa[ni	[gu]sa[ni	gu[ɕa]ni
143	布(手ぬぐい)	[nu]nu	sa[dɕi	nu[nu
144	箸	[φ <sup>a</sup> ]ɕi	[t <sup>h</sup> i]mu[tu	me:[ɕi/[p <sup>h</sup> a]ɕi
145	ひしゃく	nɪ[bu/[sa]ku[ɕi(お玉)	nɪ[bu	[ni]bu
146	紐(細めのヒモ)	NR	[tɕu]tɕubiN[ka]:	--
147	布団	ʔu[du	ʔu[du	ha[bbi]p <sup>h</sup> u[tu]N(カケ布団) /[ɕitɕi]p <sup>h</sup> u[tu]N(敷き布団)
148	包丁	[φo]:[tɕa]:	[ho]:[tɕu]: <cf>[ho]:[tɕa]:(頭全体)	ha[ta]na
149	まな板	[ma]na[tɕa	[ma]na[tɕa	--
150	水桶	[t <sup>h</sup> aru/[t <sup>h</sup> a]N[gu	[t <sup>h</sup> a]N[gu/[t <sup>h</sup> a]N[gu(塩作り に使用)	--
151	水瓶	[mɪ]zuga[mɪ/[φa]N[do]:	[t <sup>h</sup> ura]gami(穀物用)/ [p <sup>h</sup> a]N[du]:(死語)/ [mɪ]dzu[wi]:	[t <sup>h</sup> ura]ga[mɪ(大)/ [p <sup>h</sup> a]N[du]N[ka/ [p <sup>h</sup> a]N[du]ka[mɪ(小)
152	椀	ma:[i	ma:[i	ma[:i
153	北	[n <sup>i</sup> ]ɕi(占)	[n <sup>i</sup> ]ɕi/n <sup>i</sup> ɕikadɕi(北風)	--
154	西	NR	[ʔu]kibɛ[:	--
155	東	k <sup>h</sup> u[tɕi(東風)/ [ʔaga]it <sup>h</sup> ida(上がり太陽)	[k <sup>h</sup> u]tɕi/hu[tɕikadɕi(東風)	--

番号	単語	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
130	篋(へら、大、穴を掘る)	[p <sup>h</sup> i]ra	--	çi[ra
131	モッコ、網籠(運搬用、馬に乗せる)	[ʔo]:[da]:	--	[ʔo]:[da]: (肥料を入れる) / muk[ku]: (草を入れる)
132	桶座(頭上運搬用)	--	--	--
133	釜	p <sup>h</sup> a[ga]ma	--	ha[ga]ma
134	杵	ʔa[zu]mu	--	ʔa[di]mu (縦杵) / [jamatu]ʔa[di]mu (横杵)
135	急須2・鉄瓶	su[k <sup>h</sup> a]: / [jakka]N (やかん)	--	[su]:[ka]: (急須) / jak[ka]N (ヤカン)
136	櫛	[sa]ba[tɕ <sup>ʔ</sup> i	--	[sa]ba[tɕi
137	小刀	ha[ta]na	--	[k <sup>h</sup> ogo]ta[na
138	しゃもじ	[mi]ɕi[ŋe]: / sa[ku]ɕi(お玉)	--	ʔi[bi]ra / sa[ku]ɕi(お玉)
139	銭	ha[nɪ] / [ku]dɕi[N(小銭)]	--	ha[nɪ] / [k <sup>h</sup> u]dɕi[N(小銭)]
140	膳	dɕi[N] / [dɕiN	--	dɕi[N
141	薪(たきぎ)	[taN]mu	--	[t <sup>h</sup> aN]mu
142	杖	gu[sa]ni	--	gu[ɕi]:
143	布(手ぬぐい)	nu[nu] / [t <sup>h</sup> i]nu[gu]:	(死語) sa[dɕi] / (西洋タオル) [da]N[sadɕi	k <sup>ʔ</sup> i[dɕi] / nu[nu
144	箸	[p <sup>ʔ</sup> a]ɕi	--	[ha]ɕi / [t <sup>h</sup> i]mu[tu
145	ひしゃく	[nɪ]bu	--	[nɪ]bu
146	紐(細めのヒモ)	--	--	--
147	布団	[ʔu]du / p <sup>h</sup> u[t <sup>h</sup> u]N	--	[ʔu]du
148	包丁	[p <sup>h</sup> o]:[tɕo]: / ha[ta]na	--	ha[ta]na
149	まな板	[ma]na[tɕa	--	[ma]ra[tɕa
150	水桶	[taN]gu(トイレの汲取り桶)	--	--
151	水瓶	--	--	--
152	椀	ma[:]i	--	[ma]:[ri
153	北	n <sup>ʔ</sup> i[ɕi	[n <sup>ʔ</sup> i]ɕi (北風も)	n <sup>ʔ</sup> i[ɕi
154	西	NR	(風) [ʔut]tɕin <sup>ʔ</sup> i[ɕi	ʔi[:]ri[:
155	東	ʔa[ga]ri	(風) φu[tɕi	ʔa[:]re[:

番号	単語	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
130	籠(へら、大、穴を掘る)	[he]ra (コンクリート作りに使用)	NR(使わない)	(使わない)
131	モッコ、網籠(運搬用、馬に乗せる)	[ʔo]:[da]:	[ʔo]:[da]:	[ʔo]:[da]:/ mu[kku]: (手作業に使う)
132	桶座(頭上運搬用)	--	--	--
133	釜	ha[ga]ma	ha[ga]ma	ha[ɥa]ma (ɥに鼻音化あり)
134	杵	ʔa[du]mu	ʔa[du]mu(縦)	ʔa[dzu]mu(縦)/ jama[tu]a[dzu]mu(横)
135	急須2・鉄瓶	su[kʰa]: (急須)/ jak[kʰa]N(鉄瓶)	su[ka]: (急須)/ jak[ka]N(鉄瓶)	su[ka]: (急須)/ ja[ka]N(鉄瓶)
136	櫛	[sa]ba[tɕi	[sa]ba[tɕi	[sa]ba[tɕi
137	小刀	[kʰoga]ta[na	ha[ta]na(刀一般, 包丁も)	NR
138	しゃもじ	[miɕi]ŋe[:/sa[ku]ɕi(お玉)	[miɕi]ŋe[:	mi[ɕi]ge[:
139	錢	ha[ni]/[kʰu]ɕi[N(小錢)	ɕi[N/ha[ni]とも	ha[ni]/[kʰu]ɕi[N
140	膳	ɕi[N	ɕi[N	ɕi[N
141	薪(たきぎ)	[tʰaŋ]mu	[tʰaŋ]mu	[tʰaŋ]mu/tʰa[n]mu
142	杖	gu[sa]ni	gu[sa]ni	gu[sa]ni
143	布(手ぬぐい)	kʰi[re]/nu[nu(織ったもの)	nu[nu	kʰi[re](きれ)
144	箸	[ha]ɕi/[tʰi]mu[tu(古)	[tʰi]mu[tʰu	[ha]ɕi/[tʰi]mu[tu(古)
145	ひしゃく	[ni]bu	[ni]bu/sa[ku]ɕi(お玉)	[ni]bu
146	紐(細めのヒモ)	hi[mu		--
147	布団	hu[tu]N/[ʔu]du(古)	[ʔu]du	ɸu[to]N
148	包丁	[ho]:[tɕo]:	ha[ta]na	ha[ta]na
149	まな板	[ma]na[tɕa	[ma]na[tɕa	[ma]na[tɕa
150	水桶	ba[ki]tu(バケツ)	[tʰaŋ]gu(トイレの汲取り用, 木製。肥溜めまで持っていく物)	NR
151	水瓶	[ha]mi	[ha]mi	[ha]mi(味噌も入れる)
152	椀	ma[:]ri	ma[:]i	ma[:]ri
153	北	[nʰiɕi]ka[di(北風)	NR	nʰi[ɕi(風の時だけ使う)
154	西	--	NR	--
155	東	--	ko[tɕi「東風」も	[he]:か?



番号	単語	①小野津	②志戸桶	③塩道
156	南	[p̥e:n'isi(南風)	φ̥e[:/[φ̥e]nka[dzi(南風)	p <sup>h</sup> e[:
157	外1	[su]tu	[ja]nm̥e[:(家の外庭)/ [su]tu	su[tu(話者A)// su[tu(話者B)
158	右	n <sup>h</sup> i[n'i]:	[mi]gi	mi[gi/ mi[gi]: (話者A)// [mi]gi(話者B)
158	左	[p <sup>h</sup> i]dza[i	[çi]da[i	p <sup>h</sup> i[da]i
159	暁	[ʔa]:tu[ki	[ʔa]:[tu]ki	[ʔa:]kan[ma(話者A)// [ʔa:]tu[tɕi(話者B)
160	朝	[ʔa]sak[k <sup>h</sup> a]ma/[k <sup>h</sup> a]N[ma	ʔa[sak]kama	[k <sup>h</sup> a]N[ma(話者A, B)
161	朝(昼)	[ma]:φiru	[çi]N[ma/ma[çi]N[ma(A)// ma[çi]N[ma(B)	p <sup>h</sup> i[ru(話者A, B)
162	今	n <sup>h</sup> a[ma	n <sup>h</sup> a[ma	[n <sup>h</sup> a]ma(話者A, B)
163	うりずん(3~4月)	NR	NR	NR(話者A, B)
164	暇	ma[du	ma[du	[ma]du(古)(話者A)//çi[ma (新)/ma[du(古)(話者B)
165	夕方	[jo]:ne:ŋa[ta	--	夕暮れ[jo]:[ne]:(話者A, B) /夜ju[ru(話者A, B)
166	夜中	[ju]na[:	[ju]na[:/ju[na]:/ [jo]:[ne]:(夜)	[ju]na[:(話者A)// ju[na]:(話者B)
167	一昨年	[mi]tsuna[ti]:	[mi]tsuna[ti]:	[sugi]t <sup>h</sup> u[çi(話者A)// [mi]tɕu[na]ti(話者B)
168	去年	hu[dzu	hu[dzu	hu[du(話者A)// φu[du(話者B)
169	今年	[hu]ta[bi	[hu]ta[bi	φu[ta]bi(今年, 今度)(話者 A)//[k <sup>h</sup> u]tu[çi(話者B)
170	今年	[kondo(今度)	[k <sup>h</sup> u]N[do(A)//[k <sup>h</sup> u]N[du(B)	[k <sup>h</sup> u]Ndu(今年, 今度)(話者 A)//[k <sup>h</sup> u]Ndu(話者B)
171	さ来年	[na]:mi[tɕu	[jan]tɕu	[ja]Ntɕo(話者A)// [jan]tɕu(話者B)
172	来年	ja[ni	ja[ni	[ja]ni(話者A, B)
174	明日	ʔa[tɕa	ʔa[tɕa	ʔa[tɕa(話者A, B)
173-1	明後日	[ʔa]sa[ti	[ʔa]sa[ti	ʔa[sa]ti(話者A, B)
173-2	しあさって	--	[jo]:	tɕ <sup>h</sup> i[n <sup>h</sup> ut[ti]:(話者B)
177-1	翌日	--	NR	NR(話者A)//[na]:[tɕa(話者 B)
177-2	翌々日	--	NR	mik[ka(話者B)
176	今日	[k <sup>h</sup> u]:	k <sup>h</sup> u[:	[ɕu]:(話者A, B)
175	昨日	k <sup>h</sup> i[n <sup>h</sup> u]:	ki[n <sup>h</sup> u]:	tɕ <sup>h</sup> i[n <sup>h</sup> u]:(話者A)//tɕi[n <sup>h</sup> u]: (話者B)

番号	単語	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
156	南	[pe]:	[φe]:	[he]:
157	外1	su[tu	--	su[tu
158	右	[mi]ŋi	--	[mi]gi
158	左	p <sup>h</sup> i[ze]:	--	çi[da]ri
159	暁	[ʔa:ta]N[ma	--	[ʔa:]tu[tɕi
160	朝	NR	--	[k <sup>ʔ</sup> a]N[ma (10時頃まで)
161	朝(昼)	[k <sup>ʔ</sup> a]N[ma(午前中まで)／ p <sup>h</sup> i[ru] (昼)	--	[ma]çiN[ma (昼)
162	今	[n <sup>h</sup> a]ma	--	[na]ma
163	うりずん(3～4月)	--	--	NR
164	暇	ma[du／p <sup>h</sup> i[ma	--	ma[du
165	夕方	[p <sup>h</sup> i]N[ma]:／[jo]:[ne]:	--	[jo:ne:]ʔa[ta]:／ [ʔa:jo]:[ne]:
166	夜中	ju[ru(夜)	--	[ju]na[ka／夜ju[ru(夜)
167	一昨年	[mi]tɕu[na]t <sup>ʔ</sup> i	--	[mi]su[na]ti
168	去年	φu[zu]／[dzu	--	φu[du
169	今年	NR	--	k <sup>h</sup> u[ta]bi (今回)
170	今年	[k <sup>u</sup> N]du	--	[k <sup>h</sup> uN]du
171	さ来年	[ja]Ntɕu	--	[jaN]tɕu
172	来年	[ja]ni	--	[ja]i
174	明日	a[tɕa	--	ʔa[tɕa
173-1	明後日	ʔa[sa]t <sup>ʔ</sup> i	--	ʔa[sa]ti
173-2	しあさって	jo[:	--	--
177-1	翌日	[na]:[tɕa	--	[na]:[tɕa
177-2	翌々日	--	--	--
176	今日	[su]:	--	[su]:
175	昨日	ki[ŋu]:	--	tɕi[ju]:

番号	単語	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
156	南	[heN]ka[di]: (南風)	[hè]:	--
157	外1	su[tu	su[tu	--
158	右	[mi]gi	[mi]gi	--
158	左	çi[da]ri	çi[da]i	--
159	暁	[ʔa:]tu[tɕi	[ʔa:]tu[tɕi	--
160	朝	[kʰa]ma (-11時)	[miçi]N[ma(7-8時ごろまで)	[kʰa]ma (午前中全体)
161	朝(昼)	[ma]çiN[ma (ちょうど12-1時頃)	[kʰa]N[ma(3-4,5時ごろ ; 早朝)	[kʰa]N[ma (早朝) / çi[ru (昼)
162	今	[nʰa]ma	[nʰa]ma	[nʰa]ma
163	うりずん(3~4月)	--	--	--
164	暇	ma[du / hi[ma (新)	ma[du(時間的空間的合間)	--
165	夕方	[jo:ne:]ʔu[tɕi / [jo:ne:]ŋa[ta]:	[jo]:[ne]: / [juN]ku[ri]:	--
166	夜中	[ju]na[: / ju[ru(夜)	[ju]na[: / ju[ru(夜) <cf> [çi]N[ma]:(昼)	--
167	一昨年	[mi]tɕu[na]ti	[mi]tɕu[na]ti	--
168	去年	hu[du	φu[du	φu[zu
169	今年	--	--	--
170	今年	[kʰuN]du	[kʰuN]du	--
171	さ来年	[jan]tɕu	[jan]tɕu	[ja]ni[jan]tɕu
172	来年	[ja]ni	[ja]ni	[ja]ni
174	明日	ʔa[tɕa	ʔa[tɕa	--
173-1	明後日	ʔa[sa]tʰi	ʔa[sa]ti	--
173-2	しあさって	jo[:	jo[:	--
177-1	翌日	[na]:[tɕa	[na]:tɕa	--
177-2	翌々日	--	[mitɕa]:[çi]:	--
176	今日	[su]:	[su]:	--
175	昨日	tɕʰi[nʰu]:	tɕi[nʰu]:	--

番号	単語	①小野津	②志戸桶	③塩道
175	おととい	ʔut[tʰi]:	[wu]t[ti]:	wut[tʰi]:(話者A)//[wu]t[ti]: (話者B)
178	ひとつ	--	[tʰi]tsu	[tʰi]tu
180	二つ	--	[tʰa:]tsu	[tʰa:]tu
181	三つ	--	[mi:]tsu	[mi:]tu
182	四つ	--	[ju:]tsu	[ju:]tu
183	五つ	--	[ʔi]tsu[tsu	[ʔitutu
184	六つ	--	[mu:]tsu	[mu:]tu
185	七つ	--	[nana]tsu	[na]na[tu
186	八つ	--	[ja:]tsu	[ja:]tu
187	九つ	--	[kʰɔ]:[nu]tsu ([ku]ku[nu]ts	[kʰu]:[nu]tu
179	十	--	[tʰu]:	tu[:
188	一人	--	[tʰu]i	[tʰu]i
189	二人	--	[tʰa]i	[tʰa]i
190	三人	--	mi[tsa]i	[mi]tsa[i
191-1	四人	--	ju[ta]i	[ju]ta[i
191-2	五人	--	[i]tsu[ta]i	[gu]nʰin
191-3	六人	--	mu[ta]i	--
191-4	七人	--	[na]na[ta]i	--
191-5	八人	--	ja[ta]i	--
191-6	九人	--	[kʰu]:[ta]i	--
191-7	十人	--	--	--
192	一	--	[hi]:	NR
193	二	--	[ɸu]:	NR
194	三	--	[mi]:	NR
195	四	--	[ju]:	NR
196	五	--	[ʔi]:	NR
197	六	--	[mu]:	NR
198	七	--	[na]na	NR
199	八	--	[ja]:	NR
200	九	--	[kʰu]nu	NR
201	欠			
202	あそこ	--	--	[ʔa]ma
203	あれ	--	--	ʔa[ri
204	ここ	--	--	[ɸu]ma
205	これ	--	--	ɸu[ri
206	そこ	--	--	[ʔu]ma
207	それ	--	--	ʔu[ri
208	あなた	--	--	[na]:[mi
209	あなた(おまえ)	--	--	ʔu[ra

番号	単語	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
175	おととい	[gu]t[tʰi]:	--	ʔut[ti]:
178	ひとつ	[tʰi]tsu	--	[tʰi]tu
180	二つ	[tʰa]:[tsu	--	[tʰa]:[tu
181	三つ	[mi]:[tsu	--	[mi]:[tu
182	四つ	[ju]:[tsu	--	[ju]:[tu
183	五つ	[ʔi]tsu[tsu	--	[ʔi]tu[tu
184	六つ	[mu]:[tsu	--	[mu]:[tu
185	七つ	[na]na[tsu	--	[na]na[tu
186	八つ	[ja]:[tsu	--	[ja]:[tu
187	九つ	[ku]:[nu]tsu	--	[kʰu]:[nu]tu
179	十	tu[:	--	tʰu[:
188	一人	[tsʰu]i	--	[tsʰu]ri
189	二人	tʰa[i	--	tʰa[ri
190	三人	[mi]tʰa[i	--	[mi]tʰa[ri
191-1	四人	[ju]tʰa[i	--	[ja]ta[ri
191-2	五人	[i]tsu[tʰa]i	--	[ʔi]tu[tʰa]ri
191-3	六人	[mu]tʰa[i	--	[mu]ta[ri
191-4	七人	[na]na[tʰa]i	--	[na]na[tʰa]ri
191-5	八人	[ja]tʰa[i	--	[ja]ta[ri
191-6	九人	[ku]nu[tʰa]i	--	[kʰu]n[tʰa]ri
191-7	十人	--	--	[tʰu]ta[ri
192	一	[tʰi]:	--	[çi]:
193	二	ta[:	--	[φu]:
194	三	[mi]:	--	[mi]:
195	四	[ju]:	--	[jo]:
196	五	[i]:	--	NR
197	六	mu[:	--	--
198	七	[na]na	--	--
199	八	ja[:	--	--
200	九	[ku]:	--	--
201	欠			
202	あそこ	--	--	[ʔa]ma
203	あれ	--	--	ʔa[ri
204	ここ	--	--	[hu]ma
205	これ	--	--	ʔu[ri
206	そこ	--	--	[ʔu]ma
207	それ	--	--	ʔu[ri
208	あなた	--	--	[na]:[mi (目上)
209	あなた(おまえ)	--	--	[da (目下)

番号	単語	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
175	おととい	wut[tʰi]:	ʔut[tʰi]:	--
178	ひとつ	[tʰi]tu	[tʰi]tu	[tʰi]ʑu
180	二つ	[tʰa]:[tu	[tʰa]:[tʰu	[tʰa]:[ʑu
181	三つ	[mi]:[tu	[mi]:[tʰu	[mi]:[ʑu
182	四つ	[ju]:[tu	[ju]:[tʰu	[ju]:[ʑu
183	五つ	[ʔi]:tu[tu	[ʔi]tu[tʰu	[ʔi]ʑu[ʑu
184	六つ	[mu]:[tu	[mu]:[tʰu	[mu]:[ʑu
185	七つ	[na]na[tu	[na]na[tʰu	[na]na[ʑu
186	八つ	[ja]:[tu	[ja]:[tʰu	[ja]:[ʑu
187	九つ	[kʰɔ]:[nu]tu	[kʰu]:[nu]tʰu	[ku]:[nu]ʑu
179	十	tʰu[:	tʰu[:	tʰu[:
188	一人	[ʑʰu]ri(5人と同形)	[ʑu]i	[ʑu]ri
189	二人	tʰa[ri	tʰa[i	tʰa[ri
190	三人	[mi]ʑa[ri	[mi]ʑa[i	[mi]ʑa[ri
191-1	四人	[ju]ta[ri	[ju]tʰa[i	[ju]ta[ri
191-2	五人	[ʑʰu]ri(1人と同形)	[ʔi]tu[tʰa]i	go[nʰi]N
191-3	六人	--	[mu]tʰa[i	--
191-4	七人	--	[na]na[tʰa]i	--
191-5	八人	--	[ja]ta[i	--
191-6	九人	--	[ku]nu[tʰa]i	--
191-7	十人	--	[tʰu]tʰa[i	--
192	一	--	--	--
193	二	--	--	--
194	三	--	--	--
195	四	--	--	--
196	五	--	--	--
197	六	--	--	--
198	七	--	--	--
199	八	--	--	--
200	九	--	--	--
201	欠			
202	あそこ	--	[ʔa]ma	--
203	あれ	--	[ʔa]ri	--
204	ここ	--	[ʔu]ma	--
205	これ	--	ʔu[ri	--
206	そこ	--	[ʔu]ma	--
207	それ	--	ʔu[ri	--
208	あなた	--	[na]:[mi	[na]:[mi
209	あなた(おまえ)	--	[da	[da

番号	単語	①小野津	②志戸桶	③塩道
210	あなたたち	--	--	[na:]t̥sa
211	あなたたち(おまえた ち)	--	--	[ʔu]raN[na]:
212	私	--	--	[wa]N
213	私たち(exclusive)	--	--	[wa]N[na]:
214	私たち(inclusive)	--	--	[wa:]t̥sa
215	いくつ	--	--	[ʔi]k²u[t²u
216	いくら	--	--	[sa]N[sa
217	いつ	--	--	ʔi[tu
218	だれ	--	--	tʰaru
219	どう	--	--	ɕae[ɕi
220	どこ	--	--	ndza
221	どれ	--	--	[di]ru
222	なぜ	--	--	[nu·]ŋa
223	なに	--	--	[nu]:
224	明かり	--	--	ʔa:ga[tu]i (明るくなっている)
225	稲光	--	--	[φu]di[:
226	雷	--	--	[ha]Nm¹a:[i
227	潮	--	--	ʔu[ɕu]ga
228	地震	--	--	dzi[ɕiN(新)
229	空	--	--	[t²iN]to[:
230	太陽	--	--	[tʰi]da
231	竜巻	--	--	ʔi:[nu:(古)]/[ta]tuma[ki(新)
232	土	--	--	mi[t̥sa
233	虹1	--	--	n¹i[dzi
234	火	--	--	ʔu[ma]tu
235	煙	--	--	[çi]bu[ɕi
236	浅瀬(海の)	--	--	[ʔa]sa[ɕi
237	畦道(田の)	--	--	[ʔa]N]da[ni·
238	井戸、泉	--	--	[han]ba[ta]: (井戸) / ʔidzu[mi (泉)
239	丘	--	--	mu[i / ʃja[ma
240	崖	--	--	[ga]ki(新)

番号	単語	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
210	あなたたち	--	--	[na:t̤sa:]
211	あなたたち(おまえた ち)	--	--	[da]N[na:]
212	私	--	--	[wa]N
213	私たち(exclusive)	--	--	[wa]N[na:]
214	私たち(inclusive)	--	--	wa[t̤sa:] / ʔinn'a(みんな)
215	いくつ	--	--	ʔi[k²u]tu
216	いくら	--	--	[saN]sa
217	いつ	--	--	i[t²u
218	だれ	--	--	tʰa[ru
219	どう	--	--	[sa:]he[N
220	どこ	--	--	[d̤za:]
221	どれ	--	--	[di]ru
222	なぜ	--	--	[nu:]
223	なに	--	--	nu:
224	明かり	--	--	[ʔa]:[ri
225	稲光	--	φudi (= 筆)	[çi]du[ri
226	雷	--	[kʰa]mina[i	[hanm'a]:[ri
227	潮	--	su[:	ʔu[su
228	地震	--	--	NR
229	空	--	[tʰi]nt²o[:	[t²iN]to[:
230	太陽	--	[tʰi]da	[tʰi]da
231	竜巻	--	[ʔi]:[nu]N	NR
232	土	--	mi[t̤sa / du[ru (泥) / k²u[t̤sa (青い土の塊)	t²u[t̤si (表面の土) / mi[t̤sa / k²u[t̤sa (粘土質の土)
233	虹1	--	--	nʰi[d̤zi
234	火	--	ʔu[ma]tu	ʔu[ma]tu
235	煙	--	çi[bu]çi	[çi]bu[çi
236	浅瀬(海の)	--	[ʔa]sa[çi	[asasa]:[ri]:
237	畦道(田の)	--	ʔa[bu]çi	ʔa[bu]çi (田と田の境界線)
238	井戸、泉	--	ha[: (井戸) / [φu]N[d̤zi (泉)	ha[: (井戸)
239	丘	--	mu[i	mu[ri
240	崖	--	[d̤zi]çi[ba]ra (断崖) / [φanta (崖の先端)	[ha]N[ta



番号	単語	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
210	あなたたち	--	na[:]tɕa	na[:]tɕa
211	あなたたち(おまえた ち)	--	[da]N[na]:	[da:tɕa
212	私	--	[wa]N	[wa]N
213	私たち(exclusive)	--	[wa]N[na]:	wat[ta]:
214	私たち(inclusive)	--	wa[:]tɕa	wa[:]tɕa
215	いくつ	--	[saN]sa / ([ʔi]k <sup>2</sup> u[t <sup>2</sup> u方言形 ではない)	[ʔikutɕu / [saN]sa
216	いくら	--	[saN]sa	--
217	いつ	--	ʔi[tu	ʔi[tɕu
218	だれ	--	ta[ru	t <sup>h</sup> a[ru
219	どう	--	sa[ɕci	--
220	どこ	--	[dza]:	[dza:
221	どれ	--	[di]ru	[di]ru / [diN]ŋa (-か <sup>b</sup> )
222	なぜ	--	[nu]ŋa	--
223	なに	--	[nu]:	--
224	明かり	--	[ʔa]ka[i	--
225	稲光	--	[ʔina]bi[k <sup>2</sup> a]i	[çi]du[ri
226	雷	--	[k <sup>h</sup> ami]na[i	--
227	潮	--	ʔu[su	--
228	地震	--	NR	--
229	空	--	[t <sup>h</sup> iN]to[:	--
230	太陽	--	[t <sup>h</sup> i]da	--
231	竜巻	--	no[:	--
232	土	--	mi[tɕa	--
233	虹1	--	[tɕiritɕi]ri[go]:	[n <sup>i</sup> ]dɕi
234	火	--	--	--
235	煙	--	--	--
236	浅瀬(海の)	--	--	--
237	畦道(田の)	--	ʔa[bu]ɕi(畑と畑の境界線の 角の所, 盛り上がっている 所も言う)	--
238	井戸、泉	--	[ʔi]dɕi[mi泉 / ha[:]井戸	--
239	丘	--	mu[i	--
240	崖	--	--	--

番号	単語	①小野津	②志戸桶	③塩道
241	坂	--	--	[p <sup>h</sup> iɾa / p <sup>h</sup> i[ɾa
242	サンゴ礁	--	--	ga[ki
243	草原	--	--	ssat[ta]n <sup>i</sup>
244	頂上	--	--	wi[: / βi[:
245	洞窟	--	--	ga[ma
246	庭	--	--	[ja]N[me]:(家の前の空間) / [çi:]nuɕ[ɕa]:(庭のうち木な どが植わっている所)
247	海の遠浅の場所、内	--	--	[ʔa]sa[sa
248	野原、原(畑)	--	--	[çi]rop[pa(新?)
249	柱	--	--	[p <sup>h</sup> a]ja / p <sup>h</sup> a[ɕi]ra(新?)
250	海の水溜り、池	--	--	[φu]mu[i
251	港	--	--	NR
252	陸地	--	--	[ri]ku
253	蛙2	--	--	bi·[tɕa]:
254	雀	--	--	[iN]du[ŋa]:
255	猫	--	--	ma[ja]:
256	鼠3	--	--	ni[du]mi
257	鼠4	--	--	NR
258	豚	--	--	bu[ta
259	ミミズ	--	--	[bi]bi[da]:
260	ヤギ	--	--	ja[gi]:
261	いるか	--	--	p <sup>h</sup> i[tu
262	雲丹(うに)	--	--	[ga]su[ta]:
263	貝、巻貝	--	--	mi[n'a] / [k <sup>h</sup> a]jami[n'a]:
264	亀	--	--	k <sup>h</sup> a[mi
265	鮫	--	--	sa[ba
266	飛魚	--	--	[tu]bi[ju]:
267	なまこ1	--	--	[na]ma[ku
268	ヒトデ	--	--	NR
269	やどかり	--	--	[ʔa]ma[ma]:
270	蟻	--	--	[ʔa]:[n <sup>i</sup> ]:
271	蚊1	--	--	ga[dʒa]mi
272	蚊2	--	--	[ga]dʒa[ma]:

番号	単語	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
241	坂	--	phi[ra]/sa[ka]	sa[ka] (普通の坂) / hi[ra] (山の上の方の坂)
242	サンゴ礁	--	[siraφe:]ʔi[ɕi]: (サンゴ石) / ʔu[ru]ʔi[ɕi] (枝サンゴの死骸)	--
243	草原	--	--	[ʔara]dʒi[:]
244	頂上	--	tʰu[dʒi] (屋根の) / φa[na]: (てっぺん)	--
245	洞窟	--	go[:]/ʔa[na] / ga[ma] (落ちるような所)	[ʔiɕiN]ga[ma]: (石の洞窟?)
246	庭	--	[ja]N[me]:	[ja]N[me]:
247	海の遠浅の場所、内	--	su[ni] (漁場ポイント)	--
248	野原、原(畑)	--	φa[te]: (畑) / φa[ru] (野原)	ha[ru] (畑)
249	柱	--	[φa]ja	ha[ɕi]ra
250	海の水溜り、池	--	hu[mu]i	hu[mu]ri
251	港	--	[mi]na[tu] / [tʰu]ma[i] (小さ)	[tʰu]ma[ri] / mi[na]tu
252	陸地	--	--	mu[ta]
253	蛙2	--	[bi]:[tɕa]:	--
254	雀	--	[ji]Ndu[ŋʷa]:	--
255	猫	--	ma[ja]:	--
256	鼠3	--	mi[du]mi	--
257	鼠4	--	--	--
258	豚	--	bu[tʰa] ([go]:[go]:と鳴く)	--
259	ミミズ	--	[mi]mi[da]:	--
260	ヤギ	--	--	--
261	いるか	--	[phi]tʰu	--
262	雲丹(うに)	--	[ju]i / [ga]su[tʰa]:	--
263	貝、巻貝	--	ka[ja]: (貝) / [bu]:[tu]: (巻 貝)	--
264	亀	--	ha[mi]	--
265	鮫	--	sa[ba]	--
266	飛魚	--	[tʰu]bi[ju] / ʔi[ju] (魚)	--
267	なまこ 1	--	tʰa[ja]:	--
268	ヒトデ	--	[ga]rat[to]:	--
269	やどかり	--	[ʔa]ma[ma]:	--
270	蟻	--	[ʔa]:[i]:	--
271	蚊 1	--	ga[za]mi	--
272	蚊 2	--	--	--

番号	単語	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
241	坂	--	hi[ra(山の上の頂上)]	--
242	サンゴ礁	--	--	--
243	草原	--	--	--
244	頂上	--	--	--
245	洞窟	--	ga[ma]	--
246	庭	--	--	--
247	海の遠浅の場所、内	--	--	--
248	野原、原(畑)	--	--	--
249	柱	--	--	--
250	海の水溜り、池	--	--	--
251	港	--	--	--
252	陸地	--	--	--
253	蛙2	--	--	--
254	雀	--	--	--
255	猫	--	--	--
256	鼠3	--	--	--
257	鼠4	--	--	[ni]zu[ma]:
258	豚	--	--	bu[ta]
259	ミミズ	--	--	--
260	ヤギ	--	--	ja[dzi]:
261	いるか	--	--	--
262	雲丹(うに)	--	--	--
263	貝、巻貝	--	--	--
264	亀	--	--	--
265	鮫	--	--	--
266	飛魚	--	--	--
267	なまこ 1	--	--	--
268	ヒトデ	--	--	--
269	やどかり	--	--	--
270	蟻	--	--	--
271	蚊 1	--	--	--
272	蚊 2	--	--	--

番号	単語	①小野津	②志戸桶	③塩道
273	蚕	--	--	k <sup>h</sup> a[i]go
274	かたつむり	--	--	deNden[mu]ei(新?)
275	かまきり 1	--	--	[ʔiɕ]ɕa[tu]:
276	蝉	--	--	[ʔa]sa[sa]:
277	蝶	--	--	[p <sup>h</sup> a]p <sup>h</sup> i[ra]:
278	蜻蛉1	--	--	[ʔe]:[dza]:
279	ぼった	--	--	[ga]:[ta]:
280	ムカデ	--	--	[mu]kka[di
281	鳩	--	--	p <sup>h</sup> a[t <sup>u</sup> ]:
282	鱗(うろこ)	ʔik[ki	[ʔi]k[ki	it[ʔei(話者A, B) / [haɕ]ɕa[ŋi]:(話者B)
283	尾	--	--	du[:
284	卵	--	--	ta[ma]gu
285	卵	--	--	NR
286	動物(総称)	--	--	[do]:[bu]tu
287	とさか、馬のたてが	--	--	[ta]ti[ga]mi
288	きくらげ	--	--	[miN]mo:[ja]:
289	きのこ	--	--	NR / ɕi[mi]dʒi
290	とうがらし	--	--	p <sup>h</sup> u[ɕu / φu]ɕu
291	にんにく	--	--	p <sup>h</sup> i[ru
292	みかん	--	[k <sup>2</sup> u]ni[φa]:	[k <sup>2</sup> u]ni[pφa]:
293	稲	--	--	ʔi[n <sup>i</sup>
294	芋	--	--	[pφa]N[su]:
295	萱(かや)	--	--	ga[ja
296	苦瓜	--	--	[n <sup>i</sup> ]g <sup>h</sup> a[u]i
297	胡麻	--	--	gu[ma
298	砂糖きび	--	--	wu[ŋi
299	糸瓜(へちま)	--	--	[na]para[ja]:
300	大根 1	--	--	[de]:ku[n <sup>i</sup> ]:
301	冬瓜(とうがん)	--	--	[t <sup>h</sup> u]:[ga]:
302	豆 1 小豆	--	--	k <sup>2</sup> u[da]:
303	豆 4 南京豆、ピーナツ	--	--	[dʒi]ma[mi] / [rak]ka[ɕo]: (新)
304	南瓜 1	--	--	top[p <sup>h</sup> o]:
305	韭(葱の意味も)	--	--	bi[ra] / [ɕiN]mu[tu(葱)
306	薄(すすき)	--	--	[du]ei[ʔɕa]:
307	蓬(よもぎ)	--	--	[φu]tu
308	苺	--	--	ʔi[ʔei]go
309	薺・麴	--	--	[ho:]dʒi
310	あおさ	--	--	[ʔa]:[sa]:

番号	単語	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
273	蚕	--	[mu]su[ŋ <sup>w</sup> a]: (死語)	--
274	かたつむり	--	--	--
275	かまきり1	--	[ʔi]sa:[t <sup>2</sup> u]:	--
276	蝉	--	--	--
277	蝶	--	--	--
278	蜻蛉1	--	--	--
279	ばった	--	--	--
280	ムカデ	--	--	--
281	鳩	--	--	--
282	鱗(うろこ)	--	ʔit[tsi]/→#28	ʔit[tsi]
283	尾	--	--	--
284	卵	--	--	--
285	卵	--	--	--
286	動物(総称)	--	--	--
287	とさか、馬のたてが	--	--	--
288	きくらげ	--	--	--
289	きのこ	--	--	--
290	とうがらし	--	--	--
291	にんにく	--	--	--
292	みかん	[ku]ni[pa]:	--	[k <sup>2</sup> u]ni[ha]:
293	稲	--	--	--
294	芋	--	--	--
295	萱(かや)	--	--	--
296	苦瓜	--	--	--
297	胡麻	--	--	--
298	砂糖きび	--	--	--
299	糸瓜(へちま)	--	--	--
300	大根1	--	--	--
301	冬瓜(とうがん)	--	--	--
302	豆1 小豆	--	--	--
303	豆4 南京豆、ピーナツ	--	--	--
304	南瓜1	--	--	--
305	韭(葱の意味も)	--	--	--
306	薄(すすき)	--	--	--
307	蓬(よもぎ)	--	--	--
308	苺	--	--	--
309	薺・麴	--	--	--
310	あおさ	--	--	--

番号	単語	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
273	蚕	--	--	--
274	かたつむり	--	--	NR
275	かまきり 1	--	--	--
276	蝉	--	--	--
277	蝶	--	--	--
278	蜻蛉1	--	--	--
279	ばった	--	--	--
280	ムカデ	--	--	--
281	鳩	--	--	--
282	鱗(うろこ)	it[tsi	--	?it[tsi
283	尾	--	--	--
284	卵	--	--	--
285	卵	--	--	--
286	動物(総称)	--	--	--
287	とさか、馬のたてが	--	--	--
288	きくらげ	--	--	--
289	きのこ	--	--	--
290	とうがらし	--	--	--
291	にんにく	--	--	--
292	みかん	--	--	--
293	稲	--	--	--
294	芋	--	--	--
295	萱(かや)	--	--	--
296	苦瓜	--	--	--
297	胡麻	--	--	--
298	砂糖きび	--	--	--
299	糸瓜(へちま)	--	--	--
300	大根 1	--	--	--
301	冬瓜(とうがん)	--	--	--
302	豆 1 小豆	--	--	--
303	豆 4 南京豆、ピーナツ	--	--	--
304	南瓜 1	--	--	--
305	韭(葱の意味も)	--	--	--
306	薄(すすき)	--	--	--
307	蓬(よもぎ)	--	--	--
308	苺	--	--	--
309	薺・麴	--	--	--
310	あおさ	--	--	--

番号	単語	①小野津	②志戸桶	③塩道
311	つのみた	--	--	NR
312	モズク	--	--	NR
313	ばんしろう	--	--	[baN]ɕi[ro]:
314	あだん	--	--	?a[da]n'i
315	がじゅまる	--	--	[ga]dʒi[ma]ru
316	くば(びろう樹)	--	--	NR/ɕu[ru(シュロ)]
317	ソテツ	--	--	[sut]taN[ba]:
318	フクギ	--	--	[to: φu[ku]gi
319	クロツグ(繊維で綱や網を作る)	--	--	NR/[ʔa]dan[go(あぢみ)]
320	莖	--	--	gu[tɕi
321	こずえ、砂糖黍の先端	--	--	sa[tɕi(先)/su[ra(砂糖黍の先端)(古)]
322	棘	--	--	ni[ŋi]:
323	実	--	--	mi[:/na[i]:



番号	単語	④坂嶺	⑤阿伝	⑥上嘉鉄
311	つのみた	--	--	--
312	モズク	--	--	--
313	ばんしろう	--	--	--
314	あだん	--	--	--
315	がじゅまる	--	--	--
316	くば(びろう樹)	--	--	--
317	ソテツ	--	--	--
318	フクギ	--	--	--
319	クロツグ(繊維で綱や網を作る)	--	--	--
320	茎	--	--	--
321	こずえ、砂糖黍の先端	--	--	--
322	棘	--	--	--
323	実	--	--	--

番号	単語	⑦湾	⑧中里	⑨荒木
311	つのまた	--	--	--
312	モズク	--	--	--
313	ばんしろう	--	--	--
314	あだん	--	--	--
315	がじゅまる	--	--	--
316	くば(びろう樹)	--	--	--
317	ソテツ	--	--	--
318	フクギ	--	--	--
319	クロツグ(繊維で綱や網を作る)	--	--	--
320	茎	--	--	gu[tsi
321	こずえ、砂糖黍の先端	--	--	--
322	棘	--	--	--
323	実	--	--	--



## アクセントデータ

以下には、喜界島諸方言のアクセントデータを掲載する。基礎語彙1データ・基礎語彙2データでは、音調の上がり目を〔で、音調の下がり目を〕で表記したが、ここでは見やすさを考えて、音調をあらわす記号として以下のものを使用する。

高く発音される拍●：                      高く発音される助詞の拍：▲

低く発音される拍：○                      低く発音される助詞の拍：△

中程度の高さで発音される拍：◎

助詞は、以下のような語形であられる。

「が」=ga または nu (アクセント上の振る舞いは同じ)

「から」=kara (2拍)

「まで」=gadi または madi (アクセント上の振る舞いは同じ)

「に」=kai または ni (kai は2拍, ni は1拍)

「も」=mu

共通語の欄の「。」は言い切り形を、「...」は接続形をあらわす。複数の型が回答された場合は、2つ(またはそれ以上)の型を/で区切って併記する。各地点の調査者は以下のとおり。

地区名	班	調査担当者
小野津	アクセントA	窪菌・儀利古・ペラール・平子・竹村
	アクセントB	松森・新田・姜・高山
志戸桶	アクセントA	窪菌・松森・儀利古・竹村・姜
	アクセントB	新田・上野・平子・高山
塩道	アクセントA	窪菌・儀利古・竹村・姜
	アクセントB	新田・上野・平子・高山
阿伝	アクセントA	窪菌・松森・儀利古・ペラール・竹村
	アクセントB	上野・新田・姜・高山
上嘉鉄	アクセントA	窪菌・儀利古・竹村・姜
	アクセントB	新田・木部・高山・平子
城久	アクセント	新田・重野
坂嶺	アクセントA	窪菌・三井・竹村・白田
	アクセントB	木部・高山・平子・佐藤
湾	アクセントA	窪菌・儀利古・竹村・姜
	アクセントB	木部・新田・平子・高山
中里	アクセントA	窪菌・儀利古・竹村・姜
	アクセントB	木部・高山・平子・新田
荒木	アクセントA	松森・儀利古・竹村
	アクセントB	木部・高山・當山・佐藤

分類	共通語	小野津A	小野津B	志戸桶A	志戸桶B	塩道A	塩道B
1-A	洞窟(gama)。	●○	●○	—	●○	○●	—
	洞窟が...	○●△	○●△	—	●●●	●○△	—
	洞窟から...	●○△△	●○△△	—	—	●○▲▲	—
	洞窟まで...	●○△△	●○△△	—	—	●○▲▲	—
	洞窟に...	○●△	●○△△	—	—	●○▲▲	—
	洞窟からも...	●○△△△/ ●○△△▲	●○△△△	—	—	●○▲▲▲/ ●○▲▲△	—
	洞窟までも...	●○△△△/ ●○△△▲	—	—	—	●○▲▲▲	—
	洞窟にも...	●○△△	—	—	—	●○△△△/ ●○▲▲▲	—
	洞窟に。	○●△	—	—	—	●○▲▲	—
	洞窟にも。	○●△△	—	—	—	●○▲▲▲	—
	洞窟(を)...	—	—	—	—	○●	—
1-B	山(jama)。	●●/ ○●	○●	—	○●	—	—
	山が...	○●△	●○△	—	●○△	—	—
	山から...	●○△▲	●○△▲	—	●●△▲	—	—
	山まで...	●○△▲	●○△▲	—	●●△▲	—	—
	山に...	●○△	●○△▲	—	●○△▲	—	—
	山からも...	●○△▲△	—	—	●●△▲▲	—	—
	山までも...	●○△▲△	—	—	●●△▲▲	—	—
	山にも...	●○△▲	●○△▲▲	—	●○△▲	—	—
	山に。	◎○▲	●○△▲	—	●○△	—	—
	山にも。	●○△▲	●○△▲▲	—	●○△▲	—	—
	山(を)...	—	○●	—	○●	—	—
1-C	海(?umi)。	●●/ ○●	○●	—	○●	●○	—
	海が...	●○△	●○△	—	●●△	●○▲/ ●●▲	—
	海から...	●○△▲	●○△▲	—	●●▲▲	●○△△/ ●○▲▲	—
	海まで...	●○△▲	●○△▲	—	●●▲▲	●○▲▲/ ●○△△	—
	海に...	●○▲/ ◎○▲	●○△▲	—	●●▲▲	●○▲	—
	海からも...	●○△▲△	—	—	●●▲▲▲	●○▲▲▲/ ●○△△△	—
	海までも...	●○△▲△	—	—	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—
	海にも...	●○△▲	●○△▲▲	—	●●▲▲	●○△△	—
	海に。	◎○▲	●○△▲	—	●●△△	●○△▲	—
	海にも。	●○△▲	—	—	●●△△	—	—
	海(を)...	—	○●	—	●●	—	—
	舟(huni,φuni)。	○●/ ◎●	○●	—	○●	—	—
	舟が...	●○▲	●○▲	—	●○▲	—	—
	舟から...	●○△▲	●○△▲	—	●●△▲	—	—
舟まで...	●○△▲/ ◎○△▲	●○△▲	—	●●△▲	—	—	

助詞 「が」 : ɲa,nu、「から」 : kara、「まで」 : gadi,maɲi、「に」 : kai,ni、「も」 : mu

分類	共通語	坂嶺A	坂嶺B	阿伝A	阿伝B	上嘉鉄A	上嘉鉄B(1)	上嘉鉄B(2)
1-A	洞窟(gama)。	—	—	○●	○●	—	—	○●
	洞窟が...	—	—	●○▲	●○▲	—	—	●○▲
	洞窟から...	—	—	●○▲△	●○▲▲	—	—	●○●▲
	洞窟まで...	—	—	—	●○▲▲	—	—	●○●▲
	洞窟に...	—	—	—	●○▲▲	—	—	●○●▲
	洞窟からも...	—	—	—	●○▲▲▲	—	—	●○●▲▲
	洞窟までも...	—	—	—	●○▲▲▲	—	—	●○●▲▲
	洞窟にも...	—	—	—	●○▲▲▲	—	—	●○●▲▲
	洞窟に。	—	—	—	●○▲△	—	—	●○▲△
	洞窟にも。	—	—	—	●○▲▲△	—	—	●○▲▲△
	洞窟(を)...	—	—	—	○●	—	—	○●
1-B	山(jama)。	—	○●	○●	○●	—	—	○●
	山が...	—	●○▲	●○▲	●○▲	—	—	●○▲
	山から...	—	●●▲▲	●○▲△	●○▲▲	—	—	●○●▲
	山まで...	—	●●▲▲	—	●○▲▲	—	—	●○●▲
	山に...	—	●●▲▲	—	●○▲▲	—	—	●○●▲
	山からも...	—	●●▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	—	●○●▲▲
	山までも...	—	●●▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	—	●○●▲▲
	山にも...	—	●●▲▲	—	●○▲▲▲	—	—	●○●▲▲
	山に。	—	●○▲	—	●○▲△	—	—	●○▲△
	山にも。	—	●●▲▲	—	●○▲▲△	—	—	●○▲▲△
	山(を)...	—	○●	—	○●	—	—	○●
1-C	海(?umi)。	—	●○	●○	●○	—	—	●○
	海が...	—	●●▲	●○△/ ●●▲	●●▲	—	—	●●▲
	海から...	—	●●▲▲	●○▲△	●●▲▲	—	—	●●▲▲
	海まで...	—	●●▲▲	—	●●▲▲	—	—	●●▲▲
	海に...	—	●●▲	—	●●▲▲	—	—	●●▲▲
	海からも...	—	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲	—	—	●●▲▲▲
	海までも...	—	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲	—	—	●●▲▲▲
	海にも...	—	●●▲▲	—	●●▲▲▲	—	—	●●▲▲▲
	海に。	—	●●▲	—	●○▲△	—	—	●●▲△
	海にも。	—	●●▲▲▲	—	●○▲▲△	—	—	●●▲▲△
	海(を)...	—	●●	—	●●	—	—	●●
	舟(huni,φuni)。	—	—	●○	●○	—	—	●○
	舟が...	—	—	●○△/ ●●▲	●●▲	—	—	●●▲
	舟から...	—	—	●○▲△	●●▲▲	—	—	●●▲▲
舟まで...	—	—	—	●●▲▲	—	—	●●▲▲	

分類	共通語	湾A	湾B	中里A	中里B	荒木A	荒木B
1-A	洞窟(gama)。	—	—	○●	○●	—	○●
	洞窟が...	—	—	●○▲	●●△	—	●○▲
	洞窟から...	—	—	●●▲▲	●●▲▲	—	●○▲▲
	洞窟まで...	—	—	●●▲▲	●●▲▲	—	●○▲▲
	洞窟に...	—	—	●○▲	●●△	—	●○▲
	洞窟からも...	—	—	●●▲▲▲	●●▲▲△	—	●○▲▲▲
	洞窟までも...	—	—	●●▲▲▲	●●▲▲△	—	●○▲▲▲
	洞窟にも...	—	—	●●▲▲	●●▲▲	—	●●▲▲
	洞窟に。	—	—	●○▲	●○▲	—	●○▲
	洞窟にも。	—	—	●●▲▲	●●▲▲	—	●●▲▲
	洞窟(を)...	—	—	—	●○	—	○●
1-B	山(jama)。	—	○●	○●	○●	—	○●
	山が...	—	—	●○▲/ ●●△	●●△	—	●○▲
	山から...	—	—	●●▲▲	●●▲▲	—	●○▲▲
	山まで...	—	—	●●▲▲	●●▲▲	—	●○▲▲
	山に...	—	—	●○▲	●●△	—	●○▲
	山からも...	—	—	●●▲▲▲	●●▲▲△	—	●○▲▲▲
	山までも...	—	—	●●▲▲▲	●●▲▲△	—	●○▲▲▲
	山にも...	—	—	●●▲▲	●●▲▲	—	●●▲▲
	山に。	—	—	●○▲	●○▲	—	●○▲
	山にも。	—	—	●●▲▲	●●▲▲	—	●●▲▲
	山(を)...	—	—	—	●○	—	○●
1-C	海(?umi)。	—	●○	●○	●○	—	●○
	海が...	—	—	●●▲/ ●●△	●●▲	—	●●▲
	海から...	—	—	●●▲▲/ ●●▲▲	●●▲▲	—	●●▲▲
	海まで...	—	—	●●▲▲/ ●●▲▲	●●▲▲	—	●●▲▲
	海に...	—	—	●●▲/ ●●△	●●▲	—	●●▲
	海からも...	—	—	●●▲▲▲/ ●●▲▲▲	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲
	海までも...	—	—	●●▲▲▲/ ●●▲▲▲	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲
	海にも...	—	—	●●▲▲/ ●●▲▲	●●▲▲	—	●●▲▲
	海に。	—	—	●●▲	●●▲	—	●●▲
	海にも。	—	—	●●▲▲	●●▲▲	—	●●▲▲
	海(を)...	—	—	—	●●	—	●●
	舟(huni,φuni)。	—	●○	●○	●○	—	●○
	舟が...	—	—	●●▲/ ●●△	●●▲	—	●●▲
	舟から...	—	—	●●▲▲/ ●●▲▲	●●▲▲	—	●●▲▲
舟まで...	—	—	●●▲▲	●●▲▲	—	●●▲▲	

助詞 「が」 : ɲa,nu、「から」 : kara、「まで」 : gadi,maɲi、「に」 : kai,ni、「も」 : mu

分類	共通語	小野津A	小野津B	志戸桶A	志戸桶B	塩道A	塩道B
	舟に...	●○▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	—
	舟からも...	●○▲▲▲	—	—	●●▲▲▲	—	—
	舟までも...	●○▲▲▲	—	—	●●▲▲▲	—	—
	舟にも...	●○▲▲/ ●○▲▲	—	—	●○▲▲	—	—
	舟に。	◎○▲	●○▲▲	—	●○▲	—	—
	舟にも。	●○▲▲	●○▲▲▲	—	●○▲▲	—	—
	舟(を)...	—	○●	—	○●	—	—
2-A	港(minatu,tumai)。	○○○	○○○	—	●○○	—	—
	港が...	◎●○▲/ ○●○▲▲/ ●●○▲	○●○▲	—	●○○▲	—	—
	港から...	○●○▲▲	○●○▲▲	—	●○○▲▲	—	—
	港まで...	○●○▲▲	○●○▲▲/ ○●○▲◎	—	●○○▲▲	—	—
	港に...	○●○▲	○●○▲▲	—	●○○▲▲	—	—
	港からも...	○●○▲▲▲/ ○●○▲▲▲	○●○▲▲▲	—	●○○▲▲▲	—	—
	港までも...	○●○▲▲▲/ ○●○▲▲▲	○●○▲▲▲	—	●○○▲▲▲	—	—
	港にも...	○●○▲▲	—	—	●○○▲▲	—	—
	港に。	○●○▲	—	—	●○○▲	—	—
	港にも。	○●○▲▲	—	—	●○○▲▲	—	—
	港(を)...	○○○	—	—	●○○	—	—
2-B	俵(ta:ra)。	●●○/ ◎○○	○○●	—	○○○	—	—
	俵が...	◎●○▲/ ○●○▲	●●○▲	—	●○○▲	—	—
	俵から...	○●○▲▲/ ◎●○▲▲	●●○▲▲	—	●○○▲▲	—	—
	俵まで...	○●○▲▲	—	—	●○○▲▲	—	—
	俵に...	○●○▲	●○○▲	—	●○○▲▲	—	—
	俵からも...	○●○▲▲▲	●●○▲▲▲	—	●○○▲▲▲	—	—
	俵までも...	○●○▲▲▲/ ○●○▲▲▲	—	—	●○○▲▲▲	—	—
	俵にも...	○●○▲▲	●●○▲▲	—	●○○▲▲	—	—
	俵に。	○●○▲	—	—	●○○▲	—	—
	俵にも。	○●○▲▲	—	—	●○○▲▲	—	—
	俵(を)...	○○○	○○●	—	○○●	—	—
2-C	畑(pate:.hate:)。	◎◎●/ ◎○○	●○○	—	○○○	—	—
	畑が...	●○○▲/ ●○○◎	●○○▲	—	●○○▲	—	—
	畑から...	●○○▲▲	●○○▲▲	—	●○○▲▲	—	—
	畑まで...	●○○▲▲	●○○▲▲	—	●○○▲▲	—	—
	畑に...	●○○▲	●○○▲▲	—	●○○▲▲	—	—
	畑からも...	●○○▲▲▲	●○○▲▲▲	—	●○○▲▲▲	—	—
	畑までも...	●○○▲▲▲	●○○▲▲▲	—	●○○▲▲▲	—	—
畑にも...	●○○▲▲	●○○▲▲▲	—	●○○▲▲	—	—	



分類	共通語	坂嶺A	坂嶺B	阿伝A	阿伝B	上嘉鉄A	上嘉鉄B(1)	上嘉鉄B(2)
	舟に...	-	-	-	●●▲▲	-	-	●●▲▲
	舟からも...	-	-	-	●●▲▲▲	-	-	●●▲▲▲
	舟までも...	-	-	-	●●▲▲▲	-	-	●●▲▲▲
	舟にも...	-	-	-	●●▲▲▲	-	-	●●▲▲▲
	舟に。	-	-	-	●○▲△	-	-	●●▲△
	舟にも。	-	-	-	●○▲▲△	-	-	●●▲▲△
	舟(を)...	-	-	-	●●	-	-	●●
2-A	港(minatu,tumai)。	-	●●●	-	●●●	-	-	●●●
	港が...	-	●●●▲	-	●●●▲	-	-	●●●▲
	港から...	-	●●●▲▲	-	●●●▲▲	-	-	●●●▲▲
	港まで...	-	●●●▲▲	-	●●●▲▲	-	-	●●●▲▲
	港に...	-	●●●▲	-	●●●▲	-	-	●●●▲
	港からも...	-	●●●▲▲▲	-	●●●▲▲▲	-	-	●●●▲▲▲
	港までも...	-	●●●▲▲▲	-	●●●▲▲▲	-	-	●●●▲▲▲
	港にも...	-	●●●▲▲	-	●●●▲▲▲	-	-	●●●▲▲▲
	港に。	-	●●●▲	-	●●●▲△	-	-	●●●▲△
	港にも。	-	●●●▲▲	-	●●●▲▲△	-	-	●●●▲▲△
	港(を)...	-	●●●	-	●●●	-	-	●●●
2-B	俵(ta:ra)。	-	-	-	●●●	-	-	○●●
	俵が...	-	-	-	●●●▲	-	-	○●●▲
	俵から...	-	-	-	●●●▲▲	-	-	○●●▲▲
	俵まで...	-	-	-	●●●▲▲	-	-	○●●▲▲
	俵に...	-	-	-	●●●▲▲	-	-	○●●▲▲
	俵からも...	-	-	-	●●●▲▲▲	-	-	○●●▲▲▲
	俵までも...	-	-	-	●●●▲▲▲	-	-	○●●▲▲▲
	俵にも...	-	-	-	●●●▲▲△	-	-	○●●▲▲▲
	俵に。	-	-	-	●●●▲▲△	-	-	○●●▲▲△
	俵にも。	-	-	-	●●●▲▲△	-	-	○●●▲▲△
	俵(を)...	-	-	-	●●●	-	-	○●●
2-C	畑(pate:hate:)。	-	○●●	-	○●●	-	-	○●●
	畑が...	-	○○○▲	-	○●●▲	-	-	○●●▲
	畑から...	-	○○○▲▲	-	○●●▲▲	-	-	○●●▲▲
	畑まで...	-	○○○▲▲	-	○●●▲▲	-	-	○●●▲▲
	畑に...	-	○○○▲	-	○●●▲▲	-	-	○●●▲▲
	畑からも...	-	○○○▲▲▲	-	○●●▲▲▲	-	-	○●●▲▲▲
	畑までも...	-	○○○▲▲▲	-	○●●▲▲▲	-	-	○●●▲▲▲
	畑にも...	-	○○○▲▲	-	○●●▲▲▲	-	-	○●●▲▲▲

助詞 「が」 : ŋa,nu、「から」 : kara、「まで」 : gadi,medi、「に」 : kai,ni、「も」 : mu

分類	共通語	湾A	湾B	中里A	中里B	荒木A	荒木B
	舟に...	—	—	●●▲	●●▲	—	●●▲
	舟からも...	—	—	●●▲▲▲/ ●●▲▲▲	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲
	舟までも...	—	—	●●▲▲▲/ ●●▲▲▲	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲
	舟にも...	—	—	●●▲▲/ ●●▲▲	●●▲▲	—	●●▲▲
	舟に。	—	—	●●▲	●●▲	—	●●▲
	舟にも。	—	—	●●▲▲	●●▲▲	—	●●▲▲
	舟(を)...	—	—	—	●●	—	●●
2-A	港(minatu,tumai)。	—	○●○	—	●○●	—	●○●
	港が...	—	—	—	●●●▲	—	●●○▲
	港から...	—	—	—	●●●▲▲	—	●●○▲▲
	港まで...	—	—	—	●●●▲▲	—	●●○▲▲
	港に...	—	—	—	●●●▲	—	●●○▲
	港からも...	—	—	—	●●●▲▲▲	—	●●○▲▲▲
	港までも...	—	—	—	●●●▲▲▲	—	●●○▲▲▲
	港にも...	—	—	—	●●●▲▲	—	●●●▲▲
	港に。	—	—	—	●●○▲	—	●●○▲
	港にも。	—	—	—	●●●▲▲	—	●●●▲▲
	港(を)...	—	—	—	●●▲	—	●○●
2-B	俵(ta:ra)。	—	○●○	—	●●	—	●○●
	俵が...	—	—	—	●○●	—	●●○▲
	俵から...	—	—	—	●●●▲	—	●●○▲▲
	俵まで...	—	—	—	●●●▲▲	—	●●○▲▲
	俵に...	—	—	—	●●●▲▲	—	●●○▲
	俵からも...	—	—	—	●●●▲	—	●●○▲▲▲
	俵までも...	—	—	—	●●●▲▲▲	—	●●○▲▲▲
	俵にも...	—	—	—	●●●▲▲▲	—	●●●▲▲
	俵に。	—	—	—	●●●▲▲	—	●●○▲
	俵にも。	—	—	—	●●○▲	—	●●●▲▲
	俵(を)...	—	—	—	●●●▲▲	—	●○●
2-C	畑(pate:hate:)。	—	○●○	—	●●▲	—	○●○
	畑が...	—	—	—	○●○	—	●●●▲
	畑から...	—	—	—	●○●▲	—	●●●▲▲
	畑まで...	—	—	—	●○●▲▲	—	●●●▲▲
	畑に...	—	—	—	●○●▲	—	●●●▲
	畑からも...	—	—	—	●○●▲▲▲	—	●●●▲▲▲
	畑までも...	—	—	—	●○●▲▲▲	—	●●●▲▲▲
	畑にも...	—	—	—	●○●▲▲	—	●●●▲▲

分類	共通語	小野津A	小野津B	志戸桶A	志戸桶B	塩道A	塩道B
	畑に。	●○○▲	●○○▲▲	—	●○○▲	—	—
	畑にも。	●○○▲▲	●○○▲▲▲	—	●○○▲▲	—	—
	畑(を)...	◎○○●	●○○●	—	○○●●	—	—
3-A	空(tiNto: )。	●○○○	—	—	●○○○	—	—
	空が...	●○○○▲	—	—	●○○○▲	—	—
	空から...	●○○○▲▲	—	—	●○○○▲▲	—	—
	空まで...	●○○○▲▲/ ●○○○▲▲	—	—	●○○○▲▲	—	—
	空に...	●○○○▲	—	—	●○○○▲	—	—
	空からも...	●○○○▲▲▲	—	—	●○○○▲▲▲	—	—
	空までも...	●○○○▲▲▲	—	—	●○○○▲▲▲	—	—
	空にも...	●○○○▲▲	—	—	●○○○▲▲	—	—
	空に。	●○○○▲	—	—	●○○○▲	—	—
	空にも。	●○○○▲▲	—	—	●○○○▲▲	—	—
空(を)...	●○○○	—	—	●○○○	—	—	
3-B	台所(to:gura)。	—	—	—	—	—	—
	台所が...	—	—	—	—	—	—
	台所から...	—	—	—	—	—	—
	台所まで...	—	—	—	—	—	—
	台所に...	—	—	—	—	—	—
	台所からも...	—	—	—	—	—	—
	台所までも...	—	—	—	—	—	—
	台所にも...	—	—	—	—	—	—
	台所に。	—	—	—	—	—	—
	台所にも。	—	—	—	—	—	—
台所(を)...	—	—	—	—	—	—	
3-C	天井(tiNzo: )。	●○○●	—	—	●○○○	—	—
	天井が...	●○○○▲	—	—	●○○○▲	—	—
	天井から...	●○○○▲▲	—	—	●○○○▲▲	—	—
	天井まで...	●○○○▲▲	—	—	●○○○▲▲	—	—
	天井に...	●○○○▲	—	—	●○○○▲	—	—
	天井からも...	●○○○▲▲▲	—	—	●○○○▲▲▲	—	—
	天井までも...	●○○○▲▲▲	—	—	●○○○▲▲▲	—	—
	天井にも...	●○○○▲▲	—	—	●○○○▲▲	—	—
	天井に。	●○○○▲	—	—	●○○○▲	—	—
	天井にも。	●○○○▲▲	—	—	●○○○▲▲	—	—
天井(を)...	●○○●	—	—	●○○○	—	—	
洞窟(gama)。	—	—	—	—	—	—	

分類	共通語	坂嶺A	坂嶺B	阿伝A	阿伝B	上嘉鉄A	上嘉鉄B(1)	上嘉鉄B(2)
	畑に。	—	○○●△	—	○●●▲△	—	—	○●●▲△
	畑にも。	—	○○○▲△	—	○●●▲▲△	—	—	○●●▲▲△
	畑(を)...	—	○●●	—	○●●	—	—	○●●
3-A	空(tiNto: )。	—	—	—	●○○●	—	—	●●○○
	空が...	—	—	—	●○○○▲	—	—	●●●○▲
	空から...	—	—	—	●○○○▲▲	—	—	●●●○▲▲
	空まで...	—	—	—	●○○○▲▲	—	—	●●●○▲▲
	空に...	—	—	—	●○○○▲▲	—	—	●●●○▲▲
	空からも...	—	—	—	●○○○▲▲▲	—	—	●●●○▲▲▲
	空までも...	—	—	—	●○○○▲▲▲	—	—	●●●○▲▲▲
	空にも...	—	—	—	●○○○▲▲▲	—	—	●●●○▲▲▲
	空に。	—	—	—	●○○○▲▲	—	—	●●●○▲▲
	空にも。	—	—	—	●○○○▲▲△	—	—	●●●○▲▲△
空(を)...	—	—	—	●○○●	—	—	●●○○	
3-B	台所(to:gura)。	—	—	—	●○○●	—	—	—
	台所が...	—	—	—	●○○○▲	—	—	—
	台所から...	—	—	—	●○○○▲▲	—	—	—
	台所まで...	—	—	—	●○○○▲▲	—	—	—
	台所に...	—	—	—	●○○○▲▲	—	—	—
	台所からも...	—	—	—	●○○○▲▲▲	—	—	—
	台所までも...	—	—	—	●○○○▲▲▲	—	—	—
	台所にも...	—	—	—	●○○○▲▲▲	—	—	—
	台所に。	—	—	—	●○○○▲▲	—	—	—
	台所にも。	—	—	—	●○○○▲▲△	—	—	—
台所(を)...	—	—	—	●○○●	—	—	—	
3-C	天井(tiNzo: )。	—	—	—	●○○○	—	—	●○○○
	天井が...	—	—	—	●○○●▲	—	—	●○○●▲
	天井から...	—	—	—	●○○●▲▲	—	—	●○○●▲▲
	天井まで...	—	—	—	●○○●▲▲	—	—	●○○●▲▲
	天井に...	—	—	—	●○○●▲▲	—	—	●○○●▲▲
	天井からも...	—	—	—	●○○●▲▲▲	—	—	●○○●▲▲▲
	天井までも...	—	—	—	●○○●▲▲▲	—	—	●○○●▲▲▲
	天井にも...	—	—	—	●○○●▲▲▲	—	—	●○○●▲▲▲
	天井に。	—	—	—	●○○●▲▲	—	—	●○○●▲▲
	天井にも。	—	—	—	●○○●▲▲△	—	—	●○○●▲▲△
天井(を)...	—	—	—	●○○●	—	—	●○○●	
	洞窟(gama)。	—	—	—	○●	—	—	○●

分類	共通語	湾A	湾B	中里A	中里B	荒木A	荒木B
	畑に。	-	-	-	○●●△	-	●●●△
	畑にも。	-	-	-	○●●▲△	-	●●●▲△
	畑(を)...	-	-	-	●○○	-	●●●
3-A	空(tiNto: )。	-	-	-	●●○○	-	●●○○
	空が...	-	-	-	●●●●△	-	●●●○▲
	空から...	-	-	-	●●●●▲△	-	●●●○▲▲
	空まで...	-	-	-	●●●●▲△	-	●●●○▲▲
	空に...	-	-	-	●●●●△	-	●●●○▲
	空からも...	-	-	-	●●●●▲▲△	-	●●●○▲▲▲
	空までも...	-	-	-	●●●●▲▲△	-	●●●○▲▲▲
	空にも...	-	-	-	●●●●▲△	-	●●●●▲▲
	空に。	-	-	-	●●●○▲	-	●●●○▲
	空にも。	-	-	-	●●●●▲▲	-	●●●●▲▲
空(を)...	-	-	-	●●●○	-	●●○○	
3-B	台所(to:gura)。	-	-	-	●●○○	-	●●○○
	台所が...	-	-	-	●●●●△	-	●●●○▲
	台所から...	-	-	-	●●●●▲△	-	●●●○▲▲
	台所まで...	-	-	-	●●●●▲△	-	●●●○▲▲
	台所に...	-	-	-	●●●●△	-	●●●○▲
	台所からも...	-	-	-	●●●●▲▲△	-	●●●○▲▲▲
	台所までも...	-	-	-	●●●●▲▲△	-	●●●○▲▲▲
	台所にも...	-	-	-	●●●●▲△	-	●●●●▲▲
	台所に。	-	-	-	●●●○▲	-	●●●○▲
	台所にも。	-	-	-	●●●●▲▲	-	●●●●▲▲
台所(を)...	-	-	-	●●●○	-	●●○○	
3-C	天井(tiNzo: )。	-	●○○○	-	●○○○	-	●○○○
	天井が...	-	●○○●▲	-	●○○○▲	-	●○○●▲
	天井から...	-	●○○●▲▲	-	●○○○▲▲	-	●○○●▲▲
	天井まで...	-	●○○●▲▲	-	●○○○▲▲	-	●○○●▲▲
	天井に...	-	●○○●▲	-	●○○○▲	-	●○○●▲
	天井からも...	-	●○○●▲▲▲	-	●○○○▲▲▲	-	●○○●▲▲▲
	天井までも...	-	●○○●▲▲▲	-	●○○○▲▲▲	-	●○○●▲▲▲
	天井にも...	-	●○○●▲▲	-	●○○○▲▲	-	●○○●▲▲
	天井に。	-	●○○●▲	-	●○○○▲	-	●○○●▲
	天井にも。	-	●○○●▲▲	-	●○○○▲▲	-	●○○●▲▲
天井(を)...	-	-	-	●●○○	-	●●●●	
洞窟(gama)。	-	-	-	○○	-	○○	

分類	共通語	小野津A	小野津B	志戸桶A	志戸桶B	塩道A	塩道B
4-A	洞窟は...	—	—	—	—	—	—
	洞窟からは...	—	—	—	—	—	—
	洞窟までは...	—	—	—	—	—	—
	洞窟には...	—	—	—	—	—	—
	洞窟からも...	—	—	—	—	—	—
4-B	山(jama)。	—	—	—	—	—	—
	山は...	—	—	—	—	—	—
	山からは...	—	—	—	—	—	—
	山までは...	—	—	—	—	—	—
	山には...	—	—	—	—	—	—
	山からも...	—	—	—	—	—	—
4-C	海。	—	—	—	—	—	—
	海は...	—	—	—	—	—	—
	海からは...	—	—	—	—	—	—
	海までは...	—	—	—	—	—	—
	海には...	—	—	—	—	—	—
	海からも...	—	—	—	—	—	—
	舟(φuni)。	—	—	—	—	—	—
	舟は...	—	—	—	—	—	—
	舟からは...	—	—	—	—	—	—
	舟までは...	—	—	—	—	—	—
	舟には...	—	—	—	—	—	—
舟からも...	—	—	—	—	—	—	
	血(tei:,te'i:)	●○/ ●●	●○	●○	●○	○●	○●
	血が...	●△	●○△	●●△	●●△	●○△	●○△
	血が。	●△	●○△	●●△	●●△	●○△	●○△
	血も。	●△	●○△	●●△	●●△	●○△	—
	血から。	●△△	●○△△	●●△△	●●△△	●○△△	●○△△
	血まで。	●△△	●○△△	●●△△	●●△△	●○△△	—
	血からも。	●△△△	●○△△△	●●△△△	●●△△△	●○△△△	●○△△△
	血までも。	●△△△	●○△△△	●●△△△	●●△△△	●○△△△/ ●○△△△	—
	葉(ha:)	●○	●○	●○	●○	○●	○●
	葉が...	●○△	●○△	●●△	●●△	●○△	●○△
	葉が。	●○△	●○△	●●△	●●△	●○△	●○△
	葉も。	●○△	●○△	●●△	●●△	●○△	—
	葉から。	●○△△	●○△△	●●△△	●●△△	●○△△	●○△△
	葉まで。	●○△△	●○△△	●●△△	●●△△	●○△△	—

分類	共通語	坂嶺A	坂嶺B	阿伝A	阿伝B	上嘉鉄A	上嘉鉄B(1)	上嘉鉄B(2)
4-A	洞窟は...	-	-	-	●○▲	-	-	●○▲
	洞窟からは...	-	-	-	●○▲▲▲	-	-	●○▲▲▲
	洞窟までは...	-	-	-	●○▲▲▲	-	-	●○▲▲▲
	洞窟には...	-	-	-	-	-	-	●○▲▲▲
	洞窟からも...	-	-	-	-	-	-	●○▲▲▲
4-B	山(jama)。	-	-	-	○●	-	-	●○▲
	山は...	-	-	-	●○▲	-	-	●○▲▲▲
	山からは...	-	-	-	●○▲▲▲	-	-	●○▲▲▲
	山までは...	-	-	-	●○▲▲▲	-	-	●○▲▲▲
	山には...	-	-	-	-	-	-	●○▲▲▲
	山からも...	-	-	-	-	-	-	●○
4-C	海。	-	-	-	●○	-	-	●●▲
	海は...	-	-	-	●○▲	-	-	●●▲▲▲
	海からは...	-	-	-	●○▲▲▲	-	-	●●▲▲▲
	海までは...	-	-	-	●○▲▲▲	-	-	●●▲▲▲
	海には...	-	-	-	-	-	-	●●▲▲▲
	海からも...	-	-	-	-	-	-	●●▲▲▲
	舟(φuni)。	-	-	-	●○	-	-	●●▲
	舟は...	-	-	-	●●▲	-	-	●●▲▲▲
	舟からは...	-	-	-	●●▲▲▲	-	-	●●▲▲▲
	舟までは...	-	-	-	●●▲▲▲	-	-	●●▲▲▲
	舟には...	-	-	-	-	-	-	●●▲▲▲
舟からも...	-	-	-	-	-	-	●●▲▲▲	
	血(tei,te'i: )。	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	血が...	●○▲	●○▲	●●▲	●○▲	●○▲	-	●○▲
	血が。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	-	●○▲
	血も。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	-	●○▲
	血から。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	-	●○▲▲
	血まで。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	-	●○▲▲	-	●○▲▲
	血からも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	-	●○▲▲▲	-	●○▲▲▲
	血までも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	-	-	●○▲▲▲	-	●○▲▲▲
	葉(ha: )。	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	葉が...	●○▲	●○▲	●●▲	●○▲	●○▲	-	●○▲
	葉が。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	-	●○▲
	葉も。	-	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	-	●○▲
	葉から。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	-	●○▲▲
	葉まで。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	-	-	-	●○▲▲

分類	共通語	湾A	湾B	中里A	中里B	荒木A	荒木B
4-A	洞窟は...	—	—	—	●●△	—	●○△
	洞窟からは...	—	—	—	●●▲▲△	—	●○▲▲△
	洞窟までは...	—	—	—	●●▲▲△	—	●○▲▲△
	洞窟には...	—	—	—	●●▲△	—	○●▲△
	洞窟からも...	—	—	—	●●▲▲△	—	●○▲▲△
4-B	山(jama)。	—	—	—	○●	—	○●
	山は...	—	—	—	●●△	—	●○△
	山からは...	—	—	—	●●▲▲△	—	●○▲▲△
	山までは...	—	—	—	●●▲▲△	—	●○▲▲△
	山には...	—	—	—	●●▲△	—	○●▲△
	山からも...	—	—	—	●●▲▲△	—	●○▲▲△
4-C	海。	—	—	—	●○	—	●○
	海は...	—	—	—	●●▲	—	●●▲
	海からは...	—	—	—	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲
	海までは...	—	—	—	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲
	海には...	—	—	—	●●▲▲	—	●●▲▲
	海からも...	—	—	—	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲
	舟(φuni)。	—	—	—	●○	—	●○
	舟は...	—	—	—	●●▲	—	●●▲
	舟からは...	—	—	—	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲
	舟までは...	—	—	—	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲
	舟には...	—	—	—	●●▲▲	—	●●▲▲
舟からも...	—	—	—	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲	
	血(ɬei:, ɬe'i:)。	○●	—	○●	○●	○●	○●
	血が...	●○▲	—	●○▲	●●△	●○▲	●○▲
	血が。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	血も。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	血から。	●●▲▲/ ●○○▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	血まで。	●●▲▲/ ●○○▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	血からも。	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲/ ●○▲▲▲	●○▲▲▲
	血までも。	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲/ ●○▲▲▲	●○▲▲▲
	葉(ha:)。	○●	—	○●	○●	○●	○●
	葉が...	●○▲	—	●○▲	●●△	●○▲	●○▲
	葉が。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	葉も。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	葉から。	●●▲▲	—	●●▲▲/ ●○▲▲	●●▲▲	●○▲▲/ ●○▲▲	●○▲▲
	葉まで。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲/ ●○▲▲	●○▲▲



分類	共通語	小野津A	小野津B	志戸桶A	志戸桶B	塩道A	塩道B
5-A	葉からも。	●○△△△	●○△△△	●●△△△	●●△△△	●○▲▲△	●○▲▲△
	葉までも。	●○△△△	●○△△△	●●△△△	●●△△△	●○▲▲△	—
	酒(se:)。	●○	●○	●○	●○	○●	○●
	酒が...	●○△	●○△	●●▲	●●▲	●○▲	●○▲
	酒が。	●○△	●○△	●●△	●●△	●○▲	●○▲
	酒も。	●○△	●○△	●●△	●●△	●○▲	—
	酒から。	●○△△	●○△△	●●△△	●●△△	●○▲▲	●○▲▲
	酒まで。	●○△△	●○△△	●●△△	●●△△	●○▲▲	—
	酒からも。	●○△△△	●○△△△	●●△△△	●●△△△	●○▲▲△	●○▲▲△
	酒までも。	●○△△△/ ●○△◎△	●○△△△	●●△△△	●●△△△	●○▲▲△	—
	井戸(ha:)。	●○	●○	●○	●○	○●	—
	井戸が...	●○△	●○△	●●▲	●●▲	●○▲	—
	井戸が。	●○△	●○△	●●△	●●△	●○▲	—
	井戸も。	●○△	●○△	●●△	●●△	●○▲	—
	井戸から。	●○△△	●○△△	●●△△	●●△△	●○▲▲	—
	井戸まで。	●○△△	●○△△	●●△△	●●△△	●○▲▲	—
井戸からも。	●○△△△	●○△△△	●●△△△	●●△△△	●○▲▲△	—	
井戸までも。	●○△△△	●○△△△	●●△△△	●●△△△	●○▲▲△	—	
5-B	目(mi:)。	●●/ ◎◎	○●	○●	○●	○●	○●
	目が...	◎◎▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	目が。	◎◎▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	目も。	◎◎▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—
	目から。	◎◎△▲	●○△▲	●○△▲/ ●●△▲	●●△▲	●○▲▲	●○▲▲
	目まで。	◎◎△▲	●○△▲	●○△▲/ ●●△▲	●●△▲	●○▲▲	—
	目からも。	◎◎△▲△/ ●●△▲△	●○△▲△	●○△▲△	●●△▲△	●○▲▲△	●○▲▲△
	目までも。	◎◎△▲△	●○△▲△	●○△▲△	●●△▲△	●○▲▲△/ ●○▲▲△	—
	木(hi:)。	◎●	○●	○●	○●	○●	○●
	木が...	◎◎▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	木が。	◎◎▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	木も。	◎◎▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—
	木から。	◎◎△▲	●○△▲	●○△▲/ ●●△▲	●●△▲	●○▲▲	●○▲▲
	木まで。	◎◎△▲	●○△▲	●○△▲/ ●●△▲	●●△▲	●○▲▲	—
	木からも。	◎◎△▲△	●○△▲△	●○△▲△	●●△▲△	●○▲▲△	●○▲▲△
	木までも。	◎◎△▲△	●○△▲△	●○△▲△	●●△▲△	●○▲▲△	—
桶(wi:,wi:)。	◎●	○●	○●	—	—	●○	
桶が...	◎◎▲	●○▲	●○▲	—	—	●●▲	
桶が。	◎◎△	●○▲	●○▲	—	—	●●△	
桶も。	◎◎▲	●○▲	●○▲	—	—	—	
桶から。	◎◎△▲	●○△▲	●○△▲/ ●●△▲	—	—	●●△▲	
桶まで。	◎◎△▲	●○△▲	●○△▲/ ●●△▲	—	—	—	

助詞 「が」 : ɲa,nu、「から」 : kara、「まで」 : gadi,maði、「に」 : kai,ni、「も」 : mu

分類	共通語	坂嶺A	坂嶺B	阿伝A	阿伝B	上嘉鉄A	上嘉鉄B(1)	上嘉鉄B(2)
5-A	葉からも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	—	—	●○▲▲▲
	葉までも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	—	—	●○▲▲▲
	酒(se:)。	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○
	酒が...	●○▲	●○▲	●●▲	●○▲	●○▲	—	●○▲
	酒が。	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲
	酒も。	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲
	酒から。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲
	酒まで。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
	酒からも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲
	酒までも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲
	井戸(ha:)。	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○
	井戸が...	●○▲	●○▲	●●▲	●○▲	●○▲	—	●○▲
	井戸が。	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲
	井戸も。	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲
	井戸から。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲
	井戸まで。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
井戸からも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	
井戸までも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	
5-B	目(mi:)。	○○	○○	●●	○○	○○	○○	○○
	目が...	●○▲	●○▲	—	●○▲	●○▲	—	●○▲
	目が。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲
	目も。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲
	目から。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲
	目まで。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
	目からも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲
	目までも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲
	木(hi:)。	—	○○	●●	○○	○○	○○	○○
	木が...	●○▲	●○▲	—	●○▲	●○▲	—	●○▲
	木が。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲
	木も。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲
	木から。	—	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲
	木まで。	—	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
	木からも。	—	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲
	木までも。	—	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲
	桶(wi:,wi:)。	—	—	—	—	●○	●○	●○
	桶が...	—	—	—	—	●●▲	—	●○▲
	桶が。	—	—	—	—	●●▲	—	●○▲
	桶も。	—	—	—	—	●●▲	—	●○▲
桶から。	—	—	—	—	●●▲▲	—	●○▲▲	
桶まで。	—	—	—	—	●●▲▲	—	●○▲▲	

分類	共通語	湾A	湾B	中里A	中里B	荒木A	荒木B
5-A	葉からも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲/ ●○▲▲	●○▲▲
	葉までも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	酒(se:.)。	○●	●●	○●	○●	○●	○●
	酒が...	●○▲	—	●○▲	●●▲	●○▲	●○▲
	酒が。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	酒も。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	酒から。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	酒まで。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	酒からも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	酒までも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	井戸(ha:.)。	○●	●●	○●	○●	○●	○●
	井戸が...	●○▲	—	●○▲	●●▲	●○▲	●○▲
	井戸が。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	井戸も。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	井戸から。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	井戸まで。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
井戸からも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	
井戸までも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	
5-B	目(mi:.)。	○●	●●	○●	○●	○●	○●
	目が...	●○▲	—	●○▲	●●▲	●○▲	●○▲
	目が。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	目も。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	目から。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	目まで。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲/ ●○▲▲	●○▲▲
	目からも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	目までも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	木(hi:.)。	○●	—	○●	○●	○●	○●
	木が...	●○▲	—	●○▲	●●▲	●○▲	●○▲
	木が。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	木も。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	木から。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	木まで。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	木からも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	木までも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	桶(wi:,wi:.)。	—	—	—	—	—	—
	桶が...	—	—	—	—	—	—
	桶が。	—	—	—	—	—	—
	桶も。	—	—	—	—	—	—
桶から。	—	—	—	—	—	—	
桶まで。	—	—	—	—	—	—	

分類	共通語	小野津A	小野津B	志戸桶A	志戸桶B	塩道A	塩道B
	桶からも。	◎●▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲	—	—	●●▲▲▲
	桶までも。	◎●▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲	—	—	—
	家(ja:)。	◎●	○●	○●	○●	○●	○●
	家が...	◎◎▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	家が。	◎◎▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	家も。	◎◎▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—
	家から。	◎◎▲▲	●○▲▲	●○▲▲/ ●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	家まで。	◎◎▲▲	●○▲▲	●○▲▲/ ●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—
	家からも。	◎◎▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲
	家までも。	◎◎▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—
6-A	水(mizu,midu)。	●○	●○	○●	○●	○●	○●
	水が...	○●▲/ ◎●▲	○●▲	●●▲	●○▲	●○▲	●○▲
	水が。	○●▲/ ◎●▲	○●▲	●●▲/ ●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	水も。	○●▲/ ◎●▲	○●▲	●○▲	●○▲	●○▲	—
	水から。	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲/ ●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—
	水まで。	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲/ ●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—
	水からも。	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲/ ●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—
	水までも。	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—
	鳥(tui)。	●○	●○	○●	○●	○●	●●
	鳥が...	○●▲/ ◎●▲	○●▲	●●▲	●●▲	●○▲	●○▲
	鳥が。	○●▲/ ◎●▲	○●▲	●●▲/ ●●▲	●●▲	●○▲	●○▲
	鳥も。	◎●▲	○●▲	●●▲/ ●●▲	●●▲	●○▲	—
	鳥から。	●○▲▲	●○▲▲	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—
	鳥まで。	●○▲▲	●○▲▲	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—
	鳥からも。	●○▲▲▲/ ●○▲◎▲	●○▲▲▲	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—
	鳥までも。	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—
	鼻	●○	●○	○●	○●	○●	○●
	鼻が...	○●▲/ ◎●▲	○●▲	●●▲	●●▲	●○▲	●○▲
	鼻が。	◎●▲/ ○●▲	○●▲	●●▲	●●▲	●○▲	●○▲
	鼻も。	◎●▲/ ○●▲	○●▲	●●▲	●●▲	●○▲	—
鼻から。	●○▲▲	●○▲▲	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	
鼻まで。	●○▲▲	●○▲▲	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	
鼻からも。	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲	
鼻までも。	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	
洞窟(gama)。	—	●○	○●	○●	○●	○●	
洞窟が...	—	○●▲	●●▲	●●▲	●○▲	●○▲	
洞窟が。	—	○●▲	●●▲	●●▲	●○▲	●○▲	
洞窟も。	—	○●▲	●●▲	●●▲	●○▲	—	
洞窟から。	—	●○▲▲	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	
洞窟まで。	—	●○▲▲	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	

分類	共通語	坂嶺A	坂嶺B	阿伝A	阿伝B	上嘉鉄A	上嘉鉄B(1)	上嘉鉄B(2)
	桶からも。	—	—	—	—	●●▲▲△	—	●○▲▲△
	桶までも。	—	—	—	—	●●▲▲△	—	●○▲▲△
	家(ja:)。	○●	○●	●●	○●	○●	○●	○●
	家が...	●○▲	●○▲	—	●○▲	●○▲	—	●○▲
	家が。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲
	家も。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲
	家から。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲
	家まで。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
	家からも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲
家までも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	
6-A	水(mizu,midu)。	○●	○●	○○●	○●	○●	○●	○●
	水が...	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	水が。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	水も。	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲
	水から。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	水まで。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
	水からも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲
	水までも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲
	鳥(tui)。	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	鳥が...	●○▲	●○▲	○○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	鳥が。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	鳥も。	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲
	鳥から。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	鳥まで。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
	鳥からも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲
	鳥までも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲
	鼻	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	鼻が...	●○▲	●○▲	○○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	鼻が。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	鼻も。	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲
	鼻から。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	鼻まで。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
	鼻からも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●○▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲
	鼻までも。	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲	—	●○▲▲▲
洞窟(gama)。	○●	—	○●	○●	○●	○●	○●	
洞窟が...	●○▲	—	○○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	
洞窟が。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	
洞窟も。	●○▲	—	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	
洞窟から。	●●▲▲	—	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	
洞窟まで。	●●▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲	

助詞 「が」 : ŋa,nu、「から」 : kara、「まで」 : gadi,maði、「に」 : kai,ni、「も」 : mu

分類	共通語	湾A	湾B	中里A	中里B	荒木A	荒木B
	桶からも。	—	—	—	—	—	—
	桶までも。	—	—	—	—	—	—
	家(ja:)	○●	●●	○●	○●	○●	○●
	家が...	●○△	—	●○△	●●△	●○△	●○△
	家が。	●○△	—	●○△	●○△	●○△	●○△
	家も。	●○△	—	●○△	●○△	●○△	●○△
	家から。	●●△△	—	●●△△	●●△△	●○△△	●○△△
	家まで。	●●△△	—	●●△△	●●△△	●○△△	●○△△
	家からも。	●●△△△	—	●●△△△	●●△△△	●○△△△	●○△△△
家までも。	●●△△△	—	●●△△△	●●△△△	●○△△△	●○△△△	
6-A	水(mizu,midu)。	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	水が...	●○△	—	●○△	●●△	●○△	●○△
	水が。	●○△	—	●○△	●○△	●○△	●○△
	水も。	●○△	—	●○△	●○△	●○△	●○△
	水から。	●●△△/ ●○○△	—	●●△△	●●△△	●○△△	●○△△
	水まで。	●●△△/ ●○○△	—	●●△△	●●△△	●○△△	●○△△
	水からも。	●●△△△	—	●●△△△	●●△△△	●○△△△	●○△△△
	水までも。	●●△△△	—	●●△△△	●●△△△	●○△△△	●○△△△
	鳥(tui)。	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	鳥が...	●○△	—	●○△	●●△	●○△	●○△
	鳥が。	●○△	—	●○△	●○△	●○△	●○△
	鳥も。	●○△	—	●○△	●○△	●○△	●○△
	鳥から。	●●△△	—	●●△△	●●△△	●○△△/ ●○○△	●○△△
	鳥まで。	●●△△	—	●●△△	●●△△	●○△△	●○△△
	鳥からも。	●●△△△	—	●●△△△	●●△△△	●○△△△	●○△△△
	鳥までも。	●●△△△	—	●●△△△	●●△△△	●○△△△	●○△△△
	鼻	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	鼻が...	●○△	—	●○△	●●△	●○△/ ●●△	●○△
	鼻が。	●○△	—	●○△	●○△	●○△	●○△
	鼻も。	●○△	—	●○△	●○△	●○△	●○△
	鼻から。	●●△△	—	●●△△	●●△△	●○△△/ ●○○△	●○△△
	鼻まで。	●●△△	—	●●△△	●●△△	●○△△	●○△△
	鼻からも。	●●△△△	—	●●△△△	●●△△△	●○△△△	●○△△△
	鼻までも。	●●△△△	—	●●△△△	●●△△△	●○△△△	●○△△△
	洞窟(gama)。	○●	—	○●	○●	—	○●
	洞窟が...	●○△	—	●○△	●●△	—	●○△
	洞窟が。	●○△	—	●○△	●○△	—	●○△
洞窟も。	●○△	—	●○△	●○△	—	●○△	
洞窟から。	●●△△	—	●●△△	●●△△	—	●○△△	
洞窟まで。	●●△△	—	●●△△	●●△△	—	●○△△	

分類	共通語	小野津A	小野津B	志戸桶A	志戸桶B	塩道A	塩道B
	洞窟からも。	—	●○△△△	●●△△△	●●△△△	●○▲▲△	●○▲▲△
	洞窟までも。	—	●○△△△	●●△△△	●●△△△	●○▲▲△	—
6-B	山(jama)。	—	○●	○●	○●	○●	○●
	山が...	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	山が。	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	山も。	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—
	山から。	—	●○△▲	●○△▲/ ●●△▲	●●△▲	●○△▲	●○△▲
	山まで。	—	●○△▲	●○△▲/ ●●△▲	●●△▲	●○△▲	—
	山からも。	—	●○△▲△	●○△▲△/ ●●△▲△	●●△▲△	●○▲▲△	●○▲▲△
	山までも。	—	●○△▲△	●●△▲△	●●△▲△	●○▲▲△	—
	豆(mami,mami)。	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	豆が...	●○▲/ ○○▲	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲
	豆が。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	豆も。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—
	豆から。	●○△▲	●○△▲	●●△▲/ ●○△▲	●●△▲	●○△▲	—
	豆まで。	●○△▲	●○△▲	●○△▲/ ●●△▲	●●△▲	●○△▲	—
	豆からも。	●○△▲△	●○△▲△	●○△▲△/ ●○△▲△	●●△▲△	●○▲▲△	—
	豆までも。	●○△▲△	●○△▲△	●○△▲△/ ●○△▲△	●●△▲△	●○▲▲△	—
	花(pana,hana)。	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	花が...	●○▲/ ○○▲	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲
	花が。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	花も。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—
	花から。	●○△▲	●○△▲	●●△▲/ ●○△▲	●●△▲	●○△▲	—
	花まで。	●○△▲	●○△▲	●○△▲/ ●●△▲	●●△▲	●○△▲	—
	花からも。	●○△▲△	●○△▲△	●○△▲△/ ●○△▲△	●●△▲△	●○▲▲△	—
	花までも。	●○△▲△	●○△▲△	●○△▲△/ ●○△▲△	●●△▲△	●○▲▲△	—
	麦(mun'i,mur)	—	○●	○●	○●	○●	○●
	麦が...	—	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲
	麦が。	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	麦も。	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	—
麦から。	—	●○△▲	●●△▲/ ●○△▲	●●△▲	●○△▲	—	
麦まで。	—	●○△▲	●○△▲	●●△▲	●○△▲	—	
麦からも。	—	●○△▲△	●○△▲△	●●△▲△	●○▲▲△	—	
麦までも。	—	●○△▲△	●○△▲△/ ●○△▲△	●●△▲△	●○▲▲△	—	
	海。	—	○●	○●	○●	○●	○●
	海が...	—	●○▲	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	海が。	—	●○▲	●●▲	●●▲	●●△/ ●○△/ ●●▲	●●△
	海も。	—	●○▲	●●▲	●●▲	●●△/ ●○△/ ●●▲	—

助詞 「が」 : ɲa,nu、「から」 : kara、「まで」 : gadi,maɲi、「に」 : kai,ni、「も」 : mu

分類	共通語	坂嶺A	坂嶺B	阿伝A	阿伝B	上嘉鉄A	上嘉鉄B(1)	上嘉鉄B(2)
	洞窟からも。	●●▲▲	—	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●●▲▲	●○▲▲
	洞窟までも。	●●▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
6-B	山(jama)。	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○
	山が...	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	山が。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	山も。	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲
	山から。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	山まで。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
	山からも。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●●▲▲	●○▲▲
	山までも。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
	豆(mami,mami)。	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○
	豆が...	●○▲	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	豆が。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	豆も。	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲
	豆から。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	豆まで。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
	豆からも。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●●▲▲	●○▲▲
	豆までも。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
	花(pana,hana)。	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○
	花が...	●○▲	●○▲	○○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	花が。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	花も。	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲
	花から。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	花まで。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
	花からも。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●●▲▲	●○▲▲
	花までも。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲
	麦(mun'i,murj)。	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○
	麦が...	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	麦が。	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	麦も。	●○▲	●○▲	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲
麦から。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	
麦まで。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲	
麦からも。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●○▲▲	●●▲▲	●○▲▲	
麦までも。	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	—	●○▲▲	—	●○▲▲	
	海。	●○	●○	●○	●○	●○	●○	●○
	海が...	●●▲	●●▲	●○▲/ ●●▲	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	海が。	●●▲	●●▲	●○▲/ ●●▲	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	海も。	●●▲	●●▲	●○▲/ ●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲



分類	共通語	湾A	湾B	中里A	中里B	荒木A	荒木B
	洞窟からも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	—	●○▲▲
	洞窟までも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	—	●○▲▲
6-B	山(jama)。	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	山が...	●○▲	—	●○▲	●●▲	●○▲	●○▲
	山が。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	山も。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	山から。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	山まで。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	山からも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	山までも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	豆(mami,mami)。	○●	—	○●	○●	○●	○●
	豆が...	●○▲	—	●○▲	●●▲	●○▲	●○▲
	豆が。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	豆も。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	豆から。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	豆まで。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	豆からも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	豆までも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	花(pana,hana)。	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	花が...	●○▲	—	●○▲	●●▲	●○▲	●○▲
	花が。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	花も。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	花から。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	花まで。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	花からも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	花までも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲
	麦(mun'i,murj)。	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	麦が...	●○▲	—	●○▲	●●▲	●○▲	●○▲
	麦が。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
	麦も。	●○▲	—	●○▲	●○▲	●○▲	●○▲
麦から。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	
麦まで。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	
麦からも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	
麦までも。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲	●○▲▲	
	海。	●○	●○	●○	●○	●○	●○
	海が...	●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	海が。	●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	海も。	●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲/ ●●▲	●●▲

助詞 「が」 : ɲa,nu、「から」 : kara、「まで」 : gadi,maɲi、「に」 : kai,ni、「も」 : mu

分類	共通語	小野津A	小野津B	志戸桶A	志戸桶B	塩道A	塩道B
6-C	海から。	—	●○△△	●●△△	●●△△	●○△△/ ●○△△/ ●●△△	●●△△
	海まで。	—	●○△△	●●△△	●●△△	●○△△	—
	海からも。	—	●○△△△	●●△△△	●●△△△	●○△△△	●●△△△
	海までも。	—	●○△△△	●●△△△	●●△△△	●○△△△	—
	鍋(nabi)。	○●	○●	○●	○●	●○	●○
	鍋が...	●○△△/ ○●△△	●○△	●○△	●○△	●●△	●●△
	鍋が。	●○△	●○△	●○△	●○△	●○△	●●△
	鍋も。	●○△	●○△	●○△	●○△	●●△/ ●●△	—
	鍋から。	●○△△	●○△△	●○△△/ ●●△△	●●△△	●○△△/ ●○△△/ ●●△△	●●△△
	鍋まで。	●○△△	●○△△	●○△△	●●△△	●○△△	—
	鍋からも。	●○△△△	●○△△△	●○△△△/ ●○△△△	●●△△△	●○△△△	●●△△△
	鍋までも。	●○△△△	●○△△△	●○△△△	●●△△△	●○△△△	—
	舟。	—	○●	○●	○●	●○	●○
	舟が...	—	●○△	●○△	●○△	●●△	●●△
	舟が。	—	●○△	●○△	●○△	●●△	●●△
	舟も。	—	●○△	●○△	●○△	●●△/ ●●△	—
	舟から。	—	●○△△	●○△△	●●△△	●○△△/ ●○△△/ ●●△△	●●△△
	舟まで。	—	●○△△	●○△△/ ●●△△	●●△△	●○△△	—
	舟からも。	—	●○△△△	●○△△△	●●△△△	●○△△△	●●△△△
	舟までも。	—	●○△△△	●○△△△	●●△△△	●○△△△	—
	臼(usu)。	—	○●	○●	○●	●○	●○
	臼が...	—	●○△	●○△	●○△	●●△	●●△
	臼が。	—	●○△	●○△	●○△	●●△	●●△
	臼も。	—	●○△	●○△	●○△	●△△	—
	臼から。	—	●○△△	●○△△/ ●●△△	●●△△	●●△△	●●△△
	臼まで。	—	●○△△	●○△△	●●△△	●○△△	—
	臼からも。	—	●○△△△	●○△△△	●●△△△	●○△△△	●●△△△
	臼までも。	—	●○△△△	●○△△△	●●△△△	●○△△△	—
	太陽(tida)。	—	○●	○●	○●	●○	●○
	太陽が...	—	●○△	●○△	●○△	●●△	●●△
	太陽が。	—	●○△	●○△	●○△	●●△	●●△
	太陽も。	—	●○△	●○△	●○△	●●△	—
太陽から。	—	●○△△	●○△△	●●△△	●●△△/ ●○△△	●●△△	
太陽まで。	—	●○△△	●○△△	●●△△	●○△△	—	
太陽からも。	—	●○△△△	●○△△△/ ●○△△△	●●△△△	●○△△△/ ●○△△△	●●△△△	
太陽までも。	—	●○△△△	●○△△△/ ●●△△△	●●△△△	●○△△△	—	
煙(hibuçi)。	—	○●○	●○○/ ●●○	●●○	●○●	●○●	

分類	共通語	坂嶺A	坂嶺B	阿伝A	阿伝B	上嘉鉄A	上嘉鉄B(1)	上嘉鉄B(2)
6-C	海から。	●●▲△/ ●○▲△	●●▲△	●○▲△	●●▲△	●●▲△	●●▲△	●●▲△
	海まで。	●●●△	●●●△	●○▲△	—	●●▲△	—	●●▲△
	海からも。	●○▲▲△/ ●●▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△
	海までも。	●○▲▲△/ ●●▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△/ ●●▲▲△	—	●●▲▲△	—	●●▲▲△
	鍋(nabi)。	●○	●○	●○	●○	●○	●○	●○
	鍋が...	●●▲	●●▲	●○▲	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	鍋が。	●●▲	●●▲	●○▲/ ●●▲	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	鍋も。	●●▲	●●▲	●●▲/ ●○▲	—	●●▲	●●▲	●●▲
	鍋から。	●●▲△	●●▲△	●○▲△	●●▲△	●●▲△	●●▲△	●●▲△
	鍋まで。	●●▲△	●●▲△	●○▲△	—	●●▲△	—	●●▲△
	鍋からも。	●○▲▲△/ ●●▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△
	鍋までも。	●○▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△	—	●●▲▲△	—	●●▲▲△
	舟。	●○	●○	●○	●○	●○	●○	●○
	舟が...	●●▲	●●▲	●○▲/ ●●▲	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	舟が。	●●▲	●●▲	●○▲/ ●●▲	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	舟も。	●●▲	●●▲	●●▲/ ●○▲	—	●●▲	●●▲	●●▲
	舟から。	●●▲△/ ●○▲△	●●▲△	●○▲△	●●▲△	●●▲△	●●▲△	●●▲△
	舟まで。	●●●△	●●●△	●○▲△	—	●●▲△	—	●●▲△
	舟からも。	●○▲▲△/ ●●▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△
	舟までも。	●○▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△	—	●●▲▲△	—	●●▲▲△
	臼(usu)。	●○	●○	●○	●○	●○	●○	●○
	臼が...	●●▲	●●▲	●○▲/ ●●▲	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	臼が。	●●▲	●●▲	●●▲/ ●○▲	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	臼も。	●●▲	●●▲	●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲
	臼から。	●●▲△	●●▲△	●○▲△	●○▲△	●●▲△	●●▲△	●●▲△
	臼まで。	●●▲△	●●▲△	●●▲△	—	●●▲△	—	●●▲△
	臼からも。	●○▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△
	臼までも。	●○▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△	—	●●▲▲△	—	●●▲▲△
	太陽(tida)。	●○	●○	●○	●○	●○	●○	●○
	太陽が...	●●▲	●●▲	●○▲/ ●●▲	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	太陽が。	●●▲	●●▲	●●▲/ ●○▲	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	太陽も。	●●▲	●●▲	●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲
太陽から。	●●▲△/ ●○▲△	●●▲△	●○▲△	●●▲△	●●▲△	●●▲△	●●▲△	
太陽まで。	●●▲△/ ●○▲△	●●▲△	●○▲△	—	●●▲△	—	●●▲△	
太陽からも。	●○▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△	●●▲▲△	
太陽までも。	●○▲▲△/ ●●▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△/ ●●▲▲△	—	●●▲▲△	—	●●▲▲△	
煙(hibuçi)。	●○●	●○●	●○●	●○●	●○●	●○●	●○●	

助詞 「が」 : ɲa,nu、「から」 : kara、「まで」 : gadi,maði、「に」 : kai,ni、「も」 : mu

分類	共通語	湾A	湾B	中里A	中里B	荒木A	荒木B
6-C	海から。	●●▲△	—	●●▲△	●●▲△	●○▲△/ ●●▲△	●●▲△
	海まで。	●●▲△	—	●●▲△	●●▲△	●○▲△/ ●●▲△	●●▲△
	海からも。	●●▲▲△	—	●●▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△/ ●○▲▲△	●●▲▲△
	海までも。	●●▲▲△	—	●●▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△/ ●○▲▲△	●●▲▲△
	鍋(nabi)。	●○	●○	●○	●○	●○	●○
	鍋が...	●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	鍋が。	●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	鍋も。	●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲/ ●●▲	●●▲
	鍋から。	●●▲△	—	●●▲△	●●▲△	●○▲△/ ●●▲△	●●▲△
	鍋まで。	●●▲△	—	●●▲△	●●▲△	●○▲△/ ●●▲△	●●▲△
	鍋からも。	●●▲▲△	—	●●▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△	●●▲▲△
	鍋までも。	●●▲▲△	—	●●▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△	●●▲▲△
	舟。	●○	●○	●○	●○	●○	●○
	舟が...	●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	舟が。	●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	舟も。	●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	舟から。	●●▲△	—	●●▲△	●●▲△	●○▲△/ ●●▲△	●●▲△
	舟まで。	●●▲△	—	●●▲△	●●▲△	●○▲△/ ●●▲△	●●▲△
	舟からも。	●●▲▲△	—	●●▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△	●●▲▲△
	舟までも。	●●▲▲△	—	●●▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△	●●▲▲△
	臼(usu)。	●○	●○	●○	●○	●○	●○
	臼が...	●○▲	—	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	臼が。	●○▲	—	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	臼も。	●○▲	—	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	臼から。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲/ ●●▲▲	●●▲▲
	臼まで。	●●▲▲	—	●●▲▲	●●▲▲	●○▲▲/ ●●▲▲	●●▲▲
	臼からも。	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	●●▲▲▲
	臼までも。	●●▲▲▲	—	●●▲▲▲	●●▲▲▲	●○▲▲▲	●●▲▲▲
	太陽(tida)。	●○	●○	●○	●○	●○	●○
	太陽が...	●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	太陽が。	●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
	太陽も。	●●▲	—	●●▲	●●▲	●●▲	●●▲
太陽から。	●●▲△	—	●●▲△	●●▲△	●○▲△/ ●●▲△	●●▲△	
太陽まで。	●●▲△	—	●●▲△	●●▲△	●○▲△/ ●●▲△	●●▲△	
太陽からも。	●●▲▲△	—	●●▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△	●●▲▲△	
太陽までも。	●●▲▲△	—	●●▲▲△	●●▲▲△	●○▲▲△/ ○○▲▲△	●●▲▲△	
煙(hibuçi)。	●○○	—	●○○	●○○	●○○	●○○	

分類	共通語	小野津A	小野津B	志戸桶A	志戸桶B	塩道A	塩道B
7-A	煙が...	—	○○○△	●●○▲	●●●▲	●●○▲	●●○▲
	煙が。	—	○○○△	●●○△/ ●●○▲	●●●△	●●○▲	●●○▲
	煙も。	—	○○○△	●●○△/ ●●○▲	●●●△	●●○▲	—
	煙から。	—	○○○△△	●●○△△/ ●●○▲△/ ●●○▲△	●●●△△	●●○▲△	●●○▲△
	煙まで。	—	○○○△△	●●●△△	●●●△△	●●○▲△	—
	煙からも。	—	○○○△△△	●●●△△△	●●●△△△	●●○▲▲△	—
	煙までも。	—	○○○△△△	●●●△△△	●●●△△△	●●○▲▲△	—
	踊り(gudui)。	—	○○○	●●○/ ●●○	●●○	●○○	●○○
	踊りが...	—	○○○△	●●●▲	●●●▲	●○○▲	●●○▲
	踊りが。	—	○○○△	●●○△/ ●●○▲	●●●△	●○○▲	●●○▲
	踊りも。	—	○○○△	●●○△	●●●△	●○○▲	—
	踊りから。	—	○○○△△	●●●△△	●●●△△	●○○▲△	●●○▲△
	踊りまで。	—	○○○△△	●●●△△	●●●△△	●○○▲△	—
	踊りからも。	—	○○○△△△	●●●△△△	●●●△△△	●○○▲▲△	—
	踊りまでも。	—	○○○△△△	●●●△△△	●●●△△△	●○○▲▲△/ ●●○▲▲△	—
	形(katatsi)。	—	○○○	●●○	●●○	●○○	●○○
	形が...	—	○○○△	●●○▲	●●●▲	●●○▲	●●○▲
	形が。	—	○○○△	●●○△	●●●△	●●○▲	●●○▲
	形も。	—	○○○△	●●○△	●●●△	●●○▲	—
	形から。	—	○○○△△	●●●△△	●●●△△	●●○▲△	●●○▲△
形まで。	—	○○○△△	●●●△△	●●●△△	●●○▲△	—	
形からも。	—	○○○△△△	●●●△△△	●●●△△△	●●○▲▲△	—	
形までも。	—	●○○▲	●●●△△△	●●●△△△	●○○▲▲△/ ●●○▲▲△	—	
7-B	鋏(pasami,hasami)。	—	●○○	○○○	○○○/ ●○○	●○○	●○○
	鋏が...	—	●○○▲	●○○▲	●○○▲	●●○▲	●●○▲
	鋏が。	—	●○○▲	●○○△	●○○△	●●○▲	●●○▲
	鋏も。	—	●○○▲	●○○△	●○○△	●●○▲/ ●○○▲	—
	鋏から。	—	●○○▲△/ ●●○▲▲	●●●▲△/ ◎●●▲△	●○○▲△	●●○▲△/ ●○○▲△	●●○▲△
	鋏まで。	—	●○○▲△/ ●●○▲▲	◎●●▲△/ ◎●●▲△	●○○▲△	●○○▲△	—
	鋏からも。	—	●○○▲▲△	◎◎●▲▲△	●○○▲▲△	●○○▲▲△	—
	鋏までも。	—	●○○▲▲△	◎◎●▲▲△	●○○▲▲△	●○○▲▲△	—
	鏡(kagami)。	—	●○○	○○○	○○○/ ●○○	●○○	●○○
	鏡が...	—	●○○▲	●○○▲	●○○▲	●○○▲/ ●●○▲	●●○▲
	鏡が。	—	●○○▲	●○○△	●○○△	●○○▲	●●○▲
	鏡も。	—	●○○▲	●○○△	●○○△	●●○▲	—
	鏡から。	—	●○○▲△/ ●●○▲▲	◎●●▲△/ ◎●●▲△	●○○▲△	●○○▲△	●○○▲△
	鏡まで。	—	●○○▲△/ ●●○▲▲	◎●●▲△/ ◎●●▲△	●○○▲△	●○○▲△	—
	鏡からも。	—	●○○▲▲△	◎◎●▲▲△	●○○▲▲△	●○○▲▲△	—

助詞 「が」 : ɲa,nu、「から」 : kara、「まで」 : gadi,maði、「に」 : kai,ni、「も」 : mu

分類	共通語	坂嶺A	坂嶺B	阿伝A	阿伝B	上嘉鉄A	上嘉鉄B(1)	上嘉鉄B(2)
7-A	煙が...	●●○▲	●●○▲	●○○▲/ ●●○▲	●○○▲	●●○▲/ ●●○▲	●●○▲	●●○▲
	煙が。	●●○▲	●●○▲	●○○▲	●○○▲	●●○▲/ ●●○▲	●●○▲	●●○▲
	煙も。	●●○▲	●●○▲	●○○▲/ ●●○▲	—	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	煙から。	●●●▲▲	●●●▲▲	●○○▲△/ ●●○▲▲	●○○▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲
	煙まで。	●●●▲▲	●●●▲▲	●○○▲△/ ●●○▲▲	—	●○○▲△/ ●●○▲▲	—	●●○▲▲
	煙からも。	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	●○○▲▲△/ ●●○▲▲▲	●○○▲▲▲	●●○▲▲▲	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲
	煙までも。	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	—	—	●●○▲▲▲	—	●●○▲▲▲
	踊り(gudui)。	●○○	●○○	●○○	●○○	●○○	●○○	●○○
	踊りが...	●●○▲	●●○▲	●○○▲	●○○▲	●●○▲/ ●●○▲	●●○▲	●●○▲
	踊りが。	●○○▲/ ●●○▲	●●○▲	●○○▲	●○○▲	●●○▲/ ●●○▲	●●○▲	●●○▲
	踊りも。	●○○▲/ ●●○▲	●●○▲	●○○▲	—	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	踊りから。	●●●▲▲	●●●▲▲	●○○▲▲	●○○▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲
	踊りまで。	●●●▲▲	●●●▲▲	●○○▲▲	—	●○○▲△/ ●●○▲▲	—	●●○▲▲
	踊りからも。	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	●○○▲▲▲	●○○▲▲▲	●●○▲▲△/ ●○○▲▲▲	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲
	踊りまでも。	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	●○○▲▲▲	—	●●○▲▲▲	—	●●○▲▲▲
	形(katatsi)。	●○○	●○○	●○○	●○○	●○○	●○○	●○○
	形が...	●●○▲	●●○▲	●○○▲/ ●●○▲	●○○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	形が。	●○○▲/ ●●○▲	●●○▲	●○○▲	●○○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲
形も。	●●○▲	●●○▲	●○○▲	—	●●○▲	●●○▲	●●○▲	
形から。	●●●▲▲	●●●▲▲	●○○▲▲	●○○▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲	
形まで。	●●●▲▲	●●●▲▲	●○○▲▲	—	●○○▲△/ ●●○▲▲	—	●●○▲▲	
形からも。	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	●○○▲▲△/ ●●○▲▲▲	●○○▲▲▲	●●○▲▲▲	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲	
形までも。	●●●▲▲▲	●●○▲	●○○▲▲△/ ●●○▲▲▲	—	●●○▲▲▲	—	●●○▲▲▲	
7-B	鋏(pasami,hasami)。	●○○	●●●▲▲	●○○	●○○	●○○	●○○	●○○
	鋏が...	●●○▲	●●●▲▲	●○○▲/ ●●○▲	●○○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	鋏が。	●●○▲	●●●▲▲▲	●○○▲/ ●●○▲	●○○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	鋏も。	●●○▲	●●●▲▲▲	●○○▲/ ●●○▲	—	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	鋏から。	●●●▲▲	●○○	●○○▲△/ ●●○▲▲	●○○▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲
	鋏まで。	●●●▲▲	●○○	●○○▲△/ ●●○▲▲	—	●●○▲▲	—	●●○▲▲
	鋏からも。	●●●▲▲▲	●○○	●○○▲▲△/ ●●○▲▲▲	●○○▲▲▲	●●○▲▲△/ ●○○▲▲▲	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲
	鋏までも。	●●●▲▲▲	●○○	●○○▲▲△/ ●●○▲▲▲	—	●●○▲▲▲	—	●●○▲▲▲
	鏡(kagami)。	●○○	●●●▲▲	●○○	●○○	●○○	●○○	●○○
	鏡が...	●●○▲/ ●●○▲	●●●▲▲	●○○▲/ ●●○▲	●○○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	鏡が。	●●○▲	●●●▲▲▲	●○○▲/ ●●○▲	●○○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	鏡も。	●●○▲	●●●▲▲▲	●○○▲/ ●●○▲	—	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	鏡から。	●●●▲▲	●○○	●○○▲△/ ●●○▲▲	●○○▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲
	鏡まで。	●●●▲▲	●●●▲▲	●○○▲△/ ●●○▲▲	—	●●○▲▲	—	●●○▲▲
鏡からも。	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	—	●○○▲▲▲	●●○▲▲△/ ●○○▲▲▲	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲	

分類	共通語	湾A	湾B	中里A	中里B	荒木A	荒木B
7-A	煙が...	●●○▲	—	●●○▲	●●●▲	●●○▲	●●○▲
	煙が。	●●○▲	—	●●○▲	●●○▲	●●○▲/ ○○○▲	●●○▲
	煙も。	●●○▲	—	●●○▲	●●○▲	○○○▲	●●○▲
	煙から。	●●●▲▲/ ●●○▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	○○○▲▲	●●○▲▲
	煙まで。	●●●▲▲/ ●●○▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	○○○▲▲	●●○▲▲
	煙からも。	●●●▲▲▲	—	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	○○○▲▲▲	●●○▲▲▲
	煙までも。	●●●▲▲▲	—	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	○○○▲▲▲	●●○▲▲▲
	踊り(gudui)。	●○○	—	●○○	●○○	●○○	●○○
	踊りが...	●●○▲	—	●●○▲	●●●▲	●●○▲	●●○▲
	踊りが。	●●○▲	—	●●○▲	●●○▲	○○○▲/ ●●○▲	●●○▲
	踊りも。	●●○▲	—	●●○▲	●●○▲	○○○▲/ ●●○▲	●●○▲
	踊りから。	●●●▲▲/ ●●○▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	●●○▲▲/ ○○○▲▲	●●○▲▲
	踊りまで。	●●●▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	●●○▲▲/ ○○○▲▲	●●○▲▲
	踊りからも。	●●●▲▲▲	—	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲	●●○▲▲▲
	踊りまでも。	●●●▲▲▲	—	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲	●●○▲▲▲
	形(katatsi)。	●○○	—	●○○	●○○	●○○	●○○
	形が...	●●○▲	—	●●○▲	●●●▲	●●○▲	●●○▲
	形が。	●●○▲	—	●●○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲
形も。	●●○▲	—	●●○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲	
形から。	●●●▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	●●○▲▲/ ○○○▲▲	●●○▲▲	
形まで。	●●●▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	●●○▲▲/ ○○○▲▲	●●○▲▲	
形からも。	●●●▲▲▲	—	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲	●●○▲▲▲	
形までも。	●●●▲▲▲	—	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲/ ○○○▲▲▲	●●○▲▲▲	
7-B	鋏(pasami,hasami)。	●○○	—	●○○	●○○	●○○	●○○
	鋏が...	●●○▲	—	●●○▲	●●●▲	●●○▲	●●○▲
	鋏が。	●●○▲/ ●○○▲	—	●●○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	鋏も。	●●○▲	—	●●○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	鋏から。	●●●▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	●●○▲▲/ ○○○▲▲	●●○▲▲
	鋏まで。	●●●▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	●●○▲▲/ ○○○▲▲	●●○▲▲
	鋏からも。	●●●▲▲▲	—	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲	●●○▲▲▲
	鋏までも。	●●●▲▲▲	—	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲/ ○○○▲▲▲	●●○▲▲▲
	鏡(kagami)。	●○○	—	●○○	●○○	●○○	●○○
	鏡が...	●●○▲	—	●●○▲	●●●▲	●●○▲	●●○▲
	鏡が。	●●○▲/ ●○○▲	—	●●○▲	●●○▲	○○○▲	●●○▲
	鏡も。	●●○▲	—	●●○▲	●●○▲	○○○▲	●●○▲
	鏡から。	●●●▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲
	鏡まで。	●●●▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲
鏡からも。	●●●▲▲▲	—	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲	●●○▲▲▲	

助詞 「が」 : ɲa,nu、「から」 : kara、「まで」 : gadi,maði、「に」 : kai,ni、「も」 : mu

分類	共通語	小野津A	小野津B	志戸桶A	志戸桶B	塩道A	塩道B
	鏡までも。	—	●○○▲▲	◎◎●▲▲▲	●○○▲▲▲	●○○▲▲▲	—
	暦(kujumi)。	—	●●●	○○○	●●●	●●●	●●●
	暦が...	—	●○○▲	●○○▲	●○○▲	●○○▲/ ●●○▲	●●○▲
	暦が。	—	●○○▲	●○○▲	●○○▲	●○○▲/ ●●○▲	●●○▲
	暦も。	—	●○○▲	●○○▲	●○○▲	●●○▲	—
	暦から。	—	●○○▲/ ●●○▲	●●○▲/ ◎●●▲	●○○▲	●○○▲	●○○▲
	暦まで。	—	●○○▲/ ●●○▲	●●○▲/ ◎●●▲	●○○▲	●○○▲/ ◎●●▲	—
	暦からも。	—	●○○▲▲	◎◎●▲▲	●○○▲▲	●○○▲▲	—
	暦までも。	—	●○○▲▲	◎◎●▲▲	●○○▲▲	●○○▲▲	—
7-C	刀(katana, hatana)。	—	●●●	●●●	○●○/ ●●●	○○○	●●●
	刀が...	—	●○○▲	●○○▲	●○○▲	○○●▲	●●○▲
	刀が。	—	●○○▲	●○○▲	●○○▲	○○●▲	●●○▲
	刀も。	—	●○○▲	●○○▲/ ●○○F(下降)	●○○▲	○○●▲	—
	刀から。	—	●○○▲/ ●●○▲	●○○▲	●○○▲	○○●▲/ ○○○▲	●●○▲
	刀まで。	—	●○○▲/ ●●○▲	●○○▲	●○○▲	○○●▲/ ○○○▲	—
	刀からも。	—	●○○▲▲	●○○▲▲	●○○▲▲	○○●▲▲	—
	刀までも。	—	●○○▲▲	●○○▲▲	●○○▲▲	○○●▲▲	—
	畑(φate:, pate:)	—	●●●	●●●	○●○/ ●●●	○○○	○●○
	畑が...	—	●○○▲	●○○▲	●○○▲	○○●▲	○●●▲
	畑が。	—	●○○▲	●○○▲	●○○▲	○○●▲	○●●▲
	畑も。	—	●○○▲	●○○▲	●○○▲	○○●▲	—
	畑から。	—	●○○▲/ ●●○▲	●○○▲	●○○▲	○○●▲	○●●▲
	畑まで。	—	●○○▲/ ●●○▲	●○○▲	●○○▲	○○●▲	—
	畑からも。	—	●○○▲▲	●○○▲▲	●○○▲▲	○○●▲▲	—
	畑までも。	—	●○○▲▲	●○○▲▲	●○○▲▲	○○●▲▲	—
	腰周り(gamaku)。	—	●●●	○○○	○●○/ ●●●	—	○●○
	腰周りが...	—	●○○▲	●○○▲	●○○▲	—	—
腰周りが。	—	●○○▲	●○○▲/ ●○○▲	●○○▲	—	—	
腰周りも。	—	●○○▲	●○○▲	●○○▲	—	—	
腰周りから。	—	●○○▲/ ●●○▲	○○●▲/ ◎●●▲	●○○▲	—	—	
腰周りまで。	—	●○○▲/ ●●○▲	○○●▲/ ◎●●▲	●○○▲	—	—	
腰周りからも。	—	●○○▲▲	◎◎●▲▲/ ◎●●▲▲	●○○▲▲	—	—	
腰周りまでも。	—	●○○▲▲	◎◎●▲▲/ ◎●●▲▲	●○○▲▲	—	—	
	暁(?a:tutsi)。	—	●○○●	—	●○○○	●●○○/ ○○○○	●●○○
	暁が...	—	●○○●▲	—	●○○●▲	●●○○●/ ●●○○●	●●○○▲
	暁が。	—	●○○●▲	—	●○○●▲	●●○○●	—
	暁も。	—	●○○●▲	—	●○○●▲	●●○○●	—
	暁から。	—	●○○●▲	—	●○○●▲	●●○○●	—
	暁まで。	—	●○○●▲	—	●○○●▲	●●○○●	—



分類	共通語	坂嶺A	坂嶺B	阿伝A	阿伝B	上嘉鉄A	上嘉鉄B(1)	上嘉鉄B(2)
7-C	鏡までも。	●●●▲▲	●●●▲▲	●●○▲▲△/ ●○○▲▲△	—	●●○▲▲△	—	●●○▲▲△
	曆(kujumi)。	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●
	曆が...	●●○▲/ ●○○▲	●●○▲	●●○▲/ ●○○▲	●○○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	曆が。	●●○▲	●●○▲	●●○▲/ ●○○▲	●○○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	曆も。	●●○▲	●●○▲	●●○▲/ ●○○▲	—	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	曆から。	●●●▲▲	●●●▲▲	●●○▲▲△/ ●○○▲▲△	●○○▲▲△	●●○▲▲△	●●○▲▲△	●●○▲▲△
	曆まで。	●●●▲▲	●●●▲▲	●●○▲▲△/ ●○○▲▲△	—	●●○▲▲△	—	●●○▲▲△
	曆からも。	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲△/ ●○○▲▲▲△	●○○▲▲▲△	●●○▲▲▲△/ ●○○▲▲▲△	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲△
	曆までも。	●●●▲▲▲	●●●▲▲▲	●●○▲▲▲△/ ●○○▲▲▲△	—	●●○▲▲▲△	—	●●○▲▲▲△
刀(katana,hatana)。	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	
刀が...	○○○▲	○○○▲	●●●▲/ ●●●▲	○○○▲	●●●▲	○○○▲	○●●▲	
刀が。	○○●▲	○○●▲	●●●▲	○○●▲	●●●▲	○○●▲	○●●▲	
刀も。	○○●▲	○○●▲	●●●▲	—	●●●▲	○○●▲	○●●▲	
刀から。	○○○▲▲	○○○▲▲	○●●▲▲	○○●▲▲	●●●▲▲	○○●▲▲	○●●▲▲	
刀まで。	○○○▲▲	○○○▲▲	○●●▲▲	—	●●●▲▲	—	○●●▲▲	
刀からも。	○○○▲▲△/ ○○○▲▲△	○○○▲▲▲	●●●▲▲△/ ○●●▲▲△	○○●▲▲▲	●●●▲▲▲	○○●▲▲▲	○●●▲▲▲	
刀までも。	○○○▲▲▲	○○○▲▲▲	●●●▲▲▲△/ ○●●▲▲▲△	—	●●●▲▲▲	—	○●●▲▲▲	
畑(φate:,pate:.)。	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	
畑が...	○○●▲/ ○○○▲	○○○▲	●●●▲/ ●●●▲	○○○▲	●●●▲	○○○▲	○●●▲	
畑が。	○○●▲/ ○○○▲	○○●▲	●●●▲	○○○▲	●●●▲	○○○▲	○●●▲	
畑も。	○○●▲/ ○○○▲	○○●▲	●●●▲	—	●●●▲	○○○▲	○●●▲	
畑から。	○○○▲▲	○○○▲▲	○●●▲▲	○○●▲▲	●●●▲▲	○○●▲▲	○●●▲▲	
畑まで。	○○○▲▲	○○○▲▲	○●●▲▲	—	●●●▲▲	—	○●●▲▲	
畑からも。	○○○▲▲△/ ○○○▲▲△	○○○▲▲▲	●●●▲▲△/ ○●●▲▲△	○○●▲▲▲	●●●▲▲▲	○○●▲▲▲	○●●▲▲▲	
畑までも。	○○○▲▲▲△/ ○○○▲▲▲△	○○○▲▲▲	●●●▲▲▲△/ ○●●▲▲▲△	—	●●●▲▲▲	—	○●●▲▲▲	
腰周り(gamaku)。	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	
腰周りが...	○○●▲/ ○○○▲	○○○▲	●●●▲/ ●●●▲	○○○▲	●●●▲	○○○▲	○●●▲	
腰周りが。	○○●▲	○○●▲	●●●▲	○○○▲	●●●▲	○○○▲	○●●▲	
腰周りも。	○○●▲	○○●▲	●●●▲	—	●●●▲	○○○▲	○●●▲	
腰周りから。	○○○▲▲	○○○▲▲	●●●▲▲△/ ●○○▲▲△	○○●▲▲	●●●▲▲	○○●▲▲	○●●▲▲	
腰周りまで。	○○○▲▲	○○○▲▲	○●●▲▲	—	●●●▲▲	—	○●●▲▲	
腰周りからも。	○○○▲▲▲	○○○▲▲▲	●●●▲▲▲△/ ○●●▲▲▲△	○○●▲▲▲	●●●▲▲▲	○○●▲▲▲	○●●▲▲▲	
腰周りまでも。	○○○▲▲▲	○○○▲▲▲	●●●▲▲▲△/ ○●●▲▲▲△	—	●●●▲▲▲	—	○●●▲▲▲	
暁(?a:tutsi)。	●●○●	●●○●	●○○●/ ●○○●	●○○●	●●○●	—	●●○●	
暁が...	●●●○▲	●●●○▲	●●○○▲/ ●●○○▲	●○○○▲	●●●○▲	—	●●●○▲	
暁が。	●●●○▲	●●●○▲	●●○○▲/ ●○○○▲	●○○○▲	●●●○▲	—	●●●○▲	
暁も。	●●●○▲	●●●○▲	—	—	●●●○▲	—	●●●○▲	
暁から。	●●●●▲▲	●●●●▲▲	—	●○○○▲▲	●●●○▲▲	—	●●●○▲▲	
暁まで。	●●●●▲▲	●●●●▲▲	—	—	●●●○▲▲	—	●●●○▲▲	

助詞 「が」 : ŋa,nu、「から」 : kara、「まで」 : gadi,mađi、「に」 : kai,ni、「も」 : mu

分類	共通語	湾A	湾B	中里A	中里B	荒木A	荒木B
	鏡までも。	●●●▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲
	暦(kujumi)。	●●●	—	●●●	●●●	●●●	●●●
	暦が...	●●○▲	—	●●○▲	●●●▲	●●○▲	●●○▲
	暦が。	●●○▲/ ●●○▲	—	●●○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	暦も。	●●○▲	—	●●○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲
	暦から。	●●●▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	●●▲▲▲	●●○▲▲
	暦まで。	●●●▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	●●▲▲▲	●●○▲▲
	暦からも。	●●●▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲
	暦までも。	●●●▲▲	—	●●●▲▲	●●●▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲
7-C	刀(katana, hatana)。	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
	刀が...	●●●▲	—	○●●▲	●○○▲	○●●▲	●●●▲
	刀が。	○●●▲	—	○●●▲	○●●▲	○●●▲/ ○●●▲	●●●▲
	刀も。	○●●▲	—	○●●▲	○●●▲	○●●▲/ ○●●▲	●●●▲
	刀から。	○●●▲▲	—	○●●▲▲	○●●▲▲	○●●▲▲	●●●▲▲
	刀まで。	●●●▲▲	—	○●●▲▲	○●●▲▲	○●●▲▲	●●●▲▲
	刀からも。	●●●▲▲	—	○●●▲▲	○●●▲▲	○●●▲▲	●●●▲▲
	刀までも。	●●●▲▲	—	○●●▲▲	○●●▲▲	○●●▲▲	●●●▲▲
	畑(φate:, pate:)。	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
	畑が...	●●●▲	—	○●●▲	●○○▲	○●●▲	●●●▲
	畑が。	○●●▲	—	○●●▲	○●●▲	○●●▲/ ○●●▲	●●●▲
	畑も。	○●●▲	—	○●●▲	○●●▲	○●●▲/ ○●●▲	●●●▲
	畑から。	○●●▲▲	—	○●●▲▲	○●●▲▲	○●●▲▲	●●●▲▲
	畑まで。	●●●▲▲	—	○●●▲▲	○●●▲▲	○●●▲▲	●●●▲▲
	畑からも。	●●●▲▲	—	○●●▲▲	○●●▲▲	○●●▲▲	●●●▲▲
	畑までも。	●●●▲▲	—	○●●▲▲	○●●▲▲	○●●▲▲	●●●▲▲
	腰周り(gamaku)。	—	○●○	—	○●○	○●○	○●○
	腰周りが...	—	○●●▲	—	●○○▲	○●●▲	●●●▲
腰周りが。	—	○●●▲	—	○●●▲	○●●▲	●●●▲	
腰周りも。	—	○●●▲	—	○●●▲	○●●▲	●●●▲	
腰周りから。	—	○●●▲▲	—	○●●▲▲	○●●▲▲	●●●▲▲	
腰周りまで。	—	○●●▲▲	—	○●●▲▲	○●●▲▲	●●●▲▲	
腰周りからも。	—	—	—	○●●▲▲	○●●▲▲	●●●▲▲	
腰周りまでも。	—	—	—	○●●▲▲	○●●▲▲	●●●▲▲	
	暁(?a:tutsi)。	●●●○●	●●○●	●●○●/ ●●○●	●●○●	●●○●	●●○●
	暁が...	●●●○▲	●●○▲	●●○▲/ ●●○▲	●●●▲	○●○▲	●●○▲
	暁が。	●●●○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲	○●○▲	●●○▲
	暁も。	●●●○▲	●●○▲	●●○▲	●●○▲	○●○▲	●●○▲
	暁から。	●●●○▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲	○●○▲▲/ ○●○▲▲	●●○▲▲
	暁まで。	●●●○▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲	●●○▲▲	○●○▲▲	●●○▲▲

分類	共通語	小野津A	小野津B	志戸桶A	志戸桶B	塩道A	塩道B
8-A	暁からも。	—	●○○▲△(?)	—	●○○●▲▲△	●●○○●▲▲△	—
	暁までも。	—	●○○▲△(?)	—	●○○●▲▲△	●●○○●▲▲△	—
	食料(hanme:!)。	—	—	—	●○○○	—	●○○●
	食料が...	—	●○○○▲	—	●○○●▲	—	●○○○▲
	食料が。	—	●○○○▲	—	●○○●▲	—	—
	食料も。	—	●○○○▲	—	●○○●▲	—	—
	食料から。	—	●○○○▲△	—	●○○●▲△	—	—
	食料まで。	—	●○○○▲△	—	●○○●▲△	—	—
	食料からも。	—	●○○○▲▲△	—	●○○●▲▲△	—	—
	食料までも。	—	●○○○▲▲△	—	●○○●▲▲△	—	—
8-B	雷(hanNari)。	—	●○○●	—	●●○○	●●○○/ ●○○●	●○○●
	雷が...	—	●○○●▲	—	●●○○▲	●●○○▲	●○○○▲
	雷が。	—	●○○●▲	—	●●○○▲	●●○○▲	—
	雷も。	—	●○○●▲	—	●●○○▲	●●○○▲	—
	雷から。	—	●○○●▲△	—	●●○○▲△	●●○○▲△	—
	雷まで。	—	●○○●▲△	—	●●○○▲△	●●○○▲△	—
	雷からも。	—	●○○●▲▲△	—	●●○○▲▲△	●●○○▲▲△	—
	雷までも。	—	●○○●▲▲△	—	●●○○▲▲△	●●○○▲▲△	—
	台所(to:gura)。	—	●○○●	—	—	●○○	—
	台所が...	—	●○○●▲	—	—	●○○▲	—
	台所が。	—	●○○●▲	—	—	●○○▲	—
	台所も。	—	●○○●▲	—	—	●○○▲	—
	台所から。	—	●○○●▲△	—	—	●○○▲△/ ●●○○▲△	—
	台所まで。	—	●○○●▲△	—	—	●○○▲△/ ●●○○▲△	—
台所からも。	—	●○○●▲▲△	—	—	●○○▲▲△	—	
台所までも。	—	●○○●▲▲△	—	—	●○○▲▲△/ ●●○○▲▲△	—	
8-C	若い娘(me:rabi)。	—	●○○●	—	●●○○	●○○○	●○○○
	若い娘が...	—	●○○●▲	—	●●○○▲	●○○●▲	●○○●▲
	若い娘が。	—	●○○●▲	—	●●○○▲	●○○●▲	—
	若い娘も。	—	●○○●▲	—	●●○○▲	●○○●▲	—
	若い娘から。	—	●○○●▲△	—	●●○○▲△	●○○●▲△	—
	若い娘まで。	—	●○○●▲△	—	●●○○▲△	●○○●▲△	—
	若い娘からも。	—	●○○●▲▲△	—	●●○○▲▲△	●○○●▲▲△	—
	若い娘までも。	—	●○○●▲▲△	—	●●○○▲▲△	●○○●▲▲△	—
	天井(tinZio:!)。	—	—	—	●○○○	●○○○	●○○○
	天井が...	—	●○○○▲	—	●○○○▲	●○○○▲	●○○○▲
	天井が。	—	●○○○▲	—	●○○○▲	●○○○▲	—
	天井も。	—	●○○○▲	—	●○○○▲	●○○○▲	—
	天井から。	—	●○○○▲△	—	●○○○▲△	●○○○▲△	—

分類	共通語	坂嶺A	坂嶺B	阿伝A	阿伝B	上嘉鉄A	上嘉鉄B(1)	上嘉鉄B(2)
8-A	暁からも。	●●●●▲▲▲	●●●●▲▲▲	—	●○○○▲▲▲	●●●○▲▲▲	—	●●●○▲▲▲
	暁までも。	●●●●▲▲▲	●●●●▲▲▲	—	—	●●●○▲▲▲	—	●●●○▲▲▲
	食料(hanme:!)。	●○○○	—	—	●○○●	●○○○	—	—
	食料が...	●●○○▲	—	—	●○○○▲	●○○●▲	—	—
	食料が。	●●○○▲	—	—	●○○○▲	●○○●▲	—	—
	食料も。	●●○○▲	—	—	—	●○○●▲	—	—
	食料から。	●●○○▲▲	—	—	●○○○▲▲	●○○●▲▲	—	—
	食料まで。	●●○○▲▲	—	—	—	●○○●▲▲	—	—
	食料からも。	●●○○▲▲▲	—	—	●○○○▲▲▲	●○○●▲▲▲	—	—
食料までも。	●●○○▲▲▲	—	—	—	●○○●▲▲▲	—	—	
8-B	雷(hanuari)。	●●○○	—	●○○●/ ●○○●	—	●●●○●	—	—
	雷が...	—	—	●○○●▲	—	●●●○▲	—	—
	雷が。	●●○○▲	—	●○○○▲/ ●○○○▲	—	●●●○▲/ ●●●○▲	—	—
	雷も。	●●○○▲	—	—	—	●●●○▲	—	—
	雷から。	●●●●▲▲	—	—	—	●●●○▲▲	—	—
	雷まで。	●●●●▲▲	—	—	—	●●●○▲▲	—	—
	雷からも。	●●●●▲▲▲	—	—	—	●●●○▲▲▲	—	—
	雷までも。	●●●●▲▲▲	—	—	—	●●●○▲▲▲	—	—
	台所(to:gura)。	—	—	—	●○○●	—	—	—
	台所が...	—	—	—	●○○○▲	—	—	—
	台所が。	—	—	—	●○○○▲	—	—	—
	台所も。	—	—	—	—	—	—	—
	台所から。	—	—	—	●○○○▲▲	—	—	—
	台所まで。	—	—	—	—	—	—	—
台所からも。	—	—	—	●○○○▲▲▲	—	—	—	
台所までも。	—	—	—	—	—	—	—	
8-C	若い娘(me:rabi)。	●○○○	●○○○	●○○○	●○○○	●○○○	—	●○○○
	若い娘が...	●○○●▲	●○○○▲	—	●○○●▲	●○○●▲	—	●○○●▲
	若い娘が。	●○○●▲/ ●○○○▲	●○○○▲	●○○●▲	●○○●▲	●○○●▲/ ●○○○▲	—	●○○●▲
	若い娘も。	●○○●▲/ ●○○○▲	●○○○▲	—	—	●○○●▲	—	●○○●▲
	若い娘から。	●○○○▲▲	●○○○▲▲	—	●○○●▲▲	●○○●▲▲	—	●○○●▲▲
	若い娘まで。	●○○○▲▲	●○○○▲▲	—	—	●○○●▲▲	—	●○○●▲▲
	若い娘からも。	●○○○▲▲▲/ ●○○○▲▲▲	●○○○▲▲▲	—	●○○●▲▲▲	●○○●▲▲▲	—	●○○●▲▲▲
	若い娘までも。	●○○○▲▲▲	●○○○▲▲▲	—	—	●○○●▲▲▲	—	●○○●▲▲▲
	天井(tinzió:!)。	●○○○	●○○○	●○○○	●○○○	●○○○	—	●○○○
	天井が...	●○○●▲	●○○○▲	—	●○○●▲	●○○●▲	—	●○○●▲
	天井が。	●○○●▲/ ●○○○▲	●○○○▲	●○○●▲	●○○●▲	●○○●▲	—	●○○●▲
	天井も。	●○○●▲/ ●○○○▲	●○○○▲	—	—	●○○●▲	—	●○○●▲
	天井から。	●○○○▲▲/ ●○○○▲▲	●○○○▲▲	—	●○○●▲▲	●○○●▲▲	—	●○○●▲▲

分類	共通語	湾A	湾B	中里A	中里B	荒木A	荒木B
8-A	暁からも。	●●●●●▲▲▲	●●●●●▲▲▲	●●●●●▲▲▲	●●●●●▲▲▲	○●○●▲▲▲/ ○●○●▲▲▲	●●●○▲▲▲
	暁までも。	●●●●●▲▲▲	●●●●●▲▲▲	●●●●●▲▲▲	●●●●●▲▲▲	○●○●▲▲▲/ ○●○●▲▲▲	●●●○▲▲▲
	食料(hanme:!)。	—	●●●○	—	●●●○	—	●●●○
	食料が...	—	●●●○▲	—	●●●○▲	—	●○●●▲
	食料が。	—	●●●○▲	—	●●●○▲	—	●○●●▲
	食料も。	—	●●●○▲	—	●●●○▲	—	●○●●▲
	食料から。	—	●●●●▲▲	—	●●●●▲▲	—	●○●●▲▲
	食料まで。	—	●●●●▲▲	—	●●●●▲▲	—	●○●●▲▲
	食料からも。	—	●●●●▲▲▲	—	●●●●▲▲▲	—	●○●●▲▲▲
食料までも。	—	●●●●▲▲▲	—	●●●●▲▲▲	—	●○●●▲▲▲	
8-B	雷(hannari)。	●●●○	●●●○	●●●○	●●●○	●●●○	●●●○
	雷が...	●●●○▲	●●●○▲	●●●○▲	●●●○▲	○●○●▲	●●●○▲
	雷が。	●●●○▲	●●●○▲	●●●○▲	●●●○▲	○●○●▲	●●●○▲
	雷も。	●●●○▲	●●●○▲	●●●○▲	●●●○▲	○●○●▲	●●●○▲
	雷から。	●●●●▲▲	●●●●▲▲	●●●●▲▲	●●●●▲▲	○●○●▲▲	●●●○▲▲
	雷まで。	●●●●▲▲	●●●●▲▲	●●●●▲▲	●●●●▲▲	○●○●▲▲/ ○●○●▲▲	●●●○▲▲
	雷からも。	●●●●▲▲▲	●●●●▲▲▲	●●●●▲▲▲	●●●●▲▲▲	○●○●▲▲▲	●●●○▲▲▲
	雷までも。	●●●●▲▲▲	●●●●▲▲▲	●●●●▲▲▲	●●●●▲▲▲	○●○●▲▲▲/ ○●○●▲▲▲	●●●○▲▲▲
	台所(to:gura)。	—	—	—	●●●○	—	●●●○
	台所が...	—	—	—	●●●○▲	—	●●●○▲
	台所が。	—	—	—	●●●○▲	—	●●●○▲
	台所も。	—	—	—	●●●○▲	—	●●●○▲
	台所から。	—	—	—	●●●●▲▲	—	●●●○▲▲
台所まで。	—	—	—	●●●●▲▲	—	●●●○▲▲	
台所からも。	—	—	—	●●●●▲▲▲	—	●●●○▲▲▲	
台所までも。	—	—	—	●●●●▲▲▲	—	●●●○▲▲▲	
8-C	若い娘(me:rabi)。	●●●○/ ●●●○	●●●○	●●●○	●●●○	●●●○	●●●○
	若い娘が...	●○●●▲	●○●●▲	●○●●▲	●○●○▲	●○●●▲	●○●●▲
	若い娘が。	●○●●▲	●○●●▲	●○●●▲/ ●○●○▲	●○●●▲	●○●●▲	●○●●▲
	若い娘も。	●○●●▲	●○●●▲	●○●●▲	●○●●▲	●○●●▲	●○●●▲
	若い娘から。	●○●○▲▲/ ●●●●▲▲	●○●●▲▲	●○●●▲▲	●○●●▲▲	●○●●▲▲	●○●●▲▲
	若い娘まで。	●○●●▲▲	●○●●▲▲	●○●●▲▲	●○●●▲▲	●○●●▲▲	●○●●▲▲
	若い娘からも。	●○●●▲▲▲	●○●●▲▲▲	●○●●▲▲▲	●○●●▲▲▲	●○●●▲▲▲/ ●○●○▲▲▲	●○●●▲▲▲
	若い娘までも。	●●●●▲▲▲	●○●●▲▲▲	●○●●▲▲▲	●○●●▲▲▲	●○●○▲▲▲	●○●●▲▲▲
	天井(tinzio:!)。	●○●○/ ●●●○	●○●○	●○●○	—	●○●○	●○●○
	天井が...	●●●●▲	●○●●▲	●○●●▲	—	●○●●▲	●○●●▲
天井が。	●○●●▲	●○●●▲	●○●●▲	—	●○●●▲	●○●●▲	
天井も。	●○●●▲	●○●●▲	●○●●▲	—	●○●●▲	●○●●▲	
天井から。	●○●●▲▲	●○●●▲▲	●○●●▲▲	—	●○●●▲▲	●○●●▲▲	

分類	共通語	小野津A	小野津B	志戸桶A	志戸桶B	塩道A	塩道B
	天井まで。	—	●○○○▲▲	—	●○○●▲▲	●○○●▲▲	—
	天井からも。	—	●○○○▲▲▲	—	●○○●▲▲▲	●○○●▲▲▲	—
	天井までも。	—	●○○○▲▲▲	—	●○○●▲▲▲	●○○●▲▲▲	—
9-A	葉(pa:)。	—	●○	—	—	—	○●
	葉で...	—	○●▲	—	—	—	●○▲
	葉で...。	—	●○▲	—	—	—	—
	紙(habi)。	—	●○	—	—	—	○●
	紙で...	—	○●▲	—	—	—	●○▲
	紙で...。	—	○●▲	—	—	—	—
	布(nunu)。	—	●○	—	—	—	○●
	布で...	—	○●▲	—	—	—	●○▲
	布で...。	—	○●▲	—	—	—	—
	にんにく(pir	—	●○	—	—	—	○●
	にんにくで...	—	○●▲	—	—	—	●○▲
	にんにくで...。	—	○●▲	—	—	—	—
	釜(p <sup>h</sup> agama)。	—	○●○	—	—	—	○●○
釜で...	—	○●○▲	—	—	—	○●●▲	
釜で...。	—	○●●▲	—	—	—	—	
9-B	木(ki:)。	—	○●	—	—	—	○●
	木で...	—	●○▲	—	—	—	●○▲
	木で...。	—	●○▲	—	—	—	—
	豆(mami)。	—	○●	—	—	—	○●
	豆で...	—	●○▲	—	—	—	●○▲
	豆で。	—	●○▲	—	—	—	—
	麦(muni)。	—	○●	—	—	—	○●
	麦で...	—	●○▲	—	—	—	●○▲
	麦で...。	—	●○▲	—	—	—	—
	蕪(bira)。	—	○●	—	—	—	○●
	蕪で...	—	●○▲	—	—	—	●○▲
	蕪で。	—	●○▲	—	—	—	—
	櫛(sabatsi)。	—	●○○	—	—	—	●○○
櫛で...	—	●○○▲	—	—	—	●●○▲	
櫛で。	—	●○○▲	—	—	—	—	
	鍋(nabi)。	—	○●	—	—	—	●○
	鍋で...	—	●○▲	—	—	—	●●▲
	鍋で。	—	●○▲	—	—	—	—
	舟。	—	○●	—	—	—	●○

分類	共通語	坂嶺A	坂嶺B	阿伝A	阿伝B	上嘉鉄A	上嘉鉄B(1)	上嘉鉄B(2)	
	天井まで。	●●○○▲▲/ ●○○○▲▲	●○○○▲▲	—	—	●○○●▲▲	—	●○○●▲▲	
	天井からも。	●●○○▲▲△/ ●○○○▲▲△	●○○○▲▲△	—	●○○●▲▲△	●○○●▲▲△	—	●○○●▲▲△	
	天井までも。	●●○○▲▲△/ ●○○○▲▲△	●○○○▲▲△	—	—	●○○●▲▲△	—	●○○●▲▲△	
9-A	葉(pa:)。	—	—	—	—	—	—	○●	
	葉で...	—	—	—	—	—	—	●●▲▲	
	葉で...。	—	—	—	—	—	—	—	
	紙(habi)。	—	—	—	—	—	—	○●	
	紙で...	—	—	—	—	—	—	●●▲▲	
	紙で...。	—	—	—	—	—	—	—	
	布(nunu)。	—	—	—	—	—	—	○●	
	布で...	—	—	—	—	—	—	●●▲▲	
	布で...。	—	—	—	—	—	—	—	
	にんにく(pir	—	—	—	—	—	—	—	○●
	にんにくで...	—	—	—	—	—	—	—	●●▲▲
	にんにくで...。	—	—	—	—	—	—	—	—
9-B	釜(p <sup>h</sup> agama)。	—	—	—	—	—	—	○●○	
	釜で...	—	—	—	—	—	—	●●●▲▲	
	釜で...。	—	—	—	—	—	—	—	
	木(ki:)。	—	—	—	—	—	—	○●	
	木で...	—	—	—	—	—	—	●●▲▲	
	木で...。	—	—	—	—	—	—	—	
	豆(mami)。	—	—	—	—	—	—	○●	
	豆で...	—	—	—	—	—	—	●●▲▲	
	豆で...	—	—	—	—	—	—	—	
	麦(muni)。	—	—	—	—	—	—	○●	
	麦で...	—	—	—	—	—	—	●●▲▲	
	麦で...。	—	—	—	—	—	—	—	
蕪(bira)。	—	—	—	—	—	—	—		
蕪で...	—	—	—	—	—	—	—		
蕪で...	—	—	—	—	—	—	—		
櫛(sabatsi)。	—	—	—	—	—	—	—	●○●▲	
櫛で...	—	—	—	—	—	—	—	●●●▲▲	
櫛で...	—	—	—	—	—	—	—	—	
	鍋(nabi)。	—	—	—	—	—	—	●○	
	鍋で...	—	—	—	—	—	—	●●▲▲	
	鍋で...	—	—	—	—	—	—	—	
	舟。	—	—	—	—	—	—	●○	

分類	共通語	湾A	湾B	中里A	中里B	荒木A	荒木B
	天井まで。	●○○●▲△	●○○●▲△	●○○●▲△	—	●○○●▲▲	●○○●▲△
	天井からも。	●○○●▲▲△	●○○●▲▲△	●○○●▲▲△	—	●○○●▲▲▲	●○○●▲▲△
	天井までも。	●●●●▲▲△	●○○●▲▲△	●○○●▲▲△	—	●○○●▲▲▲	●○○●▲▲△
9-A	葉(pa:)。	—	—	—	○●	—	—
	葉で...	—	—	—	●●△	—	●○▲
	葉で...。	—	—	—	●○▲	—	●○▲
	紙(habi)。	—	○●	—	○●	—	○●
	紙で...	—	●○▲	—	●●△	—	●○▲
	紙で...。	—	●○▲	—	●○▲	—	●○▲
	布(nunu)。	—	○●	—	○●	—	○●
	布で...	—	●○▲	—	●●△	—	●○▲
	布で...。	—	●○▲	—	●○▲	—	●○▲
	にんにく(pir	—	○●	—	○●	—	○●
	にんにくで...	—	●○▲	—	●●△	—	●○▲
	にんにくで...。	—	●○▲	—	●○▲	—	●○▲
	釜(p <sup>h</sup> agama)。	—	○●○	—	—	—	○●○
釜で...	—	○●●▲	—	—	—	●●●▲	
釜で...。	—	—	—	—	—	●●●△	
9-B	木(ki:)。	—	—	—	○●	—	○●
	木で...	—	—	—	●●△	—	●○▲
	木で...。	—	—	—	●○▲	—	●○▲
	豆(mami)。	—	○●	—	○●	—	○●
	豆で...	—	●○▲	—	●●△	—	●○▲
	豆で...。	—	●○▲	—	●○▲	—	●○▲
	麦(muni)。	—	○●	—	○●	—	○●
	麦で...	—	●○▲	—	●●△	—	●○▲
	麦で...。	—	●○▲	—	●○▲	—	●○▲
	蕪(bira)。	—	○●	—	○●	—	●○
	蕪で...	—	—	—	●●△	—	●●▲
	蕪で...。	—	—	—	●○▲	—	●●△
	櫛(sabatsi)。	—	●○●	—	●○●	—	●○●
櫛で...	—	●○○▲	—	●●●△	—	●●○▲	
櫛で...。	—	●○○▲	—	●○○▲	—	●●○▲	
	鍋(nabi)。	—	●○	—	●○	—	●○
	鍋で...	—	—	—	●●▲	—	●●▲
	鍋で...。	—	—	—	●●△	—	●●△
	舟。	—	●○	—	●○	—	●○



分類	共通語	小野津A	小野津B	志戸桶A	志戸桶B	塩道A	塩道B
9-C	舟で...	—	●○▲	—	—	—	●●▲
	舟で。	—	●○▲	—	—	—	—
	籠(tiru)。	—	—	—	—	—	—
	籠で...	—	—	—	—	—	—
	籠で。	—	—	—	—	—	—
	臼(?usu)。	—	○●	—	—	—	●○
	臼で...	—	●○▲	—	—	—	●●▲
	臼で。	—	●○▲	—	—	—	—
	よもぎ(putu)。	—	○●	—	—	—	●○
	よもぎで...	—	●○▲	—	—	—	●●▲
	よもぎで。	—	●○▲	—	—	—	—
	砂糖(sata:)。	—	●○○	—	—	—	○○○
	砂糖で...	—	●○○▲	—	—	—	○○●▲
砂糖で。	—	●○○▲	—	—	—	—	
10-A	井戸(ha:)。	—	●○	—	—	—	—
	井戸で...	—	●○△	—	—	—	—
	井戸で。	—	●○△	—	—	—	—
	洞窟(gama)。	—	—	—	—	—	○●
	洞窟で...	—	○●△	—	—	—	●○▲
	洞窟で。	—	○●△	—	—	—	●○▲
	港(minato)。	—	—	—	—	—	—
	港で...	—	○●△△	—	—	—	—
	港で。	—	○●△△	—	—	—	—
10-B	家(ja:)。	—	—	—	—	—	○●
	家で...	—	●○▲	—	—	—	●○▲
	家で。	—	●○▲	—	—	—	●○▲
	山(jama)。	—	—	—	—	—	○●
	山で...	—	●○▲	—	—	—	●○▲
	山で。	—	●○▲	—	—	—	●○▲
	母屋(?umuti)。	—	—	—	—	—	●○○
	母屋で...	—	●○○▲	—	—	—	●●○▲
	母屋で。	—	●○○▲	—	—	—	●●○▲
10-C	海。	—	○●	—	—	—	●○
	海で...	—	●○▲	—	—	—	●●▲
	海で。	—	●○▲	—	—	—	●●△
	野原(paru)。	—	○●	—	—	—	○●
	野原で...	—	●○▲	—	—	—	●○▲
	野原で。	—	●○▲	—	—	—	●○▲

分類	共通語	坂嶺A	坂嶺B	阿伝A	阿伝B	上嘉鉄A	上嘉鉄B(1)	上嘉鉄B(2)
9-C	舟で...	-	-	-	-	-	-	●●▲▲
	舟で。	-	-	-	-	-	-	-
	籠(tiru)。	-	-	-	-	-	-	●○
	籠で...	-	-	-	-	-	-	●●▲▲
	籠で。	-	-	-	-	-	-	-
	臼(?usu)。	-	-	-	-	-	-	●○
	臼で...	-	-	-	-	-	-	●●▲▲
	臼で。	-	-	-	-	-	-	-
	よもぎ(putu)。	-	-	-	-	-	-	●○
	よもぎで...	-	-	-	-	-	-	●●▲▲
	よもぎで。	-	-	-	-	-	-	-
	砂糖(sata:)。	-	-	-	-	-	-	○●○
	砂糖で...	-	-	-	-	-	-	●●●▲▲
砂糖で。	-	-	-	-	-	-	-	
10-A	井戸(ha:)。	-	-	-	-	-	-	○●
	井戸で...	-	-	-	-	-	-	●●▲▲
	井戸で。	-	-	-	-	-	-	-
	洞窟(gama)。	-	-	-	-	-	-	○●
	洞窟で...	-	-	-	-	-	-	●●▲▲
	洞窟で。	-	-	-	-	-	-	-
	港(minato)。	-	-	-	-	-	-	●○●
	港で...	-	-	-	-	-	-	●●●▲▲
港で。	-	-	-	-	-	-	-	
10-B	家(ja:)。	-	-	-	-	-	-	○●
	家で...	-	-	-	-	-	-	●●▲▲
	家で。	-	-	-	-	-	-	-
	山(jama)。	-	-	-	-	-	-	○●
	山で...	-	-	-	-	-	-	●●▲▲
	山で。	-	-	-	-	-	-	-
	母屋(?umuti)。	-	-	-	-	-	-	●○●
	母屋で...	-	-	-	-	-	-	●●●▲▲
母屋で。	-	-	-	-	-	-	-	
10-C	海。	-	-	-	-	-	-	●○
	海で...	-	-	-	-	-	-	●●▲▲
	海で。	-	-	-	-	-	-	-
	野原(paru)。	-	-	-	-	-	-	●○
	野原で...	-	-	-	-	-	-	●●▲▲
	野原で。	-	-	-	-	-	-	-

分類	共通語	湾A	湾B	中里A	中里B	荒木A	荒木B
9-C	舟で...	-	-	-	●●▲	-	●●▲
	舟で。	-	-	-	●●△	-	●●△
	籠(tiru)。	-	●○	-	●○	-	●○
	籠で...	-	-	-	●●▲	-	●●▲
	籠で。	-	-	-	●●△	-	●●△
	臼(?usu)。	-	●○	-	●○	-	●○
	臼で...	-	-	-	●●▲	-	●●▲
	臼で。	-	-	-	●●△	-	●●△
	よもぎ(putu)。	-	●○	-	●○	-	●○
	よもぎで...	-	-	-	●●▲	-	●●▲
	よもぎで。	-	-	-	●●△	-	●●△
	砂糖(sata:)。	-	○○○	-	○○○	-	○○○
砂糖で...	-	-	-	●○○▲	-	●●●▲	
砂糖で。	-	-	-	○○●△	-	●●●△	
10-A	井戸(ha:)。	-	●●	-	○●	-	○●
	井戸で...	-	●○▲	-	●●△	-	●○▲
	井戸で。	-	●○▲	-	●○▲	-	●○▲
	洞窟(gama)。	-	-	-	○●	-	○●
	洞窟で...	-	-	-	●●△	-	●○▲
	洞窟で。	-	-	-	●○▲	-	●○▲
	港(minato)。	-	○○○	-	●○○	-	●○○
	港で...	-	-	-	●●●△	-	●●○▲
港で。	-	-	-	●●○▲	-	●●○▲	
10-B	家(ja:)。	-	●●	-	○●	-	○●
	家で...	-	●○▲	-	●●△	-	●○▲
	家で。	-	●○▲	-	●○▲	-	●○▲
	山(jama)。	-	○●	-	○●	-	○●
	山で...	-	●○▲	-	●●△	-	●○▲
	山で。	-	●○▲	-	●○▲	-	●○▲
	母屋(?umuti)。	-	●○○	-	●○○	-	●○○
	母屋で...	-	●●○▲	-	●●●△	-	●●○▲
母屋で。	-	●●○▲	-	●●○▲	-	●●○▲	
10-C	海。	-	●○	-	●○	-	●○
	海で...	-	-	-	●●▲	-	●●▲
	海で。	-	-	-	●●△	-	●●△
	野原(paru)。	-	○●	-	○●	-	○●
	野原で...	-	●○▲	-	●●△	-	●○▲
	野原で。	-	●○▲	-	●○▲	-	●○▲

分類	共通語	小野津A	小野津B	志戸桶A	志戸桶B	塩道A	塩道B
	浜(p <sup>h</sup> ama)。	—	○●	—	—	—	●○
	浜で...	—	●○▲	—	—	—	●●▲
	浜で。	—	●○▲	—	—	—	●●△
	畑(pate:)。	—	●○○	—	—	—	○●○
	畑で...	—	●○○▲	—	—	—	○●●▲
	畑で。	—	●○○▲	—	—	—	—

アクセントデータ

分類	共通語	坂嶺A	坂嶺B	阿伝A	阿伝B	上嘉鉄A	上嘉鉄B(1)	上嘉鉄B(2)
	浜(p <sup>h</sup> ama)。	—	—	—	—	—	—	●○
	浜で...	—	—	—	—	—	—	●●▲▲
	浜で。	—	—	—	—	—	—	—
	畑(pate:)。	—	—	—	—	—	—	○●○
	畑で...	—	—	—	—	—	—	●●●▲▲
	畑で。	—	—	—	—	—	—	—

助詞 「が」 : ŋa,nu、「から」 : kara、「まで」 : gadi,madi、「に」 : kai,ni、「も」 : mu

分類	共通語	湾A	湾B	中里A	中里B	荒木A	荒木B
	浜(p <sup>h</sup> ama)。	—	○○	—	●○	—	●○
	浜で...	—	—	—	●●▲	—	●●▲
	浜で。	—	—	—	●●△	—	●●△
	畑(pate:)。	—	○○○	—	○○○	—	○○○
	畑で...	—	—	—	●○○▲	—	●●●▲
	畑で。	—	—	—	○○●△	—	●●●△



## 文法データ

以下には、喜界島諸方言の文法データを掲載する。語形は国際音声字母で表記する。音声記号の説明については、第3章「喜界島方言の音韻」を参照されたい。その他、方言文の表記のしかたについては、以下のような方法で行う。

- ・語形が複数、回答された場合には、複数回答の範囲を { } でくくり、2つ（またはそれ以上）の語形を / で区切って併記する。
- ・話者により回答が異なる場合は、2つ（またはそれ以上）の語形を // で区切り、それぞれの語形の後ろに話者別の記号（アルファベットの大文字）を（ ）に入れて示す。
- ・任意の要素（あってもなくても文が成り立つような要素）は、その部分を（ ）に入れて示す。任意の要素には、音素、語、文節、句等、さまざまなレベルのものがある。
- ・文の終わりには . を記入する。

各地点の調査者は以下のとおり。

地区名	班	調査担当者
小野津	文法 M	松本・下地
	文法 K	金田・井上・新永
	文法 O	大西・荻野・當山・重野
	文法 T	田窪・白田・山田
志戸桶	文法 M・T	松本・下地・田窪・白田・山田
	文法 K	金田・井上・新永・佐藤
	文法 O	大西・荻野・當山・重野
上嘉鉄	文法 M	松本・下地・竹田
	文法 K	金田・井上・新永・佐藤
	文法 O	狩俣・久保蘭・當山・重野
中里	文法 M	松本・三井・下地
	文法 K	金田・井上・新永・佐藤
	文法 O	狩俣・久保蘭・當山・重野
荒木	文法 M	松本・三井・下地
	文法 K	金田・井上・新永
	文法 O	狩俣・久保蘭・川瀬・重野



番号	地域	班	共通語文	備考
01	0共通語		おれは きょうは いそがしい	
01	1小野津	M	wano: k'u:ja {ʔisugasa/ʔisugasan(do:)}.	
01	1小野津	K	wano: k'u: ɕigarasan.	
01	2志戸桶	M	wano: k'u:ja ʔisugasa.	
01	2志戸桶	K	du:ja k'u:ja ɕigarasan.	
01	2志戸桶	O	wano: k'u:ja ʔisugasa.	
01	3上嘉鉄	M	wano: ɕu:ja ʔiɕugasa {ʔuɕiran/ʔuɕira:}.	
01	3上嘉鉄	K	wano: su:wa ʔisogasan.	
01	4中里	M	wano: su:ja ʔisugasa.	
01	4中里	K	wano: su:ja ʔisugasai.	
01	4中里	O	wano: su:ja isugasai.	話者Dはwan jaとも。
01	5荒木	M	wano: su:ja ʔisugasai.	isugasaiの語末のiに鼻音化が聞こえる。
01	5荒木	O	wanuja su:ja {ʔisuŋasain/ʔisuŋasan}.	
02	0共通語		おまえが 畑へ 行け。	
02	1小野津	M	daŋa {h/ɸ}ate:kai ʔiki.	
02	1小野津	K	da: hate:kai ʔiki.	
02	2志戸桶	M	daja ɸakkai {ʔikijo:/ʔikijo:}.	pate:/ɸate:「田んぼ」
02	2志戸桶	K	da ja {h/p}ate:kai ʔiki.	
02	2志戸桶	O	da(:)ŋa pate:kai {ʔiki/ʔiki}.	
02	3上嘉鉄	M	da: {hate:katsi/hate:nʔi} {ʔikijo:/ʔikinja}.	
02	3上嘉鉄	K	da: hate:katsi {ʔiki/ʔiki}.	
02	4中里	M	daŋa hate:gatsi ʔiki.	
02	4中里	K	daŋa hate:gatsi ʔiki.	
02	4中里	O	daŋa {hate:ni/hategatsi} ʔiki.	話者Dはhate:iとも。
02	5荒木	M	daŋa hate:katsi iki.	
02	5荒木	O	da: hate:kanʔi ʔiki.	
03	0共通語		うん、畑へは おれが いく。	
03	1小野津	M	ʔin, hate:kae: {wanŋa/waŋa} ʔikʔui.	
03	1小野津	K	ʔin, hate:kae: waŋa ʔikʔui.	
03	2志戸桶	M	n:, ɸakkai waŋa ʔikʔun{kara/na}.	2への返答として。
03	2志戸桶	O	{ʔun(C)//ʔin(D)} pate:{kai(C)//kae:(D)} waga ʔikʔui.	
03	3上嘉鉄	M	n:, hate:{je/e} wanu ʔikin.	

番号	地域	班	共通語文	備考
03	3上嘉鉄	K	ʔi:, hate:katɕe: waNnu ʔika.	
03	4中里	M	ʔiN, hate:gatɕe: waŋa ʔitɕuŋa.	
03	4中里	K	ʔiN, hate:gatɕe: waŋa ʔitɕui.	
03	4中里	O	ʔuN hate:gatɕe: waŋa ʔitɕui.	
03	5荒木	M	ʔiN, hate:tsje: waŋa ʔitɕui.	
03	5荒木	O	ʔuN, hate:kan'e: waŋa ʔitɕundo:.	
04	0共通語		おれの 鋏は どこに ある。	
04	1小野津	M	wa: k <sup>2</sup> we:ja dza:n <sup>i</sup> ʔai.	
04	1小野津	K	waNnu φe:ja za:n <sup>i</sup> ʔakka.	
04	2志戸桶	M	wa: kwë:ja {dza:n <sup>i</sup> ʔakka(B)/dza:kaina(A)}.	ë:は音がややあいまい。
04	2志戸桶	O	{wa: (k)kwe:ja(C)//waNnu kwe:ja(D)} dza:n <sup>i</sup> ʔai.	
04	3上嘉鉄	M	{wanuN/waNnu} k <sup>2</sup> e:ja dza:n <sup>i</sup> {ʔarijo/ʔando:}.	
04	3上嘉鉄	K	wa: ke:ja za:n <sup>i</sup> ʔari joʔ.	文末に呼気の急激な停止(声門閉鎖)が聞こえる。
04	4中里	M	w <sup>2</sup> a: k <sup>2</sup> e:ja {dza:n <sup>i</sup> {aijo:/akka}/dza:n <sup>i</sup> idu aru}.	dza:n <sup>i</sup> idu aijo:もOK
04	4中里	K	wa: ke:ja za:n <sup>i</sup> idu ʔaru.	
04	4中里	O	waNnu k <sup>2</sup> e:ja dza:ni {ʔassu jo:/ʔakkai}.	
04	5荒木	M	wa: k <sup>2</sup> we:ja dza:n <sup>i</sup> {aN/ai}.	
04	5荒木	O	wa: k <sup>2</sup> we:ja {dza:n <sup>i</sup> ʔain/dza:n <sup>i</sup> idu ʔa:}.	
05	0共通語		この 鎌は 太郎のか。	
05	1小野津	M	φunu kama: taro:nu muNna.	
05	1小野津	K	huN φe:ja taru:nu muNka.	φe:は「鋏」
05	2志戸桶	M	ʔuN hama: taro:nu hamakaja:.	
05	2志戸桶	O	{huN(C)/ʔuN(D)} hama: taro:nu muNkaja(:).	
05	3上嘉鉄	M	φuN hama: taro:nu muN{na/ka}.	
05	3上嘉鉄	K	ʔuN kama: taro:nu muNnaʔ.	文末に呼気の急激な停止(声門閉鎖)が聞こえる。
05	4中里	M	ʔuN hama: {taro:nu {na/ka}/taro:suna/taro:nu muNna}.	話者Bはdiruŋaがとも。
05	4中里	K	ʔuN hama: taro:nu muN{na(:)/ka(:)}.	
05	4中里	O	ʔuN hama: taro:nu muN na.	
05	5荒木	M	ʔuN hama: taro:nu muNna.	
05	5荒木	O	ʔuN hama: taro: muNna.	

番号	地域	班	共通語文	備考
06	0共通語		どれが おまえの 笠だ	
06	1小野津	M	ɔzuriŋa da:(nu) hasajo.	
06	1小野津	K	zuriŋa da: hasa do:.	
06	2志戸桶	M	diruŋa da: hasajo:.	
06	2志戸桶	O	diruŋa {da:(C)//da:nu(D)} kasaka.	kasaはhasaとも。
06	3上嘉鉄	M	diruŋo: da: {muNnu haɕana/muno: haɕa}.	diruŋo:は「どれは」か?
06	3上嘉鉄	K	duŋŋa da: hasa jo.	
06	4中里	M	diŋŋa da: hasajo:.	※「~の(もの)か」 da:suna 「君のか」 t'a:suna 「だれのか」
06	4中里	K	diŋga da: hasa jo.	gaはŋaか。
06	4中里	O	duŋŋa da: hasa jo:.	
06	5荒木	M	diruŋa da: {kasa/hasa}.	kasa = 傘, 笠 / hasa = 笠のみ で意味が異なる。 / ex. hasa hanbi 「笠(帽子)かぶれ」
06	5荒木	O	diŋŋa da: hasa jo:.	
07	0共通語		その 笠が おれのだ。	
07	1小野津	M	ɸunu hasaŋa wa: muŋɕa.	
07	1小野津	K	huŋ hasaŋa wa: muŋ.	
07	2志戸桶	M	ʔuŋ hasaŋa wa: {muŋu/muŋ}.	ʔuriŋa wa: hasa. 「それが私の笠だ」という言い方も
07	2志戸桶	O	huŋ {hasa(C)//kasa(D)}ŋa wa: muŋɕa.	
07	3上嘉鉄	M	ɸuŋ {haɕa:/hasa:} wa: muŋdo:.	共通語文には非対応「そのかさは~」
07	3上嘉鉄	K	ʔuŋ hasaga wa: muŋ.	
07	4中里	M	ʔuŋ hasaŋa wa: muŋɕa.	
07	4中里	K	ʔuŋ hasaŋa wa: muŋ do:.	
07	4中里	O	ʔuŋ hasaŋa wa: muŋ do:.	
07	5荒木	M	ʔuŋ kasa: wa: muŋdo:.	kasa: 「かさは」
07	5荒木	O	ʔuŋ hasaŋa wa: muŋ do:.	
08	0共通語		この ふろしきは おまえのか。	
08	1小野津	M	ɸunu ɸuruɕike: da: muŋna.	
08	1小野津	K	huŋ huŋɕike: da: muŋka.	

番号	地域	班	共通語文	備考
08	2志戸桶	M	ʔuN ɸuruɕike: da: muNna.	
08	2志戸桶	O	huN huɾuɕike: da: muN{ka(C)//na(D)}.	
08	3上嘉鉄	M	ɸuN ɸuruɕike: da: muNna.	
08	3上嘉鉄	K	ʔuN ʔusukki(:)ja da: muNna.	
08	4中里	M	ʔuN {ɸuruɕike:/ʔutsukki:ja} da: muNna.	
08	4中里	K	ʔuN huɾuɕike: da: muN na.	
08	4中里	O	ʔuN huɾuɕike: da: muN na.	
08	5荒木	M	ʔuN {ɸuruɕike:/ʔutsukki:ja} da: muNna.	
08	5荒木	O	ʔuN ʔutsukki:ja da: muNna.	
09	0共通語		それは おとうとの かもしれない。	
09	1小野津	M	ʔure: ʔuttu:nu muNka wakarando:.	
09	1小野津	K	hure: ʔuttu:nu muNkamu ɕirira:.	
09	2志戸桶	M	ʔure: ʔuttuN muNkamu wakaran.	
09	2志戸桶	O	ʔure: ʔuttu:no kamu {ɕirera:/ɕirira:}(C)// ʔure: ʔuttu:nu muNkamo wakara:(D)}.	
09	3上嘉鉄	M	ɸure: ʔuttunu muNkamu wakarando:.	
09	3上嘉鉄	K	ʔure: ʔuttunu muNkamu ɕirira:.	
09	4中里	M	ʔure: ʔuttu:nu (muN)kamu {ɕirira:(A)// wakara:ja:(B)}.	
09	4中里	K	ʔure: ʔuttu:nu kamu wakara:.	
09	4中里	O	ʔure: ʔuttu:nu muNkamu wakara:.	
09	5荒木	M	ʔure: ʔuttu:nu muNkamu {wakaran/ɕiriraN/ɕirira:}.	ʔuttu:は目下の意なのでʔutu: tuのほうがベターとのこと
09	5荒木	O	ʔuN ʔutsukki:ja wa: ʔuttunu muNza.	標準語の文と対応していな い?
10	0共通語		沖縄には 船で 行くより 飛行機で 行った ほうが いい。	
10	1小野津	M	ʔokinawan'i ɸuniɕi ʔik'ujukka ɕiko:kizi ʔizan ho:ŋa jutasando:.	
10	1小野津	K	ʔukina:kae: huniɕi ʔik'uijukka ɕiko:kizi ʔizan ho:ŋa jutasai.	
10	2志戸桶	M	{ʔokinawa/naɸa}n'ie ɸuniɕi ʔik'uN jukkamu ɕiko:kizi ʔizan ho:ŋa jutasaija:.	

番号	地域	班	共通語文	備考
10	2志戸桶	O	ʔukinawan(ʔ)e: hunidzi ʔikʰunʔori ɕiko:kide ʔidʒan ho:ŋa jutasai.(C)// ʔukinawakae: {ne:/kae:} hunidzi ʔikʰunʔuri ɕiko:kidzi ʔidʒan ho:ŋa jutasai.(D)	
10	3上嘉鉄	M	ʔokinawanʔe: ɸunʔe: ʔikʰunʔuri ɕiko:kʔe: ʔizan ho:ŋa jutasando:.	
10	3上嘉鉄	K	ʔokinawakatʔe: hunʔizi ʔitʔukkamu ɕiko:kizi ʔizan ho:nu jutasari.	
10	4中里	M	ʔokina:gatʔe: ɸunʔizi {ʔitʔukkamu(A)//ʔitʔunʔur imu(B)} ɕiko:kizi ʔizan ho:ŋa jutasai(ja:).	
10	4中里	K	ʔokina: {nʔe:/gatʔe} hunʔizi ʔitʔukkamu ɕiko:kizi ʔizan ho:ŋa juta(s)sai.	
10	4中里	O	ʔokina:gatʔe: {huni/humi}dʒi ʔitʔukkamu ɕiko:kidzi ʔidʒan ho:ŋa jutasari.	
10	5荒木	M	ʔokinawanʔe: ɸunʔizi {ʔitʔunʔuri/ʔitʔunʔukka} ɕiko:kizi ʔizan ho:ŋa jutasan{i/}	jutasaiの語末のiに鼻音化が聞こえる。
10	5荒木	O	ʔokina: kanʔe: hunʔizi ʔizan jurimu ɕiko:kizi ʔizan ho:ŋa jutasan do:.	
11	0共通語		飛行機は 一日に 一回しか ない。	
11	1小野津	M	ɕiko:ke: ɸittʔi:nʔi ʔikkaiɕika nendo:.	
11	1小野津	K	ɕiko:ke: ʔitʔintʔinʔi ʔikkaiɕika ne:.	
11	2志戸桶	M	ɕiko:kʔe: ɸittʔi:nʔi ʔikkaiɕika nendo:.	
11	2志戸桶	O	ɕiko:ke: pittʔi:ni ʔikkaiɕika ne:ra:.	
11	3上嘉鉄	M	ɕiko:kʔe: ɕittʔi:e: ʔikkaiɕika ne:ran(do:).	
11	3上嘉鉄	K	ɕiko:ke: ɕittʔi:en ʔikkaiɕika ʔuran.	
11	4中里	M	ɕiko:kʔe: ʔitʔinʔitʔinʔi ʔikkaiɕika nen.	話者Bはnenではなくuranとも。
11	4中里	K	ɕiko:ke: ɕittʔi:nʔi ʔikkaiɕika ne:.	
11	4中里	O	ɕiko:ke: ɕittʔi:ni ʔikkaiɕika nen do:.	
11	5荒木	M	ɕiko:kʔe: ɕittʔi:nʔi {ʔikkaidu ʔan/ʔikkaiɕika nen}.	
11	5荒木	O	ɕiko:kija ɕittʔi:nʔi ʔikkaiɕika {ne:ran/tuban}do:.	tuban「飛ばない」
12	0共通語		空港なら こっちの 道を行きなさい。	
12	1小野津	M	ku:ko: ʔariba ɸumanu {mittʔi ʔikijo:/mittʔioba ʔizi tabo:ri}.	ʔizi tabo:riは敬語。

番号	地域	班	共通語文	備考
12	1小野津	K	çiko:zo:kara ?ariba human mitsijo:ba ?iki jo:.	
12	2志戸桶	M	çiko:dzo:kae: {?un/?uma} mitsi(ba) {?iki/?ikiba jutasan}.	「飛行場へは」となっている。?ikiba jutasan「行けば良い」はやや丁寧な表現。話者Aは?ikibaが?ikibaのように聞こえる。
12	2志戸桶	O	çiko:dzo:ate: {humanu mitsio {?iki/?ike}(C)// {hunmitsi(ba) ?iki(D)}.	
12	3上嘉鉄	M	{çiko:dzo:jariba/çiko:zo:gatsi nariba} {fun/?un} mitsinu {?izanho:ŋa jutasando:/?ikindo:te jutasando:}.	
12	3上嘉鉄	K	çiko:zo:katsɛ: ?un mitsi tu:re:ki (jo:).	
12	4中里	M	ku:ko:{gatɛ:/nariba} ?uma:nu mitsi(o:ba) ?ikijo:.	ku:ko:gatɛ:「空港へは」。話者Bは(mitsi)o:baをつけることが多い。
12	4中里	K	çiko:zo: nariba ?un mitsijo:ba ?iki jo:.	
12	4中里	O	ku:ko:gatɛ: ?umanu mitsi{jo:ba/o} {?iki/?i nso:ri}.	
12	5荒木	M	ku:ko: nariba {?un/φun} mitsi ?ikijo:.	?itsinso:ri「お行きなさい」<丁寧形>
12	5荒木	O	ku:ko:kan'e ?un mitsi ?ikijo:.	「空港へはその道を行け」となっている。
13	0共通語		道の まんなかを あるいては いけない。	
13	1小野津	M	mitsinu manna:{juba/oba} ?akkiba ?ikando:.	juba~jobaでゆれてる？
13	1小野津	K	mitsinu manna:jo:ba ?attɛ: ?ikan do:.	
13	2志戸桶	M	mitsinu manna: ?attɛ: ?ikando:.	
13	2志戸桶	O	mitsinu manna:ba ?attɛ: ?ikan.(C)	
13	3上嘉鉄	M	mitsinu mannakakara: ?attɛiba ?ikando:.	
13	3上嘉鉄	K	mitsinu mannaka ?attɛiba ?ikan (do:).	
13	4中里	M	mitsinu manna:(o:ba) ?attɛ: ?ikan(do:).	
13	4中里	K	mitsin manna: ?attɛ: ?ikan do:.	
13	4中里	O	mitsinu manna:{jo:ba/wo} ?akkiba: ?ikan (do:).	
13	5荒木	M	mitsinu manna:(oba) ?attɛ: ?ikan.	
13	5荒木	O	mitsinu manna: ?akkiba ?ikan do:.	
14	0共通語		道が 広いなあ。	

番号	地域	班	共通語文	備考
14	1小野津	M	{mitɕiŋa ɕirusaija:/mitɕinu ʔubisaja:}.	ʔubisaは「大きい」の感嘆形。
14	1小野津	K	mitɕinu ɕu:sa:nu:kka.	
14	2志戸桶	M	mitɕinu {ɸ/p}irusaja:.	
14	2志戸桶	O	mitɕiŋa piirusaja:.	
14	3上嘉鉄	M	mitɕinu ɕirusaja:.	
14	3上嘉鉄	K	mitɕinu ɕirusarija:.	
14	4中里	M	mitɕiŋa ɕirusaija:.	話者Bはmitɕiŋa ɕirusaja:で出た。(※感嘆形なのに主語がnu格になっていない)。
14	4中里	K	mitɕiŋa ɕirusa ja:.	
14	4中里	O	mitɕinu ɕirusa ja:.	
14	5荒木	M	mitɕiŋa ɕirusaija:./mitɕinu ɕirusaja:.	ɕirusaiの語末のiに鼻音化が聞こえる。
14	5荒木	O	ʔuN mitɕi ɕirukamuja:.	直訳は「その道広いなあ」。
15	0共通語		あ、雨が ふってきた。	
15	1小野津	M	ʔa, ʔami{ŋa/nu} ɸutittɕa.	ʔaminuのほうがよい(話者への質問により。ただしʔamiŋaが先に出た)。
15	1小野津	K	ʔa:, ʔamiŋa ɸutittɕi.	
15	2志戸桶	M	ʔari, ʔamiŋa {ɸutittɕan/ɸutittɕi}.	話者Bはʔamiをʔamiと発音。
15	2志戸桶	O	{ʔage/ʔaija/ʔari} ʔamiŋa hutittɕa.	
15	3上嘉鉄	M	nama, ʔaminu {ɸurentɕi:/ɸurentɕan}.	nama「今、現在」
15	3上嘉鉄	K	{ʔa/ho:ho:} ʔaminu ɸurentɕi:.	ʔamiはʔamiにも聞こえる。
15	4中里	M	{ʔakke:/hage:}, ʔamiŋa ɸutittɕi:.	
15	4中里	K	ʔa, ʔamiŋa ɸutittɕi:.	
15	4中里	O	ʔugi: ʔata:dani ʔamiŋa {hutittɕan do:/hutittɕa:}.	ʔata:daniの意味は「突然・急に」
15	5荒木	M	ʔage: ʔamiŋa ɸutittɕi:.	
15	5荒木	O	{hagi:/haŋi:} ʔamiŋa {hutittɕan do:/hutittɕi:}.	
16	0共通語		いとこの 布団が やねの 上に ほしてある。	
16	1小野津	M	ʔitukunu ʔuduŋa jan'in u:ni {ɸutɕai/ɸutɕi ai}.	

番号	地域	班	共通語文	備考
16	1小野津	K	ʔitukunu ʔuduŋa janpija:nʲi ʔutɕi ʔai.	
16	2志戸桶	M	ʔitukunu ʔuduŋa janpira:nʲi {ʔutɕɛn/ʔutɕi ʔan}.	
16	2志戸桶	O	ʔitukunu ʔuduŋa janpira:nu wi:ni hutɕi ʔai.(C)	
16	3上嘉鉄	M	ʔitukunu {ʔutuNnu/ʔudunu} jʔançira:(nu) {uʲi:nʲi/ uʲi:e!} ʔuɕa:ri.	ʔutuNは昔はʔuduと言った。
16	3上嘉鉄	K	tɕijo:ja su:kamu hadinu ʔusattan.	「今日は昨日より風が強かった」となっている。tɕijo:は ɕzijo:にも聞こえる。
16	4中里	M	ʔitukunu ʔuduŋa ʔjançira:nʲi {ʔutɕi ʔai/ʔutɕai}.	
16	4中里	K	tɕinʲu:ja su:kkamu hadiŋa ʔusatti.	
16	4中里	O	ʔitokonu hutuŋa janinu i:nʲi hutɕan do:.	
16	5荒木	M	ʔitukunu ʔudu jançira:nʲi ʔutɕi ʔai.	ʔaiiの語末のiは鼻音化。
16	5荒木	O	ʔitukunu hutun janinu wʲi:ni hutɕando:.	wʲi:niのniはnʲiか。
17	0共通語		きのうは 今日より 風が 強かった。	
17	1小野津	M	kinʲu:ja kʲu:jukka haziŋa ʔusataja:.	
17	1小野津	K	kinʲu:ja kʲu:jukka haziŋa ʔusati ja:.	
17	2志戸桶	M	kinʲu:ja kʲu:jukka(mu) haziŋa {ʔusanatitɕɛn/ ʔusanatitɕija:/ʔukunati}.	述語は「強くなる」に対応。 tattɕitɕija:「たっていた」とも。 ʔukunatiは共通語に引きずられた可能性あり。
17	2志戸桶	O	kinʲu:ja {{kʲu:juri/kʲu:jukkamu}(C)//kʲu:ikkamu(D)} hadziŋa ʔusata.	
17	3上嘉鉄	M	kiju: ɕu:juri hadinu {ʔʔusari/ʔʔusatando:}.	
17	3上嘉鉄	K	tɕijo:ja su:kamu hadinu ʔusattan.	「今日は昨日より風が強かった」となっている。tɕijo:は ɕzijo:にも聞こえる。
17	4中里	M	tɕinʲu:ja su:kkamu hadiŋa {ʔusatʔa(ja:)/ʔusatan}.	
17	4中里	K	tɕinʲu:ja su:kkamu hadiŋa ʔusatti.	
17	4中里	O	tɕinu:ja sukkamu hadiŋa ʔusatan do:	※話者Dによる用例。
17	5荒木	M	tɕinʲu:ja su:jurimu haziŋa ʔʔusati.	
17	5荒木	O	tɕinu:ja {su:kamu/su:jurimu} haziŋa ʔu:satan do:	
18	0共通語		真っ白な 鳥が 空を 飛んでいる。	
18	1小野津	M	maɕɕirusun tuiŋa, {sura/tin}joba tudui.	
18	1小野津	K	maɕɕiru ssun tuiŋa tinto:jo:ba tudui.	



番号	地域	班	共通語文	備考
18	2志戸桶	M	ɛiru tuiŋa tiN tudi uija:.	tuiŋaのiは鼻母音化。
18	2志戸桶	O	{maɛɛiru:/ɛiru:} tui(:)ŋa tiNto:ba tudui.	
18	3上嘉鉄	M	ɛirudurinu tiNto:(oba) {tubo:ri/tubo:Ndo:}.	
18	3上嘉鉄	K	ɛiru turi:ga tiNto:oba tubuN.	
18	4中里	M	{ɛiruduri:ŋa/maɛɛiru: tuiŋa} tiNto:(oba) {tuiduija:/tuduso:ja:}.	ɛiruduriのriのrは落ちない。 cf. kuruduri 「黒い鳥」
18	4中里	K	maɛɛiru: tuiŋa sorajo:ba tudui.	
18	4中里	O	maɛɛirona tuiŋa tiNto:ni tudui.	
18	5荒木	M	{ɛirusaŋ t <sup>2</sup> uriŋa/ɛiruduriŋa} tiNto: tudui.	tuduiの語末のiは鼻音化。
18	5荒木	O	{ɛiru/maɛɛirunu} turiŋa tiNto: {tuduĩ/tudun do:}.	
19	0共通語		あの 山には いのししが いるそうだ。	
19	1小野津	M	ʔaŋ jamaŋ <sup>ɲ</sup> e: ʔinoɛiɛiŋa ʔunti:do:.	
19	1小野津	K	ʔaŋ jamaŋ <sup>e</sup> : ʔinoɛiɛiŋa unti:ga.	
19	2志戸桶	M	ʔaŋ jamaŋ <sup>ɲ</sup> e: ʔinoɛiɛiŋa unti:{do:/ŋa}.	
19	2志戸桶	O	ʔaŋ jamaŋ <sup>e</sup> : ʔinoɛiɛiŋa unti:do:.(C)	
19	3上嘉鉄	M	ʔaŋ {jama:/jamae:} ʔinoɛiɛiŋa ʔukkamu wakarando:te:.	taro:kara ki:tsaŋmundzaŋa 「太郎から聞いたことだけ ど」を前に付けて言ってもらった。
19	3上嘉鉄	K	ʔaŋ jamajeno: ʔinoɛiɛiŋa ʔunbe:za.	
19	4中里	M	ʔaŋ jamaŋ <sup>ɲ</sup> e: inoɛiɛiŋa ʔun nessuija:.	昔は「いのしし」はɛiɛiriと 言った。
19	4中里	K	ʔaŋ jamaŋ <sup>e</sup> : ʔinoɛiɛiŋa ʔun {nassui/nessui}.	
19	4中里	O	ʔaŋ jamaŋ <sup>e</sup> : ʔinoɛiɛiŋa ʔunbe:(dza).(C)// ʔun jamaŋ <sup>e</sup> : ʔinoɛiɛiŋa ʔun ʔaŋbe:dza.(D)	
19	5荒木	M	ʔaŋ jamaŋ <sup>ɲ</sup> e: ʔinoɛiɛiŋa ʔunti:sa.	
19	5荒木	O	ʔaŋ jamaŋ <sup>e</sup> : {ʔinoɛiɛi/ɛiɛi}ŋa ʔunbe: do:.	
20	0共通語		あれは 学校だ。役場では ない。	
20	1小野津	M	ʔare: gako:dza. jakuba: aŋa.	
20	1小野津	K	ʔare: gako:za. jakuba: aŋa:.	
20	2志戸桶	M	ʔare: gako: dzi, jakuba: aŋando:.	役場は昔kaijaとも言った。
20	2志戸桶	O	ʔare: gako:dza, jakuba: aŋa.(C)	
20	3上嘉鉄	M	ʔare: gakkodo:, jakuba: ʔaŋando:.	
20	3上嘉鉄	K	ʔare: gako:za, jakuba: ʔaŋa.	

番号	地域	班	共通語文	備考
20	4中里	M	ʔare: gakko:do:, jakuba: ʔarando:.	
20	4中里	K	ʔare: gakko: do:, jakuba: ʔaran do:.	
20	4中里	O	ʔare: gakko: do:, jakuba: ʔaran do:.	
20	5荒木	M	ʔare: gakko:do:, jakuba: ʔarando:.	
20	5荒木	O	ʔare: gakko: do:, jakuba ʔaran do:.	
21	0共通語		あれが 役場だ。	
21	1小野津	M	ʔariŋa jakubadza.	
21	1小野津	K	ʔariŋa jakuba do:.	
21	2志戸桶	M	ʔariŋa jakubado:.	
21	2志戸桶	O	ʔariŋa jakubadza. (C)// ʔaridu jakuba de:ru.(D)	
21	3上嘉鉄	M	ʔanŋa jakubado:.	
21	3上嘉鉄	K	ʔanŋa jakubaza.	
21	4中里	M	{ʔanŋa/ʔariŋa} jakubado:.	
21	4中里	K	ʔariŋa jakuba do:.	
21	4中里	O	ʔariŋa jakuba do:.	
21	5荒木	M	ʔanŋa jakubado:.	
21	5荒木	O	ʔariŋa jakuba do:.	
22	0共通語		あの 目の おおきい、色の 白い 男は だれだろう。	
22	1小野津	M	ʔanu mi:nu ʔubisanu ʔirunu ɕirusanu jinŋa: tarukaja:.	
22	1小野津	K	ʔan mi:nu ʔuɸisanu, ʔirunu ɕijusanu jinŋa: tarukaja:.	
22	2志戸桶	M	ʔan mi:nu {ʔubisanu/ʔubisa:} ʔirunu ɕirusan jinŋa: tarukaja:.	
22	2志戸桶	O	{ʔan/ʔanu} mi:nu ʔubisanu ʔirunu ɕirusanu jingawa tarukai.(C)// ʔanu mi:nu ʔubisan ʔirunu ɕirusan jinŋa: tarukai.(D)	
22	3上嘉鉄	M	ʔan mi:nu maiɕa ʔirunu ɕiru{ɕa:~sa:} jinŋa: tarukaja:.	
22	3上嘉鉄	K	ʔan mi:nu maisan, ʔirunu ɕirusan jinŋa: tarukaja:.	
22	4中里	M	ʔan mi:nu ʔubisan, ʔirunu ɕirusan jinŋa: {tʔarkai(A)/tʔarukaja:}.	

番号	地域	班	共通語文	備考
22	4中里	K	ʔan mi:nu ʔubisan, ʔirunu ɕirusan jinŋa: tarukai.	
22	4中里	O	ʔan mi:nu ʔubisan ʔirunu ɕirusan ʔinŋaja taru {jo/kai}.	
22	5荒木	M	ʔan mi:nu uɸusan irunu ɕirusan jinŋa: tarukai.	
22	5荒木	O	{ʔanu/ʔan} mi:nu {ʔu:do:/ʔubisan} ʔirunu ɕirusan jinŋa: tarukai.	
23	0共通語		孫が 去年から 東京に いる。	
23	1小野津	M	mago:ŋa ɸuzukara to:k'ɔ:n'i ʔun.	
23	1小野津	K	mago:ŋa huzukara to:k'ɔ:n'i ui.	
23	2志戸桶	M	magu:ja ɸuzukara to:k'ɔ:n'i ui.	話者Bはuiではなくunを使用。
23	2志戸桶	O	{magu:/mago:}ŋa huczukara to:k'ɔ:ni ʔui.(C)	
23	3上嘉鉄	M	mago: ɸudukara to:k'ɔ:{je:/n'i} undo:.	
23	3上嘉鉄	K	mago:nu ʔudukara to:k'ɔ:jen ʔun.	
23	4中里	M	maŋa:ŋa ɸudukara to:k'ɔ:n'i {ʔun(do:)/ʔui}.	今はmaŋa:よりもmaga:と言う場合が多い。
23	4中里	K	mago:ŋa hudukara to:k'ɔ:n'i ʔui.	
23	4中里	O	mago:ŋa hudukara to:kjo:ni ʔui.	
23	5荒木	M	maŋo:ŋa ɸuzukara to:k'ɔ:n'i ui.	
23	5荒木	O	{maŋo:ŋa/wa: maŋa:ja} huzukara to:kjo:n'i ʔun do:.	
24	0共通語		孫は いつ 東京から 帰るか。	
24	1小野津	M	mago:ja ʔitsu to:k'ɔ:kara mudujukka.	
24	1小野津	K	mago:ja ʔitsu to:k'ɔ:kara mudujukka.	
24	2志戸桶	M	(waNna:) magu:ja ʔitsu to:k'ɔ:kara {mudujukka / mudut'i k'ukka}.	muduti k'ukka 「戻ってくるか」
24	2志戸桶	O	mago:{ŋa/ja} ʔitsu to:k'ɔ:kara k'ukka.	
24	3上嘉鉄	M	mago: ʔitu: to:k'ɔ:kara muduren {ɕikka/ɕinɕijo:}.	
24	3上嘉鉄	K	mago: ʔitu to:k'ɔ:kara mudurikka.	
24	4中里	M	maŋa:ja itu to:k'ɔ:kara {mudujukka/mudujusujɔ:}.	
24	4中里	K	mago:ja ʔit'u to:k'ɔ:kara mudujukka.	
24	4中里	O	mago:ja ʔitu: to:k'ɔ:kara {mudujukka/mudujusuka}.	
24	5荒木	M	maŋo:ja ʔitsu to:k'ɔ:kara mudujusujɔ:.	
24	5荒木	O	maŋo:ja ʔitsu to:k'ɔ:kara ɕimakan'i mudurusujɔ:.	ɕimakan'i 「島に」

番号	地域	班	共通語文	備考
25	0共通語		八月には 帰って くる ようだ。	
25	1小野津	M	hatsigatsun <sup>ɲ</sup> je: mudutte k <sup>h</sup> untɕagisaN(ŋa).	
25	1小野津	K	hatsiŋatsun <sup>e</sup> : muduti k <sup>h</sup> un sakuzaga.	
25	2志戸桶	M	hatsigatsun <sup>ɲ</sup> je: mudut <sup>ʔ</sup> i k <sup>h</sup> un {nessui/nessun}.	
25	2志戸桶	O	patɕigatsun <sup>e</sup> : muduti k <sup>h</sup> undzara.	
25	3上嘉鉄	M	hatsigatsun <sup>ɲ</sup> je: muduren ɕikkamu wakarando:te:.	
25	3上嘉鉄	K	hatsigato: muduren ɕimbe:za.	
25	4中里	M	hatsigatsun <sup>ɲ</sup> je: muduti sun nessuija:.	
25	4中里	K	hatsigatsun <sup>e</sup> : muduti sun nessui.	
25	4中里	O	hatsigatsun <sup>e</sup> : mudujun nessui.	
25	5荒木	M	hatsigatsun <sup>ɲ</sup> je muduti sunti:do:.	muduti sunbe:ɕzaだと他人のことを言っているようになる。
25	5荒木	O	hatsiŋatsun <sup>e</sup> : muduti {sun/sunbe:} do:.	sun 「(戻って)くる」、sunbe: 「(戻って)くるようだ」
26	0共通語		かあさんは あした 東京へ むすこに 会いに いく。	
26	1小野津	M	ʔokka:ja ʔatɕa to:k <sup>h</sup> o:kai musukon <sup>i</sup> ʔo:nn <sup>a</sup> ʔik <sup>h</sup> untɕi.	
26	1小野津	K	ʔokka:ja ʔatɕa to:k <sup>h</sup> o:kai k <sup>h</sup> wan <sup>i</sup> ʔonn <sup>a</sup> ʔiki do:.	
26	2志戸桶	M	ʔokkano: ʔatɕa: to:k <sup>h</sup> o:kai {k <sup>h</sup> a/jinŋank <sup>ʔ</sup> a}n <sup>i</sup> ʔo:nja ʔik <sup>h</sup> un.	k <sup>h</sup> a 「子」
26	2志戸桶	O	{ba:ja(C)//ʔokkano:(D) ʔatɕa to:k <sup>h</sup> o:kai jinŋak <sup>ʔ</sup> ani ʔai ʔonn <sup>a</sup> ʔik <sup>h</sup> ui.	
26	3上嘉鉄	M	ʔanma:ja ʔatɕa to:k <sup>h</sup> o:katsi jinŋank <sup>ʔ</sup> annari ʔo:ija ʔi{tɕ/k}indo:.	ʔokkanは妻の意味になる。
26	3上嘉鉄	K	ʔokkano: ʔatɕa to:k <sup>h</sup> o:katsi {k <sup>h</sup> atu/k <sup>h</sup> anu nari} ʔo:ja ʔitsi(N).	
26	4中里	M	ʔanma:ja ʔatɕa: to:k <sup>h</sup> o:gatsi k <sup>h</sup> antɕa: ʔo:inja ʔitɕun(do:).	
26	4中里	K	ʔokkano: ʔatɕa to:k <sup>h</sup> o:gatsi k <sup>h</sup> an <sup>i</sup> ʔo:inn <sup>a</sup> ʔitɕui.	
26	4中里	O	ʔokkano: ʔatɕa to:k <sup>h</sup> o:ni k <sup>h</sup> ani ʔo:inn <sup>a</sup> ʔitɕui.	
26	5荒木	M	ʔanma:ja ʔatɕa to:k <sup>h</sup> o: k <sup>h</sup> an <sup>i</sup> inŋank <sup>ʔ</sup> wan <sup>i</sup> ʔo:inja ʔitɕui.	

番号	地域	班	共通語文	備考
26	5荒木	O	ʔokkanno: ʔatɕa to:kʰo:kanʰi jinŋankʷanʰi ʔa:i:nʰa ʔitsun do:.	
27	0共通語		大阪から 東京までの 自動車賃は いくらだろうか。	
27	1小野津	M	ʔo:sakakara to:kʰo:garinu kisatɕino: kʰansakaja:.	
27	1小野津	K	ʔo:sakakara to:kʰo:madinu kisatɕino: kʰansakaja:.	
27	2志戸桶	M	ʔo:sakakara to:kʰo:madinu kisatɕino: tɕʰansakaja:.	
27	2志戸桶	O	ʔo:sakakara to:kʰo:madinu kisatɕino: {tɕansa/ikura} ka:jukkaja:.	{tɕansa/ikura} ka:jukkaja: 「いくらかかるか」
27	3上嘉鉄	M	ʔo:sakakara to:kʰo:made: kʰiɕatɕino: {ɕanɕa ka:rikka/ɕanɕakai:}.	to:kʰo:made: 「東京までは」
27	3上嘉鉄	K	ʔo:sakakara to:kʰo:madinu kisatɕino: sansakaja:.	
27	4中里	M	ʔo:sakakara to:kʰo:madinu kisatɕino: sansabe:rikai(ja:).	sansabe:ri ka:jukkai'という 言い方を上の世代が使っていた。
27	4中里	K	ʔo:sakakara to:kʰo:madinu kisatɕino: sansakai.	
27	4中里	O	ʔo:sakakara to:kʰo:madinu kisatɕino: sansakai.	話者Dはkisatɕinjaとも。
27	5荒木	M	ʔo:sakakara to:kʰo:madinu kisatɕinno: sansa bakkai {kai/ka:rukkai}.	ka:rukkai 「かかるだろう か」
27	5荒木	O	ʔo:sakakara to:kʰo:madinu kisatɕinno: sansaguraikai.	
28	0共通語		四時まで 駅で まっておれ。	
28	1小野津	M	jozi{made:/gari} ʔekizi mattɕuri.	made: 「までは」
28	1小野津	K	jozimadi jekizi mattɕuri jo:.	
28	2志戸桶	M	jozimade: jekizi mattɕuri.	
28	2志戸桶	O	jodzimate jekidzi mattɕuri.	
28	3上嘉鉄	M	jozimade: jekje: matɕo:rijo:.	
28	3上嘉鉄	K	jozimadi jeki{je/zen} matɕo:ri jo:.	
28	4中里	M	jozimadi jekizi mattɕurijo:.	
28	4中里	K	jozimadi jekizi mattɕuri.	
28	4中里	O	jodzimate jekidzi mattɕuri.	
28	5荒木	M	jozimadi jekizi mattɕuri(jo):.	
28	5荒木	O	jozimadi jekizi mattɕurijo:.	

番号	地域	班	共通語文	備考
29	0共通語		五時までに 帰らなくては ならない。	
29	1小野津	M	gozigaŋin'i muduraŋba naraŋmun.	
29	1小野津	K	gozimadin'i muduraŋba nara:.	
29	2志戸桶	M	gozimadin'je: muduraŋba naraŋ.	gozimadin'je: 「5時までに は」
29	2志戸桶	O	godzimadini muduraŋba {nara:/naraŋ}.	
29	3上嘉鉄	M	gozimadin'i: muduraŋba naraŋdo:.	
29	3上嘉鉄	K	gozimadi muduraŋba naraŋ.	
29	4中里	M	gozimadin'je: muduraŋba: naraŋdo:.	gozimadin'je: 「5時までに は」
29	4中里	K	gozimadin'i muduraŋba nara:.	
29	4中里	O	godzimadeni muduraŋba {naraŋ/nara:}.	
29	5荒木	M	gozimadin'i muduraŋba naraŋdo:.	
29	5荒木	O	gozimadin'i ja:kaŋi muduraŋba: naraŋ do:.	原文にはgaziとあったが訂 正。
30	0共通語		次郎、この 荷物を 家まで かついで 行ってくれ。	
30	1小野津	M	dziro:, kuŋ nimutsuoba hakkiti ja:gari ŋizi kuri.	
30	1小野津	K	ziro:, huŋ n'imutsujo:ba ja:gadi hatamiti ŋizi kuri.	
30	2志戸桶	M	dziro:, ŋuŋ n'imutsuŋ: ja:madi hatamiti ŋizi kuri.	
30	2志戸桶	O	dziro: huŋ {nimotsu:/nimotsuba} ja:madi {hatam ti(C)//hatamiti(D)} ŋizi kuri.	
30	3上嘉鉄	M	dziro: puŋ n'imutsuŋ: ja:madi hatamje: {ŋize: kuri/ mutŋe: dzeŋ kuri}.	mutŋe: dzeŋ kuri 「持って 行ってくれ」
30	3上嘉鉄	K	ziro, ŋuŋ n'imoto: ja:madi haŋn'ijen izenkuri.	
30	4中里	M	dziro:, ŋuŋ {n'imutsuŋ:(ba)/n'i:} ja:madi hatamiti ŋizi kuri.	
30	4中里	K	dziro:, ŋuŋ n'imutsu jo:ba ja:madi hatamiti ŋizikuri.	
30	4中里	O	dziro:, ŋuŋ nimutsujo:ba ja:madi hatamiti idzi kuri(:).	
30	5荒木	M	dziro:, ŋuŋ n'imutsuŋ ja:madi hatamiti {ŋizi kuriri/mutŋe ŋizi kuriri}.	mutŋe ŋizi kuriri 「持って 行ってくれ」
30	5荒木	O	ziro:, ŋuŋ n'imotsuo ja:madi hatamiti ŋizi kuri.	
31	0共通語		荷物が 重かったので、二人で もった。	
31	1小野津	M	n'imotsuŋa ŋubussataŋnati, t'aizi mutŋando:.	

番号	地域	班	共通語文	備考
31	1小野津	K	n <sup>h</sup> imutsuŋa ʔubussatan nati t <sup>h</sup> aizi muttɕi.	
31	2志戸桶	M	n <sup>h</sup> i:ŋa {ʔubussati:/ʔubussataNnati} t <sup>h</sup> aizi {muttɕaN (do:)/muttɕi}.	
31	2志戸桶	O	nimotsuŋa ʔubusatataNnati t <sup>h</sup> aidzi {muttɕaN/muttɕa	
31	3上嘉鉄	M	n <sup>h</sup> imutunu ʔubussa muNnare: t <sup>h</sup> arje: mutɕe: dʒan(do:).	
31	3上嘉鉄	K	n <sup>h</sup> imotsunu {ʔubussaren/ʔubusattan munen} ʔtarisen muttɕaN.	
31	4中里	M	n <sup>h</sup> i:ŋa ʔubussatankara t <sup>h</sup> aizi muttɕando:.	ʔubussataNnatiとは言わない。
31	4中里	K	n <sup>h</sup> imutsuŋa ʔubussa(t)t <sup>h</sup> an {ga:n <sup>h</sup> i/gara} t <sup>h</sup> ai(zi) muttɕi.	
31	4中里	O	nimotsuŋa ʔubusatanŋara t <sup>h</sup> a:iczi {muttɕaN/muttɕa:/muttɕi}.	
31	5荒木	M	n <sup>h</sup> i:ŋa ʔubussatankann <sup>h</sup> i t <sup>h</sup> arizi {muttɕi/muttɕando:}.	
31	5荒木	O	n <sup>h</sup> imotsuŋa ʔubusatanka:n <sup>h</sup> i t <sup>h</sup> arizi muttɕaN do:.	
32	0共通語		この上着はこのまえ 沖縄で 二千元で買った。	
32	1小野津	M	ʔun ʔuwagje: kono ʔaida ʔokina: dʒi n <sup>h</sup> isenendʒi ho:tando:.	
32	1小野津	K	hun huko: hune:da ʔokina:zi n <sup>h</sup> isenenzi ho:tan mun.	
32	2志戸桶	M	ʔun ʔkino: ʔunnarje: ʔokinawazi n <sup>h</sup> isenendʒi {ho:tando:/ho:tittɕan}.	ho:tittɕan 「買って来た」
32	2志戸桶	O	hun ʔuwage: ʔokinawadʒi nisenendʒi {ho:ta:/ho:tan}.	
32	3上嘉鉄	M	ʔun ʔuwage: nanma ʔokinawae: n <sup>h</sup> icɛnjɛɛ: ho:tando:.	
32	3上嘉鉄	K	ʔun ʔuwage: nanma:ta ʔokinawazen n <sup>h</sup> isenenzen ko:tan.	
32	4中里	M	ʔun uwagje: n <sup>h</sup> anma ʔokinawade n <sup>h</sup> isenende {ho:ti/ho:tando:/ho:ta}.	(ʔokinawa)de (n <sup>h</sup> isenen)de(は共通語形。
32	4中里	K	ʔun ʔuwage: n <sup>h</sup> anma ʔokina:zi n <sup>h</sup> isenenzi ho:ti.	
32	4中里	O	ʔun ʔuwage: n <sup>h</sup> anma {ʔokinawa/ʔokina:}dʒi n <sup>h</sup> icɛnjendʒi {ho:ta/ho:ti/ho:tan}.	

番号	地域	班	共通語文	備考
32	5荒木	M	ʔun ʔuwage: ɸune:da ʔokinawazi nʲiɕenendzi {ho:tasudo:/ho:tando:}.	
32	5荒木	O	ʔun ʔuwarje: nʲanma ʔokina:zi nʲiɕenenzi {ho:tan/ ho:tasu} do:.	ho:tasu do:「買ったのだ よ」
33	0共通語		沖縄には めずらしい 菓子が ある。	
33	1小野津	M	ʔokina:nʲje: mɪddasanu kʷaɕiŋa ʔai(ja:).	人に嬉しがって言うときは? aija:が適切。
33	1小野津	K	ʔokina:nʲe: mɪttasanu kʷaɕinu ʔai.	
33	2志戸桶	M	ʔokinawanʲje: mɪddasan kʷaɕiŋa ʔando:.	話者Bはmɪddasanをmɪddasa Nと発音。
33	2志戸桶	O	ʔokinawanʲe: mɪttasan kʷaɕiŋa ʔai.	
33	3上嘉鉄	M	ʔokinawaje: mɪndaɕa{nu/N} kʷaɕinu (gaba) ʔando:.	gaba「たくさん」
33	3上嘉鉄	K	ʔokinawa{zeno:/nʲe/nʲo:/jeno:} {mɪddasan/ mɪndasan} kʷaɕinu ʔan.	
33	4中里	M	nahanʲje: {mɪndasan/mizurasan} kʷaɕiŋa {ʔai/ ʔando:}.	
33	4中里	K	ʔokina:nʲe: mɪndasan kʷaɕiŋa ʔai.	
33	4中里	O	ʔokina:nʲe: mɪndasan kaɕiŋa ʔan do:.	
33	5荒木	M	ʔokinawanʲje mizurasan kʷaɕiŋa {ʔai/ʔando:}.	ʔaiの語末のiは鼻音化。
33	5荒木	O	nahanʲe: mɪndasan kʷaɕiŋa ʔan do:.	nahanʲe:「那覇には」
34	0共通語		孫は お菓子が 好きだ。	
34	1小野津	M	mago:ja kʷaɕiŋa sukido:.	
34	1小野津	K	mago:ja kʷaɕiŋa suki.	
34	2志戸桶	M	( mago:ja kʷaɕiŋa {sukizankara/sukinati}...)	※述語が共通語文と対応して いない。「好きだから」
34	2志戸桶	O	mago:ja {kʷaɕi/kaɕi}ŋa sukidza.	
34	3上嘉鉄	M	mago: kʷaɕinu {daiɕuki/ippai ɕutsɪn}do:.	ippai ɕutsɪn「とても好いて いる」
34	3上嘉鉄	K	mago: kʷaɕinu sutɕɪn do:.	
34	4中里	M	maŋa:ja kʷaɕiŋa sutɕundo:.	「菓子を」に相当する形式は 出ず。
34	4中里	K	mago:ja {kʷaɕi (ŋa) suki (do:)/kʷaɕi{nu/ŋa} {sutɕun do:/sutɕui}.	
34	4中里	O	mago:ja: kʷaɕiŋa suki do:.	
34	5荒木	M	maŋo:ja {kʷaɕiŋa suki/kʷaɕi sutɕun}do:.	



番号	地域	班	共通語文	備考
34	5荒木	O	maŋa:ja k <sup>2</sup> aŋja suki do:.	
35	0共通語		箱の 中に まんじゅうが いくつ あると おもうか。	
35	1小野津	M	pakunu na:n <sup>i</sup> mandzu:ŋa ʔikutsu ʔantɕi {ʔumujui/ ʔumui}.	
35	1小野津	K	hakun na:n <sup>je</sup> : manzu:ŋa ʔikutsu ʔantɕi ʔumujui ja.	
35	2志戸桶	M	ʔun ɸakunu na:n <sup>i</sup> (mandzu:ŋa) ʔikutsu ʔantɕi ʔumuju{i/N}.	
35	2志戸桶	O	hakunu na:ni mandzu:ŋa tɕansa {ʔantɕi ʔumujui(D)// ʔantɕu ʔumujukka(C)}.	
35	3上嘉鉄	M	hakunu nakae: mandzu:nu ɕansa ʔakka wakaran {ka:/na:}.	
35	3上嘉鉄	K	hakonu nakajeno: manzu:nu {ʔik <sup>2</sup> ut <sup>2</sup> u/sansa} ʔanten ʔumi:rjjo.	
35	4中里	M	hakun na:n <sup>je</sup> : manzu:ŋa sansa ʔantɕi ʔumujuijo.	
35	4中里	K	hakun na:n <sup>i</sup> manzu:ŋa ʔikut <sup>2</sup> u ʔan tɕumujui.	
35	4中里	O	hakun na:ni mandzu:ŋa ʔikutu ʔantɕi ʔumujukko.	話者Dによる用例。
35	5荒木	M	hakunu {naka/na:}n <sup>i</sup> mandzu:ŋa ʔikutsu ʔantɕi ʔumuiŋja.	sansaは「いくら」の意になる。
35	5荒木	O	h <sup>w</sup> akun nakan <sup>i</sup> manzu:ŋa ʔikutsu ʔantɕi ʔuma:inn <sup>a</sup> .	
36	0共通語		孫は まんじゅうを 皮だけ 食べる。	
36	1小野津	M	mago:ja mandzu:joba ha:daki kam <sup>i</sup> ui.	
36	1小野津	K	mago:ja manzu:jo:ba ha:be: kam <sup>i</sup> un.	
36	2志戸桶	M	mago:ja mandzu:ba {hawa/ha:}be: kam <sup>i</sup> un.	
36	2志戸桶	O	mago:ja mandzu:ba kawa{bē:(C)//be:(D)} kam <sup>i</sup> ui.	
36	3上嘉鉄	M	mago: mandzu:(o:ba) w <sup>2</sup> abe:daki kamiŋdo:.	
36	3上嘉鉄	K	mago: manzu: kawadake kamin.	
36	4中里	M	maŋa:ja mandzu:o:ba ha:dakidu kan <sup>i</sup> ui.	
36	4中里	K	mago:ja manzu:nu kawabe: kan <sup>i</sup> ui.	
36	4中里	O	mago:ja mandzu: ha:daki kan <sup>i</sup> ui.	話者Dはkawa dakiとも。
36	5荒木	M	maŋo:ja mandzu: kawadaki kamin.	
36	5荒木	O	maŋa:ja manzu: kawadaki kamin do:.	
37	0共通語		じいさんは 朝から 海へ 魚を とりに いった。	
37	1小野津	M	ʔazi:ja {ʔasa/k <sup>2</sup> ama}kara ʔumikai {ʔijujoba/ sakanajuba} {turi/ʔuri}n <sup>i</sup> ʔizantɕi(ja).	ʔurin <sup>i</sup> 「釣りに」

番号	地域	班	共通語文	備考
37	1小野津	K	ʔazi:ja ʔasakara ʔumikai ʔiju tunn'a ʔizi.	
37	1小野津	O	ʔazi:ja kʔanmakara ʔumini {ʔiju/ʔijuwo} {tuini/tunn'a} {ʔidzi/ʔidzando:}.	
37	1小野津	T	ʔadzija ʔasakara ʔumik(?)ai {ʔiu/ʔiujo:ba} tunn'a {ʔidzi/ʔidzan do:}.	語中の有声歯茎口腔蓋破擦音には揺れが見られる(ɬ~ɮ)。
37	2志戸桶	M	ʔazi:ja kʔanmakara ʔumikai ʔiju tunja ʔidzan.	
37	2志戸桶	K	ʔazi(:)ja ʔasakara ʔumikai ʔiju(ba) {t/ɬ}unn'a ʔizan.	
37	3上嘉鉄	M	ʔazi:ja kʔanmakara {ʔumikatɕi/ʔumije:} jʔu:o:ba tunja ʔizando:.	
37	3上嘉鉄	K	zi:sano: kanmakara ʔumikatɕi ju tunn'a ʔizan.	
37	3上嘉鉄	O	ʔadzi:ja kʔanmakara {umikatɕi/umije:} ʔju: tunn'a ʔidza(do:).	
37	4中里	M	ʔazi:ja kʔamakara {ʔumije:/ʔumigatɕi} ʔiju tunja ʔizan.	
37	4中里	K	ʔazi:ja kʔamakara ʔumigatɕi ʔiju {tuinn'a/tunn'a} {ʔizan/ʔizi}.	
37	5荒木	M	ʔazi:ja kʔamakara ʔumikan'i jʔu turinja {ʔizi/ʔizando:}.	
37	5荒木	K	ʔazi:ja kʔamakara ʔumi:katɕi ju tunn'a ʔizi.	
37	5荒木	O	ʔazi:ja k(?)anmakara ʔumizi ju {tunn'a/turi:n'a} ʔizan do:.	
38	0共通語		ここは 海に ちかいので 魚が うまい。	
38	1小野津	M	ɸuma: ʔumin'i ɬikasaNnati ʔijuŋa ʔumasaNdo:.	
38	1小野津	K	huma: ʔumi:n'i ɬikasaNnati ʔijuŋa ʔumasai.	
38	1小野津	O	huma: ʔumini ɬikasaNnati ʔijuŋa ʔuma{sai/saN do:}.	
38	1小野津	T	ɸuma: ʔumin'i ɬikasaNnati ʔiuŋa {ʔumasai/ʔumasaN do:}.	
38	2志戸桶	M	ʔuma: ʔumin'i {ɬikasaNkara/ɬikasaNnati} ʔijuŋa ʔumasa{i/N}.	
38	2志戸桶	K	ʔuma: ʔumin'i ɬikasaNkara ʔijuga ʔumasaN.	
38	3上嘉鉄	M	ʔuma:ja ʔuminu ɬikaɕaNmunnare: jʔu:nu ʔumasa ʔuɕiraN.	
38	3上嘉鉄	K	ʔuma:ja ʔumijen ɬikasaN munen junu masaN.	

番号	地域	班	共通語文	備考
38	3上嘉鉄	O	ʔuma:ja umini ʔikasaʔnati ʔjunu {ʔmasando:/ umasando:}.	
38	4中里	M	ʔuma:ja ʔumin'i ʔikasan {mundaʔkaran'i/kara} ʔijuŋa ʔ(u)masai.	ʔ(u)masaiのuが落ちている。
38	4中里	K	ʔuma: ʔumin'i ʔikasangara ʔijuŋa masai.	
38	5荒木	M	ʔuma: ʔumin'i ʔikasankaʔn'i j'ʔuŋa {masai/ masando:}.	
38	5荒木	K	ʔuma:ja ʔumin'i ʔikasankaʔn'i juŋa {masai/masari}.	
38	5荒木	O	ʔuma:ja ʔumin'i ʔikasanka:n'i juŋa m'asan do:.	
39	0共通語		魚より 肉の ほうが 高い。	
39	1小野津	M	ʔijujukka n'ikunu ho:ŋa ta:sando:.	
39	1小野津	K	ʔijujukka n'ikunu ho:ŋa ta:sa.	
39	1小野津	T	ʔiu jukka mi:ŋa ta:sai.	
39	1小野津	O	ʔijujukka {niku/ɕiɕi}nu {ho:/po:}ŋa {ta:sa/ta:sai}.	
39	2志戸桶	M	ʔiju{jukka/jukkamu} n'ikunu ho:ŋa ta:sai.	
39	2志戸桶	K	ʔijujukamu n'ikunu ho:ga ta:sa{N/i}.	
39	3上嘉鉄	M	{j'ʔujukamu/j'ʔujurimu} n'ikunu {ho:nu/ho:ŋa} takaɕando:.	
39	3上嘉鉄	K	jukkamu n'ikunu ho:nu takasa{ri/N}.	
39	3上嘉鉄	O	ʔju:jori nikudu takasa(do:).	
39	4中里	M	ʔiju:kkamu nikunu ho:ŋa ta:sai.	
39	4中里	K	ʔijukkamu n'ikunu ho:ŋa ta:sa.	
39	5荒木	M	j'ʔukamu n'ikunu ho:ŋa {ta:sai/ta:sando:}.	
39	5荒木	K	jukamu n'ikunu ho:ŋa ta:sai.	
39	5荒木	O	jujore: ɕiɕinu ho:ŋa ta:san do:.	
40	0共通語		おれは 蛸の さしみが 食べたい。	
40	1小野津	M	wano: to:nu saɕimiŋa kanbusa(ja:).	
40	1小野津	K	wano: to:nu saɕimiŋa kanbusai.	
40	1小野津	T	wano: to:nu saɕimiŋa {kanbusa/kanbusai}.	
40	1小野津	O	wano: to:nu saɕimiŋa {kanbusa/kanbusai}.	
40	2志戸桶	M	wano: to:nu saɕimiŋa kanbusai.	
40	2志戸桶	K	wano: to:nu saɕimiga kanbusai.	
40	3上嘉鉄	M	wano: to:nu ɕaɕiminu kanbusa ʔuɕira:.	

番号	地域	班	共通語文	備考
40	3上嘉鉄	K	wanu: to:nu saɕiminu {kamibusan/kanbusan}.	
40	3上嘉鉄	O	wano: to:nu sasuminu {kanbusan/kanbusarija:}.	
40	4中里	M	wano: to:nu saɕimiŋa {kanbusai(A)//kanbusaja:(B)}.	
40	4中里	K	wano: to:nu {saɕimŋa/saɕimidu/saɕimi} kanbusa(i).	
40	5荒木	M	wano: to:nu saɕimiŋa kami busai.	
40	5荒木	K	wano: to:nu saɕimiŋa kanbusai.	
40	5荒木	O	wano: to:nu namasuŋa {kanbusain/kanbusai/kanbusai}.	
41	0共通語		おまえはこの魚の名まえを知っているか。	
41	1小野津	M	daja φun ŋijunu na:joba ɕittɕunja.	
41	1小野津	K	daja hun ŋijunu na:jo:ba ɕittɕunn'a.	
41	1小野津	T	daja {φun/φunu} ŋiunu namai ɕittɕun n'a.	
41	1小野津	O	{da/da:}ja hunu ŋiju:nu na:ja ɕittɕunn'a.	
41	2志戸桶	M	daja: ʔun ŋijunu na:(ba) ɕittɕunja.	
41	2志戸桶	K	daja ʔun ŋijunu na:ja ɕittɕunn'a.	
41	3上嘉鉄	M	da: φun j'unu namaje: {ɕironja/ɕirokkai}.	
41	3上嘉鉄	K	da: ʔun junu namae ɕironn'a.	
41	3上嘉鉄	O	da: ʔun junu na: ɕironn'a:.	
41	4中里	M	da:(ja) ʔun ŋiju:nu na: ɕittɕun{ja/n'a}.	
41	4中里	K	{da:/t'a:} ʔun ŋijunu na: ɕittɕun{n'a(:)/na}.	
41	5荒木	M	da: ʔun j'unu namaeba ɕittɕunja.	
41	5荒木	K	da: ʔun junu namae ɕittɕunn'a.	
41	5荒木	O	da: ʔun junu namae {ɕittɕunn'a/wakarunn'a}.	
42	0共通語		これは かつおだろう。	
42	1小野津	M	φure: katsuo dzaddo:ga.	
42	1小野津	K	hure: katsuo zaddo:ga.	
42	1小野津	T	φure: katsuo {dzaro:/do: ŋa}.	
42	1小野津	O	hure: katsuo {do:/do:ŋa}.	
42	2志戸桶	M	ʔure: katsu: {dzaro:/dzaddo:ŋa}.	
42	2志戸桶	K	ʔure: katsuo zaro:.	
42	3上嘉鉄	M	{φure:/φurje:} katsuo zaro:.	
42	3上嘉鉄	K	ʔure: katsuo zaro:ja:.	

番号	地域	班	共通語文	備考
42	3上嘉鉄	O	ʔure: katsuo dzaho:.	
42	4中里	M	ʔure: katʂudo:ŋa.	
42	4中里	K	ʔure: katsuo do:ga.	
42	5荒木	M	ʔure: katʂudo:ŋa.	
42	5荒木	K	ʔure: katsuo do:ŋa.	
42	5荒木	O	(h)ure: katsuo zaro(:).	katsuoはkatsu:とも。
43	0共通語		酒は どうやって つくるか おまえは 知っているだろう？	
43	1小野津	M	se:ja k'a:ɕi tsukujukka daja ɕit{tɕ/ʂ}uddo:ga.	
43	1小野津	K	se:ja k'aɕiɕi tsukujukka daja ɕittɕutaro:.	
43	1小野津	O	se:ja k'aɕiɕi tsukujukka daja ɕittɕundo:ŋa.	se:はɕe:とも。
43	1小野津	T	se: ja k'aɕiɕi {tsukujukka/tsukk'ukka} daja {ɕittɕuro:/ɕittɕun do:ŋa}.	
43	2志戸桶	M	se:ja tɕa(:)ɕiɕi {tsukujukka/tsukk'ukka} daja {ɕittɕuro:(ŋa)/ɕittɕundo:ŋa/ɕittɕundzaro:}.	
43	2志戸桶	K	se:ja tɕa:ɕiɕi {tsukk'ukka/tsukujukka} daja {ɕittɕuddo:ga/ɕittɕuro:ga}.	
43	3上嘉鉄	M	ɕe:ja sa:je: tukurikka da: {ɕironja/ɕiokkaja:}.	sa:je:はɕa:je:(こも聞こえる。
43	3上嘉鉄	K	se:ja sa:ensen t'ukurikka da: {ɕiro:ro:ja:/ ɕiro:tto:ga}.	
43	3上嘉鉄	O	se:ja sa:hense: {t'uttɕikka/t'uttɕinka} ɕironn'a:.	
43	4中里	M	{se:/ɕe:}ja saɕiɕi {t'ukujukka(A)//t'ukujusuka(B)} da: ɕittɕun{do:ŋa/n'a}.	話者Bはɕittɕunの他に wakatonとも。
43	4中里	K	se:ja saɕiɕi t'uttɕukka da: ɕittɕun do:ga.	
43	5荒木	K	se:ja saɕiɕi tsukurukka da: ɕittɕun do:ŋa.	
43	5荒木	O	ɕe:ja saɕiɕi tsukurusujo da: ɕittɕundo:ŋa.	
44	0共通語		酒は 米から つくる。	
44	1小野津	M	se:ja ɕumikara {tsukujui/tsukku su}.	
44	1小野津	K	se: ja ɕumikara tsukui.	
44	1小野津	O	se:ja humikara {tsukujui/ tsukujun do:}.	se:はɕe:とも。
44	1小野津	T	se: ja ɕumɛkara {tsukuju(:)i/tsukui}.	
44	2志戸桶	M	se:ja ɕumikara tsukk'usu(do:).	話者Bはɕumiをɕumiと発
44	2志戸桶	K	se:ja ɕumizi tsukk'ui.	
44	3上嘉鉄	M	ɕe:ja ɕumikara tukuriindo:.	

番号	地域	班	共通語文	備考
44	3上嘉鉄	K	se:ja φumikara t <sup>2</sup> uttsin.	
44	3上嘉鉄	O	se:ja humikaradu {tuttsindo:/tuttsi}.	
44	4中里	M	se:ja φumizi {t <sup>2</sup> ukujui(A)//t <sup>2</sup> ukujusudo:(B)}.	
44	4中里	K	se:ja φumikara t <sup>2</sup> ukujusu do:.	
44	5荒木	K	se:ja φumikara tsukurui.	
44	5荒木	O	se:ja humikara tsukurusudo:.	
45	0共通語		酒さえ あれば なにも いらぬ。	
45	1小野津	M	se:se: ?ariba nu:mu ?ijan.	
45	1小野津	K	se:se: ?ariba nu:mu ?ija:.	
45	1小野津	O	se:ŋa ?ariba nu:mu ?ija.	se:はse:とも。
45	1小野津	T	se:se: ?ariba nu:mu {?ijan/?jan}.	
45	2志戸桶	M	se:se: ?ariba nu:mu {?iran/?ira:}.	
45	2志戸桶	K	se:se: ?ariba nu:mu ?iran.	
45	3上嘉鉄	M	se:se: ?ariba nu:mu ?irando:.	
45	3上嘉鉄	K	se:se:(ka) ?ariba nu:mu ?iran.	
45	3上嘉鉄	O	se:se:ka ?ariba: nu:mu ?iran.	
45	4中里	M	se:se: ?ariba: nu:mu ?iran.	
45	4中里	K	se:se: ?ariba nu:(mu) ?ira:.	
45	5荒木	K	se:se:(ka) ?ariba nu:mu {?ira:/?iran}.	
45	5荒木	O	se:se:ka ?ariba wano: nu:mu ?iran do:.	wano:「私は」
46	0共通語		うちの じいさんは 酒も たばこも のまない。	
46	1小野津	M	wanna: ja:nu ?azija se:mu tabakumu numan(do:).	
46	1小野津	K	wanna: ja:nu ?azija se:mu tabakumu numa:.	
46	1小野津	O	ja:nu ?adzi(:)ja se:mu tabakumu numa:.	
46	1小野津	T	wanna: ?adzija se:mu tabakumu {numa:/numan do:}.	
46	2志戸桶	M	wanna: ?azija se:mu tabakumu numan(do:).	?azi:が単母音化している。
46	2志戸桶	K	ja:nu ?azi:ja se:mu tabakumu numan.	
46	3上嘉鉄	M	j <sup>2</sup> a:nu {?azi:ja/dzi:sanu:} se:mu tabakumu numando:.	
46	3上嘉鉄	K	ja:nu zi:sanu se:mu tabakumu numan.	

番号	地域	班	共通語文	備考
46	3上嘉鉄	O	{ja:nu ʔadzi:/waNna: ʔadzi:}ja ɛ:mu tabakumu numan do:.	
46	4中里	M	wanna: ja:nu ʔazi:ja ɛ:mu tabakumu numando:.	
46	4中里	K	wanna: ʔazi:ja se:mu tabakumu numa:.	
46	5荒木	K	ja:nu ʔazija se:mu tabakumu numa:.	
46	5荒木	O	wa: ja:nu ʔazi:ja ɛ:mu tabakumu numan do:.	
47	0共通語		その 水は のむな。 のむなら この 水を のめ。	
47	1小野津	M	ɸun mizuɔ: numuna, {num <sup>1</sup> uNnaɾa/num <sup>1</sup> ute:} ɸun mizu(oba) numi.	
47	1小野津	K	hunu mizo: numuna. num <sup>1</sup> uNnaɾa hun mizujo:ba numi.	
47	1小野津	O	hunu midzo: numuna, {nunbusariba/num <sup>1</sup> ute:} hunu midzu(wo) numi.	
47	1小野津	T	{ɸun/ɸunu} mēzo: numuna jo: . numēte: ɸun mēzu numē jo: .	話者Dはmizo:, mizuと発音。
47	2志戸桶	M	ʔun mizuɔ: numuna, num <sup>1</sup> ut(?)e: ʔun mizu(ba) numi.	
47	2志戸桶	K	ʔun mizo: numuna. {numi sun naraba/numute:} ʔun mizu numi.	
47	3上嘉鉄	M	ɸun mizuɔ: numuna, numiba ʔan mizu numi(jo:).	
47	3上嘉鉄	K	ʔun mido: numuna. numisu nariba ʔun midu numi.	
47	3上嘉鉄	O	ʔun mido: numunajo: . numisunariba ʔun midu {numijo:/numi:}.	
47	4中里	M	ʔun mizuɔ: numuna, num <sup>1</sup> usu nariba: ʔun mizuɔ(ba) numi(jo:).	
47	4中里	K	ʔun mido: numuna. nun <sup>1</sup> usu nariba ʔun midu(joba) numi.	nun <sup>1</sup> usuはnunjusuかも
47	5荒木	K	ʔun mizo: numuna. numisu nariba ʔun mizu numi.	
47	5荒木	O	ʔun {mizo:/mizuɔ} numunajo: , numisu nariba ʔun mizu numijo: .	
48	0共通語		なぜ おまえは たべないのか。	
48	1小野津	M	nuŋaɛɛi daja {kamanso:/kamanso:{nuŋa/nuŋaɛɛi}}.	
48	1小野津	K	nuŋa daja kaman so: .	
48	1小野津	O	nuŋa daja: kamanso: .	
48	1小野津	T	nuŋa daja kaman so: .	

番号	地域	班	共通語文	備考
48	2志戸桶	M	nuŋaɕsi daja kamaŋso:.	
48	2志戸桶	K	nuŋa daja kamaŋ so:.	
48	3上嘉鉄	M	nu:nare: da: kamaŋɕuka.	
48	3上嘉鉄	K	{nuŋa/nua} da: kamanu.	
48	3上嘉鉄	O	nu:wa da: {kamanu/kamaŋso:}.	
48	4中里	M	nuŋa da: {kamaŋsujo/kamaŋso: nuŋajo}.	
48	4中里	K	nuŋa da: kamaŋso:.	
48	5荒木	K	nuŋa da: {kama:/kamaŋso:}.	
48	5荒木	O	nuŋa da: kamaŋso:iŋŋa.	
49	0共通語		おれは さつまいもなんか 食べないぞ。	
49	1小野津	M	wano: paŋsu:Nkʲa kamaŋdo:.	
49	1小野津	K	wano: paŋsuNkʲa kamaŋ do:.	
49	1小野津	O	wano: haŋsuNkʲa kamaŋdo:.	haŋsu:はpaŋsu:とも。
49	1小野津	T	wano: {pʰaŋsu:/ɸaŋsu:}Nkʲa: kamaŋ do:.	
49	2志戸桶	M	wano: paŋsuNtɕa: kamaŋdo:.	
49	2志戸桶	K	wano: paŋsu:ja kamaŋ.	
49	3上嘉鉄	M	wano: haŋɕuNtɕa: kamaŋdo:.	haŋsu:が単母音化している。
49	3上嘉鉄	K	wano: haŋsuwa kamaŋ do:.	
49	3上嘉鉄	O	wano: haŋsuNtɕa: kamaŋdo:.	
49	4中里	M	wano: haŋsu:Ntɕa: kamaŋdo:.	
49	4中里	K	wano: haŋsuNtɕa kamaŋ do:.	
49	5荒木	K	wano: haŋsuNtɕa: kamaŋ do:.	
49	5荒木	O	wano: haŋsuNtɕa kamaŋ do:.	
50	0共通語		もう 食べられる ものは 全部 食べた。	
50	1小野津	M	nʲa: kamaŋiŋ muno: dʒenbu kadaŋdo:.	
50	1小野津	K	nʲa: kamaŋiŋ muno: ɕiNnʲa kadi.	
50	1小野津	O	nʲa: {kamaŋiŋ/kaŋ} muno: {?aŋukani(:)}	
50	1小野津	T	nʲa: {kamaŋiŋ/kamaŋaŋiŋ} muno: ɕiNnʲa {kada/kadaŋ do:}.	
50	2志戸桶	M	nʲa: kamaŋiŋ muno: ɕiNnʲa {kadi/kadaŋ}.	kadiははっきりと自分が食べたことになる。
50	2志戸桶	K	nʲa: kamaŋiŋ muno: ɕiNnʲa kadaŋ do:.	



番号	地域	班	共通語文	備考
50	3上嘉鉄	M	nama: {kamarIN/kamiN} muno: çINja kadando:.	
50	3上嘉鉄	K	na:, kamarIN muno: jINn'a kada.	
50	3上嘉鉄	O	na: kamarIN muno: çINn'a: kadando:.	
50	4中里	M	n'a: {kam'UN/kamarUN} muno: {çINn'ja/nu:Nki:} {kadan/kadi}.	kadiは「自分が食べた」。nu:Nki:「何もかも」
50	4中里	K	n'a: kamarUN muno: pUNtu kadi.	
50	5荒木	K	n'a: kamarUN muno: çINn'a kadi.	
50	5荒木	O	n'a: kamarUN muno: zENbu kadan do:.	
51	0共通語		食べて ねるだけなら いぬや ねこと おなじだ。	
51	1小野津	M	kadi: n'ibb'UN{daki/bakkai} ?ariba ?INŋa:Nk'a maja:tu {?iççoza/t'itsuza:}.	
51	1小野津	K	kadi n'ipp'UNDaki nara ?INŋa:ja maja:tu t'itsu mun za so:.	
51	1小野津	O	kadi {nibb'UN/nibb'u/nibbi}bë ?ariba ?INna:ja maja:tu t'itsu.	
51	1小野津	T	kadi(kara) nibbibë: {?ariba/ja} ?INŋa:tu maja:tu {t'itsu dza/?INmun do:}.	
51	2志戸桶	M	kadi: n'ippunde: ?ariba ?INŋa:ja maja:tu {t'itsu/jIN} mun.	
51	2志戸桶	K	kadi n'ibb'usu narIba ?INŋa:ja maja:tu ?issu.	
51	3上嘉鉄	M	kame: n'INbin{daki/mUN}nariba ?INŋa:ja maja:tu t'itumundo:.	
51	3上嘉鉄	K	kamen n'INbidaki nariba ?INŋa:ja guru:tu {jINmun/?issu} za.	
51	3上嘉鉄	O	{kadi: ninbenbakkai/kamen ninbenbakkai} ?uriba: ?INŋa:tu guru:tu iççudo:.	
51	4中里	M	kadi nITTUN dakinariba: ?INŋa:ja guru:tu {?issu/t'itu}za:.	
51	4中里	K	kadi nITTUNDaki nariba ?INŋa:ja guru:tu ?issu za.	nITTUNのnは口蓋化していない。
51	5荒木	K	kadi ninbindaki nariba: ?INŋ <sup>w</sup> a:ja guru:tu {?içço/tiçsumUN/jINmun} za ŋa.	?INŋ <sup>w</sup> a:は?INŋa:とも。
51	5荒木	O	kadi ninbindaki nariba ?INŋ <sup>w</sup> aja guru:tu ?ONnazi do:.	
52	0共通語		さとうは あまい。くすりは あまくない。	

番号	地域	班	共通語文	備考
52	1小野津	M	sata:ja ʔamasa, suje: ʔamasa nen.	n'ittsa 「苦い」とも
52	1小野津	K	sata:ja ʔamasa. suje: n'igasa.	nigasa 「苦い」。
52	1小野津	O	sata:ja {ʔamasa/ʔamasai}, {sue:/sui} ʔamasane:.	
52	1小野津	T	sata:ja ʔamasai, sue: ʔamasa(:) ne:.	
52	2志戸桶	M	sat <sup>2</sup> a:ja ʔamasa, kusue: ʔamasa:nen.	kusui 「薬」。n'igasa 「苦い」とも。
52	2志戸桶	K	satta:ja ʔamasai. kusure: ʔamasa ne:.	
52	3上嘉鉄	M	ɛata:ja ʔamasando:, kuɛure: ʔamaku ne:rando:.	
52	3上嘉鉄	K	sata:ja nurusa{ri/N}. kusure: nuruku nen.	
52	3上嘉鉄	O	sata:ja ʔamasari. {kusurija/kusuriwa/kusure:ja} ʔamasa {ne:ra:/ne:}.	
52	4中里	M	sat <sup>2</sup> a:ja ʔamasai, kusurije: ʔamasa:nen.	
52	4中里	K	sat <sup>2</sup> a:ja ʔamasai. kusuje: ʔamasa ne:.	
52	5荒木	K	sata:ja ʔamasa{i/N}. kusure: ʔamasa ne:ra:.	
52	5荒木	O	sata:ja ʔamasaN do: kusure: ʔamasa: ※.	※文末、ne:などが抜けている？
53	0共通語		去年 いとこが 中学の 先生に なった。	
53	1小野津	M	ɸuzu ʔitukuŋa ɬu:gakko:nu ɛinse:n'i natan{ɬi/do:}.	
53	1小野津	K	huzu ʔitukuŋa ɬu:ŋakko:nu sense:n'i nati.	
53	1小野津	O	hudzu: ʔitukuŋa ɬu:gakko:no ɛinse:ni nati.	ɬu:gakko: は ɛe: ɬu:ŋakko:とも。
53	1小野津	T	ɸuzu ʔitukuŋa ɬu:gakko:nu ɛinse:n'i {natan do:/nati}.	
53	2志戸桶	M	ɸuzuɔ: ʔitukuŋa ɬu:gakko:nu ɛinse:n'i {nat <sup>2</sup> a/natan}.	
53	2志戸桶	K	huzu ʔitukuŋa ɬu:gakko:nu ɛinse:n'i natan.	
53	3上嘉鉄	M	ɸudu ʔitukunu ɬu:gakko:nu ɛinɛe:n'i natando:.	
53	3上嘉鉄	K	kudo: ʔituku{nu/ga} ɬu:gakko:nu ɛinse:n'i natan.	
53	3上嘉鉄	O	hudu: ʔitokoŋa ɬu:gakko:nu ɛinse: natan(do:).	
53	4中里	M	ɸudu ʔitukuŋa ɬu:gakko:nu ɛinse:n'i nat <sup>2</sup> ando:.	ɛinse:はɛinɛe:とも。
53	4中里	K	hudu ʔitukuŋa ɬu:ŋakko:nu ɛinse:n'i nati.	
53	5荒木	K	{ɸuzu/ɸuzo:} ʔitukuŋa ɬu:gakko:nu ɛinse:n'i nati.	ɬu:gakko:はɬu:ŋakko:とも。
53	5荒木	O	huzu ʔitukuŋa ɬu:ŋakko:nu ɛinɛe:n'i natan do:.	natandoはnatando:か。

番号	地域	班	共通語文	備考
54	0共通語		いとは 英語の 本が 読める。	
54	1小野津	M	ʔituko: jeigonu honŋa jumi dik <sup>h</sup> undo:.	
54	1小野津	K	ʔituko: jeigonu honjo:ba jumi dik <sup>h</sup> ui.	
54	1小野津	O	ʔituko: {ʔamerika jumita/j <sup>2</sup> e:go}nu honŋa jumi {dikujui/dikui}.	
54	1小野津	T	ʔituko: je:gonu ɕimutsuŋa {jumi dikun/jumarin/ jum <sup>h</sup> un} do:.	
54	2志戸桶	M	ʔituko: je:gonu honŋa j <sup>2</sup> umi ʔusui.	
54	2志戸桶	K	ʔituko: jeigonu honba jum <sup>h</sup> u: sun.	
54	3上嘉鉄	M	ʔituko: jeigonu honnu {jumindo:/jumarindo:}.	
54	3上嘉鉄	K	ʔituko: je:gonu honnu juminsin.	
54	3上嘉鉄	O	ʔituko: e:gonu sumutu jumi: {cin/ɕin}do:.	
54	4中里	M	ʔituko: jeigunu sumutuŋa jumijun.	
54	4中里	K	ʔituko: je:gonu honŋa jun <sup>h</sup> unsui.	
54	5荒木	K	ʔituko: je:gonu {honŋa jumi:su/hondu {jumi:/ jumi: sui}}.	
54	5荒木	O	ʔituko: jeigonu hon juminsun do:.	
55	0共通語		あの 人こそ ほんとうの 金持ちだ。	
55	1小野津	M	ʔan tsukusa ɸunto:nu hanimutsi{za/do:}.	
55	1小野津	K	ʔan tsukusa hunto:nu han <sup>h</sup> imutsi.	
55	1小野津	T	ʔan tsukusa: p <sup>h</sup> unto:nu hanimutsi do:.	p <sup>h</sup> unto:はɸunto:とも。
55	1小野津	O	ʔan t <sup>2</sup> ukusa huntu:nu hanimutsi do:.	hanimutsi(はkanimutsiと も。
55	2志戸桶	M	ʔan tsukusa ɸunto:nu hanimutsizaja.	
55	2志戸桶	K	ʔan {t <sup>2</sup> /t <sup>2</sup> }ukusa hunto:nu {h/k}an <sup>h</sup> imutsi.	
55	3上嘉鉄	M	ʔan {tsukusa/tsuɸudu} ɸunto:nu hanimutsido:.	
55	3上嘉鉄	K	ʔan t <sup>2</sup> ukusu hunto:nu han <sup>h</sup> imutsi za.	
55	3上嘉鉄	O	ʔan {tsukusaja:/t <sup>2</sup> u:kusa:} hunto:no {hanemutsi/hanimutsi}do:.	
55	4中里	M	ʔan tsukusa ɸunto:nu hanimutsi za:.	
55	4中里	K	ʔan t <sup>2</sup> u ku{su/sa} ɸunto:nu hanimutsi (do:).	haniのnは口蓋化していな
55	5荒木	K	ʔan tsukusa hunto:nu han <sup>(ʔ)</sup> imutsi za(:).	
55	5荒木	O	ʔan tsudu hunto:nu hanimutsido:.	

番号	地域	班	共通語文	備考
56	0共通語		その話は 妻にだけ 聞かせた。	
56	1小野津	M	ɸun hanase: tuzin <sup>i</sup> ibē: kikatɕan(do:).	ë:は音がややあいまい。
56	1小野津	K	hun panase: tuzin <sup>i</sup> daki kikatɕi.	
56	1小野津	O	hunu {hanase:/jumita} tucz <sup>i</sup> nibē: {k <sup>2</sup> itatɕi/k <sup>2</sup> ikatɕan do:}.	
56	1小野津	T	ɸunu jumēt <sup>2</sup> a: tucz <sup>i</sup> n <sup>i</sup> ibē: {kikatɕi/kikatɕan} do:.	
56	2志戸桶	M	ʔun panase: tuzin <sup>i</sup> ibē: k <sup>2</sup> ikatɕan.	
56	2志戸桶	K	ʔun hanase: tuzin <sup>i</sup> bē: {kikatɕan/hatatan}.	ë:は音があいまい。e:にも。
56	3上嘉鉄	M	ʔun hanasjē: tuzidakjē: tɕikatɕando:.	tuzidakjē:「妻だけに」※ 「妻に」だとtuzin <sup>i</sup> 。
56	3上嘉鉄	K	ʔun hanase: {tuzen/tuzien}daki kikatɕan.	kikatɕan(はtɕikatɕanとも。
56	3上嘉鉄	O	ʔun jumita: tucz <sup>i</sup> ijendaki: {tɕikatɕan/tɕikatɕi}.	
56	4中里	M	ʔun hanasjē: tuzin <sup>i</sup> ibe:i tɕikatɕa(N).	
56	4中里	K	ʔun hanase: tuzin <sup>i</sup> {daki/be:} {tɕ <sup>2</sup> ik <sup>2</sup> atɕi/tɕ <sup>2</sup> ik <sup>2</sup> atɕan do:}.	
56	5荒木	K	ʔun hanase: tuzin <sup>i</sup> dake tɕikatɕan.	
56	5荒木	O	ʔun hanase: tuzin <sup>i</sup> daki {tɕikatɕan/hanatɕan} do:.	
57	0共通語		妻に 夕飯を 作らせる。	
57	1小野津	M	tuzin <sup>i</sup> {ji:joba/ji:ban <sup>i</sup> uba} tɕukkasun(do:).	
57	1小野津	K	tuzin <sup>i</sup> ji:jo:ba tɕukurasi.	
57	1小野津	O	tucz <sup>i</sup> ni ji:jo:ba {tɕ <sup>2</sup> ukuratɕi/tɕ <sup>2</sup> ukkatɕan/tɕ <sup>2</sup> ukkatɕi}	
57	1小野津	T	tucz <sup>i</sup> n <sup>i</sup> ji:jo:ba {tɕukurasi/tɕukkasi}	
57	2志戸桶	M	tuzin <sup>i</sup> ju:ban(ba) {tɕukuratɕan/tɕukurasun/ tɕukkasun}.	
57	2志戸桶	K	tuzin <sup>i</sup> ju:ban {tɕ/tɕ}ukkasun.	
57	3上嘉鉄	M	tuzjē: ji:oba t <sup>2</sup> ukurasiindo:.	
57	3上嘉鉄	K	tuzē:n ji: {tukkatɕa/tukkasiN}.	ji:はzi:にも聞こえる。
57	3上嘉鉄	O	tucz <sup>i</sup> en ji:jo:ba {tɕukkati/tukka siN}.	
57	4中里	M	tuzin <sup>i</sup> ji:(o:ba) t <sup>2</sup> ukurasui.	
57	4中里	K	tuzin <sup>i</sup> ji:(jo:ba) {t <sup>2</sup> ukuratɕi/t <sup>2</sup> ukuratɕui}.	
57	5荒木	K	tuzin <sup>i</sup> ji:{jo:ba/wo:ba} {tɕukurasi/tɕukurasui}.	
57	5荒木	O	tuzin <sup>i</sup> ji:ja tɕukurasun do:.	

番号	地域	班	共通語文	備考
58	0共通語		夫は 竹で かごをつくった。	
58	1小野津	M	ʔutuɔ: de: dʒi kagu{joba/oba} tsukutʔan.	
58	1小野津	K	uto: de: zi so: ɸijo: ba tsukuti.	
58	1小野津	O	{ʔuto:/uto:} de: dʒi {kago:/so: ɸi} {tsʔukuta/ tsʔukuti}.	so: ɸiはso: ɸi ɛe:にも聞こえる。
58	1小野津	T	ʔuto: de: dʒi kagujo: ba {tsukutan do:/ʔadan}.	ʔadan 「編んだ」
58	2志戸桶	M	uto: {de: de:/de: zi} magu: (ba) {tsukutʔa/tsukuti}.	
58	2志戸桶	K	uto: de: zi kago: {tsutta/tsuttɛan}.	
58	3上嘉鉄	M	utuɔ: de: e: kagooba tʔukutʔando:.	
58	3上嘉鉄	K	ʔu(t)to: de: sen kago: {tʔukkatɛan/tʔukutan}.	
58	3上嘉鉄	O	utto: de: he: so: bi tukutando:.	
58	4中里	M	uto: de: zi so: ɸinkaʔa: (o) tʔukutʔan.	「かご」 so: ɸinka(小)/ so: ɸi(大)。
58	4中里	K	uto: de: zi kagujo: ba {tʔukuti/tʔukutan}.	
58	5荒木	K	ʔuto: de: zi kagujo: ba tsukutʔi.	
58	5荒木	O	uto: de: zi kagu tsukutan do:.	
59	0共通語		次郎は おとうとの 三郎と けんかした。	
59	1小野津	M	dʒiro: ja ʔuttu: nu saburo: tu ɛikkitan(do:).	伝聞の場合はtinŋa 「らしい」 tɛi 「って」がつく
59	1小野津	K	ziro: ja ʔuttu: nu saburo: tu ɛikkiti.	
59	1小野津	O	dʒiro: ja ʔuttunu saburo: tu ɛikkitan do:.	
59	1小野津	T	dʒiro: ja {ʔuttu(:)/ʔuttubo:} nu saburo: tu ɛikkitan do:.	ʔuttubo: 「年下の男のきょう だい」
59	2志戸桶	M	dʒiro: ja ʔuttu: nu saburo: tu {ɛikkitʔa/ɛikkiti}.	
59	2志戸桶	K	ziro: ja ʔuttu: nu saburo: tu ɛikkitan.	
59	3上嘉鉄	M	dʒiro: ja ʔuttunu saburo: tu ɛittɛitʔan(do:).	
59	3上嘉鉄	K	ziro: wa ʔuttunu saburo: tu ɛittɛitan.	
59	3上嘉鉄	O	dʒiro: ja ʔuttunu saburo: tu ɛittɛitan do:.	
59	4中里	M	dʒiro: ʔuttunu saburo: tu ɛittɛitʔa(N).	
59	4中里	K	dʒiro: ja ʔuttunu saburo: tu ɛittɛiti.	
59	5荒木	K	dʒiro: ja ʔuttunu saburo: tu ɛittɛiti.	
59	5荒木	O	ziro: ja ʔuttunu saburo: tu ɛittɛitandō:.	
60	0共通語		三郎は 次郎に 棒で なぐられた。	

番号	地域	班	共通語文	備考
60	1小野津	M	saburo:ja dʒi:ro:nʲi bo:zɪ ʔutattan(do:).	直接見た場合はdo:「よ」、 伝聞の場合はtɕi「って」。
60	1小野津	K	saburo:ja zɪ:ro:nʲi bo:zɪ tatakatti.	
60	1小野津	T	saburo:ja dʒi:ro:nʲi bo:dʒi ʔutattan do:.	
60	1小野津	O	saburo:ja dʒi:ro:ni {bo:/butto:}dʒi {ʔutatta/ʔutatti}.	
60	2志戸桶	M	saburo:ja dʒi:ro:nʲi {bo:/butto:}dʒi {ʔutatti/ ʔuttakuratti/ʔuttakurattan}.	
60	2志戸桶	K	saburo:ja zɪ:ro:nʲi bo:zɪ ʔutattan.	
60	3上嘉鉄	M	saburo:ja dʒi:ro:e: {bo:/guɕi:}e: ʔutʔatʔan.	
60	3上嘉鉄	K	saburo:wa zɪ:ro:{nʲi/en} bo:sen ʔutattan.	
60	3上嘉鉄	O	saburo:{wa/ja} dʒi:ro:ni guɕi:{de/hen/jen} ʔutattan do:.	
60	4中里	M	saburo:ja dʒi:ro:nʲi butto:dʒi ʔutattan.	話者Bはʔuttakurattaとも。
60	4中里	K	saburo:ja dʒi:ro:nʲi butto:zɪ ʔutatti.	
60	5荒木	K	saburo:ja dʒi:ro:nʲi butto:zɪ ʔutatti.	
60	5荒木	O	saburo:ja zɪ:ro:nʲi butto:zɪ ʔutattando:.	
61	0共通語		次郎は じいさんに しかられた。	
61	1小野津	M	dʒi:ro:ja ʔazinʲi butirattan(tɕi).	butirarinしかられる。
61	1小野津	K	zɪ:ro:ja ʔazinʲi butiratti.	
61	1小野津	O	dʒi:ro:wa ʔadʒi:ni {buteratta/buteratti}.	
61	1小野津	T	dʒi:ro:ja ʔadʒi:nʲi butirattan do:.	
61	2志戸桶	M	dʒi:ro:ja ʔazinʲi {butiratta/butiratti}.	butirarinしかられる(口で)。
61	2志戸桶	K	zɪ:ro:ja ʔaziinʲi butirattan.	
61	3上嘉鉄	M	dʒi:ro:ja: ʔazi:e: butɕirattan.	
61	3上嘉鉄	K	zɪ:ro:wa zɪ:sannʲi ʔunasattan.	ʔunasattanはkunasattanと も。
61	3上嘉鉄	O	dʒi:ro:ja: ʔadʒi:ni kurasattan.	
61	4中里	M	dʒi:ro:ja ʔazi:kara {butirattan/butiratti}.	
61	4中里	K	dʒi:ro:ja ʔazi:nʲi butiratti.	
61	5荒木	K	dʒi:ro:ja ʔazi(:)nʲi butiratti.	
61	5荒木	O	zɪ:roja {azi:kara/azi:nʲi} {butirattan/butiratti}.	zɪ:rojaはzɪ:ro:jaか。
62	0共通語		おれは きのうは 新聞を よまなかった。	

番号	地域	班	共通語文	備考
62	1小野津	M	wano: kin'u:ja ɛɪnbunjuba {jumantaja/jumantan (do:)}.	jumantajaだと「しまったなあ」ということ。
62	1小野津	K	wano: kin'u:ja ɛɪnbunjo:ba jumanti.	
62	1小野津	O	wano: kin'u:ja ɛɪnbun jomanti.	
62	1小野津	T	wano: kin'u:ja {ɛɪnbuno:/ɛɪnbun} jumantan do:.	
62	2志戸桶	M	wano: kin'u:ja ɛɪnbun {juda:ra:/juda:ran/jumanti}.	
62	2志戸桶	K	wano: kin'u:ja ɛɪnbun jumantan.	
62	3上嘉鉄	M	wano: kiju:ja ɛɪnbun mirant <sup>2</sup> ando:.	この場合jumant <sup>2</sup> an「読まなかった」とは言わない。
62	3上嘉鉄	K	wanu: su:wa ɛɪnbun jumantan.	
62	3上嘉鉄	O	wano: ɬɛiju:ja ɛɪnbun jumantan do:.	
62	4中里	M	wano: ɬɛin'u:ja ɛɪnbun {jumanta/jumanti}.	
62	4中里	K	wano: ɬɛin'u:ja ɛɪnbun jumanti.	
62	5荒木	K	wano: ɬɛin'u:ja {ɛɪnbuno:/ɛɪnbunno:/ɛɪnbun} jumanti (ja:).	
62	5荒木	O	wano: ɬɛin'u:ja ɛɪnbunno: jumantan do:.	
63	0共通語		その新聞はきょうのだ。きのうのはこれだ。	
63	1小野津	M	ɸun ɛɪnbuno: k'u:(nu) muncɟa. kin'u: muno: ɸuriza.	?anma: 「おばあさん」
63	1小野津	K	hun ɛɪnbuno: k'u:nu mun. kin'u:nu muno: huri za.	
63	1小野津	O	hunu ɛɪnbuno k'u:nu mun ɟa. kin'u:nu muno: huri {ɟa/do:}	
63	1小野津	T	ɸun ɛɪnbuno k'u:nu (mun) {do:/ɟa}. {kin'u:no:/kin'u:nu muno:} ɸuri do:	
63	2志戸桶	M	ʎun ɛɪnbuno: k'u:nu muncɟaja, kin'u:nu {ɛɪnbuno:/muno:} ʎuriza(ja:).	
63	2志戸桶	K	ʎun ɛɪnbunja k'u:nu mun za. kin'u:nu muno: ʎuri za.	
63	3上嘉鉄	M	ɸun ɛɪnbuno: ɛu:nu {ɛɪnbun/mun}do:, kiju:nu {ɛɪnbuno:/muno:} ɸurido:.	kiju:はɬɛiju:とも聞こえる。
63	3上嘉鉄	K	ʎun ɛɪnbuno: su:nu mun za. dzijo:nu muno: ʎuriza.	
63	3上嘉鉄	O	ʎun {ɛɪnbunwa/ɛɪnbuno:} su:nu mundo. ɬɛiju:nu muno: ʎuri do:.	
63	4中里	M	ʎun ɛɪnbuno: su:nuda, kin'u:nu muno: ʎuriza.	

番号	地域	班	共通語文	備考
63	4中里	K	ʔun ɛɪnbuno: su:nu muN do:.. tɛɪn <sup>h</sup> u:nu muno: ʔuri do:..	
63	5荒木	K	ʔun ɛɪnbunno: su:nu muN (za). tɛɪn <sup>h</sup> u:nu muno: ʔuri za.	
63	5荒木	O	ʔun ɛɪnbunno: su:nu mundo: tɛɪn <sup>h</sup> u:nu muno: ʔuri do:..	
64	0共通語		雨の ふる 日には ばあさんは 家で テレビばかり 見ている。	
64	1小野津	M	ʔaminu ɸujunte:, ʔanmaja ja:zi terebibakkai mitɕundo:..	
64	1小野津	K	ʔamiŋa hujun pe: ʔanmaja ja:zi terebibe: mitɕui.	
64	1小野津	O	{ʔami/ʔami/ʔanme} nu hujun pi:ja ʔanmaja ja:dzi terebi bakkai mitɕui.	
64	1小野津	T	ʔaminu ɸujun {p <sup>h</sup> i:ja/p <sup>h</sup> ɛ:/p <sup>h</sup> in <sup>h</sup> e:} ʔanma: terebi bɛ: mitɕun do:..	p <sup>h</sup> i:(ja)はɸi:とも。
64	2志戸桶	M	{ʔamiɸui n <sup>h</sup> je:/ʔaminu ɸujun pin <sup>h</sup> je:} ʔanma:ja {ja:dzi/ja:nti} terebi{bɛ:/bakkai} mitɕun.	
64	2志戸桶	K	ʔaminu hujun {p/ɸ}in <sup>h</sup> e: ʔanmaja ja:zi terebibe: mitɕun.	
64	3上嘉鉄	M	ʔaminu ɸur <sup>h</sup> un t <sup>h</sup> ukin <sup>h</sup> je: ʔan <sup>h</sup> i:ja ja:e: terebibakkai mirondo:..	
64	3上嘉鉄	K	ʔaminu ɸurin ɕi:ja ja:{jen/zi} terebibakkari mirun.	ʔamiはʔamiにも聞こえる。ɸurinはɸuri:にも聞こえる。mirunはmironとも。
64	3上嘉鉄	O	ʔaminu hurin ɕi:ja anma:ja ja:{de/dze:/jen} terebibakkai mirondo:..	
64	4中里	M	ʔaminu ɸujun ɕi:n <sup>h</sup> je: ʔan <sup>h</sup> i:ja ja:dzi terebi {be:ri/bakka(r)i} mitɕui.	
64	4中里	K	ʔaminu hujun he: {ʔanma/ʔani:}ja ja:zi terebibe: mitɕui.	ʔani:のnは口蓋化していない。
64	5荒木	K	ʔaminu ɸurun he: ʔanmaja ja:zi terebiba:ri mitɕui.	
64	5荒木	O	ʔamiŋa hurun ɕi:ja ʔanmaja ja:zi terebibakkai mitɕun do:..	
65	0共通語		お祝いの ときには ばあさんまで おどった。	
65	1小野津	M	juwe:n dukin <sup>h</sup> je: ʔanma:gari ʔudutando:..	
65	1小野津	K	ju:we:nu tuk <sup>h</sup> e: ʔanma:gadi ʔuduti.	



番号	地域	班	共通語文	備考
65	1小野津	O	ju:wē:nu {tukini/tuke:} ?anmamadi {udutaN/ ?udutaN} do:.	
65	1小野津	T	ju:we:nu {duke:/dukin'e:} ?anma:garī ?udutaN do:.	
65	2志戸桶	M	ju:we:nu tukine: ?anma:madi {udut'ando:/udut'i}.	
65	2志戸桶	K	juwe:nu tukin'e: ?anma:{madi/gadi} ?udutaN.	
65	3上嘉鉄	M	ju:we:nu t'ukin'e: ?an'i:madi(mu) ?udutando:.	
65	3上嘉鉄	K	ju:we:nu dutɕi(:)ja ba:saNmadi ?udutaN.	
65	3上嘉鉄	O	ju:e:nu dukija ?anma:madi udutando:.	
65	4中里	M	ju:we:nu tukin'je: ?an'i:madi {uduti/udut'a}.	
65	4中里	K	ju:we:nu take: ?ani:madi ?uduti.	?ani:のnは口蓋化していない。
65	5荒木	K	ju:we(:)nu take: ?anma:madi ?uduti.	
65	5荒木	O	ju:e:nu tukin'e: ?an'i: madi udutaN do:.	an'i:はani:か？
66	0共通語		花子は きのうから 病気で ねている。	
66	1小野津	M	hanako: kin'u:kara jadi {nittui/nittundo:}.	
66	1小野津	K	hanako: kin'u:kara jamaizi n'ittui.	
66	1小野津	O	hanakowa kin'u:kara jadi {nittui/nittun do:}.	
66	1小野津	T	hanako: kin'u:kara {jadi/jamidzi} nittun do:.	jadi「病んで」、jamidzi「病気で」
66	2志戸桶	M	hanako: kin'u:kara jadi nittui.	
66	2志戸桶	K	hanako: kin'u:kara bjo:kizi nittu{i/N}.	
66	3上嘉鉄	M	hanako: kiju:kara jamaie: n'inbondo:.	
66	3上嘉鉄	K	hanako: su:kara jamen n'inbun.	jamen(はjamin)にも聞こえる。
66	3上嘉鉄	O	hanako: tsiju:kara jamai{sen/se:} ninbon do:.	
66	4中里	M	hanako: tsin'u:kara jadi nittui.	
66	4中里	K	hanako: tsin'u:kara jamaizi nittui.	nittuiのnは口蓋化していない。
66	5荒木	K	hanako: tsin'u:kara {wanbe:/jami}zi n'ittu{i/N}.	
66	5荒木	O	hanako: tsin'u:kara bjo:kizi nittun do:.	
67	0共通語		花子は かあさんに ごはんを たべさせて もらった。	
67	1小野津	M	hanako: ?okkan'i gohanjoba kamatsi muratando:.	白いご飯だけなら?uban'i
67	1小野津	K	hanako: ?okkan'i munjo:ba kamasatti.	

番号	地域	班	共通語文	備考
67	1小野津	O	hanako wa ʔokkani munjoba {kamasattan/kamatɕi muratan} do:.	
67	1小野津	T	hanako: ʔokkan'i munjo:ba kamasattan do:.	
67	2志戸桶	M	hanako: ʔokkan'n'i mun kamatɕi {mura:tan/mura:ti}.	
67	2志戸桶	K	hanako: ʔokka(N)n'i munba kamatɕi mura:tan.	
67	3上嘉鉄	M	hanako: ʔanma:e: munoba kamaɕe: murat'ando:.	
67	3上嘉鉄	K	hanako: {ʔokkan'n'i/ka:tɕann'en/ba:n'i/ba:(j)en} mun kamasaren muratan.	
67	3上嘉鉄	O	hanako: {ʔokka:/ʔokkan}ni mun{woba/joba} kamasarondo:.	
67	4中里	M	hanako: ʔokkan'n'i mun(:ba) kamatɕi {murata(N)/murati}.	
67	4中里	K	hanako: ʔokkan'n'i gohanjo:ba kamatɕi mura(t)t'i.	
67	5荒木	K	hanako:ja ʔokkan'n'i ʔuban'i(wo) {kamasatti/kamatɕi murati}.	
67	5荒木	O	hanako: ʔanman'i mun kamatɕi muratan do:.	
68	0共通語		医者がくれたくすりを のめば なおるだろう。	
68	1小野津	M	ʔicasamaŋa k'uritanu suijoba numiba no:juddo.	
68	1小野津	K	ʔicasaŋa kuritanu suiyo:ba numiba no:juro:.	
68	1小野津	O	ʔicasaŋa {kuritan/kuritanu} suijoba numiba no:jun do:.	
68	1小野津	T	ʔisaŋa kuritanu suiyo:ba numeba no:juro:.	
68	2志戸桶	M	ʔicasaŋa kurita{N/nu} kusui numiba no:juro:.	
68	2志戸桶	K	ʔisaŋa kuritan kusui(ba) numiba no:juro:.	
68	2志戸桶	O	ʔica{ŋa/nu} kuritan kusuri numiba: {no:riN/no:rikkamu} do:	no:rikkamu do:「治るかも(しれない)よ」
68	3上嘉鉄	M	ʔicanu kuritan kusurije: numiba: no:ɽukkamu wakarando:.	
68	3上嘉鉄	K	ʔisanu kuritan kusuri numiba {no:rikkaja:/no:riro:}.	
68	4中里	M	ʔicasaŋa kuritan kusurio(:ba) numiba: no:juro:.	
68	4中里	K	ʔisaŋa kuritan kusui numiba no:juro:.	
68	5荒木	K	ʔisaŋa kuritan kusurio numiba {no:ruN dɕaro:/no:ruso: aranka (ja:)}.	
68	5荒木	O	ʔicasaŋa kuritan kusuri numiba: no:rundaro:.	

番号	地域	班	共通語文	備考
69	0共通語		かあさんは 市場へ 買物に 行った。	
69	1小野津	M	ʔokkaja {ʔitsiba/micija}kai {kaimununʔi/ho:imun/ ho:nja} ʔizando:.	micija「店屋」のほうが古い表現。
69	1小野津	K	ʔokkaja micijakai mun honnʔa ʔizi.	
69	1小野津	O	ʔokkaja micikai mu:honnʔa ʔidzan do:.	
69	1小野津	T	ʔokkaja {micija/micɔ}kai ho:nnʔa ʔidzan do:.	
69	2志戸桶	M	ʔokkano: ʔitsibakai ho:i mun einnʔa {ʔizan/ʔizi}.	
69	2志戸桶	K	ʔokkano: ʔitsibakai ho:imunʔi ʔizan.	
69	3上嘉鉄	M	ʔanma:(ja) itsibaje: ho:imunkʔatɕi ʔizando:.	
69	3上嘉鉄	K	ka:ʔano: micijakatɕi kaimononʔi ʔizan.	
69	3上嘉鉄	O	ʔokka:ja wankatɕi mun ho:ija ʔidzan do:.	湾集落に市場があるため、ここでは「市場」ではなく「湾」となっている。
69	4中里	M	ʔokkano: ʔitsibagatɕi {ho:imun einnʔa/ho:imunʔi} ʔizan.	
69	4中里	K	ʔokkano: ʔitsibagatɕi sina ho:innʔa ʔizi.	
69	5荒木	K	ʔokkanno: {ʔitsiba/micija}nʔi mun ho:innʔa ʔizi.	
69	5荒木	O	ʔanmaja ʔitsibakanʔi {kaimunkanʔi/ho:imun ei:nʔa} ʔizan do:.	ho:imun ei:nʔa「買い物をしたに」
70	0共通語		道で 学校の 先生に 会った。	
70	1小野津	M	mitɕidzi gakko:nu einse:nʔi ʔo:tando:.	
70	1小野津	K	mitɕizi gakko:nu sense:nʔi ʔo:ti.	
70	1小野津	O	mitɕidzi gakko:nu einse:ni {ʔo:tan do: {ʔ/'}o:tan.}	ʔo:tan(ʔo:tanとも。
70	1小野津	T	mitɕidzi gakko:nu einse:nʔi ʔo:tan do:.	
70	2志戸桶	M	mitɕizi gakko:nu einse:nʔi {ʔo:ti/ʔo:tan}.	mitɕizi(道で会って話したという感じになる)。
70	2志戸桶	K	mitɕizi gakko:nu einse:nʔi {ʔo:tan/ʔo:ti}.	
70	3上嘉鉄	M	mittɕje: gakko:nu einɕe:{tu/e} o:tʔan(do:).	
70	3上嘉鉄	K	mitɕizen gakko:nu einse:tu ʔo:ta.	
70	3上嘉鉄	O	mitɕie: gakko:nu einse:tu o:tando:.	
70	4中里	M	mitɕizi gakko:nu einɕe:nʔi {ʔo:ta(N)/ʔo:ti/ʔa:ta(N)}.	
70	4中里	K	mitɕizi gakko:nu einse:nʔi ʔo:tʔi.	

番号	地域	班	共通語文	備考
70	5荒木	K	mitɕizi gakko:nu ɕinse:nʲi ʔo:ti.	
70	5荒木	O	mitɕizi gakko:nu ɕinŋe:nʲi ʔo:tando:.	
71	0共通語		なにを 買おうか。	
71	1小野津	M	nu:{joba/juba} ho:ro:ka.	
71	1小野津	K	nu:jo:ba ho:ro:ka.	
71	1小野津	O	nu: ho:ro:ka.	
71	1小野津	T	nu:(jo:ba) ho:ro: ka.	
71	2志戸桶	M	nu: ho:jukkaja:.	
71	2志戸桶	K	nu: {ho:jukka/ho:(i)kka}.	
71	3上嘉鉄	M	{nu:mun/nu:/diru} ho:o:kʰa.	
71	3上嘉鉄	K	nu: ho:ka(ja:).	
71	3上嘉鉄	O	nu: {ho:ija:/ho:oka(ja:)}.	
71	4中里	M	nu: ho:jukka.	
71	4中里	K	nu: ho:oka.	
71	5荒木	K	nu: ho: o:ka.	
71	5荒木	O	nu: ho:o:ka.	
72	0共通語		和子のと おなじ げたを 花子にも かってやろう。	
72	1小野津	M	kazuko:tu jinŋa:nu ʔassa:{juba/oba} hanako:nʲimu ho:ti kuriro:.	
72	1小野津	K	kazukonutu tʰitsu munnu getajo:ba hanakonʲimu ho:ti huriro:ka.	
72	1小野津	O	kazukonutu ʔinu: {geta/ʔassa:} oba hanakonimo ho:ti kuriro:.	
72	1小野津	T	kazukonutu tʰitsu ʔassa:jo:ba hanakonʲimu ho:ti {kuriro:/kuriraŋba ja:}.	
72	2志戸桶	M	kazukotu jin ʔassa:(juba) hanakonʲimu ho:ti kuriro:.	
72	2志戸桶	K	kazuko muntu jin munnu ʔassa:ba hanakonʲimu ho:ti kurijun.	
72	3上嘉鉄	M	kazukonu muntu tʰitumuŋ assa:(o:ba) hanakoemu ho:e: kuririjo:.	
72	3上嘉鉄	K	kazukonu muntu jinmun getao hanakonʲimu ho:en tuŋaso:.	
72	3上嘉鉄	O	kadzuotu ninmunnu ʔassa: hanakojenmu {ho:okaja/ ho:o:ja}.	

番号	地域	班	共通語文	備考
72	4中里	M	{kazukonutu/kazuko assa:tu} {jin mun/t <sup>2</sup> itu ?assa:} o:ba hanakon <sup>1</sup> imu ho:ti {tu <sup>2</sup> raso:/kuriro:}.	
72	4中里	K	kazukonu muntu titu geta(jo:ba) hanakon <sup>1</sup> imu ho:ti tu <sup>2</sup> raso:.	
72	5荒木	K	kazukonu muntu ti <sup>2</sup> su munnu ?assa hanakon <sup>1</sup> imu ho:ti	
72	5荒木	O	kazukonu muntu ?onnazi ?assa hanakon <sup>1</sup> imu ho:ti kuriro:.	
73	0共通語		和子と 花子は 友だちだ。	
73	1小野津	M	kazukotu hanako: du <sup>2</sup> gi <sup>za</sup> .	aguは使わない。
73	1小野津	K	kazukotu hanako: du <sup>2</sup> gi.	
73	1小野津	O	kazukoto hanako: du <sup>2</sup> gi do:.	
73	1小野津	T	kazukotu hanako: du <sup>2</sup> gi do:.	
73	2志戸桶	M	kazukotu hanako: du <sup>2</sup> ginati (za).	昔はho:bē:「友だち」とも。
73	2志戸桶	K	kazukotu hanako: ho:bē:.	ë:は音があいまい。e:にも。
73	3上嘉鉄	M	kazukotu hanako: t <sup>2</sup> iddu <sup>2</sup> ci do:.	t <sup>2</sup> iddu <sup>2</sup> ci「同じ年の友だち」?
73	3上嘉鉄	K	kazukotu hanako: du <sup>2</sup> gi.	
73	3上嘉鉄	O	kadzukotu hanako: du <sup>2</sup> gi do:(ja).	
73	4中里	M	kazukotu hanako: du <sup>2</sup> gin <sup>2</sup> tsa:do:.	
73	4中里	K	kazukotu hanako: du <sup>2</sup> gi (do:).	
73	5荒木	K	kazukotu {hanakoja/hanako:} du <sup>2</sup> gi do:ja.	
73	5荒木	O	kazukotu hanako: {du <sup>2</sup> gin <sup>2</sup> tsa:/du <sup>2</sup> gi} do:.	
74	0共通語		花子は 顔が かあさんに よく 似ている。	
74	1小野津	M	hanako: tsuraŋa ?okka:n <sup>1</sup> i ju: n <sup>1</sup> it <sup>2</sup> uija:.	
74	1小野津	K	hanako: tsuraŋa ?okkan <sup>1</sup> i ju: n <sup>1</sup> it <sup>2</sup> ui.	
74	1小野津	O	hanako: t <sup>2</sup> uraŋa ?okkani ?ippai nit <sup>2</sup> ui.	t <sup>2</sup> uraはt <sup>2</sup> uraとも。
74	1小野津	T	hanako: tsuraŋa ?okkan <sup>1</sup> i ju: nit <sup>2</sup> sun do:.	
74	2志戸桶	M	hanako: tsuraŋa ?okkan <sup>1</sup> i ju: {n <sup>1</sup> it <sup>2</sup> ui/n <sup>1</sup> it <sup>2</sup> sun}.	
74	2志戸桶	K	hanako: tsuraŋa ?okka(N)n <sup>1</sup> i ju: n <sup>1</sup> it <sup>2</sup> sun.	
74	3上嘉鉄	M	hanako: ?anma:{e:/n <sup>1</sup> i} tura: t <sup>2</sup> itumundo:.	hanakonu tura: ~になつたので、共通語文を変更。
74	3上嘉鉄	K	hanako: t <sup>2</sup> uranu ka:t <sup>2</sup> antu joku n <sup>1</sup> ijun.	

番号	地域	班	共通語文	備考
74	3上嘉鉄	O	hanako: t <sup>2</sup> uranu ʔokkan <sup>1</sup> e: ju: {ni:jo:ri/ ni:o:ri} ja:.	
74	4中里	M	hanako: t <sup>2</sup> uraŋa ʔokkan <sup>1</sup> i ju: n <sup>1</sup> itsuija:.	
74	4中里	K	hanako: t <sup>2</sup> uraŋa ʔokkan <sup>1</sup> i ju: n <sup>1</sup> itsui.	
74	5荒木	K	hanakoja tsuraŋa ʔokkan <sup>1</sup> i ju: n <sup>1</sup> itsui.	
74	5荒木	O	hanako: tsuraŋa ʔanman <sup>1</sup> i ju n <sup>1</sup> itsun do:.	tsuraは単独でははっきりとts <sup>2</sup> uraと喉頭化して聞こえる。



## 6. 喜界島方言関係文献目録

喜界島方言関係文献目録を作成するにあたって、以下の資料・データベースを用いた。

- ・ 日本方言研究会編 2005『20世紀方言研究の軌跡』国書刊行会
- ・ 国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」
- ・ 国立国語研究所「蔵書目録データベース」
- ・ 喜界島図書館所蔵・方言関係文献資料
- ・ 国立国会図書館のNDL-OPAC(蔵書検索・申込システム)
- ・ 国立情報学研究所のCiNii(NII論文情報ナビゲータ)

国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」は、国立国語研究所編集の『国語年鑑』と『日本語教育年鑑』採録の論文データを元に、新たなデータが追加されているデータベースである。おもに1950年以降の論文が収められている。

喜界島図書館所蔵・方言関係文献資料は、2009年9月に行われた喜界島方言調査の際に、現地で調査し、まとめたリストである。

2005年までの文献の検索は日本方言研究会編2005を利用し、それ以降の文献は国立国会図書館のNDL-OPAC(蔵書検索・申込システム)や国立情報学研究所のCiNii(NII論文情報ナビゲータ)などを利用した。また、文化庁委託事業の『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』(平成23年2月 国立国語研究所)の「消滅の危機にある言語・方言に関する資料一覧」も参照した。

岩倉市郎(1931)「風に関する喜界島の方言」『旅と伝説』4(10), 三元社

岩倉市郎(1932)「喜界島における敬語法」『旅と伝説』5(2), 三元社

岩倉一郎(1932)「嬰兒に対する最初の発音訓練」『南島談話』5, 三元社

岩倉市郎(1934)「喜界語音韻概説」『方言』4(10), 春陽堂

川原啓介(1954)「(ことば風土記)」『言語生活』39, 筑摩書房

上村幸雄(1957)「奄美方言の一考察—喜界島阿伝方言の文法について—」『人類科学』9,  
九学会連合

須藤健一(1971)「喜界島の親族組織」『日本民俗学』78

岩倉一郎(1972)「喜界島に於ける敬語法」『沖縄文化論叢5 言語編』平凡社

三原昌嘉(1973)「喜界島についての若干の記録」『奄美郷土研究会報』14, 奄美郷土研究会

斎藤兼雄(1973)「喜界島語で見る万葉集巻一卷頭歌」『奄美郷土研究会報』14, 奄美郷土



研究会

- 輝 博元採録・解説(1974)「鹿児島県喜界島のむかしばなし(シリーズむかしばなしを求めて-7-)」『言語生活』275, 筑摩書房
- 輝 博元採録・解説(1974)「鹿児島県喜界島のむかしばなし-続- (シリーズむかしばなしを求めて-8-)」『言語生活』276, 筑摩書房
- 輝 博元(1975)「喜界島・荒木方言の名詞形態(1) —「てだて」格・「しどころ」格について—」『島田勇雄先生退官記念 ことばの論文集』前田書店
- 輝 博元(1975)「喜界島・塩道方言における語尾母韻の取り換えによる語構成」『立正大学 国語国文』11
- 岩倉市郎著, 柳田国男編(1977)『喜界島方言集(復刻版)』国書刊行会(1941年初版)
- 内間直仁(1978)「喜界島志戸桶方言の文法」『琉球の方言』4, 法政大学沖縄文化研究所
- 中本正智(1978)「喜界島志戸桶方言の語彙」『琉球の方言』4, 法政大学沖縄文化研究所
- 森 豊良, 森 昭男(1979)『喜界島の方言集』喜界町
- 斉藤兼雄, 松本泰丈(1980)「喜界島大朝戸方言の動詞の活用おぼえがき」『奄美のことば: 奄美における自然・社会・文化に関する総合研究』(文部省科学研究費補助金研究成果報告書, 千葉徳爾(筑波大学))
- 輝 博元(1980)「喜界島・荒木方言の名詞形態論(2) ゆくさき・とき・あい手を表す格を中心に」『立正大国語国文』16
- 松本幹男(1981)「喜界島・上嘉鉄方言の縮小接尾辞-kaについて」『拓殖大学論集』133(土屋申一教授・下村治教授・鈴木四郎教授・稲垣貫一教授・遠藤六郎教授退職記念論文集), 拓殖大学研究所
- 松本泰丈(1982)「奄美方言の動詞結果相の問題点—喜界島大朝戸方言—」『琉球の言語と文化—仲宗根政善先生古稀記念—』仲宗根政善先生古稀記念論集刊行委員会
- 松本泰丈(1982)「琉球方言の主格表現の問題点—岩倉市郎「喜界島方言集」の価置」『国文学 解釈と鑑賞』47(9), 至文堂
- 輝 博元(1982)「喜界島の方言」『国文学 解釈と鑑賞』47(9), 至文堂
- 言語地理学定例研究会(1983)「琉球列島の言語の研究」全集落調査票用参考資料(喜界島)『沖縄言語研究センター資料』46, 沖縄言語研究センター
- 松本泰丈(1983)「他動詞と使役動詞の下位分類と相互関係--奄美喜界島方言のばあい」『国文学 解釈と鑑賞』48(6), 至文堂
- 輝 博元(1984)「喜界島・坂嶺方言の音韻」講座方言学10—沖縄・奄美地方の方言—』国書刊行会
- 崎村弘文(1985)「喜界島方言のアクセント体系」『鹿児島大学文科報告』21, 鹿児島大学 文科

- 松本泰丈(1986)「形容詞の語形のタイプから—喜界島方言のばあい—」『国文学 解釈と鑑賞』51(8), 至文堂
- 斉藤兼雄, 松本泰丈(1987)「喜界島のはなしことば資料」『国文学 解釈と鑑賞』(52)7, 至文堂
- 松本泰丈(1987)「人称代名詞をめぐって—奄美喜界島方言—」『国文学 解釈と鑑賞』52(2), 至文堂
- 松森晶子(1991)「喜界島のアクセント交替」『日本女子大学紀要. 文学部』41
- 上野善道(1992)『喜界島方言の体言のアクセント資料』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 上野善道, 西岡 敏(1993)『喜界島方言の用言のアクセント資料』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 崎村弘文(1993)「喜界島方言外来語彙のアクセント」『筑紫語学研究』4, 筑紫国語学談話会
- まつもとひろたけ(1993)「<シテアル>形おぼえがき 奄美喜界島(大朝戸)方言から」松村明先生喜寿記念会編『国語研究』明治書院
- 上野善道, 西岡 敏(1995)「喜界島方言の動詞継続相のアクセント」『琉球の方言』18・19, 法政大学沖縄文化研究所
- 西岡 敏(1997)「喜界島八月踊り歌テキストにおける音数律制約」『琉球の方言』21, 法政大学沖縄文化研究所
- 西岡 敏(1998)「喜界島方言における「未然形+まし」」『琉球の方言』22, 法政大学沖縄文化研究所
- 松浪久子(1999)「喜界島(鹿児島県大島郡)の民間神話」『大阪青山短期大学研究紀要』25
- 松本 幹男(2000)「沖永良部島方言と喜界島方言における中舌母音について」『語学研究』95, 拓殖大学言語文化研究所
- 上野善道(2002)「喜界島小野津方言のアクセント調査報告」『琉球の方言』26, 法政大学沖縄文化研究所
- 大野眞男(2002)「奄美方言における中舌母音の歴史的重層性」『国語学研究』41, 「国語学研究」刊行会
- 上野善道(2003)「喜界島方言の活用形のアクセント増補資料」『琉球の方言』27, 法政大学沖縄文化研究所
- 大野眞男(2003)「北奄美周辺方言の音韻の特徴--喜界島方言・瀬戸内町方言」『岩手大学教育学部研究年報』63
- 野原三義(2008)「喜界島方言助詞の研究」『南島文化』30, 沖縄国際大学南島文化研究所
- 松森晶子(2011)「喜界島祖語における3型アクセント体系の所属語彙 - 赤連と小野津の比較から - 」『日本女子大学紀要 文学部第60号』

喜界島図書館所蔵・方言関係文献資料

- 森 元実(1978)『心のふる里—喜界島民謡集』私家版
- 政元 保(1981)『古語研究資料—喜界島方言ルーツ考』誠文堂
- 本田徹夫(1986)『喜界島騒動記』海風社
- 新民謡同好会(1987)『奄美の唄—新民謡同好会新作集(1)』私家版
- 台司三代二(1987)『小野津の年中行事』私家版
- 喜界町郷土教材開発委員会編(1989)『ふるさとのことわざ・言いつたえ(第1集)』喜界町教育委員会
- 喜界町郷土教材開発委員会編(1990)『ふるさとのことわざ・言いつたえ(第2集)』喜界町教育委員会
- 喜界町郷土教材開発委員会(1991)『ふるさとの民話・ゆらい・遊び(第3集)』喜界町教育委員会
- 徳山博良(1992)『奄美の民謡と物語り(その1)』尚美学園短期大学(「紀要原稿」)
- 嘉原カヲリ(1993)『マガンとさる(あまみ民話絵本1)』奄美民話の会
- 嘉原カヲリ(1994)『カラスとコーロ(あまみ民話絵本2)』奄美民話の会
- 田畑千秋(1994)『おおきなはなし(あまみ民話絵本3)』奄美民話の会
- 嘉原カヲリ(1995)『けんむんところみにゃ(あまみ民話絵本4)』奄美民話の会
- 盛 浩司(1995)『第2回奄美民謡の祭典—島々の唄心と道の島歌詞集』福盛堂
- 嘉原カヲリ(1998)『ゆむんどおりときちきゃ(あまみ民話絵本5)』奄美民話の会
- 新原健四郎(1998)『ワッシララー ワッシテーイカー シーユムイタ(忘れられない 忘れてはならない 志戸桶言葉)』私家版
- 中澤鶴子(1998)『わたしの喜界島』南日本新聞開発センター
- 盛山末吉(1998)『上嘉鉄の漁(はていとうぬいす)』私家版
- 英 啓太郎(1999)『喜界島・屋号・民俗(マグミー史話)』奄美共同印刷

---

## 「喜界町教育文化講演会」報告

---

(進行) …晴永教育長が開会のあいさつをいたします。

(教育長) …それでは、まず開会に当たりましてお礼を申し上げたいと思います。喜界島方言調査団の先生方が約33人おみえであります。1つは、当喜界島を調査の対象にいただきましたことに、まずお礼を申し上げたい。2つ目は、今日のこのシンポジウムは当初、予定になかったのですが、先生方、8日にいらして、今日までずっと調査、調査だったんですけど、お忙しい中、時間を割いていただいて、喜界島のためにシンポジウムを特別にセッティングしていただきました。このことに、木部先生はじめ、先生方にお礼を申し上げたいと思います。ウフクンデール。ありがとうございます。

今日のこの会は、いきさつを語りますと、昨年、鹿児島地域文化創造事業というのがありまして、この文化創造事業に今年の3月まで鹿児島大学の法文学部の学部長でした木部先生が指導助言に来ておられて、そして喜界島ブロックの指導助言をしていただいたんですが、喜界島の方言のユニークさ、それから小中学生が方言を受け継ごうとしている活動等に関心を持たれて、この調査団の調査をしていただいたということです。窓口は喜界町の生涯学習課、吉本課長をはじめ、文化担当の重野泰介社会指導員などと打ち合わせてきました。今日まで調査されて、明日お帰りですよ。約10日近くきていただきました。

島の方言が消えかかっております。私たちの年代以上の皆さんはしゃべれるわけですが、40代、50代もしゃべれるんですが、敬語が使えないとよく聞きますし、その下の年代は、聞いて分かるけれども、十分にしゃべれない。ましてや小中学生はやっと分かるぐらいだと伺っています。そういうことで、学校では方言大会、あるいは方言劇などの発表会をしたりして、そのほかに高齢者の皆さん方に方言を習う総合学習などを行っているところです。教育委員会としましては、3年ほど前から島ゆみた大会、それから島唄大会等を当時の生涯学習課に立ち上げていただいて、今につないでいるところです。

方言検証の問題点は、この後、シンポジウムでも出ると思うんですが、課題はどこにあるかという、やっぱり1つは、核家族化が進んで、祖父母と一緒に暮らさない家族が増えて、お父さん、お母さんが共通語でしゃべるので、小中学生が方言に触れる機会がなくなったこと。もう1つは、マスメディア、テレビ文化がこんなに盛んになって、朝から晩まで東京弁、共通語を聞いている、そのことで、物を考えるのに共通語で考える。たぶん私より上の世代は、方言、微妙な言い回し、それで考えて情が伝わっている、そういうことが薄れつつある、こういうことかなと思っております。

おとといの土曜日、湾集落の調査団の調査をちょっとのぞかせていただきましたが、高性能ピンマイクをこうセットして、そして聞き取り調査に協力しておられる島の高齢者の皆さんに、これは何と言いますか、例えば「くわ」のことを「クエ」と言いますが、も

う 1 回お願いしますと、2 度、3 度録音しておられました。このようにして、消えかかっている島の言葉が記録として後世に残されるのはすごいことだと思いました。今年中に冊子も刊行されると伺っております。非常に厳密な調査をしておられて、学問というのは厳しいなということをおぼろげに思いました。

最後に、私は土曜日、湾校区の高齢者学級での木部先生の講演を拝聴しに行きまして、すごく感動したことがあるんですが、その中身をあんまり詳しく語ると、今日のシンポジウムに出るんですかね、先生。出ませんか。じゃあ、その話をぜひ木部先生にさせていただきたいんですが、こんなに小さな島に 950 年ごろ使われていた言葉がある集落で残っている。また隣の集落では同じ言葉が別の表現で残っている。これは平安時代のことだと。そして、私の荒木では、使っている言葉は 1570 年ごろ、戦国時代のちょっと前ぐらいの言葉が残っていると。それらは当時の文献、歴史を載せた書物の中に残っている、そういう研究の成果を湾校区で語っておられました。

小さな島に、同じ 1 つの単語が別々の発音で残っているということはすごいなと思いましたし、その不思議さにも胸を打たれました。私の明治生まれの祖父が、我が島は大和言葉が残っていてすごい島であるというふうに、小学生の私に言ったことが思い出されて、いたく感動したところです。このことに後で木部先生、ぜひ触れていただきたいんですが、よろしくをお願いします。

小さな島でありながら、このように集落、集落で発音が違う、アクセントが違う、イントネーションが違う、これはすごい宝だと思っています。何とかして後世に残せたらなと思っています。言葉というのは、生活の中からはじんできますし、また生活が言葉を規定するというか、そういう双方向の関係があると思っていますが、今日のシンポジウムの中でもそういうことが明かされていくのかなと思っています。

本当に今日はホールいっぱいの町民の皆さんにおいでいただいて、担当した生涯学習課の皆さんも満足しているんじゃないかなと思います。それでは、先生方、よろしくをお願いします。本当に今日はありがとうございます。

(進行) それでは早速ですけれども、パネリストの先生方、司会の木部先生、ご登壇をお願いします。この事業のチームリーダーであります国立国語研究所の副所長の木部暢子先生、司会進行をよろしくお願いします。

(司会) 皆さん、こんばんは。今日はこんなにたくさんの方が来てくださりまして、ありがとうございます。私どもは 9 月 9 日に参りまして、10 日から今日の午前中まで、9 つの地区にお邪魔しましたが、そこに来てくださった方も今日たくさんいらっしゃってくださいました。ありがとうございます。普段なら、この時間はだいたい家でゆっくりテレビを見ながら晩ご飯、あるいは男の方は晩酌でも、晩酌はダレヤメとこちらでは言うんですか、ダレヤメの時間ではないかと思っておりますけれども、本当にありがとうございます。

国立国語研究所は、昭和 23 年にできた研究所です。戦後間もなくです。国語、日本語を研究する部署として設立され、それからずっと日本語の研究をやってきました。日本語

は共通語だけではありませんから、これまでも国立国語研究所は方言の調査をたくさんやってきました。全国地図を作ったりもしておりますし、重要なポイント、ポイントになる地点の調査も今までいくつか行っております。

去年の10月に国立国語研究所はリニューアルしまして、もう少し研究に重点を置こうということになりました。今、これだけ世界がグローバル化しますと、世界の情報もどんどん入ってくる、それから経済の力で世の中が動いていくということが多いですね。それに対して、やっぱり文化は経済と同じぐらい大事ですので、その流れの中で、日本の文化、日本の言葉ももっと真剣に取り組まなければいけないということがありまして、もう少し日本語の研究に力を入れて、これを、日本の国内だけではなくて、もっと諸外国にもアピールしていこうという方向性でリニューアルしました。

研究所の中には、いろいろなセクションがあって、いろいろなプロジェクトをやっています。方言のプロジェクトも大きな柱です。方言の調査は昭和23年以来、国立国語研究所が取り組んできたテーマの1つですが、中でも、特に南方の奄美、沖縄、それから東京都の八丈、それとアイヌ語、このようなものがユネスコで消滅の危機の度合いが高い言語として挙げられておりますので、こういうものに重点的に取り組みたいというので、特別プロジェクトを作りました。それが私がプロジェクトリーダーをしている消滅の危機にある方言を保存しようというプロジェクトです。

しかし、考えてみたら、日本中の方言が危機に瀕していると思います。事情は東北も同じですし、本州のいろいろな地域でも方言が消滅しつつあります。私は今年の3月まで鹿児島大学にいらしまして、南の方の方言を自分が今までやってきたことという経緯もありますけれども、日本語の中でもとても重要だと思っております。それで、奄美、沖縄の方言を担当することになりました。

そのときに、研究者が一人一人で行くのではなくて、複数の研究者が1つのところに行って、何かみんなで意見交換しながら調査をしたい、その地域の記録をしたいと思ったんです。それで今回、第1回目の試みとして喜界島に参りました。これから順番に4人のパネリストに発言してもらい、最後にディスカッションを行い、できれば来てくださった皆様、調査に実際に協力してくださった方がたくさんいらしていますので、そういう方からのご質問やご意見を受けて、みんなでディスカッションしたいと思っております。

それでは、よろしくお願ひします。順序は、最初にトマ・ペラールさん、2番目に新永さん、それから3番目に狩俣先生、4番目に松本先生という順序でいきたいと思ひます。それぞれ自己紹介も兼ねながら、今回の調査で感じたこと、あるいは普段、自分がやっていらっしやることも絡めて話していただければと思ひます。

最初にトマさん、よろしくお願ひします。

## 古い部分と新しい部分

(トマ) 皆さん、こんばんは。1週間、お忙しい中、方言を教えてくださいまして、本当にありがとうございました。大変勉強になりました。簡単に自己紹介させていただきます

と、僕は生まれも育ちもフランスで、去年、博士課程を終わりました、今、京都大学で研究員をやらせていただいております。今まで沖縄県の宮古島という南の島の方言の調査をしてきましたが、今回初めて喜界島に来て、この方言の調査に参加させていただいて、本当にいろいろ勉強になりました。

僕は、特に言葉の歴史に興味があって、先ほどの教育長のお話にありましたように、この喜界島の方言に古い言葉が残っています。いろいろ調べた中で、いくつか確かに教育長さんがおっしゃったように、昔の文献に現れていて、今の標準語や本土の方言でなかなか使われていない、なくなってしまった単語がたくさんありました。いくつか例を挙げますと、例えば「イモ」のことは標準語でもいろいろな方言でも「イモ」ですけれども、こちらの喜界島ではタイモなどのことを「ウム」と言いますよね。これは、『万葉集』などの文献を見ると、「イモ」ではなく「ウモ」という形が出ています。喜界島と同じですね。そう考えると、標準語の方が変わってしまったので、実は標準語の方が「なまって」います。また、貝の種類を指す「ミニャ」という言葉が喜界の方言にありますね。これも昔の文献に「ミナ」という単語がありますが、標準語にないです。もうなくなった言葉です。次に夢のことを標準語では「ユメ」と言いますが、喜界島では「イミ」ですね。これも昔の文献では「イメ」となっていないです。これも標準語が「なまった」のです。また、奥さんのことを「トゥジ」とか言いますが、これも『万葉集』などに「トジ」（刀自）という言葉があります。これもおそらく今本土のどこでも使われていない言葉だと思います。それに発音にも古い特徴が見られます。例えば葉っぱのことを喜界島では「ファー」や「パー」と言いますが、これも明らかに古い特徴です。そこも標準語がなまって元の「パ」が「ハ」となっていました。

発音や単語の面で古い特徴が喜界島方言にたくさん見られますが、他方では変化によって新しくできたものもたくさんあります。主に発音のことをずっと1週間調べましたが、世界のいろいろな言葉を見ても、なかなか他にない、めずらしい特徴が喜界島の方言にあります。例えば我々が大変苦労した「ニィ」と「ヌィ」、「タ」と「ッタ」、「ク」と「ック」などの区別は一部の方言には見られましたが、めずらしくてかつ難しいと思いました。あとは、「パ」でも「ハ」でもなく、「ファ」に近い音を何十回も試しに発音しても方言を教えてくださいました方に「違う」と言われて、大変苦労しました。

教育長の話にもありましたが、方言をどうやって残せばいいのかという問題が難しいです。フランスでは方言がほとんどなくなってしまっています。フランスでも日本と同じく「方言札」のようなものが昔あって、学校で非常に教育が厳しかった結果、方言がなくなっていきます。限られた地方にしか方言が残っていませんが、どうやって残してきたかといいますと、まずは学校の教育はその土地の言葉で行われています。つまり先生が標準語ではなく方言で子供に教えています。それに1時間とかの短い番組ではなくて、朝から夜までずっと方言だけのラジオがあって、方言のテレビ番組もあります。そうすると方言がうまく残ると思います。それは理想で、同じようなことを日本でやるのは難しいかもしれませんが、方言を残す有力な方法です。

ほかの研究者を代表して、この一週間勉強させていただきまして、ありがとうございます

した。いろいろ面白いことが勉強できて、貴重な方言を生で聞けて、大変面よかったと思います。僕は個人的にまた来ると思っていますので、その時宜しくお願いします。どうもありがとうございました。(拍手)

## 地域間の違い

(新永) こんばんは。まずこんな遅い時間帯にこの場に皆さんにお集まりいただいたことに対して、本当に心から感謝いたします。私は、生まれも育ちも神奈川県相模原市というところなのですが、大学は東京大学に通ってまして、そこで言語学というか、方言を中心に勉強しています。

私の調査している方言は、お隣の奄美大島の宇検村という村の、さらに湯湾という集落の方言で、普段はそちらを中心に研究をしています。今回は喜界島に来られるという本当に貴重な機会にめぐりあえましたので、メンバーと一緒に色々と勉強させていただきました。

今回、私が所属したグループでは、喜界島の小野津と志戸桶、上嘉鉄、中里、荒木の5集落の方にいろいろと方言について教わりました。そこで、せっかく私が奄美大島、宇検村の方言をやっていますので、まず最初に、大島とこちらの喜界島の5カ所の地域との間で気付いた違いと共通点というのを少しお話しさせてください。

まず1つ目に気付いたことですが、大島の宇検村の方言もこちらの喜界島の方言も、自分のことを「ワン」と言いますよね。しかし、「私」と言うだけでは「ワン」なのですが、例えば「私は」というふうになんか言葉をつなげると、大島と喜界島では少し違いが出てくるということに気付きました。今回は喜界島の5カ所の地域に住んでいる方々に方言を教えてくださいました。みなさんは、言ってみれば私にとって喜界島の方言の先生です。これら私が生徒として文をちょっと発音しますので、先生であるみなさんはどうかビシバシと採点してください。

まず1つ目は小野津の方言です。「私はタコの刺し身が食べたい」という文を小野津の方言でどう言いますかと聞いたら、「ワノー トーヌ サシミガ カンプサイ」というふうにご教授いただきました。面白いのは、最初の「私は」のところ。「私」だけで聞いたときには「ワン」と言っていたのに、「私は」と聞いた途端に、「ワノー」となりますね。大島の宇検村ではどう言うかといいますと、例えば今の文は、「ワンナ トーヌ サシミガ カンチャサ」というふうになります。つまり、「私は」の部分は、大島の宇検村の方では「ワンナ」ですが、喜界島の方では「ワノー」となるんです。そこで私は、ああ、こんなに、目で見えるくらいに近い距離にある大島と喜界島でもこんな違いがあるんだと驚きました。

さらに、もう1つ違いがありまして、例えば話し相手を指す場合、「あなた」とか「お前」という言葉がありますが、例えば同い年や年下に対しては、こちらの喜界島では「ダ」または「ダー」と言いますね。ですが、これは大島の宇検村だと「ウラ」と言うんですね。全然形が違うなど。目上の人に対しては、もちろん「ダ」とか「ダー」という言葉は失礼



なので、じゃあ、どう言いますかと聞いたら、目上の方に対しては「ナーミ」（志戸桶では「ナーメ）」というふうに教えていただきました。これも宇検村では「ナン」というふうに少し短くなります。

そこで、「お前」というのを含んだ文を、今度は志戸桶で教えていただきました。「お前はその魚の名前を知っているか」という文ですが、これを志戸桶では「ダヤ ウン イユヌ ナーヤ シッチュンニャ」と言う。最初は「ダ」になりますね。例えばこれが大島の宇検村だと、「ウラ」を使って、「ウロー ウン ッユヌ ナーヤ シッチュンニャ」というふうになります（大島宇検村では、「お前」は「ウラ」ですが、「お前は」は「ウロー」になります）。

ということで、大島と喜界島は本当に見えるくらいの距離なのに、こんな違いがあるんだということにびっくりしたんですが、でもよくよく調べたら、喜界島内部でも、同じことだけではなくて、違いもあるんだなということに気がきました。そこで、本当に少ないのですが、気付いたこの違いを1つ挙げます。例えば「いない」という表現がありますが、これは例えば小野津だと「イヤー」というふうに、あとは中里と荒木だったら「イラー」となりますね。最後は「イラー」「イヤー」と伸びると教わりました。しかし、志戸桶と上嘉鉄だと「イラン」になると教わりました。これは、もしかしたら、まだ私の調査不足の可能性もあります。とにかく、最後が「イラー」「イヤー」と伸びる地域と、「イラン」のようにと伸びない地域があるのだと驚きました。これはそれぞれの地域ごとの違いなのか、同じ地域でも2つの言い方があるのか、といったようなことは今後調べなければいけないことだと思います。

試しに、「酒さえあれば何もいない」という文章を上嘉鉄で教えていただいたところ、「セーセー アリバ ヌーム イラン」となる。最後は、「イラン」になると私は聞きました。しかし、荒木だと「セーセーカ アリバ ヌーム イラー」というふうに、最後が「イラー」というふうに伸びて、ああ、ちょっと違うのかなと思ったんですね。

最後に、特に驚いたことが1つありました。それは、動物に関する方言です。例えばカラスを表す方言は、喜界島のどこでも「ガラサー」という。でも、それがカラスとかじゃなくて、猫になった途端に、地域によって色々な言い方があるということを教えていただきました。例えば小野津と志戸桶だと「マヤー」なのに、上嘉鉄と中里と荒木だったら「グルー」となる。まったく違うなど。

これに関して、「食べて寝るだけなら犬や猫と同じだ」という文を中里の方に教えていただきましたら、「タディ ニットゥ ダキナリバ、インガーヤ グルートゥ イッスジャ」となる。このとき、中里の方に教えていただいて一番驚いたことなんですが、「猫」を「グルー」というのは他の地域でも聞いていたので特に驚きはしませんでした。じゃあ、代わりに「ネズミ」を何と言うんですかと中里の方に聞いたら、「マヤー」と言うと聞いて、びっくりしました。つまり、小野津と志戸桶では「マヤー」は猫を指しているのに、中里ではネズミを指すんだということにちょっと驚きました。ちなみに大島の宇検村だと、猫のことは「ミヤー」といいます。何となく猫の鳴き声に似ている感じがしますね。「ミヤー」とか、あと「グルー」というのも、何となくゴロゴロしているような声、何となくそういう猫の鳴き声に似ているなどと思ったんですけど、どう考えてもネズミがマヤーと鳴くとは思えな

いので、これはどういうことかなと思いました。でもネズミというと、やっぱり猫、猫といえばネズミというようなことが思い浮かびます。つまり、猫とネズミはいつも一緒になっている気がします。

何か思い浮かべるときにいつも一緒になるもの同士言葉が入れ替わるということは結構あります。例えば最近の例ですと、トリノ五輪の金メダリストの荒川静香選手がやった得意技にイナバウアーという技があるのをご存じかもしれませんが、あのイナバウアーという技は、実は体を反って曲げる上半身の形のことを言うのではなくて、下半身の脚の形（演技をするときに足を開いて、つま先を横に広げて、横に滑る）を本来はイナバウアーと言うんです。しかし、皆さんはやっぱり反った上半身の形に目が向くので、そっちをイナバウアーと呼んでしまいますよね。つまり、いつもペアにあるもの、この場合ですと上半身と下半身ですが、下半身をイナバウアーと呼んでいたのに、上半身の方が目立つから、そっちをイナバウアーと呼んでしまうというようなことがある。

だから、ネズミと猫がいつも一緒について、「マヤー」と言っていたのに、ああ、ネズミの方を「マヤー」と言っているのかな、と考えるのも、もしかしたらあり得るかもしれませんね。でも、これは本当にそれが理由なのか分かりませんが、でもそういうこともあってもおかしくないと思いました。

ということで、今回は結局ほんのさわりしか分かってないので、少しだけなんですけど、大島と喜界島の方言の違い、そして喜界島内部の違いに色々気づくことが出来て、本当にすごく勉強になりました。また今度来たときに、いろいろ教えていただければ幸いです。どうもありがとうございました。（拍手）

## 沖縄のことばと似ている

（狩俣）ワノー（私は） 沖縄カラ ッチャ（来た）、琉球大学ヌ 狩俣です。キャーシマユミタ ワーチャニ セーチャボーチ ウフクンデータ（喜界島言葉を私たちに教えて下さりありがとうございました）。私は 27 年前にも来ました。そのときには、佐手久と志戸桶と中里と川嶺を調査しました。27 年ぶりの調査だったんですが、昔と変わらず方言を教えてくださいまして、本当にありがとうございました。

沖縄の方言と喜界の方言はよく似ています。奄美大島、徳之島の方言よりも、喜界島の方言の方がよく似ていて、先ほどの教育長さんのあいさつも理解できました。どのくらい似ているか、調査したものの中からいくつか紹介します。例えば今回調査したものの中に「飛行機は1日に1回しかない」という例文があるんですが、これを沖縄の方言で言います。「ヒコーケー ヒッチーニ イッカイシカ ネーン」。「空港ならこっちの道を行きなさい」、今帰仁の方言で言うと、「クーコーカチャー クマヌ ミチ イキミソーリ」。そっくりですね。「その傘は俺の傘だ」、「ウン ハサー、ワーヌジャ」。今帰仁方言では「傘」のことは「ハサ」です。「肩」を「ハタ」、「鼻」を「パナ」、それから「手」を「ティー」、「目」を「ミー」、「毛」を「キー」と言います。そっくりです。もちろん違うのもあります。お父さんのことを「ツチャーチャー」と言いますし、おばあさんのことを「パーパー」と言います。

27年前に来たとき、島を1周するバスに乗っていましたが、前の席におばあちゃんが二人座っておしゃべりをしているんですが、何と言っているか、7割か8割ぐらい分かるんです。初めて来た島の言葉なのによく分かるので、すごいなと思いました。皆さんも沖縄にいらっしゃったら方言を聞いてみてください。特に大宜味村とか国頭村とか今帰仁村あたりへ行くと、とてもよく似ていることが分かります。

私の恩師の仲宗根政善先生は今帰仁のご出身だったんですが、沖永良部島などに行ったりとか、喜界島の方言を聞いたりして、よく似ているというんです。長い調査で滞在していても、ホームシックにならないというようなことを言っていました。それぐらい似ています。

沖永良部、与論が沖縄に近いというのは分かるんですが、徳之島と加計呂麻島と奄美大島を飛ばして、喜界が沖縄に似ているというのが不思議です。何でなんだろうというのが長年のなぞです。こちらで最近発見された城久遺跡から、北の鹿児島とか本土の方と交流した人たちがここで何か大きな文化を持っていて、交流の中心地になっていたと思うんですけれども、その人たちが南に行って、沖縄とか沖永良部とかに行っただけかなと考えるんです。弥生時代以降、琉球列島という地域がどんなふうに分断されてきたのか。それを調べるには、考古学の遺跡を調査して、交流の跡を調べるということも可能なんですけれども、実は言葉の面から、例えば今言ったみたいに沖縄の言葉と喜界の言葉が似ている、どこが似ていて、どこが違っているかということによって、もしかすると喜界島で繁栄した人たちが子孫を増やして、沖縄まで広がったんじゃないのかということが確認できるかもしれません。言葉というのは、大切な要素なんです。

私は奄美にもずいぶん行きましたし、徳之島も沖永良部も与論も調査をしているんです。今回も、「あれっ、これって沖縄と同じだな」という表現をたくさん見つけたんです。お昼ご飯のことを「アシー」と言いますね。沖縄でも「アシ」と言うんです。

それから、沖縄と似ているもう1つは、「花」のことを、例えば小野津、志戸桶とかは「パナ」と言いますし、城久とか花良治とか浦原とかでは「ファナ」と言いますね。それから、上嘉鉄とか中里とか湾とかに行くと「ハナ」と言うんですね。同じ島の中に「パナ」と「ファナ」と「ハナ」があるんです。実は沖縄の今帰仁村とか名護市は「パナ」と言うんです。大宜味村や伊平屋島に行くと「ファナ」と言うんです。そして国頭村や恩納村に行くと「ハナ」と言うんです。同じ島の、狭い地域の中に「パナ」と「ファナ」と「ハナ」というのがあるというのも、喜界と沖縄も同じなんです。

どうしてこういうことが似ているんだろうというのがすごく不思議で、面白い。これってどうしてなんだろう、昔の人たちはどういう生活をしていたのか、島を越えてどんな交流をしたのか、その交流の跡が言葉のどこかに残っているんじゃないかということを考えながら楽しく調査をしています。我々が皆さんに同じことを何回も聞いたりとんちんかんなことを聞いたりするのを、辛抱強く答えてもらっていますが、その成果は何か形にして残していきたいと思っています。

私の話はここで。何かご質問とかがありましたら後でお願いします。(拍手)

## 長年の方言調査の経験から

(松本) こんばんは。千葉大学に元勤めておりまして、今は、去年の4月からは年金生活をしております。松本と申します。

喜界島には昭和46年、沖縄復帰の1年前ですけれども、初めて参りまして、それから断続的に何回か来ております。去年も、ちょうど9月の今よりちょっと早い時期ぐらいに参りまして、いろいろ教わりました。今回は、これだけ地点を回ったのは初めてで、大変疲れました。それで、この成果を今日報告するということなんですが、まだいろいろ記録を整理するのに精一杯で、まだそこまではなかなかいきません。調査の合間の話が、無駄話どころか大変いろいろ参考になることが出てきて、面白かったです。何か昔は方言を使うのを禁止されていた。方言を使って、何かお掃除なんかの罰当番をさせられたことがあったというようなことを話してくださった方もいらっしゃいました。さらに、そういうはなしの中に、方言札を掛けさせられたというのがあると思うんですが、その方言札なんていうこと自体も、嫌な経験でしょうけども、まだそういう経験をお持ちの方がいらっしゃるうちに記録しておく必要があると思うんですが、そういうふうな時代を耐え抜いた島ユミタというのが、大変健在だと思うんですが、島の人の中での方言差への敏感さというのも、いろいろなどころで見られたような気がします。

これは帰ってまたもう1回整理するのを楽しみにしているんですけども、例えば「何々なので」というような、原因とか理由を表すような言い方は、いろいろ出てきまして、「荷物が重かったので」とかあって、「ニーガ ウブサタンカラニ」というような、そういうのがあったんですが、それはどこか調べている中に、「ニーガ ウブサンナティ」という形も出てきたんです。これはどうですかと聞きましたら、あっ、それは遠くのシマのことばだとかですね、ワチャシマ（うちの集落）では使わないというようなお答えが返ってくる集落がありました。これはやっぱり島の中でそういう違いというのをちゃんと自覚しておられるわけですね。

しかし、そういうことをご本人たちも気付かない違いをずっとそのままにしているということもあるということで、今回ではないんですが、私、体験しております。私がよく勉強させてもらったのは、島の真ん中辺の大朝戸、ウィンサトという集落の言葉なんですけれども、あそこはチニューとタナーとノーマという3つの小字に分かれているんですが、その小字出身が違う方たちが、スカ、急須とか土瓶ですか、スカの注ぎ口、あそこを何と云うかということで、70歳を過ぎたおじいさんたちですが、大激論しました。片方の方は「スカンティー'ジャ」、片方の方は「スカンビー'ジャ」。それで、お互いにそれまで、すぐ近く、隣ですよ、1つの字の小字ですから。でも、こういう言い方をしている人は知らないとお互いに、そんな言い方はないと。「フィー」とか「ピー」とかというのはよくない感じがありますね。それで、たぶんそれを避けて、「ティー」にしたんだと思うんですけど、名字の「樋口」の「樋」なんていう字は、あれは「トイ（<ト・ヒ）」でもあって「ヒ」でもあって、もともと「ヒ」だったのが、「トイ」になった。それで、その「トイ」が「ティ

一」になった。それから、「スカンビー」の「ビー」の方は「ヒ」の形が残っているというわけです。

ですから、たぶん「ビー」の方が古くて、「スカンビー」の方が古くて、「ビー」というのが音感が悪い、何かを連想するようですから、それで「スカンティー」になったということだろうとっております。これは中の方も気が付いてないようですけども、お互いに気が付いている違い、まったく気が付かない違い、そういうものを抱え込んでいる。それほど大きくない島でもいろいろな違いを。それもやがてはなくなると思うんですけども、なくならないうちに記録しておくということが、トマさんがおっしゃった日本語の歴史、歴史に興味がある、その歴史を組み立てていくときに、つながらないところをつなぐ、そういう輪っかになる可能性がある。そういうものがいっぱい、この島にはあると思われるわけです。

私も、そういうことで、1971年からずっと来ておまして、なかなか切り上げられないでいるわけですけども、そういう島の言葉はどんなふうに研究されてきたかという点、喜界島ではどうしても1人名前を出さなくちゃいけない方がいて、それは阿伝に今、顕彰碑が建っていますけれども、阿伝出身の岩倉市郎さんです。岩倉さんの『喜界島方言集』というのが主著なんですが、図書館にも当然あると思いますから、またご覧になってください。復刻版で新しいのが1975年ぐらいに出ているので、これは初版です。昭和16年の7月か8月に出ている。

この岩倉さんの方言集は、そのころ出たものとしてはとても優秀で、特に音声的な表記などがしっかりしている。あと、怪しげな憶測はしていないわけなんです。ですから、これを読むと、たぶん皆さんも、こういうふうなことだと何となく聞いていたことなどに、また新しい知見が入って、ああ、そうなのかなというものが絶対あると思います。例えば「ハットゥー」なんていう言葉が島にありますね。帽子のことを「ハットゥー」。それで、英語のハットの関係から、それからじゃなんていうことをよく聞かされたりするんですけども、この『喜界島方言集』ですと、「ハットゥー」というのは、「かぶと」じゃないかと。「かぶと」、最初のk音がhに変わるというのは、いろいろなところでおこっています。これは、可能性とすると、大変いい目の付けどころだと思いますけれども、そういうこともさりげなく書いてあるもんです。

それから、この岩倉さんは、耳のよさを活用いたしまして、沖永良部に採集に行っている。それで沖永良部の昔話を、今までのものでもやっぱり一番いいものを作っていると思うんですが、そこの中に、5話ほど岩倉さんたちがたぶん教わった、沖縄出身の伊波普猷という大先生ですね、その伊波普猷の使ったローマ字と同じ書き方で、沖永良部の昔話を語りどおりに書いているんです。私はそれを読んでから沖永良部にも行きました。そのときに和泊町役場に行って、1階の職員の方に、こういう言い方はしますかと言ったら、うん、そんなの聞かんよとか、何か間違いじゃない、とかと。1人、職員の方が、今、2階に、町史の編纂で、おじいちゃんたち、高齢者が集まっているから、そっちへ行って聞いてみると言われて、2階へ行って聞いたら、ちょっと考えたりしましたけど、ああ、それは昔使ったよという方が出てきました。

ですから、岩倉さんの、よその島へ行っても正確な書き方をしているんですね。ただ、正確であることを確認できるのは今のうちで、そうでないと、ああ、岩倉さん、間違っ  
て書いているんだということになってしまう。みんなに忘れられたら、ある単語が、それが  
もう間違いにされちゃうわけですから、ですから今までに出ていた記録などでも、やっぱ  
りそれにもう一度目を通して、ああ、確かにこの通りだった、できればそれをまた音声で  
も記録して保存しておけたら、これからのいろいろな研究に役立ってくるんじゃないかと  
いう気がします。

なぜそれだけ喜界島方言というのは研究の値打ちがあるかというのは、先ほど申しまし  
たように、日本語の歴史というものを解明するときに非常に役に立つ。方言の掛け替えの  
なさというのは、自分の母語としての方言というのはみんな誰にとっても同じなんです。  
だから、皆さんにとっての喜界島方言というのは、私は埼玉県秩父の出身ですけど、や  
っぱり私にとっての秩父方言と同じで、私にとって秩父方言というのは、何か粗っぽく聞  
こえますけれども、やっぱり掛け替えのない方言です。

ところが、悔しいですけれども、歴史的なことを解明する資料としては、喜界島方言には  
遠く及ばない。私も、自分の秩父の方言もちゃんといろいろと記録しておきたいという気  
持ちはあるんですけれども、それより先に、もう40年近く前でしょうか、1971年だから  
ね、手を付けた喜界島方言の方をやっぱりちゃんとまとめなくてはという気持ちで、断続  
的ですけども、通っているわけです。

喜界島方言の琉球方言の中での位置付けということは、先ほど狩俣先生もそういうこと  
に触れられたと思うんですけど、例えば今回の調査で見ましたが、ガ行の鼻濁音、助詞  
の「が」というときに、「何々が」というと、鼻濁音がちゃんと出ますね。九州本土はこれ  
はありませんよね、もともとね。私も関東ですけども、関東でも上州、群馬県から埼玉、  
それから新潟県、あの辺はずっと無いところなんです。だから、私も自分の使用している音声  
としてはガ行鼻濁音はありません。島に来ると、それがちゃんと聞こえて、ああ、この島  
の人の発音はきれいだねなんて思いますが、島の方も、普通語をしゃべるときには、私な  
んかと同じ、あと九州本土と同じ硬い「ガ」を使っていますが、あれはやっぱり使い分け  
はだんだん難しく、聞かなくなるかもしれないね。だいぶ以前よりは硬い「ガ」が出て  
きて、それで発音するというのも増えてきましたが、助詞の「が」などは、やっぱりそ  
れほど侵されていない。残っているような感じがしました。

この「ガ」の発音というのは、喜界島にあつて、それから琉球方言地域では、ずっと離  
れた、台湾の見える与那国島、あそこに残っている。こういう残り方は何かというと、周  
圏分布とかそういう言い方を、柳田國男さんという民俗学の日本の第一人者がしています。  
周圏分布しているというのは、古いものなんだということがある。

これは明らかにそういう古いものが残っているという例なんですけれども、非常に冒険  
的な例としては、例えばこういうこともその周圏分布の中で考えると面白いと思うんです  
が、これは地名なんですけれども、今お話しした与那国島や、それからその隣の西表に祖  
納という地名があります。これは沖縄出身で、もう亡くなった中本正智さんは、アイヌ語  
と関係があるんじゃないかと。アイヌは、向こうで幌内とか何とかナイとか、川とか流れ

とか、そういうのを表す言葉として「ナイ」が付く言葉がいっぱいありますね。日本では東北地方にもすでに見られます。

この喜界島にまいりますと、「ナイ」というのは、「サンニェー」(先内)、それから、先ほど申しましたけれども、ウィンサトの中ですが、チニェーがありますね。ウィンサトのところは、あそこはウッカーという川があって、泉がわいていて、水がありますね。そうしますと、これは先ほどのお話ししたガ行鼻濁音の分布と同じ、一番端っこで端っこに残っている。これもその圏分布として説明できるんだったら、もともとは日本語の1つとしての琉球方言がここで使われる前はアイヌ語がずっと全体で使われていたという可能性はあるんじゃないか。こんなことを、これは証明するのは難しいかもしれませんが、ただ、片一方で、中本さんが、「ソナイ」というのはアイヌ語系じゃと、何かそうおっしゃっている。

喜界島の方にもそういう「ナイ」の付く地名があるぞということを、それはどのぐらいご存じだったか分かりませんが、島を先ほどの小字名とかそういう中に地籍簿を探してもない地名も残っているということを奄美大島で聞きました。ここでもそういうようなことはあるんじゃないかと思しますので、いろいろな地名なども保存して、今後の研究にそれを役立てていったらよろしいんじゃないかというふうに思います。

いろいろとまだお話することはあるんですが、1つ、方言がなくなってしまうようにするためにはどうしたらいいかということ少し、トマさん、やられていると思うんですが、私は奄美大島にもよく行ってまして、こちらより多いぐらいかもしれませんが、例えばやっぱり子供のうちは、教育長の晴永さんが最初におっしゃった敬語、敬語を使わないで、普通体で大人とも話して、ある年齢になったときに、敬語を使う。けども、昔でもやっぱり家庭によっては父親、母親が子供に敬語をそんなに教えない、もっと緩やかに、普通の話しかたでしていたという家庭もあったようです。

そうすると、逆の家庭もあると思いますから、そういうところがあった。あとは、誰々さんのところは子供なのに大人言葉を使っているなんて、笑ったようなんですけど、例えば、最近の若いのは敬語を使イキランとか、そういうようなことで、あまり厳格に言葉のことをいたしますと、委縮して使わなくなって、何を使うようになるかと、そんなに言われるんだしたら、もう普通語でしゃべったほうがいいと、標準語でしゃべってやれというようなことになりまして、かえって自分で自分の首を絞めることになったりするわけで、方言を残すには、敬語だけじゃありませんけれども、よう方言使ったねということで、これは褒めてあげる。教育の一番根本と同じで、やっぱり褒めて、子供がみんな使う、そういう雰囲気を作る。間違いだとか、いちいち言わないようにするということがいいんじゃないかと私は考えております。

いくつかまだ話したいことはあるんですが、時間もちょうど来たようですから、私はこれで。どうもありがとうございました。(拍手)

## 方言を残す

(司会) 4人の方が共通して述べたのは、やっぱり古いものが残っている可能性がたくさんある。でも一方で、トマさんがおっしゃったように、新しく変化している部分もある。重要なのは、いろいろな違いがあるということですね。島の中でも、北部の方は「パナ」だったり、中部は「ファナ」だったり、南部の方は「ハナ」だったり、違いがあるということは、なぜこんな違いができたのか、私たちは歴史を考えたくなるわけですが、やっぱりそこがとても大事だと思います。

古いものを残している部分、それから、新しい変化を起こしている部分、どこからどう変化したのかを推理していくということです。トマさんは、共通語がなままっているとおっしゃいましたが、本当にそう思います。共通語の方がどんどん変化している部分がある。だけど、島の方が逆にどんどん変化している部分も一方ではあります。私たちは、そういうことを見ることで、「言葉ってこういうふうにして変化していくんだ」という興味を抱くわけです。

ただ、一方で、私もいろいろなところに調査に行っていて、いつも内心忸怩たるものがあります。私たちは、言葉ってこうしてこうやって変わっていくんだということが知りたくて、それが楽しくて、さっきも狩俣先生が楽しいとおっしゃいましたが、言葉を調べているんですけれども、でも言ってみたら、よそ者なんです、私たちは。やっぱり言葉を使って残していかれるのは地元の方なので、地元の方との協力関係を持って、そしてすべてを書き写すことはできませんから、やっぱり地元の方たちと協力しながら、できるだけたくさんものを残していきたいと思います。

今はとてもいい録音機ができて、簡単に操作できる録音機がかなり安くなりました。今回もできるだけ生の言葉の発音を残したいと思って、録音したりビデオに撮ったりしています。私たちは1年のうち、本当に何日間か来るだけですけれども、地元の方と協力して、地元の方ができるだけたくさん資料を次の世代に残していただければと思うんですね。でも、一番いいのは、記録の形じゃなくて、日常話す形で、次の世代にどんどん伝えていくことだと思います。そのことは松本先生が今おっしゃいました。

ところで、トマさん、フランスでも方言札のようなものがさっきあったとおっしゃっていましたね。それは、私は知らなかったもので、ちょっとその話を教えていただけませんか。フランスの方言札ですか。喜界では首から提げるようなものだったんですが、フランスではどういうものを。

(トマ) 帽子だったそうです。

(司会) 帽子？

(トマ) はい。変な帽子を被らせられていました。

(司会) それは、学校で1日中？

(トマ) そうです。

(司会) あっ、お前、しゃべったというと、その子に帽子をかぶせて、学校、1日終わる



までかぶっているんですか。

(トマ) はい。

(司会) それはこちらの方言札と似ていますか。

(トマ) はい。

(司会) シャベった人に、はいとかぶせて、学校が終わるまでずっとかぶせられたんですか。やっぱり。帽子というところがフランス的というか、おしゃれですね、ちょっとね。

それから、今回の調査でも、また、以前にも、こういうものを送っていただいたことがあるんですけど。手書きで書かれた方言集です。最近、ワープロをご自分で打つ方もいらっしゃいますが、これは手書きで、びっちりノートに書かれたものです。コピーさせていただいたものなんですけども。それから、これは先日、図書館でいただいた、佐手久の方言集です。これには CD も付いているんだそうです。それから、これは、もうこの方は亡くなられたそうですが、塩道の方言集。これも手書きですね。

こういうものを書いていらっしゃる方、本当に私は頭が下がる思いです。私たちにはとてもこんなものは書けません。地元の、できるだけたくさんの方が、「あっ、思い出した」と、ちょこちょこっと方言を書き写す、それで結構ですので、そういうことをやっていただけたらなあ、私たちはそういうことのお手伝いができたらなと思っています。

それから、方言を残すということで、何かありませんか。

(狩俣) 方言をどうやって残していくかというとき、学校の生徒に方言大会とかお話し大会とか、方言の芝居とかというのがありますが、親もまったく話せないですね。ですから、そのとき、親も一緒に PTA の主張とか、お父さんの主張とかお母さんの主張とか、20 代から 30 代、40 代、50 代の人もしょに方言大会をするというのはどうかなと。親も子供と一緒に方言の勉強をする。そして、おばあちゃん、おじいちゃんから方言を教えてもらうというのはどうかなというのが 1 つの提案です。

それからもう 1 つ。皆さんカラオケにいらっしゃいますか。あるいは、お宅にカラオケがあったりとかするかもしれませんけれども、カラオケの替え歌、替え歌にして、島ユミタの大会をして、一番上手に歌った人、方言に翻訳できた人は、何かお米 1 升とか、10 キロとかあげるとか、何か親も一緒にやるのもいいかなと思うんですね。

親が「自分の子供は上手だ」と言いながら、自分が方言が分からないというんじゃないくて、親も一緒にやる。お父さん、お母さんも一緒に方言を勉強する。子供たちはそれを見て、自分たちもやろうと思うんですね。そういうのはどうかなと思うんです。

親子三代で方言の芝居をやる。お父さんの主張、お母さんの主張を方言でやる。そうすると、おじいちゃん、おばあちゃんからも教えてもらうのは、いいんじゃないかなと思うんです。

(司会) そうすると、おそらく小さい子の方が言語習得が早いですから、子供さんの方が方言がうまくなって、お母さん、下手くそとかいうことが起きるかもしれませんね (笑)。ちょうど今、子育てをしている世代の方は、標準語教育で、方言はだめだという厳しい教育を受けて、それで、何か方言はだめだという価値観が頭にこびり付いているんじゃないかという気がします。

今はだんだん風向きが少し変わり、「方言もいいですよ」というふうになってきましたけれども、その前が、方言は価値が低いというような感覚を植え付けられた時代でした。しかし、そうじゃなくて、方言は価値があるということを、パネリストのみなさん、申し上げたと思うんですが、そういう価値観をどんどん払って、若い人にも価値観の転換をしていただきたいと思います。それには、確かに親子三代でカラオケ大会というのがいいかもしれませんね。

(司会) それから、ほかに何か。フランスでは、学校で、方言でやる授業があるんですね。

(トマ) すべての授業を方言でやるのです。

(司会) すべてを？

(トマ) はい。それで、よく心配されるのは、それで子供が標準語を覚えられないのではないかということなのですが、そんなことまったくないです。完全に両方使えるようになります。標準語も、その土地でしか使われていない言葉も、両方完全にマスターしたバイリンガルになります。そのための学校もあります。

(司会) そうですか。すべてですか。私は1時間か2時間かと思いました。それは素晴らしいですね。喜界だとか奄美では、方言を教えらる先生がいないんですよ。それで、島ユミタ大会なんかも、地元のお年寄りの方に学校に来ていただいて、そういう方が教えているそうです。ちょうど学校の先生の世代がもう方言を使えない世代だということがあるので、まず、学校の先生の世代の方言教育が必要かもしれませんね。

## 若い方言研究者の活躍

(松本) 方言が低く見られていたということと関連して、方言研究も低く見られているといったことがあります。それで大変いろいろと、だから大小の迷惑を掛けるという人もいます。名前は出しませんが、大学の教員の選考などで一方は『源氏物語』を、また片方は琉球方言だなんていうときに、やっぱり『源氏物語』のかたが採用されてしまうと、そういうことがあつたりすると、方言のかたは割を食うわけですね。

それから、あとこれは私がやはり国内研修で近くの大学に来ておりましたときに、教育学部の先生には、学部の学生が卒論で方言のことをやるのを喜ばない先生がいるんだと聞きました。こういうのはぜひ改まってほしいと思うんですけども、やっぱり方言研究が広がりまして、方言研究よりももっと高級と見られていたところから、わざわざ方言研究の方にいらっしゃったりする方もおられますから、これからはだんだんそういう偏見というか誤解というか、ゆがんだ見方はなくなっていくんだろうと思います。

そういうことと一緒に、この方言を皆さんがこれから伝えていくことをぜひ考えてほしいんですけども、喜界島が過疎化なんかしたら困るわけですよ。人間がいないと、方言がある、ないは意味がなくなりますので、私は、先ほど大朝戸の方言を斎藤兼雄さんという東京に出ていらっしゃっている方から教わったんですけども、もっといろいろな人から聞きたいですねと言ったら、「いや、松本さん、チニエービチエー（チニエの血筋の人は）サンサム ヲウラー（いくらもない）」と、人数が少ないとおっしゃっていました。

そういうのが高じて、「キカインチュヤ サンサム ヲウラン」ということになったら、これでは研究ができなくなりますから、ぜひ過疎を食い止めて、島の人口が増えて、方言を話すことに、潜在的なパワーが付くようにしていただきたいと思います。

（司会）新永さんはまだこれから職に就くわけですから、やっぱり方言研究者がもっと活躍できる場を、大学でもそうだし、地域でもできればあればいいですね。何か就職に向けて、抱負を。

（新永）抱負ですか？

（司会）抱負じゃなくてもいいですけど……。確かに松本先生がおっしゃったように、こういうフィールド調査をする方言研究者の数自体が少ないんですよ、日本は。世界もそうなのかもしれません。だから、もっと言語をやる人がフィールドに、地域に出て、実際の言葉を聞くということをやってほしい、またそういう場で活躍できる若手、これから有望な若手ですから、そういう人が増えてほしいなと私も思っています。その点、どうですか。

（新永）確かに言語学の研究をするときに、やっぱりみんな珍しい海外の言語を研究したがるというのがあるんですね。ところで、皆さんも「英語」とか聞くと、やっぱり英語には英語のちゃんとしたルールがあり、日本語の標準語にも、よく学校で国語の教科書から国文法を習いますが、ちゃんとしたルールがあるというふうに思ってますか？一方で、方言にはそういうちゃんとしたルールがないと思っているのではないのでしょうか。申し訳ないことですが、私自身もかつて大学に入るまでは、方言というのは何かしら標準語とは違う、標準語から崩れしまった、言い換えれば「訛っている」というふうに思っていました。

だけど、大学に入りまして、言語学を学び、その言語学の知識で方言をじっくり見ると、あっ、方言というの、英語とか中国語とか日本語の標準語とか、そういうほかの言語と同じように、1つのルールがある、文法書が書けるようになる、そういうすごくきれいな言語なんだと気付いたんです。「方言」という言い方をするか、「言語」という言い方をするかというのはあんまり重要な問題じゃなくて、その言葉にちゃんとした規則があるかどうかというのを見れば、いわゆる方言も標準語もほとんど変わらないんですね。どちらにも、ちゃんとしたルール、難しく言えば「文法」がある。

例えば先ほどちらっと言いましたが、「私」を表す「ワン」という言葉が、「私は」の場合には「ワノー」となりますね。これは、ほかの場合ですと、例えば「酒は」なら「セーヤ」というように、「は」の部分は「ヤ」で表れますよね。「ヤ」というふうになるのに、何で「私は」のときは「ワンヤ」ではなくて、「ワノー」となるか、最初不思議だったんですが、調べて行くと、そこに一つの規則・ルールがあることに気付いたんです。例えば、じゃあ、「瓶は」はどう言いますかといったら、「ビノー」になる。つまり最後が「ン」で終わる言葉に対して「～は」と言おうとする場合、「ビンヤ」、「ワンヤ」とは言わずに、「ビノー」、「ワノー」と最後が伸びるようになる。これはすごくきれいなルールなんですね。

これは、英語やそのほかの言語が持っているルールなどと同じようなものです。つまり「方言は崩れている」「方言に規則・ルールはない」というのは嘘で、方言も研究すればそ

ここにきれいなルールや体系がある。つまり、方言もすごく研究のしがいのある言葉なんですね。

なので、これから大学に入って来る未来の若手の研究者たちも、方言も1つの言葉、言語なんだ、きれいなルールがあるんだということを理解していけば、もっと研究者は増えると思います。僕は方言をそのように考えていますし、後輩などにもそのようなことを伝えていきたいと思っています。

(司会) ありがとうございます。あとよろしいですか。

(トマ) 方言研究が低く見られて、方言自体が汚いとか崩れていると思われているとさっきお話がありました。僕はまったくそれはないと思って、海外にいる時松本先生や狩俣先生や木部先生の論文を読んで、喜界島や沖縄にすごく面白い言葉があるというのを知って、これはぜひ研究したいと思って調べに来ました。間違いなく、喜界島の方言は非常にしっかりしていて、大変興味深い言葉です。

(松本) お気付かだと思いますけども、今回の我々の調査メンバーは若い人がとても多くて、今、私が話したようなことがいい方向で進んでいくことの表れだろうという気がします。トマさんの発言も、そういう中で、本当にそれをちゃんと示してくれたというような気がして、私はたぶん今回の調査の中では一番高齢者だと思うんですけども、大変うれしい感じがします。これは、木部さんにまたお話ししていただいた方がいいと思うんですけども。

(司会) 私は、1人で来る調査も大変いいと思うんですけども、みんなで一緒に調査に来たいと最初に申し上げました。そのときに、ぜひ、若い人を連れてきたかったですね。それで募ったら、若い人のほうが多くて、若い人といっても、どこで線を引くかですけども、半分以上はまだ40歳以下、30代とか、20代になりました。実はまだ来たいという人がいたんですが、これ以上増えたら私はとても体が持たないと思って、だいぶお断りしました。

しかも今回、私たちは若い人にずいぶん刺激されました。若い人のバイタリティーもそうだし、若い人はすごく勉強しているなと思って、刺激を受けました。やっぱり、こういうことをやってよかったなと思います。

喜界島でも、昔から世代を超えて宴会をしたり会をしたりするというのが島のやり方だったと思うんですね。東京みたいに、子供はあっちに行っていないさい、ここは大人の世界、とかじゃなくて、大人も子供も一緒に会に参加するという雰囲気がいいなど、私は島に来るたびに思うんです。

ぜひ、そこでは共通語禁止、標準語禁止、方言でしゃべる、というようなことをしていただきたい。分からなくても、とにかく子供に聞いてもらうというのが大事ですから。普通は、お孫さんに方言をしゃべると通じないから、孫には共通語で話すんだという方が多いんですね。日本中どこでもそうです。確かにお孫さんはかわいいし、お孫さんと会話したいでしょうけども、孫が分からなくても、とにかく方言でしゃべる。方言で語り掛けないと、おやつをあげないとか、おもちゃを買ってあげないとか、ぜひそれぐらいの強い気持ちで臨んでいただければと思います。

## 島のことばに自信を持とう

(司会) 狩俣さん、最後に何かありますか。

(狩俣) 僕は英語が話せなくて、ヤマトユミタしか知らないんです。そういう言葉を一つしか知らない人をモノリンガルというんですね。英語とヤマトユミタが話せるとバイリンガルなんです。ここにいる人のほとんどは、島ユミタとヤマトユミタの二つ話せるバイリンガルです。子供たちをまずヤマトユミタと島ユミタを話せるバイリンガルにする。中学校に行ったら英語を勉強して、英語と三つの言葉を話せるようにする。そうすると、どこに行っても大丈夫です。

うちの学生がアメリカに行ったりイギリスに行ったりフランスに行ったりします。留学先で沖縄にはどんな歌がありますか、沖縄ではどんな料理を食べますか、沖縄の歴史はどうなっていますか、沖縄にはどんな文化がありますかと聞かれる。でも、答えられない。ところが、よその国から来ている学生たちは、自分の故郷にはこんな歌があつて、こんな歴史があつて、こんな文化があつて、こういう料理を作っていると一生懸命語るんだそうです。

自分の生まれ育った土地の言葉も文化も歴史も知らない人は、海外に行って自信を持って自分を語る事ができないんです。だから、島の言葉や島の文化を教えるのは、狭い人間を育てるのではなくて、都会に行っても外国に行っても、どこにいても自分のことを自信を持って語る、そういう若い人を育てることなんです。方言を教えるから、狭い世界に閉じ込めるんじゃないで、木部先生が言ったみたいに、どこに行っても、自分は喜界島の出身だと自信を持って語れる、子供たちのため、子供たちの教育のためだと思って、方言で語りかけることが必要なんです。

昔は、ヤマトユミタにするか島ユミタにするか、あれかこれかの二者択一でした。しかし、今はあれもこれも。二つの言葉を話せるのがいいんです。一つの言葉をしか話せないよりも二つの言葉を話せるのがいい。二つの言葉を話せるよりも三つの言葉を話せるのがいい。これからの喜界島の子供には言葉を三つ話せる、四つ話せるようにする。そんな教育を今日ここに来ている人たちが始めれば、海外で活躍できる喜界島の人が出てくる。ああ、テレビに出ているこの人は国連で活躍しているけど、喜界島の出身で、島ユミタも上手だ。そういう若者を育てるようにするのがいいんじゃないかなと思うんです。

トマさんはフランスから来ていますし、先に帰ったローレンス・ウエインさんはニュージーランドからきていますが、喜界島の言葉は外国の人にまで興味を持たれている言葉だと、自信を持って子供たちに教えてほしいと思います。

(司会) どうもありがとうございました。もうそろそろ時間ですので、この辺で閉めたいと思います。もし何かご質問があれば、5分ぐらいお答えできればお答えしたいと思います。どうぞ。

## 会場からの質問

(QQ) どうも、貴重なお話をありがとうございました。狩俣先生のお話をお伺いして興味を持ったんですけども、つまり沖縄と喜界島は共通点があると。つまり、「目」が「ミー」と。松本先生がおっしゃった岩倉市郎先生の『喜界島方言集』、町の図書館にありますけれども、その中に、喜界島の母音は「ア」、「イ」、「ウ」の3つで、「エ」が「イ」に、「オ」が「ウ」になっているとか、トマ先生もおっしゃっていた、「イモ」が（喜界）島では「ウム」、『万葉集』は「ウモ」となっていると、「モ」が「ウ」になっていると思うんですね。

そこで、狩俣先生にお伺いしたいのは、沖縄でも母音は3つなのかどうか。「目」が「ミー」となるとおっしゃっていたので、ひょっとすると、喜界島と同じように母音が「ア」、「イ」、「ウ」の3つなのかなとふと思ったんですが、その辺をちょっと。

(狩俣) 沖縄も、「イモ」は「ウム」と言うところがありますので、「オ」は「ウ」になりますね。「言葉」を「クトゥバ」、「事」を「クトゥ」と言うので、母音「オ」が「ウ」になるのも同じです。「目」は「ミー」、「手」は「ティー」というふうに、「エ」という母音が「イ」に変わります。

ただし、3母音だけではなくて、「前」のことは「メー」と言います。「ハエ」のことは「フェー」とか「ペー」とか言います。喜界島にも「エ」という母音もあります。さっき新永さんが言っていた「私は」というのを「ワノ」といって、「オ」という母音もあります。

「ア」、「イ」、「ウ」の3母音だけではなくて、「エー」という母音も「オー」という母音も喜界島にもあります。それは沖縄でも同じで、「前」のことは「メー」と言います。「灰」は「フェー」とか「へー」とか「ペー」とかといいますので、沖縄の言葉も同じです。母音の数とか子音の数とか、喜界島の言葉と沖縄の言葉は、よく似ています。

(松本) ちょっと付け足しますけれども、沖縄の言語と似ているとともに、喜界島の言葉は、隣の奄美大島ともやはり共通点がある、その点で、両方の結び目みたいなのところがあって、そこを解き明かすのが面白いところなんです。「取ろう」というのは、「何かを取ろう」といったときに、「トゥロー」という言い方は大島式の言い方ですが、それだけじゃなくて、「トゥラ」という形があります。あと、「取るだろう」というのの古い言い方で、「トゥユロー」という形のほかに「トゥユラ」という形があります。片方は奄美大島と共通で、片方は沖永良部、与論から沖縄本島と共通の形です。

この2つが一緒になっているというのは、例えば奄美大島式の言い方があったところに、沖縄からの力が入って、それが拮抗して、2つの形が保存されている。この島は大変、形を大事にしまして、2つあったらば、どちらか片っぽをなくしちゃうというんじゃないで、何か微妙な使い分けをして、2つを保存しておくという姿勢があって、奄美大島式の形と沖縄本島式の形が共存しているんですね。

そういうふうな気持ちというのがずっとあるらしくて、例えば今日も教わってましたら、「ハサ」と言うんですか、「傘」は「ハサ」と「カサ」と2つあって、かぶり傘と、それから差し傘とを区別するという。これもやっぱり1つだけにして一緒にしないで、せつ

かく 2 つあるんだから、どっちも使おうというような精神。これは、もしかしたら大島本島式の言い方、それから沖縄式の言い方、それ両方を共存させたときに身に付いた心というようなものが、ずっと今でも伝わっているのかななんて思って、聞いていました。

(QQ) 私は 4 点ほどお聞きしたいんですけども、まず 1 点は、狩俣先生が後の方でコメントなさいました言語をいろいろ知っておくといいんじゃないかというようなことだったんですが、若干、グローバリゼーションに頭を突っ込んだような形になるんじゃないかなと思って、今、お話を伺って、今日、先生方がなさったのは、喜界島の方言についてやっていたらしゃる。だけれども、ほかの言語を知るということは、また喜界島の方言が薄められていく面が出てくるんじゃないかなという不安が私は今、湧いてきました。それが 1 点ですね。

それから、歴史のことなんですけれども、喜界島には喜界島ももとの歴史があります。その後、オキナワユー、ウチナーユーというのがあります。その次にヤマトユーがあって、アメリカユーがあって、今はヤマトユーになっているわけですね。そういう風な歴史の中で、先ほどいろいろご指摘くださいました方言の発音の違いなど、表現の違いなどが関連しているところが出てくるんじゃないかなという、私は疑問が出てきたんですけども。

それから、危機の問題ですが、私は高校の教員をしていました。それで、(奄美)本島に來ましてから、私は(奄美)本島の出身で、小学校はここで卒業しました。あと中学校、高校を沖縄で過ごしたんですけども、その中で、20 年ぐらい前に本校へ転勤してまいりまして、そこで生徒と教員とのいざこざが非常に強く本土でも聞きました。鹿児島からみえた先生方が九十数パーセントですね。私どもが幼かったころは、昭和 30 年代までは地元の先生方が多かったんですけども、その後、本土への復帰後、交流がありまして、鹿児島からみえた方々は、鹿児島弁で子供をしかるわけですね。子供は分からないわけです。そうすると、今度は舌打ちみたいにして、島ユミタで反抗するわけですね。そうすると、ますます教員は怒って、厳しく生徒に当たったということがあって、学校では方言を使わせないようにするということもあったようです。

それ以前は、要するに共通語を使えと。私も小学校のときに方言札を首に掛けられた方なんですけれども、そういうこともありました。それで、そういうこともあって、ある意味では、その制度の中で、やっぱり方言が人間の交わりを押さえ付けてきている面が出てきておったんじゃないかというふうなことです。沖縄におるときには、お前は方言を分かんのだというふうなことを言われて、奄美から行っているものですから、そういう誹りも受けました。

それからもう 1 つは、方言研究の、あるいは方言のレベルの低さというご発言もあったんですが、それは、先ほど申しました教員と生徒とのいざこざですね、沖縄で、私はちょうど昭和 33 年の高校卒業ですから、その昭和 20 年、昭和 30 年前後の間で聞いたことなんですけれども、私の剣道の先生に、巡查をしていらっしゃる方がいらっしやいまして、その方の話ですと、そういう方々は地元の人ですからよかったんですが、本土からみえた方々は、結局、そのころは政府が任命する役人ですから、その役人には沖縄の標準語が話

せる通訳が付いておったと、というような話も聞いたわけですね。

ということは、やっぱり統治されているという中で、方言が低く扱われてきたんじゃないかなというようなことも、今、狩俣先生のお話を聞く中で、思いを呼び起こしているところですね。もしそういうふうなことが先生方のお役に立てればと思うところです。どうもありがとうございました。

(司会) 今のご質問は、ご意見としてうけたまわりたいと思います。

(QQ) (質問は) 一番最初のほうの狩俣先生へのですね。レベルの問題、それから危機の問題、それについて、ご研究の中でどう今後、展望が持てるのか。私どももやっぱり地元において方言をいろいろと先生方のお手伝いをできるところもあるだろうと思いますので、その中で、今後、私どもがどう動けばいいのかというふうなことも出てくると思いますので、急にはできないと思いますが、よろしくお願いします。

(狩俣) 言葉を、方言も標準語もやっていくと、もう一方がだめになるんじゃないかなという話なんですけど、実は人間の脳はそんなに小さくなくて、4カ国語でも5カ国語でもきちっと話せるんです。それはこちらにいらっしゃる方々が、標準語でも話せるし、方言でも話せるわけですよね。教育長さんも上手に標準語でもあいさつなさいますし、方言でもあいさつなさいます。

こちらができる、あちらができなくなるというのは昔の考えで、今は言葉は2つ、3つと覚えられるといわれています。2つ覚えられた人は3つ目が早い、3つ覚えた人は4つ目が早いというのがあるんです。マルチリンガル化と言われていて、たくさん言葉を覚えていくのがこれからの世の中なんです。ですから、1つの言葉しか話せないよりも、2つの言葉を話せるようになるのが重要なんです。

昔は、あれかこれか、共通語か方言か。方言はだめだから共通語にしなさいでしたが、今は共通語も話せるようにするし、方言も話せるようにする。そして英語も。できれば、これからは中国が経済発展していきますから、中国語もできた方がいい。というように、たくさん言葉を子供たちに教える時代になっているんですね。

文部科学省もそう言っていて、学習指導要領なども変わってきていて、方言も教えていいですよというふうに変ってきています。ようやくこの20年ぐらい、文部科学省の指導要領も子供たちに地元の文化や言葉を教えてくださいというふうに変ってきているんです。

言葉を1つしかしゃべれない人は、脳をちょっとしか使っていない。言葉を2つしゃべれる人は、もう少し使っている、3つしゃべれる人はたくさん使っていると思った方がいいと思います。だいたいトマさんが英語もフランス語も日本語もしゃべれる人で。

(司会) 宮古語も。

(狩俣) はい、宮古語も(笑)。宮古島の方言もしゃべれます。そういう人が優秀な人なわけですね。土地の言葉を大切にするというのは、グローバルであり、かつローカルです。それが1人の人間に共存するということです。社会もそういうふうに変ってきています。



(司会) やっぱり大切なのは、多様であるということに価値があるという、そういう価値観に転換していくことだと思います。1つのことだけじゃない。今は国もそうですし、世界全体が、多様であることに価値があるというふうにだんだん変わってきました。昔の、1つのものしか価値を認めないという考え方も変わってきました。学校現場もそういう考え方を取り入れて欲しいですし、もう取り入れつつあると思います。

(Q Q) 今日は我々のふるさとに来ていただいて、ありがとうございました。2点ほど伺います。中国語、それから沖縄語、それから日本語と関係があるというのは、非常にそれは当然のこととして分かりやすいんですが、先ほどちらっと出てきましたけど、沖縄から北海道に至るまで、あちこちにアイヌ語の影があるわけですね。私の持っているわずかばかりの資料でも、非常にアイヌ語と関係があると。

木部先生も含めて、例えば北海道のアイヌの集落にお入りになって、聞き取りなどをなさっている先生がいらっしゃいましたら、そこで、この奄美とか沖縄で、これはまさしくアイヌ(語)だというものが、もしこういうのがあるよというのがあったら教えていただきたいということが1つ。

第2点は、今日はトマ先生もいらっしゃいますけど、ウラル・アルタイ語とインド・ヨーロッパ語族の中、これはあんまり厳密には分類されてないけど、この2つの流れの中で、我々のこの島の言葉というのは、それらの中のどの辺とかかわりがあるのか、どちら側に入っているのかという、この2点をお聞きしたいです。

(司会) 非常に大きなテーマですね。アイヌ語の話をごなたか……。

(狩俣) 松本先生はアイヌ語との話をしましたが、縄文時代のころの言葉がもし日本中にあつたとすると、その方言は今ではまるで外国語のように、どこの国の言葉か分からないぐらい違ってははずなんです。沖縄の方言も喜界島の方言もよく似ているんですね。「目」を「ミー」というような共通点があります。もし仮にアイヌ語と共通のものが残っていたとしても、痕跡のようにわずかに残っているだけなんだろうと思います。

喜界では「坂道」を何と言うんですかね。「ヒラ」「ピラ」ですね。アイヌ語では「がけ」のことを「ピラ」と言うんです。私は1回だけアイヌ語地名の調査で秋田に行ったことがあるんですが、アイヌ語地名の「ピラ」を聞いてびっくりしました。沖縄の方言では、上り坂は「ヒラ」、下り坂は「サカ」と言うんです。だから「ピラ」も「ヒラ」も日本語にもともとあつて、それがアイヌ語と沖縄の方言に残っているのかもしれない。

今はアイヌの人たちは北海道にいるんですが、太平洋側では関東平野のちょっと北ぐらいまで、日本海側では新潟県の阿賀野川の北までアイヌ語地名があつたようです。本州の半分に住んでいた人たちの言葉になります。弥生が始まって、日本中に弥生文化が広がる前ぐらいまでは、本州の半分にアイヌ人系の蝦夷が住んでいたと考えられるわけで、日本語の中にその痕跡があるだろうとは思いますが、確実な証拠を見つけることは難しいです。もしアイヌ語と琉球語の共通性があるとしても、日本語を飛ばして言語学的に厳密に共通性を見つけるのはすごく大変です。可能性は否定はしませんが、証明するのは

大変だろうと思います。もう1点はトマさんに。

(トマ) ちなみに「ヒラ」についてなのですが、『古事記』に「黄泉平坂(ヨモツクニノヒラサカ)」という言葉があつて、「平たい坂」とは何だろうとずっと不思議に思っていました。それで、初めて奄美と沖縄に来て、「黄泉平坂」の「ヒラ」は「平たい」ではなく「坂道」という意味だとやっと分かりました。

次に言葉の起源ですが、どこから来たかという問題ですね。やはり奄美・沖縄の言葉は日本語と兄弟の関係にあります。どう見ても文法も単語も非常に似ていて、起源が同じです。それがまた世界のどこの言葉と関係があるのかという問題は非常に難しいですが、朝鮮語と関係があるのではないかとよく言われます。しかし、それを証明するのは非常に難しく、今までの説にはそれほど強い根拠はないです。それに古代の日本と朝鮮半島の間には交流があつたので、言葉の借用もあつたでしょう。だから起源はもしかして別かかもしれません。その可能性の方が高いと思います。

またほかの言葉を見ても、見た目は似ていますが、よく見ると中身がかなり違っています。ほかの研究者に伺ったところ、日本語と奄美・沖縄の言葉の起源は、現在のところはまだ不明だそうです。

(司会) じゃあ、もう時間も過ぎましたので、以上でシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

(進行) いろいろな角度からご提言、ご享受ありがとうございました。

それでは、最後に閉会のあいさつを、本町の文化協会長がいたします。よろしく願います。

(文化協会長) 皆さん、本日はお疲れさまでした。予定の時間を30分ほど過ぎております。でも、まだまだいろいろと質問もされたい方も多く、またこれほど関心の高い、パネリストの方、そしてまた司会をされた木部先生、本当にありがとうございました。

実は私、教育長の先生が先ほどごあいさつで皆様にご紹介しました鹿児島地域文化創造事業、この本を作るのに、喜界町ブロックのブロック長として参加させていただきました。この本は、各学校、それから図書館等にございます。喜界島の子供たち、奄美の子供たちに少しでも方言に親しんでいただこうということで、大変、子供たちが親しみやすい中身になっております。そして各島々の特徴ある島唄、それから先ほど狩俣先生がおっしゃってくださいました替え歌ですね、皆さんが普段歌っている歌を替え歌として子供たちに歌ってもらって、方言をより近いものとして子供たちに方言を使っていってもらおうということで、このような本ができております。本当に狩俣先生、それから木部先生には、そのときにいっぱいお世話になりました。

そして、また今回、木部先生をはじめ各学校の先生方、総勢三十何名、大学の先生方が来てくださっております。本当にこのように喜界島から手始めに、奄美の言葉、消えゆく言葉であります、この言葉を残そうと一生懸命して下さっております。どうか地元の我々

も一生懸命取り組んで、子供たちに何とか方言を残して伝えていくように努力したいと思っております。

そしてまた、私ども文化協会、大島郡の文化協会でもいろいろな取り組みをしております。与論町では、方言を使うということを条例化しようということで条例を制定しております。文化協会としても、いろいろな形で何とか努力はしておりますが、やっぱりこれは大変難しいことで、地元の皆さんが子供たちにしっかり伝えていかないとならないことだと思っております。

どうか今後とも喜界町の方言、そしてまた奄美の方言を皆さんでしっかり支えていただきたいと思えます。簡単ではありますが、閉会のあいさつとさせていただきます。本日はお疲れさまでした。(拍手)

(進行) ありがとうございました。調査団一行の今後のご活躍と感謝の気持ちと同時に、喜界町との一層のご指導をお願い申し上げたいと思えます。その意味を込めて、大きな拍手をお願いします。(拍手)

それでは、発表講演会に参加された皆さん、大変お疲れさまでした。お帰りは気を付けてください。以上で成果講演会を終了します。お疲れさまでした。ありがとうございました。



リレーエッセー「喜界島の方言を残そう」

『広報きかい』に2010年11月より連載

# 喜界島の方言を残そう①

木部 暢子氏 (国立国語研究所)

今年の9月9日から15日まで、方言の記録と調査のために喜界島におじゃましました。メンバーは、国立国語研究所、東京大学、京都大学、琉球大学、千葉大学、金沢大学、日本女子大学、ニユージーランド・オーランド大学などから集まった35名です。日程の関係で九地区しか伺うことができませんでしたが、みなさんには、本当に親切にしてくださいました。ありがとうございます。また、お世話くださった教育委員会の方々にも感謝申し上げます。

喜界島方言は、大変、難しい方言でしたが、いろいろな発見もあって、楽しい一週間でした。何より、「パ・ピ・プ」の発音を聞いたときには、感動しました。「パ・ピ・プ」の発音というのは、たとえば「花」を「パナ」と言ったり、「昼」を「ピル」、「節」を「プシ」と言ったりすることで、喜界島の北部で盛んです。一方、喜界島の南部では、これらを「フアナ(花)」、「フィル(昼)」、「フシ(節)」のように発音します。喜界島のみなさんにとっては、このような発音は当たり前かもしれませんが、「パナ(花)」、「ピル(昼)」、「プシ(節)」のような発音は、じつは、奈良時代から平安時代にかけての奈良や京都のことば(大和言葉)の発音なのです。奈良や京都ではその後「パナ(花)」が「フアナ」に、「ピル(昼)」が「フィル」に、「プシ(節)」が「フシ」に変化し、さらに、江戸時代初期(17世紀)の頃「フアナ(花)」が「ハナ」に、「フィル(昼)」が「ヒル」に変化していきます。

このようなことを、私たちは大学の授業で習うのですが、授業ではもちろん、昔の発音を聞くことはできません。ところが、喜界島方言では、これらの発音を実際に聞くことができるのです。まるで、話に聞いて、その姿を想像していたおばあちゃんに出会えたような、そんな感じでした。

また、喜界島方言は地区ごとの方言の差が大きいのですが、高い山や大きな川があるわけでもないのに、なぜ、方言差が大きいのか、これも不思議です。その理由については、これから説明していかなければなりません。

喜界島方言は、たくさんの魅力とたくさんの方の不思議を持っていきます。このような喜界島方言をぜひ、子どもたちに語り継いで、残していっていただきたい、そういう思いで帰りの飛行機に乗りました。

喜界島とは、これからも長いおつきあいになると思います。今後とも、どうぞよろしくお願ひします。



荒木での調査の様子

## 無料法律相談室開催のご案内

法律問題やトラブルを抱えてはいるものの、こんな相談恥ずかしくてできないとか、法律相談するべきかどうかでお悩みの方へ、弁護士による適切なアドバイスが受けられる無料法律相談が左記のとおり開催されます。この機会に是非ご利用くださいますようご案内します。

- 主催者 よつば法律事務所(大阪)
  - 開催日 平成22年11月29日(月)
  - 内容 (講演会) 9時~10時  
(法律相談) 10時~13時
  - 場所 役場コミュニティーホール
- 【問い合わせ】  
住民課戸籍係 ☎65-1111(内線31)

## ~お知らせ~

ご存知ですか?  
スギラでのグラウンドゴルフには  
申し込みが必要です!

最近、空港臨海公園多目的広場(スギラビーチ横の広場)で、申請をしないでグラウンドゴルフなどの行事をされている方々があります。

少人数での利用は申請の必要はありませんが、グラウンドゴルフなどの大人数で広い面積を占有する場合には、下記まで申し込みが必要です。

空港臨海公園は、みんなの財産です。ルールを守り、きれいに気持ちよく利用しましょう。



【申込先】  
喜界ガーデンゴルフ ☎65-1855

# 喜界高校創立記念講演会・喜高塾開催

榎原英雄氏（普通科昭和30年卒）が『卒業後の人生設計について』で講演

県立喜界高等学校（藤崎健一郎校長、生徒数225人）は11月5日、創立記念講演会と第3回喜高塾を同校体育館などで行った。

講演会の講師は、昭和30年に同校を卒業した池治出身で川崎市在住の榎原英雄氏。同氏は、『卒業後の人生設計について』の演題で、全校生徒に熱く語りかけた。

榎原氏は初めに、生徒会長として原水爆禁止運動をし、署名募金活動に取り組んだ高校時代を自己紹介代わりに披露し、「学校で教わることの一部しか人生



後輩らを教え励ました榎原氏

では役に立たない。卒業して30才までが頭脳をみがく一番の時期。職場や大学でいかに自分の価値を付けていくか、他人と同じようにするのはなく、社会にある数え切れない学ぶ機会から、自分にあつたものを修得し、資質を高める努力をして欲しい」などと話し、働くうえで的心構えとして、「あいさつが人間関係の基本。上司や先輩との間には厳しさがあがるが、自分から接していくようにすれば、必ず円滑になる。また、きちんと背広を着ていても、必ず足元は見られる。汚れた靴では台無しになるので、社会人としてつま先までの身だしなみが大切である」と話した。

さらに、現在の社会情勢について触れながら、「老齡社会を迎える過程でみなさんの力が必要になる。高校で基礎を学んでおけば、都会には受け入れてくれる器が各方面にある。業をして高収入を得る時代が過ぎて厳しい時代になっても、努力することによって他人にない付加価値を身につけよう」と話し、「学校がづらい時も、『今日は誰と

こんな話をしよう。先生にこんな質問をしよう」と積極的に行動すれば、その日は楽しくなる。人生においても失敗を恐れず、何才まで何をしたいかの計画を立て、自ら設計図を書こう」と語りかけた。

最後に榎原氏は、江戸後期に歴史家、思想家、漢詩人などとして活躍した頼山陽の漢詩『述懐』を紹介して講演を終えた。

\* \* \*

講演会後は喜高塾があり、5人の先輩がそれぞれのテーマで後輩達に語りかけた。

喜久秀人氏（3年生講師）  
『人生は面白い』

英良治氏（普通科2年講師）  
『変わったなあ 善くな

ったなあ』を実感して』

栄和子氏（商業科2年講師）  
『私の選んだ道』

恵藤和教（普通科1年講師）  
『故郷のよさをバネに21世紀に羽ばたけ』

澄田直敏（商業科1年講師）  
『喜界島ってどんなところ？』

## 喜界島方言調査団リレーエッセー 喜界島の方言を残そう②

新永 悠人氏（東京大学大学院）

わたしは普段、お隣の奄美大島の宇検村（湯湾集落）の方言を調査しております。村の小学校にいらした先生が喜界島出身の方ということもあり、喜界島にはいつか訪れたいと思つていたところ、今回喜界島方言調査団に参加する機会をいただき、思いがけず喜界島に来ることができました。山がちで、森深い雰囲気のある大島に比べ、喜界島はなだらかで、日差しが明るい感じがするのが印象的でした。

今回の喜界島の調査では、わたしの所属する「文法班」では小野津、志戸桶、上嘉鉄、荒木、中里の5か所をまわらせていただきました。いずれの地域でも、みなさん非常に丁寧に、熱心に教えてくださり、時にはこちらの書き取るスピードが間に合わないこともあるほどでした。

西海岸に立てば、遠くにその姿が見られるほどの距離にある喜界島と奄美大島ですが、様々な点で似ているところもあり、大変興味深いものでした。調



小野津での調査の様子

査最終日の成果発表講演会では、「猫」を意味する喜界島方言「マヤー」と「グルー」に関して、突拍子もない新説（珍説）を披露させていただきましたが、講演後すぐに、来場者の方に「忌言葉（いみことば）」との関連を指摘され、わたくしの説の間違いを正していただきました。まだまだ学ばなければいけないことがあることを身にしみて実感いたしました。

滞在中は多くの方々にご大変お世話になりました。本当に有難うございました。



# シマの話題

## 各年代のキズナをリレー！ 中里集落恒例 49 祝賀会 !!

数え 49 歳の年祝いを迎える男女を、前年に迎えた男女が主催して祝福する恒例の「中里集落 49 祝賀会」が 2 月 6 日、多くの 40 代以上の参加者を集め、同集落新公民館において盛大に“挙行”された。

この行事は、昭和 4 年生が数えを迎えた年に第 1 回が行われ、今年で 34 回目となる。今年めでたく年祝いを迎えたのは昭和 38 年生。男女 8 人が招待された。

祝賀会は、37 年生の野間明敏さんの名（迷）司会により進行。野間昭夫区長のあいさつや 37 年生から 38 年生一人ひとりに花束の贈呈があった。

恵保彦さんによる乾杯の後、余興の部に入ると野間明敏さんの司会も“舌”好調。野間靖子さんの祝舞に始まり、「心を込めて唄います」と界眞子さんの島唄、韓流女性グループ「少女時代」のヒット曲『ジー』に乗せた野間弘也さんと 37 年生の女性陣がコラボした即席ユニット「ヒロ♡ヤ with 熟女時代」のダンス、遠藤浩文さんによるセラー服や宇宙戦艦ヤマトの制服など衣装を次々と替えながら数種類の楽器を演奏するパフォーマンスなど、多くの出し物で会場を沸かせた。

最後は、38 年生を代表して正木喜久也さんが「このような楽しい祝賀会を催してください有り難うございました。次は私たちが 39 年生のために頑張りますので、また来年も元気にこの場にお集まりください」と感謝



会場を大爆笑の渦に叩き込んだ熟女時代 feat. Hiro ☆ YA

の言葉と来年の協力依頼を述べ、得田喜代治副区長による万歳三唱で大団円を迎えた。

## 教職員らがバドミントンで汗 たがいの交流を深める

町教育委員会職員と学校教職員らは、たがいの交流と親睦を深めようと 2 月 5 日、町体育館でバドミントン大会をした。

大会は全試合ダブルスで行われ、44 歳以下の A パート、45 歳以上の B パート、女性限定の C パートの 3 パートに、補欠を含めて 125 人が参加。各パートで息詰まるラリーの応酬や珍プレーが連発する中、参加者らは和気あいあいと普段のストレスを羽根にぶつけていた。

C パートに出場した橋口慶さん（湾小教諭）は「久しぶりの運動で思うように動けなかったが、心地よい汗を流せた」と予選敗退にも満足そうな笑顔をみせた。

試合結果は次のとおり

### A パート

- 優勝 富田・寔（教委）
- 準優勝 村岡・古川（一中）
- 3 位 中原・山崎（湾小）
- 〃 安・松田（教委）

### B パート

- 優勝 松永・高良（上小）
- 準優勝 藤原・久保（坂小）
- 3 位 濱・前田（一中）
- 〃 登山・堀（小小）

### C パート

- 優勝 桜井・西岡（教委）
- 準優勝 福山・向井（早小）
- 3 位 辻・藤崎・板倉（早小）
- 〃 石澤・肥後（喜高）



## 喜界島方言調査団リレーエッセー ③

トマ・ペラール（日本学術振興会・京都大学）

喜界島方言には新しいものもあれば、古いものもたくさんあります。例えば「腰」が「クシ」となり、オがウに変わっているように、独特の変化が見られます。方言は訛って

るとよく言われますが、標準語の方が「訛って」おり、方言の方が古いものを残している例も多いのです。例えば「花」を喜界島では「パナ」や「フアナ」と言いますが、その発音は古代語の名残りです。標準語の「ハナ」という発音の方が新しいものです。また、万葉集などに見られる「トジ」（妻）は喜界島で未だに使われているのに対し、本土では約千年前に消えた言葉です。

言葉は常に変化していくのが自然の流れであり、誰もそれを防ぐことができません。訛りや言葉の乱れを批難する人は自分の言葉がどれだけの変化を経ているのかを考えたことがないでしょう。どの言語や方言も変化しますが、変化する部分や変化の方向は異なります。時間を経てもあまり変わらない部分もあります。

喜界島方言の歴史を遡るには、各方言に残された古いものを集める必要があります。それらを合わせた時に初めて元々の姿が見えてきます。どんな方言も重要で、その方言のかけらがなければ日本語史のパズルが完成しません。喜界島の方言も例外ではなく、筆者が専門とする歴史言語学にとっても重要であり、残さなければならぬということ、昨年九月の調査で改めて確信しました。



志戸桶での方言調査の様子



# ミマの話題

その2

早春の喜界路で老若男女366人が汗—俊寛シヨギング—



早春の喜界路を駆け抜けたランナーたち

に懸命に走り、沿道からはさかんに声援が送られた。

2キロの部、女子1位の小田麻里奈さん（小野津小5年・当時）は「登り坂がきつかったけど去年は入賞できなかったので1位はうれしい」と話した。

今大会には、九電工陸上競技部の朝日嗣也選手も参加し、子どもらの手本となる美しいフォームを披露した。

大会結果は次のとおり、

## 2キロの部（279人）

男子 ①龍田優斗（6分55秒）、

②中園竜矢、③住岡真至

女子 ①小田麻里奈、②吉永真唯、

③西岡愛梨

## 5キロの部（53人）

男子 ①萩原望夢（19分19秒）、

②濱川光太郎、③楨大貴

女子 ①廣美奈代（24分19秒）、

②廣知子、③川波志乃

## 10キロの部（34人）

男子 ①吉田圭志（44分25秒）、

②岩崎尽、③岡本大成

女子 ①生島小梅（54分56秒）、

②岡本夢実、③西野亜紀

成人や中高生らは好タイムを目標

## 喜界島方言調査団リレーエッセー

### 喜界島の方言を残そう…④

狩俣繁久・富山奈那（琉球大学）

**喜** 界島方言調査団と島の人たちの交流会の席で川畑さおりさんの力強く伸びやかな歌声を堪能し、島唄の世界に触れた。その川畑さおりさんがメジャーデビューした。元ちとせも中孝介もローカルを究め、全国的に活躍する先輩である。川畑さおりさんの活躍も期待したい。

自分の生まれ育った土地の文化や言葉について熱く語り誇れる何かをもっている人は、都会、外国に行っても自信を持って自分を語る強い人である。

喜界島にはたくさん宝がある。島唄も島の文化も島の言葉も島の宝だ。どこにいても自信を持って自分を語る若い人を育てることが今は必要なのである。島の言葉や島の文化を教えるのは、狭い人間を育てるのではない。自分は喜界島の生まれだと自信を持って語れる子供たちを育てる第一歩が島の文化と言葉の教育なのである。

昔は、標準語か方言かの二者択一を迫り、標準語しか話せない教育を強いた。しかし、人間にはたくさん言葉を使いこなす能力がある。二つの言葉を話せることをバイリンガ

ルといい、たくさん言葉を使えることをマルチリンガルという。グローバル化が進み、日本でも日本語標準語と英語のバイリンガル教育の取り組みが官民でなされている。2ヶ国語以上の言語習得を目指したマルチリンガル教育を行なうところがある。国際舞台で複数の言語を操って活躍している人は自分の故郷の文化や母国語を大切にしている。

故郷を深く愛するには、まず故郷のことについて知らなければならぬ。一朝一夕に言葉を全部まるごと覚えることはできない。日常生活の簡単なあいさつや島唄から始めるのもいい。島の言葉で語ることわざを覚えてもいい。ことわざには祖先から引き継がれてきた知恵や親子の情愛が詰まっている。島の自然を表現する単語、草木や花、虫や鳥を方言でなんというのかを教えるのもいい。子どもたちは、大人の活動や言葉に注意をむけて耳を傾けるようになるだろう。島の自然や生き物を注ぎ深く観察するきっかけになるだろう。深く知れば知るほど故郷を大切に思い、誇りをもって語るようになるだろう。

## 鹿児島大学離島地域看護学実習学生訪問のお願い

看護職を目指す鹿児島大学の学生約90名が5月11日から4日間、「喜界町の暮らし」を勉強をするため来島します。医療、福祉、保健だけでなく、町民のこれまでの人生経験や集落への思いなど、色々とお話を聞かせていただきます。皆さんのお話しを通じて「集落で語り継いでいきたいこと」や最終的には喜界町をまるごと勉強したいと考えています。

学生たちは喜界島に行くのを楽しみにしています。学生が訪問したときはぜひ皆さんの思い、言葉のシャワーを学生たちに浴びせてください。よろしくお願いします。

鹿児島大学医学部 教授 波多野 浩道

## 執筆者紹介

木部暢子（国立国語研究所 時空間変異研究系 教授）

窪菌晴夫（国立国語研究所 理論・構造研究系 教授）

下地賀代子（沖縄国際大学 総合文化学部 講師）

ローレンス ウェイン（オークランド大学 上級講師）

松森晶子（日本女子大学 文学部 教授／国立国語研究所 客員教授）

竹田晃子（国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員）

---

国立国語研究所共同研究報告 11-01

### 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書

2011年 8月15日発行

著者 木部暢子・窪菌晴夫・下地賀代子

ローレンス ウェイン・松森晶子・竹田晃子

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町10-2

Tel.042-540-4300（代表）

<http://www.ninjal.ac.jp/>

©国立国語研究所

ISBN 978-4-906055-13-5

ISSN 2185-0127

---

**General Study for Research and Conservation of  
Endangered Dialects in Japan  
Research Report on the Kikaijima Dialects**

---

KIBE Nobuko

KUBOZONO Haruo

SHIMOJI Kayoko

Wayne LAWRENCE

MATSUMORI Akiko

TAKEDA Koko

**August 2011**